リング・オブ・カーズ

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リング・オブ・カーズ

【Ｎコード】
Ｎ８６６４Ｂ

【作者名】
鷹嶺綺羅

【あらすじ】
未亜の前に現れたカップルは、一年前の殺人事件の重要参考人だった。彼らを襲う死なない復讐鬼に立ちふさがる水瀬達！美奈子の過去の恋を絡めた物語です！かなり長いですが、テンポ重視で書いてます。

前章

高級ホテルのスウィートルーム。
そこで交わされる会話は、人間の言葉ではなかった。
「どうです？」
着物姿の美女が、横に立つ白衣を羽織った背の高い男性に訊ねるが、男は苦い顔で首を左右に振った。
「分魂が本魂と接触したせいで、本来、この二つを分けていた壁が崩れ始めているのはおわかりですな？」
「ええ」
美女が辛そうな顔で見つめる先。
そこには、ベッドに横たわる綾乃がいた。
「我々としても、このような事態は想定すらしていませんでした」
冷たい印象を受ける男が、視線を綾乃から話すことなく言った。
「本来、この生体兵器は」
「失礼」
美女が男の言葉を止めた。
「バルシュ殿。この子には綾乃という名前があります」
「これはこれは――あなたにとってはご子息の婚約者でしたな。シルフィーネ殿……重ねて失礼。こちらでの呼び名は遥香殿」
「……シルフィーネで結構です」
美女――遥香は答えた。
「何でしたら、姓のラスフォルテでも」
「さらに失礼」
バルシュは右手を軽くあげた。
「それは神族でも名門中の名門の家柄の名。魔族の医者風情の私の口から軽々しく語るには重すぎます」
遥香は沈黙をもって答えた。
「コホン――申し訳ない」

バルシュはわざとらしい咳払いをしてから言った。
「興奮が抑えられないのですよ。この子の開発には私も参加していましてね」
バルシュはベッドの向こう側にいた助手からファイルを受け取る。
「それが種の段階で人間界に召還されて以降、我々の前から姿を消して、人間界の暦で約17年……ようやく再開できたわけです」
「親としての興奮、ではないですね」
「当然、人間の言う科学者として、ですよ。シルフィーネ殿」
そう。
バルシュにあるのは、あくまで科学者としての知的好奇心に他ならない。
「……話を戻しましょう」
それが、遥香には例えようもない位、不快だった。
この子はモノじゃない。
赤子の時、乳を含ませた、私にとっては娘同然の子だ。
「事態は既にグロリア陛下より我が帝の元にまで届いています。天界としても、人間界におけるロイズール殿下が分魂の存在。まして、このような危機的状況にあるのでは」
「フン……あなたが進めたご子息とこの子の縁談が天界で問題になっているそうですな」
「問題は綾乃さんのこれからです」
「当然ですな」
バルシュは言いつつ思った。
敵対する勢力に属する兵器同士の縁談？
何の悪い冗談だ？
話を知った天界の愚物共が慌てふためく無様な姿が目に浮かぶわ！
「そのために私が呼ばれたのですから」
「魔界最高峰の頭脳と呼ばれるあなたの目から見て、この子の容態はどうなんですか？」
「最悪です」

バルシュは即答した。
「分魂が本魂、つまり、この子の魂がロイズール殿下の魂に引きつけられ、本来、人間の持つべき魂の形状を失いつつある。
魂同士が完全にリンクはじめていることは、様々なデータが証明していること。
このまま放置しておけば、分魂は完全に崩壊します。
現にロイズール殿下、そしてこの綾乃。共に起きている記憶の混乱、意識の突然の喪失。――綾乃の場合、徐々に発生している自我の喪失……これが痛い。
一つの魂に二つの自我はいらないと、魂そのものが、この子の自我を抹消しようとしているのです。
状況はこれから先、もっと悪化し、最後は綾乃の人格崩壊程度では済まないでしょう」
「前回の処置で10年はもつと聞いていましたが？」
「全てが想定外なのですよ」
何でもない。という声でバルシュは言う。
「初期と比較して崩壊のペースが速すぎる……このままでは、ただ生きているだけと限定しても、最も保って2、3年というところでしょう。それ以上は不可能です」
「そ、そんな！なんとかならないのですか？この子は私にとっても」
「魂同士のリンクを断つことが出来ればどうかわかりませんが……自殺行為です。分魂を殺しかねません」
「では……」
「我々も危惧はしているのです」
バルシュは言う。
「分魂との融合がロイズール殿下に与える影響がいかほどになるか、それが不明なままで融合を迎えては、ロイズール殿下の御身まで危機が及びかねない。安全の裏付けがとれるまで、それは何としても避けたい。故に、万難を排してその裏付けをとれ。それが我ら

に課せられた至上任務です」
「もし、もしですよ？」
あまり聞きたいことではない。
だが、遥香は訊ねた。
「問題がない。そう裏付けがとれたら？」
「さぁ？」
「さぁって……」
「それは政治的な問題です。この子を殺してさっさと人間界から魂を引き上げさせるか、寿命なんてたかがしれていますから？そのまま天寿を全うさせるか」
「2、3年でも天寿……ですか。ならば」
遥香は言った。
「何にしても、魔界はこの子の延命は？」
「ですから、それが政治的な問題なのです」
バルシュは呆れた。という顔で春香に言った。
「下手に人間として死なれると、獄族の手にその魂が堕ちないとも限りません。
分魂といえど、この場合は人間の魂と見なされますからな。
獄界の者共に殿下の魂を、分魂といえど、渡すようなことがあれば、それこそ“狭間（はざま）”で戦（いくさ）になります。
つまり――この子の魂の扱いは、きわめて政治的な問題なのです」
「獄界との戦争……」
遥香はぽつりと言った。
「考えたくないですね」
「ご理解いただけたようで」

第一話

事件は、今から4年前に遡って始まる。

●四年前　警視庁警備部第二中隊長室

「南雲ぉ」

革張りの椅子にひっくり返る中隊長が、やる気があるのか疑わしい、聞くだけでだらける声で言った。

「警察官の基本指令を言ってみな」

「はっ！」

警視庁騎士警備部第二中隊第二小隊所属、警視庁巡査長南雲敬一郎は、直立不動の姿勢のまま、声を張り上げた。

「第一条　公共への奉仕

第二条　弱者の保護

第三条　法の遵守！」

「そんなにデカイ声を張り上げなくても聞こえてるよ……」

南雲達、警視庁騎士警備部第二中隊を束ねる後藤警部は、タムシチンキを塗りながら呆れ顔で言った。

「それで？その指令通りに従った結果が、強盗の散弾銃の銃身を捻じ曲げた挙げ句、ラリアットで食品冷蔵庫に叩きこんだり、女性にナイフを突きつけた強姦犯のナニを粉砕したり、立てこもり犯を高層ビルの窓から殴り出したぁ？お前はどこの映画のヒーローなの。こんなことが、基本指令に準じていると、本気で思っているの？」

「おっしゃる通りです」

南雲の声には一点の曇りもない。

完全な正義だと、南雲が疑っていないことを示していた。

後藤の後ろに控えていた女性の形のいい眉がわずかに歪んだが、南雲はそれに気づかない。

「はい。いいよ。さすがだ」

後藤は、ため息まじりにそう言った。
「ありがとうございますっ！――では、失礼します！」
敬礼をとる南雲に、後藤は冷たく言い放った。
「ああ。そのまま精神病院へ行って来きて。二度と出てこなくていいよ」

●警視庁警備部第二中隊長室前
「南雲！」
部屋を出た南雲を呼び止めたのは、後藤の後ろで控えていた女性だ。
年の頃は三十前後。
短くまとめた髪に厳しい目をした、「女性警官の典型」というべき容姿の女性。
「なんでありますか？不破巡査部長」
「なんだじゃない！」
女性――不破忍（ふわ・しのぶ）巡査部長は、南雲を睨み付けながら怒鳴った。
「貴様、反省というものをしろっ！」
「反省？何の、でありますか？」
南雲は冷たい眼差しで不破を見下ろした。
南雲は２メートルを超える大男。
対する不破は１５５センチと、社会人の女性としてはやや小柄な方だ。
自然とそうなるが、南雲のとった「見下ろす」は、「見下す」と表現した方が正しいことを、南雲の目が証明していた。
「貴様の正義が警察の正義ではない！」
「は？何を？」
「貴様の言う正義は、単なる自己満足だということだ！」
「……巡査部長」
南雲は言った。

「自分は警察官として悪を許しません。“断じて悪を許すな”と、過日訓辞されたのは、巡査部長ご自身ではありませんか」
「私が言ったのはそういうことではない！」
不破は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「我々の任務は、犯人を逮捕することであって、処刑することではない！貴様に逮捕された中で、確保時に五体満足でいられた者が何人いた！？」
「その程度で済むのは、自分が温厚な人間だからだと、そう思っております」
南雲はきっぱりと言い切った。
「それに巡査部長。お忘れではありませんか？自分がブチのめしてやったのは、すべて強姦、強盗、殺人、いずれも卑劣なる犯罪を行った社会のゴミです。マスコミがいかにやりすぎと言うなら、彼らの行ったことはやりすぎではなかったのですか？彼らに苦しめられ、泣かされ、命を奪われた者達に、警察が何もしないのはおかしな話。自分はそう信じます」
「被害者の仇討ちまで警察が代行してやる必要はない！」
不破は、南雲に負けじと精一杯の威勢で返した。
「犯人を裁くのは司法の仕事だ！我々は犯人を司法の場に引きずり出すのが仕事なんだ！貴様、その程度のこともわからず、よく警官が勤まるな！」
「――検挙率は騎士警備部トップですが？」
南雲の言葉の裏にあるものは、不破にもわかった。
「居合わせた犯人はすべて確保。取り逃がしたりはしません」
「……貴様、何が言いたい？」
「いえ」
南雲は視線をそらせた。
「子供を人質に取られたとはいえ、応援を呼ぶ間に逃げられ、あげくに子供が刺されるなんて事態、自分なら絶対に」
「貴様っ！」

不破は南雲を突き飛ばそうとして、逆に弾かれそうになった。
全身筋肉のカタマリのような南雲を、いかに騎士とはいえ、不破のような女性が突き飛ばすこと自体がどだい無理なのだ。
「――ようは、犯人を逮捕すればよい。そうでしょう？司法の場に五体満足で引き出す必要なんて、どこにもないんです。尋問に答えられる口と耳と、判決文が読める眼、自分の行いを後悔する脳みそ。それだけあればいいんですよ。犯罪者なんて――そうでしょう？巡査部長殿？」
「――くっ」
トドメとばかりに放たれた一言に、不破はせめてもとばかりに南雲を睨み付ける眼をゆるめはしない。
「そんなことを言っていると」
「はっ？」
「最後に苦しむのは犯罪者ではなく、自分自身だぞ」
「……はっ」
南雲は弾けたように吹き出した。
「ははははっ！これは傑作だ！よく覚えておきますよ！巡査部長殿！」
南雲は形ばかりの敬礼をとると、踵を返して不破の前から姿を消した。

●警視庁警備部第二中隊隊員待機室
「南雲さん、お疲れさまです！」
待機室に入るなり、同じ部隊の若い騎士達が南雲を取り囲んだ。
「タオルっす！」
「ビール、冷えてます！」
「おう」
鷹揚にタオルを受け取り、缶ビールを一気飲みする警官。
それが、南雲敬一郎という男だった。
その体格とそこから繰り出される力業の前に、南雲を煙たく思い、

意見を唱えた者は、すべからく南雲に粉砕された。
粉砕？
そう。
文字通り粉砕された。
その表現が最もしっくり来る。
南雲が任官して初めてついた上司は、南雲の性根をたたき直してやるといって柔道場に呼びつけ、首の骨をへし折られた。
部隊の先輩達、他部隊の上司、騎士、一般人問わず、南雲は何らかの理由をこじつけ、合法の範囲内で次々と相手を二階級特進させていったのだ。
警視庁において、公然と南雲に逆らう者は、そう多くはない。
少なくとも、表面上は……。

警視庁騎士警備部は、まさに南雲の天下そのものだった。

「また、あのオンナに何か言われたんっスか？」
警官というより、チンピラといった方が正しい、そんな感じのする若手の警官が言った。
ピクリ。
缶ビールを持つ南雲の手が止まったことに、その若い警官は気づかない。
「あんなオンナ、よってたかって輪姦（まわ）しちまえば――――！」
メキョッ。
そんな音がしたと思った次の瞬間、派手な音を立ててロッカーにめり込んだ者がいた。
さっきの若い警官だ。
「俺の前で犯罪者じみたセリフを吐くんじゃなねぇ！」
丸太ほどもある太い脚で彼を蹴り飛ばした南雲が怒鳴った。
「し、しかし南雲さん」
数名がロッカーにめり込む同僚を助けに動き、残った取り巻きが

南雲の機嫌をとるべく、慌てて次の缶ビールを差し出した。
「あの不破巡査部長、この前のあの失態は」
ギロッ。
南雲の一睨みで周囲は完全にすくんだ。
「あれはやむをえねぇ」
南雲は飲み干した缶ビールを握りつぶしながら言った。
「犯人は極度に興奮していた。実力行使に出たら子供は殺される。だから犯人を説得にかかる。巡査部長の判断は間違いじゃなかった」
「南雲さん？」
「問題は、俺達警察の阻止を振り切って現場に乗り込んできたあのバカな母親だ。権利だなんだカサに着たがるあのバカのせいだ」
取り巻き達は互いに顔を見合わせた。
南雲が不破巡査部長を嫌っているものとばかり思っていた取り巻き達には、その相手を弁護しようとする南雲の言葉が信じられなかった。
「選挙になればアカに投票するようなあのバカなオバンが、犯人が逆上するようなことぬかしたばっかりに、巡査部長の努力は一瞬でパーだ。文句を言うなら、そんなオバン一人まともに止められなかった、そこらのバカ共に言え」
「……は、はぁ」
「まぁ、あめぇとはいえるがな」
缶ビールの残骸を取り巻きの前に突き出しながら南雲は笑みを浮かべた。
苦笑いだった。
「犯人をとっつかまえるには、俺のような方法もあるし、あの巡査部長のような方法もある。説得して犯人に自首を促すような……だが、犯罪者は速やかに息の根を止めなければ、被害は二重三重に発生する。だから俺は、巡査部長が甘いと思う」
「そ、そうっすよね！」
取り巻き達が一斉にそれに賛同する。

「そうさ」
南雲はニヤリと不敵な笑みを浮かべて言った。
「正義は我にあり――――何しろ、俺達は親方日の丸なんだからな」

●警視庁廊下
「あっ！」
待機室を出た南雲は、廊下を歩いていた婦人警官にぶつかりそうになった。
慌てて身を引いた婦人警官の手元から、書類の束が床一面にこぼれ落ちた。
「何やってんだ」
南雲は腰をかがめて書類を拾おうとしたが、
「やりますからっ！」
婦人警官は、その手を阻止するかのように慌てて書類を片づけに動いた。
「……なんだよ」
南雲は面白くない。という顔で相手の顔を睨み付けた。
一生懸命、南雲の顔を見まいとする婦人警官に、南雲は言った。
「敬子ちゃんよぉ……同じ部隊の同僚だろうが？それはねぇだろうよ。」
「わ、私は！」
婦人警官――――日下敬子巡査は、震える声で言った。
「私は、あなたなんて、同僚だと思っていません！」
「おいおい」
南雲はオーバーアクション気味に、肩をすくめて言った。
「この前、殺されかかったのを助けた命の恩人に対する言葉じゃねぇだろうが」
「そ、それとこれは別です！」
日下は睨み付けるような眼で言った。

「隊長をないがしろにするような人、同僚じゃありませんっ！」
日下の顔は怒りで真っ赤だ。
「ただでさえ、隊長は警視庁内部の機密漏洩事件の捜査の指揮で毎日！」
「――ああ。あのバツイチ、そんなことしてるのか」
南雲は思いだしたように言った。
「お前、あの子持ちの出戻りが、そんなに大切か？」
「なっ！？」
日下は眼を見開いた。
相手の言葉が信じられない。そう、その顔は語っている。
「敬子ちゃん、そんな人生送りたいのか？出戻りになって、子育てにピーピーいいながら仕事に振り回される？フンッ。それとも何か？敬子ちゃん、そういうシュミが？」

パンッ！

廊下にそんな音が響き渡った。

「し……信じられませんっ！」
南雲の頬を叩いた日下が怒鳴った。
「ひ、人にそんなこと言うなんて！」
「痛てぇな……」
大した痛みはない。
ただ、痛むフリをしつつ、南雲はわざとらしく叩かれた頬を撫でた。
「隊長のココロの痛みに比べれば、どうってことはないはずですっ！」
書類をかき集めた日下は涙目になりながら怒鳴った。
「せめて、人としての心を持ったらどうですかっ！？」
それだけ言うと、日下は走り出してその場から逃げ去った。

「……」

その背中を見つめながら、南雲は一瞬、

（あのオンナこそ輪姦（まわ）してやろうか？）

そう思って、すぐに止めた。

理由はただ一つ。

俺の美学に反する。

それだけだ。

●警視庁警備部第二中隊長室

「――――美学、ですか？」

「そう。美学」

驚く不破に、そう言ったのは後藤だ。

共に中隊長室で茶を飲んでいる。

「あいつは、確固たる正義、その正義によってのみ実現する美学を持っている」

「しかし……」

南雲によって叩きのめされた犯罪者の数とその被害を思い浮かべ、不破は苦い顔をした。

「そう。それが問題」

不破の心の中を読んだかのように、後藤は言った。

「人一人の正義は、必ずしも組織の、ましてや世間の正義と完全な合致はしない。それが正義の難しいところさ」

「私は、南雲巡査長は性根をたたき直せばかなり優秀な人材として」

「今でも十分優秀さ」

後藤は急須を手にしつつ言った。

「問題は、あいつのなさんとする正義は、警察という世界で実現するには大きすぎるってことさ」

南雲のいわんとする正義、そしてその美学とは、
確かにそうかもしれない。
不破は思った。
「……」
「そう。そうは思わない？」
「大きすぎる？」

悪は殺す。

まさにその一点に集約している。
悪を殺してこその正義。
それは警察という組織によって実行される正義としては、あまりに血生臭すぎる。
「だからさ……あちちっ」
湯飲みから手を離し、耳たぶをつまみながら後藤は言った。
「あいつはいずれ、その正義に潰されてしまう。知らず知らず、正義のつもりで憎むべき悪を行っていることに気づかずに」
「正義は、悪ですか？」
「正義と悪は表裏一体。利益になればそれは正義で、不利益なら悪。そう思ったこと、ない？」
「それはまぁ……」
「悪即斬なんて、近衛にでもやらせておけばいいのにねぇ」
後藤はデスクの上で手を組んで顎を乗せた。
「……悪く、ないか」
「警部？」
不破は、後藤の考えていることが何となくわかった。
「まさか、南雲を放出するつもりでは？」
「それもいいかなぁ。と思ってさ。ほら、あいつなら近衛でも十分喰っていける気がしてさ」
「自分は反対します」

不破はきっぱりと言い切った。
「南雲は、自分の部下でもあります。かならず、自分が真人間にしてのけます」
「……あっそ」
後藤は興味なさげに言った。
「せいぜい、自分を犠牲にしないようにね？」

●東京都内某所
それから数日後。
非番の南雲は、町中をぶらついていた。
サングラスをした身長2メートル近い大男が歩く。
それだけでヤクザまでが道を譲った。
「――ん？」
南雲はふと足を止めた。
視線の先。
そこには大きな荷物を抱え、とんでもない場所から出てきた女の姿があった。
「……」
南雲は、女の出てきた場所をもう一度見た。

魔留場津クレジット。

俗に言うサラ金だ。

警視庁の巡査部長。
ノンキャリアでありながら経歴は申し分ない。
行く行くは警視長まで上れるだろうと周囲からも評判の女。
不破忍が出てくるには、あまりに不自然な場所だった。

「……」

南雲は、不破の後を追った。

不破が次に向かったのは病院。

誰かの見舞いか？

南雲がそう思ったのは、当然だが――。

「！？」

道路に面した木陰に用意された、何の変哲もないベンチ。

そこに座るのは、何の変哲もありまくる相手だった。

伏木　渡（ふせぎ・わたる）

外見こそ、

冴えない、

頭がさびしい、

くたびれた、

あらゆる意味でマイナス要素しかないオヤジなのだが、企業の情報を盗み出して脅迫材料に使ったり、ライバル会社に売り飛ばすことを生業にする、かなりの犯罪者なのだ。

何より、この男に警察が神経を尖らせるのには理由がある。

この男の手によると思われる違法データの中に、警視庁のかなりの機密文書が含まれていたからだ。

警視庁では内偵をすすめているが、その犯人の手がかりすら、ようとして掴めていない。

その犯罪者の顔は、不破だって知っているはずだ。

それなのに、

不破はその顔を見るなり、ベンチの横へ座った。

警察官が、犯罪者の横に、自らの意志で座った。

ありえない。

南雲は、信じられないものを見る目で、その光景を見た。

伏木の足下には、不破の手に提げているのと同じ紙袋が置かれている。

不破は、その紙袋に並べるように同じ紙袋を置いた。

そして、何かをためらうような仕草を見せた不破だったが、何事もなかったかのように立ち上がると、紙袋を手にして、その場を立ち去った。

「……」

典型的過ぎるほどの光景を見た南雲は、伏木の先回りをして、角を曲がった所で紙袋を手にした伏木の前に立ちふさがった。

●翌日　警視庁警備部書類倉庫

「話とは何だ？」

南雲に書類倉庫へと呼び出された不破は、そこに待っていた南雲に厳しい声でそう言った。

昨日までなら、威圧感を感じる声。

それが、南雲にはむしろ虚しくすら聞こえた。

「これ、返しておきますよ。巡査部長」

南雲はポケットからそれを取り出し、不破に投げた。

「？――――っ！？」

それを受け取った不破の顔が、一瞬で青くなる。
それは、何の変哲もない単なるメモリカード。
「紙袋の中身はフェイクで、紙袋に入れたハサミの数で駅の名前、ロッカーの番号、さらには暗証番号まで教えるとは……巡査部長、あんた、大した推理作家になれるよ！」
「……」
呆然と南雲の顔を見つめる不破に、南雲は言った。
「謹厳実直、警察官の鑑とまでいわれたあんたが、まさかサラ金に借金までした挙げ句、警察の内部データを売り渡していたとはな！」
「知っていたの……？」
「昨日、偶然見かけてね」
「……」
俯く不破に、南雲が何かを言おうとした次の瞬間――
「何をするっ！」
南雲の厳しい声が飛び、不破は南雲に腕をねじ上げられた。
「くっ！」
ガチンッ
鈍い音を立て、ねじ上げられた不破の手から落ちたのは、拳銃だった。
「こんな所で自殺なんてされたら、俺が困る！」
「き、貴様に、何がわかって！」
「伏木に情報を売り飛ばしたってことだけで十分だ！」
そう。
南雲にとって、それで十分だった。
理由なんて関係ない。
悪は悪。
だからこそ、倒さねばならない。
たとえ、それが上司だったとしてもだ。
それが、南雲の正義だ。

「だが、俺はあんたを殺しはしない」
南雲は言った。
「公安あたりにつきだしてやる。あんたのルールに従って、あんたを罰してやる」
「！！」
不破の顔色はもう土気色になっている。
「ふん。自分が正義を振りかざすなら、その正義で自らが処理されるのを覚悟しているんだろう！？その覚悟がないで、人めがけて正義がどうの言うなっ！」

覚悟がない正義。

不破の言い分を認めつつ、南雲がどうしても不破を受け入れられなかったのは、まさにそこだった。
不破には覚悟がない。
何かが、不破の覚悟を鈍らせている。
そして、不破はその存在を排除しようとしない。
南雲の目には、それは明らかな不破の怠慢でしかない。

南雲は嫌悪感と憎悪が混じり合った声で言った。

怠慢と映るモノ。
それが、不破の――――人の弱さだと、わかっていたから。

「――――殺せ」
腕の痛みに耐えながら、不破は苦しげに言った。
「私を、殺せ」
「何？」
「それが、貴様の正義なのだろう？」

「上司殺しの汚名を、この俺に着せようと言うのか？」
「相手が誰であろうと、悪は倒す。それが貴様の正義だろう？違うのか？」
「……っ！」
南雲は舌打ちと同時に、不破を突き飛ばした。
「伏木は罰した」
書類棚に叩き付けられ、その場にへたり込んだ不破に、南雲は言った。
「根城のマンションは、深夜の不審火で焼けた。身元不明の焼死体が一つ」
「！？」
「……そういうことだ」
南雲は視線を合わせないようにそっぽを向きながら、不破に言った。
「後は……そうだな。サラ金は、さっさと返しちまった方がいい俺もいろいろ蓄えがあるし……うん。それがいい。」
「貴様……？」
「と、とにかく！」
南雲は声を張り上げた。
「俺はこれであんたが何をしているかは知らない！それでいいだろう！」
「……ありがとう」
不破は言った。
「ヒック……あり……がとう」
「巡査部長……」
警察官としての倫理観が人一倍強い女性が、泣き崩れている。
一体、背景に何があったかは知らない。
知りたくもない。
ただ、この時の南雲にあったもの。
それは、

困惑。

ただそれだけだった。

困惑する頭で、南雲は言った。

いや。

言ってしまった。

「まぁとりあえず、感謝するなら」

待て。

南雲の中で、何かがそう告げる。

それでも、南雲の口は開く。

「お礼、してもらおうか？」

やめろっ！

その警告は無視された。

「？」

泣き崩れた、年上の女の上司が、きょとんとした顔を向けてくる。

それが、南雲の何かをさらに助長させた。

二人きりの密室。

普段なら、言った相手を殺しかねないはずなのに、

それに便乗するような言葉が、南雲の口からはき出された。

「とりあえず」

やめろっ！

何かが絶叫するが――――

「脱げよ」

一度はき出されたものは、歯止めがきかなかった。

「えっ？」

不破も女だ。

結婚もして子供もいる。

南雲より人生経験の深い女。

その意味はイヤでもわかる。

不破が、それ故の絶望の眼差しで自分を見つめるのすら、南雲の何かにとっては快楽でしかなかった。

犯罪者という名の、圧倒的に自分より弱い者を狩る時と違う、もっと違う種の快楽を、南雲の何かは求めていた。

「人生、救ってやるんだ。ソレくらいは当然だろ？――――脱げよ」

「……」

南雲にとって、その沈黙は快楽に油を注ぐだけ。

自分を罵倒する上司の見せる、女としての顔。

時折、時間を忘れて見とれたほどの美しく、毅然とした顔が、屈辱と絶望に歪み、逡巡するのを見るのは、今の南雲にとって最高の快楽だった。

「さぁ」

猫がネズミを嬲り殺しにするように、南雲は要求と沈黙をもって不破を嬲った。

「どうしたんだ？それとも、本当に公安に突き出されたいのか？」

「……」

不破は胸元に手を置いて、沈黙を続けた。

「子供のこと、考えた方がいいぜ？」

「っ！？」

不破がこの時、初めて顔を上げた。

背筋が寒くなるほど美しい。

南雲はその顔を、そう、とらえた。

だが――――

不破の顔は、南雲の加虐的欲望をかき乱すだけだった。

「子供のこと考えて行動しな」

「――――っ」

南雲にはわかる。

震えながらも、不破が立ち上がったのが何故か？

わかるのだ。

その手が、ブラウスのボタンにかかったのも。

すべては、自分の要求に屈したのではないことを。

白く細いうなじの下にのぞく下着ですら、

それを見せるということは、

それはすべて、

自らの子を守ろうとする、

母の一念。

ただそれだけであることを――。

そこに、自分というオトコへの思慕なぞカケラも存在しないことを。

南雲は思い知らされた。

「もういいっ！」

南雲は苛立った声で言った。

「お前みたいなバツイチの子持ちの肌なんか見たくはない！」

南雲は何かを振り切るような声で言った。

「さっさと服を着て、仕事にもどりやがれっ！」

不破を突き飛ばすと、呆然としてその背を見つめる不破から逃げるように、南雲は足早に部屋から立ち去った。

まるで、何かから逃げるように……。

●数日後

数日間、

南雲は不破との接触を避けた。

不破もまた、南雲との接触を行おうとはせず、二人はすれ違いを続けていた。

ただ、はっきりと言えることは――

「……」

南雲は職務中の飲酒をぽったりと止め、何故か真面目に外回りにいそしむようになったこと。

それだけだ。

理由は当然、不破と接触しないためであり、不祥事がきっかけで不破の元に出頭するのがイヤだったからだ。

「それにしても――」

途中のベンチに腰を下ろし、だらしなくふんぞり返る南雲は、空を眺めながら、つくづく。といった感じでぼやいた。

「いい胸してたよなぁ……」

子供を産んだとは思えない白い肌と、豊かな双丘……。

子供を産めば、女はああなるのかな。と、南雲はふと、そんなことを考えていた。

考え方によっては、惜しかったかも知れない。

そう思う。

抱いてみたい。

そう思う。

「馬鹿な！」

口ではそう言える。

何とでも言える。

それでも、結局ここに行き着くのだ。

「ああ……いい胸してたよなぁ」

●東京都内某所

結局、二人が再開したのは、翌日のことだ。

「犯人に告ぐ！」

パトカーのスピーカー越しに警官の怒鳴り声が響き渡る中、二人は小隊の同僚と共に突入装備に身を固め、肩を並べて待機している。

騎士警備部に所属する隊員、つまり、南雲達公安騎士は、その身体的能力から、人質事件などの際の切り込み役としての任務が与えられている。

制服警官達が近づくことすら出来ない場所に投入され、あらゆる危険任務につくため、その装備はなかり大がかりである。

「状況を再度説明する」

不破は自動小銃の安全装置を確認し、部下に振り返ると言った。

「犯人は人質5名をとり、3階に立て籠もっている」

そう言って、不破が見上げたのは、自分達が張り付く壁の上。

4階建てのビルのような高級住宅――政府の高級官僚向けの公邸。

不破達は、丁度、二階のバルコニーの真下にいた。

「人質は内務省のお偉いさんの家族だ」

このうなじの下に、あの胸が……。

南雲はじっと不破のうなじを見つめながら、ぼんやりと指示を聞き流していたが、
「わかったな？」
の一言で現実に戻された。
妄想は一時お預けだ。
「いっそもう、全員殺されるの待ったらどうですか？」
部下の一人がそうぼやくのも無理はないと、南雲は思った。
自分が総監ならそう命じているだろう。
もっといえば、自分が犯人の親なら、子供を殺しているとも。

事件の発端は、官僚のドラ息子が同じ高級官僚の息子仲間と一緒に麻薬パーティを開いた。
ここまではまだ許容範囲としても、南雲達の出番ではなかったろう。
問題は、中毒状態に陥ったこのどら息子が、父親が集めていた猟銃を持ち出して2人を射殺、止めに入った使用人を含め、現在では4名が死傷していることだ。
ただでさえ嫌われる高級官僚の不祥事。
これでは突入する現場の志気が上がるはずがない。
ばかばかしい。
勝手に殺して死にやがれ。
そう思う現場の隊員は決して少なくないのだ。
そして、警察上層部から入った命令も、現場のやる気を削ぐのに十分だった。

「他はどうでもいいけど、どら息子だけは無事に確保しろなんて、どうせお偉いさんの圧力か何かがかかってる証拠でしょう？親バカの極みでしょう。こりゃ」
南雲もたまらずそう言ったが、
「それでも命令よ」

不破は南雲を見ずに言った。

避けられている。

そう思った南雲は目の前が真っ暗になる思いがしたが、

「第一小隊がすでに一階を確保――」

ズダァァンッ

建物内から銃声が響き渡たり、不破達の目の前に、何かが落下した。

「!?」

思わず身構える公安騎士達の目の前に落ちてきたモノ――

「ヒッ!?」

それが何か気づいて息を止めたのは、日下だ。

「成る程」

南雲は一人で納得したような顔で、それを見た。

「隊長、アレは人質の一人ですか?」

ベランダまで逃げた所を撃たれたのだろう。

口や鼻から血を流して、仰向けに倒れているのは、金髪に髪を染めたチンピラだ。

「ああ……大蔵省事務補佐官の息子だな」

「来年あたり、内務と大蔵、もめるだろうなぁ」

「そんなことは我々の知ったことではない!」

部下のぼやきを聞きとがめた不破が小声で怒鳴った。

「犯人は大口径の猟銃を所持」

「違いますよ。巡査部長」

南雲は不破の言葉を止めた。
「な、何？」
「これ……対戦車ライフルの銃痕ですよ」
「たい……せんしゃ？」
「つまり、不法所持の銃で――――っ！」
「きゃっ！？」
南雲は不破を抱きかかえるようにして横っ飛びに跳んだ。

鈍い打刻の様な音。
土煙。
そして、何人かの隊員達が、奇妙な姿勢で倒れる音。

それが立て続けに不破の視界に入ってきた。

「第二小隊より指揮所！犯人は大口径の対戦車ライフル及び機関銃とおぼしき武装を所持！負傷者多数、指示を求める！」
不破の胸元にあった無線機のレシーバーを奪い取った南雲は、それだけ怒鳴るとまた横に跳んだ。
「日下、加藤、新田、諏訪、待田、桃井、大丈夫か！？」
次々と部下の安否を訊ねる不破に、あちこちから返事が返ってくる。
「桃井がやられました！」
「日下です……加藤巡査……死亡！巡査が、なくなりましたぁ！」
「くそっ！諏訪、神田、桃井を連れて下がれ！後は遮蔽物を楯に！」
南雲は不破を抱えたまま立ち上がってバルコニーを睨み付けた。
何者かがバルコニーから走り去り、狂ったような笑い声だけが残されていた。
「南雲巡査長！」
「確保すりゃいいんでしょう？」
「違うわよ！」
不破は赤面しながら怒鳴った。

「いつまで人の胸を掴んでいるつもりっ！？」
「へっ？」
南雲は手にそっと力を込めてみた。
ゴムマリのような弾力のある感触がした。
「あ、ああ……こりゃどうも」
そう思うならさっさと離せ。
そう思っても体がそれを拒んでいる。
南雲は何度も何度も手に力を入れては、それを緩める動作を繰り返した。

「いい加減にしろっ！」

ガンッ！

「何もソコを殴らなくても……」
南雲は股間を押さえながら不破に弱々しく文句を言った。
「銃尻で殴られたらハンマーで殴られたのと同じ」
「うるさいっ！」
不破は赤面しながら怒鳴った。
「せ、セクハラですっ！」
そう怒鳴り、そっぽをむく不破の顔を見た南雲は、不破のちょっとした変化に気づいた。
「あれ？巡査部長？」
「な、何です？」
「化粧……なんか、変えました？」
普段から化粧っ毛の少ない女という印象があった不破の顔、特に唇の変化に、南雲は気づいたのだ。
「べ……別にいいでしょう？」
「誰か、オトコでも出来ました？」
「なっ！？」

驚く不破の顔は、図星をついたことを証明していた。
「まぁ、いいでしょう」
南雲は言った。
「突入しましょう。相手は武装している。このままでは危険です」
「ま、待って」
不破は南雲を止めた。
南雲は、妙に命令口調ではない、女の声で自分に話しかけてくる
不破を不思議と受け入れていた。
不破は言った。
「突入命令が来ていない」

ガシャァンッ

窓が割られ、椅子らしい物体が地面に落ちて砕けた次の瞬間――

ズガガガガッ！

連続した銃声。
その矛先はパトカーだ。
制服警官達の何人かが血煙をあげて倒れる。
スーツ姿はマスコミだろう。

「奴さん、ついに初めやがった！」
南雲は不破の手を振り払って言った。
制服組は倒れる同僚を助けるために何人もの警官が危険を承知で
飛び出し、銃弾の餌食となった。
南雲達はそれを指をくわえてみているしかない。

制服組がついに射撃を開始した。

「突入します！」
制服組が頑張っているが、火器の性能が違いすぎる。
このままでは、あと何人犠牲者が出るかわかったものではない。
「やむをえないな」
制服組の誰かが頭を打ち抜かれて倒れる光景を目の当たりにした不破も覚悟を決めた。
「ついに懲戒免職か」
「俺、料理屋でも始めますよ」
「ふん。食べに行ってあげるからおごりなさい」
「女将さんはまかせましたよ？」
南雲はそう言うと、バルコニーへと飛び上がった。
「えっ？」
意味がわからず、ぼんやりする不破の耳に日下の怒鳴り声が響いた。
「隊長！」
「――えっ？」
「続きますっ！」
自動小銃を抱えた日下達、生き残った部下が不破に叫び、南雲の後を追った。
現実の職務に戻った不破が、すぐに部下を追ったのは当然である。

室内はかなり高い調度品で埋め尽くされていたろうことは、モノの価値に疎い南雲にもわかる。
今は残骸となって床に転がる壺だって、南雲の年収一年分では足りないだろう。
「国民の税金を無駄遣いしやがって……」
血と脳漿で汚れた壁や絨毯だって同じだ。
「こちら第二小隊南雲、バルコニー及びCルーム確保」
南雲は無線機に小さく告げた。

「人質5名は全員死亡」
床に転がる死体は、全員が頭を吹き飛ばされている。
射殺した死体を何度も撃っていることと、犯人がまともな状態ではないことは確かだ。
『本部了解。犯人確保に全力を尽くせ』
「了解」
ふざけるな。
南雲は内心で舌打ちした。
ここで死体になった連中の無念を払えるほど、司法は万能だとでも言うのか？
いっそ殺した方がいいに決まっている。
麻薬中毒による一時的錯乱。
それだけで5年程度で娑婆に帰ってくる。
そして犯罪を繰り返すのだ。
殺された者達にはない日々を過ごすために――。
間違っている。
南雲はそう思うのだ。
犯人は犯人として処刑されるべきだ。
決して気の毒な中毒患者で終わらせてはならないと。
「南雲巡査長」
バルコニーに飛び移った第二小隊の面々と不破が南雲の背後に続いた。
隣の部屋からは銃声が断続的に聞こえる。
「犯人は隣の部屋。自分が突入します」
「待て――状況を確認して」
不破の言葉を無視する形で、南雲はドアを蹴破って隣部屋に飛び

込んでしまった。
「ちっ！小隊」
続け。
不破はそう言ったつもりだった。

捕り物は一瞬でケリがついた。
南雲の一撃をマトモに喰らった犯人――――どら息子は壁に叩き付けられ、銃を取り落とした。
ドアのケリ破られた瞬間、
このどら息子はもう判断能力を薬物によってほとんど失っていた。
ただ、手に持った機関銃を撃ちまくる楽しみに酔いしれているだけだった。

どら息子に飛びかかる南雲の背後といわず、壁のあちこちに風穴が開いた。

無数の弾丸をものともせず飛びかかった南雲は、床に倒れ伏したどら息子の髪を掴むと、無造作にその体を持ち上げた。
「ヒッ……ヒッ……」
体をビクビクと痙攣させ、ブツブツと何かを呟くどら息子。
それが何を言っているのか気づいた南雲は、どら息子の頬を思いっきり殴りつけていた。
親から散々聞かされた事なのだろう。
どら息子はこう言っていたのだ。
「ぼ……ぼくはえらいんだ。みらいのかんりょうだぞ……ドドドッ……ブタはしね……しね……ドドドッ……ブタは」

犯人を引きずりながら、不破達の待っている部屋に戻った南雲は、その部屋の光景に、手にしたどら息子の頭を落としてしまった。

「……どうした？」

感情が消えたような声で、南雲は同僚に訊ねた。

「不破巡査部長……どうしたんだ」

床に倒れる突入服。

その横に崩れ落ちる様にしてへたり込む日下が声を殺して泣いている。

何が起きたか、考えたくはなかった。

「犯人は確保したんだ……起きろよ。巡査部長」

よろめく足取りで倒れる突入服――不破巡査部長の元に近づいた南雲は二日酔いにでもなったようなぐらつく世界の中で、それでも不破を起こそうと、手を伸ばす。

「触るなっ！」

バンッ！

渾身の力を込めたのだろう、小さな手が南雲の手を払いのけた。

「あんたが――！あんたがあそこで突入なんてしなければぁ！！」

そう叫びながら南雲に躍りかかってきたのは、なんと日下だった。

日下は泣き叫びながら、もんどりうって倒れた南雲の顔を、何度も殴りつけた。

「あんたが！あんたの身勝手が、あんたが！隊長を殺したんだ！」

そうかもしれない。

「この同僚殺し！」

そうだ。

南雲は自分の上に馬乗りになって自分を殴り続ける日下を、ぼんやりと見つめていた。

俺が……不破さんを……殺したんだ。

俺の、身勝手が……

大切な人を……

殺した。

南雲は、何発殴られ、いつ、どうやって、その場を離れたか、全く覚えていない。

自分の信じた正義が、

価値観が、

足下で崩れ落ちるのを感じながら、

南雲は自我を失った。

●数日後　警視庁内第七自習室

「犯人の所持していたのは、すべてオヤジさんが趣味で集めていた

非合法品だ」
　自習室で正座する南雲にそう言ったのは、後藤だった。
　命令無視および危険行動により、同僚を死に至らしめた容疑で、南雲がここに押し込められてすでに1週間がたとうとしていた。
「それをラリった息子に使われたんだから、まぁ、親御さんとしても弁明のしようがなかったわけだ。内務の幹部が大蔵、国土、司法、あっちこっちの息子殺したんだから、こりゃもう、来年あたりからモメるだろうなぁ」
　自習室であるにもかかわらず、タバコに火をつけた後藤は、思い出したようにタバコの箱を南雲に突きつけた。
「吸う？」
　南雲は首を横に振った。
「あっそ……ひどい事件だったからなぁ……犯人が死んじまったことが、まぁ、唯一の救いだわ。こりゃ」
「死んだ？」
「おろ？お前さん、知らなかったのか？」
　南雲は驚いて首を縦に振った。
「日下が射殺したんだよ」
「日下が？」
　信じられない。
　あんな弱虫が、確保した犯人を？
「個人的な怨念――そういうべきだろうが、安心しろ。俺がシナリオを書き換えた。お前が突入した際、さらに銃火器で抵抗する素振りを見せたので、やむを得ず射殺したってことになっている。日下は……退職だがな」
「そうですか……」
「で？惚れたオンナが死んで傷ついている所申し訳ないが」
「惚れた？」

「そう。お前さん、惚れてたんだろう？不破巡査部長……いや、不破警部を」
「……」
「少なくとも、不破はそうだった」
後藤は天井を仰ぎ見ながら言った。
「あいつはお前に惚れていた。惚れていたからこそ、しっかりしてほしい。その一心でお前につっかかっていたんだ」
「……」
「あいつも苦労人でな。せっかく結婚したのに生まれてきた子供は植物人間……あるだろう？騎士の血は継いだのに、その血と肉体が相容れずってヤツさ。あいつはそんな子供を産んだって、嫁ぎ先で散々罵られてな？慰謝料ももらえず、子供押しつけられて離縁さ」
病院
サラ金
情報提供
南雲の頭の中で、不破の不審な行動の全てがつながった。
「あいつは死にものぐるいだった。あ、俺もね？支援するっていってたよ？だけどあいつ、わかるだろう？一度こうだって決めると、テコでも動かないんだもの。全然ダメ」
後藤は手をパタパタやりながらそう言った。
「……それで、不破警部は」
「だが、あいつもオンナだ」
後藤は南雲の顔をまっすぐに見つめながら言った。
「母親として、警察官として、あいつはそんな境遇だった。だが、お前がいた」
「俺が？」
「そうだ。恐らく、あいつは賭けたんだろうよ。南雲がまっとうになってくれたら、いつかはって。……オンナの身勝手と笑うかどうかは、お前にまかせるけどさ」
「……笑いませんよ」

南雲はそれだけを言った。
「そうか」
後藤はタバコをもみ消すと、それまでのぼんやりした顔を引き締めた。
それは、南雲の知る「昼行灯の後藤」の顔ではない。
かつて「カミソリ」と恐れられた南雲の知らない後藤の顔だった。
冷たく、底知れぬ威圧感すら感じる顔。
こんな恐ろしいヤツが、俺の近くにいたのか。
ごくっ。
そう思う南雲は、知らずに唾を飲み込んだ。
「問題は――お前だ。南雲巡査長」
「俺……ですか？」
「お前――どうする？」
「どうするも、こうするも」
「俺も今回の事件の責任をとらされてクビだ。同僚助けるために応戦を命じた岩田警視正と村田警視は共に降格……あっちも気の毒だ」
「えっ？」
「当然だろう？部下を掌握できずに死者3名、制服警官やレポーターまで入れたら一桁増えちまう。まぁ、体のいい生け贄にされたわけだ」

喉を鳴らして笑う後藤の本心がわからず、南雲は恐る恐る言った。
「俺は……？」

「そんな俺にお呼びがかかっている」

「……お呼び？」

「ああ。……近衛府だ」

「近衛？」

「一度失った道だが、お前の才能はまだ使える。近衛に忠誠を誓えとな……笑っちまうよ。あいつら」

「警部」

「ここにいれば、もうお前は死ぬしかない」
後藤の眼は本気だった。

「同僚殺し。お前はそういう烙印がもう押されている。あのバカ息子の放った銃弾が、壁を貫通、ヘルメットぶち抜いたとしても、殺したのはお前だとな」

「……」

「惚れた女を殺したお前だが、俺はお前にまで後を追って欲しくない。なにより」
ずいっ。
南雲に近づいた後藤がその肩に手を回した。

「残った子供達の面倒、誰が見る？」

「！？」

「近衛に入れば、実入りは警察よりいい。それで子供達が養える」

「俺……俺は」

南雲の逡巡の理由がわかる後藤は頷きながら言った。

「惚れた女の菩提を弔って、残された命を養え……お前しかできないことだ」

南雲は、まっすぐに後藤を見つめ返す。

そして、南雲の唇が、言葉を紡ぎ出した――――。

警察の記録ではこうなっている。

後藤貴一警部
南雲敬一郎巡査長
日下敬子巡査
以上、依願退職に伴い、登録抹消。

それから数日後の近衛の記録

後藤貴一中佐　作戦本部付き参謀補佐官に任命
南雲敬一郎大尉　近衛騎士団右翼大隊騎士に任命
日下敬子軍曹　巡洋艦最上付きオペレーターに任命

●???

「成る程？」

真っ暗闇の中で、そんな声がした。

「そういうことですか」

ふふっ。

オトコの笑い声がした。

「まぁ、いいでしょう」

そんな声がした。

「この男……楽しめそうですね」

●信楽未亜のマンション

「にゃ？」

未亜が目を覚ました時、辺りは静寂そのもので、いつもの光景が広がっていた。

「うにぁ？誰かの声がした気が……」

あたりをきょろきょろした未亜はもう一度眠ろうとして、別な声を聞いた。

横で眠っている南雲の寝言だ。

南雲はにやけた寝顔でこう言ったのだ。

「不破さん……その胸で……挟んで欲しい」

ガッシャァァン！！

「な、何だ！？――――み、未亜っ！？」

突然の激痛により、夢の中でのお楽しみを邪魔され、現実に引き戻された南雲は、目の前に仁王立ちしているのが、未亜だということだけはわかった。

眼がつり上がり、髪が逆立っているところなんて、どこぞのトップアイドルと張り合える。

「この浮気者ぉっ！」

ベッドのサイドチェアーを振り上げる未亜が怒鳴る。

「私が横で眠っているのにぃ！」

「な、何の話だ！？」

「夢でナニをだれに挟んでもらっていたのっ！？」

「ゆ、夢の中まで介入するなっ！」

「夢で見るだけで死刑だぁぁっ！」

第二話

●葉月商店街

「あれぇ？」

商店街を歩いていた未亜が不意に立ち止まると、足を止めて何度も目をこらす。

「どうした？」

横を歩いていた南雲が声をかける。

「うん。……先生、ちょっと待ってて」

未亜はそう言い残して走り出した。

買い物客の間をすり抜けた未亜は、目当ての相手の側に近づくなり、

「村上（むらかみ）先輩」

そう声をかけた。

その声に驚いたように振り返ったのは、まだあどけなさの残る背の高い男。

顔はそれほど悪くない。

「え？」

男は、人なつっこい笑みを浮かべる未亜をじっと見つめた後、驚いたように言った。

「未亜ちゃん？」

「そう！お久しぶりだね。先輩！」

●喫茶「南風」

「お久しぶり――――もう、そういうしかないか」

喫茶店のテーブルに差し向かいで座った未亜に、男はそう言った。

近くのテーブルに座った南雲が、何だか不機嫌そうな顔で未亜達に注意を払っている。

「そうだよ」

未亜は少し怒ったという顔で言った。

「1年間も行方不明。学校は辞めちゃうし」

「ははっ……仕方なかったんだよ」

男はそう言って、ちらりと横を見た。

「？ところでさ」

未亜はその視線の先が気がかりでしかたない。

「ん？」

「その娘、誰？どこかで見た気がするんだけど」

「……」

横をちらと見た男は、不意に黙った。

まるで未亜を警戒している様子にもとれる。

「うーんっと」

男が次の行動をとる前に、未亜は自分の脳内にある膨大な人物リストからそれらしき人物を探り当てていた。

「――――霧島那由他？」

「！」
男の顔に緊張の色が走る。
どうやら地雷を踏んだな。未亜は内心で舌打ちしながらも、表には出さずに、
「どうしたの？先輩」

「未亜ちゃん」
男の声には明らかな緊張が聞き取れる。

「誰にも言うつもりはないよ？」
未亜は男の心の内を読み切ったという顔で言った。

「先輩。霧島那由他とトンズラしたんだぁ。スゴいことしたんだね」

「クスツ。トンズラって……」

「あ。やっと緊張が解けたみたいだね」

「ふっ……未亜ちゃんも少しは女らしくなったな」

「そりゃ、毎晩磨かれているからね」

「ん？」

「――先輩って、相変わらずニブいね」

「……那由他にも同じ様なこと言われてる」
男は、苦笑混じりに横にいる少女に視線を送る。
その視線の先にいるのは、未亜とそれほど変わらないだろう少女

がいた。

「それにしてもどうしていたの？」

未亜は不思議そうな顔で男に訊ねた。

「霧島那由他失踪って、１年前は大騒ぎになったっていうのに」

「……船で大陸に」

「成る程ねぇ。海外に高飛びしてたんだ。そりゃわかんないワケだ。――で、ほとぼりもさめたと思って、戻ってきた。これから実家へ？おじさん達まだ元気だよ？」

「……いや。家には戻らない」

「霧島さんの家に？」

「近くにホテルをとるつもりだ」

「？どうして？」

理由がわからない。

この男の家はここから歩いて２分ほど。

霧島那由他の家だって２０分はかからない。

家を避けている。

何故？

「……」

男は、さぐるように未亜を見つめる。

「やだなぁ」

未亜は笑いながら男に言った。

「少しは後輩を信じようよ。それに、私ん家、空き部屋だらけだし」

「……」

●信楽未亜のマンション前

「で？」

帰り道、南雲が不機嫌さを隠さない声で未亜に訊ねた。

「あの男、何者だ？」

「先生、何怒ってるの？」

「何も怒ってない」

「ウソだぁ」

「ウソじゃない」

「村上速人（むらかみ・はやと）。私達の中等部の2年先輩。美奈子ちゃんにとっては幼なじみにして初恋の男の人」

「それは」

「や、やだなぁ！」

未亜は奇妙な笑い声をあげながら、南雲を何度も叩いた。

「先生ったら、先生ったらぁ！」

顔を赤くにやけきらせた未亜は、今度は体をくねらせ始める。

「未亜……やめろ。世間様の視線が痛い」

「ふっふっふっ……最近毎晩だもんねぇ」

「ばっ！」

南雲の顔が一瞬でゆであがる。

「休みの日は朝昼晩かぁ」

「そんなにすがすがしく言うな……」

勢いとはいえ、教え子に手を出した挙げ句、それにおぼれているなんて、とうの相手に指摘されてしまっては、さすがに南雲も立つ瀬がない。

反面、未亜はそれが嬉しくて仕方ない。

「その最愛のオンナが、どこのウマのホネともわからない男となれなれしくしてるから、面白くないんだぁ。そぉんなに、ヤキモチ焼かなくてもいいんだよ?先生♪」

「だ、誰が」

「先輩達、3時間位したら行くっていうから、それまでに済ませようね?たっぷりサービスしてあげるから♪」

「こらっ!」

南雲の大きな手が未亜の頭を包み込むように掴む。

「にゃっ!?」

「覚悟しておけよ?」

「うんっ!……ただねぇ。大丈夫かなぁ」

突然、現実に戻った未亜の声のトーンが落ちた。

「先輩は、ね」

「どうした?」

「警察に見つかると、ちょっとマズいんだよね」

「まて。どういうことだ？」

未亜は語り出した。

「あのね？

１年ほど前のある日、この先のコトハ坂の途中のお屋敷で殺人事件があったんだよ。

えっとね？

殺されたのはその屋敷のご主人で、広間に倒れていたのを、朝訊ねてきた通いの家政婦が見つけたんだ。

死因は射殺。

金庫が開けられて、中のお金や宝石がなくなっていたから、物取りの犯行とも思われたけど、少し違うんだ。

何がって？

お屋敷に住んでいたのは、その主人とその孫娘なんだけど、その女の子が、事件のあった夜を境にいなくなったんだ」

「それが、さっきの娘か？」

「そう。しかも、その夜、同じくこの葉月市から姿を消したのが」

「あの男」

「そう。村上先輩。霧島那由他の家庭教師もしていたんだ。だから警察も」

未亜はマンションのセキュリティを解除しながら言うが、南雲は厳しい顔で通りの向こうを睨んでいる。

「……」

「どうしたの？先生」

カードをリーダーに差し込む手を止めて、未亜は南雲に訊ねる

「……」

南雲は身を固くしたまま、動こうとしない。

わずかに視線を動かしただけ。
「未亜」
「……イヤなの？村上先輩達が来るの」
「先に入れ」
「先生？」
「急げ」
「う、うん……」
未亜は不承不承エントランスに入る。
防弾ガラスの重いガラスの向こうに未亜が消えたのを確認した南雲は、道路を見た。
「……」
いない。
「……誰だ？」
南雲は辺りを見回しながら考えた。
確かに、ついさっき、男が道路に立ちつくしていた。
黒ずくめのあの男。
間違いなく、こちらに殺気をはらんだ視線を送ってきた。
対象は俺かと思ったが、もしかしたら未亜かもしれない。
あの殺気は尋常なそれではなかった。
何人も殺して来た者のそれだ。
警戒にこしたことはない。
「先生！」
エントランスから未亜の声がした。
「村上先輩達、あと３０分位で来るって！」
「そうか」
南雲はもう一度だけ道路に視線を送り、エントランスへ入った。

エレベーターの籠の中。
「事件のあった日の村上の足取りは？」

未亜に訊ねるその眼は教師のそれではない。
警官のそれだった。
「間違いなく、先輩はあそこにいた」
未亜は答えた。
「そう。周囲の証言は一致していた」
「つまり、警察にとって、あいつ等は殺人事件の重要参考人ということか」
「うん。警察ではそう見てる」
「で？お前はなぜそこまで知っている？」
「内緒」
「内緒って……」
「私にもいろいろネットワークあるんだよ？」
「お祖母さんのか？」
「ううん。私独自」
「時々、お前が怖くなる」
「ふっふっふっ……ベッドの中？」
「確かに最近押され気味……何を言わせる！？」
「自分でいってるだけだよ」
「……」
エレベーターを降り、南雲はマンションの鍵を取り出しながら思った。
何とか、こいつから主導権を取り戻さねばなるまい。
このままでは一生尻に敷かれかねない。
男としてそれだけは勘弁してほしい。
よし。
「未亜」
玄関のドアを開けると、南雲は未亜に振り返った。
「何？」
「3時間だったな」
「ん？先輩達が来るの？そうだよ？」

「じゃ、いいな」
玄関に入るなり、未亜は南雲の太い腕の中に抱きしめられた。
「にゃっ！？」
未亜はその意味がわかる。
二人きりの時、こうされるのが何の合図か。
だけど、場所が場所だ。
「ち、ちょっと待って先生！こ、こんなトコじゃヤダ！」
「俺は大歓迎だ」

抵抗する体から器用に服をはぎ取られ――

第三話

「初めまして。村上速人（むらかみ・はやと）といいます」

客間に通された村上は、礼儀正しく一礼した。

身長は１８０前後、知性の高さが感じられる顔つき。一緒に来た少女を労りつつ、周囲の警戒を解いてはいない。

その物腰から、村上がただ者ではないことを、南雲は一目で見抜いた。

「未亜ちゃんの先生と聞き及びましたが？」

「そうです」

南雲も頭を下げた。

「南雲敬一郎。明光学園の教師をしています」

「そうですか。――未亜ちゃん？」

村上が怪訝そうに未亜に訊ねた。

「お手洗いかな？」

「え？ち、違うよぉ！」

何故か赤面した未亜が慌てて手を振って否定を示すが、なぜか内股をモジモジさせつづけている。

「？」

「で、でも――ごめんね！？」

未亜は転んだフリをしてわざと南雲に膝蹴りを喰らわせてトイレへと駆け込んだ。

「昔から元気のいい娘で」

そう語る村上の顔は穏やかな笑みを浮かべている。

「それで」

村上達が来るまで、未亜に何があったかを知る唯一の男は、

（ちょっとやりすぎたかな）

と反省しつつ、咳払いをした。

「信楽から大体の所は聞いたつもりです。単刀直入にうかがいたいのですが」

「その通りです」

「――まだ何も」

「ああ。これは失礼」

村上は苦笑しながら肩をすくめた。

「でも、それで答えにはなっているはずですよ？」

村上はちらりと横にいる少女を見た。

「警察はあてになりません。だから逃げているんです」

「それは知らせてみなければわからないでしょう？」

「知らせなくてもわかるから、こうして逃げているのですよ」

「何から？」

それがわからない。

殺人罪を犯したのだから、警察から逃げているのか？

それとも、殺した相手の関係者？

それにしては妙だ。

何が？

そんな相手なら必ず足取りを探すために知人にコンタクトをとるはず。

未亜はそれを南雲に告げていないということは、対象が未亜に接触していないということだ。

一体、何から逃げているのか、それがわからない。

「その前に」

村上は南雲の疑問を遮るように言った。

「お願いがあります」

「警察からかくまえというならお断りですよ？」

「僕が言った、あてにならないという言葉は、警察では僕達を守りきることが出来ない。そういう意味です。……だから、僕達は自衛する必要があるのです。どうか、あなたから警察へ連絡するのは勘弁してください」
「警察では守りきれない？どういうことです？」
「騒ぎを大きくしたいと思っていない。そう理解いただければ十分です」
「成る程？それで、お願いとは？」
「僕達をここにしばらくかくまってください」
「何から？」
「……」
「……」
村上は口をつぐんだ。
「それではどうしようもない」
南雲は諭すように言った。
「敵が何かわからなければ、どうしていいかすらわからない。このマンションに誰も来るな。とでもいうのですか？」
「……たった……一人です」
村上は、まっすぐに南雲を見つめる目で言った。
「黒い服を着た、長髪の男から」
「？頬に傷のある？」
「そう――ですけど」
村上の顔が青くなった。
「失礼、それを何故？」
「あなた方が来る前、下の道路にいたから」
次の瞬間、南雲は飛び上がって驚いた。
今まで黙っていた少女が凄まじい悲鳴を上げ、村上に抱きついたからだ。
「な、何事！？」
ようやくトイレから戻ってきた未亜も駆けつける。

少女は村上に抱きつきながら叫んだ。
「ど、どうしよう！もう先回りしてるのよ！」
「し、失礼。南雲さん」
村上は少女の髪を撫でて落ち着かせようとしながら言った。
「ここも危険なようです。僕達はこれで」
「待ちなさい」
腰を浮かせた二人を南雲が止める。
「放ってはおけません」
身長2メートルのマッチョの顔から放たれる凄まじいまでの気迫に、村上達は動けない。
誰かが唾を飲み込む音だけがやたらと大きく聞こえた。
「信楽」
「へ？」
「その子を奥の部屋へ」
「う、うん……那由他ちゃん。覚えてる？ピースメーカーの信楽社長の、孫娘の未亜だよ？」
未亜が少女を村上から引き離すように立たせると、奥へと消えていった。
「奥の部屋は厳重な警戒がしてあります」
「……お気遣い、感謝します」
村上は深々と頭を下げた。
少女に過去を思い出させたくない。
そう村上が思っているという南雲の判断は、外れてはいなかったようだ。
すっかりぬるくなった紅茶に手を伸ばしながら、南雲は村上に尋ねた。
「まず、あなたが何者なのか、それから聞かせてもらいましょうか」
「はい」
村上は、背筋を伸ばし、深いため息と共に語り出した。
世にも奇妙な物語を――

以下、村上速人の独白より

僕は村上速人といいます。
帝国大付属校に在学していました。
両親共に帝国大学の教授なので、その血のせいでしょうか。自分で言うのも何ですが、成績は常にトップクラス。学校の正規の授業は免除同然で、大学の研究室に呼ばれて勉強していましたし、翌年には飛び級で帝国大学へ進学することが決まっていました。
天才児？
違いますよ。ちょっと人より頭がいい、その程度のことです。
少し前のことになります。
僕はあることでお金が欲しくてアルバイトを探していました。
学生が出来るアルバイトはいろいろあるのですが、頭脳労働で実入りのいい働き口を探していた時、奇妙な家庭教師のアルバイトの口に出会ったのです。
英語や国語、その他の語学、物理学、歴史、音楽、芸術、政治経済の分野に至るまでを、一人でこなせる家庭教師の口。
ね？珍しいでしょう？
そう、普通じゃない。
それがむしろ僕にとっては惹かれたところでもあり、担当するところは、一通りすでにかじったことがあるので、なんとかなるかと思って応募したのです。
年齢で断られるかとも思ったのですが、面接に呼ばれました。
その相手が、霧島さん。

那由他の祖父と名乗る人物です。
黒い服を着た長髪の、ちょっと陰気な感じのする人物でしたが、彼との面接の内容は今でも覚えています。
彼はまずこういったのです。
「政治と芸術は独立しては存在していない」と。
何のことかわからない？
そうですか……続けていいですか？
どうも。
「サロン入選の傾向は時の為政者達の好みに影響された」
僕はその言葉に同意しました。
「印象派も最初は認められませんでしたね」
「その通り」
僕の言葉に、霧島さんが、ちょっとだけ驚いた。という顔になりました。
「個々の専門家の学識は深いが狭い。ワシが求めているのは歴史上のすべての要素を相関づけて把握するグローバルな知識の持ち主だ――よろしい。若いが君を採用しよう。ワシの孫娘に君の学識を授け、真に教養豊かな人間に育てて欲しい」
それで、僕の採用が決まりました。
「ご期待に添えるよう、頑張ります」
そこに通されたのが、彼女、霧島那由他です。
驚きましたよ。
どんな学問小僧が出てくるかって身構えていたのに、
え？
君の同類を期待していたのかって？
違いますよ。
酷いなぁ。
見てわかるでしょう？
あの楚々としていながら、たおやかでまるで深窓の令嬢といった風情の――

い、一目惚れって……
そういう問題じゃなくて！
……コホン。
翌日から楽しいアルバイトの始まりです。
時間は午後7時から10時まで。
那由他は実に優秀でした。
飲み込みが早く、質問は的確にして正確。
教え甲斐のある娘でした。
休憩時間にした雑談などから、彼女が2年前に両親を亡くして祖父に育てられていることや、教養の一環として舞踊もやっているし、その延長で今度、芸能プロからデビューすることも知りました。
アルバイトはそれから約半年続きました。
その中で、言葉や態度の端々から彼女が僕に好意を寄せてくれていることがわかって、僕はますます仕事にのめり込んでいきました。
……ところが、です。
ある日、霧島さんに用事があって、訊ねていった霧島さんの書斎から漏れ聞こえた会話が、すべてを狂わせたのです。
霧島さんは、電話に向かってこう言っていました。
「全ては順調です。まもなく那由他を送れます……つきましては手付け金として」
そうです。
那由他を売り飛ばす相談だったのです。
さっきも話した通り、那由他は僕から受ける教養以外にも、舞踏や楽器、様々な習い事をしていました。
僕はそれを、たった一人の孫に対する祖父の思いやりと考えていましたが、とんだ誤解でした。
恐らく、どこかの金持ちにでも売り飛ばすつもりだったのでしょう。
娼婦は教養が豊かな方が高く売れます。
つまり、僕がしていたことは、彼女の商品価値を高めるためのこ

とだったのです。
え？
那由他が？
知りませんよ。当然。
僕は那由他に真実を告げ、そして僕達は霧島さんと直談判に持ち込みました。
人身売買とは何事ですか！と。
霧島さんは激怒して怒鳴りました。
「他人が口を出すことか！」
だから言い返したのです。
他人も何も関係有るかと。
だってそうでしょう？
人身売買なんて、立派な犯罪行為ですよ？
霧島さんにもそれは伝えて、考え直すように説得しました。
でも、霧島さんは聞く耳を持たず、そして僕は、
「考え直してもらえないなら、警察に電話します！」
そう言いました。
それが最後通告のつもりでした。
でも、霧島さんは無言で拳銃を取り上げました。
霧島さんは、僕の通告を拒絶したのです。
そして、僕は電話の受話器を彼に投げつけ、ひるんだところを組み合いました。
互いに死にものぐるいです。

もつれにもつれて、気が付いたら霧島さんは冷たくなっていました。
もつれ合う中で、霧島さんの銃が暴発して、霧島さんに当たったんです。

拳銃を持った相手に抵抗して相手を殺したのです。

正当防衛は成立します。
僕達はその後、霧島さんの机から人身売買に関わる書類を見つけ、わざと机の目立つところに置いたり、逃走用の資金となる金品を金庫から取り出した後、屋敷を逃げ出しました。

いいですか？

これが、彼、霧島さんを殺した1度目です。

……続けます。

警察の捜査の目が入る前に、僕達は夜行列車を使って福岡に出て、そこから中国船籍の貨客船に宝石と引き替えに乗せてもらい、大陸へと出ました。
向こうは治安が悪い反面、警察の捜査が及ばないところが多いですからね。
そうです。
僕は那由他と離れたくなかった。
他に身よりとてない那由他をひとりぼっちにさせたくない。
そう思った末のことです。
身勝手？
そうかもしれません。
今考えると、この時、両親を頼るべきだったのかもしれませんが、不思議と僕はそうは思わなかったのです。
当時の僕には、逃げるということしか思いつきませんでした。

夜行列車に乗って、葉月から離れても離れても、霧島さんの匂いが追いかけているようで、たまらなかったんです。

とにかく、僕達は大陸――香港へ逃げました。

あの事件があってから2週間が立ちました。

霧島さんのお金だけじゃ不安だったので、僕はそこで日雇い労働者として働いていました。

中国語には通じていたから、誰も僕を疑う者はいません。

おかげでアパートも借りることが出来て、慣れない土地におびえる那由他の顔にもようやく笑顔が見え始めた、あの雨の夜。

悪夢が襲ってきたのです。

その日、仕事を終えた僕は、買い物を済ませると那由他がいるアパートへ戻りました。

すると、玄関で那由他はおびえた様子で僕に抱きついてきました。

「こらこら。いきなり抱きつかれたら濡れちゃうよ？」

「だって……怖いのよ」

外はいつしか雷雨になっていました。

「怖いって、雷が？子供みたいだね」

「そ、そうじゃなくて……」

「何？」

「言わなかったけど……昨日くらいから」

那由他の声は震えていました。

「窓の外に御爺様に似た人が立っているの！」

意味がわかりませんでした。

もしかしたら、彼女は恐怖心のあまり、幻覚を見ているかもしれない。

その程度にしか思いませんでした。

でも、

ピンポーン

チャイムの音がしたのはその時です。

来客？

もしかしたら、隣に住むおバアさんか？

僕は、何となしに、そんな気持ちでドアに向かいました。

那由他はもしかしたら、異変に気づいていたのかも知れませんけど、僕はそれに気づくことは出来ませんでした。

「開けないで！」

「え？」

那由他の声がした時、

僕はドアを開けてしまいましたから。

開けなければよかった。

本当にそう思いました。

何故って？

立っていたんですよ。ドアの向こうに。

霧島さんが。

憎悪の表情を浮かべる霧島さんを前に、僕はヘビに睨まれたカエルのように立ちすくんでしまいました。

那由他があげた悲鳴がなかったら、どうなっていたかわかりません。

でも、僕はその悲鳴で我に返ることが出来たのです。

雷光を跳ね返す鈍い光が襲ってきました。
僕はとっさに身を引くと、玄関においてあった傘で霧島さんの顔面を突き刺しました。
後は無我夢中です。
気が付いたら、血まみれの霧島さんが倒れていました。
……
他人のそら似？
まさか！
よく似た他人なんかじゃありません。
間違いなく死んだはずの霧島さんでした。
なんだかもうワケがわかりませんでした。
でも、その時の僕達は不法滞在者。
もう警察に告げることも出来ません。
だってそうでしょう？
彼は2週間前に日本で死んだ人物ですなんて、警察じゃなくても納得してもらえるはずがないじゃないですか。
……しかたなく、僕は闇に紛れて死体を近くの空き地に埋めた後、荷物をまとめてアパートを引き払いました。

これが、二回目です。

翌日、僕達はマカオへと移動しました。
香港までが、霧島さんの匂いがし出していた気がして耐えられなかったのです。
そして、マカオで僕達は家を借りました。
人気のない古ぼけた家ですが、人目を避けたい僕達にはうってつけでした。
……そこでも、霧島さんは襲ってきたのです。
僕は霧島さんを殺しました。

頭を潰して埋めたんです。

これで三度目。

それ以降、約一年、あちこちを転々と逃げ回る日々を続けました。

逃げても逃げても、霧島さんの影が、僕達を先回りしているんです。

那由他も精神的に参ってきています。

僕は思い立ちました。

僕は本当に、霧島さんを殺したのか？

もしかしたら、霧島さんは生きていて、わざと自分そっくりに整形させた者達を使って、自分を殺そうとした僕を襲わせているんじゃないか？

だってそうでしょう？

三度も殺してまだ存在している！

そんなバカな話がありますか？

ありえない！

どうして霧島さんは、――――奴はなんで死なないんですか！？

どうして奴はいつもいつも、僕達の先回りが出来るんですか！？

どうしてですか！？

ねぇ、南雲さん！

教えてくださいよ！

どうして奴は死なないんですか！？

ねぇ！

南雲さん！

第四話

「正直な話」
南雲は村上に言った。
「俺には理解すら出来ない」
「そう……ですよね」
「ああ。どこまでが真実で、どこまでが作り話か、あるいは妄想なのか」
「真実ですよ……全部」
村上は力無く笑った。
相手がそう言うのも無理もない。
そう思えてしまうから。
自分達の体験した不可思議な事態。それをすぐに受け止める者がいたら、それこそどうかしている。
「それで？」
南雲は座っていたソファーから立ち上がる。
村上に問いかける声は鋭い、漢の声だ。
「どこまで逃げるつもりだ？」
「……わかりません」
村上は小さく答えた。
「どこまで行けば、霧島さんから逃げられるのか、それがわかりま

せんし」
「そりゃそうだが……」
南雲は、不意に窓の方へと視線を向けた。
「村上君だったな？」
「え？あっ、はい」
「長髪に黒い服、頬に傷のある男……それが霧島という男なんだな？」
「そう……ですけど、あの？」
南雲は窓から視線を外さない。
まるで何かを睨み付けているように。
「？」
村上は、南雲の視線の先を見た。
窓の向こう。
そこに立っているのは――――

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！」
室内に村上の悲鳴が響き渡った。

村上の見たモノ。
窓の向こうに広がるベランダ。
そこに立っているのは、
黒い服に身を包んだ長髪の男。

村上の恐怖の対象。

彼はただ、憎悪の目で村上を睨むだけ。

村上にとってはそれで十分だ。
“存在する恐怖”
それが目の前に立っている。

それで十分なのだ。

「那由他！那由他逃げろぉっ！」
村上が部屋の奥にいるはずの那由他へ向けて叫ぶ。
それが引き金となったように、男が動いた。

どうやったのだろう。
男が手を伸ばしただけで、サッシの鍵が外され、音もなく男が室内へと入り込んできた。
音が、しない。
歩いているのに、音がしない。
完全な無音で男は南雲達へと近づいてくる。

「動くな！」
南雲の鋭い声に、男の足が止まる。
いや、声ではない。
南雲が自分に向けているモノを見たからだろう。

ＳＰＡＳ－１２軍用ショットガン。
２０世紀のショットガンの代表。「小型の大砲」と呼ばれるほどの威力を誇る。
防弾チョッキでは防げないので、アメリカの一部の州では一般販売禁止となっている曰く付きの代物。
いわば“バケモノ”。

かすっただけでも無事では済まない代物だ。

「な、南雲先生！？」
男の代わりに悲鳴に近い質問をしたのは村上だ。

「な、なんですか?それっていうか、どこに隠していたんですか!?」
「見てわからんか?散弾銃というんだ。勉強になっただろう?ついでにソファーの後ろに隠していた」
「そんなもの所持して大丈夫なんですか?」
「心配するな。合法だ」
「どう考えても信じられない!」
「俺は教職者だ。だから常に正しいことを言う」
「そんなこと言って、ぼ、僕を撃つつもりだったんですか?」
「……」
村上は、その時、何かを南雲が呟いたように見えた。
ただ、未亜がどうのこうのと聞こえたのは、聞き間違いだったかどうか自信がない。
とりあえず、
「そこで黙らないでくださいっ!」
ドンッ!!
村上はとっさに床に伏せた。
南雲はもう村上にかまっていない。
「動くなと言ったろう?」
男の真横の壁にいくつもの黒い点が出来た。
「腹這いになり、頭の上で両手をくめ!」
ガシャッ!
次弾を装填しつつ、南雲は男に怒鳴った。
「聞こえなかったのか!腹這いになり、頭の上で」
ダッ!

男が突然動いた。
この状況でナイフを抜き、村上に襲いかかろうというのだ。
「バカがっ！」
銃声が再度、室内に響き渡った。

丁度、未亜に借りていたＣＤを返そうと、未亜のマンションに向かっていた水瀬は、足を止めた。
手にはＣＤと手焼きのクッキーの入った袋が下げられている。

「あれ？」

パトカーが数台、未亜のマンションの前に止まっていた。

（何かあったのかな？）

水瀬はキャスケット帽を目深に被り直すと、パトカーの脇をすり抜けてマンションの中へ入ろうとして、
「あ、ちょっといいかな？」
その声に止められた。

聞き慣れた声。

こんな所で聞きたくない声。

水瀬は、これが悪い夢なんだと１００回唱えた後で答えた。

「なんですか？」

「君、ここの子？」

「いいえ？お友達の所に遊びにきました」
「ふうん？」
水瀬は、相手が気づかないことを祈った。
多分、いや、絶対無理だと知りながらも、それでも祈らずにはいられない。
「じゃ、この件には関わっていないと、そうシラを切るのね？水瀬君？」
勝ち誇った顔で水瀬にそう告げたのは、
理沙だ。

「お、お姉さん……何で？」
「ふふん？警察をナメないの」
理沙は、そう言って手錠を取り出し――
「はい。重要参考人確保。逮捕時刻１９５６、覚えておいてね？」

水瀬はそのままパトカーに押し込められた。
「何か、僕の基本的人権が侵害されている気がするんですが」
「君に人権なんてないわ」
「心強いお言葉で」
「でしょう？ついでに私が聞きたいのはそういうことじゃないの」
「へ？」
「マンション前の道路で何が起きたか、よ」
「どういうこと？」
理沙はコートを引っ張り出すと、水瀬にかぶせてパトカーから水瀬を降ろした。
「これ、君は知らないの？」
理沙が指さす先。
そこには、赤黒い液体がまき散らされていた。
「血？」

「そう。ここを通りかかった通行人が発見して警察に通報。で、私達が来たってワケ」
　未亜のマンションは閑静な一等地に立てられている。
　監視カメラがあったり、警備員が巡回してはいるが、普段から人通りはそれほど多くはない。
「量から見て失血死の危険性が高いねぇ……飛び降り自殺かな？でも、第三種事件絡みのお姉さん達がこんな血痕だけで何故？」
「まず第一に、死体が見つかっていない。第二に、周辺で不自然な物体が移動しているのを見つけたと通報があった」
「不自然な物体？」
「赤黒い肉の塊がスライムみたいに動いてるって」
「あ、それで」
「突然消えたって言うの。幻覚かとも思うけど、厄介だなぁ。と思ったら君がのこのこここにやって来た」
「でも、僕は無関係だからね？」
「それは私が決めるわ」
「お姉さん。決めるのは法律……」
「私が法律」
　思わず水瀬はおーっ。と手を叩いてしまった。
「さすが出世を諦めた不良官僚。言うことが違う」
「……何？」
「いえ何でも」
「もう一度、三角木馬乗りたい？ムチとロウソクがそんなによかった？」
「お姉さんのイジメっ子ぉ」
「ああ！」
　理沙はぽんっと手を叩いた。
「お姉さんそのものがよかったんだぁ」
「違うって言われたい？」
「言ったら――わかるわね？」

声のトーンを落とした理沙は、拳銃の銃口を水瀬の口の中へ突っ込んだ。
「綾乃ちゃんに証拠写真突きつけてやるからね」
「ネガ渡してよぉ……」
そう懇願する水瀬は、もう泣き出している。
「何よ」
対する理沙は不満顔だ。
「私が上になってハメ撮りしてあげたっていうのに――ちょっとは喜びなさいよ」
「お姉さん、ヒドイよぉ……」
「くすっ。冗談よ」
それ自体が冗談だろう。と水瀬は内心で突っ込みだけ入れておいた。
「とにかく、何でもいいから、事件に有益な情報があったら教えてね？」
「えっ？」
水瀬はきょとん。として理沙を見た。
「もういいの？」
「？……なんで？」
「う……ううん？」
「何か隠してる？」
「ぜ、全然」
チャカッ
理沙が再び腰のホルスターから拳銃を抜いた。
「私の質問に黙秘権なんて認めないからね」
「でもぉ……」
水瀬は困惑した顔で言った。
「どっちにしても、お姉さん達の仕事なのかわかんないことだもん」
「犯人の手がかりは？」
「知らないよぉ……」

口の中でもごもごする水瀬の態度が、理沙には気に入らない。
イヤミは言うが、必要と判断したことは教えてくれる水瀬が、何かを出し渋っている。
これが第三種事件（じぶんのしごと）だと水瀬はわかってくれているはずだ。
それが何故？
今までなら、（少し強請ってあげれば）いくらでも情報をくれたのに。
今回だけは違う。
それが、わからない。
理沙は困惑気味に、
「とどのつまり、我々警察としては、妖魔・魔族と同格に扱っていい存在なんでしょう？」
「それはそう」
「じゃ、捜査は警察の手順通りで問題ないわね？」
「銀の弾丸とか、物理的攻撃が一切効かない相手だけどね」
「……」
理沙はその言葉を理解するのに数十秒を必要とした。
「……それって、どうやって相手しろっていうの？」
「魔法騎士の攻撃、つまり、魔法やその延長線上に当たる霊刃、もしくは魔法処理が施された武器でないと無意味――魔族より少し厄介」
水瀬はうんっと。と少しだけ考えて、すぐに結論を出した。
「警察に出来ることは、さっさと帰ってくださいってお祈りするくらいだね」
「それって、何も出来ないってことじゃないの？」
「そうともいう」
「本庁にどうやって説明しろというのよぉ……」
理沙は途方に暮れた。
「ここはどうとでも誤魔化せるけどさぁ……」
「第三種事件自体がこの世界では一般的じゃないんだから、“わか

りませんでした”ってことで処理すれば？」
「それだと、また近衛に手柄持って行かれるんじゃない？」
「今の時点じゃ近衛は動かないと思うよ？」
「へ？なんで？」
「軍や警察の動員が必要としない部分は、全部民間委託しているから」
「民間委託？」
「というか、ノータッチ。ほら、ようはおがみ屋さん。胡散臭いってイメージあるでしょう？それを国家規模の組織でやるとなると、いろいろ、ね？」
「成る程ねぇ」
理沙は水瀬のアタマのてっぺんからつま先までを眺めた後、頷いた。
「あんたが言うと説得力あるわねぇ」
「……ぷぅ」
「で、近衛が動かないとなると――誰が犯人の相手するの？」
理沙は、自分を指さす水瀬の指をひねりあげた。

周囲に響き渡る水瀬の悲鳴。

水瀬の携帯が鳴ったのは、それからすぐのことだった。
「ぐすっ……電話？あれ？南雲先生からだ」
水瀬は携帯をとった。
「水瀬です」
『水瀬か？下にいるな？』
「よくわかりましたね」
『悲鳴が上まで聞こえた。お前、なんて悲鳴あげるんだ』
「わざとですけど……そんなに聞こえよかったですか？」
『離れて撮影してたテレビが事件だって、そっちへ向かっているはずだ。すぐそこを離れろ』

「すぐに連絡してくれればよかったのに」
水瀬は言われるままに歩き初め、理沙に首根っこを掴まれた。
事件の捜査のためだろう。
開放されたエントランスの自動ドアは開かれていた。
「お姉さん、せめてエントランスまで。帝国ホテルでディナーおごるから」
途端に、水瀬は理沙に抱きかかえられてマンションのエントランスまで入るなり、ベンチの上で理沙の膝の上にのせられた。
「お待たせしました」
携帯越しに南雲は答えた。
『そうもいかない。まだこっちは警戒中だ』
「警戒中？」
『敵に部屋まで侵入された。あいつらに鍵は効かない。このままでは村上君達が危険だ。別な場所へ移る。落ち着いたら連絡する。それまで警察の目を引きつけてくれ』
「村上君？誰かを保護しているんですか？」
「ああ……そうだ」
「保護対象が襲われたというのですね？ちなみに、どこへ移るんです？」
ちらりと理沙を見る。
理沙にも聞こえているのはわかっている。
理沙にはいずれ協力してもらうこともあるだろうから水瀬は理沙から離れようとしなかった。
『どこか、ホテルか旅館にでも』
「だめです」
水瀬は言った。
「そんな所に行くなら、ウチの方がいいです。理由はわかりますね？」
『しかし』
「後のことはウチで話し合いましょう。それからでも遅くないはず

です。それから、ルシフェをこっちへ向けてください。護衛は必要でしょう？」
『わ、わかった。頼む』
「了解です」

「終わった？」
携帯の通話内容は大変興味深いものだが、しかし、それを盗み聞きするのは理沙の主義（趣味）に反した。
勝手に聞こえたんだからしかたない。
聞こえたのはあくまで水瀬君の責任だ。
理沙はそう結論づけた。
「うん」
そう答えた水瀬は、
「えっと……メールってこうやって……」
不器用そうな手つきでメールを始めた。
「それで？この事件についてのお姉さんの考えは？」
「信楽房江所有のマンションに侵入した者……いえ、妖魔に近い人間がベランダから逃走、その際に何らかの理由で落下した」
「よくお分かりで……未亜ちゃんへの事情聴取は？」
「信楽房江は政界に官界にもパイプが太くてね」
理沙は笑ってそう言うが、その顔はどこか自嘲気味だ。
「当然、ウチのお偉いさん達もそう。下手に関わると首が飛ぶわ」
事は荒立てることは出来ない。
そういうのだ。
理沙達の今回の仕事は、事を大きくする前に始末する、いわゆる“火消し”の性格が強いのだろう。
水瀬はそう判断した。
「ねぇ。お姉さんはどう始末つけるつもりなの？この件」
「そうね……不審者がマンション屋上から飛び降り自殺した模様。死体が発見できない点は、発見者が何らかの理由で死体をいずこか

へ運び去った――そんなところか」
「第三種事件としては公表しない？」
「出来ること？」
水瀬はその問いに答えることは出来なかった。

第五話

それから1時間後、警察やマスコミの撤収に合わせる形で、マンションの地下駐車場から一台の軍用車両が走り出た。
帝国軍御用達の和製ハマー、メガクルーザーだ。
「先生、本当に大丈夫？」
運転するのは南雲。助手席には未亜、後席には村上と那由他にルシフェルの姿があった。
「何がだ？」
「これ、どこから手に入れたのかってこと」
「長野で拾ってきた」
「それって、戦争で一時的に放置されていたとか、そういうんじゃなくて？」
「安心しろ」
南雲はきっぱりといいきった。
「車体もエンジンも全部、知り合いの業者に頼んで変更（ぎぞう）済みだ」
「やっぱり盗難車じゃん……」
「血税の還元といえ。乗り慣れてるから、こういうのがいいんだが……イヤか？」
「先生が運転するなら文句はないけどぉ」
（それが教師のすることか）
未亜は口を尖らせてその言葉を飲み込んだ。
本当に、この男は外見以上にワイルドというより、むしろアバウトだ。
恐らく、いや。絶対にこのオトコに自分のしていることが犯罪だという自覚はない。
未亜は南雲の横顔を見つめがら小さく呟いた。
本当に私、なんてオトコを好きになっちゃったんだろう。
でも……でもね？

シフトを掴む南雲の手を掴む。
暖かい。
この温かさが、今は何より愛おしい。
その南雲は、未亜の言葉に口元をほころばせている。
「あのぉ……お楽しみの所申し訳ないのですが」
後席に座ったルシフェルは、背後の荷室で山積みになった荷物から転がり出た手榴弾を手にしたままだ。
「なんだ？ルシフェル」
「一体全体、何がどうなったのか、教えてもらえませんか？」
「水瀬から何も聞いていないのか？」
「はい。ただ、人手が足りないから南雲先生の所へ行けって」
「成る程？あいつらしい。説明するのを面倒くさがったか、すっかり忘れていたか」
「両方です。絶っ対」
ルシフェルは即答した。
ルシフェルにとって、水瀬とは、そういう子だ。

「ルシフェル、こういうことだ」
南雲は事務的に説明した。

本日１５５４時頃、信楽未亜のマンションのベランダに不審な人物が突如出現。不可思議な力でサッシの鍵を開け、室内へ侵入。こちらの威嚇・警告に反応することなく刃物による攻撃を開始した。こちらは散弾銃で応戦。不審者は左腕に重傷を負い、そのままベランダから逃走。以降の足取りは不明。

「騎士、ですか？」
「動きは一般人のそれだ。だが、左腕の肘から先を吹き飛ばされて痛みを感じていない様子だったのが気になる。何より」
南雲はミラーで背後に座る村上を見た。

その顔はマンションを出る前から蒼白なままだ。
「放置されていた腕が――――消えた」
「消えた？」
「ああ。気が付いたらふっと煙になったみたいに。しかも、逃走したのは地上数十メートルの高層マンションの最上階。そこから飛び降りてだ。一般人に出来ることではない。そして、地上にも血痕だけを残して、こちらもドロンだ」
「何の手品ですか？それ」
「信じられないな？」
「当然です」
「俺もだよ」
南雲はステアリングを操作しながらルシフェルに言った。
「とりあえず、水瀬の家に村上達を預ける。水瀬に言わせれば、下手なところに泊めるより安全、なんだそうだ」
「そうですか……」
ルシフェルはちらりと横に座っている二人を見た。
暗い顔をしているせいか、それとも初めからそうなのか、とにかく自分達よりかなり年上の印象を受ける村上という男と、モデルで通りそうな、美しい顔立ちの少女の組み合わせ。
絵的にはいいと思う。
ただ、この二人の背後に、得体の知れない何かがいるようで、ルシフェルは正直、全く気乗りしない。

水瀬君のせいだ。
ルシフェルは内心でそう毒づいた。
水瀬君がまた災難の種を拾ってきたんだ。
大体、こんなカワイイ女の子と同じ屋根の下暮らすなんて瀬戸さんに知れたらどうなるか、わかりきっていることだ。
まったく、学習能力はないし、周囲の迷惑を考えもしないんだから……。

やっぱり、姉である私がしっかりしないとダメだ。
そう考えるルシフェルは、シートに体を預けながら、とりあえず家から非難させる貴重品のリストを頭の中で考え始めた。

「へぇ？」
お茶と茶菓子を出しながら水瀬は感心したように南雲の話を聞いた。
「本当に、生きた心地がしません」
たまりかねたように言うのは村上だ。
「突然、命は狙われる。耳元で散弾銃を撃たれる……散々です」
「散弾銃で散々……」
「くだらないこと考えない」
ルシフェルが水瀬の脳天にチョップで突っ込みを入れる。
「それにしても先生、散弾銃って、高いんでしょう？」
「拾いモンだ」
「やっぱり非合法じゃないですかぁ！」
村上がたまりかねたように叫んだが、
「何を言う。遺失物は1年で取得者のものだ。なら問題有るまい」
南雲はあっさりとそう答えるに留めた。
「――ちなみに、どちらで拾ったんです？」
「ヤクザの組事務所を襲撃したときのエモノだ」
「それ、拾ったっていわない！絶対言わない！」
「クソ溜まりに転がっていた。だから、拾いモンだ」
「スゴイ理屈だねぇ……今度、やってみようかなぁ。トカレフとかクスリとか、横流しすればいいお金になるモンねぇ……そうそう。村上さんだっけ？」
「えっ？……ええ」
「だからって、ここで懐のエモノは使わないでね？」
「！！」
村上が驚愕の目で水瀬を見るが、水瀬自身は平然としたものだ。

「入手ルートは聞かないから」
「……どうも」
村上が懐から取り出したモノ。
それは、拳銃だった。

「成る程？」
南雲が大きな手で茶碗を鷲掴みにして言う。
梅寿司と書かれた湯飲みも、南雲の手に入るとおちょこのようだ。
「魔法騎士であるお前達はともかく、単なる騎士である俺……それにおまけで村上君。武器弾薬はそこそこあるが……敵を止められるかな？」
「武器弾薬を持つ教師って……普通、いないよねぇ……」
「うん。いない」
水瀬とルシフェルは、ちらりと部屋の一角に積み上げられた箱や袋の山を見た。
「自動小銃に散弾銃に手榴弾……Ｃ４と拳銃に軽機関銃？」
「そんなところだ」
満足げに微笑む南雲。
「ここまで武装した教師って、世界でも先生だけだよ」
「ふっ……そんなに褒めるな」
「銃刀法違反って、懲役何年だっけ？ルシフェ」
「通報すれば結果が出るけど、懲戒免職が先」
「お前等……教師に対してだなぁ」
南雲は教え子達の当然といえば当然、薄情と言えば薄情な言葉に噛みついた。
「これはいわば、今回の事件に必要なものだ！」
「それ以前から持っていたクセに」
「先生、絶対これ、趣味ですよね？」
「必要悪だ」

南雲はそっぽを向きながら言った。
「いいだろ？別に……問題は、人手だ」
それは水瀬達にもわかる。
「うん。明日からルシフェは綾乃ちゃんの護衛当番だし。僕もどうなるかわからない。基本的に葉月市にいられる人材がいないに等しいもん。村上さんに霧島さん、そして未亜ちゃんの護衛……どう見ても、あと3人は必要」
「ああ。村上君はどうでもいいが、霧島さんのことを考えると、女性があと最低1人」
「南雲先生……あの、僕も保護していただけるのでは？」
「知らん。男なら自力で乗り越えろ」
「あの――僕、何かしましたか？」
村上のすがりつくような目を冷たくあしらう南雲。
「俺は男として、当然のことを言っただけだが？」
「ルシフェ、近衛から応援は頼めないの？」
「まず無理。近衛がこの件を事件として認めるかすらわかんないもの」
「成る程ねぇ……となると」
「何か、手があるのか？」
「そろそろ6時。選抜試験が始まります。その結果を見て考えましょう」
「6時？選抜試験？」
南雲は壁の時計を見た。
古ぼけた壁時計が6時を告げる所だった。

「水瀬？」

なにを？と、南雲が言いかけた途端、

ズンッ！

ギィンッ！

爆発音と剣の音が部屋を揺らす。

戦闘音であることは間違いない。

「うーん。やっぱり、普請がダメなんだよねぇ……柱が細いんだよなぁ」

思わず腰を浮かせたルシフェを座らせた水瀬がのんきに茶を飲みながら呟く。

「やっぱり、作り直させよう。間取りも気に入らないし」

「水瀬？」

「水瀬君？」

「……そろそろ、終わったかな？」

水瀬は懐からストップウォッチを取り出してボタンを押す。

「３５秒……厳しいけど、合格にしてあげるか。本当なら２０秒切って当たり前だけど」

水瀬は玄関へと歩き出した。

チャイムと同時に開いたドア。

その向こうにいたのは、

「いらっしゃい。福井先生」

と、羽山君に博雅君。

そのセリフを水瀬は言えなかった。

先生。と言った途端に、水瀬の顔に拳がめり込んでいたからだ。

殴ったのは、福井かなめだ。

「水瀬ぇ……」

まるで川中島か関ヶ原にでも行ったようなボロボロのコートをまとったかなめが、煤と泥で汚れた顔の中で光る血走った目で水瀬の

胸ぐらを掴みあげた。
「これは何だ!?」
かなめの手にあったのは携帯だ。
画面に表示されたメールにはこう書かれていた。

「福井かなめ様　日頃の無聊をお慰めする機会を設けました。お手数ですが、本日午後6時、月ヶ瀬神社までお越し下さいませ。なお、霊刃等の武装のご準備の程、よろしくお願い申し上げます。　あなたのカワイイ生徒　水瀬悠理より」

「大体、貴様のどこがカワイイ生徒だ!?」
「い、言いたいことはわかったでしょう?」
水瀬は、何を怒っているかわからない。という顔で困惑しながら言った。
「羽山君達のスタンブレードだって、かなり前に魔法処理しておいたし」
「あれがヒマ潰しだというのか!?」
かなめは怒鳴った。
「突然、ワケもわからずにあんなバケモノに襲われる身にもなって見ろ!」
「そうだ!」
そう怒鳴ったのは博雅だ。
「ヒマ潰しといって、あんなバケモノ共と俺達を戦わせるとはどういう了見だ!?」
「ケガしてないようだね。よかったよかった……うんっとね?テストだよ。みんながああいうのにどれだけ戦えるのかって」
「つまり」
かなめは怒りを抑えるように咳払いした。

「我々を試した。そういうのか？」
「そういうこと」
「――――ほう？」
かなめ達の目が危険に光った。
「教師を試すとはいい度胸だ！水瀬、今すぐ校庭１００周してこい！」
「だめ。時間ない」
「何がだ！」
「あー。福井先生」
遂に霊刃を抜いたかなめに声をかけたのは、怒鳴り声に誘われるように玄関に来た南雲だった。
「事情は私から話しましょう」
「南雲先生。その前に」
かなめが南雲の言葉を遮った。
「はい？」
「水瀬の性格を矯正する。――――秋篠、羽山」
「はい（×２）」
博雅と羽山が直立不動の姿勢でかなめに答える。
「あ、あの？二人とも？そんな指ポキポキさせて……どうしたの？」
水瀬はいやな予感にかられ、２、３歩後ずさろうとしてかなめに止められた。
「このバカモノを簀巻きにして運河に投げ込んでこい――――特別に許す」
「はい！（×２）」
「わーんっ！暴力教師に暴力生徒ぉ！」
「では、南雲先生。話を聞こうか」
「ええ。実は」
「止めてぇ！」
「羽山」
かなめは、どこからか警棒のようなものを取り出し、羽山に手渡

した。
「スタンガンだ。改造して３００万ボルト以上出るようにしてある。これで黙らせろ」
「死ぬ！それ死ぬっ！」
「わかりました」
「羽山君っ！友達でしょう！？」
「友達？」
羽山は怪訝そうな顔で言った。
「何語だ？そりゃ」

「うっわーっ」
結局、泣いて頼んで猿ぐつわにしてもらった挙げ句、簀巻きになった水瀬が羽山達と共に玄関から消えていった。
その一部始終を見ていた未亜があきれ顔で、
「綾乃ちゃん級（クラス）のことするなぁ。さすが、かなめちゃん」
「お知り合い？」
そう訊ねる那由他は、当然、かなめ達の顔を知らない。
「うん」
未亜は答えた。
「学校の先生。福井かなめちゃん」
「かなめ……ちゃん？」
「愛称。厳しいけどね？あれで結構、いいトコあるんだよ？」
「へぇ？」
那由他は興味深そうにかなめを見る。
「綺麗な人ですね」
「うん。でもね？騎士だし、性格軍隊だからオトコが近づかない近づかない……」
「クスッ。女の子としては憧れるタイプですね」
「ガッコが女子校ならかなりの人気先生になったろうね」

「学校じゃ、人気、ないんですか？」
「うーん。あるといえばあるけど、何しろスパルタだから敬遠されてるかな？最近は生徒も慣れたから、以前ほどでもないけどさ」
「ふぅん？」
「まるで綾乃ちゃんみたいなところが……」
「綾乃？」
「那由他ちゃん、知ってるでしょう？瀬戸綾乃ちゃん」
「え？……ええ！あの子、元気ですか？」
「アイドルデビューして引っ張りだこだよ？残念だねぇ。那由他ちゃんと同時デビューの予定だったのに」
「……仕方ないです」
那由他は寂しそうに小さく笑った。
「運命ですから」
「……遅くないから、今からでもやってみない？この事件終わったら」
「……」
未亜のその言葉に、那由他は嬉しそうな、悲しそうな、複雑な微笑みを浮かべるだけだった。

「さて」
かなめが家に上がり、羽山達が戻ってきた。
「水瀬も今頃、魚相手に反省してる頃だろう」
懐に石を入れるの忘れてた。と羽山がしきりに残念がる側で、未亜は携帯を取り出した。
那由他は用事があるといって部屋に戻ったきりだ。
時間は7時を回っている。
「そろそろ、綾乃ちゃんに定時連絡の時間だねぇ」
何をネタにしよう。
とりあえず、水瀬君が簀巻きにされたことは報告しておこう。

それと、那由他ちゃんのことは欠かせない。
きっと喜ぶだろう。
だって。私も嬉しかった。
那由他ちゃんが元気だったんだもの！
さて……。
未亜は言葉を選びながら携帯のキーを押し始めた。

同じ頃、

「那由他？僕だよ？」

那由他に割り当てられた部屋の前で襖を叩くのは村上だ。

返事がない。

物音一つしない。

「那由他？」

嫌な胸騒ぎがする。

「那由他？――入るよ？」

村上が襖を開けた。

「那由他？」

6畳の部屋。
人気はない。
ただ、開かれた窓から入る風に、カーテンが揺れているだけ――

—。

那由他が、消えた。

第六話

「えっと……綾乃ちゃんへ。今日はびっくりするようなことがあったよ？写真の子わかる？今、水瀬君の家に厄介になっているんだけど、とっても大切な」

未亜がどうやって那由他との再開を綾乃に知らせようか迷いながら携帯メールを打っている最中、

「先生！」

村上が血相を変えて部屋に飛び込んできた。

「な、那由他が」

「ど、どうした？」

ちゃぶ台の回りに座ってかなめ達に事情を説明していた南雲は、湯飲みに伸びた手を止めた。

村上の顔色はもう真っ青だ。

「那由他がいないんです！」

「何っ！？」

南雲達は武器を手に慌てて立ち上がり、那由他の部屋へと向かった。

「トイレは？」

「秋篠――いや、お前じゃ彼女の貞操が逆に危険だ。私が行く！」

「南雲先生、福井先生のアレは、どういう意味でしょうか？」

「俺の方が聞きたいが……秋篠、羽山と一緒に裏庭周辺を探せ。やばいと思ったら逃げてかまわん」

「了解です」

「未亜」

「な、何？」

未亜は携帯を握りしめたまま、南雲の言葉を待った。

「この部屋に入っていろ。結界が張られているから心配いらない」

「う、うん。わかった」

「俺達も探すぞ？村上君、俺についてこい」
「は、はい！」

結局――
１０分近い捜索の末、わかったことと言えば、那由他の姿は水瀬の家から消えた。
ただそれだけだ。

「裏口の鍵が、内側から開いていました」
博雅がそう報告した。
「彼女の仕業、そう判断すべきだな？」
かなめが難しい顔で訊ね、
博雅はそれを無言で肯定した。
「でも、何故？」
未亜の疑問はもっともだ。
「那由他ちゃんは、村上先輩と一緒に逃げていたんでしょう？それなのに、なんでここに来て村上先輩から離れるの？」
「信楽、部屋に書き置きのようなものはなかったのか？」
「文机の引き出しも調べたけど、どこにも」
「ふむ……敵に捕まったか？いや。それにしては妙だな」
「つーか、自分で外に出たんじゃないっすか？」
「羽山、それはどういうことだ？」
「つまり、事件解決の手がかりを思い出したとか。大体、俺にはわかんないんですよ。……えっと、村上さんッスよね？」
「え？ええ」
「大体の話は南雲先生から聞きましたけど……なんで、今になって葉月に戻ってきたんですか？」
「それは」
村上が言いづらそうに言いよどみ、全員の視線が村上に注がれる。

「……那由他の希望なんです」
「那由他ちゃんの？」
「そうです」
村上は驚く未亜をちらりと見て、
「突然、那由他が言い出したんです。確かめたいって」
「確かめる？」
「ええ。御爺様、霧島さんが、本当に死んでいたのか。もしかしたら、私達が死んでいると思いこんでいただけで、実は生きていたのではないかって」
「しかし」
「海外にいた僕達にとって、それは確かめようのないことです。那由他はそれを確かめることで突破口を見いだそう。そういいたかったんだと思います」
「成る程？それで？」
「図書館で古い新聞の記事を探して、霧島さんがやっぱり死んでいたことを見つけました。それでも、どういうわけか、那由他は楽観視していて。記事そのものがウソだって言い張って」
「那由他さん、何か知っているのか？」
「僕も同じ事を聞きました。ただ、御爺様が死んでいたら、誰が私達を襲っているんだ？っていうのが、彼女の言い分で」
かなめは少し考えた後で言った。
「その人物のことは後で調べるとして、とりあえずは那由他さんの身柄の確保が優先だ。周囲も捜索してみよう。羽山と秋篠、私、それと水瀬にルシフェルで手分けして周囲を。村上さんと南雲先生は信楽の護衛としてこの家に……おい、水瀬達はどこだ？」
「水瀬はさっき簀巻きにして」
「全く！肝心な時に役に立たないんだから！」
かなめの憤慨は人としてどうかと思うが、人手が足りていないことを否定することは出来ない。
「とりあえず、動ける人数で動く。秋篠、羽山、出るぞ？」

「了解」
「わかりました」
羽山達が腰を上げた途端、
「あれ？」
居間に入ってきたのは、エプロン姿にお盆を持ったルシフェルだ。
普通ならそれだけで惚れ直しまくる秋篠ですら、ルシフェルの登場には白い目を向けてしまう。
「どうしたの？」
「いや。どうしたもこうしたも」
唖然とした秋篠には上手く説明できない。
「ナナリ？」かなめも、信じられないという顔だ。
「はい？」ルシフェルはちゃぶ台にお盆の料理を並べていく。
「お前、今まで何していた？」
「お夕飯の準備ですけど？」
メニューは魚の煮付けらしい。
「魚料理は火加減が肝心ですから、ずっと台所にいました。どうしたのですか？」
かなめは美味そうな湯気を立てる料理を前に言った。
「お前はスゴイって、そう言いたかっただけだ」

その頃、那由他は商店街の裏路地にいた。
玄関からこっそり持ち出してきたサンダル履きの那由他は、ずっと町中を歩いていた。

今の彼女に目的地はない。
――いや、違う。
彼女こそが、目的地だ。

誰にとって？
敵にとって、敵とされる祖父にとって、だ。

那由他が水瀬の家を抜け出し、そして歩き続ける理由は、自分を見つけてもらうこと。
それだけ。

死にたくはない。
危険なのは十分わかっているつもりだ。
ただ、祖父と接触することで全てが終わらせる。

祖父を問いただして、説得して、
そして元の生活に戻る。

そうしたいだけ。

祖父が那由他の言葉を受け入れるという根拠はあるのか？
そう聞かれれば、なにもない。
那由他が、根拠もなくそう思いこんでいる。
そうも言える程度のこと。
それが、今の那由他にとって唯一の希望の光なのだ。

その希望の光と共に、那由他は歩き出した。

商店街を抜けて運河公園を通りかかる。

昼間はにぎやかな公園だが、夜になれば人気はない。

木々が放つ夜の空気が、冷たい針のように那由他の肌に突き刺さる。

一枚、何か持ってくれれば良かったかしら。
そう思う那由他が身を震わせた時だ。

ガサッ

那由他の背後で葉の踏まれる音がした。

「？」

振り返った那由他は、その光景に息を止めた。

それは、

「お、御爺……様？」

焦点の合わない瞳で、ただぼんやりと立つのは、

「御爺様！？」

那由他の祖父だった。

「御爺様！」

両親を亡くした後、この世に残ったたった一人の身内。
その出現に思わず駆け出そうとした那由他は、つんのめるようにして足を止めた。

「お、御爺様？」

祖父の手に光る物を見たからだ。
祖父はナイフを握りしめていた。
それが何を意味するか？
那由他は、経験でわかっていた。
「な、何故です！？」
震える声で那由他は叫んだ。
村上はいない。
自分の身は、自分で守るしかない。
「何故、こんなことをするんです！？何故、黙っているんですか！？言いたいことがあれば言えばいいじゃないですか！」
「……」
祖父は、孫娘の言葉に答えない。
ただ、ナイフをもったまま、那由他へと歩き出す。
月明かりに照らされる祖父の手にはナイフが光る。
「そ、そんなに」
祖父が1歩近づくたびに那由他は1歩下がる。
砂利にサンダルがとられそうになるが、なんとか踏みとどまる。
転んだら、終わりだ。
「そんなに、私達が憎いんですか！？あの時だって、私達を殺そう

としたのは、御爺様の方だったじゃないですか！」

「……」

「何とか言ったらどうなんですか！？御爺様！」

ブンッ！

返事の代わりは、ナイフの一閃。

「きゃっ！？」

かろうじてかわした那由他は走り出した。

走りながら、那由他は理解し、そして自らを呪った。

祖父は、自分を取り戻すことなんて考えていない。

私達を殺すことだけを考えているんだ！

祖父にとって、終わりは私達が死ぬこと。

それだけだ！

私は、なんてバカなんだろう！

速人さんから離れ、

自分から助かる手段を断って、

こうやって逃げ回るなんて！

馬鹿！

私はなんて馬鹿だ！

祖父から逃げる那由他は、林の中を抜け、そして――

「！？」

行く手を柵に止められた。

柵の向こうは漆黒の闇。

この世の終わりといわんばかりに立ちふさがる柵。

那由他は逃げ場を奪われた。

柵の向こうで小さい光の反射が見え、その間を何か大きなゴミが流れていく。

間違いなく、運河だ。

後ろにはナイフを持った祖父が近づいてくる。

那由他が横に逃げ出そうと動いた途端、

ズルッ

「きゃっ！？」

那由他は何かに足を取られて転倒した。

暗闇でわからなかったが、どうやらベンチがあったらしい。

それに那由他は躓いたのだ。

全身が痛む中、それでも那由他は逃げようとしたが――

「ヒッ」

思わず振り返った光景に、那由他は息を止めた。

そこには、自分にナイフを突き出そうとする祖父の姿があった。

モウ、ニゲラレナイ。

脳裏でそんな言葉が何度も反転する。

モウ、オワリダ。

そうだろう。

那由他は、自分に突き出されるナイフの動きが、妙に緩慢にすら思えた。

結局、祖父が話を聞いてくれるなんて、自分の思い上がりでしかなかったんだ。

日本に来る時、速人さんは散々反対した。

速人さんはあり得ないと反対したんだ。

私のために。

それを押し切ったのは私。
すべてを台無しにしたのは、私。
その私が、今、責任の支払を求められている。

責任？

そう。
責任。
速人さんの努力を無にした責任。

それを、とるんだ……。

那由他は目を閉じ、最後の時を待った。

だが――

ガンッ！！

那由他の耳に、妙に鈍い音が届いた。
「？」
いつまでたっても痛みが来ない。
恐る恐る開いた那由他の目に映るのは、デカデカと描かれた「４０」の文字。

「――えっ？」

それが道路標識だと気づいた那由他の耳に、まるで地獄の底からはい上がってきたかのような、恐ろしくドスの効いたオンナの声が聞こえた。

「このオンナは、私のエモノです」

第七話

「この子は私のエモノです」

いつの間にか、ストレートのロングヘアーの少女が横に立っていた。

年の頃は自分と変わらないだろう。

普通、こういう時に現れるのは通りすがりの正義の味方と相場が決まっている。

それなのに……。

那由他は、その少女の顔をちらと見ただけで意識が遠のいた。

どんなホラー映画でもトップを張れる。

そう表さざるを得ないほど、怒りの形相に歪む少女の顔は恐ろしい。

こんな顔、マトモに見ることが出来たらおかしいとか、

こんなに怒るとシワになるとか、

この人、お肌の老化、早いだろうなぁ。とか、那由他は恐怖におののきながら結論を出した。

この人は、正義の味方から一番遠い人だ、と。

「あなたが誰か、知りたくもありません。とっとと消えてください」

絶対、トラウマになるほどの恐怖を音にしたような少女の声に反応したように、那由他の祖父が動いた。

「……そんなに、死にたいのですか？」

ギィンッ！

少女は、目にもとまらぬスピードで那由他の心臓を狙うナイフを道路標識のポールで弾き、

「せいっ！」

道路標識を、人の脳天めがけてためらいもなく振り下ろした。

ズシャッ！

鈍いイヤな音が周囲に響く。

「ヒッ！？」

自分の血縁が生きたまま真っ二つにされ、その切り口からは、血まみれの臓器がこぼれ落ちる。

それは、那由他のような少女の耐えられる光景ではなかった。

地面に飛び散る人間の残骸。

鉄分を含んだ匂い――血の臭いが辺りの空気を支配する。

「余計なことした罰です」

相手が絶命したことを確かめたように、少女は道路標識を掴んだ

まま、
「全く、馬鹿なことをしたものです」
そう、冷たく言い放った。
「大人しくしてくれれば、畳の上でのたれ死に出来たかもしれないというのに」
再度、道路標識を掴んだ少女は、道路標識を那由他の祖父の体の半分に突き刺し、無造作に運河へと投げ込んだ。
「ゴミとはいえ、元は人……母なる海の胎内へ戻りなさい」
もう半身を同様に海へ投げ込む。
「こんなゴミの血なんて……海洋汚染ですわ」
ポイッ
道路標識を投げ込んでから、地面の血痕の上に砂をかけてカモフラージュして終わり。
人一人を殺したという罪悪感は微塵も感じさせない。
「さて」
少女は那由他を見た。
いつの間にか、地面に倒れ伏している。
「気絶しましたか？――全く」
靴のつま先で頭をつつくが反応しない。
完全に気絶している証拠のようなものだ。
「仕方ありませんけど……何ですか？この女、この私に自分を担げとでも言うのですか？許せません」
いいつつ、少女は那由他の首根っこを掴み、暗闇に消えた。

どれくらい時間が経ったのかわからない。
全身の痛みで那由他は目を覚ました。
「んっ？」
体が動かない。
目が見えない。

喋ることが出来ない。

体を動かそうとしてもがけばもがくほど、体の自由が奪われていく。

「ん〝ーっ！ん〝ーっ！」

それでも那由他は暴れた。

すると

「目が覚めたようですね」

冷たい女の声が耳に入った。

「まず、感謝なさい」

その声色は決して自分を歓迎していない。

「ここまで運んできたのは私です。このご恩……六道を１００億回輪廻しても忘れることは許しません。わかりましたね？」

この人、何言ってるの？

那由他にはその言葉の意味がわからなかった。

わかること。

それは、どうやら自分が目隠しをされ、口に何かを詰め込まれていること。

そして、縛られているらしいこと。
それだけだ。
「わかったか？そう聞いたのですが？」
ヒュンッ――ビシッ！
甲高い乾いた音が耳の中で響く。
何か武器でも取りだしたらしい。
そんなものは使われたくない。
痛いのはイヤだ。
「最後の質問です。――わかったのですか！？」
那由他は無言で何度も頷いた。
「よろしい。理解の低さは、数少ない余生を削ってしまいますよ？」
コクコク
那由他は必死に頷くだけだ。
「では、これからいろいろと聞きますが、その正直さを失わないように」
コクコク
どういうことだろう？
那由他は思った。
祖父から逃げられたと思ったら、祖父より厄介な相手に捕まって

しまうとは。

「でないと、あなたが気絶中に撮影した恥ずかしい写真を、インターネットに公表します。そのみっともない半裸緊縄をたっぷり撮影した写真……高く評価されるでしょうね」

“きんばくはんら”という言葉の意味がわからないが、恥ずかしい写真というのは許して欲しい。私はまだお嫁入り前だ。

……嫁に行ったらいいのか？という問題でもないが。

気分の問題だ。

「それで答えなければ、軍隊流の拷問が待っています。爪の間につまようじを差し込むとか、アイロンで足の裏を焼くとか……キキますよ？」

ん〝ーっ！

ん〝ーっ！

那由他は動かない体で暴れた。

そんなの、冗談じゃない！

ヒュンッ――ビシッ！

再び耳に届いた甲高い音に、那由他は動きを止めた。

「誰が叫べといったのです？」

女の声は明らかにいらついている。

「あなたは息をする時ですら私の許可が必要なのです。まず、そこをわからせましょうか」

那由他は泣きながら首を精一杯横に振った。

「では、誠意ある回答をなさい」

コクコク

「……」

チッ。

舌打ちが聞こえ、那由他の口から何かが取り出された。

「まず、悠理君との関係について聞きましょう」

「ゲホッ……ゆ、悠理君？」

ビシッ！

那由他はの背中に激痛が走った。

「っ！！」

「次はこんなものじゃないですよ！？さぁ！」

「し、知らない……悠理君って誰？私、そんな人知らない！」

「とぼけるとは――いい度胸です！」

グイッ

無造作に指を掴まれ、那由他の全身から血の気が引いた。

「だ、だって！」

那由他は指に力を込めるが、女の力にまるっきり抵抗出来ない。

その那由他の耳を女の罵声じみた声が打つ。
「悠理君といえば悠理君です！あなた、悠理君の家に入り込んで、何していたんです！？悠理君と何ラウンド相手したのですか！？私ですらまだなのに！この泥棒猫っ！」
「？……えっ？……ま、待って！」
那由他は叫んだ。
「お願いだから待って！」
「待てと言われて待つほど私は馬鹿ではありません！――――さぁ。特製の竹串を」
「私、水瀬さんって女の子の家に厄介になったのは認めます！でも、悠理君って人と出会ったことはありません！本当です！信じて下さい！！」
「……待ちなさい」
女が指を掴む力を緩めた。
「どうやら、何かあなたの方に思い違いがあるようですね」
「あの……それは私じゃなくて、あなたの方」
「三角木馬に乗って遊びましょうか？」
女がそう行った途端、那由他は自分の体が宙に浮かんだことに気づいた。
「きゃーっ！待って、待ってくださぁい！」
「ビデオで撮影して、裏ルートで高く捌いてあげます」
「本当です！私、未亜ちゃんの家にお世話になって、その後、水瀬さんって女の子の家を一緒に訪ねたばっかりなんです！」
「未亜ちゃんの？ということは、南雲先生も」
「そうです！」
「成る程……南雲先生と未亜ちゃん、ついに女衒（ぜげん）にまで手を」
「違うっていってるじゃない！――――痛ぁぁぁぁいっ！！」
那由他は不自由な体をよじらせて、股間に襲い来る痛みに耐える。
「そんなに喜んでいただいて恐縮です。では、ムチも与えてあげましょう」

「いやぁぁぁっ！気持ちいいっ！ダメ！そんなムチじゃイヤぁ！」
「――冗談なのですが……あなた、どういう趣味してるんですか？」
「速人さんに開発されて……だめぇ！もっとぉ！もっとぶってぇ！ヒドイことしてぇ！」
「……」
那由他は自分の体が再度、宙に浮いたのを感じ、叫んだ。
「いやぁ！まだなのにぃ！――宙づりも大好きだけどぉ（はぁと）」
「黙りなさいこの変態病人が！こ、怖いじゃないですか！」
どうやら、ヘンなスイッチが入ったらしい那由他の叫びに、女は引き気味に言った。
「ここはあなたの趣味を満足させる場ではありません！わ、私の」
「いやぁ！変態でも病人でもいいからぁ！」
次の瞬間、那由他は顔面に水をぶっかけられた。
「一度、死んだ方が良さそうですね」
「で、でもぉ……」
「何です？」
「木馬の角度が絶妙だったんですぅ……それに、さっきのムチ裁き、その言葉責め……あなた……いえ、あなた様はきっと素敵な女王様でいらっしゃる。それがわかりました」
「どうあっても死にたいらしいですね」
「いやぁ！死ぬほど狂わせてぇ！」
一人でヘンな感じで盛り上がる那由他に、女は精一杯の迫力ある声で言った。

「……わかりました」
「お願いします女王様ぁ！」
「……とりあえず、名前を聞きましょう？」
「え？どんな言葉責めですか？」
「ふ、ふざけないで答えなさい！」
「ああっ。女王様のご機嫌をそこねるなんて、私ったら！」
「壊れるなら一人でやってください。事態の収拾がつかないじゃないですか！」
女は数回、ムチを振り下ろして黙らせようとするが、逆に火に油を注いだらしい。
「はぁ……はぁ……」
感極まったといわんばかりに、那由他が熱い息を吐く。
「いっちゃいましたぁ……」
「一般部門に公表できないセリフは禁止です！……そ、そんなにきもちいいんですか？」
「はいっ！最高ですっ♪」
「こ、今度、悠理君にやってもらおうかしら。……と、とりあえず」
女は咳払いしてから言った。
「名前を言いなさい」
「な、名前ですね？ポチとでもタマとでも。お好きなように」
「……あなたのお墓に刻む名前です。戸籍上の名前を言いなさい」
「し、失礼いたしました。女王様。私は、霧島那由他と申します」
「……え？」
「はい？」
「ここまで来るのにエライことを経験しましたが……霧島那由他？」
「はい」
「一昨年の４月までアーカム・スタジオの新人講習にいた、あの霧島那由他？」
「は、はい」
「……」

突然、女が沈黙した。
「あの？」
「ま、まずいです」
女は、明らかな狼狽まじりの声で言った。
「な、なんで那由ちゃんがこんなところへ」
「じ、女王様？」
「いいです」
「では！」
「これは夢です」
「夢見心地でイカせてくださいね！？」
「――目が覚めたら全てが夢です。いいですね？」
「はいっ！」
那由他は次の快楽を待ち望むが、
「んっ！？」
口元を塞がれた途端、全身の力が抜け、そして意識が遠のいていくのを感じた。
「……ごめんね？那由ちゃん」
申し訳ないという気持ちが伝わってくる声。
この声、どこかで……。
その答えに行き着く前に、那由他の意識は暗闇へと、落ちていった。

第八話

霧島那由他が発見されたのは、失踪から実に5時間後。
既に日付が変わっても続けられた捜索中、運河公園付近を探しに出た博雅がベンチで眠る彼女を見つけた。

「どういうことだ？」
「薬物――エーテルの類で眠らされています」
ふとんに寝かされ、眠り続ける那由他の様子を見ていたルシフェルが、かなめにそう答えた。
「薬物？」
「エーテル系です……羽山君、涼子さんは？」
「手配済みだ」
「命に別状はないけど……」
「ナナリ？」
「あの……クスリもそうなんですけど」
「ん？」
ルシフェルがかなめの後ろに並ぶ男達を見て言葉を詰まらせた。
「みんな、あのね？那由他ちゃんの服を脱がすから」
「そうか」
南雲は背後に並ぶ生徒達に言った。
「羽山、機材用意しておけ」

「先生！私じゃ満足出来ないってこと！？」
涙混じりの未亜の罵声が隣部屋から聞こえてくる。
「い、いや！そうじゃなくて！」
ドスンッ！
バタンッ！
南雲の悲鳴と一緒に家が揺れる。

今、この部屋にいるのはルシフェルとかなめだけ。
男はすべて外に出された。
というか、南雲は未亜に部屋から隣室へ引きずり出され、修羅場の真っ最中。
とばっちりを恐れた羽山達が居間に避難中。
そうなっている。

「あの南雲先生の言葉、全然別な意味なんですよね？」
「南雲も馬鹿だ」
かなめは呆れたという顔で、
「ちゃんと警備用機材といえばいいものを」
「未亜ちゃん、撮影機材と勘違いして」
「……まぁ、いいクスリだ。ところでナナリ」
「これです」
ルシフェルがかなめに見せたかったもの。
それは……
「この痣（あざ）は？」
「わかりませんか？」
「縄で縛られた痕だな。――手首だけか？」
「それが……」
ルシフェルが那由他のブラウスを脱がせる。
全身に縄の痕と、鞭か何かで叩かれた痕があった。
「随分、凝った縛り方だな」
「普通ではありません……古い日本の捕縛術によく似ていますが」
「専門知識のある者に監禁され、尋問されたと？」
「恐らく」
「誰が？」
「それがわかれば、もうどうにかしてます」

「人の純潔奪っておいて！」
「責任とるって約束したろう！？」
「空手形だったんだぁ！教え子の純情を玩んだんだぁっ！うわぁぁぁぁんっ！！」
ドスンッ！！
ガシャンッ！！

「……襖が壊れた。迷惑料、請求していいですよね？」
「南雲にな。相手が誰かこの子に聞くか？……そういえば、村上というあの男は？」
「逃走防止って、南雲先生に縛り上げられて、地下室に監禁されています」
「南雲は村上と何かあったのか？」
「未亜ちゃんの幼なじみってことで警戒心丸出し。らしいですよ？未亜ちゃんが言ってましたけど」
「大人げなさ全開中年めが……ところで、こういう時に最も容疑者になりそうなアイツはどうした？」
「時間的に見ると……そろそろ葉月湾から太平洋へ。ですね」
「役立たずが……待て？」
かなめがふと思いついたように動きを止めた。
「この子は、運河公園にいたんだったな？」
「はい」
「あいつがもし、簀巻きを外して運河から上陸。そこにこの子がいた。うっぷん晴らしにこの子を襲ったという可能性は？」
「５０％」
やってるかもしれないし、やらないかもしれない。
つまり、ハイとイイエの基本的確率をルシフェルは即答した。
「高いな」
「低い方です」
「よし……あいつがもし戻ってきたら拷問だ」

「戦力をあまり削らないでくださいね？第一、水瀬君を本当に殺すと」
ルシフェルは、次の言葉を詰まらせた。
「……少佐の命にかかわりますから」

「先生のバカァァァッ！！」
「ぐうぁぁぁぁぁぁっ！！」
ドカンッ
ガッシャーン！！

「あ、決まった」
「信楽の勝ちか」
ルシフェルは、那由他のふとんを直しながらかなめに訊ねた。
「那由他ちゃん、どうします？」
「とにかく、彼女の口から事実を聞かずにはいられない。目覚めるのは何時間後だ？」
「薬物には詳しくないのですが、恐らく半日後」
ルシフェルの言葉に、腰を浮かせかけたかなめは目を丸くした。
「そんなにか？」
「はい。エーテルは睡眠薬でも特に強力な薬物……というよりむしろ自白剤。強力すぎて、副作用もかなりあるんですよ？軍でも尋問より拷問に使う代物で」
「ふうっ……なら、もう我々も寝るとしよう」
かなめは言った。
「この子の話ですべてが動く」
「はい」

「き……機嫌を直せ」

商店街を進む未亜の後ろで、南雲が精一杯縮こまって言った。
「だから、誤解だって」
「知らない！」
怒り心頭の未亜は、肩を怒らせたまま、歩くのを止めようとしない。
「この前の夢の件もあるもん！」
「だから、その無実を証明するために、こうやって病院へ」
「……」
じろっ。
未亜の座った目に睨まれた南雲は、
「な……なんだ？」
「ウソだったら覚悟しておいてね？その人の子供がいなかったら」
「――――おっ。おう」
南雲は天を仰ぎ見た。
今、世間（の一部）は春休みの真っ最中なのに、俺には休みは与えられないのか？

そう。
春休みはない。
何故か？
サラリーマンやＯＬに春休みはない。
だから。

当然、主婦にもだ。

「朝っぱらからダラダラしてるヒマがあるなら、葉子の面倒見なさい！」
寝ぼけ眼でテレビを見ていた美奈子にそう命じたのは、当然、美奈子の母だ。
リビングのフローリングに寝そべってだらだらとテレビから顔だ

けを向けた娘の前で、掃除を続ける彼女は、苛立った顔をした。
「ちょっとは葉子を見習いなさい！いつも通りに起きてくるし、手伝いはしてくれるし！」
「葉子は？」
「どっかのぐーたらと違って、庭で草むしりしてくれてる！」
「……マメだねぇ。あの子」
「美奈子！」

「――――というわけ」
バツの悪そうな顔でそうぼやいたのは、当然ながら美奈子だ。
「自業自得だよ」
「桜井……それは感心せんぞ？」
白い目で美奈子を見つめるのは、未亜と南雲だ。
「お母さんの気持ちがわかるなぁ」
「俺もだ」
「ううっ……」
思わず葉子の手を握る力がこもってしまう。
不思議そうに顔を見上げる葉子の頭には、つばの大きい麦わら帽子が乗っている。
「美奈子ちゃんって、休みになるとだらけちゃうもんね」
「それは言わないでよぉ……」
もう美奈子は泣きそうだ。
「悪いと思うから、こうやって葉子の相手してあげて」
美奈子達はにぎわう商店街を歩いている。
春休み期間中、ヒマを持て余した連中があちこちにいて、好色な眼で美奈子を見るが、横にいる南雲を警戒して遠巻きにするだけに留まっている。
「まぁ、いいけどね？」
そう言う未亜は、なぜか美奈子が見たこともないほど、満ち足り

た顔をしていた。
「そういえば」
美奈子にはそれが気になってしかたない。
「あんた、南雲先生と何してるの？」
「ナニの次」
「はぁっ？」
「とりあえず病院行くとこ」
「ちょっ！？」
美奈子は青くなって怒鳴った。
「み、未亜！」
「にゃっ！？」
がしっ。と両肩を掴み、真剣な眼差しを向ける美奈子に思わず未亜は固まった。
「み、美奈子ちゃん！？」
「あ……あんた……！」
未亜の肩を掴む手が震え、呆然とした目をする美奈子。
「さ……桜井？どうした？」
南雲も驚いて二人に割って入ろうとするが、
「このぉ！」
ガンッ！
美奈子のめりこみパンチが南雲の一部にめり込んだ。
「グォッ！？」
獣のうなり声のような声をあげ、激痛のあまり、その場にうずくまる南雲の顔にさらに一発がめりこんだ。
「な……南雲先生！」
美奈子が怒鳴る。
「お……教え子に……教え子になんてことを！」
「美奈子ちゃん！？」
「未亜！あんたは黙ってなさい！」
何事かと商店街の人々が店先に出てくるのに全く気づかず、美奈

子は南雲に怒鳴った。
「先生！いくら男と女とはいえ、やっていいことと悪いことが！」
「み、美奈子ちゃん……」
未亜が青くなって袖を引くのも無理はない。
周囲を歩いていた人達だけではない、店先には見慣れた店の関係者が遠巻きにこちらを見ている。
間違いなく見せ物になっている。
「教師として――教師として教え子を、１６歳の女の子をに……にん」
「美奈子ちゃん違うって！」
「どう違うの！？」
美奈子は血走った目で未亜を睨んだ。
「私のカワイイ妹分を孕まされて、黙っていられるモンですか！」
「ちがーう！！」
未亜は叫んだ。
「せめて傷物といって！」

妊娠？
あの子が？
うわっ。相手教師だとさ。
しかも傷物だって。
ヒドい話しよねぇ。
あれ、明光の先生だろ？
あのセンセ、ロリだったのか？
やっぱりなぁ。
警察に通報した方がいいか？

「私は妊娠なんてしてない！」
「するようなことしたんでしょう！？」
「そりゃ今朝も……じゃなくて！」

「今朝!?朝っぱらから身重の子に!」
「だから妊娠から離れて!」
「離れるって――堕ろせと!?そう言われたの!?未亜!」

ガシッ!

あろうことか、美奈子は南雲太い首を鷲掴みにすると、そのまま持ち上げてしまった。

止めに入ろうか迷っていた周囲の大人達は、女の子がプロレスラー顔負けの大男を片手で持ち上げるという、異様な光景に思わず後ずさりしてしまった。

「してないって!」
周囲のざわめきが一瞬高くなったのは間違いない。
未亜はそれに耐えられずに美奈子を何とか止めようとした。
「私は妊娠なんてしてないっ!」
未亜は美奈子に負けじと大声で怒鳴った。
「単に病院へ行く途中なんだって!」
「どこの産婦人科!?」
「お見舞いだよ!」

「も……もう、死にたい」
喫茶店のテーブルに突っ伏しながら、美奈子は涙混じりに呟いた。
「しばらく、商店街どころか町中歩けない……」
「にゃあ。当分無理なのは私や南雲先生もだよ」
「……これ、絶対学校から呼び出されるぞ……俺」
テーブルに突っ伏すのは未亜と南雲も一緒だ。
「美奈子ちゃんのせいでとんだ災難だよぉ」
「……ごめん」
美奈子は突っ伏したまま言った。

「つい早合点しちゃって」
「ついじゃないよぉ」
「本当ですよ」
突然の女の子の声に、全員の視線が通路に向けられた。
「桜井先輩らしくないです。公の場であんな騒ぎ」
あきれ顔をこちらに向けているのは萌子だ。
「加納さん」
「はぁっ……端から見ていて恥ずかしくなりました」
「ご、ごめんなさい」
俯く美奈子の横で、勝手に注文したパフェをぱくつく葉子。
その顔はクリームでベタベタだ。
「あらあら」
萌子がハンカチでその顔を拭いながら言った。
「お友達のお見舞い途中だったんですけど、とんだモノを見ちゃいました」
「お見舞い？」
「ええ。お友達の」
「？クラスメートか？」
南雲が首を傾げた。
「中等部で入院している生徒がいるとは聞いていないが？」
「ウチの生徒じゃないんです」

病院への道すがら、萌子は南雲達に話した。
「入院しているのは、武原琥珀（たけはら・こはく）ちゃんといって、ワケありで私が病院に行った時に知り合ったんです」
「へぇ。萌子ちゃんも産婦人科なんて行くんだ」
「そりゃ、女の子ですから――って！」
未亜の後ろを歩く南雲に気づいた萌子が怒鳴る。
「な、何言わせるんですか！？」

「言ってみただけ」
「もうっ！――――とにかく、彼女、重い心臓病で小さい頃から入院していて、お友達がいないんです。私が遊びに行くの、とても楽しみにしてくれていて」
「へぇ？」
「所で、お二人は？」
「ああ……似たような存在、かな」
「？」

騎士。
常人の数倍の破壊力を持つ身。
その発生と遺伝については、実は何もわかっていない。
はっきりとしたことは、その血がきわめて不安定であること。
騎士の遺伝子が一般人の遺伝子と適合できれば良し。
できなければ、死産や障害となって子供を苦しめることになる。
その理由について仮説こそ百家争鳴だが、決定的なことは何一つわかっていない。
当然、騎士同士から騎士の子が生まれる確率は極めて高い。
有力騎士を擁する組織・国家が、結婚相手として自国の最強騎士同士をあてることが多いのはそのためであり、各国の王室などにおいて近親婚に近い風習が強いのも似たような理由があげられる。

だから、騎士と婚姻することはそれなりの覚悟がいる。
遺伝子同士の相性が悪くて子供が出来ないか、一般人には御することの出来ない身体能力を持つ、騎士という子供が生まれるか、或いは、騎士の遺伝子によって破壊された異常な遺伝子によって障害を持つ子が生まれるか。

親となる者は、そのリスクと常に向き合いながら自らの子孫を作

る行為を行わねばならない。

騎士の血が出るのは、生後数ヶ月から遅くても１０歳までとされる。

だが、それ以上に早く騎士の血を表すのが――。

「この子、眠っているの？」

ベッドの上で眠り続けているのは、葉子ほどの年頃の女の子。

日に当たっていないのは、その血色の悪い肌からわかる。

「――不破みらい。本来なら今年の春、小学校に入学していた」

南雲が眠り続けている女の子の顔を見つめながら言った。

「生まれた時点で騎士の血によって遺伝子が破壊され、その影響でずっと眠り続けている。この子は産声さえあげたことがないそうだ」

「みらい……ちゃん」

「皮肉な名前に聞こえるだろうが、忍さんは、「この子にも未来はある」。そう思って名をつけたそうだよ」

「家族がいるんでしょう？お父さんだって」

「……忍さんが産婦人科から出てきた時には離婚が成立していたそうだ。理由？この子を産んだからさ」

「き……汚い！」

未亜は拳を握りしめながら言った。

「そんなの、ニンゲンじゃない！」

「相手は前途洋々の高級官僚。その経歴を考えれば、障害児の子供なんていらないのさ。世間体が悪すぎるからな」

「その人、名前なんていうの？」

「死人の戒名なんて知らない」

「死んだの？」

「ああ」

「……そう」

未亜は死因を聞かなかった。

下手すれば
いや
絶対
この男はその時、自分の名をあげるだろうから。

第九話

「にゃ？美奈子ちゃん？」

購買に通じる廊下の角で美奈子が飛び上がった。

「な、何？」

振り返った美奈子の声は裏返っている。

「どうしたの？って」

未亜の目は、美奈子が大事そうに抱える包みを見逃さなかった。

「にゃぁ。村上先輩とお弁当タイムってワケだぁ」

「なっ！？」

美奈子の顔が一瞬で赤く染まった。

「ち、違うのよ！？」

美奈子は裏返った声で未亜に言った。

「こ、これはそんなんじゃなくて、えっと、先輩がお腹空いてるんじゃないかなって、それでお弁当、差し入れしてあげようかなって、別に先輩と一緒に食べたいとかそんなんじゃないの！そう！あくまで差し入れよ差し入れ！いい？ヘンな誤解しないでよね！？

…（中略）…卵焼きは自信があるし、他のオカズもお母さんに手伝ってもらったから大丈夫だけど、別に先輩に食べてもらいたいからとか…（中略）…私、別にそんなんじゃないし、ただ、先輩の役に立ちたいっていうか、…（中略）…ああっ！私、何言っているの？なんでこんな所で未亜にあっちゃうのかしら。誤解されるのはイヤだからはっきり言っておこうと思って、いい？念押しておくけど、これはあくまで先輩の役に立とうという、その一心で……あっ……クラってきた」

「息継ぎ無し、肺活量だけでそこまでまくし立てたら当然じゃん」

未亜の前で美奈子がへたり込んでいた。

「さすがアナウンサー目指しているだけあって、肺活量もスゴイね

「ぇ」
美奈子が大切に抱えるのはお弁当箱。
美奈子にとって世界で一番大切な男の子にあげるためのお弁当。
美奈子が一生懸命作ったお弁当。
未亜にとって、世界で一番、おいしい「だろう・かもしれない」お弁当。
……中学一年生の作ったお弁当に期待するのもどうだろう。
そう思った未亜だが、やっぱり心配だ。
「味見したの？」
「お母さんは大丈夫だって」
「そう。じゃ――村上先輩！」
「ちょっ！？」
未亜の大声に美奈子は青くなった。
廊下の向こう、購買から出てきた村上が顔を向ける。
「お昼、一緒に食べよぉよ！」
「ああ。いいよ？」
その返事に、未亜はポンッと美奈子の背中を押して、
「先輩、後で行くから、美奈子ちゃんと一緒に先に食べてて？屋上なんていいかもよ？」
「ああ。天気いいしね」
「うん……美奈子ちゃんがお弁当用意してくれてるんだ」
「へえ？」
ガチガチになっている美奈子の手の中にある包みを見た村上が、
「それ、未亜ちゃんの分だよね」
「そっ」
美奈子が慌てた口調で言いかけた言葉を、
「ううん。違う」
未亜は言った。
「お弁当作りに挑戦したんだって、だから、先輩、味見お願いね？」
「へぇ？」

村上は興味津々で言った。
「それは是非、ご相伴に預かりたいね」
「じゃ、そういうことで、私も購買でパン買うって」
未亜は村上の手にある包みをもぎとった。
「ここにあったか。先輩、ゴチ」
「ははっ……お弁当代として納めておいてよ」
未亜は笑ってその場を離れた。
ちらと振り返ると、村上の横をロボットのように歩く美奈子の姿が見えた。
(頑張れ。美奈子ちゃん)
未亜は心の中で声援を送った。

「にゃ?」
その日の放課後。
戦果を確認すべく美奈子のクラスに立ち寄った未亜は、美奈子の話に唖然となった。
「つまりぃ」
美奈子の机の上にあるのは、お弁当の包み。
それを前うなだれる美奈子の目は真っ赤に腫れ上がっている。
「お弁当は完璧だったのに」
「……ぐすっ」
「お箸忘れて、食べられなかったんだぁ」
「ヒック……う、ううっ」
美奈子の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。
「ああっ!泣かないで!」
「だけど……だけどぉ……」
「先輩、怒らなかったでしょう?」
「う、うん……ただ微笑んで、残念だねって」
「さすが先輩。優しいねぇ」

未亜はバックから割り箸を取り出して、お弁当箱の包みを開けた。
卵焼きやウィンナー。コロッケのお弁当。
ちょっと盛りつけが崩れているが、中学生の女の子が初めてつくったお弁当にしては、良くできている。
そういうべきだろうと、未亜は思った。
「もったいないからもらうね？」
「未亜？」
「へへっ。いつでもお裾分け食べられるようにって、割り箸は常備してるんだよ？」
「……あんたに一緒にいてもらえばよかった」
「あっ。そうだねぇ」
「……どうして私、こうツメが甘いんだろ」
美奈子はそういって机の上に潰れてしまう。
「それが美奈子ちゃんらしい所だよ」
未亜はお弁当を頬張りながら言った。
「うん。おいしい」
「……ありがと」
「へへっ。これ食べられなかったんだから、先輩の方が災難だ」
「ふふっ」
美奈子の顔に笑顔が戻る。
それだけで未亜は満足だ。
「へへっ」
未亜は食べた。
お弁当二人分。
パンとおやつでふくれたお腹が破裂しなかったのが不思議なくらい、未亜は食べた。

中学一年のある日の出来事。
遠い過去のこと。

その過去が今、過去の方から近づいてきている。

水瀬邸に戻った未亜は、縁側に座って考える。

先輩がこの街に帰ってきた。
美奈子ちゃんにとって良い事では決して、ない。
むしろ美奈子ちゃんには知って欲しくない。
関わって欲しくすらない。
でも、

いずれ知れる。

未亜は確信を持って言える。

美奈子ちゃんは、絶対に村上先輩の存在を知る。
なにより、美奈子に村上先輩の所在を聞かれ、

知らない。
何も知らないし、1年前に別れてからは音沙汰もない。

そう、言い続けられる自信はない。

ウソはいけない。

人は言う。

だけど、未亜は知っている。

必要なウソもあることを。

大切な美奈子を護るために必要なウソ。

でも、このウソを、つき続けられる自信は、未亜にはない。

このままなら、美奈子の性格からして、間違いなく事件に首を突っ込むだろう。

いや、もう突っ込んでいる。

そして、巻き込まれていく――――。

美奈子は事件という名の川を流れる木の葉のようなもの。

その先の渦を避けることは出来ないのだ。

それでも――――

村上を失った時の美奈子の姿を思い出し、未亜は慄然とした。

明るく誰とでも親しく接するあの美奈子が、

痛々しいまでにやつれ、

成績順位は1ケタ以上落ち、
推薦枠までとっていた有名進学校の進学を断念せざるを得なくなった。

あの頃の美奈子を思い出さずにはいられない。

そう。

村上が、美奈子の人生を狂わせた。

そして1年が過ぎ、美奈子はようやくそこから立ち直れた。

その矢先に、その悲劇が再び襲ってきたのだ。

再び、村上と接触した美奈子がどうなるか。
考えたくない。
なら、自分はどうするべきだ？
どうすればいい？
このまま放っておけばいいのか？
それとも、こっちから接触を妨害する手段をとるべきか？
未亜は自問を繰り返す。

「未亜ちゃん？」
突然の声に、未亜は驚いて振り返る。
「どうしたの？」
村上がお盆を持って立っていた。
「う、ううん？何でもない！」
「そう？お茶、もらったからどうぞ？」
「あ、ありがとう」

どうにも自然になれない自分に苛立ちながら、未亜はお盆から茶碗を受け取った。
「……それにしても」
春の陽気を全身に浴びながら、村上がぼやいた。
「とんでもない春休みになっちゃったね」
「本当だよ」
「ごめんなさい」
未亜の横で弱々しくうなだれる村上の態度が、ウソだと、未亜にはわかる。
その上っ面な態度が、余計未亜の神経に触れた。
「僕達のせいで」
「にゃあ。いいんだよぉ」
未亜は手をピラピラさせながら言った。
「先輩達だって、大変なんだから」
「ははっ――ありがとう」
「……」
未亜は茶を飲む手を止めて村上を見た。
その目に憎悪の炎があがっているのを、村上は気づかない。
村上はただ、庭の景色に視線を向ける。
「本当なら、美奈子ちゃんにも会いたいんだけどね」
「――美奈子ちゃんは海外旅行中」
「ああ……そうだったんだ」
腰をあげた村上に未亜が、
「村上先輩、かなめちゃんと一緒にドコ行くの？」
「わからない？」
「へ？」
「内緒――かな？」
イタズラっぽく笑う村上。
かつての親しい先輩の笑顔。
それが、未亜には辛い。

考えてみれば、

未亜はじっと村上の後ろ姿を見つめながら思う。
全ての元凶は何？
この人？
違う。

この人だけじゃない。

霧島那由他

あの子も――――ううん。

あの子こそが元凶の中の元凶なんだ。

那由他と村上が出会ったのが全ての始まり。
二人が恋に落ち、
人を殺し、

そして美奈子の前から村上は姿を消した。

美奈子の人生を狂わせて――――

それが、全ての始まり。

ギュッ。

未亜は自分が湯飲みをきつく握っていることに気づかない。

どうやって、霧島那由他を……そして、村上をこの町から排除しようか。

そう、考えている自分に、

未亜は何も気づいていない。

未亜の心の奥底で燃え上がる那由他達に対する憎悪の炎に、未亜自身が気づいていない。

葉月市内にコトハ坂と呼ばれる坂がある。

かつてこの地に流された貴人が最後に歌を詠んだことから名付けられたとも言われる由緒ある坂。

なだらかな坂道は広い車道に歩道が整備され、その両脇には瀟洒な家々が軒を連ねる。

いわゆる高級住宅街。

そこを歩いているのはかなめと村上だ。

村上は帽子を目深く被り、サングラスで顔を隠している。

二人は無言で歩き、そしてある家の前で足を止めた。

「ここか？」

「そうです」

かなめはその家を見た。

明治時代を彷彿とさせる年代物の洋館は、煉瓦造りの手の込んだかなり立派な作りだ。

かなめの給料ではとても手が出せない物件だが、伸び放題に伸びた雑草が、この家に住民がいないことを告げている。

「霧島邸です」

「人手には渡っていないようだな」

「唯一の遺産相続人である那由他が行方不明で、処分できないのでしょう」
「ふむ……」
かなめは建物を一瞥した後、周囲を見回して言った。
「鍵は、あるのか？」
村上は無言でポケットから鍵を取り出した。
「よし。入るぞ」

キィッ

鉄の門が1年ぶりの客を出迎えるかのように鳴った。

一方、
「失礼いたしました」
村上の表札を掲げる家を辞したのは、美奈子と葉子だ。
近くを通りかかった折、村上の母から呼び止められた美奈子が、お茶を御馳走になっていたのだ。

当然、村上自身の姿はない。

無理もないし、当然だと美奈子は思う。

彼は殺人事件の重要参考人として全国に指名手配されている身だ。
そう簡単に自分を知る者の前に姿を現すことなんて出来るはずはない。
それでも。

美奈子は葉子と手を繋ぎながら思う。
村上先輩は絶対、この町に戻ってくる。

でなければおかしい。
それが、美奈子の判断だ。
理由はわからない。
だが、美奈子の頭脳は、美奈子に告げていた。

いずれ、村上先輩は、この街に戻ってくる。
そして、そろそろその頃だと。

「お姉ちゃん？」
そんな美奈子に、葉子が不思議そうな顔で言った。
「どこ行くの？」
「うーん。どうしようかなぁ」
葉子の散歩と称して外出した美奈子は、とぼけたフリをして歩く。
しかし、目的地は決まっているのだ。

「さすがに空気が死んでいるな」
よどんだ室内の空気に顔をしかめるかなめの前を村上が歩く。
ジャケットの胸ポケットに隠した拳銃を掴んだままだ。
「で？頼まれたとおり、連れてきたのだが――君はここに何の用が？」
「霧島さんの書斎を探します」
「何を？」
「人身売買の記録です」
「それは警察が」
「警察が手にしたものが全てでしょうか？」
「？」
「相手が本当に人間かすら、僕はもう、自信がないんです」
「人間では、ない？」
「だってそうでしょう？」

村上はかなめに振り返って言った。
「何度殺しても復活する人間……そんな存在を、人間が作り上げられると思いますか？」
「つまり、君はその人智を越えた存在が何者か、それを調べにここに忍び込んだというわけか」
「そうです」
村上は口の端を引きつらせて言った。
「そしてあなたはその監視役――ここです」
玄関ホールから廊下を通った突き当たりの部屋。
そこが霧島の書斎。
一年前、霧島を殺した現場。
警察の封印はすでに外されている。
「待て」
ドアノブに手をかけようとした村上を止めたのはかなめだ。
「私がやろう」
かなめは、はめたグローブの感触を確かめると、ドアノブを回した。
カチャ。
鍵がかかっていない。
「……罠も、ないようだな」
「事件が終わった部屋に罠を仕掛ける人がいますか？」
呆れ顔の村上がかなめをすり抜けて書斎に入る。
「何があるかわからないぞ？」
「大丈夫ですよ」
村上は机の引き出しを漁りながら言った。
「もう一年ですよ？」
「だといいが」
かなめは部屋の中を見回した。
カーテンが下がっているので薄暗い室内は、アンティーク調の設えがなされ、壁には南国の仮面などのワケのわからない装飾品が飾

られている。
「結構、悪趣味な装飾だな」
「ははっ……霧島さんは元々民俗学者でしたからね」
「ほう？」
「大学を定年退職した方でしたよ……黒魔術の研究では大家で、著書は全部読みました」
「それほどの身で、何故、孫を売り飛ばそうなど」
「それを知りたいんですよ」
引き出しが期待できないと判断した村上は、チェストに目をつけ、近づいていく。
色の違う大理石で作られた市松模様の床を歩く村上の足音だけが奇妙に高く響く。

コツコツコツ……カンッ……コツコツコツ

その音を聞き逃さなかったのは、かなめだ。
「待て」
「はい？」
かなめは床に手をやって、村上の歩いた場所を数カ所叩く。
コン
コン
カンッ
一カ所だけ、音が違う。
「ここだ」
「えっ？」
大理石の表面を撫でると、そこだけ、ほんの少しだけ切れ目のようなものがあった。
「村上君、ナイフか何かないか？」
村上は机の引き出しからペーパーナイフを探しだし、かなめに渡した。

ペーパーナイフを突き刺し、かなめは言った。
「注意しろ。何があるか、わからないぞ？」
かなめのその警告に、村上は緊張した顔で頷く。
ガリッ
堅い音の後で大理石の石が少しだけ動いた。
「隠し扉だな」
「よく見つけましたね」
「この程度は常識だ」
かなめはそう言って、蓋の役目を果たしていた大理石を持ち上げた。
３０センチ四方の穴。
どうやら、貴重品を隠す保管庫らしい。
中には証券類が束ねて保管されていた。
「外れか？」
「いえ」
村上が証券類を取り除いて言った。
かなめは一瞬、村上を殴りそうになった。
村上の行動は軽率すぎる。
もし、証券類に細工でもされていたらどうするつもりだ？
村上が部下なら間違いなく、かなめは村上を叩きのめしていたろう。
それをやらないのは、村上がかなめの部下ではないこと。
それだけだ。
何より、村上が焦っていることはかなめの目には明らかなことだった。
かなめは、ここに村上を連れてきたことを後悔しだしていた。
「証券類の下……これです」
とっさに村上の手を掴んだかなめだが、村上はそれをはねのけるようにして書類を掴んだ。
むき出しの書類。

それはかなめの知らない言語で書かれていた。
言語に達者な村上は、それを読んだだけで興奮気味に叫んだ。
「これ、那由他の正式な人身売買契約書です！」
「何？」
「ほら、ここに契約者の名前が！」
村上は、そのまま穴から書類を引き出してしまう。

書類が穴から出た途端、

プッ

「バカッ！」
かなめは村上の襟首を掴んでとっさに穴の側から跳び、防御魔法を全開にした。

時間を少し前後する。

かなめ達が霧島邸に忍び込んでから少し後のことだ。

霧島邸は、久々のお客二組目を迎えていた。

「わーっ。オバケ屋敷だぁ」
興味津々という顔で霧島邸を見つめる葉子と、
「これ」
それを咎める美奈子だ。
妹の不謹慎な言葉に、美奈子は言った。
「人様のお家に、そんなこと言っちゃダメ」
「はぁい！」
と、葉子は元気いっぱいに返事した。

「とはいえ」
美奈子はため息をつく。
葉子ではないが、確かにこれはお化け屋敷だ。
なんだか、他の家とは周囲の空気まで違って見える。
殺人事件のあった洋館とは、そういうものかもしれないが。

ここに村上先輩がいる。
そんな確信を美奈子は持っていない。
もしかしたら、ここに戻ってくるかもしれない。
その程度の考えしかもっていない。

今、村上先輩がどこにいるか？

それはわからない。

ただ、私は村上先輩に会いたくないだけ。

……会いたくない？

本当に？

……わかんない。

なら、会ってどうするの？

村上先輩は、自分ではなく、霧島那由他をとったんだぞ？
そんな人と会って、どうするというの？
……それこそ、わかんない。

美奈子は、ただぼんやりと古ぼけた洋館を眺める。

ホラー映画のワンシーンのようだ。

キィッ

そんな金属音ですら、怖く感じる。

村上先輩はここにはいない。

というか、私がここにいたくない。

美奈子はそう思って葉子に声をかけた。

「葉子、帰るわよ？」

返事がない。

というか、葉子がいない。

「よ、葉子？」

辺りを見回すと、いつの間に開いたんだろう。屋敷の玄関に入り込む葉子の姿があった。

「ちょっ、よ、葉子ったら！」

美奈子は、なけなしの勇気を総動員して、屋敷の中へと忍び込んでいった。

「よ、葉子？」

そっとのぞき込んだのは玄関ホール。

葉子はそこにいた。

「もうっ」

その手を掴むと、美奈子は外に葉子を引っ張り出した。

「こらっ！」

葉子は何故自分が怒られているのかわからないという顔で美奈子を見る。

「だめでしょう？余所様のお家に勝手に入っちゃ！」

「でもぉ」

「いい？」

美奈子にとって葉子は大切な妹。

その妹が他人の家に入り込んだことは、決して看過すべきことで

はない。
美奈子は葉子の前にしゃがむと、視線を葉子にまっすぐあわせて言った。
「そんなことしたら、ごめんなさいじゃすまないのよ？幼稚園いけなくなって、好きなモノなんて、何も食べられなくなるのよ？」
「いなり寿司も？」
「ずっと、ずぅっと、食べられない」
「ううっ……」
葉子は、何とか自分がしたことがわかったらしい。
困った。という顔でうなだれてしまう。
「もうしないって、約束出来る？」
葉子は無言で頷く。
「よしっ」
美奈子は嬉しそうに葉子の頭を撫で、立ち上がった。

その瞬間――

パッ。

世界が白くなり、そして美奈子は意識を失った。

その瞬間、
霧島邸は一瞬にして炎に包まれた。
書類に仕掛けがしてあって、あの穴から取り出された時点で建物全体が吹き飛ぶ仕掛けだったのは、結果としては明らかだ。
庭に逃れたかなめの前で、炎に包まれた霧島邸の二階部分が轟音を立てて崩れ落ちる。
「ったく、このバカが！」

自分の足下で伸びている村上に、かなめは毒づいた。
「あんな所に隠してるんだ！罠位、当然だろうが！」
周囲を見る。
霧島邸に隣接する建物はほとんどが半壊している。
爆風による被害であることは明白。
死傷者の数は、考えたくない。

ウーウーウー

遠くからサイレンの音が聞こえてくる。

まずい。
ここで自分の姿を目撃されるわけにはいかない。
村上の手に焼けこげた紙片を見つけたかなめは、それを自分のポケットにねじ込むと、村上を背負って逃げにかかり、
「お姉ちゃん！」
子供の泣き声に足を止められた。
門の外。
かなめは一跳躍で庭から門の外へと出た。
昼間は人通りが少ないことが幸いした。
ここにいれば、偶然、この場に居合わせたという言い訳が立つ。
全く、世の中、何が幸いするかわかったものじゃない。
だが、そんなに甘くないのも世の中だ。
かなめは呆然として目の前の光景を見つめた。
爆風で塀はほとんど吹き飛ばされ、様々な残骸が道路に散らばり、
道路に駐車している車が横転している。
その中で何かに取りすがって泣きじゃくるのは、小さな女の子。
どうやら、連れが爆発に巻き込まれたらしい。
その連れを、かなめは知っていた。

1年A組、桜井美奈子。

小さい女の子は、恐らく桜井の妹だろう。
教え子が自分達の失態の犠牲になったのか？
かなめの背中を冷たい汗が走る。

「お姉ちゃん！」
葉子は小さな手で必死に美奈子を揺り動かしていた。
「起きて！起きてよぉ！」
ゆさゆさ。
まるで永遠に眠り続けるかのように、美奈子は揺さぶられるまま。
まるで反応しない。
「お姉ちゃん！」
葉子は泣きじゃくりながら美奈子を揺さぶる。
葉子に出来ることは、それだけだ。
その葉子の前に立ったのは、かなめだ。
「桜井！」
かなめは真っ青になって美奈子の脈をとり、
「よし――生きている」

サイレンの音がさっきよりかなり近くなっていた。

第十話

今、那由他の寝かされている部屋にいるのは、かなめと南雲。そして村上だけ。

村上は痛む体を押してまで那由他を安心させようと、その手を握りしめている。

「つまり」

かなめが、那由他の話をまとめた。

「君は、何も覚えていないと？」

「はい」

かなめは申し訳なさそうに肩を落とした。

「あの……私、本当に昨日、朝目覚めてからのことを何一つ」

那由他は村上の手を握り返した。

「ただ、頭の中に靄がかかったみたいで」

「薬の副作用による記憶の混乱だな。丁度、看護婦が別室に来ている。具合が悪ければ診断してもらえ」

「申し訳ありません……えっと」

「福井だ」

「福井さん。もし、思い出すことがあればお知らせします」

「福井さん」

村上がすがるような目でかなめに言った。

「もういいでしょう？那由他がつらそうです」

「……わかった。今はゆっくりやすんでくれ」

かなめはそう言い残して部屋を出た。

「少佐」

続いて部屋を出た南雲が小声でかなめに問いかける。

「那由他ちゃんの言うことは」

「真実だろう」
かなめは言った。
「目を見ていたが、うそはついていない」
「手がかりが途絶えましたね」
「何のだ？」
「その、敵の、です」
「敵とは？」
「だから」
南雲は言葉を詰まらせた。
かなめが何を聞こうとしているか、それがわからない。
「大尉は、那由他は命を狙う者に誘拐されたというのか？」
「違うのですか？」
「……私はそうは思わない」
かなめは思案しながら言った。
「少佐？」
「大尉。貴官がそういうなら、その根拠は何だ？」
「そ、それは……」
「命を狙ってきた相手だ。もし、同一人物の犯行なら、今、布団に寝ているのは死体のはず。それが生きている。何故だ？敵は何を狙っている？何故、那由他を殺さなかった？」
「では、那由他は誘拐されたのではない、と？」
「可能性は否定しないが、自作自演にしてはリスクが高いし、その意味はもっとわからない」
「1年前の殺人をカモフラージュするつもりでは」
「我々は捜査しているわけではない。我々を騙して何の意味がある？」
「……では」
南雲は考えをまとめた。
「那由他ちゃんは何らかの理由でここから出て、そしてその途中で何者かに誘拐された。ただし、それは、いままで那由他ちゃん達の

命を狙っていた者とは別人である」
「模範解答、というべきだな。元・巡査長」
かなめがにやりと笑い、南雲がまじめくさった顔で敬礼した。
「恐れ入ります。元・警部補殿」
ピーピーピー
かなめの携帯が鳴ったのは、その時だ。
「私だ――秋篠か？……何？」
かなめが携帯へ怒鳴った。
「場所は！？――公園！？わかった。すぐに行く――羽山！」
かなめの怒鳴り声に羽山がすっ飛んでくる。
「ど、どうしたんっすか？」
羽山は何故か前屈みでベルトを閉めようともがいていた。
「私と南雲は、これから運河公園へ向かう。しばらくはお前が村上達の護衛に当たれ……ん？」
「い、いってらっしゃい」
羽山は何故か焦っている。
それが、かなめにわからないはずがない。
まだ前屈みのままの羽山を、怪訝そうな顔で見たかなめが怒鳴った。
「何をしている！しゃきっと立て！」
「あ、いや、あの……」
「？……き、きっ……貴様ぁ！」
羽山の隠そうとしている下半身に視線を向け、その姿勢の意味がわかったかなめは、赤い顔で怒鳴った。
「立てるのは背筋だ！誰が粗末なモノを立てろといった！」
「い、いえその……」
「白川殿は桜井の看病に呼んだんだぞ！？貴様、顔が見えないと思ったら、ドコでナニしていた！」
「も、文字通りの……ナニです」
羽山が赤面しながら消え入りそうな声で、ようやくそれだけを答

える。
「ったく、このサルめが！羽山！」
「はいっ！」
「さっさとそのシラス干しひっこめて、腕立て千回、私が戻るまでにやっておけ！」
「せ、千回っスか！？」
「やらねば――この場で斬る！」

いーち、にーぃ、さぁーん、
かなめが玄関を閉める時、廊下で羽山がそんな声をあげていた。

かなめ達が向かった先は、運河公園。
親子連れなどでにぎわう一角から少し外れた所で、博雅が待っていた。
「よくわかったな」
「昨日、ルシフェルと相談して、公園に手がかりがないか調べていたんです」
「成る程？」
かなめは博雅横にいたルシフェルに意味ありげな視線を送った。
「せ、先生……」
「それで？」
「ここです」
博雅は、足下に敷き詰められた草をどかした。
「この草は？」
「通行人に気づかれないために自分が」
「まぁ、いいだろう」
博雅は無言で草の下の砂を、その草で払った。
「こ、これは」南雲が目をむき、
「成る程？」かなめが興味津々という顔で地面を見た。

「誰かが、これを隠したのは明白です」
博雅が答えた。
その足下。
そこには、地面にこびりついて真っ黒に乾いた液体があった。
「この量から見て、失血死は免れないな」
かなめがそう言った通り、血痕だ。
「では、誰かが？」
「これは話が厄介になって来たな」
かなめはそう呟いた。
「それと……」
博雅は、ベンチの下を示した。
そこには、片方だけのサンダルが転がっていた。
木製の、どこにでもありそうなサンダルだが。
「サンダルのかかとに、水瀬屋って書かれているでしょう？」
ルシフェルがサンダルを指さした。
「水瀬屋？」
確かに、囲み文字で「水瀬屋」と屋号らしきものが書かれている。
「ええ。水瀬君が時代劇見て――ほら、あるでしょう？宿屋の下駄に何とか屋って屋号の焼き鏝するの。あれをマネして」
「あいつはどこまで暇人なんだ」
「あの、それで、確か昨日って、那由他さんって」
「ああ……サンダル履きで外に出た」
かなめはサンダルと血痕を交互に厳しい顔で睨みながら言った。
「ここで、何かあったな」

ザァッ
かなめ達はメガクルーザーから飛び降りて水瀬の家に通じる石段を走り始めた。
「本格的に降り出す前に血痕を見つけられてよかったですね」

「ああ。桜井も家に送り届けたことだし」
一人だけ、鏡魔法の空間防御で雨を避けるルシフェルがジャケットを頭から被るかなめに言う。
「この降りだ。遅れていたら終わりだった――ん？」
先頭にいたかなめが不意に足を止めた。
「先生？」
「おい。なんだ？アレ」
かなめがあきれ顔で指さした先。
そこは石段の上。
古びた石段を登っていくのは、
「あれ……マグロか？」
「ブリ……でしょうか？」
よくわからないが、とにかく、石段をゆっくり登っていくのは、間違いなく巨大な魚だ。
「と、とにかく、追いましょう」
博雅の言葉に、皆は石段を登り始めた。

どうやら魚を誰かが担いでいる。
そう気づいたのはいい。
だが、誰が？

魚はそのまま、勝手口の中へと消えていった。

「先生。自分が勝手口から入ります」
近くに転がっていた木の棒を拾った秋篠に言われ、
「よし。南雲先生は玄関から」
「というか……変じゃないですか？」
「何が？」
「羽山が動きません」
「あの種馬なら今頃布団の中だろうよ……行け」

「了解」

水を使う音。

何かをまな板の上で切る音。

台所ではそんな音が聞こえて来る。

かなめとルシフェルが霊刃を抜き、その背後で棒を握りしめる秋篠に指でカウントを示す。

3……

2……

1

バンッ！

ドアが乱雑に開かれ、三人が飛び込んだ。

その物音にあわせるように、南雲も台所の入り口を塞いだ。

「動くな……って？」

台所にいたのが誰か、皆が即座に理解できた。

「ほう？」

はっきりいって水瀬家の台所は、調理場といった方が正しいほど、機材が充実している。

コンロ一つとってもすべてが業務用。

冷蔵庫に調理台、大型オーブンなど、本格的な業務用厨房機器が

壁一面に並ぶ様は、かなり圧巻だ。
その光景を前にした南雲の興味は、即座にその子供から完全に離れてしまった。
その一角を、特注だろう日本酒専用保管ケースが占め、「禁酒！飲む時は土下座して許可を取ること！」とルシフェルの手で書かれた張り紙が貼り付けられている。
酒の銘柄もかなりのものが揃っている。
それを確認した南雲は、張り紙に小さく書かれた「けち！」という水瀬の書き込みや、ガラスに貼り付けられたセンサー反応型地雷はあえて無視した。

「な、南雲先生？」
博雅があきれるのを無視する形で、南雲は台所の隅々まで見物に回り、思った。

（こりゃ、しばらくはここにいた方がいい料理が出来るな）

ラックに納められた包丁に手を伸ばしながら、南雲は、自分がここに来た理由を忘れていたが、とにかくかなめと博雅だけは子供から目を離さなかった。

台所の調理台にのせられた巨大な魚を前に、巨大な包丁を持つのは、やたらと背の低い子供。

「み、水瀬？」

その声に子供は振り向きもしない。

ただ、雰囲気から察するに、かなり怒っているのはわかる。

子供は、魚を解体している。

「おーい。水瀬ってば」

南雲の声にも答えることはない。

子供は無言で魚の解体を続ける。

「水瀬！」

かなめが怒鳴り、ようやく子供は振り返った。

目が座っていた。

「……おかえりなさい」

子供、つまり水瀬は不機嫌さを隠さない声でそう言うと、解体作業に戻った。

「お前、そんなマグロ切り、よく持ってるなぁ」

「……」

「どうしたんだ？」

「……誰も探しにも来てくれなかった」

水瀬はぶすっ。とした声でそれだけ言った。

「救難シグナル出し続けたのに、誰も捜索に来てくれなかった」

かなめ達は、顔を見合わせた。

救難シグナルとは、近衛兵が緊急事態に陥った時に発信する救助を求める信号のこと。

「ずっと助けに来てくれるって信じてたのに」

「お前……そのシグナルって、もしかしてＧＳ３を使っていたんじゃないのか？」

南雲が思い当たったことことを問いかけた。

「知らない……これ」

ぐすっ。

鼻をすすった水瀬が南雲に渡したのは、
「GS7……最新型じゃないか」
救難シグナルは発信されたままになっている。
「こりゃ、不良品だな」
「不良品？」水瀬がきょとん。とした顔で南雲を見た。
「ああ」
掌の中でシグナル発信装置を転がす南雲が言った。
「多分、発信装置が壊れてるんだ。これじゃどうしようもない」
「そんな不良品のせいだけじゃないもん！っていうか、みんなだって、探しににも来てくれなかったじゃない！」
わーんっ！
やけくそ気味に解体を続ける水瀬がわめいた。
南雲の見立てだと、最高級本マグロ。推定価格一千万円級が水瀬の手によって芸術的なまでに捌かれていく。
どうやら、やけくそになっても食材を傷つけるようなことだけはしないらしい。
大トロやナカオチなど、マグロの最も美味い部位が次々と並び、南雲が唾を飲み込む。
「仲間だと思ってくれているって信じていたのに！」
水瀬はそれらをタッパに詰め込み、「水瀬専用！」と書いた張り紙をした挙げ句、冷蔵庫に放り込んで冷蔵庫に鍵をかけてしまう。
南雲は無意識に、鍵の場所を頭にたたき込んだ。
「もう知らないもんっ！ルシフェだって、先生達だって！僕を殺そうとしても、助けようとはしてくれないんだもんっ！僕なんてどうでもいいんでしょう！」
「い、いや……そういうことじゃ」
南雲とかなめはばつが悪いという顔でお互いを見合った。
「教育委員会に抗議するもんっ！先生が生徒の暴行を指導したって！」
「い、いや……それはな？」

確かにその通りだ。
人を簀巻きにして運河に投げ込むなんて、たとえ相手が水瀬であっても、立派な犯罪行為なのだ。
「僕だって一応の扱いは人間だもん！それなのに、誰一人、僕の人権認めてくれないんてあんまりだよぉ！」
「まぁ……落ち着け」
「ぐすっ。運河で水死体に出くわすし、出た途端にサメに追いかけられて、逃げに逃げて黒潮に捕まって、大間まで流されて、マグロに頭からかじられたんだよ！？ずっと、誰か助けに来てくれるって信じてたのに！」
「水死体？」
かなめはその言葉にひっかかった。
「水瀬、水死体とは？」
「運河の途中で浮いていた。取水口の所で見たモン。真っ二つにされた男の死体がね？水中で一つになって泳いできたんだよ？」
「どんなホラー映画だ。それ」
「食べられるとイヤだから逃げたら、いつの間にかいなくなったけど」
「水瀬」
かなめが言った。
「もっと詳しく話せ」
「やだもん」
水瀬はそっぽを向いた。
「……ふぅ。やむを得ない」
「どうするんですか？」
小声で訊ねる南雲にかなめは自信ありげに答えた。
「イーリス殿にうかがった方法がある」
かなめはポケットから５００円玉を取り出して水瀬に見せた。
「水瀬」
水瀬はそっぽをむいたままだ。

「お前、イーリス殿の珍しいコイン、欲しがっていたな」
「……」
「これだろう？」
水瀬の前につきつけられた、何の変哲もない５００円玉。
「裏が表で、表が裏の５００円玉。お前、欲しがっていたな？」
「……」
水瀬は視線だけ５００円玉に向けて、黙って頷いた。
「イーリス殿は１０万円といっておられたそうだが……私はそこまでガメ……いや、高い値段を要求しない」
「……」
水瀬の目が、興味津々であることを告げている。
「１万円でどうだ？」
「ほ、本当？」
「ああ。ただし、機嫌直したらな」
「うん！」
水瀬は台所の隅っこの引き出しから財布を取り出し、中に入っていた１万円札をかなめに手渡した。
「ほ、本当にいいの！？」
「いいとも」
かなめがにこりと笑った。
しまってくる。とうきうき顔の水瀬を送り出したかなめに、南雲が耳打ちした。
「少佐。あれ、本当にそんな珍しいコインなんですか？」
「単なる５００円玉だ」
「では！」
「あれはイーリス殿が編み出したダマシだ。水瀬には効果てき面だと聞いていたが……」
かなめは少し考えてから言った。
「ルシフェル」
「はい？」

「あまり、水瀬に金を持たせるなよ？」
「……了解です」

「つまり」
解体したマグロを冷凍庫に移す水瀬にかなめは言った。
「間違いなく、６０歳代のアジア系男性、長髪に黒髪で、ヒゲ。頬に傷があったんだな？」
「うん」
水瀬はたいして興味がないという顔で頷いた。
「お前、真っ二つにされた人間が一つになったら、もっと驚けよ」
博雅があきれ顔で言ったが、水瀬はきょとんとして、
「見たときは驚いたよ？」
「いや、今もさ」
「だってね？」水瀬は言った。
「人間っていっても、元・人間だもん」
「まて。どういうことだ？」
かなめが水瀬に訊ねた。
「元・人間とは……つまり、人ではないと？」
「何度殺されても、高層マンションから飛び降りても死なない。そういう存在なんでしょう？」
「お前！」
南雲が驚いた顔で水瀬を見た。
「まさかお前、そいつが」
「マンションの前の地面に残っていた血痕から発せられる残存波と、水死体の波長が同じだってことはすぐわかったよ」
「そ、それで？」
かなめは興奮気味に問いかけた。
「それで、お前は何したんだ？」
「だから、逃げた」

「な、何故？」
「両手縛られてたんだよ？」
「魔法でなんとかすればよかったじゃないか！」
「……」
水瀬は、しばらく考えた後で、ぽんっ。と手を打った。
台所でかなめが暴れる音が響き渡ったのは、それからすぐのことだった。

「と、とにかくだ！」
かなめは水瀬に怒鳴った。
もう、声がかすれている。
「お前はツメが甘すぎる」
水瀬は無言で自分の指の爪を見つめると、ぺろりと舐めてみた。
「……嘘つき」
「バカか貴様っ！」
ゲホゲホゲホッ
勢い込んで怒鳴ったせいで喉が詰まったらしい。
かなめが激しく咳き込んだので、水瀬は水の入ったコップを差し出し、かなめがそれを乱暴に飲み干す。
「……ハァ。ハァ」
「先生、とにかく落ち着くのが先決」
「なら、もう少しだな……」
かなめも怒りすぎて、もう何を怒っていいのかすらわからない。
「ご飯、まだでしょう？作るから待ってて」
「それで誤魔化そうというのか？」
「空腹を誤魔化す位は出来るよ？」
クウッ
小さく鳴った腹を押さえたかなめが、それでも言った。
「せっかく、マグロがあるんだ。鉄火丼にしてくれ」
「えーっ？いい山芋が手に入ったから、まぐろととろ丼にしようよ」

「それもいいな」
ようやく、かなめの口元に笑みが浮かぶ。
かなめもわかってはいるのだ。
だから、内心では水瀬に期待している。
いくら水瀬を怒ったところでどうしようもない。
コイツはどんな失態を犯しても、帳消しにするほどの功績を挙げている。
恐らく、いや、もしかしたら私自身の希望かもしれないが、水瀬はバケモノと接触することで、何らかの対処方法を、すでに見いだしているのではないか。と。
もしかしたら、自分の甘えかもしれない。
だが、不思議とそれと信じてみたくなる。
それこそが、水瀬の不思議なところだと、かなめはそう思っている。
「じゃ、センセ」
水瀬はエプロンを身につけながら、
「ご飯、用意しておくから、仕事してきて？」
「仕事？」
「そう」
水瀬は何でもないという顔で言った。
「お客様（侵入者）だよ？」

第十一話

水瀬邸――

建物そのものは古くからの日本家屋だが、その内実はかなり異なることは、軍事もしくは警察関係者なら一晩過ごせばすぐわかる。

水瀬自身は柱が細いとか、間取りが気に入らないというが、それは目に見える木造部分だけを指す言葉に過ぎない。

かなめは、この家の間取り図を見た途端に顔をしかめたのを思い出す。

ほとんどの窓は小銃弾に耐えられる防弾加工済。

非常時には廊下の各所に対爆シャッターか展開され、外部に対する阻止装置もかなり充実している。

何のためにここまでしているのか――かなめにはわからない。

水瀬も語らない。

だが、その備えが、今はむしろ有難い。

「あれ？どうしたんスか？」

茶の間では、羽山が刀の手入れをしていた。

「涼子さんは？」

「今日、夜勤っす」

「ルシフェル。セキュリティを――羽山」

かなめは羽山に言った。

「その刀で、斬ってみたいと思わないか？」

「へ？何をですか？」

「ついてこい。刀の出番だ――――近衛採用候補者の実力、見せてもらうぞ」

意味がわからず、きょとんとする羽山の横を抜けつつ、かなめは霊刃を抜く。

「な、何かあったんスか？」

羽山は刀を鞘に収め、慌てて立ち上がった。

「羽山」

かなめの後に続く博雅が緊迫した顔で、羽山に

「敵だ」

と告げた。

「敵？泥棒？ヤクザ？」

「ここに来る連中か？」

かなめの睨みに怯えながらも、羽山はかなめに説明した。

「水瀬のヤツ、鈴紀絡みでヤクザの組事務所に潜入したって聞いてたもんで」

「鈴紀？――――ああ、お前の従姉だったな」

かなめはある生徒の顔を思い出した。

羽山鈴紀（はやま・すずき）――――高等部騎士養成コース2年。

お嬢様然とした容姿・立ち振る舞いからは想像できないほどの、よく言って破天荒なキャラクターだ。

彼女の存在だけで高等部2年担当教員は、“明光学園創立以来の罰ゲーム”を味わっていると、職員の間で気の毒がられている。

どれほど厄介な存在かといえば――――

「ヤクザの組事務所から拳銃盗み出して、ヤクを他の組に横流ししたって」

これほどだ。

「水瀬がそのお先棒を？」

「オヤジさんからの指示だったそうです。鈴紀、水瀬伯爵の、“公表されるくらいなら死を選ぶ”って程の弱み握っていると豪語してますから」

「いずれお館様（注：由忠のこと）に殺されるぞ――おっと、そんなことをいってる場合じゃないな」

かなめは現実に頭脳を引き戻した。

「ルシフェル。敵の数と現在位置はわかるか？」

「センサーに反応あり……数、測定不能……離れを包囲しています」

茶の間の壁に格納されていたセキュリティシステムを操作していたルシフェルが液晶モニターを睨みながら報告した。

「数、測定不能？」

かなめは、ルシフェルの肩越しにモニターを見た。

それは敷地全体をカバーする索敵装置の検知情報を映像化したもの。

「完全に包囲されているな」

武器を取りに戻っていた南雲が部屋に入るなり、その数の多さに驚いた声を上げる。

「この赤い点一つが？」

「妖魔、またはそれに類する存在」

羽山の問いにルシフェルがそう説明した。

「数は――えっと……」

羽山は１０まで数えて止めた。画面が真っ赤になっている。

反応があまりに多すぎるのだ。

ルシフェルは、ハッ。と息を飲んだ。
「未亜ちゃんは!?」
「――離れだ」

離れ。
現在、村上達が潜んでいる建物。
敵の反応は、間違いなくそこを集中攻撃すべく展開している。

「離れだけを防衛すれば済む――とはいえないか」
かなめはモニターを見ながら呟いた。
「水瀬に任せればいいでしょう？」
博雅の言葉はもっともらしいが、
「ムダ」
「ルシフェル？」
「水瀬君、まだ怒っている。というか、“この程度、その頭数でどうにかしろ”って思っているに違いない」
「……そりゃあ」
博雅は言葉につまった。
確かに自分に羽山は実戦となればおまけだろう。だが、ルシフェル、かなめ、南雲の三人は実戦経験者の中でもかなりの猛者といって差し支えないだろう。
三人もいればどうにかなる。
それは確かに、一般的にも通じる判断だと思う。
当の本人達はたまったものではないが――。

「ルシフェル、一角を任せるぞ？」
これ以上、待っていられない。
敵が動く前に防衛ラインを決めるべきだ。
かなめは作戦をまとめた。

「私が離れの東側、ルシフェルが西側。南雲と羽山は遊撃隊となって、この建物への攻撃を阻止。羽山、死にたくなかったら南雲の指示を聞き逃すな」
「あの……自分は？」
「秋篠。お前には別任務がある」
「別任務？」
「ああ」
かなめはぽんっ。と博雅の肩に手を置いた。
意味がわからない博雅は救いを求めるようにルシフェルを見るが、彼女もまた、黙って頷くだけだ。
「お前はルシフェルと共に行動。その指示に従え」
「その前に武器を……俺、スタンブレードさえ」
「お前の武器は」

時刻は9時を回っている。

敵は全く動かず、包囲を続けるだけ。

まるで、何かを待っているように、動こうとしない。

……本当に大丈夫か？

博雅はやっと足の震えが収まったところだ。
すくんだ足を確かめるように、何度も足下を蹴ってみる。
足が動くことが、なんだかとても嬉しかった。

それが安堵感を生み出したのか、博雅は周囲の景色にやっと気が

回るようになった。

月が青白い光を放ち、大地を美しく染め上げる中、

博雅はふと、庭の端に咲き誇る花を見つけた。

垂れ下がったような白い花。

狂い咲いた“月下美人”

普通なら6月以降に咲くはずの花が、儚き美を博雅に見せつけるように季節外れの美を誇っていた。

珍しい。

博雅はその花に魅入られたように視線を向けた。

月下美人。

言葉の響きのよさから、博雅の好きな花の一つとなっている。

夜に咲き始め、朝に一夜限りでしぼむ儚さが博雅は好きだ。

それは人の一生のようだから。

「準備いい？」

博雅は、この世に咲くもう一つの月下美人からの声に我に返った。

ルシフェルの美しい黒髪が月の明かりを受けて銀色に輝いている。

「ああ」
博雅は頷いた。
花言葉は「はかない美、儚い恋、繊細、快楽、艶やかな美人」
それが月下美人。
ルシフェルの誕生日7月19日の誕生花と知った時程、言葉の縁に感じ入った瞬間を、博雅は知らない。
博雅は、目の前の自分だけの月下美人の声を待つ。
その華を、愛しき彼女を守るために。
その手に握られているのは――笛だ。
「博雅君の笛で敵が動き次第、私達も動く――葉双程(はふたつ)じゃないけど、期待しているよ?」
「……わかった」
月下美人。
美しき月下の世界。
博雅は心を開放しながら、そっと笛に口を付けた。
「ま、マジっすか?これ」

羽山は南雲の横で震える声をあげた。
目の前の闇の中。
そこから放たれるのは赤い光。
最初、それが何だか羽山はわからなかった。
「よく見ろ」
南雲はそうとしか言わない。
目を凝らした羽山は、悲鳴を飲み込むのがやっとだった。
腰を抜かさないだけ褒めて欲しいと言いたかった。
赤い光――
それは、かつて人だった者達の放つ眼光だった。
暗闇にとけ込むようにしてこちらを見つめる顔顔顔――。
虚ろな表情を浮かべる顔顔顔――。
闇の中に潜む数はわからない。
闇に潜む敵の正体が、わからない。
それが逆に恐怖心を煽る。
「怖いか？」
南雲の問いかけに、

「こ、怖くないっス」
「ウソつけ」
南雲は言った。
「俺は怖い」
「……俺もっス」
「正直だな」
「俺は正直者で通ってるんですよ――――その、単純バカって」
「草薙並か？」
「あれは単細胞っていうんです」
カチッ。
羽山は恐怖を紛らわせるように刀の鯉口を切った。
「ところで、その刀」
「前の一件の時、水瀬からもらったんです」
羽山はバツが悪い顔で言った。
「無銘だけど、せっかくだから」
「お前、斬れるのか？」
「尚武のオヤジさんは、かなりのモノって言ってくれましたけどね」
「問題はお前の覚悟だ」
南雲は、手にしたトンファーの調子を確かめながら言った。
「敵と殺し合う覚悟はあるか？そう意味で聞いたんだ」
「えっ？」
「戦いは武器がやるんじゃない――――人間の覚悟がやる。お前に戦う覚悟はあるか？」
「……」
羽山は小さく息を吸って、
「やります」と言った。
「俺にも、やりたいことも、守りたいものもありますから――――なにより」
「ん？」
「こんな時にのうのうとメシ作ってるあのバカ、もう一回ブン殴ら

ないと気が収まりません！」
「……成る程？」
南雲が、かすかにみそ汁の匂いを嗅いだと感じたその時、
博雅の笛の音が空間全体に響き始めた。

「あ、始まった」
沸騰しないように火加減を注意していた水瀬は、不意にコンロの火力調整レバーを掴む手を止めた。

コトコト。
鍋が奏でる演奏も好きだが、この音は次元が違う。
鍋の音が結果として肉体を癒すなら、この笛の音は、魂を癒す。
荒み傷ついた魂をそっと包む天女の如き音色。

水瀬は、鍋からあがる焦げた匂いに気づくまで、その音色に聞き入っていた。

「これが……」
羽山は言葉を飲み込んだ。

博雅の笛は、羽山のイメージするところでは、水晶が霧雨となって振る光景であり、天女の舞う光景――いや、言葉に出来ない光景だ。

音色を傷つける無粋の存在、その全てが許されない。

羽山はそう思うと、笛の音色に魂を委ねた。

「羽山」

ぐいっ。

羽山は肩を掴まれ、魂を現実に引き戻された。

パシッ。

軽い音を立て、羽山の拳は南雲の掌に受け止められていた。

「無粋ですまないとでも言っておこうか？」

ここに何故いるか？

その答えを思い出し、羽山は赤面した。

「――――見ろ」

顎でしゃくられた先。

暗闇の敵は、次々と赤い光を失っていく。

「これは？」

「死霊の魂が解放されていくんだ」

羽山の目には解放された魂は見えない。

見えるのは、笛の音色に誘われるように、消えていく赤い光だけ。

すでに半数近く光が消えた。

「相手は――死霊っていうんですか？」

「ああ。あの戦争で幾度も戦った……かつての仲間のなれの果てだ」

「……屍鬼」

ごくっ。

羽山はつばを飲み込んだ。

戦場で死んだ人間のなれの果て。

頭か心臓を潰さなければ絶対に活動を停止しない恐怖の存在。

戦線では妖魔以上に恐れられた存在。

それが、目の前にいる敵の正体だと、知ったからだ。

「どうやったかは知らんが、敵はこの辺をさまよっている連中を従えてここに来たんだろう」

「……俺、敵が死霊だなんて」

「敵が何者か？それを少ない情報を元に引き出すのも、騎士（プロ）の仕事だ」

「精々、精進しますよ」

羽山が肩を落とした。

「とにかく、今回は秋篠の大金星だ」

南雲は慰めのつもりか、羽山の肩に手を置いた。

「敵はこのまま消え去り――」

ババババッ！！

上空から聞こえる爆音に南雲は言葉を止めた。

「――なっ！？」

それは上空を旋回する民間ヘリ。

テレビか何かの取材か？
どこかのバカ社長を迷惑輸送中か？
明らかに違法高度での飛行だ！

……そんなことはどうでもいい！

異様に低い高度で飛ぶヘリの爆音。

これだけで十分問題なのだ！

「先生！」
持ち込んだ武器の中にスティンガー（歩兵携帯型地対空ミサイル）があったことを思い出した南雲の耳元で羽山が怒鳴った。
怒鳴らなければ、声が聞こえないほど、ヘリの爆音は凄まじい。

「笛の音が！」

南雲は青くなった。

そうだ。

あの馬鹿ヘリのおかげで、笛の音色はかき消された。

つまり――

「羽山、行くぞ！」

トンファーを構えた南雲が怒鳴った。

闇の中から次々と現れる敵――死霊にすくむ羽山は、怒鳴り声に弾かれたように刀を抜いた。

「気後れするな！死にたくなかったら――斬れ！」

「はいっ！」

南雲と羽山は、死霊の群れの中へ躍り込んだ。

「演奏を続けて！」

ルシフェルは、上空へ向け、不可視の一撃を放つと、そのまま死霊の群れの中へと飛び込んでいく。

博雅に出来ることといえば、ヘリの爆音と爆発音に負けないよう、演奏を続けるだけだ。

「このぉっ！」

袈裟斬りの一撃で、羽山は死霊を真っ二つに切断した。

「やった！」

「馬鹿っ！」

グンッ！

襟首を掴まれた羽山は、その瞬間、宙を舞った。

南雲が自分を力任せに後ろへと放り投げたと知ったのは、とんぼをきって着地した時だ。

「頭か心臓を狙え！」

南雲の怒鳴り声に反発しようとして、出来なかった。

真っ二つにされた死霊は、ビクビクと痙攣するように動き続けていたのだ。
ガンッ！
南雲のトンファーが振られる度に、何体もの死霊が頭を粉砕され、宙を舞う。
まさに鬼神の戦いさながらの展開に、羽山は一瞬、我を忘れてしまう。
「相手は屍鬼だぞ！？人間相手にしているのとはワケが違うんだ！」
「はっ、はいっ！」
羽山は柄を握り直すと、再び死霊の群れの中へと躍り込んだ。

「敵の親玉は！？」
霊刃を振るい、魔法攻撃を放ち、ルシフェルは確実に死霊を倒し続けていく。
やたらと多いのはパジャマ姿の死霊。
どうやら、病院での死者を中心に集めてきたらしいと検討をつけたルシフェルが探すのは、その中にいるはずの、たった一体の死霊。

そう。

霧島だ。

今回の騒ぎの首謀者が霧島なら、彼を倒すことで、死霊達に何か動きがあるはず。

それがルシフェルの判断。

だから、ルシフェルは霧島を捜した。

（時間が経つだけこっちが不利だ）
数がわからない以上、徒に体力と魔力を消耗するのは愚の骨頂。
一度、博雅の前まで後退、闇の中から続々と出現する敵に、ルシフェルは魔法を放ち続けた。

魔法の散弾。

無数の魔法の弾丸を散弾銃のように放つ攻撃魔法。
集団で突撃する敵を阻止するために兵士達が散弾銃を乱射する理論でルシフェルはその攻撃を継続する。
貫通力は普通の魔法の矢に比較してお話にならない位まで大幅に低下するが、対人殺傷力としては十分なレベルを維持している。

グシャッ！
グシャッ！
闇から出てくるなり、頭部や体を挽肉にされた死霊が地面にのたうち回り、消えていく。

ドンッ！
ズンッ！
離れの反対側を守るかなめも勇戦していることは、その魔法攻撃の爆発音と振動で知れる。

そんな中で、ルシフェルは素早く今後の作戦を立てた。

――ヘリは燃料パイプを破壊したから、早ければそろそろ空中爆発する。

ドォォォォンッ！

どうやらパイロットは海上へとヘリを移動したようだ。
湾の方で爆発音がした。
パイロットとしての根性だけは褒めてやろう。
ルシフェルはそう思った。

――――これで、博雅君の笛が敵を押さえてくれる！

粘っこい爆音が響き終えると、あたりには博雅の笛の音色が戻ってくる。

――――よしっ！

先程までの動きがウソのように、死霊達はすべての動きを止めた。
音に気づいたらしい。かなめの魔法攻撃音も消えた。

そして――――

ルシフェル達の草刈りが始まった。

「あーあ……」
焦げた鍋を前に、落胆する水瀬は笛の音色に気づいてため息をついた。
「お鍋と引き替えの勝利かぁ……辛い勝利だねぇ」

第十二話

「霧島は！？」
ルシフェル達には、勝利にも、博雅の笛の音にも、すべてに酔いしれることは出来なかった。
「こっちは確認していない！」
「こっちも！」
離れの前で、ルシフェル達が集結した。
「誰か、霧島と接触した者は！？」
かなめの問いかけに皆が首を横に振る。
誰も本当の敵と接触していない。
「雑魚に踊らされたか！？」
かなめは焦る心を抑えようと唇を噛みしめた。
「この私が――――っ！」
「先生！」
羽山が悲鳴に近い声を上げた。
「離れのドア！」
全員の視線が一斉に離れに入る玄関ドアに向けられた。

ドアは、風に揺れていた。

「離れの中か！？どういうことだ！？」
離れの玄関ドア。
それはかなめの真後ろに存在した。
かなめはそこに張り付くように戦っていた。
だから、かなめは魔法攻撃に特化した戦闘を繰り広げていたのだ。
それなのに？

「ええいっ！」

かなめが離れのドアを蹴り破った。
「羽山、南雲、続けっ！ルシフェルと秋篠、ここを確保しろっ！」

時計の針は、かなめ達が戦っていた頃に戻る。

ズンッ！
かなめの魔法攻撃による振動は、その真下にある地下シェルターを揺らす。

パラッ。

天井の漆喰が落ちるのを見つめながら、シェルターの中に固まっているのは、村上と那由他だ。

「だ、大丈夫よね？」
村上にすがりつきながら怯える那由他は、恐る恐る訊ねた。
「何とも、ないよね？」
「ああ。大丈夫だよ」
那由他の華奢な肩に手を回し、微笑む村上は、未亜に言った。
「未亜ちゃん。本当に御免ね？」
「えっ！？」
シェルターの中をせわしく走り回っていた未亜は、その声に飛び上がった。
「な、なな、何？」
「？だから」
村上は言った。
「僕達にお茶を持ってきてくれたせいで、こんな騒ぎに巻き込まれるなんて……どうしたの？」
「な、なんでもない！」

うわずった声で未亜は怒鳴った。
「何でもないよ！大丈夫だから！」
「？」
怪訝そうな顔をした村上は、未亜の手にしたモノに気づいた。
「リュック？」
「う、うん！」
未亜の顔は緊張のせいか、青くなっていた。
「お金も入ってるよ！？食べ物とか！」
未亜は走って来るなり、それを村上達に突きだした。
「未亜ちゃん？」
「さっき、構造図見たんだ。そこの壁、抜け穴になってるから！」
「逃げろ――そういうんだね？」
村上は、どこか悲しそうな顔で未亜に言う。
「僕達に」
「そ、そうだよ！」
未亜が指さすのは、シェルター内部の様子を示すモニター。

今、シェルター入り口に3つの反応があった。
何故か、カメラモニターがブラックアウトしているので、誰が入ってきたかわからない。

もし、彼らが侵入者だとしても、シェルターの入り口はパスワードを打ち込む必要があるため、開放には時間がかかる。

時間は稼げる。

問題は――

「最初の爆発音がしてからね？」
未亜の声は震えている。

「少しして、ドアが一度だけ、開放されたんだ」

「……えっ？」

村上と那由他は思わず顔を見合わせた。

そう言えば、突然の状況に、二人は抱き合っていただけ。

シェルター内部の様子なんて気にしなかった。

「それからずっと……ドアが順番に開いていくんだよ！」

ガチッ！

ガチッ！

未亜は何度もモニター下にあるスイッチを片っ端から押していく。

「ダメなんだよぉ！閉鎖（ロック）スイッチが作動しないんだよ！」

「て、敵は、霧島さんはどこまで来ているの！？」

村上達がモニター前に駆け寄ってくる。

ピッ

村上の問いに答えるように、“１８”と書かれた部分のランプが点灯した。

「１８番目のドアが開いた！」

未亜が悲鳴を上げた。

「あと２つ！――――先輩！」

未亜はもう泣いていた。

恐怖のあまり、泣いていた。

村上は、そう思った。

「未亜ちゃん……」

だから、村上まで泣きたくなった。

この子を恐怖のどん底に落としているのは誰だ？

自分だ。

そう気づくことが出来たから。

「逃げて！」

村上の手を掴むと、未亜は何とか村上を脱出口のある壁へ引っ張ろうとする。

「先輩は、まだ死んでもらっちゃ困るんだから！」

そして、四苦八苦して分厚い装甲の張られた脱出口を開いた。

ピッ

１９番目のドアが開いた。

「美奈子ちゃんにごめんなさいって土下座して頭床にこすりつけてもらうまで――私が許すまで、死んでもらっちゃ困るんだから！」

未亜は怒鳴りながら先程のリュックを村上に突きつけた。

「未亜ちゃん」

「先輩、逃げて！」

脱出口のハッチを開けながら、未亜は村上を促した。

「那由他ちゃんを守るんでしょう！？」

「……」

「……」

村上は、那由他を見つめると、

「ありがとう」

そう言って、右手を出したが――

「やめてよ！」

未亜はその手をはたいた。

「言ったでしょう！？美奈子ちゃんに土下座してもらうまで許さないって！」

「ああ――そうだね。そうだったね」

村上は辛そうに笑うと、那由他を促した。

「那由他――先に」

「はっ……はい」

那由他は言葉に詰まった様子で、それでも未亜に言った。

「未亜ちゃん、先に行きます」

「私はいかないよ！」

ドンッ！

「きゃっ！？」

未亜に突き飛ばされる形で、那由他は闇の中へと消えていった。

「未亜ちゃん！？」

「私がいても邪魔でしょう！？」

「でもっ！」

「私のダンナが上にいるはず！だから！」

未亜は村上を脱出口に押した。

「このハッチはすぐに閉鎖する！ロックはこっちからじゃないと出来ないんだもんっ！」

「――――御免っ！」

村上は、そう言い残して那由他の後を追った。

「……」

滑り台にようになっている脱出口内部――――暗闇。

それは、村上達の未来を暗示するように、真っ暗闇。

「御免だなんて……」

ガンッ

ガチャッ

ピーッ

脱出口の重いハッチが閉ざされ、ロックがかけられた。

もう、新しいパスワードを別室にあるシェルター内部管理システムのコンソールに打ち込まないと、ロックは解除されない。

敵はすぐそこまで来ている。

「御免って……本当は私がいわなきゃいけない言葉なんだからね？先輩」

未亜の頬を一筋の涙がこぼれる。

「本当はね？本当は先輩のこと、本当のお兄さんのように思っていたんだから……」

ビーッ！

脱出口出口のセンサーが作動し、二人が脱出口から出たことを告げた。

「でも、でもね？」

未亜はハッチに向けて語るのを止めようとしない。

「美奈子ちゃんを裏切ったのは先輩なんだからね」

その声は、憎悪に包まれていた。

「美奈子ちゃんの人生狂わしたこと、永遠に後悔してもらうんだから！」

クックックッ……。

アーッハッハッハッ！！

「こ、これで」

未亜は腹を抱えてその場に蹲った。

「ハハハハッ！これで私、永遠に美奈子ちゃんに顔向けできないんだぁ！」

突然、未亜は狂ったように笑い、そして泣いた。

「美奈子ちゃんを、絶対に裏切っちゃいけないところで裏切ったん

だぁ！」

ハハハッ……アハハハハハッ！！

シェルター内に未亜の涙混じりの笑い声が響き続ける。

美奈子が大好きな村上先輩。

会いたいと願い続けている大切な相手。

その彼を、どさくさ紛れに遠くへ、そしてより危険な場所に送り出した。

殺したのと同じだ！

私は、親友の顔をして、美奈子の願いを踏みにじって、自分の憎悪だけを満足させた！

「私――――私はもう……」

よかれと思ってやった。

村上先輩を、ここから追い出すのが正しいと思ったからやった。

ここにずっといたのも、今日辺り、何か起きそうだと思ったから。

逃げる手はずを整えたのも、

シェルターの内部管理システムに細工しておいたのも、

敵の侵入にあわせて、実はドアを開放していたのも、

水瀬君達の保護が頼める方への抜け穴じゃなくて、施設外へ通じる抜け穴に誘導したのも、

全部――――全部、私のお膳立て。

村上先輩達が怯えている敵なんて関係ないこと。

村上先輩達は見事に私の策に引っかかってくれた！

でも……結果はどうだ？

この喪失感――――いや、罪悪感はどうだ？

「痛いよぉ……」

未亜は胸を押さえて嗚咽する。

「苦しいよぉ……助けてよぉ……南雲先生……」

人殺し。

その罪悪感は、未亜を容赦なく責め立てる。

兄と慕った者を裏切り、人二人を地獄へと送り出した未亜。

ピーッ。

彼女が最愛の人に救いを求めるその背後で、２０番目のドアが開いた……。

第十三話

ドアの開く音に、未亜は振り返った。

黒い服に黒髪の男が一人、虚ろな目で立ちつくしている。

何の表情もない、能面のようなうつろな顔。

死に神のような男の手にしたナイフが、照明に照らされて鈍い光を放っている。

「……」

半開きの口は声を発しない。

「な、何よ」

壁に後ずさりながら、未亜は気丈にも言った。

「何？私が何したっていうの！？あ、あんたが追いかけやすいように、お膳立てしてあげんたんじゃない！」

「……」

「そうでしょう！？こんな所にいたら、先輩達を襲えない！だから時を待っていた！違うの！？私はその時を作ってあげた、あんたにとって恩人様なんだからね！？」

恐怖のあまり、それまでとは違う涙を流しながら、震える膝で未亜は何とか男との距離をとろうと虚しい努力をする。

「さっさと消えてよ！私は今、あなたを手伝ったんだから！」

心の痛みに耐えながら、未亜は叫ぶ。

「行って、先輩達に自分の振るまいを後悔させて！――――さぁっ！」

一体、どれほどにらみ合いが続いたか。未亜にはわからない。

「……」

フッ。

男の姿が、未亜の前から消えた。

「……」

ズルッ。

敵の消失に緊張の糸が解けたのだろう。

未亜は床にずり落ちた。

「フフッ……無言の会釈なんて……感謝してくれたってこと？」

口元を緩め、未亜は自嘲気味に笑った。

未亜は確かに見た。

男が消える直前。

男は、未亜に軽く頭を下げたのだ。

感謝。

そういいたかったのだろう。

「先輩……？」

全身に力が入らない。

「これから苦しむのは……先輩達だけじゃないからね？」

未亜の意識が、暗闇へと墜ちていった。

「命に別状はないよ」

布団に寝かされた未亜を前に、水瀬は言った。

「緊張が解けて、気絶したってところだね」

「そ、そうか……」

巨大な体を正座させ、緊張の面もちで水瀬の言葉を聞いた南雲が、

大きく安堵のため息をつく。
「母子共に健康だよ」
「そうか……」
ぴくっ。
南雲の体が固まった。
「ぼ、母子？」
「そろそろ三ヶ月」
「なっ！？」
「う・そ」
「！！！」
ガシャンッ！
南雲の一撃が、水瀬の座っていた畳をぶち抜いた。
「先生……人の家、なんだと思っているの？」
「やかましいっ！」
怒り心頭という顔の南雲が怒鳴る。
「人を勝手に親にするな！」
「いずれそうなるでしょう？」
「いずれだ！」
「かなめちゃん……また部下に先越されちゃうんだねぇ」
「……」
顔をいびつに歪めたかなめに睨まれつつ、水瀬は言った。
「皆様ご苦労様でした」
「……おう」
全身ズタボロの羽山が絶え絶えの息の下、
「一生分戦った気がした」
「まだまだだが」
かなめは怒りを抑えながら言う。
「初陣とすれば褒めるに値する」
「そりゃどうも」
「初陣で死霊４５体を刀剣攻撃により撃破か……うむ。羽山、あと

１００回、同じ事すれば胸を張って入団出来るぞ？」
「１００回！？」
羽山は泣きそうになった。
「あと、１００回も！？」
「ああ――そうしたらベテランと肩を並べられる」
かなめはどこか嬉しそうだ。
「要はこなした場数がモノを言うからな」
南雲はその大きな手で羽山の背を叩く。
「頑張れ」
「ところで」
死霊撃破数ではダントツトップを走った博雅が訊ねた。
「これは一体、どういうオチが？」

戦いの後。

保護していた村上達は逃走。
霧島の撃破は未確認。

「つまり」
ルシフェルがお茶を用意しながら言った。
「元に戻っちゃったということでしょう？」
「ありがとう。ルシフェル――元に戻った？」
博雅が怪訝そうに訊ねた。
「元って、つまり、村上さん達がここに来る前ってことか？」
「そうだね」
水瀬は頷いて、
「事態は悪化しても解決はしていないってことだね」
「俺達はともかく、村上さん達は？」
「……逃げちゃったんだもん」
水瀬はお茶をすすりながら言った。

「理由はわからない。でも、逃げた。それが村上先輩達の判断だったんだよ」
「……」
全員の視線が、水瀬に集まった。
「考えるに……村上先輩達はもう、敵の手の内にあったのかもしれないね」
「敵の――――手の内？」
「そうだよ。博雅君」
ふうっ。と、水瀬はどこか諦めたようなため息をついた。
「もう逃げ出すことの出来ない呪い……逃げても逃げても、逃げられない呪い……死ぬことも出来ず、逃げる事なんて出来はしない。呪いこそが敵の手の内……僕はそう思う」
「気の毒といえば気の毒だな」
ぽつりと羽山が言った。
「惚れた相手と一緒というのが、唯一の救いだけどよぉ……それでも、気の毒としかいえねぇなぁ」
「それもそうだけど」
水瀬は少しあきれ顔で皆に訊ねた。
「皆さん、もしかして――――自分達がこの件に関わるのはこれで終わりとか、思ってませんよね？」
「……」
皆が、水瀬の言葉が理解できず、怪訝そうな視線を向ける。
「もう……これだから」
失望した様子で水瀬は茶をすすった。
「おい、水瀬？」
「南雲先生……先生が一番危険なんだからね？」
「俺が？」
「村上先輩は、まだ追われている……この意味わかってる？」
「い、いや？」
南雲は、救いを求めるようにかなめの顔を見るが、

「……」
かなめは無言で横に首を振った。
「先生もまだ追われているってこと！そして、昨日の戦闘で、みんなが狙われることになったんだから！」
少し苛立った様子で、水瀬は言った。
「気をつけなくちゃいけないよ？――――事件は、まだ何も終わってないんだもん」
「……」
皆が青くなる。
水瀬の言葉。
それは、自分自身が、あの村上と同じになった。
そう告げる言葉だから。

「……ねぇ」
ブンッ！
何故か、ルシフェルが霊刃を抜き、
「何？」
水瀬が後ずさった。
「私達が戦っている間、お夕飯作っていた理由って――――まさか」
確かに、水瀬は戦闘に関わっていなかった。
その理由は？
それに思い当たったかなめ達が、エモノを手に水瀬に迫る。
「自分は呪いにかかりたくなかった。そういうことか？水瀬」
「ご、ご明察っていったら……殺されますね？ね？」

今晩の真実の宴が始まった。

第十四話

翌日。

「おはようございまぁす」

ポリポリ頭を掻きながら台所に顔を出したのは羽山だ。

「おはよう。羽山君」

台所では丁度、ルシフェルが朝食作りに追われていた。

テーブルに並ぶ大皿に盛られた煮付け、卵焼き、サラダが食欲を誘う。

「眠れた？」

「水瀬ノシたおかげでぐっすり眠れた」

それを作るルシフェルは、なぜか制服の上にエプロン姿だ。

「どうしたの？ルシフェルさん。その格好」

「これから警備実習なのよ。瀬戸さんの」

騎士養成コースの生徒である以上、学習カリキュラムに組まれた実習は、たとえ近衛騎士であるルシフェルでも避けられるものではない。

何より、昨晩の水瀬の話が本当だとすれば――

「瀬戸さんも“呪われた一人”だから気をつけないと」

「成る程？――いてっ」

皿の上に盛られた卵焼きに伸ばされた羽山の手を、ルシフェルの手が叩く。

「だめ。みんな揃ってから」

「はいはい――コーヒーだけ、もらいたいけど？」

「コーヒーメーカーに入ってる」

「どうも」

コーヒーをカップに注ぎながら、羽山の目は知らずにルシフェル

に向かう。
年上が台所に立つ姿はたっぷり見てきたが、同じ年頃の子、しかも制服姿というのは、一人暮らしが基本の羽山は初めてだ。
なんだか不思議と新鮮な、悪くない気分だと、そう思いながら、羽山はコーヒーをすすった。
ルシフェルは炊きあがったご飯ジャーを羽山に手渡しながら言った。
「準備出来たよ？みんな呼んできて」
「了解」
「それと、水瀬君はご飯抜きだからね？」

そして――
ちゃぶ台は戦場になった。

縁側に正座させられ、指をくわえている水瀬を後目に……。

その後、ルシフェルは実習に出た。
割り当てられている担当は、瀬戸綾乃だ。
トップアイドルを世界最強魔法騎士が護衛する。
最初から話題になったことだ。
マスコミが綾乃よりルシフェルを撮影に来ることも、そう珍しいことではない。
警備用プロテクターにヘルメット。
透明な防刃シールドにスタンブレード。そして魔法騎士を示す霊刃で武装したルシフェルが、警備のため綾乃の楽屋に入った。

「え？」

それが、綾乃の第一声だ。

「なぜ、悠理君じゃないのですか？お姉様」

ワケがわからない。

その顔は明らかにそう語っていた。

「今日、私が当番なんだよ？」

「悠理君は？」

「お休み――――納得できない？」

「はい……」

綾乃は力無く頷いた。

「悠理君が、ここまで理解力のない人だったなんて」

「え？」

ルシフェルには意味がわからない。

当番でないことが、どうして理解力とつながるんだ？

「私、何かあれば、何をおいても私の元へ駆けつけろと躾たつもりでしたけど……やっぱり、言うこと聞かなければ挽肉にする程度のお仕置きでは、生ぬるかったようです」

「じ、十分すぎるって……」

おや？

言葉にひっかかった。

「何かあればって？」

「未亜ちゃんから聞きました。那由他ちゃんが襲われたって。そんな大事件が間近で起きていながら、妻である私には一言もなしなんて……あんまりです」

はぁっ……。

ルシフェルは小さくため息をついた。

「でも、水瀬君は無関係だからね？」

今にも泣き出しそうな綾乃が、そう言ったルシフェルに悲しげな

声で訊ねた。
「悠理君は今、どこに?どんな娘の警護なのですか?」
「どんな娘?」
「悠理君、どんな女の子の警護にいってるんですか?あのお団子頭の娘ですか?」
綾乃が机の下から何かを取り出した。
「綾乃ちゃん、その藁人形、なに?」
「気にしないでください。いろいろあって、最近ではこの程度しか出来ないんです」
「気休め程度にはなる……と?」
「試されますか?」
さすが巫女の血を引くというべきか。
そんなセリフにルシフェルは、
「謹んでご遠慮申し上げます。それと、水瀬君は女の子の護衛なんてしてないよ?念のため」
「?……あの、お団子頭の娘は?」
「さっきも言っていたけど、誰のこと?」
「この娘です」
綾乃はPDAから「浮気証拠写真集」のフォルダを開いた。
その下には、「獄門級」「磔級」「さらし首級」など物騒なタイトルのフォルダが並ぶ。
その中の一つ「●●●●級」というフォルダを綾乃が開く。
ちなみに●●●●とは、自主規制を示している。念のため。
「去年のクリスマスイブと、今年のバレンタインデーにホワイトデーの記録です」
「ということは、綾乃ちゃんは、その娘に女の子の大切なイベント全部奪われて……」
綾乃の凄まじい眼光に、ルシフェルは思わず視線を逸らしてしまった。
「とにかく、これが証拠です」

綾乃がルシフェルに見せた一枚の画像。
「……えっ！？」
それを見た途端、ルシフェルの顔色が変わった。

綾乃が示す画像。
そこに映し出されているのは一組のカップル。
一人は確実に自分の心から不本意ながらの弟。
しかし、もう一人は――――。

「ま、まさか……」
ルシフェルはわが目を疑った。
“噂には聞いていたけど……”
困惑から抜け出せない。
水瀬と“あのお方”がいい仲だと、宮雀共がささやいているのは知っている。
だが、あくまで噂。
根の葉もない噂。
そう、思っていたのだが……。
「意外といえば意外ですが……そういう方ですか」
何と切り出そうか迷うルシフェルに、綾乃は穏やかに言った。
「ルシフェルさんって、本当にウソがつけない人なんですね」
「……あ、あのね？」
まずい。
ルシフェルは困惑した顔で綾乃を見た。
相手が相手だ。
“このお方”を守るためには、あらゆる手段を講じなければならない。
もし、“このお方”に牙を剥くなら、親子、恋人、親友、いかなる相手でも、すべからく実力を持ってこれを排除する。
それが、ルシフェル達近衛騎士の義務だ。

たとえ、それが目の前の少女だとしても。
例外は、ない。

「あ……あのね？」
ルシフェルは、それを口にすることが出来ない。
この子は大切な友達だ。
だから、
斬りたくなんて――――ない。

「言わなくていいです」
ルシフェルの言葉を遮る綾乃の口調はあくまで柔らかく、優しい。
「瀬戸さん？」
「お姉さまの立場はわかります。それに、大丈夫ですよ」
「……瀬戸さん」
ルシフェの口から知らずに安堵のため息が出る。

「最初からそうでした」
綾乃は言う。
「高校で再開した時、既に口に出すのも汚らわしい、あのオンナが悠理君の心を毒していて、私はその悪夢から悠理君を解放してあげた。共産圏の悪夢から人々を解放した米軍のように……今度も同じです」
一見、穏やかそうな綾乃の目に、シャレにならない程の憎悪がみなぎっていることに、ルシフェはすぐに気が付いた。
かなり突っ込みたいセリフに綾乃は続ける。
「奪われれば、すぐに奪い返す……スターリングラードのように、ケサンのように……ふふっ。素晴らしいと思いませんか？」

「喩えがよくわかんないけど、お願いだから、へんなコトしないでね？」

トップアイドルの一日はハードだ。

レコーディングが終わったと思ったら雑誌のインタビューが立て続けに入って、その後にラジオ出演、国営放送のテレビ撮影、グラビア撮影……。

同行するルシフェルも、綾乃が前に何をしていたか、一瞬忘れることがあるほど、そのスケジュールは過密だ。

よくやってらいれる。

綾乃に同行する度、毎度のこととはいえ、ルシフェルは心底そう思う。

大規模な作戦にいくつも従軍した経験のある自分だが、こんな仕事を続けていたら絶対体を壊すだろう。

しかし、綾乃は全ての仕事を完璧にやってのけるのだ。

それが、ルシフェルには不思議でならない。

「えっと、次は」

少しだけ休憩をもらい、休憩室の自販機にコインを入れ、ボタンを押した途端、

「あ、ナナリさん！？」

マネージャーが廊下の向こうから叫んできた。

「はい？」

「移動時間よ！早く来て！」

「え？……あと２０分後じゃないんですか？」

「秋山先生の都合で時間がくりあがってるの！急いで！」

綾乃達が向かった先。
そこは葉月市から車で3時間程の距離にある観光地。
何でも、観光ＰＲのイメージの仕事だと、ルシフェルはマネージャーから聞いた。
移動中、マネージャーから聞いた限りだと、綾乃の写真はポスター印刷され、国鉄の通路に張られると、結構な勢いで盗まれるという。
それでも、ルシフェルは思った。
観光地ＰＲで微笑む綾乃ちゃん。横には近衛兵団新兵募集目的の凛々しい顔立ちの綾乃ちゃん。
この二枚が並んだら、かなりギャップがあるんじゃないか？
……まぁ、国鉄もまともにそれをやるほど馬鹿じゃないだろうが。

「それにしても」
マネージャーは、ルシフェルをジロジロと、まるで値踏みするように見ながら言った。
「ナナリさんって、本当に芸能界、興味ないの？」
「はい」
ルシフェルは即答した。
横で寝息を立てる娘がどれほどハードなスケジュールをこなしているか。
それを間近で見ていながら、それでも自分でやってみたいなんて考えるのはどうかしている。
同じ事をやれ。といわれるなら、あの戦争にもう一度行って来いと言われた方がまだ気楽だ。
「もったいないわねぇ……」
マネージャーは残念そうに言った。
「ナナリさんが綾乃の警護実習に来るって聞いた時ね？私達、あなたが芸能界に興味あるんじゃないかって期待したのよ？」
「そう、なんですか？」

ルシフェルも初耳だった。
「ええ――運転手さん。もっと急いでくださいね？女優デビューさせれば絶対売れるって」
「はぁ……」
ルシフェルもドラマ位は見る。
だが、それはあくまで別世界の出来事だと思うから。
その別世界に自分が存在しているなんて、ルシフェルは想像すら出来ない。
「私には無理です」
「何言ってるの。歴戦の騎士が」
「友達が言ってました。使う体力が違うって」
「成る程？」

到着したのは温泉街。
演歌歌手でも使った方がウケるんじゃないかなぁ。
ルシフェルがそう思ったほど、何も目立つところのない鄙びた温泉街だった。
「最近じゃ、こういう温泉の方が若者にも人気があってね」
マネージャーが説明してくれた。
「なんていうの？歴史や伝統のある、風情のある所がいいって」
「マスコミの影響、ですか？」
「そう」
マネージャーは苦笑しながら頷いた。
「目新しい施設がなくなったから、あえてそういう風に、情報操作してね」
「それで、瀬戸さんが？」
「そう。観光協会は、綾乃みたいな若手が大挙して来てくれることを期待してる。だからこのお仕事が入った」
「高校生が来る所ですか？温泉街って」
「ふふっ。ターゲットは大学生。ＰＲ見て、若くて人気のある綾乃

と一緒に温泉。みたいな妄想にふけるバカ共を期待して。余波として中高年が来てくれるといいって」

「辛辣なまでの大人の判断ですか」

「そうね。この業界にいると、そうなるけど……」

マネージャーは笑いながらルシフェルの頭をヘッドロックした。

「ホホッ……ちなみに私はまだ２９ですからね？２９と７８ヶ月」

第十五話

「ふふっ……江藤さんったら」
撮影終了。
綾乃とルシフェルは高級旅館の脱衣所にいた。
一泊数万円の高級旅館。
綾乃と同室という条件で、ルシフェルも宿泊することになったが、その価格と格式に、学生服姿のルシフェルはかなりの勢いで辞退を申し出たが、
「学校の指示よ？」と規則を前面に出され、
「別なホテルに泊まって、もしものことがあったらどうするの？」と一般常識レベルの指摘をされ、
「宿泊代は会社持ちで、前払いしてあるから」と、費用のことまで持ち出され、
ルシフェルはここにいた。
正直、仕事とはわかっている。
だが、近衛で動く時はそれでも近衛軍の制服――その中でも、別名“黒服”と呼ばれているものを身につける。
皇室近衛騎士団左翼大隊所属騎士、つまり、魔法騎士を示す黒服は、世界のどこに出ても、いわば恐怖の対象として語られる代物。
それだけに胸を張ってどこでも行ける。
たとえ、こんな高級旅館でも。
それが、付き人まで全員スーツ姿。

綾乃だって高級なブランド服に身を包む中、
学校の制服姿でプロテクターやシールド、スタンブレードをぶら下げたバッグを担ぐ。
そしてあちこちで、
「あれ、ルシフェル・ナナリでしょう？」
「あの有名な？」
……この辺ならまだ耐えられる。
だが、
「やだ。あの子、なんて格好してるの？」
「どこの生徒かしら？一人で泊まるなんて、何かあったのかしら」
「警察に相談した方がいいんじゃなくて？」
と、あからさまな視線に晒されれば、ルシフェルだって勘弁して欲しい。

ルシフェルだって女の子なのだ。

せめて、浴衣になればなんとかなる。
それが、ルシフェルの唯一の希望だ。

「そう」
ルシフェルは制服に皺が寄らないよう、慎重に畳んで脱衣籠に入れていく。
「78ヶ月って、あれは正直、みっともないと思う」
「この歳になればわかりますっ！って」
「わかりたくないことだよね」
「同感です」

小さく微笑みながら、ルシフェルが最後の一枚を脱いだ。

トップアイドル　瀬戸綾乃

単なる護衛　ルシフェル・ナナリ
その立場がその瞬間、逆転した。
傷一つない、白い象牙細工のような美しい肌。
神の存在を信じたくなる（恨みたくなる）ようなため息の出るライン。
脱衣所にいる全員の視線がそのいわば“芸術品”に釘付けになる。
「……」
横にいる綾乃は、何とかルシフェルと距離をとろうと虚しい努力をするが、
「瀬戸さん？早く入らないと風邪引いちゃうよ？」
ぐいっ。
ルシフェルはおかまいなしに綾乃を浴場へと誘う。
「瀬戸さんが落胆していた理由がわかった」
湯に浸かりながら、ルシフェルはイタズラっぽくそう言った。
「え？」
何故か、泣きそうな顔をしていた綾乃が、きょとん。とした顔になった。
「どういうことです？」
「水瀬君が護衛なら、同室していたのは誰かな？」
「お、お姉さま！？」
「ふふっ……綾乃ちゃん、結構積極的なんだね」
「し、しかたないです」
綾乃は憮然とした声で言った。
「既成事実でもなんでも、とにかくライバルを突き放さなくちゃ」
「でもね？」

それは、ルシフェルがずっと疑問に思っていたことだ。
「それでアイドルって、大丈夫なの？」
そう。
綾乃はアイドルなのだ。
「スキャンダルになるんじゃない？学校のクラスマッチで婚約者宣言したのだって、事務所があの手この手でモミ潰したって聞いたよ？」
「そ、それでも……」
綾乃は憮然として言った。
「私は悠理君が好きです。悠理君を失いたくないんです」
「アイドルと水瀬君、どっちか一つって言われたら、どっちとる？」
「え？」
綾乃は質問の意味がわからず、きょとんとした顔でルシフェルを見た。
「水瀬君とってアイドル辞めるか、それともアイドルの地位をとって水瀬君と距離をとるか」
「……水瀬君との恋愛は周囲も公認。お仕事も順調じゃ、ダメですか？」
「結構、都合がいいんだね」
「私、本気でそう思ってますから」
「……一度、何かを掴んだ手で別な物を掴みたければ、その手を離さなければいけない。私はそう教わった」
「私は、その手で両方を掴む方法を考えます」
綾乃は真顔で言った。
「どんなに難しくても、どんなに大変でも。私はそうします」
「成る程ね」
ルシフェルは空を見上げた。
満天の星空。

儚い夢の瞬きが、そこにあった。

「ごめんなさい」

「え？」

「せっかく休んでいる所で、ヘンなこと聞いて」

「い、いえ！」

綾乃は慌てて手を左右に振った。

「そんなことありません。こうしてお姉さまとお話する機会って、あまりないですし」

「そう？」

ルシフェルが体をひねってタオルに手を伸ばす。

「そう……です」

湯から浮き上がるルシフェルの一部に、綾乃の視線が釘付けになった。

綾乃は思う。

本当に欲しいのは悠理君。

それは間違いない。

でも、それと同じくらい、欲しいものが目の前にある。

それが、絶対に手に入らないだろう事も、もうわかってる。

手に入らなければわからないことで、自分がどれほど惨めな思いをしているかも。

本当に、泣きたくなる。

綾乃は唇をかみしめながら思った。

おっぱいって、お湯に浮くんだぁ。

綾乃が心の中で号泣したのはいうまでもない。

風呂上がり。

綾乃とルシフェルは寝具の敷かれた部屋に入る。

ルシフェルが霊刃片手にあちこちを調べ、異常がないことを確認する。

当然、外もだ。

障子を開け、庭に視線を向ける。

問題は、ない。

ルシフェルが障子を閉め、振り返ると、綾乃がお茶を入れていた。

「お茶といってもティーバックですから」

「それでも、誰かにいれてもらうと美味しいよ?」

「それが私でも?」

「友達だもの」

「ふふっ……ありがとうございます……あの……」

「?」

ルシフェルは、一瞬だが、耳を疑った。

綾乃が、

ごめんなさい。

そう言った気がしたのだ。

「瀬戸さん？」
「あ！お姉さま、お茶菓子、いかがです？」

それからしばらく。
綾乃とルシフェルは水瀬をネタに盛り上がっていた。
元来、会話が苦手なルシフェルは聞き手で綾乃が話し手。
綾乃の言葉に相づちをうち、質問されれば答える。
それがルシフェルの立場。
それで会話は成立していた。

問題は――――

「瀬戸さん？」
「え？あ、ごめんなさい」
ちらっ。と障子に視線を向けた綾乃が慌てた様子でルシフェルに詫びた。
「どうしたの？何かいるの？」
ルシフェルはお茶を飲みながら小首を傾げる。
障子の向こうには何の気配もない。
何がどこにあるか。
その部屋のつくりがどうなっているか。
魔力で全てがわかるが、それでもルシフェルは異常なしと判断できている。
「え？い、いえ」
綾乃は思い出したように、バッグから携帯電話を取り出した。
「ごめんなさい。ちょっと連絡を忘れていたので」
綾乃はそういって部屋を出た。

綾乃は携帯電話を使わない。

連絡なんて最初からない。
ただ、その時間が必要だったのだ。

カラッ

部屋に戻った綾乃は、室内の様子に、少しだけ満足した顔で微笑んだ。

「非礼をお詫びします。ルシフェルとやら」
綾乃はそう言った。
もし、ルシフェルが起きていて、部屋に入ってきた綾乃を見たら、同一人物とすぐに認めたか。正直、疑わしい。

それほど、綾乃の様子は変わっていた。

何が？

一言で言えば、雰囲気。
あるいは、綾乃が纏う周囲の空気そのものだ。

今の綾乃が纏う空気。
それは、周囲を圧倒する気品そのもの。

幸いというべきだろう。
ルシフェルはそれに気づくことはない。
ルシフェルは、ちゃぶ台の横で眠りこけ、その手元には湯飲み茶碗が転がっている。
綾乃は無言でバッグからハンカチを取り出し、湯飲みからこぼれた茶を念入りにふき取り、ポットのお湯でその湯飲みを満たす。

その間も、綾乃はちらちらと視線を障子の方へと向ける。

そして――

「しつこいですね」

綾乃は不満そうにそう言うなり、湯飲みを持って障子へと向かった。

ガラッ

障子とサッシを開いた綾乃は、外を睨み付けるなり、湯の中身をそこへかけた。

かけた？

そう。

かけたのだ。

どこへ？

「そんな所に立っている変質者さんは、こうなるんです」

そう。

そこには人がいた。

長髪、

頬に傷。

黒い服。

そんな、男が。

「ルシフェルとやらは、感づくことすら出来なかったようですが…
…何の用です？」

男は答えない。

ただ、無言でポケットからナイフを取り出すだけ。

「待ちなさい」

綾乃は凛とした声で男に言った。

「あなたは大変な勘違いをしています」

男の動きが止まった。

綾乃の次の言葉をうかがっているのは明らかだ。

「私は自らの意志であなたを殺したのではありませんよ？呪われた
者よ」

男は無言で綾乃の言葉を待つ。

「私はこの国の皇女、日菜子殿下の命令であなたを襲いました」

綾乃は顔色一つ変えずに言った。

「魔族の皇女、プリンセス・ティアナの名において宣言します」

そう、言ったのだ。

「あなたを襲ったのは、私達です。しかし、いわば、銃と銃弾、そして引いた指も私達。しかし、引き金を引く意志は日菜子殿下のもの」

男は身じろぎ一つせず、その言葉に聞き入るだけ。

「そうです」

綾乃は唇の端を歪ませて笑った。

「我が夫となるべき男をたぶらかし、あなたを殺したのは、日菜子殿下。つまり」

綾乃は言ったのだ。

「あなたの敵は日菜子殿下。その道具である私達ではありません。――違いますか？」

「……」

「……」

沈黙の時が流れ、

そして

サッ

男の姿が闇の中に溶けた。

「軽い嫌がらせ――そんなところですか」

障子を閉めた綾乃は、ルシフェルの様子をうかがいながら独り言のように呟いた。

「全く、世話のかかる」

ルシフェルの生命に問題ないことを確認した綾乃は、安堵のため息をつく。

「魔界からこんな薬を手配させたり、私に精神操作をさせたり」

綾乃は自分の頬を掴むと、その頬を軽くひねった。

「少しは反省なさい？いいですね？」

綾乃は自分に言い聞かせるように呟く。

「私には、あなたを完全に演じることは出来ないのです」

誰かに説教する口調で、綾乃は続ける。

「あなたは、自我が減りつつあるとはいえ、いまだ一人の人間、そして、私の分魂なのですから」

ふっ。

綾乃の体から、何かが離れ、

糸の切れた操り人形のように、綾乃は床に倒れた。

第十六話

それから約1時間後の東京　宮城

ハァッ……。

深いため息がメイドの耳に届いた。

「申し訳ございません」

メイドが深々と頭を下げた。

「私達がついていながら、この結末」

内容が内容なだけに、メイドは不始末。とは言えなかった。

「仕方ありません」

手にした書類をサイドテーブルの上においたのは、メイドの主君。

日菜子だ。

その腰を下ろしたアームチェアの足下ではタマが丸くなっている。

「この成績では、高等部進学ですら危ういでしょう？」

日菜子はサイドテーブルの書類を、ちらりと見た。

アヒルの行進を示すのは、春菜の成績表だ。

恐らく、成績の順位は校内でも最後から数えた方が早いだろう。

「あの子、ここまでバカだったとは」

「努力はされたようでしたが」

苛立たしげな主君の声に栗須が小さく肩をすくめる。

春菜を支えるために派遣されている身である以上、春菜の成績が振るわないのは自分達のせいだと言われても、栗須達は文句の言える立場ではない。

それだけに、栗須も辛い。

「今、春菜はどうしています？」

「もうヤケを起こしています」

今度は、栗須がため息をつく番だった。

「期末テストに大失敗した挙げ句、成績がこれですから、“もう姉様に怒られるんだ！わーんっ！”とおっしゃって」
「では、今頃、布団にくるまって震えていますね。……どうせテスト期間中も勉強するフリをしてマンガ三昧だったんでしょう？」
「今回は、ＢＬとかいうジャンルのライトノベルにまで」
「麗菜姉様が知ったらどうなるか、わかってるのでしょうか？」
「……進路指導担当の森村先生からです」
メイド――栗須がファイルから一通の封筒を差し出す。
厚さはかなりのものだ。
「いいです」
日菜子はそれを受け取ろうともしない。
「見るのが怖すぎます」
「しかし……」
日菜子はため息まじりに手を伸ばした。
あの森村先生からの通知だ。春菜の成績について蕩々と説教が続いていることだろう。
そんなものを読まされる身にもなってほしい。
一瞬、姉にスルーしようかとも思ったが、後で絶対読まされるのは分かり切っている。
「全く。せめて人並みの成績を」
日菜子は気づかない。
足下でタマの耳がピクリと動いたことを。
栗須が、微妙に動いたことを。
日菜子が封筒から書類を取り出した瞬間。

ニ〝ャァァッ！
「せいっ！」

タマと栗須のかけ声が重なり、

グシャッ！
ザンッ！

日菜子の背後で鈍い音がした。

「――――えっ？」

きょとんとした日菜子が振り返ろうとした瞬間。

「ニ〝ャッ！」

タマがその頭に飛び乗り、日菜子の視界を塞ぐ。

「こ、これ！タマ！」
日菜子が何とかタマを降ろそうとするが、タマは頑として離れようとはしない。

「殿下！」

栗須がそんな日菜子の手を引いてアームチェアから立たせる。

「く、栗須？どうしたというのですか？」

「ご案内いたします。どうぞ穢れをご覧にならないで下さいませ――――橘！」

「はっ！はいっ！」
ドアの側で控えていた日菜子付き女官、橘綾音が弾かれたように返事をする。
「殿下を安全な場所へお移し申し上げろ！」
「こ、近衛を！」
「タマがいる！そのままで構わない！急げっ！」
「はいっ！」

シュンッ

一瞬の閃光に振り返った女官は、突然そこに現れた者に気づいた。
「ゆ、悠理君？あーっ。びっくりした」
すでに４０の坂は越えているだろう太り気味にメガネの女官が、心臓に手をやって息を整える。
「えっと――御子柴さん。すみません。驚かせて」
いいつつ、水瀬は懐から霊刃を取り出す。
「ど、どうしたの？この区画は、テレポート出来ない仕組みなのでしょう？」
「どうとでもなるものです」
「い、いえね？そういう意味じゃなくて」
ここは御所だ。
そこにテレポートを行うなんて、宮殿内戦闘でもない限り、許されることではないし、なにより、テレポートによる侵入を防止するために、ここには十重二十重の防御がなされているはず。
つまり、御子柴がいいたいのは、
あなたは、誰の許可をもらって入ってきたのか。
どうやって防御をくぐり抜けてきたのか。

この二つに集約出来る。

「急ぎます。殿下はいずこに？」
「いま、謁見の間に」
いらっしゃるはず。
そう言いかけた御子柴の声は、
フィーッ！フィーッ！
緊急事態を告げるサイレンにかき消された。
「！」
水瀬は、そのサイレンに弾かれるように御子柴の横を駆け出す。
「悠理君！これっ！」
腰のホルスターからＰ－３８を取り出しつつ、御子柴が叫ぶ。
「廊下は走っちゃいけませんっ！……もうっ」

『御所内部に侵入者！各員、マニュアルＡに従い所定の配置につけ！』
警報が鳴り響き、武装した女官達が通路の一定間隔に立ち、壁を操作している。

水瀬は、その横をＩＤカードを差し出しながら走り抜ける。

女官達は、壁の一部を引き出し、廊下に倒す。
壁の一部を利用した、即席の防御陣地を作ろうとしているのだ。
メイド達がここに機関銃座を設けて防戦に当たるのは当初から決められたこと。
重要ないくつかの場所ではすでに防御シャッターが降りた頃だ。

「通りますっ！」
「ご苦労様っ！」
この通路の指揮官の女官と、彼女を見つけた水瀬が敬礼を交わす。

「殿下は！？」
「御座所へ！ルート7を！」
「はいっ！」

そして、新たな指示が流れた。
『敵は妖魔と断定！気体となって逃走中！』

えっ？
水瀬は一瞬、足を止めた。
まさか。
そんな疑問が頭に浮かんだからだ。
気体になって逃げた？
まさか。
ありえない。
うん。
だって。
“アレ”は村上さん達を狙っているんだもん。
なぜ、殿下を狙う？
うん。
あり得た話じゃない。

気のせいだ。

敵を追う？

いや。

そんなのは近衛の誰かにまかせればいい。

厄介事に首を突っ込むより、今は殿下の安否確認が先！
水瀬は、そう自分に言い聞かせると、駆け出した。

御所には、緊急事態に備えて皇族が避難するシェルターが存在する。
水瀬が駆けつけたのは、その一つだ。
「これっ、タマ！」
ニャーッ
半開きになったドアの向こう。
シェルター内からそんな声がする。
とりあえず、日菜子は無事なようだ。
水瀬の口から、知らずに安堵のため息が出た。
「水瀬です。殿下、ご無事で？」
「えっ！？」
え。ではなく、エ〝に近い声がドアの向こうから聞こえてくる。
「み、水瀬！？」
なぜか日菜子は狼狽している。
「入室の許可を求めます」
「却下ですっ！！」
ドアが揺れたほどの大音声で日菜子はそう言った。
「え？」
水瀬には、その理由がわからない。
「あ、あの……僕、何かしましたか？」

「お召し替え？」
シェルターから出てきた橘によって、別室に連れてこられた水瀬は、橘のその言葉の意味がわからなかった。

「で、でも、緊急事態で」
そう。
御所内に侵入者があって、しかも殿下は命を狙われた。
橘さん自身から聞いたこと。
それなのに、どうしてお召し替えなんて悠長なことをしていられる？
「女心というものをわかりなさい」
橘は静かに微笑みながら、そう言った。
「殿下は、今のお姿を、殿方には見られたくないのです」
ちらりと水瀬を見た橘は小声で続けた。
「水瀬君は特に」
「？えっと……お風呂にでも入られていたのですか？」
水瀬にとって、女の子が男に見られたくない姿で想像できるのはその程度だ。
「……だとしたら？」
「大丈夫ですよ」
水瀬はにっこり笑いながら言った。
「僕、殿下のすっぽんぽん見たことあります」
「……」
微笑みを絶やさない橘の額に青筋が走ったのに、水瀬は気づかなかった。

第十七話（前書き）

人気投票絶賛開催中です♪
投票先はｈｔｔｐ：／／ａｙａｎｏｍｉｎａｓｅ．ｂｌｏｇ８８．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｅｎｔｒｙ－３．ｈｔｍｌ
かならず「栗須明奈」に投票してくださいね（＾＾）

以上、美人メイド栗須明奈の提供でお送りいたしました♪

第十七話

「さて」
お茶を飲み終えた南雲が未亜に声をかけた。
「信楽、一度、マンションに戻るぞ？」
「あ、うん」
未亜も腰を上げた。
「南雲？」
突然の言葉に、かなめが戸惑ったように南雲を見た。
「信楽の着替えとかありますし、何より、マンションの状態を知りたいので」
「そうか？大丈夫……聞くだけ野暮か」
「そういうことです」

「先生はぁ」
車の中で、未亜は南雲に問いかけた。

「やっぱり、綺麗なオンナの人の方がいいんだよね」

「何をバカなことを……まだ根に持ってるのか？」

「私、そこまでしつこくないよ」
未亜は流れていく外の景色を見つめながら呟くように言った。

「早く大人になりたいなぁ」

「どうした？」
南雲が優しげな言葉をかける。

「いつものおちゃらけモードは」

「たまにはいいじゃん――いろいろあったんだし」

南雲の脇腹を軽く小突く。

分厚い革ジャンの感触が手に伝わる。

それが、南雲と自分の壁。

南雲に好きな女性がいた。

櫻井詩乃を狙っていたことも知っている。

そして、自分があのプロポーションとはほど遠いことも。

それでも、未亜は南雲に抱かれて以来、少しでも南雲にふさわしい女性になりたいと願っている。

髪ものばし始めている。

料理も掃除も覚え始めた。

ぽんっ。

未亜はそっと南雲の革ジャンの感触を確かめる。

どうすれば、この壁を越えられるんだろう。

そう、思いながら。

「どうした？」

南雲は、そんな未亜の仕草が愛らしいと思う。

手のかかる子供。

それが南雲の未亜の最初の評価。

同居を始めてからは、子供が妹になった。

そして、恋人へ。

次に来るものは何なのか。

南雲自身がわかっていることだ。

高校教師と生徒。

問題騎士と金持ちのお嬢様。

壁は、厚い。

結局、二人ともマンションまで終始無言のままだった。

「なんか、久しぶりな感じだねぇ」

車から降りた未亜が言った。

「昨日なのに、ヘンだね」

「いや」

南雲は言った。

「しばらく遠出もしなかったからな。離れることがなかったからだろう」

「うん……ね？先生」

「ん？」

「問題なければ、今晩はこっちで過ごしていいんだよね？」

「まぁ……大丈夫だろう」

南雲は言った。

「少し、お前はあの家から離れた方がいいかも知れない」

「む。そんなことないよ」

未亜は気丈に振る舞った。

「私は大丈夫だから！」

「そうか？」

南雲は心配そうな目で未亜を見た。

「シェルター内部のことは水瀬しかわからない。村上達を脱出させて、別ルートで逃げようとしたけど、間に合わずに気絶したんだろう？」

「う……うん」

「心配するな！」

南雲は元気な声で未亜に言った。

「未亜は何かしたわけじゃない。それに向こうは福井先生がいる」

「うん」

未亜は泣きそうになるのを押さえながら、

「でも、今晩はヒドいのはナシだからね？」

未亜が睨むような目で南雲に言った。

「あの時だって、村上先輩達が来るっていうのに、あんなトコであんな激しくするなんて反則だよぉ」

「スマン。勢い余って」

「避妊してないんだから」

未亜は心配そうな顔で言った。
「……責任、とってね？」
「あ……ああ」
そっと差し出される未亜の小さな手。
それを南雲の大きい手が包む。
未亜の求める大人の包容力。
南雲の求める女としての全て。
今の所、二人は、互いの求める所を満たしていた。

「さて。そこの淫行教師」
背後から聞こえてきた突然の声。
振り向きつつ、南雲はその背に未亜を隠す。
「あんた、元警官のくせにそんなんでいいの？」
「……村田警部補」
そう。
理沙だった。
その背後には、岩田警部もいる。
「お久しぶり」
「久しぶりだな」
「お、お元気そうで」
三人の関係は、何だか奇妙なものに未亜には見えた。
この女の人達は、先生を知っている。
先生もだ。
お互いの間には、同じ経験を重ねた者同士にだけある、一種の親愛の情がある。
だけど、それ以上にあるのは、不思議なためらいだ。
未亜はそれを知る必要があるとは思わない。
いや。
知らない方がいい。
心のどこかで、何かがそう言い続けている。

きゅっ。
未亜は南雲の革ジャンを掴むと、黙って経緯を見守ることにした。
「何？あのカタブツがついに女に手を出したと思ったら、こんな小さい子？」
理沙が未亜に向けてくるのは、興味半分の視線。
それは同時に、とぎれがちの会話を繋ぐための手段でもあることはわかりきっている。
「教え子ですよ」
南雲はそう言うが、
「その教え子とさっきの会話は何？」
理沙はハンドバックを開きながら言った。
「淫行禁止条例違反で逮捕してあげようか？」
「勘弁してくださいよ」
南雲が笑ってそういった途端。
「ははっ。そうね――残念だけど」
理沙はハンドバックを閉じた。
「やっと笑えるようになったのね。あなたも」
「――お陰様で」
「ふうん？」
理沙は、もう一度、未亜の顔を見た。
「守るべき存在、手に入れた男って強くなれるのよね」
「警部補……」
「さて。私がここに来た理由はわかるでしょう？」
「先日の件、ですか？」
南雲はやや堅い声でそう言った。
「ご明察」
対する理沙の声は軽やかなままだ。
「もしかして、水瀬君家で何かあったようだけど、あれで自分が関わった騒ぎが終わったと思ってなかったでしょうね？」

「まさか」
南雲は口元を皮肉そうに歪めた。
理沙の言葉はその通りだ。なんて自分は考えが甘いんだ！そう自嘲したから。
「で？何を知りたいのですか？」
「あなたの立場上、そりゃ大したことは言えないでしょうけど」
「よくお分かりで」
「元同僚でしょう？わからなくてどうするの」
「はぁっ……立ち話も何ですから、上へどうですか？コーヒー位、出しますよ？」
「ええ。手短に済ませてあげる」
理沙はエレベーターに向けて歩き出した。
「お楽しみの時間が削れちゃ、可哀想だから」

不思議と、エレベーターの中にいるとしゃべらなくなるらしい。
皆が何も語ることなく、ただ黙って立っているだけ。
エレベーターの作動音だけが静に響き渡る室内。
エレベーターは昇り続けている。
1階
2階
3階

そして――――

ガンッ！

激しい音と共にエレベーターが揺れたのは、４階を示すランプが点灯したほぼ直後のことだ。

「！？」

「な、何！？」

「せ、先生！」

とっさの事に南雲達が身構え、南雲に未亜がすがりつく。

ガンッ！

ガンッ！

ガンッ！

「う、上に誰かいるっ！」

未亜が悲鳴混じりに叫ぶ。

「や、やだぁ！」

「未亜、伏せろ！」

南雲はそう言いつつ、未亜の頭を掴んで床に押しつけた。

「にゃっ！？」

ガンッ！

その力に押され、未亜は床におでこをイヤと言うくらいぶつけた。

「せ、先生、ヒドイ！」

「す、すまんっ！」

「ワザとだぁ！」

「ち、違う！」
「ネズミランドの件、まだ恨んでるんだぁ！」
「誤解だ――警部、拳銃は！？」
「あることはあるが」
岩田が取り出したのはリボルバー式の拳銃。
理沙が取り出したのはオートマ式の自動拳銃。
「お願いします」
南雲も懐から拳銃を二丁取り出した。
コルト・ガバメントＭ１９１１Ａ１とＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ５００。
「撃ってください」
「拳銃の出所は聞いてもいいか？」
岩田が拳銃の安全装置を解除しながら言った。
「答えは、決まっているようなもんだが」
「職務上、やむを得ないでしょう」
南雲も銃口を上へ向ける。

ガンッ！

ガインッ！

ガキンッ！

引き金を引く寸前。
上から聞こえてくる音が変わったと思った瞬間、
「！？」
天井の構造物やライトの破片が降り注いできた。
南雲達はとっさに腕で頭を覆ってケガを避ける。

「だ、誰だ？」
「捕まえればわかることです！」

「やめろ南雲！」
銃口を再度上に向けた南雲の手を掴んだのは岩田だった。
「そんな大口径、ケーブルにあたったら終わりだぞ！」
そう。
４５口径に５０口径。
当たり方によってはケーブルが切断され――
「じゃあどうすれば！」
南雲が怒鳴る合間にも、
ガキンッ！
ガキンッ！
音は激しくなり、
降り注ぐ破片の量も増える。
「村田、緊急連絡……やっこさんの考え方が変わったんだ」
岩田は破片を避けながら言った。
「やっこさん、ケーブルを切断してこのカゴを落とすつもりだったんだ。だが、それでは飽き足らなくなったんだろうよ」
ガキンッ！
ガンッ！
天井の一部が抉られ、漆黒の闇が天井の一角に誕生した。
ガキンッ！
ガキンッ！
闇の数は増える一方だ。

「本部！本部！――――だめです！」

「呼び続けろ！」

岩田の怒鳴り声に弾かれたように理沙は無線機を握り直した。

「はいっ！本部、応答を！」

「ああ。やっこさん、斧使ってやがるな」

岩田の声は落ち着き払ったまま。

その手は胸ポケットからタバコを取り出すほどの余裕だ。

「天井抉って顔が見えたところが勝負だぞ？巡査長」

「はい」

岩田はタバコをくわえたままの口から笑い声を漏らした。

「それ位、謙虚だったら、お前さん今でも警備部にいられたなぁ」

「過去の話です」

「そうさ。……過去の話だ」

岩田はタバコの箱を南雲に突きつけた。

「やらんか？」

「いただきます」

ちらり。床に伏せたままの未亜を見る。

恐怖におののきながらも、その目は南雲をまっすぐに見つめていた。

「大丈夫だ」

「う、うん」

「いい娘じゃねぇか」

岩田がライターでタバコに火をつけながら言った。

「守ってやれよ？」

「はい」

「よし」

ガンッ！

天井の一部が大きく崩れ、闇の中から男が顔をのぞかせた。

「警察だ！」

岩田が叫ぶが、

「！！」

岩田は、理沙をかばうように突き飛ばして、壁に身を預けた。

ガンッ！

鈍い音がして、今まで岩田が立っていた背後に何かが突き刺さる。

斧だ。

男が、岩田めがけて斧を投げつけたのだ。

「警部っ！！」

ドンッ！

ドンドンドンドンドンッ！！

南雲はとっさに引き金を引いた。

わずか数メートルにも満たない距離。

全弾が吸い寄せられるように、男の体をバラバラに引き裂き、

ズルッ。

男は崩れるように床に落下させた。

ベチャッ

鈍い音と共に落下した男は、遂に動かなくなる。

「見るなっ！」

南雲はとっさに、足で未亜の後頭部を踏みつけた。

「にゃっ！？」

ガンッ！

未亜は再び床におでこをぶつけた。

たまらず未亜が叫んだ。

「先生！恋人になんてするの！？」

「あとで指輪買ってやるから！」

南雲は、床に落下した男の死体から銃口を離さない。

「何ならプロポーズ１００回くらいやってやる！」

天井からのぞいたあの顔。

間違いない。

未亜の部屋で見た、あの男だった。

村田を狙う男。

それが、明らかに自分達を狙ってきた。

何がどうなってるかわからない。

ターゲットを変えたとでもいうのか？

そんな、馬鹿なことがあるか？

もし、ターゲットを変えるというなら、その理由は何だ？

まだ、メインターゲットは死んでいない。

死んで、いない？

ぞっ。

南雲の背筋に冷たいものが走った。

それは真実か？

絶対の真実といいきれるか？

否。

南雲はそれを恐れた。

かなめ達が村田を守っている。

だが、相手は神出鬼没のバケモノだ。

そのバケモノを相手に、かなめ達が絶対に勝利すると、誰が言い切れる？

「未亜！」

南雲が未亜に怒鳴った。
「な、なぁに？」
未亜のその声は、やや上気したものだったが、南雲はそんなことに構っていられる状態ではない。
「すぐに少佐達に連絡をとってくれ！」
「しょうさ？……かなめちゃんだね？待って！」
未亜は余計な質問はしない。
そんなことで南雲の気を散らせることがどれほど危険かわかっているから。

「村田、エレベーターは動かないか？」
「やってみますけど」
「なんだ？」
「胸から手を離してください」
「ん？――ああ。スマン」
「セクハラで訴えますよ？」
「責任とってやろうか？」
「それがセクハラだと言うんです」
パネルに向かう理沙の顔は見えない。

「南雲、殺ったのか？」
「危険すぎますよ。まだコイツ、俺を狙っていたとは」
「いろいろ聞きたいことが増えたな……」
ポンッ
岩田は南雲の肩を叩いた。
「ま、安心しろや。お前が撃ったとは記録には残さないから」
「しかし、どうやって？」
「そこが俺達の腕の見せ所さ」
岩田はニヤリと笑った。

その直後、

ガクンッ

エレベーターが動き出した。

ほうっ。

居合わせた全員から安堵のため息が漏れる。

全員が見守る中、階を示すパネルは5階を指して、そのまま上昇を続ける。

それが、油断だった。

「ひっ!?せ、先生!」

悲鳴を上げたのは未亜だ。

「ん?」

思わず、南雲は未亜の方に視線を向けてしまった。

「後ろ後ろ!」

未亜の叫び声が理解できず、視線をさまよわせたのもまずかった。

「後ろ?――ぐっ!?」

腕に走る鈍い衝撃。

「先生!」

未亜が悲鳴を上げる。

南雲の手の拳銃はバラバラに壊れていた。

何故?

南雲が、斧の一撃を、拳銃を交差させて避けたからだ。
「このっ！」
南雲の丸太のような足が斧の使い手の腹を蹴り上げる。
斧の使い手はその衝撃でドアに向かって吹き飛ばされた。

「な、何で？」
理沙が震える声でそう言った。
理由がわからない。
頭を吹き飛ばされ、体中穴だらけの体が、ドアに持たれるように立っていた。

あり得ない。

理沙は何度も頭の中でそう言った。

真横に立つ存在が、どうしても認められない。

これは、男の死体だ。

肉片の間からのぞく白い頭蓋骨、腹からはみ出た腸。

これが死体でなければなんだというんだ！？

何度も、頭の中でそう叫ぶが、どうしてもどこかで受け入れられない。

現実に、動いたのだ。

チンッ

ドアが開く。

ずるっ。

男の死体が、ドアの向こうに倒れる。

死んでいる。

誰もがそう思った瞬間、

ズルッ。

ズリュッ。

ズリュリュリュリュ

その音と共に、男はまるでヘビのように床を這い、南雲達の視界から消える。

「待てっ！」

南雲と岩田がエレベーターから飛び出した時、

「……ちっ！」

男の死体は、姿を消していた。

ただ、床には血まみれの何かを引きずった痕が、廊下の真ん中まで走って、そして消えているのが残されていた。

第十八話

「大体の所は了解したというか――」
未亜のマンションに入った岩田が、コーヒー片手に言った。
「アレを見れば、大体何が起きたかはわかる」
「はぁ……」
「謎の血痕の件、お前が何かしでかしたんだろう。そう聞きに来たんだが、聞くまでもなかったな」
「俺を任意同行でもしますか？」
「現役の近衛騎士、しかも元お仲間を？」
岩田はジロリと南雲を睨むようにして言った。
「そういう冗談は好まん」
「そうでしたね」
「いずれにせよ、ああいうのが来たということは、何かを狙ってのことだ」
「……」
「率直に聞く」
岩田はコーヒーカップを机の上に置いた。
「敵の狙いはお前か？」
「狙いがはっきりしません」
「……」
岩田と理沙が目配せしたのに、南雲は気づかない。
「はっきり言って、この事件は裏がかなり深いです。そのうち、いえ、もう……俺達では手に負えないことに」
「南雲」
「はい？」
「容疑者隠匿の罪は、決して軽くないぞ？」
岩田がポケットから取り出したのは、数枚の写真だ。
「隣のマンションの防犯カメラに撮られていた」

そこに映し出されるのは、並んで歩く一組の男女。
村上速人と霧島那由他の二人。
「この二人が乗ったエレベーターがこの階へ。つまり、この部屋に来たことは調べが付いている」
「さすがですね」
内心で南雲は舌を巻いていた。
捜査に関しては敏腕で知られたこの二人の腕は、決して鈍ってはいない。
「あいつらが誰で、自分が何をしているのかわかっているんだろうな」
「――わかってますよ」
「今、あいつらはどこにいる？」
「もう、逃亡しました。今、どこにいるか全く見当も」
「――聞いただけだ」
岩田はタバコに火をつけようとして止めた。
「お嬢ちゃん」
「信楽未亜です」
「ん？気に入らなかったか？南雲さん所の若奥様とでも？」
「からかわないでください！」
キャビネットから灰皿を出しながら、未亜が言った。
「ここに来た目的は、誘導尋問のためですか？」
「ああ。はっきりいえばそうだ」
岩田はライターでタバコに火をつけながら言った。
「殺人事件のヤマのホシを、何故お前等がかくまっていたのか。それが不思議だったんだ」
「もしかして、俺を逮捕するつもりだったのでは？」
「それも選択肢の内にはあった」
岩田は悪びれる様子もなく言った。
「だが――あんなモノに追われているとなれば、警察の手に余る」
「見逃してくれると？」

「容疑者には無実を証明しろとだけ伝えろ」
「――つまり」
未亜が呆れたように言った。
「警察では保護することさえ出来ません。自力でなんとかして、事が一段落した暁には、是非、無実の証明となるものをご用意の上、警察に出頭してくださいってことですか？」
「上手いな」
岩田は言った。
「南雲、お前の嫁はたいしたもんだ」
「警視正！」
「俺は警部だ。――部下を死なせた無能な、そうなっている」
「あんたはスケープゴートにされただけだ！」
「それが組織というものさ」
達観したような岩田に見切りをつけ、助けを求めるように理沙を見た南雲だが、頼みの理沙もまた、悲しそうな顔で俯いていた。
「あのなぁ。南雲」
岩田はぽつりと言った。
「この世の中、責任をとらせる者ととらされる者と二通りだ。俺達だけじゃない。今、こうやっている時だって、世界のどこかで、何かの責任をとらされている気の毒な連中はいるのさ」
岩田のその言葉は、あながち外れてはいなかった。

その頃、宮城では、近衛騎士団の幹部達が緊急招集されていた。
「宮殿に侵入者を許したこの不手際、申し開きの余地はなく」
居並ぶ近衛幹部の先頭で樟葉がうなだれながら、そう上奏する。
居並ぶ幹部全員が床に跪き、刀剣を腰から外し、その前に置く。

裁可を仰ぐ姿勢。
自らの罪を認める姿勢。
命を預ける姿勢。

慚愧。
無念。
怒り。

これらが心中でないまぜになった樟葉は震える声で続ける。

「かの三宮事件に続き、万乗の君を危機にさらした我らが罪、如何様にも……しかれども」

皇室近衛騎士団。
極東最強の戦闘能力を誇る騎士団。

それは何のために存在するか？

自らの飼い主である天皇を護るため。

そのための存在。

自らを飼えるたった一人のための存在。

彼らは猫でなく、狗だ。

近衛騎士が自らを「天皇の狗」、「壬生狼」と呼ぶのはそのため。

それが近衛騎士の誇り。

その誇るべき地位にいながら、樟葉達は主君の身を危険にさらした。

同じ宮城にいながら、主君の安全を確保し、敵の攻撃を阻止したのが、居合わせた宮中女官団の女官と、主君の飼い猫では、その身が存在する意味はない。

「どうか、責は、わが首一つにて」

樟葉はそう言って深々と頭を下げる。

「……死んで、どうするのですか？饗庭中将」

玉座に座る日菜子が冷たく言う。

「……はっ？」

思わず頭を上げかけた樟葉には、その意味がわからない。

「死んでその責務から逃れるのは、誰でも出来ます。近衛に身を置く者が、それではあまりにも軽はずみと思います。――これも戦です。戦において犯した失態を死んで逃れることを、私は許しません」

居並ぶ一同を睥睨する日菜子。

とても15歳の女の子とは思えない威厳は、室内の空気を引き絞った弦のように張りつめさせる。

「戦人（いくさびと）の本分は失敗の折にこそみえます。腹を切って責任を逃れるか……死線を超える生命力をもって失敗を上回る武功を成すか……違いますか？」

「殿下……」

顔を上げた樟葉に、日菜子は言った。

「生きて職を尽くし、功をあげなさい」

「はっ！」
「ははっ！！」
樟葉達が一斉にそれに答える。

「しかし」
日菜子は退室する足を止め、冷たく自らの飼犬達を見た。

「この宮殿を侵し、皇室に刃を向けた者の末路に例外があってはなりません。よろしいですね？」

（成る程ね）
黒いドレスをきちんと着こなす日菜子を見つめながら、水瀬は思った。
（お召し替えって、このためだったのか）
水瀬の前で日菜子の美しい黒髪が揺れ、その度に水瀬の鼻腔を甘い日菜子の香りが満たす。
（簀巻きにされたり、橘さんに殺されかかったり、散々な一日だと思っていたけど……うん。最後がこれなら、今日はいい日だね）
思わず緩む口元を、水瀬はそっと引き締めた。

一方、
「大姐さん」
謁見の間から下がった樟葉を幹部達が囲む。
「……殿下のお慈悲が下った。そういうことだ」
ほうっ。と、樟葉の口からため息が出る。
「よかったですな」
樟葉よりベテランの幹部からそんな言葉が出る。

「三宮の時は団長以下」
「言うな」
樟葉は、その続きが聞きたくなかった。
あの時、腹を切ったのは樟葉の祖父だ。
一族の汚点とさえ言える失態。
それをこんな所で聞きたいとは思わない。
「ご無礼を」
いいかけた幹部は口を閉ざしたが、
「しかし、大姐さん」
別な幹部が不思議そうな顔で樟葉に訊ねた。
「水瀬ん所の坊が、何故玉座の脇へ？」
「あいつは日菜子殿下直属だし、あいつ一人が、唯一事前に異変を感知した」
樟葉は面白くないという顔で言った。
「対応が遅れたのは、テレポート防衛システムに邪魔されたせいで、直に殿下の元へ駆けつけられなかったからだ。つまり、ここ（宮城）でなければ、敵を止めていたのは間違いなくあいつだ」
「……おや？」
その幹部は、一つ思い当たることがあった。
「ということは、坊がさっさと我々に通報していれば、我々はあそこで頭を下げずにいられたのでは？」
「そこまで単純ではないが……とにかく、敵の手かがりを探し出せ！涼宮！」
水瀬専属ＣＰＯ（戦術士官）という、気の毒な立場の涼宮中尉が敬礼する。
「はいっ！」
「明日でいい。水瀬を私の所へ連れてこい。復唱はいらん」
「はいっ！」
「で？坊をどうするつもりで？」
「あいつに聞くのが一番手っ取り早い気がする。ついでに連絡義務

違反で殴る」
「なら、すぐにでも」
「やめておけ」
謁見の間に戻ろうとした幹部を樟葉は止めた。
「下手に行けば手打ちにされるぞ。それより、ルシフェルの回収を急げ。許可があるまで独房入りだ」
「は？坊が、何故？」
樟葉は納得できないという顔で言った。
「日菜子殿下が手放しはしないよ――下手すれば一晩」

「功績とは言い難い不始末ですね」
場所は控えの間。
日菜子の入る時間を見計らっていたのだろう、テーブルの上には暖かい湯気をあげるティーカップが2セット、用意してあった。
もう１０時近くだ。
早く殿下にお休みいただかなければと思う水瀬は、
「申し訳ありません」
深々と頭を下げる。
室内にいるのは水瀬と日菜子だけ。
栗須はついさっき、一礼の後ドアから姿を消した。
水瀬が気になるのは、その時、
カチャ
確かに外から鍵がかけられたこと。
その意図が掴めない。
それが気がかりだった。

「そうです。反省なさい」
前を歩いていた日菜子がくるりと身を翻した。
「はい」

「反省してますか？」
日菜子は、のぞき込むようにして水瀬の顔を見つめる。
水瀬の視界一杯に日菜子の顔が入り、その吐息が肌をくすぐる。
「し、してます」
赤くなる顔を悟られまいとしながら、水瀬はそう答えるのが精一杯だ。
「よろしい」
クスッ。とイタズラっぽく笑う日菜子が、水瀬に言う。
「そこに座りなさい。立ち続けで疲れたでしょう？」
「いえ、お構いなく」
「お茶もありますよ？」
「いえ」
「……私が誘っているのですが？」
誘いを続けて断られた日菜子は、少しムッとした顔で言った。
「あ……は、はい」
水瀬はそそくさと肘掛けのない椅子に座ってから気づいた。
「あの……この椅子って、皇族専用では？」
「そうですよ？」
慌てて立ち上がろうとする水瀬の肩を日菜子ががっしりと掴む。
「ですから、私が座るんです」
「えっ？」
何を？そう聞こうとした水瀬の膝の上に日菜子が腰を下ろした。
水瀬の太股に日菜子の柔らかい感触が甘い電撃のように走った。
「ほら。これで問題ありません」
「僕は人間椅子ですか？」
「私は、悪くないです」
クスクス笑う日菜子は、水瀬にしなだれかかって、その胸に顔を埋めた。
「……」
水瀬は斬首覚悟でその手を日菜子の華奢な腰に回した。

ピクンッ。
腰に走った感触に、日菜子が少しだけ反応する。
それだけで日菜子が愛おしくてならない。
風呂上がりなのだろう、シャンプーと石けんの香り、そして日菜子のたおやかな肉体の柔らかさが水瀬の判断能力をとろけさせる。
今、水瀬の世界に存在するのは、日菜子だけ。
それが至高の歓喜となって水瀬を捉えて放さない。
「ふふっ」
日菜子が水瀬の耳元で甘い声をささやいた。
「こうして二人っきりなんて、ホワイトデー以来ですね」
「あの桜の花、きれいでしたね」
「また、一緒に見に行きたいです」
日菜子の吐息が首筋にかかり、くすぐったいが、やめて欲しくない。
もっと、話して欲しい。
そう願う水瀬は腰に回した手に知らずと力を込めてしまう。
それがイヤなのか、日菜子は水瀬の膝の上で体を何度か動かした。
「……水瀬？」
「はい」
「何か、お尻に当たるのですが、何か持っています？」
「い、いろいろと……」
「そうですか」
「そうです」
水瀬は赤面しながらそれだけを言った。
欲望に正直すぎる体が恨めしい。
「備えは怠りなし……ですか？」
「そう、思ってください」
「？……とにかく、聞かせていただきましょう」
「はい？」
「何があったのですか？」

「……不明、では答えになりませんね？――――んっ！？」
水瀬は、一瞬、我が身に何が起きたかわからなかった。
水瀬がわかることは、せいぜい、日菜子の顔が、これ以上ないくらい近くに見えること。
そして、自分の唇が塞がれたこと。
その程度……いや、それだけで十分だ。
「うそをついた罰です」
クスクス笑う日菜子が言った。
「嘘をつく度にこうなります」
笑いながらも頬を赤らめ、目を潤ませる日菜子を、
（抱きしめたい）
そんな欲望を必死に押さえこむのに、人生最大級の内面的激戦を繰り広げる水瀬は思った。
もったいないなんてもんじゃない。
これは罰じゃなくて、ご褒美だ、と。

「ちなみに正解すると？」
「同じです」
水瀬の期待は、あっさりとかわされた。
「……もっと、いいことしていただけるとか、そういうのはないんですか？」
「し、してほしいんですか？」
「え、えっと……」
そう面と向かって聞き返されると、水瀬もどう答えていいかわからない。
「ど、どうなんでしょうね……」
「わ、私も」
日菜子も恥ずかしげに答えた。
「どうしていいか、わかりませんし、もっといいことって、何ですか？だ、第一」

その目は少しだけ恨めしそうな光を放つ。
「こ、こういうのは、殿方がリードするものだと聞きましたが？」
「……あ、僕ですか？」
「そうです。当然です！」
「でも」
水瀬は困ったという顔で言った。
「罰とか正解とか決めるのは殿下ですから、リードのしようが」
「あっ」
そう言われると、日菜子も返す言葉がない。
「そ、そうですよね？」
「ちなみに」
水瀬は少しだけ、期待を込めて言った。
「今のは、正解ですか？」
「……」
虚をつかれた日菜子は、目をぱちくりさせた後、微笑みながら言った。
「はい♪」

南雲達の前に現れた村上と霧島のカップル。
その周囲で起きる、南雲を巻き込んだ不可思議な襲撃事件。
獄族が絡んでいるのは、現場証拠から間違いない。
二人の命を狙う人物と、女官達が確認した、日菜子襲撃者の特徴が合致している。
「その二人と南雲大尉、そして私を獄族が狙っていると？」
「正解です」
互いの質問に正解してもしなくても、とにかく問いに答えさえすればキス。
水瀬と日菜子の間で世にも不思議なご褒美合戦が繰り広げられていた。
「んっ……ハァッ……」

何度目かわからないキス。
その度に、日菜子は水瀬が愛おしくなってくる。
にじまないリップの開発者に勲章くらい送りたい気分で、水瀬と口づけを交わす日菜子は、吐息が熱くうわずってくるのを押さえられない。

水瀬は続ける。
霧島那由他の祖父が、孫娘と引き替えに、何かを何者かと取引した。
しかし、その契約が果たされないままに霧島は殺された。
霧島は死して尚、契約の遂行を求められ、獄族の仲間にされたのだろうと。

「つまり」
日菜子は首を傾げた途端、
「んっ！？」
水瀬に口を塞がれた。
長く、甘く、優しい口づけ。
体が芯からしびれ、頭がぼうっとする。
「……はぁ」
唇を離されても残るしびれるような心地よさに身を預けた後、ようやくに日菜子は言った。
「ず、ずるいです」
「え？」
「私は、まだ何も言っていません。る、ルール違反です」
「ご、ごめんなさい。……その」
水瀬が赤面しながら言った。
「殿下の仕草があんまりに可愛くて、つい」
「……」
日菜子は、水瀬の胸に顔を埋めながら、

「つ、つまり」
少しだけ強い調子で言った。
そうでもしなければ、もう理性が保たない。

「それはおかしい。そういいたいのです」
「えっ？」

トクトクトクトク
日菜子の耳に不思議な音がした。
時計のような規則正しい音。
少し早いが、どこかで聞いたような懐かしい、不思議と安心する音。
（あっ……）
日菜子はその音を聞きながら、目を閉じた。
水瀬の心臓の音だった。

「どういうことですか？」
「三人が狙われるのは、何となくでもわかります」
「はい」
「それでどうして、私が狙われるのですか？私とそのお二人とは全くの無関係でしょう？もし関係があったとしても、その二人を手にかけるのをやめ、この宮城へリスクを犯してまで侵入し、私を狙う。そこが納得できません」
「確かに」
そう。日菜子のいう通りだ。
日菜子を狙うなら、公務で外出中でも狙えばいい。
それなのに、わざわざ宮城へ侵入してまで殺そうとする。
普通のことではない。
本来の狙いを放置して、日菜子をそこまでして狙う理由は？
それが、わからない。

「行動が行き当たりばったりな気がするのです」
「お心当たりは？」
「私に覚えがなくても、向こうにはあるんでしょうけど」
「そんな」
「私は皇女、次期皇位継承権第一位、東宮……そんな身です。だから、私の命を狙う者なんて腐るほどいるのですよ？」
「……」
忘れていた。
目の前の女の子を、完全に一人の女の子としてしか見られなっていた水瀬は、自らの軽率さに、内心で舌打ちした。
「殿下と霧島那由他達では、どうあってもつながるとは思えませんし……それとも、僕は、あの二人にこだわりすぎでしょうか？」
「そうですね――んっ」
上を向いた日菜子の顎にそっと手をやった水瀬が塞ぐ。
「でもね？――悠理」
「はい？」
「……はじめて名前で呼んだのですから、もう少し感情をこめて下さいな」
不満げに言われて気づいた。
言われてみればそうだ。
今まで、日菜子からは「水瀬」と呼ばれていた。
悠理。
愛する異性として、そう呼ぶのは祷子とナターシャだけ。
綾乃ですら呼びはしない。

そこに水瀬は戸惑った。
一人の女の子として扱って欲しいと願う日菜子の心はわかるし、水瀬もそうしたい。
だが――
絶対に忘れてはならないこと。

日菜子は、水瀬にとって主君である。
その絶対の不文律が水瀬をどこかで止めていた。
「で、でも」
「もうっ！ここまでしたんですから！」
じれたように日菜子は水瀬に言った。
それは、日菜子が望んでも言えなかったこと。出来なかったこと。
私を、一人の女の子として扱って欲しい。
その一線を、日菜子は恋する一人の女の子として、自ら切り崩した。
だから、言った。

「せめて二人っきりの時は、私がただの女の子だと認めてくださる間だけは、日菜子と呼んでください」

「で」
「日菜子です」

キュッ。と水瀬の服を掴む手。
すがるような目。

水瀬には、全てが狂おしいほど愛おしくてならない。
腰に回した手に力を込め、水瀬は日菜子を抱きしめながら言った。
「日菜子」
「はっ、はい！」
日菜子の瞳から涙がこぼれ落ちた。

その直後、二人どちらともなく交わされた口づけは、今までで一番激しく、長く、そして歓喜を包んでいた。

「話がズレましたね」
唇を離した後、バツが悪そうに日菜子が笑い、つられて水瀬も微笑んだ。
「とにかく、霧島那由他達の身辺をもう一度洗ってみます」
「いえ。それは福井・南雲両名に任せなさい。もし必要なら、警察の……えっと、あなたが利用している女性キャリア」
「理沙さんですか？」
「そうです。彼女達に任せなさい。警察も近衛経由で動員をかけます」
「できますか？」
「あらゆる事態に備え、警視庁には宮内省から数多くのＯＢを送り込んでいます」
さすが。という言葉を水瀬は飲み込んだ。
「内助の功です♪」
「ははっ……」
もういい加減しろといいたくなる二人の口づけは、懲りずに続く。
「それより、あなたには調べて欲しい人がいます」
「誰です？」
「斬れ、とはいいません。本当はいいたいんですけど」
「？そんなに厄介な相手ですか？」
「私にとっては」
誰だろう。
水瀬は頭の中で何人もの皇室敵対者を思い浮かべるが、日菜子自らが口に出すほどの存在は思いつかない。
ほとんどは、かの三宮事件の際の大量粛正で消されているはずだ。
思いつかない。
そんな悠理の胸に頬をすり寄せながら、日菜子は言った。
「むしろ、私より悠理にとっては、もっとですね？」
「でん……じゃない、日菜子より僕にとって？」
「ええ」

水瀬の心臓の音を楽しむかのように水瀬の胸に顔を埋める日菜子が言った。

「これは女のカンです」

「かまいません。日菜子が必要なら……斬ります」

「ふふっ……覚悟は嬉しく思います」

「で？」

「……」

日菜子は、しばしの沈黙の後、言った。

「瀬戸綾乃――ここ数日中の、あの子の行動の全てを調べなさい。分単位、秒単位で」

第十九話（前書き）

今回は少し、理屈っぽくなってます。
ご都合主義の間違いでは？
……そうともいいます。いろいろあるんですよ。
生きていると。

第十九話

「おーい。理沙ちゃん、お客様」
ズダンッ！
居合わせた署員は全員、ヘルメットに防弾チョッキ着用でその場に伏せる。
この客が来る時はいつもそう。
さすがに１０回以上、こういう場に居合わせた署員達は場慣れしていた。
しかし――。
「へ？」
硝煙の煙をのぼらせる銃を掴んだまま、理沙は思考が停止した。
目の前にいるのは、制服姿の男。
階級章は、この署にはいないほどの高い地位を示している。
寸分の狂いもなく制服をまとう、謹厳実直を絵に描いたようなその男の七三の髪は、見事に逆モヒカンになっていた。
「……ひょっとして――部長ですか？」
理沙は、自分の全身から血の気が引けたのがわかった。

理沙は本当のお客を連れて休憩室に移動した。
「う……恨むからね」
「懲戒免職は避けてあげましたけど？」
本当のお客――つまり、水瀬はそっけなくそう答える。
「減俸と始末書ってねぇ、官僚世界じゃ死刑宣告なのよ？」
「いいじゃないですか。仕事で挽回すれば」
「――で？」
「朝方、メールで頼んでいた件について」
「――ああ。あれ？」
理沙は苦い顔でそっぽ向いた。

水瀬にはそう見えたが……。
「署に消防車が止まっていたの、見た？」
「ええ。何でもボヤ騒ぎとか」
「そう。原因不明の出火で倉庫一戸が丸焼け」
「災難ですね」
「ええ。ご依頼の件の調書、証拠と一緒にね」
「……先手を打たれたか」
「そういうこと。警察署まで焼いてくれるとは、さすがに君に依頼だけはあるわ」
「お褒めにあずかったとはとれませんね」
「これが褒め言葉に聞こえたら、君、おかしいんじゃなくて狂ってるわ」
「……先日、南雲先生のマンションで発生した第三種事件、立ち会ったそうですね」
水瀬が事務的に話題を変えた。
「ええ――おかげでホラー映画が怖くなくなったわ。見た？深夜やってたの」
「いい経験でしたね」
「イヤミねぇ」
「こちらからのお願いは、この通りです」
「……」
書類を出す水瀬の顔を見ながら、理沙は思った。
普段のオチャラケがかけらもない。
何故？
不思議に思いつつ、理沙はもう一度、水瀬をまじまじと見つめた。
眼が真面目だ。
珍しいこともあるとは思うが、それで理沙はわかった。
水瀬は真面目にならざるを得ない立場なのだ。

つまり、これは近衛からの依頼だ。
正式に、近衛から宮内省経由で捜査依頼が出た。
そういうことだ。
だからこそ、近衛に恩を売るつもりで、警備部部長わざわざ激励に来て……まぁ、事故はあるものだ。
とにかく、この子は今、公務でここに来ている。
今までのような私的に近い理由ではない。
ただ、その仏頂面というか、機械のような反応が、理沙にはどこか寂しい。
「警備部部長の毛髪は、僕が復活させましたし」
「そういうものじゃないけどね」
理沙は水瀬から書類を受け取り、中を読んだ。
「――――えっ？」
「……」
水瀬は、理沙の顔を見るだけ。
「あ、あんたさぁ」
理沙は驚き半分、あきれ半分で水瀬に言った。
「この内容、知ってるの？」
「当然です」
水瀬はあっさりと認めた。
「それ、草稿書いたの、僕ですから」
「……なんで、自分で調べないの？」
「僕が動くと、混乱が発生する恐れが」
「混乱？」
「僕に真実を告げる可能性は低いですし、僕が調べていることを感知すれば、それだけで捜査を混乱させようと画策するのは目に見えてます」
「成る程？」
理沙は、再度書類に目を通すと、水瀬に訊ねた。
「とにかく、対象の過去７２時間以内の行動を調べればいいのね？」

「はい。それと」
「ん？」
「後で話させてもらえませんか？」
「誰と？」
「……村上速人と霧島那由他。警察で保護しているんでしょう？」

ルシフェルが目を覚ましたのは、それから少し後、宮内省付属病院のベッドの上。
ベッドの脇にあるパイプ椅子に腰を下ろすのは理沙と岩田だ。
「薬物の反応が出たそうだ」
岩田の言葉に、薬物が抜けきらず、意識がはっきりしないルシフェルが弱々しく反応する。
「……そんな、嘘です」
「嘘？」
「私、任務中には対毒薬を服用しています」
近衛軍特殊部隊で使用されている魔法薬。
予め飲んでおくと、胃の中に落ちた一切の物質を体に吸収させない効果がある。
青酸カリをラッパ飲みしても死なないとされる代物。
定期的にたっぷり嘔吐しなければならないが、死ぬよりマシだ。
それが効果を示さないことにルシフェルは納得出来ない。
「しかし」
岩田は言う。
「君が旅館で意識不明のまま発見されたのは事実だ」
「ガスの使用は」
「あんな狭い室内で君一人が被害を受けるだけで済むと、本気でそう思うか？」
「……」
「君が何を疑いたくないのか、それは我々とてわかる」

岩田の優しい声を受け、ルシフェルは小さく鼻をすすった。
「近衛の要請を受けての捜査だ。既に近衛の調書は読んだが、君に改めて聞きたい。協力してもらえるね？」
「……」
ルシフェルは、小さく頷いた。
「まず、昨日一日の君の行動から確認したい」
岩田は手帳を開いた。
「君の申告だと、午前１０時丁度に葉月駅から国営放送局のある渋谷区に電車で移動。１０時３５分に放送局入り。以降、瀬戸綾乃の護衛の任務に就く。昼食は？」
「学校から支給されたレーションで済ませました」
「その後、放送局から瀬戸綾乃と共に都内を移動。その間に口にしたものは？」
「何も……瀬戸さんに勧められたこともありましたが、任務中の食事は一切禁止されていることを伝えて了承を」
「警護任務は、瀬戸綾乃の棒温泉の坊旅館到着をもって一応の終了となった」
「はい」
「それ以降は？」
「瀬戸さんと一緒にいました。それと、万一に備え、旅館で出された食事は摂りませんでした。残念でしたけど」
「何を食べたんだ？」
「同じく、レーションです」
「……それでよくそのプロポーションが維持出来るわねぇ」
「レーションは水瀬家特製の丸薬です。栄養価は高いですけど、ローカロリーで、空腹感を無くす効果が」
「ダイエット食品で売れば儲かるわね。持ってる？頂戴」
「村田、黙れ。しかし、それだけというわけはあるまい？」
岩田がバッグから取り出したのは、
「これだけは口にしたはずだ」

ビニール袋に入った茶碗。
「……」
ルシフェルは、それを黙って見つめるだけ。
「床にこぼれたお茶と一緒に、特殊な薬物の反応が出た――警察の科学捜査部門は、人体には無害と報告してきたが、近衛の防疫班の分析は、強い睡眠効果があると言っている」
「……」
「かなり特殊な、一種の魔法薬だそうだ」
「……でも」
「それで」
岩田はバッグに茶碗を戻しながら声を大きくした。
「問題はここからだ」
「？」
「君が眠っている間、瀬戸綾乃が何をしていたか、近衛からは聞いているか？」
「いえ」
「……君がこたつで眠ったまま、ゆすっても起きないとフロントに通報したのは彼女だ。その後、彼女の連絡により旅館へ近衛の専門部隊到着、その間、彼女は確かに君の側にいた。目撃情報からしても、それは間違いない」
「……」
ずっと看病してくれた友達に、ルシフェルは無言で感謝した。
「問題は、瀬戸綾乃の証言だ。彼女はこう答えたそうだよ。“気がついたら眠っていて、目が覚めたらルシフェルさんも眠っていた”……ヘンだと思わないか？」
ルシフェルは、岩田の言いたいことがわからない。
「？……いえ？あの、瀬戸さんも一緒に薬を？」
「それだと話が合わないんだ」
「え？」
「よく考えてご覧」

岩田は諭すようにルシフェルに言った。
「君は薬物の影響でこのザマだ。対する瀬戸綾乃は、その場で君を看病するほどピンピンしていた。同じ部屋。他に出入りしたことのない部屋。いわば密室で」
「まるで推理小説ですね」
ルシフェルはちょっと笑いながら思った。
こんな話なら、私じゃなくて桜井さんか水瀬君がお似合いだ。
あの二人なら、本格的推理小説に出てくる探偵顔負けの推理力で、今、岩田が言わんとすることなんて見通してしまうだろう。

“目に見えるモノだけが真実じゃない”
“闇の中に眠る真実を見いだせ”

子供の頃、教官からよく聞かされた言葉が、ふと、ルシフェルの脳裏によみがえったが、どうやら、私はこういう方面とはよほど相性が悪いらしい。

「いいところが三文小説だ」
岩田はそう言って笑う。
「予め薬物が仕掛けられていて、偶然、君がそれに当たった？馬鹿な。だったら、なぜ、瀬戸綾乃も一時的に意識を無くした？なぜ、彼女だけが後遺症がない？」
「……」
「若干の薬物をわざと服用したか、それとも眠っていたという証言そのものが虚偽か……とにかく、疑うしかない」
「……それで？」
「我々の現在の仕事は、瀬戸綾乃のここ数日間の行動の洗い出しだ」
岩田はそう言って、ルシフェルの布団の上に書類の入った封筒を置いた。
「穴だらけだ。後で見ておいてくれ。……この所、彼女は何度も行

方をくらませている」
「……」
ルシフェルは、友達の行動を弁護しようとして口を閉ざした。
否定したい。
でも、出来ない。
大切な友達の不審な行動を弁護するだけの証拠も根拠も、ルシフェルにはない。
「そろそろ、面会時間が終わるな」
岩田は腰を上げ、理沙もそれに続く。
「とにかく、我々は、瀬戸綾乃の行動に不信感を募らせている」
ルシフェルは、言葉が出てこない。
瀬戸さんは無実だ。
そう言いたいのに、言葉が、出てこない。
「容疑は、魔法薬取締法違反、それの使用による傷害罪。最悪、今回の事件に一枚噛んでいれば、薬物による殺人未遂罪、共謀罪」
「そんな」
「もし、彼女が無実だというなら、物的な証拠をあげてくれ――じゃ、お大事に」
岩田達は、後ろを振り返ることもなく、病室から出ていった。
ルシフェルに出来ること。
それはただ、彼らの背を見送ることだけだった。

軽い検査の後、付属病院を退院したルシフェルが真っ先に向かった先。
そこは――。
「ふぅん？」
ルシフェルの前で書類が動く。
ベッドに座りながら、ルシフェルは、ただじっとその動きを見つ

めていた。
「それで？」
メガネをかけた少女が、その動きを止めてルシフェルに訊ねた。
「これ、警察の書類でしょう？私に見せていいの？」
「いい」
ルシフェルは言った。
「警察の人は、私に“調べろ”っていっている。だから、問題ない」
「ふぅん？理沙さんかな？」
「知っているの？」
「そりゃ、何度かお世話に」
「不純異性交遊とか？」
「何で！？」
「どうせ、水瀬君絡みだから」
「もうっ。ルシフェルさん？からかいに来たなら、書類返すわよ？」
そう言って笑うのは、美奈子だ。
「それにしても」
ルシフェルは美奈子を見ながら言った。
「桜井さんって、メガネかけるんだ」
「普段はコンタクトなのよ」
「へぇ？」
「それにしても」
書類に素早く目を通しながら、美奈子は感心したように言った。
「警察って、本当によく調べるのねぇ。個人情報なんて関係ないって言いたいみたい」
「捜査の裏付けとるためには必要なんだよ」
「そうねぇ。ただ、一般市民としては、知らない方が幸せって言うか、知らなければならない事実というか――それにしても瀬戸さんとはね」
美奈子は書類をめくりながら唸った。
「品田君あたりなら、実家のお寺売り払ってでも手に入れたいでし

ょうね。この書類」
「どうしたの？」
「通話記録まで全部調べられている。会話の内容はともかく、送受信の相手の名前、住所、職業、年齢、……うわ。メールの送信内容まで？すごいわねぇ」
美奈子の手の中でページがペラペラ音を立ててめくれていく。
そのスピード故に、ルシフェルの眼には、とてもマトモに美奈子が読んでいるようには見えなかった。
「桜井さん、そんなに早くめくっていて、よく内容がわかるね」
「え？速読術よ」
「速読？」
「そ。ほら。アナウンサー目指しているからね？読み上げる文章はすべて一瞬で理解して、頭にたたき込めなければならないって思って、小学校の頃から練習しているの」
「へぇ？」
今度、やって見ようかと思うルシフェルに、美奈子は言った。
「でね？ただ、“見て欲しい”っていわれたけど」
「うん」
「これ、瀬戸さんの行動についての調査でしょう？瀬戸さん、何の事件に巻きこまれたの？」
「う、ううん？事件というわけじゃ」
「ふぅん」
美奈子は、ルシフェルに書類を返した。
「ごめんね？」
「えっ？」
「これほどの情報、警察だって趣味で集めるはずない。ということは？瀬戸さんが何かの事件に絡んでいるってこと。そうじゃない？」
「……」
「でね？それを隠して調べて欲しいっていうのは、私は感心出来ないの」

「……桜井さん」
「友達が事件に巻き込まれている。だから一緒に助けよう。そう言ってくれるなら、私は喜んで手を貸す。でも、ルシフェルさんの言い分は違う。ルシフェルさんは、私を大切なことから遠ざけようとしている」
「べ、別にそんなつもりは」
「あるの」
美奈子は言った。
「瀬戸さんを助けたいから私の所に来た。そうでしょう？」
「う、うん」
ルシフェルもそれは認める。
大切な友達が警察に疑われている。
だから、それを助けたい。
そのために必要なのは剣でも魔法でもない。
的確な状況判断とそれに基づく推理。
そのために、推理が得意な美奈子の所に来た。
「あのね？本当に大事なことを、ルシフェルさん、忘れている」
「大切な、こと？」
そう言われて、ルシフェルは美奈子の顔を見た。
美奈子がまるで母親のような穏やかさでルシフェルを見つめていた。
「私にとっても、瀬戸さんは大切な友達だって事」
「……あっ」
「そっ。瀬戸さんはルシフェルさんだけの友達じゃない。だから、こういう時は、一緒に助けようって言ってくれればいいのよ」
「ご……ごめんなさい」
ルシフェルは、目頭が熱くなった。
確かにそうだ。
何故、この調書を自分は美奈子に見せた？

美奈子に、助けて欲しいからじゃなかったのか？

誰を？

自分？

違う。

大切な友達を。

そして、見失っていたのだ。

その大切な友達とは、誰にとっての友達か。

自分だけ？

違う。

みんなにとって。だ。

私は、そんなことすらわからなかったんだ……。

「本当に、反省している？」

美奈子の問いかけに、ルシフェルは涙を拭きながら頷いた。

「うん……ごめんね？」

「うん」

調書を引っ込めた美奈子は、再度それを開くと、ルシフェルに言った。

「罰ってわけでもないけど……」
「えっ？」
「これ、じっくり読みたいから……1時間でいい。葉子の相手してあげて」
美奈子は机に向き直りながらそう言う。
その目は真剣そのものだ。
ルシフェルがドアの方を見ると、少し開いたドアの隙間から葉子が絵本片手に中をうかがっていた。
「クスッ……いらっしゃい。葉子ちゃん」

「――というわけで、おじいさんはおばあさんの生命保険で余生を老人ホームで過ごすことが出来ました。めでたしめでたし」
桜井邸のリビングで膝の上に葉子を乗せたルシフェルが絵本を読んでいる。
「わーっ！パチパチ」
よほど面白かったのか、葉子は興奮気味に手を叩く。
「面白かった？」
ルシフェルは、膝の上に感じる葉子の感触が嬉しくさえ感じられてしまう。
「うんっ！」
そう、無邪気に答える葉子の目は、澄みきっている。
どこかの誰かとは大違いだ。
「お姉ちゃん！次はこれ読んでください！」
葉子から本を受け取りながら、ルシフェルは思った。
本を読んでもらって喜ぶのが葉子ちゃんなら、
それを読んで喜ぶのは私だ。
本一冊で、こんなに世界が楽しくなるんだ。
もし……もし、自分に子供が出来たら、こうやってたくさんの本を読んで聞かせてあげたい。

ルシフェルは、そう思いながら、優しい声で本のタイトルを読み上げた。

「みんなのお友達、耽美戦隊ビスコンティー。悪の幹部・ジョルジュと愛と性技の味方・耽美戦隊ビスコンティーのブラックとの性別を超えた禁断の男と男の愛の物語……ね、葉子ちゃん。これ、どこからもってきたの？」

サイズはＢ５変形。やたらと薄い本の表紙を読みながら、ルシフェルは葉子に訊ねた。

「お姉ちゃんのお部屋」

「な、なんだか……正義って言葉が違っている気が」

ルシフェルはぺらりとページをめくり、そのまま自分のバッグの中へ本をしまい込んでしまった。

「えーっ！？何でぇ！？」

「あ、あのね？これは子供が読むとお母さんに叱られるって決まりがある本で」

結局、渋る葉子をなんとか説得してルシフェルが読んだのは――――

「大きな株～楽しい株価操作。めざせヘッジファンド」だった。

第二十話

そろそろ終わったかな？
ルシフェルは美奈子の部屋のドアをノックした。

「うん……そうなんだ」
ノックの返事がないので、そっとドアを開くと、美奈子は携帯で誰かと話し中だ。
悪いと思ったルシフェルがドアを閉めようとすると、美奈子は手招きでルシフェルを部屋の中へ案内する。
ルシフェルは無言でベッドに腰を下ろした。
「わかった。ありがとう」
携帯を切った美奈子がルシフェルに振り返った。
「ごめんなさい。未亜にちょっと話があったんで」
「未亜ちゃんに？」
「うん。このね？」
美奈子がルシフェルに見せたのは、メールの通話記録。
メールにはこう書かれていた。

＞綾乃ちゃんへ。
＞今日はびっくりするようなことがあったよ？
＞写真の子わかる？
＞今、水瀬君の家に厄介になっているんだけど、とっても大切な

「このメール打ってる最中に、事件が起きて、未亜ったら、思わず途中で送信したまま忘れていたんだって。だから、瀬戸さんへ届いた未亜からのメールはこれで全部」
「写真の子って？」
「今、転送してもらった。この子」

美奈子はパソコン上のブラウザをルシフェルに見せる。
そこに映し出されているのは、那由他だ。
「ふぅん？」
別に何の変哲もない。
せいぜい、横に水瀬が映っているだけ。
「これが？」
「これが、すべての引き金なのよ」
「えっ？」
ルシフェルには、美奈子の言葉の意味がわからない。
ただの写真が、何だというんだ？
「ルシフェルさん。この写真――少し目線を変えて、もう一度見て」
「えっ？」
「これを、あの嫉妬深い瀬戸さんの目で見たらどうなる？」
「……」
成る程。
恐らく、いや、間違いなく、瀬戸さんの目には、この写真はツーショットになる。
つまり――

「瀬戸さんは、この写真を見てプッツンした」
美奈子は言った。
「このメール、開封確認がついていてね？瀬戸さんがメールを開いたのがこの時間」
美奈子が指さすのは、ブラウザ上に表示された開封確認メールに書かれた時間。
「で、瀬戸さんの足取りが一時的に途絶えるのがこの時間」
それは、開封確認メールの時間から1時間と経っていない。
「瀬戸さんがいつもの調子でプッツンして、この写真の人を捜しに出たとしたら、説明はつかない？」

「それは」
「しかも、瀬戸さんは決定的な嘘をルシフェルさんの前で言ってる」
「私の？」
「そう――気づかない？」
ルシフェルは、ここ数日の間で交わした会話を思い出そうとして、結局やめた。
「あのね？ここ」
美奈子がルシフェルに示すのは、書類――ルシフェルの任務中の会話記録だ。

＞私、何かあれば、何をおいても私の元へ駆けつけろと躾たつもりでした。
＞未亜ちゃんから聞きました。那由他ちゃんが襲われたって。
＞そんな大事件が間近で起きていながら、妻である私には一言もなしなんて。

「ほらね？」
美奈子はそう言うが、何が言いたいのかルシフェルには全くわからない。
録音時間１２０時間、録音を止めることが出来ず、生徒達からは「プライバシーの侵害」と嫌われるレコーダーの中身がなんだというんだ？
「え？ただ、来てくれないって水瀬君をなじって、那由他ちゃんが危険になったって、それだけじゃないの？」
「それがね？」
美奈子は、今度は綾乃の通話記録をルシフェルに見せた。
「瀬戸さんの最後の通話記録は、電話とメール、共に未亜からのメール受信が最後なのよ」
「う、うん」
「それなのに、瀬戸さんは言ってるでしょう？

＞何かあった。
＞未亜ちゃんから聞きました。
＞那由他。
＞大事件が間近で起こった。

……いい？瀬戸さんは、こんなこと、未亜からも、ううん。誰からも聞いていないのよ」

「……あっ！」

ようやく、ルシフェルも理解が追いついた。

美奈子が問題としているのは、綾乃が知っているということは、誰からも通話を通して告げられていない。

つまり、知るはずがないことを、綾乃が知っていることなのだ。

美奈子は続けた。

「瀬戸さんは、絶対に那由他さん襲撃の現場に居合わせた。そして襲撃者を殺害し、あろうことか那由他さんを誘拐までした。那由他っていう女の子がエーテル嗅がされたのは、ルシフェルさんも知っているでしょう？」

「じゃ、あのロープで縛られたのも」

「そんなことまでされていたの？うん。間違いなく瀬戸さんの仕業だと思う。水瀬君に対する拷問のことを考えれば」

「よく殺さずにいなかったわね」

「そう。そこなんだけどね？この那由他って子は――あっ。未亜からだ」

美奈子は手慣れた様子でブラウザを動かし、新着メールを開いた。

「瀬戸さんがデビュー直前の研修生時代、仲の良かった子なんだって」

美奈子がルシフェルに見せたのは瀬戸綾乃と霧島那由他の経歴の

対比表だ。
「ほらね？同期で歌手養成所アーカムハウスに入所。まぁ、霧島那由他って子は、親の命令で歌唱力の勉強で入ったって方が正しいみたいだけど」
「……つまり、瀬戸さんは」
「会話の記録にもあったけど、霧島那由他って名前、恐らく本人から直接聞きだしたんでしょうね。それで瀬戸さんは慌てた。かつての友達なんですもの。で、どこから入手したかは知らないけど、エーテルを嗅がせて公園に連れ帰って、博雅君に発見させた」
「博雅君も一枚噛んでいると？」
「それはない」
美奈子はあっさりと否定した。
「だって、ルシフェルさんが知らないんでしょう？」
「う、うん」
「こういう事件、しかも、ルシフェルさんも関わっている以上、あの博雅君がそんな情報をルシフェルさんに告げないなんておかしいわ？」
「そ、そうかな」
「そう。もし、瀬戸さんから徹底的に念を押されて、誰にも言わないって約束してたら話は別だけど……博雅君、ものすごい律儀だから、約束は守る主義だし。まぁ、どっちにしても、問題はそこじゃない」
美奈子はそう言ってルシフェルに向き直った。
その目は、真剣そのものだ。
「問題は、公園で博雅君が発見したモノ。私は偶然だと思う。でもね？もし、博雅君がこれまで知っていたら大変だよ？」
「えっ？」
「那由他って子、そしてこれ。第一発見者は両方とも博雅君。警察には届けていないけどね」
「な、何を？」

「失血死するほどの量の血痕」
「血痕？」
「そう。公園のベンチの近くで発見されたんだって。で、その近くに那由他って子が行方不明になった時履いていたサンダルの片っ方が転がっていた」
「……つ、つまり」
「そう。瀬戸さんがプッツンした時の危険性はわかっているでしょう？あの勢いで、誰か殺してるって……私はそう見ている」
「ま、まさか」
美奈子は、事態が最悪の方向に向かっていることを告げている。
「そう。そのまさか」
美奈子は大きくため息をついてから言った。
「今では血糊は雨で流れてしまったせいで物的証拠はない。犠牲者が誰かもわからない。現場に居合わせて、そして誘拐されたとおぼしき那由他って子も、記憶を無くしている。その時、瀬戸さんがその場にいて、何かしたとしても、それを証明するモノが何も残っていない。――まとめれば、瀬戸さんが人を殺したと断定することは出来ない」
「……」
ルシフェルには返す言葉がなかった。
瀬戸綾乃は、確かに水瀬絡みでカッとなると何をしでかすかわからない。
それは経験からわかる。
その子が遂に、他人に手をかけた？
今までなかったのが不思議といえば不思議だけど――信じられない。
「な、何かの間違い、だよね？」
そう言うのがやっとだ。
「そう思いたい」
美奈子も思い詰めたような表情で答える。

「でも、瀬戸さんがあの晩、行方をくらませていること。そして、事件の当事者しか知らないことを喋っている。それが何を意味するか」
「……」
「それとね？」
「う、うん」

ピーピーピー

不意に、ルシフェルの携帯が鳴った。
未亜からのメールだ。

タイトルは、
『緊急！美奈子ちゃんのいないところで開いて！』

「ち、ちょっとゴメンね？」
ルシフェルは部屋を出てメールを開く。

そこには短く、
『ルシフェちゃんへ。
大変なこと忘れてたよ！お願いだから、村上先輩のことは美奈子ちゃんに言わないで！　絶対だよ！？　ワケは後で話すから、それまではＮＧね！？

未亜
より』

ルシフェルは青い顔のままで部屋に戻った。
「お仕事？」
「う、うん。似たようなもの。それで？」
「これからは全部私の推論。それは理解してね？でも、話す前に、

ルシフェルさんが知ってる範囲でいい。教えて欲しいのよ」
美奈子は、ルシフェルをじっと見ながら訊ねた。
まるでウソ発見器にかけられたような居心地の悪さを感じつつ、ルシフェルは答えた。
「答えられる範囲で」
「まず第一。敵に心当たりは？」
「そ、それは――」
「妖魔？魔族？」
「……」
「ルシフェルさん？」
美奈子の声のトーンが落ちた。
「こういう時、依頼人は隠し事しない。これ鉄則」
「あ、あのね？」
「ルシフェルさんが近衛騎士だなんて先刻ご承知のこと。いい？私は、ルシフェルさんを助けてあげるために言ってるの――言葉の意味、正しく理解して」
「……」
結局。
ルシフェルは思った。
機密漏洩って、こういう時に発生するんだろうな。
「他言無用っていうか――獄族って、知ってる？」
「獄族？」
美奈子はしばらく考えた後、言った。
「あのドンサーニ卿の？」
「――へっ？」
「18世紀アイルランドのファンタジー小説家よ。短編小説っていうより寓話が多いんだけど、その彼が書いた作品の中に、死に神を取り扱ったお話があって、私結構好きだから覚えてるんだけど、原文で“Ｄｅａｔｈ　Ｔｒｉｂａｌ”邦訳で“獄族”ってのが登場するの。多分、地獄に住む種族って意味だろうけど、私は“死の種族

”とでも訳す方が正しい気がする」
「それ――――どんなお話？」
「うろ覚えだけど、えっとね？」

美奈子が語ったのは、こんな話だ。

ある所に、一人の金持ちの男がいた。
男は、死ぬことを何より恐れていた。
だから、彼は願った。
死にたくない。
どうか私を死なさないでくれ。
ところが、神様も悪魔も彼の願いを聞き入れようとはしなかった。
“死は私達にはどうしようもないことだ”
神も悪魔も、そう言うのだ。
“なら、どうすればいい？”
神と悪魔は答えた。
“死に神のみが知る”
死に神さえ、どうにかすれば、死なずに済む。
そう思った男は、苦心惨憺して、死に神を退治する方法を手に入れた。
その方法は一度しか効かない。
でも、死に神は一人。
なら大丈夫！
そう思っていたら、ある夜、本当に死に神が男の元に現れた。
出迎えた男は、相手が死に神だと知ると、その方法で本当に死に神を退治した。
“これで死なずに済む！”
小躍りして喜ぶ男の前でドアがノックされた。
訝しがりながら開いたドアの向こう。
そこには、無数の死に神達が立ちつくしていた。

“お前達は何だ!?”
驚く男に、彼らは告げた。
“我らは死に神だ”
“死に神は一人のはずだ!”
“我らは“獄族”一人などではあるものか”
その夜から、男を見た者はいない。

「――まぁ、死に神から逃れる方法は、結局の所、ないってことだろうけど」
「その死に神――獄族が、今回の敵なんだよ」
「……へ?」
「死に神が単独の存在じゃなくて、種族だっていうのは正解。ドンサーニ卿って人がどこからそれを知ったのかはわかんないけど」
「オカルティストというより、地方の伝承に見識が深い人だったらしいわよ?――まぁ、ともかく、死に神が相手って……下手な妖魔や魔族より厄介ってことじゃない?」
「そうなる」
「とすれば、……この霧島那由他も、そんな獄族絡みの事件に巻き込まれているの?それとも、一年前の事件は、そういう事件だったの?」
「えっ?」
「ほら、この前、未亜のマンションから飛び降り自殺があって、死体が消えたって話あったでしょう?テレビで言っていたけど、同じ頃、未亜のマンションの周辺で銃声がしたって」
「銃声?」
「うん。警察はね?車の騒音を聞き違えたもので、事件とは直接関係はないって発表したらしいけど」
「う、うん」
「本当に銃声だとしたら?」
美奈子の目は真剣そのものだ。

「撃ったのは恐らく南雲先生のはず。それに、未亜の御婆様はアーカムハウスの経営者だし、事件のあった一年前といえば、未亜がアーカムハウスに頻繁に出入りしていた頃だから、那由他って子とは顔見知りだったと思う。

その後の経緯を考えると、彼女達が未亜のマンションにいた可能性は高い。

ううん。いた。そう断定出来る。

じゃあ、銃声は何？

未亜とケンカでもした？

それとも暴発事故？

違う。

――那由他って子を護るためだったとしたら？

南雲先生は騎士。

その騎士が剣を使わず、銃を使った？

私が思うに、撃ったのには理由がある。

理由？

撃たざるを得なかった。

それが理由。

何故？

相手が、普通の剣が効かない相手だったから。

違うかしら？

そして、犯人は逃げだし、あの事件が起きた」

ルシフェルは沈黙しながら美奈子の言葉を待った。

まるで見てきたように言う美奈子の言葉は、すべて推論として語られているはず。

それが、何一つ外れていない。

美奈子の洞察力に、ルシフェルは背筋が寒くなる思いがした。

「そういう相手――獄族に、霧島那由他という子は追われている。

未亜と南雲先生は彼女を保護して、水瀬君の家に連れて行った。――ねぇ、ルシフェルさん」
「な、何？」
「この犯人って、水瀬君の家には出ているの？」
「あ、あのね？」
「もう、水瀬君の家からまで逃げた？」
「う……うん」
ルシフェルは頷いた。
「敵に包囲されて、そのどさくさの中で」
「そう……確かめようがなくなっちゃったなぁ」
「えっ？」
「こっちのこと。――で、犯人は、霧島那由他をつけねらう。ところが、それを横取りする相手が出た」
「それが、南雲先生であり――瀬戸さんでもある」
「そういうこと」
「じゃあ！」
ルシフェルにもその言葉の意味がわかる。
「犯人が単独犯とは限らない……ううん。未亜ちゃん達の行動、南雲先生の判断から推測すると、犯人は人間ですらない。これまでの情報から犯人像を導き出せば、瀬戸さんが殺した……それすら間違いかもしれない」
「ま、間違い？」
「そう。瀬戸さんは相手を人間だと思って……まぁ、瀬戸さんのことだから、人間も妖魔もへったくれもない。自分に立ちふさがれば全部イコールで敵。なんでしょうけど。とにかく、瀬戸さんはその犯人を――殺した。
公園でね。
理由？
犯人が霧島那由他を殺そうとしたところで、ようやく瀬戸さんが彼女を発見したんでしょうね。

そして、犯人からすれば、瀬戸さんは犯行を阻害した、いわば敵になった。
その敵が、瀬戸さん達を放置するかどうかが今後の瀬戸さんの、そして南雲先生の命運を分ける。
ある種の暗殺組織は、任務遂行を邪魔立てした者は、たとえ暗殺対象でなくても殺すんですって。その理屈で来られたら？」

「！！」
ルシフェルは腰を上げた。
「あくまで私の考えだけど……もしそうだと思うなら、急いだ方がいいかもしれない」
その彼女に、美奈子は言った。
「犯人は、絶対に報復してくるわ。マンションで犯行を邪魔した南雲先生。公園で邪魔した瀬戸さん。さっき、ルシフェルさんが言っていたのが霧島那由他狙いだとすれば、犯人は、何一つ諦めていない」
美奈子は自嘲気味な笑みを浮かべながら、ルシフェルに言った。
「私がバカ言っているでいい。
徒労なら御の字。
でも、友達だから護ってあげてほしいの。
水瀬君にも連絡してあげて。
――このままなら、瀬戸さんが殺されるって」

「遅いっ！」
騎士団長執務室に入った水瀬に浴びせられた樟葉の一言。
いつものことだ。と、首をすくめた水瀬は内心でため息をついた。
樟葉はただ、黙って水瀬の顔をじっとみつめる。
「……」

「あの？樟葉さん？」
樟葉は重い声で水瀬に訊ねた。
「昨日、お前……誰と何をしたか、わかってるのか？」
「――――へっ？」
その重声は、重々しく、また、悲しげに聞こえる。
水瀬が樟葉のそんな声を聞いたのはこれで三度目。
第六次倉木山会戦。
祷子の近衛追放。
そして、今回。
「樟葉さん？」
樟葉は水瀬にとっては姉の存在。
そう、教わってきたし、常にそういう関係で接してきた。
水瀬にとっては身内。
大切な姉。
自慢の姉。
怒ると怖いが、怒られることさえ嬉しくなる位、かけがえのない存在なのだ。

その樟葉が、何か自分のことで思い詰めている。

「どうしたの？」
水瀬は、何故、樟葉がそんな声をしているのかわからない。
「昨晩、宮殿の控え室で何をしていた？」
「あっ……あの」
「祷子でさえ大目に見てやれる限界を超えていたというのに……！
！」
樟葉は頭を抱えて机に突っ伏してしまった。
「殿下も、ここまで男を見る目がなかったとは……」
グスッ。
水瀬は、樟葉が鼻をすすった音を確かに聞いた。

「こんなチビで童顔で、精神年齢三歳児の人格破綻者のドコがいいというんだ？」
「あのぉ……もしもし？」
「あれほど聡明にして、私が命を捧げても惜しくない程の、まさに現代の龍の子というべき傑出されたお方が」
「樟葉さぁん」
「こんな、こんなバカ息子の一体、どこが」
樟葉は泣き出していた。
珍しく、樟葉が情緒不安定になっているのは明らかだ。
「こ、こんな問題児のどこが……」
「樟葉さぁん……あのぉ。お話が全く見えないんですけどぉ」
「見えてたまるか！」
バァン！
マホガニー製の何十キロ、いや、下手すれば百キロ単位の重厚な執務机でちゃぶ台返しをやってのけた樟葉は、水瀬の両肩を力任せに掴み、遠心分離器顔負けのスピードで水瀬を揺すった。
「総女官長の九条殿から直々に私の耳に入ったことだ！昨晩、お前は控え室で殿下と二人っきりだったんだろう！？」
「なっ！？だ、誰か、見ていたんですか！？」
「知るかッ！貴様ぁ……殿下に手を出してはいないだろうなぁ？」
刀を振りかざしてそう叫ぶ樟葉の迫力は半端ではない。
「し、してませんっ！」
その迫力に水瀬は思わず腰を抜かした。
「き、キスだけです！」
「それだけで万死に値するわっ！」
「だけど、僕は！」
血走った目で水瀬を睨み付け、刀を振り下ろす一歩手前の樟葉だが、
ドスッ！
不意に二尺五寸の魔法刀を水瀬の股間にあたる床に突き刺し、そ

のまま力つきたようにしゃがんでしまった。
「樟葉さん？」
刀の柄に手を伸ばしたまま、俯く樟葉の表情が、水瀬には見えない。
「あの……？」
「おい。バカ息子……」
かすれたような、悲しげな声が小さく水瀬の耳に届いた。
「はい」
「頼むから」
水瀬は、その声色を聞いたことがある。
一年戦争の時、何度も聞いた声。
それは、樟葉が自分の姉として何かを諭す時の声。
決して、無駄にしてはいけない、貴重な言葉。
水瀬は思わず正座して言葉を待った。
「……もう少し、楽な相手と恋愛してくれ」
「樟葉さん？」
「どうしてお前は毎度毎度……」
「……」
「……」
ガンッ！
しばしの沈黙の後、樟葉の拳が水瀬の脳天に炸裂した。
「痛ぁいっ！」
「うるさいっ！――――あーっ。すっきりした！」
「僕は全然納得出来ませんっ！」
「私がすっきりすればそれでいいんだよ！」
樟葉は執務机を戻しながら水瀬に言った。
「それと、だ」
「はい？」
「昨日の敵の件だ」
「はい」

「女官達監視下にあった死体が、女官達の目の前で消えた。煙のように……人間が気化した。女官達はそう報告して来たそうだが？」
「間違いないでしょう」
水瀬は答えた。
「吸血鬼の特殊能力に近いものと思われます」
「何者かが、獄族を殿下暗殺のために送り込んできた……そう見ていいな？」
「問題はそこです」
水瀬は答えた。
「その、敵が見えないんです」
「見えない？」
「はい」

水瀬の言い分はこうだ。
・女官の証言から、犯人は南雲達を襲った者と同一人物と判断できる。
・しかし、敵の狙いは霧島那由他と村上速人のはず。
・それなのに、南雲を襲い、日菜子殿下をも襲った。
・その行動に統一性が見えない。
・突飛な発想をとれば、南雲襲撃は、敵の行動を阻害した者への報復……そう見ることは出来るが、日菜子殿下襲撃が、それでは説明できない。
・日菜子殿下を狙わなければならない、狙うに値する、何かきっかけがなければならないはずなのに、それが、どうしても見えない。

「……」
樟葉にも、それが説明出来るはずがない。
水瀬は首を傾げながら続けた。
「日菜子殿下が、南雲大尉同様に、敵の行動を阻止したとでも言えば話は別でしょうけど。そんなはずあるわけないし」

「……」
「それと。殿下はこう仰せでした。“瀬戸綾乃の行動を洗え”と」
「それは現在、警察とルシフェルがやっている」
「ルシフェが？」
「ああ。薬物を盛られる失態を犯した以上、その程度はやってもらう」
「薬物？」
「聞いていないか？」
「はい」
「魔法薬だ。毒物防御薬をすり抜けた、かなり特殊な代物だと報告が出ている」
「ルシフェ、どこでやられたんです？」
「瀬戸綾乃の警護中だ。それと、お前も情報交換の必要があるだろうと思って、ここに呼びつけてある」

「失礼いたします」
しばらくの後、一礼して入ってきたのは、ルシフェルだ。
「ルシフェ。薬を盛られたそうだけど」
「うん……その件ですぐに水瀬君に伝えたいことが」
「何？」
「さっき、この件、美奈子ちゃんに相談したのよ」
「桜井さんに？」

ルシフェルは水瀬に告げた。
今回の事件に関する桜井美奈子の見解は以下の通り。
・瀬戸綾乃は、霧島那由他を水瀬の浮気相手と誤認、その排除に動いた。
・瀬戸綾乃は、霧島那由他誘拐の際、霧島那由他を殺傷しようとした存在と接触、恐らくはその存在を殺傷、もしくは殺傷に近い損害を与えている。

・瀬戸綾乃は、誘拐成功の時点まで、誘拐した対象を霧島那由他と自覚していなかった。
・相手が霧島那由他と認識したため、瀬戸綾乃は霧島那由他を解放した。
・南雲先生及び霧島那由他達襲撃を考えると、対象は瀬戸綾乃へも同様の襲撃を企てる恐れは大である。
・早急に、瀬戸綾乃警護の必要がある。

「成る程」
感心したように頷くのは樟葉だ。
「そこまでの状況分析能力か……いっそ、欲しい人材だな」
「本人はアナウンサー希望と」
「就職した途端に敵に回りそうな相手か……厄介だな」
「とにかく、樟葉さん」
ルシフェルは言った。
「早急に、瀬戸綾乃の警護が必要です。許可を願います」

「必要ない」

「えっ？」
ルシフェルは耳を疑った。

「必要ないよ」

そう、聞こえたからだ。
しかも、その声は、樟葉の声ではない。
水瀬の声。
瀬戸綾乃の恋人の声。
そんな存在から出てきた声。

それが、信じられない。

「水瀬君？」

ルシフェルは訊ねた。

「今、なんて？」

「だから」

水瀬は平然とした顔で言った。

「必要ないって言ったの」

次の瞬間、

パンッ！

乾いた音が執務室に響き渡った。

ルシフェルが水瀬の頬を打った音だ。

「み、水瀬君……」

怒りに震えるルシフェルは、腰の刀に手を伸ばしながら怒鳴った。

「こ、恋人でしょう！？それなのに……それなのに！」

「だからぁ！」

水瀬は怒鳴った。

「敵が瀬戸さんを襲う可能性は、もうないだろうって言ったの！」

「どうして！？」

ルシフェルはその言葉を頭から否定した。

「南雲大尉は二回も襲われているんだよ！？那由他ちゃん達だって、何度も何度も！」

「いたたっ……これではっきりしましたよ」

水瀬は頬を押さえながら樟葉に向き直って言った。

「殿下が襲われたカラクリが」
「どういうことだ？」
樟葉は椅子から腰を浮かせて水瀬の言葉を待った。
「あくまで仮説ですけど」
水瀬は、そう断りを入れた上で続けた。
「敵は、すでに綾乃ちゃんを襲ったんです」
「瀬戸さんを！？」
「で、瀬戸さんというか、“彼女”はそれを退けた。どうやって？全く無関係のアカの他人の名を、相手に突きつけたんです。こいつに命じられたんだって」
水瀬はそう言って、携帯電話のメールを開いた。
「ルシフェ、最近、綾乃ちゃんが僕絡みでプッツンするようなこと、なかった？」
「え？う、うん。あの、瀬戸さんが日菜子殿下と水瀬君の――――！！」
驚愕のあまり、ルシフェルの目が見開かれた。
「やっぱりばれちゃってたかぁ……」
水瀬は、どうでもいいという顔で言った。
「多分、私ではなく、悪いのは日菜子殿下だ。とか何とか言ったんじゃないかな。敵はそれに納得して、そして殿下を襲うためにここへ移動した」
「……おのれぇ！」
目が血走った樟葉の手が刀の鯉口を切る。
「己の非を殿下に転嫁させるとは何事か……！！」
「綾乃ちゃんの敵から逃げられるし、自分の手を汚さずに敵を排除できるんだから一石二鳥――――よく考えたと思いますよ？あのお姫様も」
「お姫様？」
「誰のこと？」
「あっ……な、なんでもない！言葉のアヤ！！」

樟葉とルシフェルの怪訝そうな視線に晒される水瀬は、焦った様子で言った。
「とにかく、日菜子殿下はそれがわかっています。だから僕に綾乃ちゃんの行動を洗うように指示を出したんです」
「……殺傷命令は出ていなかったのか？」
「それはまだです」
「水瀬君っ！」
「それより、えっと……試したいことがあるんです」
「何だ？」
「殿下を囮にしたいんですけど」

チャカッ
チャッ

女性騎士として世界最高峰の二人が刀を抜いた。
普通なら、絶対に居合わせたくない空間に立たされた水瀬だが、
「このままでは、殿下が危険です」
水瀬は平然として言う。
「――囮にするのは危険ではない。とでもいうつもりか？」
その樟葉の言葉はもっともだが、
「公務の際に襲われるリスクを考えれば、安いです」
水瀬は冷たく言い返した。
「殿下が公務の席で襲われることでもたらされる国内外の影響を考えてください。ただでさえ殿下を巡っては、皇位継承問題が絡んで複雑なんですから」

「……」

いわれなくてもわかってはいる。

一体、私を誰だと思っているんだ？と、樟葉は内心で舌打ちした。

「事はすべて闇の中にて処理されるべきです」

「……わかった。で？何をどうするんだ？」

「お姫様……じゃない、瀬戸さんの策を使うんです」

「瀬戸さんの？」

「そう。ルシフェ。お前の敵が日菜子殿下というのはウソだ。お前はダマされている。本当はコイツだって言うの」

「待て」

樟葉が水瀬の言葉を止めた。

「言いたいことはわかった。だが、その恨みを買う者の危険性を考えると」

「ここでくじ引きでもやります？」

「適任者は？」

「死んでも誰の迷惑にもならない。むしろ感謝される相手」

「政治屋と官僚全員指名してやろうか？」

「それはそれでリストアップしておいて下さい――日菜子殿下の敵になりそうな連中」

「近衛の敵対者リストは手配しておこう――それで？お前は誰のことだと言いたいんだ？」

水瀬は無言で指を指した相手。

それは、

グキッ！

鈍い音がして、指の方向が変わった。

「成る程？」

樟葉は納得。という顔で頷いた。

「バカ息子、自分の価値を的確に判断するのはいいことだ。褒めて

やる」

本来、指さされた相手――樟葉はそういうと、さっさと執務室から出ていってしまった。

「ヒドイよルシフェ！」

「そんなの、自分でやらなくちゃダメ！」

その背後で子供達の口論が聞こえてきたが、もう樟葉の知ったことではない。

樟葉の背後でドアが閉まった。

第二十一話

夜。
すでに宮殿周辺には魔導師達が厳重な防御を施し、これから水瀬が行おうとする作戦の支援体制を整えていた。
準備は万端。
最後に必要なもの。
それを受け取りに水瀬は日菜子の元を訪れていた。
「……んっ」
またもや二人っきりで、水瀬の膝の上に座った日奈子は、水瀬と唇をかわしていた。
「葉月市内の爆発とは、そういうことなのですね？」
「はい」
水瀬は日菜子に経緯の全てを説明した。
村上達が霧島邸に潜入。
重要書類を確保しようとして失敗。
ブービートラップによって書類のほとんどを焼失。
村上は、かなめに力任せに襟首を引っ張られたせいでむち打ちになって寝込んでいる。

「聞いた話ですが」
水瀬は日菜子の耳元でささやいた。
「んっ……な、なんですか？」
日菜子の手が水瀬の背に回され、ぎゅっと抱きしめられる。
日菜子はそれだけで芯から体が熱くなるのを押さえられない。
「爆発には、一年戦争の際、行方不明になっていたセムテックス系の爆薬……あれが使われたと」
「霧島は、テロでもやろうとしていたのですか？」
日菜子の顔が一瞬にして真顔に戻った。

「霧島……霧島源一郎が何をしようとしていたのか。それはもうわかりません」
水瀬は言った。
「ただ、そんな物騒なモノを使用してまで護ろうとした秘密が、あったのです」
「惜しいことをしましたね」
「えっ？」
「ですから、ほら。その書類が手に入れば、その狙いの一端でも掴めたかもしれないではないですか」
「あっ。そ、そうですね」
「？」
日菜子はマジマジと水瀬の顔を見ながら、
「水瀬？どうしたのですか？」
「いえ」
水瀬は答えた。
「今日、上手くすれば相手と交渉できるかな。その時に聞き出せないかな。そう思っていたので」
「計画はいただいていますけど」
日菜子の顔が曇った。
「心配です」
「日菜子は、魔導兵団の精鋭が御守りします――そんなに信頼出来ません？」
「違います」
日菜子は水瀬に抱きついた。
「あなたが、心配なんです。悠理」
それが日菜子の本音だ。
愛する男が自分を命がけで護ってくれる。
それは女にとって嬉しいことだ。
だが、だからといって、愛する男を危険にさらすことを良しとする女がどこにいる？

日菜子も、その例外ではない。
主君としては、持ってはいけない考え方。
だが、女としての日菜子はそれを放棄出来ない。
「殿下」
水瀬は日菜子の肩を掴むと、その体を起こした。
驚いた顔の日菜子の目に映る水瀬は、とても優しい顔をしていた。
「ダメですよ？こういう時は、“敵を倒せ”とか、そう言っていただかないと」
「水瀬……」
「僕が忠誠を誓う殿下なら、そう言ってくれるはずです」
「……」
日菜子は、水瀬の膝の上から降りると、居住まいを正した。
水瀬の椅子から腰を上げ、主君の前で片膝をつく。
そこにいるのは、恋人同士ではない。
主従だった。
「皇位代理権者として命じます――水瀬」
その声は先程までの甘えきった声ではない。
凛とした、威厳にあふれた皇女の声。
「はっ」
「皇室に弓引く敵はいかなる存在であろうとも排除しなさい」
「御意……ただ」
水瀬は答えた。
「小官は敵の面前に立ちはだかり、刃を持って全てを薙ぎ払い、地獄の業火で全てを焼き払いましょう……それでも」
水瀬は日菜子を見た。
その目は、明らかに主君を試していた。
日菜子と水瀬。
その冷たい視線同士が空中でぶつかる中、水瀬は言った。
「殺すのは、殿下の御意志です――その覚悟がおありですか？」

戦場に出よう。
敵を殺そう。
だが、日菜子よ。
忘れるな？
敵を殺すのは、剣でも魔法でもない。
お前の意志そのものだ。

水瀬はそう言ったのだ。

「主君を愚弄するな――――かつてそう言った覚えがありますが？」

「……」

「私を愚弄するのはやめなさい！」
日菜子は室内に響き渡るほどの大声で怒鳴った。
「私は命令を下しました！」
それは、真上から叩き付けられるような声。
君主の声だ。
「命令に変更はありません！
敵を殺しなさい！
敵と戦い、勝利と栄光をもたらす！
その騎士の義務を果たすのです！
立ちふさがる者は皆殺しになさい！
女子供といえどもその刃の元、切り伏せ！
菊花紋の威光を！
その恐怖を！
逆らいし愚か者にたたき込むのです！」

「全ては、殿下の御心のままに」

水瀬はそう言って一礼した。
「……」
日菜子の返事はない。
「……殿下？」
日菜子はそっぽを向いた。
「……殿下？」
今度は背を向けた。
「殿下ってば……お耳が聞こえないのですか？」
耳を塞ぐ。
「もうっ……日菜子ってば。かわいいんだから」
「知りません」
その声は怒っていない。
むしろ泣きそうだ。
「どうしてあんなこと言うんですか？」
日菜子は涙声で水瀬に抗議した。
「こうして二人きりの時は、女の子として扱ってくれるという約束でした」
「……」
水瀬はそっと日菜子を抱きしめた。
「私は、それを信じていたのです」
「あのね？」
水瀬は日菜子の髪に顔を埋めながら言った。
甘い香りが水瀬の肺一杯に広がる。
「敵を前にした時、迷いたくないんです」
「迷い？」
「そう」
「私が、迷いの原因になると？」
「違います」
「そう言っています！」
ぎゅっ。

振り返ろうとする日奈子の体を抱きしめる水瀬の手に力がこもる。
「日菜子が君主としての義務を忘れさせるようなことがあってはならない。それが心配で」
「……水瀬？」
「中華帝国女帝西太后の遺言にもありますよね？「以後女をして国を当たらしむるべからず。これ本朝の家法に違背すればなり」でしたっけ？女としての迷いを政（まつりごと）に持ち込むことを、あれほどの名君でも恐れた……その警告を軽んじて欲しくない。……そんなことして、大切な日菜子の名が汚されるようなことは、僕はイヤです」
「……水瀬」
日菜子は、そっと自分を抱きしめる水瀬の腕に手をやった。
固い軍服の生地越しに感じる水瀬の感触を日菜子は感じた。
「私、大丈夫です！」
日菜子は努めて明るい声で言った。
「必要だと思ったら、百万、千万の敵に包囲されて助けを求めるあなたを見殺しにして、その様を見ながらお茶だって飲めます！」
「……すごく、嬉しいのか悲しいのか」
「くすっ。そういうことでしょう？」
複雑な顔をする水瀬の腕の中で日菜子が回転し、最愛の男の胸中に顔を埋めた。
「喩えが酷すぎます」
水瀬はわざと憮然とした口調になった。
「ひどいです」
「傷つきました？」
対する日菜子はどこかおかしさを堪えているような様子。
「とっても」
「さっきの私はもっともっと傷ついたんです」
「……反省します」
「よろしい♪」
顔を上げた日菜子は瞳を閉じた。

「それで？」
「はい？」
「私に何か、お願いでは？」
「あっ。そのことですけど」
水瀬は言った。
「日菜子にちょっと……」
「なんです？」
首を傾げた日菜子に、水瀬は言った。
「お願い通り、死んでいただきますけど――」

深夜。
宮城（きゅうじょう）、謁見の間。

窓から差し込む月明かりが室内を青白く照らし出す。
この国における栄達を見つめ続けてきたこの部屋も、夜となると人気はない。

いや、いた。

謁見の間の奥。

玉座に座るのは――

日菜子だ。

誰もいない室内を見つめる目は、何も見ていない。
ただ、日菜子はぼんやりと座るだけ。

日菜子は待っていた。
ただ、一人の登場を。

フワッ

窓を閉め切っているはずの室内に一陣の風が走る。

「……」
黒い絹の様な髪がその風になびいても、日菜子は身じろぎ一つしない。
ただ、ぼんやりと座るだけ。
待っていた相手が現れたというのに、日菜子は動じない。
待っていた相手が現れた？
そう。
現れたのだ。
黒いざんばら髪、黒い服を纏った男。
霧島だ。
月明かりの中、霧島は無言で日菜子と向き合う。
いつの間に？
どこから？
そんな問いかけは無意味なのかもしれない。
ただ、霧島がここにいて、日菜子と向き合っていることが問題なのだから。
「……」
「……」
月明かりを手にしたナイフが鈍く反射する。
日菜子にそれがわからないはずはない。
それなのに、日菜子は動じることすらない。
騎士だから？
それとも周囲に護衛がいるというのか？

日菜子は動じない。
そして――

霧島のナイフが閃き、
日菜子の首が、宙を、舞った。

「……」
日菜子の首をはねた霧島は、踵を返して謁見の間から姿を消そうとした。
「待って」
いつの間にか霧島の前に立ちふさがるように立っていたのは、水瀬だ。
「敵対はしたくない。でも、せめて、名前くらい教えて欲しい」
その言葉は、人間同士が話すいかなる言語でもない。

いや、そうでなければならないのだ。

「……」
「口がきけないワケじゃないでしょう？」
「……貴様になぜ、私が応じる必要がある？」
顔から想像するに、しわがれた声かと思ったが、案外と若い男の、やや神経質な声が響いた。
「その人に雇われていたんだ。だから、主が誰に殺されたか位は知っておかないと」
「キリシマだ」
「それはその体の名前」
水瀬は言った。
「そうじゃなくて、その体の主、つまりあなたの名前」
「……知ってどうする？」

「それは、僕の決めることじゃないよ」
水瀬は肩をすくめた。
「上の人の決めること」
「なら、その愚か者共に言っておけ――――我は死に神だと」
「死に神さん？」
「そうだ。死を司る者。不死にして絶対の存在」
「そんなお方が、何で人間の体使って、次々に人を襲うの？」
「理由はある」
霧島は言った。
「この男と私は契約を交わした。生け贄を巡ってのな。ところがこの男は期日までに生け贄を我に差し出すこともなかった。故に死して後、こうして契約の遂行のため、我に使われている」
「生け贄と、人殺しとどう関係があるの？」
「我に刃向かった者に死を与える。そのために」
「ふぅん？その人は、あなたとの契約を反故にした罰としてあなたにコキ使われて、とにかく生け贄を持ってくるように命じられている。というか、あなた自身が生け贄の確保に動いている。で、その途中であなたの仕事を邪魔した奴らをあなたはついでに殺そうという」
「そういうことだ。誇り高き我らに刃向かいし愚か者に死を与えるだけだ」
「わかった。で、お住まいは？」
「獄界国獄県獄市獄町獄一丁目」
「……冗談のわかる人って好きだなぁ。――――人間界でのお宿は？」
「語ると思うか？」
「上の人が、お礼にうかがうかもしれないし」
「ふん。義理堅いことだ」

「もう一つ」
水瀬は言った。

「目的は何？何のためにこんなことするの？」
霧島の答えは単純だった。
「知りたければ、我に殺されてからにすることだな」
「それじゃ聞けないでしょう？」
「お前の魂は実に奇妙だ。見たことがない。だから、私がじっくり研究してやろう」
霧島の爪が伸びて細身の剣のようになる。
目は赤く輝き、殺意をたたえる。
戦うつもりだ。
「いつもの武器がないのが残念だが」
「結構です。というか、その爪も引っ込めていただけると、大変有難いのですが」
恐る恐るという感じで話す水瀬に、霧島は森●健作ばりの清々しい声で言った。
「遠慮するな！」
「そう言われてもなぁ――――っ！！」

ガンッ！

水瀬は霧島の一撃を何とか止めた。

「ほう？霊刃ではなく、実刀を用意してくるとは、考えたな」
「どっちが来るかわかんないもん」
「正解――――だ！！」
「！！」
水瀬はとっさに後方に跳ぶ。
いや、吹き飛ばされた。
霧島の腹部から飛び出した魔法の矢の直撃を受けたのだ。
だが――――
「ぐっ……き、貴様ぁ！」

水瀬が吹き飛ばされただけに対して、霧島は胸を押さえて蹲っている。

「や……やってくれたな」

霧島は煙を上げる胸を押さえながら言った。

「反射魔法（リフレクション）を使ったか……」

「どんなの来るかわかんなかったから」

霧島の口元が歪み、何かを言おうとした瞬間――

「むっ！？」

霧島の体が横っ飛びに跳んだ。

霧島のいた場所を光の矢が突き抜けたのは、ほぼ同時。

第三者の攻撃であるのは明らかだ。

「なっ！？」

驚いた水瀬が後ろを振り向き、そして見たモノは、

「外したか！？」

黒いローブに身を包む数名の男達。

ローブから察するに、魔導兵団の魔導師だ。

「な、何を！？」

「どけっ！魔法騎士！」

狼狽を隠せない水瀬の目の前で、魔導師の手から次々と魔法の矢が繰り出される。

「追跡（トレース）が仕事でしょう！？」

流れ弾に当たらないように回避しつつ、水瀬がそう抗議するが、

「知ったことか！」

「我らは敵を倒すのみ！」

水瀬の言葉に魔導師達は耳を貸そうとしない。

理由は簡単だ、と水瀬は思う。

相手の動きが騎士ではなく、一般人のそれだと、つまり、自分達でも戦える相手だと判断したからだ。

「内弁慶っていうんだっけ？とにかく止めてよ！」
「やかましい！」
謁見の間に魔法の矢が走り、あちこちで爆発が起きる。
玉座までが魔法の矢で吹き飛んだ。
「これ、誰が弁償するの！？僕知らないからぁ！」
「必要経費だ！逃げたぞ！追えっ！」
魔導師達の目には霧島が謁見の間の背後にある隠し扉から逃げたように見えたのだ。
だが、水瀬は知っている。
それが幻覚だと。
だから、魔導師達に何も言わなかった。
そして――
ギャアアアアアアアアッ！！！
隠し扉の向こうから響き渡る絶叫。
そして、鈍い、何かを咀嚼するような音。
「ごめんね？バカが多くて」
水瀬はあらぬ方向に頭を下げた。
「人間とは、得てしてああいう愚かな存在だ」
闇の中から聞こえてくるのは霧島の声。
「目に見える者だけを信じる。いや、信じられない俗物だ」
「よくわかる。でね？」
「今夜は引くとしよう」
霧島は胸を押さえながら言った。
「肉体のダメージが大きすぎる」

「待って！」
水瀬は叫んだ。
「まだ質問に答えてもらっていないよ！？」
「聞きたければ代償を――魂をよこせ」
「ヤダ」
「交渉決裂だな。ん？」
霧島は何かに思い当たったという顔で水瀬に言った。
「よし。こうしよう」
「えっ？」
「私の方で場を用意してやる。お前がイヤでも出てこなければならない状況も、私がお膳立てしてやろう」
「僕が、イヤでも？」
「これは賭けだ」
「だからイヤなんだって」
「やかましい」
霧島はすでに勝利が確定したような顔で言った。
「賭けに勝てば、話を聞いてやらないこともない」
「保証がなければやだよ」
「ついでに、あの日菜子という女の精神をいじって、お前専用の●●にしてやる」
「それくらいならいくらでも出来る」
「……する気だったのか？」
「どうでもいいでしょ！」
水瀬は赤面して怒鳴った。
「僕だって男の子なんだから！」
「しかたない」
霧島は頭を掻いた。
「お前の女神様――あの女ならどうだ？」
「――へっ？」
「記憶操作して、お前とラブラブ真っ盛りだった頃の記憶を呼び覚

ましてやる。後はお前次第だ」
「で……出来るの？」
「私を誰だと思ってる？なんなら、お前を見るだけで欲情するとか、お前以外のオトコに興味を持てなくしてやるとか、費用は別途相談でいくらでもセッティングしてやる」
水瀬は即答した。
「乗る！」
「よし」
霧島は頷いて言った。
「契約は成立した！しくじれば、貴様の魂は我のモノだ。努々（ゆめゆめ）忘れるな！」
ゴウッ！
一陣の強い風が吹き、とっさに腕で顔を覆った水瀬が次に霧島を見たとき、霧島の姿はどこかに消えていた。
「こ、今度は――」
ふーっ。
ふーっ。
水瀬は鼻息を荒くして何事かを呟いていた。
「あんなコトとかこんなコトとか――縛っちゃたりなんかして」
後には、最愛の女との濡れ場を想像して、欲望丸出しの鼻息を荒くする水瀬が立ちつくしていた。
「ムチとかロウソクとか――ヌンチャクとか……フフッ……フッフッフッ」

戦場と化した謁見の間。
そこに、

ジュルッ

水瀬がヨダレを拭く音だけが静かに響いた。

第二十二話

翌日、水瀬は都内の駅にいた。

電車でどこかに移動するためではない。

水瀬に言わせると“奇跡的”なほど珍しく、任務中の食費として５００円もの（締まり屋のルシフェルによって金銭を管理されている水瀬にとって）大金５００円をもらったので、御馳走を食べに来たのだ。

「ヘイお待ち！」

どんっ。

駅の立ち食いそば屋。

朝食を摂るサラリーマンに混じってカウンターで待っていた水瀬の前に出されたのは、一杯の天玉そばだ。

「ありがとうございます」

水瀬は何故か、涙を浮かべて割り箸を割った。

その後、水瀬は地図片手に町中を歩いていた。

人通りが多いため、人にぶつからないように、補導されないように気をつけながら。

目的は人探し。

憧れの天玉そばを食べられたことに満足しつつ、水瀬はあたりを見回した。

「あ、いた」

立ち止まった水瀬を見つけたのか、水瀬に飛びついてきたのは――

「ふぇぇぇん！悠理くぅん！」

髪の長い女の子の……幽霊。

そう。

真由だ。

「ど、どうしたの？」

今まで真由がいた辺りをちらと見ると、何人もの若い男の霊が漂っていた。

水瀬が怖くて近づけないのがありありとわかる。

「ひ、ヒドイですぅ！」

ひーん！

泣きわめく真由に、水瀬は正直、困惑した。

日菜子を殺した相手を、タマと共に追跡していただけのはず。

もし、見つかったら逃げればいいし、タマなら十分その相手となる。

全ては事前の打ち合わせで決めていたこと。

問題はないことだ。

それなのに、なぜこの子は泣いているんだ？

「あ、あの……真由ちゃん？」
「タマさんは途中に生えてたマタタビでラリっちゃうし、途中でへンなお店の近くどころか、中にまで入るハメになるし！そしたら……そしたら！」
「そしたら？」
「おじさん達に、嬢ちゃんいくらだいくらだって！なんとか振り切って、お仕事続けていたら、今度はこの病院前でいかにも怪しいお兄さん達に囲まれて！」
「幽霊にまで……で？いくら要求したの？」
「してませんっ！日菜子に告げ口しちゃいますよ！？」
「それは勘弁してほしいなぁ……で？」
「グスッ……この病院の中に入ったのは確認しています」

真由と水瀬は目の前の建物を見た。

「病院？」

白い建物がいくつもそびえ、出入りもひっきりなし。
病院とすればかなりの規模だ。

「間違いありません」
真由は言った。
「この建物に入ったんです。建物の外から見張っていましたけど、それらしい霊が出た形跡はありません」
「で、その間にナンパされたんだ」
「ヒドイんですよ！？」

真由はたまらず怒鳴った。

「ベッドはいくらでも開いてるからとかなんとか！スゴくロコツなことばっかり！こんなメに会うくらいなら、宮中であの小うるさいおばさん達の相手してる方がマシです！」

水瀬は結局、泣きわめく真由を説き伏せてタマを回収後、宮中に戻るように指示して、そして病院の正面玄関をくぐった。

無理もない。

真由がこの病院に入らなかった理由が水瀬にもわかる。

天井には若い男女の霊が張り付き、床を赤ん坊の霊が這う。

死者の念が渦を巻き、生きている患者より死霊の方が多いような状況を作り出しているのだ。

患者やその家族、看護婦達が、そんなことに気づくことなくせわしなく動いているのがむしろ信じられない。

こんな所に霊である真由が入ったら、それだけで汚染は避けられないだろう。

水瀬は小さくため息をつくと中へと入っていった。

敵は、この病院に入った。

真由はそう言っている。

その情報が正しければ、この病院を虱潰しにするだけだ。

そう判断した水瀬が向かった先。

そこは地階。

霊の反応が最も強い場所。

階段を死霊が埋め尽くすのに気づかないフリをして、水瀬は階段

を降りる。
決して気分のいいものではない。
目で見える老人や子供を踏みつけて、しかもその感覚がない。
実に奇妙な違和感に、水瀬は顔をしかめるしかない。

「ここかな？」

水瀬が立ち止まったのは、一つのドアの前。
怨念に近い死者の念がドアの隙間から放出されている。

「霊安室？……違うな」

水瀬は首を傾げた。

違う。

宮中で出会った彼の感じがしない。

でも――なんだろう。

彼に近い、何かの感じが確かにこの地下から放たれている、それが死霊を呼びつけているのに。
それが、このドアの向こう側には存在しない。
この地階の別の場所だ。

キュラキュラキュラ

「！？」

不意に暗い廊下に響く金属的な音に、水瀬は身構えた。

「あれぇ？」

暗闇の向こうからそんな声がした。
若い女の子の声だ。

「君、何してるの？」

キュラキュラキュラ

廊下の向こうから姿を現したのは、牛柄のパジャマ姿の女の子。
右手が点滴の吊されたキャスターを握ってた。
キュラキュラという音は、どうやらそのキャスターの音だ。

「というか、君こそ何してるの？」

人間、しかも入院患者と判断した水瀬が逆に訊ねた。

「探検です」

女の子は無邪気にそう言った。

「探検？」

外見から判断すると、自分より年下らしい。
そんな子が探検？
言い訳じゃなければ、ヘンな子だ。

「そうです」

女の子は楽しそうに笑った。

「病院の中を探検しています」

「……楽しい？」

「はい♪いつもベッドの上ですから、とても退屈で」

「ふぅん？」

「そういうあなたは？入院患者じゃないですよね」
「え？う、うん……お、お見舞いに」
「こんな地下にですか？」
「迷子になっちゃって」
下手な言い訳だと自分でも思う。
でも、人に会うことなんてまるで考えていなかった水瀬は、適当な言い訳を思いつくことが出来なかった。
「大変ですねぇ」
女の子は、驚いた顔でそう言った。
まるで疑っていないことは確かだ。

この子、大丈夫かなぁ。

水瀬は心配そうな目で女の子を見た。
きっと、精神病か何かで入院させられているのかもしれない。

「あ、今、何だかとっても失礼なこと想像しましたね？」
女の子は水瀬の顔を下からのぞくようにして言った。
「ダメですよぉ？私はレズじゃないんです。アブノーマルですけど」
「？あ、あのね？」
水瀬は言った。
「僕、男の子なんだけど……」
「へ？」
女の子はマジマジと水瀬を見た後、気の毒そうな顔で言った。
「ああ。性同一性障害の方」
「ち、違うよぉ……普通にツイてるって」
「じゃあ見せてください」
「――へ？」
水瀬は女の子が何を言ったのかわからなかった。
「な、何を？」

「だからぁ」
目をランランと輝かせる女の子は、ポケットから携帯を取り出しながら言った。
「ツイてるなら、その証拠を」
携帯には疎い水瀬だが、カメラ機能を使って何を撮影しようとしているかは想像がついた。
「こ、こらっ！」
ぺしっ。
水瀬の平手が軽く女の子の頭を叩いた。
「女の子がそんなハシタナイことしちゃいけません！女の子はもっと恥じらいとタシナミを！」
「ううっ……女の子の頭はたくなんてヒドいですぅ……」
涙目で訴える女の子に水瀬は言った。
「そんなことより。こんな所にいたら大変なことになるよ？」
「なんでですか？」
「だ、だってここ、霊安室でしょ？」
「あれぇ？」
女の子はきょとん。とした顔になった。
「君、迷子さんでしょ？それで、なんでここが霊安室だって知ってるんですか？」
「プレートに書かれている霊安室って言葉くらい読めるよ」
「ああ。それもそうですねぇ」
「でしょう？」
「てっきり、あの子のお見舞いに来たのかと思いました」
「あの子達？」
「あのですね？」
女の子が何かを言おうとした時だ。
チンッ

ガラッ

そんな音がした。

水瀬は音のした方を向き、凍り付いた。

そこには、エレベーターの扉があり、中にいた看護婦が驚いた顔でこちらを見ていたのだ。

「あ、あなた！」

その怒鳴り声に水瀬が慌てて周囲を見回す。

いつの間にか、女の子が消えていた。

逃げよう。

水瀬がそう思った時にはもう遅かった。

ガシッ！

水瀬の襟首は看護婦につかまれ、水瀬の足は宙に浮いていた。

「こんな所で何してるの！」

「あ、あのぉ……迷子になって」

「ウソおっしゃい！」

看護婦は怒鳴った。

「ここは関係者以外入れない仕組みになってるのよ！？それをどうやって！？」

「ど、ドアが開いてるから、近道かなぁと思ってぇ……」

「ドアが？」

「そ、そうです」

水瀬の言った言葉は本当だ。

鍵のかかったドアがあったから、鍵を開けて、一度戻る。もう一度通りかかったらドアが開いていたのだから、水瀬に言わせると間違いない。

「誰かが閉め忘れたのね。全く……どこの誰かしら」

看護婦は水瀬を床に降ろした。
「とにかく、あなたはエレベーターに乗ってすぐにここを出なさい。ここは普通の人が来ていい所ではありません」
「はぁい……」
水瀬はエレベーターに乗ろうとして、動きを止めた。
「どうしたのです？」
「いえ……あの、流動食ですよね。ここで必要なのですか？」
看護婦は、手にした流動食のセットを一瞥した後、水瀬に言った。
「必要な人がいるからです。さぁ、行きなさい」
「……」

エレベーターの中で水瀬は考えた。
あの流動食は知っている。
僕が綾乃ちゃんに殺られかけた時、飲んだもの。
つまり、子供向けだ。
それを、霊安室に？
何故？
お供え物？
んな馬鹿な。
それに、あの子のあの言葉……。

“あの子のお見舞いに来たのかと”

あの言葉の意味は？

「……」

チンッ
1階で開いたエレベーターのドア。
その中に水瀬の姿はなかった。

第二十三話

「答えて」

暗い部屋の中に水瀬の声が小さく響く。

「こんな所にこの子がいるワケは？」

霊安室の隣の部屋。
そこに入り込んだ水瀬の視線の先。
そこには、先程水瀬をエレベーターに乗せた看護婦がいた。
力無く床にへたり込むその目の焦点は合っていない。

「それは……」

患者の秘密を守る。
その職業倫理観がまだ生きているのか、言いよどむ看護婦に、

「君は僕の何？」
水瀬の言葉が飛ぶ。

「奴隷……です。ご主人様」
恍惚の表情を浮かべた看護婦が頬を赤らめて言った。

「そうだね？」
水瀬は満足そうに、看護婦の形のいい顎を掴んで自分へと向けさせた。

「そのご主人様からのご質問だよ？」

残虐さすら感じる冷たい笑みを浮かべる水瀬の言葉に、

「……はい」

看護婦は、どこか壊れたような、抑揚のない声で答えた。

「この子は――――」

バタン。

「成る程ねぇ」

ドアを閉めた水瀬は、感心した。という声で呟いた。

地下室。

しかも霊安室の隣。

普通なら倉庫にでも使うだろう部屋。

そこに流動食を運ぶ看護婦。

それをおかしいと思わなければ、いくら何でもどうかしている。

水瀬が疑問に思ったのも、ただそれだけのこと。

手がかりになればよし。

なければ忘れる。

その程度の気持ちで、水瀬は看護婦に催眠術をかけて情報を引き出しただけだ。

ドアの向こうは、地下室特有の湿ってよどんだ空気が充満する部屋。

そこにあったのは小さなベッド。

寝かされているのは、１０歳にも満たない小さな子供。

そこで水瀬に術をかけられた看護婦はいう。

「この子達は植物人間です。両親はもう亡くなっていて、身元引受人の方が毎月お金を支払ってくださるだけです。……病室？引受人の方がいらっしゃる時だけは普通の病室に移します。病室は満員になることが多くて、こういう子達に割り当てられる分はないのです。……ええ。料金は当然、普通の入院患者より割り増しですよ？」

つまり、普段はこんな部屋に押し込んで、金を支払う奴が来たらバレないように入院患者用の個室に移す。

そう言っているのだ。

ヒドイ病院だと水瀬も思う。

よりによって霊安室の横だ。

人として、自らの振る舞いをどう思っているんだろう。

……

いや。

水瀬はその考えを否定した。

こうするのがヒトなんだと、自分がわかっていることに気づいたから。

ガタンッ

ドアの向こうで物音がした。

目を覚ました看護婦が流動食の準備にかかったんだろう。

「さて」

水瀬はエレベーターに向かって歩き出した。

霊安室まである地下は、死霊の念が渦巻いてはいるが、かといってあの獄族の感じはもうしない。

問題はここじゃない。

あの瞬間だと、水瀬は思う。

あの瞬間、僕は彼の臭いを嗅いだ。

あの瞬間？

そう。

ここであの子と出会った瞬間。
あの女の子と、出会った瞬間……わずか一瞬のことだった。
どうしても、それが気になる。
チンッ
水瀬の前でエレベーターのドアが開いた。

それから３０分後。
病棟に移動した水瀬は病院内をうろついていた。
病院ロビーの一角にあった花屋で買った花束を持ち、見舞客を装っている分、目立たないはず。
水瀬はそう思っている。
実際には、お見舞いに来た小学生。位にしか周囲に見られていないだけなのだが……。
それでも、
あの子に会うことが出来ない。
廊下の角まで来た水瀬は呟く。
「精神科じゃなかったのかなぁ」
壁の案内表示板を見ると、その先は心臓外科だ。
ふと、あの子の顔を思い浮かべた水瀬は、
「でも、あの子はいないよなぁ」
そう思った。
「心臓っていうより、脳みそがどうかしてるって感じだし」
「あれぇ？」
廊下の向こうからそんな声がしたのはその時だ。
「お兄ちゃん？」
聞き覚えのある声に水瀬は思わず振り返った。
腰まで伸びる長い髪に、大きな目をした美少女が、驚いた。という顔で立っていた。
その手には大きな花束があるからお見舞いだろう。

無論、水瀬が驚いたのはその花束であるはずがない。
「あれ？萌子ちゃん？」
そう。
そこに立っていたのは、腹違いの自分の妹、加納萌子だった。

「どうしたの？こんなところで」
「それはこっちのセリフ」
「私はお友達のお見舞い。お兄ちゃんはって……何？その花束」
「うん。一階の花屋さんで買ったんだ。一番安いから」
「……どうして入院のお見舞いに菊の花なんて買ってくるかな」
「ダメ？」
水瀬は不思議そうに首を傾げた。
「だってお浸しにも出来てお得だよ？」
「……お兄ちゃん。何かするときは必ずルシフェルお姉様と相談してからにしてね？」
萌子は水瀬の手から小さな花束を受け取ると、
「とにかくこれは没収。それじゃ、バツとして付いてきて」
それだけ言って歩き出した。
行き先は心臓外科病棟だ。
「罰って？」
水瀬もその後に続く。
そんな兄に妹は言った。
「兄として私を呆れさせた罰」

萌子が向かったのは病室ではなく、なぜか入院患者に開放されているらしいサロンだ。
入院患者とおぼしきパジャマ姿の男女がにぎわう一角で、萌子は目当ての人物を見つけた。

「あ、いた」

その言葉の先。
そこにはプライバシーが守られるようにブースで区切られたパソコンが並んでいた。

「琥珀(こはく)ちゃん」

萌子の声に振り返ったのは、

「あれ？」

水瀬が驚くに十分な相手。

霊安室の前で出会った、あの子だった。
手間が省けたな。
そう思う水瀬の目の前で、女の子同士の会話が弾む。

普通の女の子か？
水瀬は萌子と話す女の子を観察しながら思う。
魔素の反応はない。
獄族特有の反応もない。
感じるのはただの人間の反応。
もし、偽装しているとしたらかなりの腕前だ。

見誤ったか？
でも、あの時、確かに彼の感じがしたんだけど……。

「もうっ！お兄ちゃん！」
萌子が思案にふける水瀬を怒鳴った。
「ちゃんと人の話、聞いていた！？」

「え？な、何？」
「これだもん」
萌子はため息混じりに言った。
「この子、私のお友達で武原琥珀（たけはら・こはく）ちゃん」
「はじめまして」
琥珀と呼ばれた子は、にこやかに微笑む。

へぇ。と、水瀬は内心で驚いた。

地下で出会った時には気づかなかったが、かなり華のある、可愛らしい子だ。
目の大きな愛らしい顔立ち。
リボンでツインテールにまとめられた髪。
色白の肌。
まだ幼さから抜け出せないままでいる体つき。
ロリコンになったつもりもないが、悪くはない。

「琥珀ちゃん。紹介するね？コレが不肖の」
「萌子ちゃんが拓也さんの次に愛してる大切なお兄さまだよね？」
「こ、琥珀ちゃん！」
赤面する萌子が怒鳴るが、
「だって、萌子ちゃんったら、なんだかんだでお兄さんの話たっぷり聞かせてくれるんだもの。魔法騎士なんですよね？」
魔法騎士。その言葉に水瀬はかすかな期待を感じた。
「え？ええ」
「ははっ。もしかしたら、魔法で私の病気も治してもらえるかな」
「病気？アタマ？」

ボカッ！

萌子が花束で水瀬を殴る。

「な、なんてこと言うの！？」

「っていうか、お兄ちゃんになんてコトするの！？」

「お兄ちゃんが悪い！」

「萌子ちゃんだって悪い！」

「まぁまぁ」

席を立った琥珀が二人の間に割ってはいる。

「私がとっても面白いモノ、見せてあげるから。それで勘弁」

「面白い物？」

何だろう。

水瀬と萌子が互いの顔を見合う中、琥珀は椅子に座り、マウスを操作した。

パッ

「ほぉら」

琥珀が自信満々に画面に映し出したモノを見て、少なくとも萌子は思考がフリーズしてしまった。

画面に映し出されたモノ。

それは――

「こ、これ……瀬戸先輩？」

思わず萌子が両手で顔を覆い、指の隙間からじっくり見つめるのも無理はない。

画面には一糸まとわぬ艶めかしい姿で微笑む瀬戸綾乃の姿が映し出されていた。

「そ。コラだけど」

「コラ？」

大した動揺すら見せない水瀬は不思議そうに言った。

「合成写真だよね？これ」

「そうです。よく出来てるでしょう？」
「うん……よく出来ているけど」
「何ですか？お兄さん、女の子に興味ないんですか？」
「そんなことはないけど」
「お兄さん」
琥珀は心配そうな顔で水瀬の手を取った。
思ったより冷たい手は、そっと水瀬の手を包み込む。
「ＥＤは、立派なビョーキですよ？」
「は？」
意味がわからない。
「それとも」
ポンッと手を打った琥珀が画面を切り替えた。
「ヴッ！」
映し出された画像を見た水瀬の息が、一瞬止まる。
「こっちのシュミが？」
そこに映し出されたのはマッチョな男同士が絡み合う画像。
しかも無修正だ。
「こら」
ポンッ。
吐き気を抑えながら、水瀬が琥珀の頭を小突く。
「どっちも興味ありません」
「そんなぁ」
琥珀は残念そうに言った。
「せっかく萌子ちゃん驚かせてあげようと思って、とっておきの秘蔵画像公開したのにぃ」
「というか、こんなのどうやって」
「へへっ。暇だからパソコン始めたのが去年の秋でした。親切なお兄さんがいろいろ教えてくれたんです。私、インターネットって外の世界を知ることが出来るから熱中して、そんな中で集めたんです」
「そのお兄さん、そんなことするために君にパソコン教えたんじゃ

ないと思う」
「そ、そうよ」
水瀬に続き、ようやく復活したらしい萌子も言う。
「もっと綺麗な風景写真とか見るべきだわ」
「こういうの？」
パッ
「外で撮影されたモノじゃなくて！」
「冗談です」
琥珀は笑って言った。
「最近は、オバケ騒動があって、そっちに熱中していたから、画像収集がおろそかになっていたから、久々に始めたばかりなんですよ」
「オバケ騒動？」
「そうです」
琥珀は言った。

窓の外から救急車のサイレンが近づいてくる。

「看護婦さん達が見たそうです。夜、あちこちでユーレーさん達が行列作って歩いていくんです。看護婦さん、それ見て何人も辞めちゃったって」
「……幽霊の、行列？」
「うっわーっ。見てみたい！」
コツンッ。
水瀬が萌子の後頭部を軽くはたく。
「こらっ！」
「だ、だってぇ」
「そんなもの、見るもんじゃありません！いくら患者より死霊の方が多い厄介な病院でも！」
「こらっ！」
ガンッ！

萌子の右ストレートが水瀬の顔面にめり込む。
「ヤバい発言しないの！お兄ちゃんが言うとシャレにならないんだから！」
「へぇ？お兄さん、見えるんですか？」
琥珀の興味深そうな声に、
「す、少しだけね？」
そう答える水瀬の顔は、かなり痛そうだ。
「本当に、この病院、出るんですか？」

「――――そういう発言は慎んで欲しいものだな」
琥珀の興味深げな声は、そんな言葉に遮られた。
その声を聞いた途端、琥珀の顔が露骨なまでに「しまった！」という顔になった。
振り向いた水瀬の目に映ったのは、白衣を着た若い女の姿。
白衣から判断すると、女医だろう。
大きく胸元が開いたスーツに白衣を羽織った、琥珀とは正反対なまでの、まさに「女性美」に満ちあふれた女が自分達を見つめ、いや、睨んでいた。

「大した規模ではないが、この病院にも面子というものがある」
女の声は、冷徹な印象を受ける分、医者というより科学者のそれに近い。
「幽霊など一時的な幻覚に過ぎない。だが、その存在は時にいらぬ騒ぎを引き起こす」
「で、でも、看護婦の鈴木さん、アレを見たショックで病院辞めちゃったって」
「フンッ。夜勤続きの疲労から幻覚を見たのだろうよ」
「幻覚見るまで働かせるって方が幽霊より怖い気が」
「ほう？なかなかいいことを言うな」
女医が感心した。という顔で水瀬を見た。

「その通り。人を疲労させ、幻覚まで見せる。それは全て人のすること。そして、それを感じ、判断するのは人の――ここだ」
女医は、水瀬の頭を指さした。

「こうは考えたことはないか？」
女医は言う。
「人間の様々な感情は、すべて脳で判断することだと」
「――終末に見る走馬燈ですら、脳の一部の働きだと聞いたことは」
水瀬がそれに応じる。
「その通りだ」
水瀬の返答に満足したらしい女医が続ける。
「感覚器官から入る情報を判断し、感情として発露する。それは全て脳の働き。脳こそが人の全てなのだ」
「……肉体に蓄積された疲労という情報が、脳の正常な判断を狂わせ、結果、看護婦は幽霊という幻覚を見た。そうおっしゃるのですか？」
「その通り」
女医は答える。
「無論、私は魂の存在までは否定しない。突き詰めていけば、その存在は否定するどころか、むしろ肯定せざるを得なくなる……公に口にするのは常識が邪魔をしすぎるが」
「魂が脳を管理しているとでも？」
「そうだ。あくまで私の仮定にすぎない。だが、所詮、魂とはその程度の存在に過ぎない、またはそれ以上の存在ならはそれでも結構だが、その存在が実証されることは、人類にとって有益なはずだ……さて。武原琥珀」
「は、はいっ！」
「くだらないことに脳細胞を使うな。検査の時間だ」
女医はそれだけいうと、踵を返してサロンから出ていった。

「あのキ印、誰？」
「お兄ちゃん！」
「桐沢冴子（きりさわ・さえこ）先生です。脳の分野でも有名な人ですけど、本来は心臓系の人で、私の主治医の人です」
「ふぅん？」
「名医なんですよ？心臓手術の成功率は世界トップの方で」
「ＳＭ専門店で女王様の方が売れるんじゃないかな」
「あははっ！言えてます！」
「二人とも！」

第二十四話

その頃、水瀬邸では、美奈子がかなめに呼び出されていた。

「……これ、契約書ですね」

「そうだ」

水瀬家の茶の間。

ちゃぶ台で美奈子と対面するかなめは頷いた。

「うーん」

かなめに呼び出された美奈子の手にあるのは、かつて霧島邸での殺人事件の際、現場に残されていた、村上の言う人身売買契約書。

そのコピー。

捜査官の一人が私的にコピーしていたものだ。

表面的には、何の取引なのかすら、明確には書かれていない。

ただ、何かの取引であることは読めば自分にもわかる。

だからこそ、かなめは理解が出来ない。

桜井美奈子は確かに頭がいい。

成績は優秀なことも認める。

だが、これは近衛にとっては重要な情報だ。

それを一介の高校生に見せて見解を聞いてこいというのが、樟葉の指示だ。

その意図が読めないかなめは、美奈子の言葉を待つしかなかった。

「えっと……」

美奈子は小首を傾げながら、まるでテスト用紙に当たるような目で言った。

「この契約は、二人の間で取り交わされている……契約者が契約相手と取り交わしたのは、商品を納入する代償として、何かを納めてもらう約束？」

「それは読めばわかることだ」
ほら見ろ。
かなめは内心、ため息をついた。
高校生の理解力ではこの程度だろう。
「うーん……」
美奈子はしばらくうなった後で言った。
「何だろう？モノ……じゃ、ないなぁ」
「モノじゃない？」
「ええ。ほら」
美奈子は書類をかなめに見せながら言った。
「ここにこうあります。“納入の代償として、前回、口答にて取り交わした約束事を果たす”って。これが気になるんですよねぇ」
「その約束事が、納入なのだろう？」
「私もそう思う……ううん？そう思いたいんですよ。それなら簡単ですから」
美奈子は言う。
「ただ、納入じゃなくて、何かをしてもらう。そうも読めるんですよ」
「何かを、してもらう？」
「はい。こういう書き方って、契約書としてはどうかと思うんですけど、つまり、こっちはこれこれこういうものを納めるから、その代わり、前に約束したことをしてくれって……つまり、もっと前に口約束があって、それを文書化したのがこれって感じですね」
「その、約束とは？」
「それがわかんないんですよ」
それはそうだ。とかなめは思いつつ言った。
「桜井はどう思う？」
「はっきり言えば、情報不足です」

美奈子は言った。
「相手が、例えばお菓子屋さんなら、お金や材料をこっちで負担するから、約束した通りのお菓子を作ってくれって考えられますけど、この相手が誰か。それがわかんない限り、何とも言えません」
「相手が獄族といえば？」
「獄族？」
「ルシフェル辺りから聞いてるんだろう？どうせ」
「ご存じなんですか？」
美奈子の驚いた声を、かなめは鼻で笑った。
「フン……カマをかけただけだ」
「あっ！」
「ルシフェルめ……あとでとっちめておかねば」
「せ、先生……」
「冗談だ。――で？獄族と知った上で、判断するならば？」
「そっちも情報不足で、あくまで推測ですけど」
「構わない」
「……獄族って、ようするに死に神ですよね？。死者の魂を管理する存在とすれば……生け贄を差し出す代わりに、何かの魂をどうこうして欲しいってことになるんですけど――やだな。そういう話」
「魂を？」
「そうです」
美奈子は言った。
「そう考えると、この契約書の意味は、例えば、こうなるんですよ――えっと、生け贄を差し出しますから、前回のお約束通り、私の魂を救ってくださいって」
「魂の救済？」
「死ぬってことは、死に神のお世話になるってことですよね？それを勘弁してもらうって意味で言ったんです。他意は無いんですけど」
「ふむ……」
思案気なかなめの顔に浮かぶのは、失望の色。

その程度なら、近衛でも推論が出ている。
やはり、樟葉殿は、この子を買いかぶりすぎた。
「でも、ですね？」
「ん？」
「それで、こんな騒ぎになるはずはないんです」
「どういうことだ？」
美奈子は、きょとんとした顔で言った。
「だってそうですよね？聞いた限りだと、契約未履行のせいで、契約者が相手の奴隷になっているそうですよね？」
「あ？ああ」
「それがヘンなんですよ。だって、そんな契約、未履行なら、相手はそのまま放っておけばいいんです。魂が救われないだけなんですよ？それが、どうしてそうなるんですか？」
「そ、それは……」
これは近衛も言って来ないことだ。
確かに盲点だった。
「だから」
「だから？」
「多分ですけど、契約にはもう一人、誰かが存在しているはずなんですよ」
「第三者が？」
「うーん。第三者、という表現が適切かはわかりませんけど、契約者はその人をどうにかして欲しいと思って契約を結んだ。その人を助けて欲しいから、獄族と契約した――そう考える方が、妥当なんですよ」
「誰か、わからないな」
「大抵、こういう場合は――きゃっ！？」
「なっ！？」
突然の閃光。

それは歓迎しない存在の来訪を告げる光。

「桜井！」

「きゃっ！？」

美奈子は腕がもげたんじゃないかと思うほどの力で、後ろに引き倒された。

「――――誰だ？」

いつの間にか、霊刃を抜いたかなめが来訪者を睨み付けた。

前回、この家に侵入した霧島とか言う男ではない。

ヴィクトリア朝風のフロックコートに身を包んだ背の高い、優男風の男だ。

「これはこれは」

男は口元に笑みをたたえ、優雅に一礼した。

「突然の訪問、失礼いたしました」

「そう思うなら手みやげくらい持ってこい」

かなめは警戒を解くことなく、男に言った。

「ついでにまず名乗れ」

「ははっ。気の強いお嬢さんだ」

「この歳でお嬢さんは面はゆいが、まぁいいだろう――――名は？」

「そうですねぇ……グリム・リーパーとでも名乗っておきましょうか」

「グリム・リーパー？死に神？」

「ああ。それです。まさにそれ」
男は嬉しそうに言った。
「私は、死を司る者です……どうです？一度、死んでみませんか？」
「断る」
かなめはきっぱりとそう言った。
そりゃそうだろう。
美奈子も思う。
「いえね？これ、結構真面目な勧誘なんですけど」
「まにあってます」
かなめにきっぱりと言われたグリムは、焦ったように懐から何かを取り出し、かなめの前にちらつかせた。
「そんなこと言わないで！　この洗剤とチケットもつけますから」
「いいから帰れ！！」
「いま殺されれば、もれなくこの幸運のペンダントもついて…」
「どこの新聞屋だよお前……」
「いやぁ……結構、競争厳しい業界でして」
「今度は業界か？暑中見舞いくらいくれそうだな」
「あ、今度出しますよ？何しろ、死に神ってのは結構いましてね？こうした地道な営業活動がなにより大切なんです。あの戦争の時はバブルだったんですけど、今は弾けちゃってもう大変」
「――ちなみに、一件の成立もない時は？」
「上司から絞られてそりゃもう大変。オヤツ抜きの刑を受けるどころじゃ……」
「よしご苦労。なら病院でも行くんだな」
「ははっ。そうもいかないんですよ。どうです？ここで死ねば、女としての崩壊を見ずにすみますよ？ほら、言うでしょう？――女が自分の崩壊に気づく瞬間は二通りだけ。恋を失った時と、鏡に映る自分の顔にシワを発見した時だって」
「……」
「桜井！なぜそうも気の毒そうな顔で私を見るか！」

「あ、いえ……ほら、私、若いですから」
「おい死に神」
「はい？」
「こいつの魂、もっていけ」
「いいんですか？」
グリムは嬉しそうに言ったが、
「――――あ、でもダメだ」
「何故！？せっかくくれてやるっていってるのに！」
「本人の同意がないと、生きてる方の魂って奪えないんですよねぇ。お嬢さん、どうです？自殺でもしません？」
「結構です！私、まだ死にたくありません！」
「テストもない、心配事はない。いい所ですよ？あの世って」
「ヘンな宗教団体の勧誘じゃないんですから！」
「とにかく、帰れ」
ようやく理性を取り戻したらしいかなめは言った。
「我々には死は不要だ」
「そうですかぁ？」
グリムは諦められないという顔で言った。
「美貌も、心も、これ以上傷つくことなく永遠にいられるのに」
「女はな……女は……顔でも心でもない」
かなめは言った。
「……はい？」
グリムはその意味がわからない。
「女は、そこにいるだけでいい、そういう存在だ！」
「……顔だけでも心だけでもない。不要なときはいてもいなくてもいい？。そりゃ確かに」
「それはオトコのことだ！」
「先生、それはそれで暴論な気が」
「そうですかぁ……」
グリムは言った。

「ここまでオチャラケてあげたのに、それを拒むのですね？普通の魂と同様に扱われることを、拒むとは……」
そして大きくため息と共に肩を落とした。
「！？」
その姿からは想像も出来ないような強い魔力が放たれたのは、まさにその瞬間だった。
「――――バカめ」
グリムが冷たい声で言った。
「ならば、我が玩具として永遠に救われぬ日々を送るがいい！」
「桜井、逃げろ！」
「気が向けば、少しは楽しい思いもさせてやる！」
「ちっ！」
かなめはとっさに魔法を放つ。
“魔法の針”
ルシフェルが用いた“魔法の散弾”よりも細かい無数の魔法の針がグリムを襲う。
まともに喰らえば挽肉になるほどのダメージを受ける、室内戦闘では下手な魔法の矢よりも面で攻撃できる分、有効な攻撃魔法だ。
だが――――
「無駄だ」
「チッ……魔法障壁か」
「そうそう」
グリムはニコリと笑いながら言った。
「ついでにこういうことも」
「！！」

魔法戦の恐ろしい所。
それは、相手の攻撃が全く予想できないことにある。
敵を倒すより、敵の攻撃をいかに早く感知出来るか。
魔法戦の勝敗は、まさにその一点にかかっている。
実際、グリムは両手をズボンのポケットに入れたままだ。
それにも関わらず、魔法障壁を展開し、かなめの攻撃を止めた。
そして――

「ぐっ！？」
畳を突き破ってかなめを襲うのは魔法の槍。
体をひねって避けるが、脇腹を浅く抉られた。
脳に突き刺さるような痛みに呻きはしても、かなめは戦闘態勢を崩さない。
「先生！」
「心配ない」
すがりつく美奈子を落ち着かせるようにかなめは言うが、
「！！」
とっさに美奈子を突き飛ばさざるをえなかった。
天井、壁、あちこちから無数の槍が突き出され、かなめを襲う。
魔法障壁を展開し、防御するものの、その度にかなめはかなりのダメージを受ける。
「ほらほら。もっと強力に魔法障壁張らないと死にますよ？」
「――くっ！」
自分を試すような男の笑い声がカンに触ったかなめは、魔法の矢を大量に発生させ、一斉にそれを放つと、その後ろからグリムに襲いかかった。
いわば、魔法の槍襖（やりぶすま）だ。
そして、かなめはその攻撃が避けられるのを理解している。
だから――
「無駄です」

信じがたいほどの防御力で魔法の矢を防ぎきったグリムは、一瞬、かなめの姿を見失った。
「なっ――――ぐっ！？」
「ちぃっ！」
飛びかかる直前、天井に跳んだかなめは、態勢を入れ替えて天井を蹴り、そのままグリムの頭上めがけて霊刃を突き立てる攻撃に転じたのだ。
グリムの不完全とはいえ、展開した魔法障壁がなければ、グリムは大ダメージを避けられなかったろう。
そして、かなめは魔法障壁に弾かれ、美奈子の前まで吹き飛ばされた。

「ふぅ――――危ない危ない」

グリムは涼しい顔を取り繕って言った。

「危うい所でした……さて。お嬢様方？」

かなめは傷だらけの体を起こし、次の攻撃に備える。
出来ることは魔法障壁を展開するだけ。
敵を排除できない以上、背後の美奈子を護るには、もうそれしかない。

グリムはかなめの目を見つめた。
これだけのダメージを受けながら、かなめの目は何も諦めていない。
強い戦意をたたえている。
それはグリムが大好きな強い意志にあふれた目だった。

「私に刃向かったあなたの勇気に対し、深く敬意を示す意味で、あ

なたの魂は有効に活用してあげましょう」
「いったろう？」
チャンスをうかがいつつ、かなめは答えた。
「断ると」
「――ああ。そうでした」
グリムはわざと両手を広げるという、大げさな態度でそれを認める。
「だが、あなたも忘れている」
「？」
「私は死に神――私は“死”。あなた方にとって避けることも逃げることも出来ない存在だと」
「……それでも」
かなめは言った。
「死を甘受することだけが、人の生きる道ではない！」
「詭弁ですねぇ」
「私はともかく、何の罪もない、何の抵抗もしない桜井まで死の刃にかけるというんだろうが！」
「当然です」
グリムはあきれ顔で言った。
「死は平等なのですから」
「せめて、この世で悪徳を積んだ者は地獄に堕ちるとか言え」
「それはあなた方人間の願望に過ぎませんよ。何故、我々がそんな生前の行いを捌かねばならないのです？」
「……し、しかし」
かなめは、悪を殺せば神がその魂を裁いてくれる。
そう、信じていた。
だが――
「生前の悪行なんて、魂に傷や変質を引き起こす程度のこと。それに――人の魂なんて、どれもこれも、どこかで汚れているもんですよ？我々にとって、生前の所業なんて、せいぜいがそんなもので

す」
かなめは言葉を失った。
この世で人の行うことなんて、所詮はその程度の代物に過ぎないのか？
「そんなバカな！！」
そういうのが精一杯だ。
「バカ？」
意味がわからない。という顔でグリムは首を傾げた。
「そうだ！馬鹿げているだろう！？それでは、人の世とは、人の規範とは」
「そんなもの、人間が勝手に作った代物でしょう」
グリムは不機嫌そうに言った。
「そちらの勝手な都合をこちらに求めないでください。迷惑です。おや？」
グリムは後ろを振り向いた。
「おや？新手がご登場ですね」
かなめからは見えないが、ルシフェルと秋篠だろうと検討はつく。
「まぁ、いいです」
グリムの周囲で魔力が高まる。
「魂を頂戴しましょうか」

「――――ダメだよ？」
かなめの目は、グリムが横を向いた姿を確かに捉えていた。
次の瞬間。

パッ

先程のグリムの登場どころではない白い閃光が全てをホワイトアウトさせ、そして、凄まじい爆風に襲われた。

「桜井っ！！」
美奈子に覆い被さり魔法障壁を全開にしたかなめは、その破壊から教え子を護るだけで精一杯だった。

「……」

爆風が去り、あたりを静寂が支配する。

「……」

覚悟したはずの攻撃が、こない。

「……？」

恐る恐る目を開いたかなめの目の前の景色は一変していた。

縁側と部屋の一部が綺麗さっぱりそぎ落とされたように消え去り、庭と部屋が直接つながっていた。
建物は煙一つ上がっていない。
完全に消滅していた。
グリムの姿はない。
彼が逃げたのか、消えたのか、わからない。

「なっ？」

何か特殊な魔法攻撃が加えられたことだけはわかる。
そして、それがどれほど強力な代物だったかも、だ。
ただわからないのは、その魔法攻撃を放った者が誰か、だ。
水瀬？
ルシフェル？

いや、あいつらでも、自分の家をここまで破壊しないだろう。

とてとてとて

廊下から、誰かが歩いてくる、妙に軽い足音が聞こえてくる。

誰だ？

これほどの攻撃だ。

まともに魔法戦になったらかなわないことは、かなめ自身がわかっていることだ。

だが、かなめは、自分の下で震えている教え子を護らねばならない。

「桜井」

かなめは小声で美奈子に言った。

「動けるか？」

「は、はい」

震える声で、それでも美奈子は気丈に返事した。

「よし」

かなめは笑みを浮かべながら言った。

「私にかまうな。勝手口から逃げて、近衛の施設へ向かえ。そこで保護を受けるんだ」

「で、でも！」

「桜井。――戦（いくさ）で死ぬのは、我ら騎士だけで十分だ」

「せ、先生……」

とてとてとて

足音が近づいてくる。

「行け！」

「は、はい！じゃ、葉子も！」

「――ナニ？」

かなめは思わず素っ頓狂な声をあげた。

この部屋には自分達二人だけのはず。

桜井葉子は桜井の自宅にいるはず。

その葉子を連れて行く？

「待て桜井……自宅に戻る気か？」

「い、いえ。そうじゃなくて」

美奈子は廊下を指さしながら言った。

美奈子につられる形で廊下を見たかなめの目には、

「お姉ちゃん♪」

そう言ってはにかむ葉子の姿があった。

第二十四話（後書き）

綾乃：フフッ……どうやらあの邪魔者が消えたようですね（＾―＾；）。マスコミにインタビューされたら心にもないこと言ってあげます。

でっち：ライバルに敬意持とうよぉ……。

綾乃：近づかないでください！

でっち：へ？

綾乃：不運が移ります！

でっち：そんなぁ……（T―T）

第二十五話

同じ頃。都内某スタジオ控え室では――

「また、あなた方ですか？」

あきれ顔を浮かべるのは綾乃だ。

「まぁ、そう言わないで」

作り笑いを浮かべつつ、綾乃の前に座るのは、理沙だ。

「お互い、久々のセリフなんだから」

「……何だか、凄くムカッとする言葉を聞いた気が？」

「気のせいよ」

コホンッ

わざとらしい咳払いをした理沙が訊ねた。

「じゃ、まず、あの晩のことだけど」

「私――本当に眠っていて、本当に気づかなかったんです」

言葉は突っ慳貪な感じだが、それでもお茶とお菓子を用意する所が、この子の可愛いところだと、理沙は思った。

「まぁそうよねぇ」

理沙だってそう思う。

「とはいえ……いろいろと警察に通報されちゃうと、やっぱり調べないわけいかないじゃない？安心して？警察は事件を公にしたくないんだから」

「それはわかりますけど……」

綾乃は、浮かない表情でコーヒーを出した。

「あ、それとも」

それを受け取った理沙は、イタズラっぽい顔で綾乃に言った。

「水瀬君に来てもらったら、全部喋ってくれる？」

「えっ？」

一瞬、ちょっとだけ驚いた綾乃の顔は、すぐに曇りだした。

「ど、どうしたの？」
「……グスッ」
鼻をすする音がしたかと思うと、綾乃の瞳から大粒の涙があふれ出した。
「な、何泣いてるの！？わ、私、何か悪いこと言った？」

さらに同じ頃――

綾乃のマネージャー、鈴木女史は自動販売機で買ったコーヒーカップを手に目を疑った。
目の前に、いるはずのない存在が二人、こちらに向かって歩いてくるのが見えたから。

相手も自分を見つけていること。
そして、自分を快く思っていないこと。
そんなことはすぐにわかった。

ただ、問題なのは――

「あの？」
「ご迷惑をおかけしますね。鈴木さん」
中年の坂を越えようとしている燻銀な男が声をかけてきた。
「い、いえ――」
鈴木は戸惑いながらただ頷くだけだ。
「とはいえ、治安の維持にご協力いただきたくお願いしますね？」
スーツ姿の女が敬礼の仕草を見せた。
「そ、それは善良な一市民として当然のことですが」
「？どうなさったんです？」
鈴木の前で二人は互いの顔を見やった。

「あ、あの――――？」
鈴木は恐る恐るという顔でスーツ姿の女を指さした。
「ついさっき、綾乃の楽屋へ入られたんじゃないんですか？」
「――――え？」
女もきょとんとした顔で思わず自分を指さしてしまう。
「ひょっとして、それって私のことですか？」
「あ、当たり前じゃないですか」
鈴木は呆れた。という顔で答える。
「芋羊羹おみやげにしていただいたでしょう？」
「えっ！？」
「えっ！？ってなんですか？」
「い、今、綾乃ちゃんの楽屋に誰が？」
「で、ですから」
鈴木は苛立った声で言った。
「綾乃とあなただけです。取り調べの邪魔だからって、私を外に出しておいて、何ですか？その言いぐさは！」

「村田！」
「はいっ！」

男の怒鳴り声に女はすぐに応じて、ハンドバックから取り出したのは――――

「ヒッ！？」

それは、相手が鈴木とは別世界の住人である証拠。
まともにそれを目の前で見てしまった鈴木は、思わず手にしたコーヒーカップを落としてしまう。
二人は、それに構うことなく靴音も荒々しく走り出す。

目指すは綾乃の楽屋。

保護・監視対象である瀬戸綾乃と、
自分達の名を騙り、楽屋に忍び込んだ何者かがいる、

楽屋へ――

「だ、だって――――だって！」
綾乃はこぼれる涙を拭きながらしゃくりあげた。
「ひ、ヒドイじゃないですか！」
「な、何が？」
「理沙さん達が来るほどの騒ぎなのに、悠理君ったら、悠理君ったら！」
「み、水瀬君が、どうしたの？」
ハンドバッグの中をゴソゴソやってハンカチを見つけだした理沙が、それを綾乃に手渡しながら訊ねた。
「な、何かされた――――とか？」
「何もしてくれないんです！」
綾乃は涙に曇る声で言った。
「メール一本、何一つ、何も……何もしてくれない……」
「ふぅん？」

驚いたという声。

いや――――

呆れた。

そんな声で理沙は言った。

「水瀬君、ヒドい奴だったんだ」

「そうです！」

ハンカチを掴みながら綾乃は言った。

「悠理君、最近薄情です！連絡だってほとんどくれないし、お休みも忙しいって！妻へのサービスというものを何もしてくれないんですよ！？」

「マズイよねぇ……そういうの」

「そうです！」

「そんなフルムーン夫婦の離婚原因みたいな不満を、こんな若い娘にさせちゃ」

「そうなんです！――ヒック……わ、私だって、お仕事が忙しいのは確かです。でも……でも、メールの一つくらい送ってくれたっていいじゃないですか！」

「まぁ……そうだよねぇ。綾乃ちゃんだってメールしてるんでしょう？」

「妻は夫からメールをもらって、それに返信すればいいんです。もらったものへのお返しが、妻からのメールというものです」

「ようするに、女から一々メール送る必要なんてない。送られるの

が当然だ……そういうの？」

「そうです！」

「……それはそれで横暴どころか、かなり非常識だと思うけど」

理沙は口の中でそれだけ呟くと、綾乃に言った。

「待っているだけで、自分から動かない君も随分悪いと思うけど？」

「恋愛は男の子がリードするものです！」

綾乃はたまらず言った。

「私達女の子は、デンッと構えていれば、男の子が貢いでくれる。そういうものでしょう！？」

「いや、それはかなりの意味で違うんじゃないかな……と」

理沙は綾乃を見つめ直した。

確かに綺麗な娘だ。

だが、その中身はどうだ？

これではどんな相手からも見捨てられる。

理沙は同性の年上としてそう思わざるを得ない。

この子のいう所の恋愛――

それは対等な人同士の関係ではない。

いわば主従関係そのものだ。

相手に依存すれば成就する。

それが恋愛だと、この子はいう。

恐らく詳しく言えば、こうなるだろう。

女の子は恋愛において何もする必要はない。
黙っていても男が必要なことは全てしてくれる。
告白も
デートも
プレゼントも
……
必要なモノはすべて
女の子が求めるものはすべて
女の子が口に出す必要すらなく
男が自分で勝手に用意してくれる。

あり得るか。

理沙は内心で激しくツッコミを入れながら、それでも思わずにはいられない。

一体、この子は、どこのお姫様もつもりなんだろう。

どうして、そんな風に思うんだろう。

何故、自分から動こうとはしないの？
何故、そう思うようになったの？

この子の今の立場が、そうさせているんだろうか？

天下のトップアイドル。

その地位が――――

いや。
それは違う。

理沙はその考えを否定した。

去年、あの戦争で恋人と共に死んだあの女は違った。

あの女の魂を天使として作り直したのは間違いではないし、むしろ私にとっては誇るべき判断だったと信じている。

アイドルとして多忙な日々を送りながら、それでもわずかな時間を見つけ、公に出来ない恋人と文通を続け、互いの思慕を暖め合っていたあの二人。

離れていても
会えなくても

それでもあの二人は互いを愛し合い、高め合っていた。

年に数回、数時間、二人っきりになれれば十分な程、二人の現実的な時間と距離は離れていた。

それでも尚、二人は決して別れようとはしなかった。

むしろ、それに満足していた。
だからこそ、出会いを大切にしていたし、ほんのちょっとした互いの思いやりを至上の喜びとして受け入れていた。

命を失っても尚、その記憶に残る思い出は、幸せに満ちあふれて

いた。

その暖かさは、その魂を手にしたものでなければわかりはすまい。

この娘は、あの女とは決定的に違う存在なのだ。

理沙はそう思った。

情けはかける必要すらない。

何故？

この娘の言う恋人とは、自分にとって都合のいい下僕、悪く言えば奴隷なのだから。

恋愛を、人を支配することと取り違えている！

そんな存在に情けは必要ない。

元から人間はそういう存在とはいえ、特にこの手の考えを持つ者は、人間同士の中でも嫌われる、最も下とすべき存在。

だから、

情けはいらない。

「もう……もう、悠理君を信じられません」
理沙の思案を理解することなく、綾乃は泣き続けた。

「ふうん？」
それを見る理沙の目は冷ややかだ。

「じゃ」
理沙は少し身を乗り出して言った。

「忘れちゃったら？」

「――――え？」
綾乃は、自分が何を言われたかわからなかった。

忘れる？

何を？

「あの……理沙さん？」

「だからぁ」
理沙はイタズラっぽく笑った。

「水瀬君のこと。そんな信じられない相手のことなんて忘れちゃってさ？もっと都合のいい男を見つければいいじゃない」

「そ、そんなこと出来ません！」
綾乃は言うが、
「その方が、君にとってむしろ好都合じゃないか？」
不意に、理沙の声がわかった気がした。
それは微妙な違い。
音楽をやっていないとわからないような、本当に微妙な違い。
綾乃は、それを聞き逃さなかっただけ。
思わず後ずさりながら、綾乃は訊ねた。
「あ、あなた……誰？」
バンッ！
荒々しく蹴破られたドアの向こうから姿を現せたのは、理沙と岩田だ。
６インチモデルのコルトパイソンを構える岩田と、
シグザウエルＰ２２６を構える理沙。

互いに銃の照準は、

「あらぁ？もう見つかっちゃった？」

バツが悪い。

ペッと舌を出すスーツ姿の女に向けられていた。

バンッ！

バンッバンバンバンバンバンッ！

突然、周囲に凄まじい銃声が連続して発生する。

相手の顔を見ても尚、その相手を撃つ覚悟、もしくは明確な意志がなければ出来ないこと。

それをやったのは岩田だ。

「ち、ちょっと！警部？」

岩田の突然の発砲に驚いた理沙がたまらずわめく。

「あ、相手の顔を見てから撃ってください！」

「見ている」

ワンアクションで空薬莢を抜き取り、新たな弾丸を装填しながら、岩田は言った。

「上司として、撃たずにいられないあのツラを見ろ」

「……配属、変えて欲しいんですが」

「却下だ」

岩田は言った。

「お前を真人間にしてやる。そう決めたからな」

「もしもし？」

呆れた。という顔で二人を見つめるのは、

「人を問答無用で撃ち殺そうとするなんて、それでも人ですか？」

慌てた、とや、とぼけた様子で抗議する理沙――――便宜上、ニセ理沙と命名――――だ。

あれだけの発砲にもかかわらず、その体には弾丸が命中した痕跡は、ない。

「うるさい。誘拐犯」

岩田は銃口を相手に向け直しながら言った。

「どういうつもりだ？」

「ははっ……なんだ。警察の人ですか」

ぐったりとした綾乃を小脇に抱える、その外見は理沙そのもの。

だが、その声は違う。

「もっと村田の声に似せろ」

岩田は言う。

「その方がずっと殺しやすい」

「おや？」

ニセ理沙は、フン。と、見下したように笑って言った。

「何々？大切な彼女を手放したくないからって、わざとＳＰへの転属をフイにするような任務に就かせたり？いろいろ工作しているあなたが？」

「け、警部！？」

理沙はもう相手を見ていない。

「わ、私、ＳＰへ転属する話があったんですか？」

「安心しろ。俺がきっちり断っておいた」

「な、何故！？」

警官の花形、ＳＰ。

かつての理沙の古巣への転属。

それがフイ？

あまりの言葉に、理沙は泣きながら岩田に食って掛かるが、

「この前全滅したあの部隊配属だった。死にたかったのか？」

「そ、それでも！生き残りさえすれば！」

「俺は部下の二階級特進は認めない――前を見ろ！犯人から目を逸らすな！」

厳しい言葉に、理沙は従うしかない。

とりあえず、目の前の自分のニセモノを叩き殺して憂さ晴らしにしてやる。

そう決めた。

「下手な行動をとれば射殺する！まず、その子を床に置き、壁際まで下がれ！」

「ふふっ――――あーっはっはっはっ！！」

ニセ理沙は高らかに笑い出した。

「あなた――――何？岩田警部？ふぅん？」

値踏みするような目のニセ理沙が言った。

「もう気づいてるなんてサスガだね。私が人間ではない。そして、絶対に逮捕出来ない存在だって」

岩田は苦い顔をさらに険しくして、暗にそれを認めた。

「け、警部！？」

会話の意味がわからず、理沙がちらと横を向いた瞬間――――

「“コレ”、お返しするよ？」

ニセ理沙の言葉が耳に入り

そして

ドサッ

何かが横で倒れた音がした。

「――えっ？」

ちら。

横を見た理沙。

その目には、ついさっきまで横にいたはずの岩田の姿が、映らない。

「姿を貸してくれたお礼に、君は殺さないであげよう」

ニセ理沙が言う。

「――えっ？」

ちら。

視線を下に向けた理沙が見た光景。

信じられない。

あってはならない。

そんな光景が広がっていた。

そこにあったモノ。

それは、

床に倒れ伏す岩田の姿。

室内に、理沙の悲鳴が響き渡った。

第二十六話

それから1時間と経たない後のこと。

水瀬は同じ病院のベンチに座って、ぼんやりと天井を見つめていた。

その周囲では背広姿の男女が数名、所在なげに立ったり座ったりを繰り返していた。

「お姉さん」

水瀬の横に座ってうなだれているのは、理沙だ。

「……」

いつもの快活さを、今の理沙は持ち合わせていない。

普段なら軽口の一つもはたく口は閉ざされ、

うつろな目を動かすだけ。

「岩田警部が撃たれて、綾乃ちゃんが誘拐された。そういうことだね？」

コクン。

「……ゴメン」

理沙は頭を下げた。

「こんな……こんなことになるなんて」

「こっちも一人やられた――――残念ながら死ななかったけど」

「近衛騎士が？」

「大丈夫」

水瀬は何でもないという顔で言った。
「敵はもうわかっている。向こうから招待してくれるのを待つだけだもん」
「敵が、わかっている？」
「そう。もう僕が追っている」
「で？」
理沙は手錠を取り出しながら言った。
「どこのどいつよ」
「……人間じゃない。だから」
「……」
一瞬、険しい表情で水瀬を睨み付けた理沙は壁にもたれかかった。
「あーあ。警察辞めて近衛に移ろうかなぁ」
その声は涙混じりだ。
「ぐすっ。警部は撃たれる。犯人は逮捕出来ない……私、何やってるんだろう」
「敵は討つよ。それに」
水瀬は手術中のランプを見つめた。
「警部だって最終的には僕がいる」
「あれも水瀬君。これも水瀬君かぁ」
理沙は投げやりに言った。
「暑中見舞いにお歳暮も忘れるべきじゃないわね」
「皮肉言うなら助けてあげないから」
ベンチから立ち上がろうとして、水瀬は動きを止めた。
理沙の手が水瀬の袖を掴んで離さないから。
口には出さないが、理沙の気持ちはそれでわかる。
水瀬はベンチに座り直した。
「――それで？」
水瀬は肝心な所を聞いた。
「近衛軍が試作した対霊専用弾、効かなかったの？」
「全っ然！」

理沙は不愉快さを隠さない顔で言った。
「空中であっさり止められて、“返す”の一言でそれが警部を――っ！！」
「ふぅん？」

対霊専用弾
近衛軍が試作した獄族用の弾丸。
正しくは対妖魔専用弾の後継モデル。
一年戦争での実戦から得られた教訓を元に、物理的だけでなく、霊的にもダメージを与えることを期待されて開発された弾丸だが、理沙の話からすれば全く効果を発揮しなかったことになる。

「せっかく、水瀬君が回してくれたっていうのに、あれはないわ」
「おかしいなぁ。あれ、僕やルシフェルも開発手伝ったのに」
「見てみる？」
理沙はハンドバッグから拳銃を取り出し、水瀬に渡した。

シャカッ。

「――――あれ？」
手慣れた手つきで弾倉を抜き取り、弾丸を一発見た水瀬が怪訝そうに言った。

「お姉さん？これ違うよ？」
「違う？警部が、近衛からの特別貸与だって、警備部長から直々に手渡されたものよ？」
「――――近衛には報告しておく。もう二度と警察に装備が貸与されることはなくなるだろうね」
「どういうこと？――――まさか！」
「その部長が弾丸をすり替えたんだよ、きっと。警察側でモノにし

たいからって……バカだねぇ。仕上げは警察なんかじゃ出来はしないのに」
「あ――――あんの野郎！」
わなわなと震える体でベンチから立ち上がろうとする理沙を、今度は逆に水瀬が抑えた。
「ケガの功名だよ」
「どこが！」
「もし本物なら、警部がいるのは霊安室だもん。あれ、着弾と同時に、封印されている呪文が発動、魔力解放と一緒に弾丸が粉々に破裂する。かなり殺傷力高いんだから。ついでにここ病院」
「――――っ！」
「それでね？」
水瀬は言った。
「興味深いこと聞いたんだ。調べて」
「何？」
「この病院で幽霊騒ぎが起きているんだ。その内容を」
「い・や」
理沙はきっぱりと断った。
「犯人を叩き殺すなら喜んで手を貸すけど、そんなの、何の意味があるの？」
「実はね？」
水瀬が理沙に耳打ちする。
最初こそ、耳にかかる息に不快そうな顔をしていた理沙だが、そのうちに、その表情が驚愕のそれに変わる。

「犯人の足取りが途絶えた先での幽霊騒ぎ。それは確かに」
「でしょう？」
「わかった。やってみる。その代わり」
理沙は両手で水瀬の肩を掴んで言った。
まっすぐな眼で、

まっすぐ、最も頼りになる相手に、
まっすぐな言葉で

「――――仇を討って頂戴」

とはいえ、
「はぁっ……」
岩田警部の手術成功を見届け、一週間くらい入院すれば済むまで治癒魔法をかけた水瀬は、泣いて感謝する理沙のキスに送り出され、病院を出ていた。

瀬戸綾乃誘拐。

またか。

それが水瀬の感想。

倉橋家といい、今回といい、半年に一回のペースで誘拐されている気がする。
そうもほいほい誘拐される方にも問題はあるだろうが。
どうしてこうも人気があるんだろう。あの子は。

「はぁ……」
思わずため息が出る。

「どうした？」
そんな水瀬に声をかけるのは、イーリスだ。

「私が応援に回されたのが、不満というのではあるまいな？」
「それはないけど」

華雅女子学園が春休みのため、どうせヒマだろう。と司令部から派遣されてきたイーリスと水瀬は病院近くの喫茶店にいた。
「どうしてこうも綾乃ちゃんってトラブルばっかりなんだろうって」
「それはお前の関係者だからだ」
「褒めてる？」
「お前を貶している」
イーリスはコーヒーの香りに満足しながら言った。
「――お前、いい店知っているな」
「どうも……司令部からは？」
「敵の動きを待つ」
「綾乃ちゃんが殺されるかもよ？」
「近衛はそれも覚悟の上――もし、瀬戸綾乃が殺されればそれでもいい。敵がさらなる動きに出るのを待つ。そう決断した」
「それって！」
驚く水瀬に、コーヒーカップ片手のイーリスは表情を変えることなく冷たく言った。
「そう……瀬戸綾乃は見殺しにされる。そういうことだ」
「トップアイドルが殺されれば世論が」
「近衛はそんなことに感知しない」
「……」
「近衛が問題視するのは、瀬戸綾乃の持つMC（メサイア・コントローラー）としての能力と、その頭脳にあるメサイア「水鈴（すいれい）」のデータ。それだけだ。瀬戸綾乃個人に何の価値も見いだしていない」
「近衛って、冷たいんですね」
「内心で、お前だって同じこと考えていないか？」
「えっ？」

水瀬は改めてイーリスを見て、すぐに視線を外した。
その眼は間違いなく、水瀬の心の奥底をのぞき込んでいたから。
「お前は何かのきっかけがあって、瀬戸綾乃を疎んじるようになった。違うか？」
「……そんなこと、ない」
水瀬は小さい声で反論した。
「綾乃ちゃんは僕の幼なじみでクラスメートで」
「そんな形ばかりのセリフはどうでもいい。お前を見ているとそう思うことばかりだ」
イーリスは目を閉じた。
瞼の裏には、初めて出会ってから約1年間に起こった悪夢のような、水瀬との悪夢のような日々が浮かんでは消えていく。

ドガッ！

静かな喫茶店に突如起こったのはそんな音。

「な、何するの！？」
水瀬の抗議も無理はない。
イーリスの投げつけスプーンが水瀬の座った椅子の背もたれに突き刺さっていた。
とっさに避けなければ顔面に突き刺さるルートだ。

「当然のことだ」
イーリスは、あっさりと
「お前は恐ろしく人間の感情に乏しい」
そう言った。
「そのオチャラケもどこか感情的にズレている証拠だと、私は見ている」
「……ヒドイ言われ方だと思うんだけどなぁ」

水瀬にとって嬉しいはずはない。
「まるで僕が人格破綻者だっていわれてるみたい」
「そう口を尖らせるな。その通りだが、騎士として見れば、むしろそれは褒めてやってもいいことなんだ」
「じゃ褒めて。ついでに何か頂戴？」
そういって差し出された水瀬の両手に、イーリスはだまって伝票を置いた。
「はっきり言ってやろうか？瀬戸綾乃をお前が大切だと思うのは、周囲からそう思え。そう言われた、いわばすり込みの結果に過ぎない――違うか？」
「ち、違うよ」
そう答える水瀬だが、この口調はどこか困惑と焦りが感じられる。
「そうか？」
「そ、そうだもん」
「その割に近頃は随分と離れていたな。いろいろ聞いているぞ？」
「ううっ……だ、誰のせいで」
「仕事が理由だというなら、文句は樟葉殿に言え。それで？」
ようやくコーヒーカップから手を離したイーリスはテーブルに身を乗り出して、
「どうするつもりだ？」
「うーんとね？あの人は言ったんだ。舞台は用意するし、僕が出ざるを得ない状況も作るって。だから、向こうからの招待状待ちの状態」
「瀬戸綾乃誘拐で状況が作られたと？」
「それがわかんないんだ」
水瀬は首を傾げながら言った。
「綾乃ちゃんを誘拐して、僕が助けにいかなかったらどうするつもりなんだろうって」
「行かないのか？」
「司令部への申請が却下されれば」

「だから冷たいというんだ。瀬戸綾乃には恩義や借りがあるんだろう？借りたら返す。金と同じだ」
「そういって、自分はしっかり踏み倒すクセに」
「常識だ」
「それが神様に使えるシスターのセリフ？」
「安心しろ」
イーリスはきっぱりと言い切った。
「お前とコンビを組んだ際に発生した問題に対して私は常にこう言うことにしている。「アレとコンビを組んでいた時の私は発狂していたのです」。それだけで一切が不問に付される」
「……どういう、こと？」
「樟葉殿は仰せだ「「どうやらあのバカ息子は、自分がアホなだけではモノ足りず、周囲の人間までアホにするらしいな」と。そういうことだ」
水瀬は泣きながら抗議した。
「それって、イーリスさんも樟葉さんからアホ呼ばわりされているのと同じじゃない」
「一緒にするな。お前については神もサジを投げたと信じている」
都合の悪いことはすべて忘れる。それがイーリスの特技だ。

「僕もう帰る」
「ここで帰ったら殿下から大目玉だぞ？」
ピタッ。
腰を上げた水瀬の動きが、その一言で止まった。
「……いろいろ聞いておきたいことがある。座れ」
水瀬が黙って腰を下ろした。
「相手の風体はわかるか？」
「えっと……背の高い男で、外見は２０代半ば、茶髪に切れ長の眼、色白」
「よくわかるな」

「隣に座っている」
「えっ？――なっ！？」
横を振り向くなり、イーリスは驚いて椅子から飛び上がった。
「オジャマしてますよ？」
微笑むのは、かなめ達を襲ったあの男。
「お初です。グリム・リーパーとお呼び下さい」
しかも、その手にあるのは――
「お前、何してる？」
イーリスが戦闘の意志すら奪われるほど呆れたのも無理はない。
「いや。ここのカレーは美味しいですねぇ」
そう。
カレーの皿があった。
「私ね？カレーとかハンバーグは大好きなんです。いや、いい店だ。すみませぇん！カレーおかわり、大盛りで！」
「あ。僕もナポリタン」
「こらっ！」
イーリスの一撃が水瀬の脳天にクリーンヒットした。
「敵を前に何をのんきなことを！」
「モグモグ……私、いつあなたの敵になったのです？」
「貴様、我が主君の命を狙っただろう！？」

「ああ。あれですか」
グリムは水の入ったグラスを手にした。
「昔のことです」
「数日前のことだぞ！？」
「ほら、言いません？一日一昔って」
「モノには限度というものがだな！」
「それとも」
グリムは冷たい目で言った。
「――ここで、僕と戦います？こんな街のど真ん中で？ほう？どれだけの同族の犠牲が出るか、わかった上でコトに及ぶつもりですか？」
「ッ！」
この喫茶店の中でさえ、何の罪もない人々が一時の安らぎを満喫している。
この街にだって、世界の滅亡を望む者もいるにはいるだろうが、それでも大半の人々は、戦に巻き込まれることなんて望んではいないはずだ。
それだけに、敵を前にして何も出来ない。

「お待たせいたしました。ハンバーグステーキ、もう少々お待ち下さいませ」
「うむ。早いですね――ありがとう」
店員からカレーの皿を受け取るグリムは平然とした様子でカレーにスプーンをいれた。

「で？」
水瀬が訊ねる。
「僕の家、壊してくれたんだよね？」
「ああ。感謝には及びません」
「修理費の請求書、送りつけていい？」

「踏み倒しますけど、それでよろしければ」
「ケチ」
「お褒めにあずかりどうも」
グリムは言った。
「私、人間界のお金は持ち合わせておりませんので」
「それより！」
イーリスが怒鳴った。
「貴様、何の用があってここにいる？」
「ああ。食事をおごってもらおうかと」
「そんなことで――――！」
「綾乃ちゃん、元気？」
「ええ。怯えていますが、肉体的には健康そのものです」
「おい水瀬！」
「岩田さんを殺しかけたことについても、何も言わない」
水瀬はイーリスを無視する形で言った。
その表情は冷たく、心を閉ざしていることは、イーリスにはすぐにわかった。
「かなめさんを殺しかけたことも」
「……では、何が言いたいのです？」
「綾乃ちゃんの安否」
「ほう？やはり愛していらっしゃる？」
「付きまとわれてうんざりしてる」
「……ははっ。きっぱりと心にもないことを」
「僕はあの子に臣従しているわけじゃない……やめよ？グチしか出ないから」
「食事は与えていますし、環境面でも配慮していますが」
カレーを食べ終え、ハンバーグステーキに取りかかりながらグリムは言った。
「あなたが最も知りたがっていることから、先にいいましょう」
グリムの口から出た言葉は、水瀬の予想以上に辛辣なものだっ

た。

「魂が限界です」

「……」

イーリスは、無に徹している水瀬の表情に、わずかな動揺が浮かんだ気がした。

「このまま放置すれば、あの子は確実に死にます」

「……あの子については、魔族と神族が共同で対策に乗り出している。そう聞いているけど？」

「？」

イーリスは水瀬の口から出た言葉に首を傾げた。

それはイーリスの知るいかなる言語とも違う言葉。

「ああ。あれですか？」

どうやら、グリムも同じ言葉で返していることは、イーリスにも何とはなしにわかる。

「あんなもの。どうにもなりませんよ」

グリムは鼻で笑った。

「魂は我ら獄族の専門分野、彼らではどうにもならない」

「対策は無駄――そう言いたいの？」

「現実にそうなっているし、忘れてもらっては困りますよ？」

「？」

「人という器を作ったのは確かに魔族・神族です。ですが、それを司る魂は、我ら獄族が作り出したものであることを」

人間をパソコンに例えれば、マザーボードやハードディスクといった各部品を作り上げたのが魔族であり神族である。だが、肝心のCPUとOSは獄族により作られたものである。

グリムはそう言っているのだ。

「それが事実かどうか、僕の知ったことじゃない」

水瀬は言った。

「僕にとって大切なのはあの子だけ」

「それはそうでしょうな」

グリムは高笑いしながら手を叩いた。

「私も驚きましたよ！ただの人間だと思って誘拐してみたら、あんな魂を持っているなんて思いもしませんでしたから！」

「それで焦ったんでしょう？魔族は情報部どころか軍まで派遣。獄・魔両族の帝同士が直談判の一歩手前までいく外交問題にまで発展したんだから……もしかして、獄族からまで追っ手が？」

「幸い、それだけは免れましたが」

「なら、すぐに開放して――――三界で戦争になるよ？」

「私も戦や混乱を望むのではありません」

グリムはわざとらしく顔をしかめると、テーブルに身を乗り出した。

「そこでご相談です」

「相談？」

「ええ。――私はあの子の魂を救う方法を知っている。あの子を助ける方法を知っている」

「助けてやる。その代わり、魔族に大目に見るようにつなぎをつけろ――そういいたいんだね？」

「聡明な方で助かります」

「――ただ、はっきり答えて欲しい」

「何です？」

「僕が受ける見返りは、あの子の無事、それだけ？」

「ははっ。あの日菜子殿下からは手を引きました。本気であなたを敵にしたくないからです。――ただ、キリシマの娘の件は別ですよ？」

グリムはきっぱりと言い切った。

「あの子の件は、三族共通の理、“契約”によるもの。それに介入することは出来ない。そうですね？」

「わかった……そっちは実力で何とかする」

「お手柔らかに」

「こちらこそ」

「ははっ……あなたとは息が合いそうだ」

「本当に。……ふぅん？」

水瀬がやんわり微笑みながら言う。

「僕がイヤでも出てくる状況――――それがまさか、あの子のことだったとは」

「いや。最初は見込み違いでした」

グリムはオーバーアクション気味に肩をすくめた。

「手違いはあるものです。それに」

グリムは言った。

「あの子を助ける。それにあなたが心から同意するとは思っていません」

「何故？」

意味がわからない。

あの子を助けてくれるならそれはいいことだ。

それを僕が同意しない？

何故？

水瀬はきょとん。として次の言葉を待った。

「あの子の魂は、本来の魂の一部として存在する。本来の魂と彼女の魂は、互いの知覚しないレベルで常にリンクしている」

「それが？」

そんなことは知っている。

だからこそ、いろいろ厄介なのだ。

「そのリンクは弱いレベルで今まで維持されていた。

だからこそ、二人は別の人格を持って存在することが出来た。
ところが、何らかのきっかけでリンクが強化された――原因は二つ。
まず、一つの人格が否定された。
具体的には催眠術などで別人格が一つの魂に刷り込まれた際、本来の人格がその人格であるために必要な情報を、もう一つの魂に求め、それと強いリンクを張ろうとしたせいで、元のレベルにリンクを下げることが出来なくなった。
つまり、もう一つの魂にある人格が、もう一つの魂にまで固有の人格として認められてしまった。
もう一つ、二つの存在が接近した。
こうなると、もうリンクのタガが吹き飛びますからね」

水瀬は知っている。
グリムのいう二つの出来事は同時に起きている。
倉橋事件。
あの時だ（作者注：詳しくは「呪われた姫神」参照）

「長々とどうも」

「いえいえ。さて。私がここに来た本当の理由に移させていただきましょう」
グリムは口元を拭きながら言った。
「私は自らの安全のためにもあの子を助ける必要があるし、助けたい」

それはありがたいことだと水瀬は思う。

「そこで、あなたの同意をとりつけに来たのです。あの子を助けるために」

「僕の？」
水瀬は自分を指さしたまま、首を傾げた。

「そう。あなたのです」
グリムは頷いた。
「代償の支払いを、あなたが承諾してくれる。それが最も近道なのです」

「――――何？」

グリムの言う所の代償。
それは水瀬にとって驚愕すべきことだった。

グリムは続けた。

「あの子のことを忘れてください」

「わす……れる？」

グリムはにこりともせずに言った。

「あの子の記憶から、あなたの存在を消します」

第二十七話

ドアの向こうから聞こえる靴音。
あの人か来た証拠。
綾乃はドアの影に隠れる位置に来ると、手にしたエモノを握りしめた。

もうわかった。
あの人は妖怪だ。
私は妖怪に誘拐されたんだ。
理由はよくわかんない。

ただ、相手が妖怪なのは間違いない。

何故？

だってあの人は――――。

いけない。

綾乃は強く頭を振った。

考えちゃダメ。

考えたらあの人に知られる。

だから、何も考えずに……。

よし。

ガチャッ

「はぁい♪お食事ですよぉ？」

室内に響く軽やかな声。

今だ！

綾乃はその声の主めがけて何のためらいもなくエモノを振り下ろした。

ガンッ！

戦果を確かめることもせず、綾乃はドアから飛び出す。

やった！

綾乃は内心で驚喜する。

どこまでも続くような長い石畳の廊下は、壁に据え付けられたランプで薄暗く照らし出されている。

そんな中を、綾乃は走る。

いくつものドアを過ぎ、そして階段を見つけた。

ハァ……ハァ……

息が切れる。

でも、そんなこと言ってる場合じゃない！

逃げなきゃ！

ここから逃げなきゃ！

綾乃が階段を飛び降りようとした、次の瞬間――

「きゃっ！？」

綾乃は奇妙な浮遊感に包まれた。

落ちている！

そう理解する間もなく、

ストンッ

気が付くと、綾乃は椅子に座っている。

「はい。お帰りなさいませ――お姫様」

「えっ？」

あの男が恭しい態度で立っている。

目の前には湯気を立てる美味しそうな料理。

「いけませんよ？おいたをされては」
男はクスクス笑いながら言った。
「さぁ。お食事のお時間です」

「い、いりません」
綾乃はそっぽを向くが、テーブルから香る美味しそうな香りに、

くぅ～っ

室内にそんな音が響き渡り、綾乃は赤面した。

「ほらほら。そんな意地を張るものではありませんよ？」

「……い、意地なんて」

「それが意地というものです」
男は笑いながら言う。
「毒なんて入れていません。ちゃんとした人間のお店から買ってきた料理です」

「……本当、ですか？」

「はい」

綾乃は、何度も男と料理を疑わしそうに見つめた後、ナイフとフォークを手に取った。

「――では、失礼いたします」

男は恭しく頭を下げ、部屋から出た。

「ふうっ」

男――――グリムの口から大きなため息が出た。

「やっぱり、綾乃モードの方がかわいげがありますねぇ」

そう言って、ネクタイを緩めるグリムの脳裏を、昨夜の出来事がかすめた。

昨夜、

さらって来た綾乃の様子を確かめに室内に入ったグリムを出迎えたのは、

盛大な魔法攻撃。

万一に備え、攻撃魔法を無効化する特殊処理を施した壁が、一度でその機能を停止したほどの盛大な魔法攻撃だ。

さすがのグリムも生きた心地すらしなかった。

「レディの部屋に何のご用です？」

その凛とした声に、グリムは今の綾乃が誰かを知った。

「これは失礼いたしました。お姫様」

「そう思うなら、さっさと解放なさい」
ベッドに腰を下ろしながら、殺気だった冷たい視線で自分を刺し続けるのは、間違いない。
あのお姫様だ。

「これは魔族と獄族の間で深刻な問題になるでしょう――あなたはそれをお望みなのですか？」

「滅相もない」
グリムは本心から答えた。
「ただ、私の目的を果たしたい。ただそれだけのこと」

「――そうですか」
綾乃は冷たい口調で言った。
「この子に危害は加えないと、この“私”の前で誓いますか？」

「無論にございます」

「契約成立と受け取ります。なら構いません。名は？」

「グリム・リーパー」

「グリムとやら。お腹が空きました」

「はっ。早速、お茶でも」

「ダージリンで。銘柄は大丈夫ですか？ティーセットは……ノリタケの」

……

……

はぁ。

グリムは思い出しただけでうんざりした。

とにかく注文が細かい。

お菓子の種類どころか、「東京のどこそこの店の何々で」と来る。

紅茶に至っては茶葉どころか抽出温度まで。

綾乃は言い切った。

「何のために私がこの子を乗っ取ると思っているのです？」

そんなこと知るか。

「城では食べられない、人間界の珍しいお菓子が食べたいからなのですよ？」

だったら余所でやってくれ。

いや。ホント真面目に。

そう思いつつも、その気迫に押され、グリムは何とか綾乃の注文をこなした。

さらって来た直後に感じた、あの違和感。

あれに気づけなければ、今頃、自分は殺されていたかもしれない。

綾乃の機嫌をグリムが損なうことが出来ないのは、まさにグリム自身の命に関わる。

「私は、何だかずいぶんと厄介な事態に足を踏み入れたようですねぇ……」

グリムは、疲れた。という表情で肩を叩いてその場を離れた。

「きゃあああああああっっ！？」

ドッスンッ！

悲鳴と同時にベッドのマットレスが大きく跳ねた。

「お帰りなさいませ。お嬢様」

グリムが恭しく頭を下げる。

「食後のお茶をお持ちしました」

「……グスッ」

そのグリムを恨めしそうに見つめるのは、綾乃だ。

「何でです？」

「はい？」

「何で、どこから逃げてもここに来るんです？」

「それは、そういう仕掛けがしてあるからです」

「外してください」

「出来ません」

「……ケチ」

「ふふっ。……そういう所、あの少年にそっくりですね」

「えっ？」

「そう……水瀬悠理でしたかな？」

「悠理君をご存じなのですか？」

綾乃は驚きとうれしさを混ぜ合わせたような表情で、ベッドから起きあがった。

「ええ。先程まで話をしてました。ちなみに、先程の食事の費用は水瀬悠理の負担です」

「そ、そうだったのですか？」

「はい」

「お、おいしかったです」

「随分と、嬉しそうですね」

「それは……妻ですから」

「妻……ですか？」

「はい♪」

幸せそうに微笑む綾乃に、

「しかし」
グリムは逡巡した様子で言った。
「彼はそう思っていないようですね」

「そんなことありません」
綾乃ははにかみながら言った。
「悠理君、素直じゃないだけです。少し、恥ずかしがっているだけで」

「……」
それをグリムは知っている。
思慕。
人がそう呼ぶ感情。
その温かさは、グリムが尊ぶ所だ。
「彼が好きなんですか？」

「それは勿論」

「例えば、どのような所が？」

「えっとですね？」
綾乃は語り出した。
水瀬との初めての出会い。
一緒に過ごした時間。
それがどれほど大切で愛おしいものであるか。

それをグリムは否定した。
「水瀬悠理……面倒くさいですね。あなたにあわせて、悠理君としますか。彼は否定しましたよ？」

「――えっ？」
意味がわからない。
綾乃はきょとんとして相手を見つめた。
「何を、ですか？」
「あなたとの思い出です」
「？」
「あなたとの思い出を、失ってもよいと」
「……」
しばらく、ぽかん。とした表情でグリムを見つめた綾乃は笑い出した。
「ハハッ……そんなこと、ありませんよ」
「事実です」
グリムは言った。
「失っても良いと」
「ウソです！」
語気を強めた綾乃は言った。
「そんなの、絶対にウソです！ゆ、悠理君が……そんなこと言うはずが」
「私は本人の口から聞いたんですけどねぇ」
「どこまで私を騙すつもりです？」
「……ふうっ。仕方ない」

グリムは大げさに肩をすくめて言った。
「綾乃さん？全人類の半分は男。そう考えれば、悠理君だけに限定して男を見る必要はない。違いますか？」

「違います」

「誰を好きになろうが、それはあなたの勝手。その一途で綺麗な気持ちは尊重すべきです。でも、若い内だけですよ？恋が出来るのも。何しろ」

グリムは綾乃を睨め付ける用に見て、

「あなただって、いつまでも“女の子”でいられはしませんから」

「……」

綾乃はグリムから視線をそらせた。

「しかも、純粋すぎる気持ちは、自分自身の本当の気持ちとは限りません」

「そんなこと、ありません！」

綾乃はグリムを否定するように怒鳴った。

「ないんです！」

「……なら聞きましょう。“好き”と“愛している”の違いは何ですか？」

「えっ？」

唐突な答えに綾乃は返答に詰まった。

好き。

愛している。

よく使う言葉。

でも、その違い？
深く考えたことはなかった。
好きの上が愛している？
それでいいの？
それが、答えでいいの？
「……えっと」

「つまり、悠理君とは、あなたにとってその程度の存在なのです」

「な、何を言うんです！」

「百歩譲っても、あなたは悠理君が好き。つまり、悠理君はあなたにとって、好きな男の子なのです。違いますか？」

綾乃は無言で頷いた。

「そう。あなたにとって、悠理君は好きな相手であって、愛している男の子ではない」

「なっ！？」

「好きで愛している――そういいたいのでしょう？しかし、その違いがわからないとはいえ、あなたは今、明確に好きだといった」

「そ、そんなのは言葉のアヤというもので」

「否定できますか？」

「……」

綾乃はつまりながら言った。

「私は……悠理君が……すごく……大好きです」

「ええ。あなたの記憶を少し拝見しましたが、あなたがどれほど悠理君を好きかはそれだけでわかりましたよ。――“オトコノコ”と“オンナノコ”の“オママゴト”として」

「……なっ！？」

その一言に、綾乃はグリムを睨み付けた。

「何も知らないクセにっ！」

そして、その声量一杯に怒鳴った。

「勝手に人の想いにケチをつけないでくださいっ！」

生まれて初めての勢いで、人を怒鳴った。

「私達は……私達はママゴトでおつきあいしてるわけじゃありませんっ！」

「――ほう？」

グリムは感心したように言った。

「なら、その証拠を見せていただきましょうか」

「私の記憶を見たのでしょう！？私達の関係は、絶対に壊れることはありませんっ！」

そうだ。

綾乃は思う。

私の気持ちにウソはない。

恋する気持ちは純粋な存在。

ウソが入れば全てが台無しになる存在。

私が悠理君を好きでいられるのは、その気持ちにウソがないからだ。

「気持ちまでは見えません。記憶とはそういうものです。――それでもあなたは自分の気持ちに自信があるのでしょう？」

グリムは綾乃に近づきながら言った。

「何があっても壊れることのない、強い絆があるなら、その証拠を見せてください」

「……えっ？」

「これはゲームです」

グリムは楽しげに言った。

「あなたと私のゲーム」

グイッ。

グリムの手が綾乃の顎を掴んだ。

「我々獄族にとっては記憶操作なんて造作もないこと」

「きおく……？」

「そう。……悠理君の全ての記憶を、あなたの中から消して、真っ新な状態であなたは悠理君に再び出会う……そして、その恋をやり直す」

「！！」

意味のわかった綾乃は、青くなった顔で身を引こうとして、出来なかった。

「おいっ！」
グリムが去った後、会話の内容を水瀬本人から聞いたイーリスは、テーブルをはねとばし、水瀬の胸ぐらを掴みあげた。
周囲の視線が集まることすら、今のイーリスには関係ない。

「なんて約束を！」
「仕方ないでしょ？」
水瀬はサバサバした様子でイーリスに言った。
「それで綾乃ちゃんが助かるんだから」
「お前は！」

ガンッ！

イーリスの拳が水瀬の頬を張った。

「今まであの子とつき合ってきたのはウソだったのか！？任務だったからか！？気まぐれか？親に言われたからか！？ど、どういうつもりで！――――貴様ぁっ！」
イーリスには信じられなかった。
恋人が自分との思い出を失う。
その危機を、肝心の恋人が認めた。
そんなこと、あっていいはずがない。
それなのに、この男は、あっさりと――――！！

「今すぐ否定しろ！」

再度、水瀬の胸ぐらを掴んだイーリスが怒鳴る。
「今すぐ、その発言を否定し、あの子に謝れ！」

「――――それで、綾乃ちゃんを……殺すの？」

「っ！？」
叩き付けようとした拳をイーリスは止めた。
「お……お前」

水瀬は笑っていた。
笑顔を浮かべていた。

「ヘンだよね？……イーリスさんの言うとおり、僕、やっぱりおかしいんだよ」

水瀬は笑っていた。
笑いながら……泣いていた。

「僕だって、綾乃ちゃんの中から思い出が消えるのはイヤだよ……でも、でもね？綾乃ちゃんが死ぬのはもっとイヤだ」

「……」

「グスッ……綾乃ちゃんが助かる方法なんて、僕だってずっと探してた。でも見つからなかった。それが……それが、やっと……やっと見つかったんだ。これはもう、最後のチャンスなんだよ。ワガママなんて言っていられない……知ってる？綾乃ちゃんの本当の寿命」

「……」
「……魔族は数年っていうけど、綾乃ちゃんと魂がリンクしてい

る僕にはわかる……もう、綾乃ちゃんは、このままなら夏まで生きられないんだ」
「なっ！？」
「僕……僕、綾乃ちゃんを……死なせたくないんだよ……」

「水瀬……」
そっ。
イーリスは水瀬を床に降ろした。
水瀬は人形のようにその場にへたり込む。

「記憶から僕が消えることで、それでも死なれるよりいい。生きてさえいてくれればいいんだよ……死なれたくないんだ……」

「よく……決断した」
イーリスは水瀬の頭を優しく撫でた。
軽薄。
そう思う水瀬の行動の裏には、とんでもない決断があったのだ。
この小さな体で、
この歳で、
こいつはこれほどの決断をした。
それだけは、認めてやらねばならない。
イーリスはそう思った。

「……子供扱いしないで」
「ん？」
「頭、撫でないで……子供じゃない」
「なら、こうしてやる」
イーリスは、水瀬を抱きしめ、言った。
「思い出を失えば作り直せばいい。それだけのことだ」

「い、イヤ……」
震える声で綾乃は言った。
「イヤです！」

「あなたには、もう選択肢は二つしかない」
グリムは冷たく答えた。
「このゲームにのるか、拒み、そして死ぬか」

「死ぬ？」

「そう、死ぬ。そして、あなたは永遠に悠理君に出会えない」
フフッ。
グリムは笑い出した。
「ハッハッ……ここで怯えるなんて、所詮はあなた達の想いはオママゴトだ」
「なっ」
「ゴッコで命をかけろなんて言われれば嫌がるのは当然ですな！」
「ち、違いますっ！」
「どう、違うんです？」

「……」
「……」

永遠とも思うほど、長い時間が過ぎたのかもしれない。
もしかしたら、一瞬だったのかもしれない。

綾乃は言った。

「やりましょう」

そう。

もう、やるしかないんだ。

綾乃はそう思った。

「じゃぁ。遠慮なく」

グリムの手が近づいてくるのを、綾乃はただ黙って待つ。

閉じた瞼の裏に現れるのは、

恋人の姿、

恋人と楽しく過ごした日々……

それらが走馬燈のように流れていく。

大丈夫。

綾乃は確信していた。

大丈夫なんですから！

私は――――私は、何があっても！！

鈍い衝撃が綾乃を襲った。

私は悠理君を

また、絶対に……

絶対に、好きになる！

綾乃の意識は、闇の中へと墜ちていく。

大丈夫

大丈夫なんだから

私は忘れたりなんてしません

何より大切な……

とっても……大切な……

大丈夫なんですから……

だいじょうぶ……

綾乃の意識が、途絶えた。

第二十七話（後書き）

人情のカケラもない、冷たい人間の方が世の中多いように思えます。
本当は人間を信じたいんですけど……ハァ（T＿T）

第二十八話

「……」

宮中女官団所属、栗須明奈（２０代前半？）の顔は、それはそれは大変なことになっていた。

もし、肌にセンサーがあれば、シワ警告が鳴りっぱなしだろう。

「――――で？」

「いやぁ。私の方が驚きましたよ」

へたり込んで、バスタオル一枚で前を隠すだけの栗須の目の前に立つ男が、笑いながら言う。

「すぐそこの部屋を目指していたのに、なんでこんな所へ出たか」

「テレポートしようとしたのですか？」

「テレ？……ああ。まさにそれです」

「何のために？」

「さぁ？」

「……まぁ、いいでしょう」

栗須は言った。

「華雅女子学園には、幾重もの霊的、魔術的結界が展開されています。テレポートなんて出来ません」

「ああ。そういうことですか」

ポンッ。

男は感心したように手を叩く。

「成る程成る程……勉強になりました。それでは、ご機嫌よう」

「待ちなさい」

ガシッ。

栗須は横を通り過ぎようとする男の足首を掴むと、思い切り力を込めた。

「痛っ！痛い痛い！」
男はたまらずに悲鳴を上げた。
「……嫁入り前の女の肌を見て、無事で済むとお考えですか？」
普通なら、突然人が目の前に現れても、栗須はそれほど動じることはなかったろう。
そう。普通なら。

問題は、今の栗須の姿と場所。

場所は露天風呂。
栗須はバスタオル以外、何も身に纏っていない。
一言でいえば、とんでもない状況。なのだ。

「は？ははっ……これは失礼」
男はうやうやしく一礼して言った。
「実にお見事なプロポーション。感服いたしました」
「とってつけたようなお世辞なんて嬉しくありません」
「えっ？困ったなぁ」
ちらり。と栗須を見た男が訊ねる。
「見抜かれるとは……どうすれば許してくださいます？」
「とりあえず」
栗須は引きつる顔で、無理矢理笑顔を作った。
「目玉をえぐり出して、ペンチで指を一本ずつ潰して」
「ははっ……ご冗談を」
「安心してください。私、かなり本気ですから♪」
「かなり本気で逃げたいのですが」
「逃がしません」
グイッ。
手に力を込め、ようやく笑顔になった栗須に、男は言った。
「あたたたっ！す、少しお時間をいただけませんか？仕事が終わ

れば、すぐに帰って来ます！土下座くらいはしますから！」
「頭を潰して欲しい？まぁ。なんて殊勝な」
「あの……どういうお耳を？」
「こういう耳です」
栗須はベタベタなギャグで応じた。
「キュートでしょう？」
「ええ！もう！」
男は揉み手までして笑顔で頷いた。
「このグリム・リーパー、心底敬服するほど立派なお耳です！」
「まぁ。お世辞がお下手♪」
栗須は微笑みを崩さず、
「それでは、このお耳に、あなたの悲鳴に命乞い、断末魔。ありとあらゆる無様な叫びを、たっぷりと聞かせてくださいね？」
「だからどうして……」
「泣きそうになってもダメです。女の肌を見た代償は、死のみです」
「結婚してからも同じこと言うんですか？」
「――どうせっ！」
栗須は掴んだ足首を力任せに振り回し、グリムを露天風呂の巨石めがけて叩き付けた。
「どうせ私は……私はっ……っっ！！」
「な、何だか、暗い過去がおありのご様子ですが」
いつの間にか、グリムは栗須の背後に回り、その肩に優しく手を回していた。
「あなたほどの器量ならば幸せは望みのままです」
「……グスッ。本当ですか？」
「ええ。では、私は仕事がありますので失礼いたします」
「……はい」
「所で、春菜殿下のお部屋は、隣の建物の４階でしたね？」
「ええ。４階の４０１号室……えっ！？」
「ありがとうございます。では」

「ま、待ってください！」
「はい？」
「で、殿下に何のご用です？」
「ああ……ちょっと」
グリムは頭をポリポリ掻いた後で言った。
「殿下の血を少々、いただきたく」
ブンッ！
栗須のモップは、空を切り裂いただけだった。

――――まずいっ！

「く、栗須さんっ！？」
すれ違うメイド達が驚愕の眼で自分を見ているのはわかる。
だが、服を身につける時間すら惜しい！
どうせ、周囲は女ばかりだ。
少なくとも、男の視線を気にする必要はない。

たとえ、部下達が凍り付いていても、
「栗須殿が発狂された！」とか、
「欲求不満が頭に来たみたいです！」とか、
「黄色い救急車を呼べ！」とか、
普通なら無事（タダ）ではすまさない言葉が背後で飛び交っても、そんなことは知ったことではない。

大切なのは、殿下の御身だ。

グリムとか言った男は言った。

「ほんの少しでいいんです。ほんの１００ｃｃ程度。その程度の献血をしていただければ」

「高貴なるお方の血を何だと心得て！」
「いや――ホントに後遺症はないんですよ？」
「信じられるものですか！」
「仕方ないですねぇ」
「諦めて帰りなさい！」
「では――強硬手段です。もしかしたら、死ぬかもしれませんけど。恨まないでくださいね？」

メイドの禁則事項を駆使した栗須がモップを手にしたその瞬間、グリムの姿が、その視界から消え、そして栗須は露天風呂から素っ裸のまま、飛び出したのだ。

バンッ！

手荒くドアを開けた栗須は叫んだ。
「殿下っ！」
「――？」
ドアの向こうで、大福餅にかぶりつこうとしたままの格好で春菜が凍り付いていた。
「ご、ご無事で？」
夜、お腹が空いたからといってお菓子を食べることを、春菜は栗須によって厳禁されている。
その現場を押さえながらも、栗須の口からは怒鳴り声ではなく、涙混じりの安堵のため息が漏れる。
「……私は、大丈夫ですが」
春菜が心配そうな顔で言った。
「栗須は……大丈夫ですか？」
「は……はは……」
その場にへたり込む栗須に、恐る恐るといった感じで、春菜が言

った言葉ですら、今の栗須には何より嬉しい。

よかった。
襲撃はなかったんだ。
殿下が無事。
それなら、何もいらない。

「ま、待ってくださいね？今、精神科の先生を呼びますので」
「い、いえ……お気遣いなく」

よかった。
本当によかった。
栗須は泣きながらそう思った。
相手は、この華雅女子学園に展開されている、近衛の上級魔法騎士ですら突破が困難な結界をものともしなかった猛者だ。
あんなのに襲われたらどうなるか。
正直、考えたくすら、ない。

全裸にモップ一つで寮内を駆け回ったことについては、あえて考えないことにしよう。
あれこれ言ってくれた部下達は、訓練の名目で生まれてきたことを後悔させればそれで十分だ。

「ああ。こちらが殿下のお部屋でしたか」

部下へのシゴキプログラムを頭の中で考え始めた栗須の背後から聞こえた間の抜けたような明るい声に、栗須は黙って頷いた。

「では」

ガタッ！

何かが倒れる音に、栗須は我にかえった。

――――えっ？

私は今、誰と話したの？

今の声――――

頭を上げた栗須の視線の先。

そこには、椅子から崩れ落ちた主君の姿があった。

「……殿下？」

返事はない。

真っ青な顔で、床に倒れている。

「殿下」

体を揺すっても反応がない。

「殿下！」

そして、栗須は見た。

春菜の首筋。

そこには二つの穴。

それが、何を意味するか、栗須は経験で知っていた。

「殿下ぁぁぁぁぁっっ！！」

日菜子殿下遭難、暗殺未遂
福井かなめ負傷
瀬戸綾乃誘拐
そして――

春菜遭難。

事態は最悪に向かっていた。

検査に当たった療法魔導師が居合わせた者達に検査結果を告げる。
「殿下は今、気を失われているだけとしかいいようがありません」
「御身に後遺症のようなものは？」
「残存する魔力の波動は、見たことのない種のものです――何ともいえません」
「……」
苦い顔で報告を聞くのは樟葉達、泣く子も黙る近衛幹部だ。
「身体的な被害については、首元の出血痕以外、何も見受けられませんが……」
「どうやら我ら饗庭家というのは」
樟葉は投げやりに言った。

「本当に、失態の責を取って腹を切らねばならない運命のようだな」
「閣下！」
青くなった側近達の中から厳しい声が飛ぶ。
「冗談だ――――そういってもらいたければ、もう少しマシな報告をしてくれ」
「……」
「冗談にならんぞ？これは」

樟葉の言い分ももっともだ。

日菜子の命により、療法魔導師を連れて派遣された樟葉達幹部も、何が起きたか、何が起きているのか、詳細が全くわからない。

そして、それは敵も同じだ。
わかっていることなんてたかが知れている。
宮中女官団最強（正しくは最恐）を謳われる栗須ですら、一瞬の隙を突かれるまでその存在に気づくことすら出来なかった猛者だということ。
男性。
春菜の血を求めてきた。
殺意は否定していた。
その程度にすぎない。

「……」
ベッドに横たわる春菜の寝顔をみつめる樟葉の顔は苦虫を噛み潰したようなそれだ。

吸血鬼事件以来、警護を薄くしていたのが裏目に出たか？

樟葉は自問した。

いや。違うな。

敵が手練れすぎた？

それも違う。

敵が、特殊すぎたのだ。

そうとしか言い様がない。

かつて、単独でテロリスト一個中隊を撃破してのけた、あの恐るべきワンマンアーミー、栗須明奈を出し抜いたのだ。

はっきりただ者ではない。

そう、言い切れる。

魔法騎士？

違う。

そんな、生易しい相手じゃない。

そんな相手なら、今頃、栗須がカレーの具にでもしている。

――――食べたくないけど。

水瀬から報告は上がっているアイツに違いない。

獄族（ごくぞく）

死に神と名乗る、神族・魔族に次ぐ第三勢力。

それが、春菜殿下を……いや、皇室を襲った？

何故？

その瞬間、樟葉の脳裏に浮かんだのは、一人の少女の姿だった。

普段なら大した感慨も持たない、単なるブラウン管の向こう側の存在、それは今や樟葉にとっては憎悪の対象と成り果てていた。

「守屋（もりや）」

「はっ！」

脇に控えていた樟葉の副官が直立不動の姿勢で一歩前へ出た。

「瀬戸綾乃の件、その後報告は？」

「事件を追っている水瀬少佐からは何も」

「そうか……」

ベッドに寝かされた春菜の回りで療法魔導師達が魔法をかけては集まって、何かを話し合っているのを横目で見ながら、樟葉は続けた。

「南雲大尉は？」

「水瀬邸にてルシフェル少佐と合流、現在待機中」

かなめは失血により使えないものの、イーリスを代役に充てているから、問題はない。

南雲とルシフェルと合流して水瀬邸にかくまっている村上達の護衛についている。

阻止戦力としては十分すぎるはずだ。

だが――

樟葉は自らの楽観視を戒めた。
敵は村上達を狙って南雲達と接触、これを撃破すれば終わりだと思っていたが、敵は予想外の行動ばかり繰り返す。
その度に翻弄されてきたのだ。
全く、敵の意図が読めない。
目的外のことばかり繰り返すことに、何の意味があるというのだ？
それとも、村上達の事は、本来から目的ではなかったとでもいうのか？
馬鹿な。
それでは、敵の本当の目的とは何だ？
それが、見えない。
「……ちっ」
まるでバカにされているような嫌な錯覚すら覚える。
「守屋」
「はっ」
「敵の行動分析を……作戦課ではなく、魔導軍の清羅様に依頼しろ」
「清羅様に？」
「そうだ」
樟葉は守屋に言った。
「玉座を吹き飛ばした間抜けな部下の失態の尻ぬぐいに必須の情報だ。そう言えばわかる」
「面と向かって、閣下がおっしゃって下さい」
「お前はあの方に気に入られている。殺しはすまい」
「もし殺されたら？」
「二階級特進させてやる」
樟葉からのにべもない言葉に、守屋は力のない声で言った。
「心強い励ましで」
「行け。第一分隊は、ここに通じる通路で一晩待機させろ。栗須は？」
樟葉が声をかけたのは、司令部から派遣されてきた栗須の代役の

女官。
　華雅女子学園武装メイド隊総隊長の太田がそこにいた。
「つい今し方まで、モップで腹を切ろうとして大騒ぎでした。今は鎮静剤を投与して」
「春菜殿下の側に。武装してだ。失態の責を、戦功を持って取らせろ」
「……了解」
「私はここに残る。他の者は別室にて待機しろ。代理の者が来るのは？」
「翌朝０６３０。左翼第二中隊から女性魔法騎士１０。それまで護衛につくのは、一人残らず男です」
「そうか……」
「はい」
　幹部達全員が頷く。
「……」
　無言で立ち上がった樟葉は腰の刀を抜きながら怒鳴った。
「貴様ら、あたし達の性別、言ってみやがれっ！」

「あのぉ……」
　療法魔導師の一人が恐る恐るという感じで声をかけてきたのは、樟葉が幹部全員をしばきあげた時だ。
「ハァハァ……なんだ？貴様も同罪か？」
「い、いえいえ！滅相もない！」
　首がもげるのではないか？という勢いで首を横に振るのは、療法魔導師達で編成される魔法施療隊隊長の手塚だ。
「よ、よろしいですか？」
「かまわん。言ってみろ」
　樟葉は荒い声で言った。
「内容次第では殺すが」

「……せ、せめて閣下だけで」
「？」
手塚は震えながら言った。
「春菜殿下のお体のことで」

控え室に入った樟葉に、手塚は言った。
「失血だけでは、事態はすまなかったようです」
「何？」
「魔導師達は私から箝口令を発しています。後には、私を含めての記憶操作が必要ですが」
「待て」
樟葉は手塚の言葉を止めた。
手塚は何かを思い詰めている。
「順を追って話せ。何があったというのだ？」
「……我々は、殿下の御身と御心の検査を行い、その結果として、少なくとも、御身に影響は残らないと判断いたしました」
「先程、魔法による被害を報告していたな。……精神面で、何か問題でも？」
「……」
「どうした？」
「殿下が、何故、皇位継承権第三位であらせられるか……ご存じかと」
「第三皇女だ。当然だろう？」
「第二皇女であらせられる日菜子殿下が第一位ですが」
「……待て」
樟葉は手塚の言葉を止め、自らの考えをまとめた。
「“統べる力”に、何か？」
「詳しくは、専門部隊に委ねなければなりません。しかし」
「……」
「我が部隊全員の共通した見解です」

「……言え」
「今の春菜殿下の“統べる力”は、覚醒段階にあります」
「かく……せい？」
「そうです。力の初期発現段階の兆候がみてとれます」
「それが……どうした？殿下も皇族ならば、そのお力があるのは当然だろう？おめでたいことではないか」
「日菜子殿下を上回る力を、今の段階でお持ちです――そう、申し上げても？」
「！？」
「敵による意図的なものかもしれませんが……我々は別の認識を持っています」
「話せ」
「はい。その……春菜殿下は、力を持っていらっしゃらない。世論ではそう思われていますが？」
「知っているし、そうなんだろう？」
「それが根本から違っているのです。我々はこう見ています――殿下は、お力を持っていないのではない、眠っているのだ。そして、その力は限りなく未知数だと」
「つまり？」
「はい……その」
「はっきりしろ」
言いよどむ手塚に樟葉は厳しく先を促した。
「敵に襲われ、恐らく精神攻撃を受けたことにより、本能的なレベルにおける防衛本能か働き、眠っていた力が目覚めただろう……と」
「……してやられたな」
敵が狙ったことかはわからない。
もし、狙ったものではないとしても、敵はとんでもない置き土産をしてくれた。
「統べる力」

王権の力。
その力の及ぶ所は、魔法の有効範囲だけではないのだ――。

「手塚」
重々しい声で、それを知る樟葉は言った。
「……はい」
「この事は絶対に内密に」
「心得ております」
手塚は言った。
「我々は速やかに別部隊による記憶操作を受けます」

樟葉は黙って頷くと、控え室を出た。

冗談ではない。

とんでもないことしてくれた！

手が知らずに刀の柄を握る。

皇位継承権者の証“統べる力”

それが弱いという理由。
ただそれだけで、血筋の上では姉である身が、力の強い妹に継承権を譲ることを、世論があっさりと認めるほど、その力を持つことの意味は大きい。

一度決められた継承権の順位がもう一度入れ替わる？
冗談ではない。
先帝の娘としての継承権順位とは違うのだ！
今更、継承権順位がひっくり返るようなことがあれば、どのよう

な混乱が引き起こされるか……。

樟葉の脳裏に、継承権に絡んで暗躍しそうな人物、組織の名が分厚いリストになって浮かぶ。

いずれも、その社会的地位、影響力は侮れる代物ではない。

だからこそ、皇室近衛騎士団のトップとして、日菜子に忠誠を誓う者として、樟葉は自問せずにはいられない。

それが、敵の真の狙いだとしたら？と。

すぐにそれは別な意見に否定される。

いや。

もしかしたら、本当に偶然の産物かもしれない。

違う。

樟葉はその楽観論を戒めた。

違うんだ！

樟葉は強く頭を振った。

もう、春菜殿下を襲った敵なんてどうでもいい！

そんなものはあのバカ息子に任せる！

私はもっと大変な仕事がある！

きっかけは、もうすでに起きてしまったんだ！

時計の針は元には戻せない！

起きてしまったきっかけが、今後何を産むのか――

私はそれを考えればいい！

日菜子殿下と春菜殿下の皇位継承権争い？

そんなものでは済まないんだ！

背後で日菜子殿下と対立する京の宮家達、議員達――。

彼らが騒ぎ出す。

政（まつりごと）がまるでわからない春菜を担ぎ上げ、様々な大義名分の元、自らの利権のみに執着するあの愚物等が暴走すれば最悪――。

最悪……

帝国動乱

「冗談ではない！」

樟葉の背中を、冷たい汗が走った。

第二十九話

夜の病院。
ある病室。

そこから聞こえてくるのは人の呻くような声。
決して苦しんでいるのではないことは、その声色からわかる。
声の主は女性。
うめき声できなく、あえぎ声。
発情した女の声だ。

その病室の前に立ちつくすのは、白衣を着た女。
この病院の関係者なら、桐沢冴子という名前が出てくるだろう。
彼女の耳にも、病室から漏れ聞こえる声は聞こえている。
ドアの向こうで何が起きているかは、女としてイヤでもわかる。
そんな声を聞きながら、彼女はまっすぐに病室のドアを見つめていた。
患者にするように、睨み付けているのではない。
あくまでまっすぐに見つめていた。
震える手を握りしめ、
唇をかみしめながら、
涙の浮かぶ目で、まっすぐに――――。

何分が経ったのだろう。

ガチャ

病室のドアが開き、一人の男が出てきた。

「おい」
不意に背後から聞こえてきた声に、男は立ち止まった。
壁にもたれかかるように、腕組みして男を睨み付ける冴子の声だ。
「看護婦を食い物にするために、貴様を呼んだ覚えはないが？」
「妬いているのか？」
「ふざけるな」
男の声に、嫌悪感をあらわにした様子で、吐き捨てるように冴子は言った。
「貴様とのことは、人生の汚点だ」
「心にもないことを」
振り返った男の手が冴子の顎を上に向けさせる。
冴子の瞳に、男の顔がアップで映し出された、次の瞬間。
冴子の手が横薙に動き、男が後ろに跳んだ。
「全く……相変わらずだな」
「ふんっ――――お互い様だ」
男めがけて一閃させた銀色の光を放つエモノ――――メスをしまう冴子。
「刺される方がお望みだったか？」
「ふざけろ」
男は言った。
「お前が待たせるから悪い」
「ヒマがあれば女を食い物にするのか？」
「そんなに褒めるな」
「昔からそうだ」
冴子は男に背を向け、ヒールの音も高らかに歩き出した。
「貴様の頭の中身がどうなっているか、本気で知りたい」
「それが心臓外科専攻のお前が脳外科にまで手を出した理由だったな」
男は、冴子の後ろを歩きながら言う。

その声は、どこか懐かしさすら含んでいた。
「貴様と出会った。それが悪夢の始まりだった」
「不器用とは思ったが……それでも精一杯俺に気に入られようとした、あのいじましさはどこへやった？」
「死にたいのか？」
「医者のセリフか？それ」
「自慢ではないが、医者という人種は、人を殺すのが本業で、その反対は職業上の倫理に反する」
「自慢するなよ」
「ここまで来れば自慢したくもなる。そういうものだ」
「それは、俺の依頼の件も含んでいるのか？」
「……貴様、アレは例外だぞ？」
「例外だから、貴様のところへ来たんだ」
「アレに必要なのは、医者ではない」
冴子は振り返るなり言った。
それは医者の声というより、罪状を読み上げる死刑執行人の声そのものだと、男は思った。
「魔法使いか狂科学者（マッド・サイエンティスト）だ」
「だから、お前に頼みに来たんだろうが」
「共にいい実験材料が入ったと喜ぶだろう――何？」
「後の方は、お前のことだろう？」
「殺すッ！」
「……普段、冷静な割に、頭に血が上るとそうなるのが、お前らしい所ではあるが」
冴子の肘を掴み、それ以上の動きを封じつつ、男はため息をついた。
「実験室にこもりっきりだったお前は、むしろそう呼ばれるのを喜んでいるフシすら感じていたが、違ったのだな」
「そんな過去のことはどうでもいい」
「そうか？残念だが――それで？」

「……」
冴子は乱暴に男の手を振り払い、白衣の襟を正した。
「――非常に興味深い対象であるのは事実だ」
歩き出す冴子は決して男を見なかった。
「あのような特異な存在は、初めてだ」
「それは褒め言葉か？」
「ああ。褒め言葉だ」
その口調は、決して褒めていないことを如実に語っている。
「はっきり言ってやろう――アレはすなわち、各国で進められているクローン人間の研究成果そのものだ」
「クローン人間？」
「ああ。各国の軍事機関を中心に、試験管培養による人間の誕生そのものは成功しつつあると聞く。
だが――その本来求められる要望には応えられるレベルではない。
その作成における最大級の問題は、その人間の成長と、記憶の植え付け。そこに尽きる」
「出産と同じプロセスで、赤ん坊、子供と育てていけばいいだろうが」
「貴様、正気か？」
フンッ。と鼻で笑った冴子が見下げ果てたという眼で男を一瞥した。
「そんな方法で生命体を作り出す意味なんて、一つだろう？」
「兵器、実験体、玩具」
そう答えた男の声は低い。
「そうさ。生命の倫理とやらの面から見れば、唾棄すべきとされる目的のため。クローンという言葉を使わなければ、人間の工業製品化そのものだ。故に、製品の質は均一にして、製造時間は短期間、そしてコストは低額であることが求められる――赤ん坊から育てる？少年兵として使うとしても期間にして１５年、食費だのなんだ

のと莫大なコストのかかる、人間と同じプロセスによる育成なぞ、論外だ」
「……」
男は黙って冴子の意見を聞く。
聞きたくはないが、聞くしかないのだ。
「生まれながらに必要な情報を記憶として持ち、すぐに人間同様に使えなければクローンなんて意味はない。そう。問題は記憶だ。自分が何者で、何を成すべきか。それを知る記憶。それをどう埋め込むか。現在のクローン技術はそこがネックになっている」
「そんなこと、出来るのか？」
「今後の研究次第としかいいようがない。だが、アレは別だ。コストの面は知らんが――少なくとも、期間の面において、アレは完全かつ、理想的なまでにクローンとしての要件を満たしている」
「面白くないな」
「それは貴様が古い人間だからだ。――ついでに宗教の司祭などやっているからだろう」
「マトモな人間だからとは言えないのか？」
「それは聞かなかったことにしよう」
冴子は自分に割り当てられている研究室の鍵を開けながら言った。
ドアの向こうにはＭＲＩなど、最新の機材が見て取れる。
「それで？」
男はやっと聞きたいことを聞いた。
「お前はそのクローン人間をどう思っている？」
「医者としてか？科学者としてか？」
「冴子として。だ」
「……ふむ」
冴子は興味深いという顔で答えた。
「面白い質問だな。個人と公人――それをない交ぜにした上での質問か」
「どうなんだ？」

「なら私はこう答えよう」
冴子は言った。
「私は医者として生きているが、診察は面倒くさくて嫌いだ。だから、患者を増やされることは全て反対する立場だ。故に、趣味で人体実験はやっても、患者が増えるような悪事の片棒をかつぐことは医者としての良心が許さん」
「ひねくれてるなぁ……せめて、人としてクローンに反対するとか言えないのか？」
「それこそ面白くない」
冴子が苦笑する声が廊下に響く。
「とにかく、貴様からの依頼は感謝している。たとえ、貴様にキ印呼ばわりされても、アレをまともな人間にしてみせる。使い捨ての道具（クローン）ではなく……人間にな」
「……頼む」
「うむ」
冴子はその時初めて顔にうっすらと笑みを浮かべた。
「それから」
「ん？」
「あの子を見ている限り、お前の子供ではないな？」
「……あいつは」
「いい。言わなくて」
冴子は男を遮った。
「医者は、患者の身元にこだわりはしない。帰るなら、せめて顔くらい見てやれ。最近は容態も安定して、元気だ」
「――そうか」
男の口から安堵のため息と共に言葉が出た。
「お礼に、今晩はお前を守ってやろう」
「守る？」
「ああ――」
男は、背後を睨みながら懐から何かを取り出した。

霊刃（サイコブレード）
魔法騎士の証だ。
「貴様がどうしてこんな所でよく平然といられるか、俺はそっちが知りたいものだ」
「説明になっていない」
「黙って向こうを見ろ」
男が顎でしゃくった先の暗闇に目を凝らした冴子は、息を飲み込んだ。
「ん？――――っ！」
「疲れている？幻覚？――――いいか？そんなもんじゃない」
男は冴子の口元を抑え、その耳元で言った。
「あれは、現実だ」
「しかし……」
冴子は納得が出来ない。

廊下のT字の突き当たりを
音もなく
うめき声すら上げず
虚ろな瞳で
静かに
本当に静かに
黙って歩き去るのは

患者
それも集団だ。
老人
子供
男
女
中には赤ん坊までいる。

夜間に？
集団で？
患者が？

何故？
どこへ？

そんな問いに答えることもなく、
彼らはただ、廊下の向こう側へ消えていく。

「私は疲れている」
冴子はそう言って頭を左右に振った。
「幻覚を見た」
「現実主義もそこまでいけばたいしたものだ」
「まだやることはある、少し仮眠をとることにしよう」
「まて」
男の手が、冴子の腕を掴んだ。
「結界を展開している。俺の側から離れるな」
「何？」
「結界であいつらの眼から俺達を見えなくしている。――看護婦から聞き出したが、ここの所、夜勤の看護婦が何人か失踪しているそうだな。表面上は退職としているそうだが」
「……ああ」
冴子は苦い顔で認めた。
「5人の看護婦が院内で行方不明。病院としては体面上、公にはしていないが」
「いずれ、公になるぞ？」
「院長は帝国議会とは縁が深い」
「あの愚物共が」

「ふっ……その国家権力嫌いは相変わらずか」
「近衛に入っていなければ、アナーキストにでもなっていたさ」
「世界征服をたくらむ悪の組織でも作ったほうが……らしいぞ？」
「そうか？」
苦笑しつつ男は患者の群れを見た。
どうやら群れはとぎれたようだ。
だが……。

「……」
目を凝らし、乱暴に目をこすった男はそのまま廊下を走り、集団から離れて歩く最後の一人の襟首を掴むと、有無を言わさずに冴子の研究室に放り込み、ドアを閉めた。

「このバカモノっ！」
ゴンッ！
男の怒鳴り声と共に振り下ろされた拳が垂直にその子の頭を直撃した。
「痛ぁい！」
「やかましいっ！」
ゴンッ！
まただ。
「こんなところで何をしている！」
「お父さんこそっ！」
突然のことに驚愕の表情を浮かべるのは、女の子と見まごうばかりの男の子だ。
そんな子供に、男は容赦なく怒鳴り声をあげた。
「あんな連中の尻を追いかけおって！」
ゴンッ！
「ゴチゴチ殴らないでよぉ！暴力反対っ！」
「これは愛のムチだ！」

ゴンッ！
「ヒドイよぉ！」
頭を抑えながら子供が恨めしそうにわめいた。
「小さい頃からお父さんがそんなにゴチゴチ殴ったから、僕、背が伸びないんだぁ！」
「殴らせる貴様が悪い！」
「ＰＬ法だぁ！責任とれぇ！」
「悔しかったら子種に戻ってみやがれ！」
「人でなしぃ！」
「その子供はなんだ！」
「人格者！」
「破綻が抜けている！」
子供は何とか父親の拳を避けた。
「それが子供に対する言葉！？グレるよ！？」
「それ以上グレられるならやってみろ！」
「ううっ……」
「大体、貴様は親に対する敬意を持っていない！」
男はそう怒鳴るが、
「敬意を持ちたくなる親がいないだけだもん！」
それが子供の本音だ。
「――っ！」
さすがに子供に面と向かって言われた男はかなりのショックなことは、冴子の目から見ても明らかだ。
悔しそうに唇をかみしめた男がたまらないという顔で怒鳴った。
「貴様！目の前の男が誰の親か言って見ろ！」
「エロスとバイオレンス、ついでに不道徳！」
「それはオレの親だ！」
「僕はそんな祖父母なんて持っていないもん！」
「神音母さんを前に言えるのか！？」
「……」

「いい加減にしろ」
冴子が二人の間に割ってはいるようにして言った。
「ここは病院だ。貴様、モラルというものを持っていないのか？」
冴子は頭のタンコブをさする男の子の顔を見た。
「まだ小学生だろう？」
「僕は高校生ですぅ」
「悠理！」
男の手が子供の胸ぐらを掴みあげた。
「学校はどうした学校は！貴様、また無断欠席じゃないだろうな！？」
「春休みだよ！ついでに仕事中！」
「何？知らんぞ！？」
「報告書、あげたでしょう？了承印押してあったもん！見たんでしょう？」
「俺のめくら判なんて信頼出来るか！」
「自慢しないでよぉ！」
「だからいい加減にしろ」
冴子の手が男の手に触れた。
「このままでは児童虐待で通報することになるぞ？――離せ」
「――ちっ」
子供は何とか親の手から離れた。
「お、お姉さん……ありがとうございます」
「礼なぞいい。それより」
お姉さん。
それに機嫌を良くした冴子は訊ねた。
「名前は？」
「はい。そこの水瀬由忠の息子、水瀬悠理です」
「水瀬悠理？――ああ。貴様の自慢の息子さんか」
「不肖の、だ」

男――由忠はそう言ってそっぽを向いた。
「ひねくれ者が……それで？何をしていた？」
「えっと……」
「ん？あの集団を見て、興味が引かれたとでもいうのか？」
「ちょっと違います」
水瀬は言った。
「あの集団を呼び寄せる存在がいるんです。それが、どこにいるかわからなくて」
「それで集団の後を追った」
「そうです。どうやら地下らしいことまではわかったんですが」
ちらりと父親の顔を盗み見るようにした水瀬は言った。
「そこの角でとぎれました」
「成る程？それで？」
「面白いことがわかりました」
水瀬は言った。
「この病院、仕掛けがありますよ」
「仕掛け？」
由忠が首を傾げた。
「トラップか？」
「物理的なワケないでしょう？僕も忘れてたんだけど、つまり」
何かを言いかけた途端、水瀬は口元を抑え、蹲った。
「悠理？――悠理っ！」
血相を変えてその肩に手を伸ばそうとする父親の手をはねのけ、水瀬はドアの向こうへと駆け出した。

そして――

水瀬悠理は消息を絶った。

第三十話

事態の急変は、その夜起きた。

水瀬悠理が連絡を絶った。

近衛関係者は、城外に出る際は定時連絡を入れる義務がある。

水瀬悠理は連絡を忘れる常習犯だったのも災いした。

司令部は、「いつものことだ」と無視を決め込んでいたが、春菜殿下遭難の報を受け、近衛幹部が緊急招集されたというのに、何故か水瀬悠理が登城してこない。

そこで行われた司令部からの呼び出しにも応じない。

確認したら、常時携帯が義務づけられているＧＰＳ発信器の反応も消滅していた。

春菜殿下に続き、水瀬悠理までが敵に襲われたか？

司令部は、反応消失から２４時間後、ついに水瀬捜索を関係者に命じた。

近衛司令部から第一報を受けたのは、父、水瀬由忠だ。

「あんなバカ息子放っておけ」と任務を拒絶した所、妻である遥香にぶっとばされてやむを得ず、妻を同伴で出動。

続いてルシフェル達が動いた。

「水瀬君が消息を？」

この際、遥香を除けば、唯一青くなった、つまり、水瀬の安否を心配したのは、ルシフェルただ一人だった。

「そうです」

電話の相手は、緊急事態を告げる水瀬専属ＣＰＯ（戦術担当士官）鈴宮遥（すずみや・はるか）だ。
「近衛司令部は、悠理君が消息を絶った場所を中心に捜索するように指示を」
「……水瀬君が、やられたと？」
「それは……不明で、す」
鈴宮の声は、緊張のせいか、震えているように聞こえる。
「とにかく、悠理君の安否の確認を最優先に行動してください」
「了解」

「全く」
ベンツ（ちなみにＢ）のドアを乱暴に閉めながら、毒づくのはイーリスだ。
「春菜殿下が襲われたというのに！あのバカは！」
「やむを得ません」
ルシフェルは助手席のシートベルトを締めながら言った。
「とにかく、水瀬君が消息を絶ったのは――ここです」
ＧＰＳナビのモニター上でルシフェルが指さしたのは、
「病院？」
「はい……ここです」
「脳外科か」
「精神科……だと思います」
「待て……まさかと思うが」
「はい？」
「あのバカ、病院では携帯をお切り下さいとか言われて、律儀に発信器の電源まで切ったとかいわないだろうな」
「あれは、電源切れませんから」
「あ……聞いたぞ？非常呼集の時、どこぞのラブホテルから出動してきたって」

「い、イーリスさんっ！」
「フフン？相手は秋篠宮家の三男坊だそうだな」
「……」
勝ち誇ったようにすら見えるイーリスの言葉に、ルシフェルは赤面して俯いてしまった。
「あれで関係が近衛女性陣にバレたり、樟葉殿に小言を喰らったのは、気の毒な気はするが」
イーリスは車を発進させながら、思いついたように言った。
「ところでルシフェル」
「はい？」
「呼集のアラームにびっくりして、思わず中で爆発されたとか？」
「……次に来るまで怯えてたんですから」
泣きそうな声でポツリとそう言ったのを、イーリスは聞き逃さなかった。
「そうか」
あまりにあっさりした言い方に、怒られるかと思っていたルシフェルは驚いてイーリスの平然とした顔を見た。
「あの……」
「ん？」
「何か、言われるかと思ったんですけど」
「それは年上としてか？シスターとしてか？」
「ど、どちらでも」
「年上としてなら……ドジ。シスターとしてなら、これだ」
イーリスがグローブボックスから取り出してルシフェルの膝の上に置いたのは、一冊のパンフレット。
「その８ページ目」
「？」
ペラッ。
そこにはこう書かれていた。

『当教会における赤ちゃんの洗礼式について』

呆然とするルシフェルに、イーリスは言った。

「同僚のよしみだ。費用は半額でいいぞ？」

「ええい！あのバカは何をしておるか！」

「仕方ないじゃありませんか」

同じ道を走る車――こちらはＡＭＧのＳ――の車内。

運転席で不機嫌さを隠さないのは由忠だ。

頭に巻かれた包帯は、先程遥香にノされた時の名残だ。

「悠君だって、やられる時はやられるんです」

そう言うのは、助手席に座る妻、遥香だ。

「やられた――本当にそう思っているのか？」

「クスッ……ご自身より強い息子がやられたというのが、面白くないのですか？」

「俺は父親として！」

「はいはい」

まるでだだをこねる子供をあしらうように遥香は言った。

「息子の不甲斐なさに腹を立てている……そう、おっしゃりたいのでしょう？」

「わかっているなら一々言うな！」

「本当……いくつになっても変わりませんね……そういう所」

妻に手玉にとられているのがイヤでもわかる由忠は、面白くない。

「……褒めているのか？」

「いえ？」

やんわりと微笑む遥香の横顔を見ながら、由忠は妻に言った。

「遥香」

「はい？」

「今回の件、天界はどう動く？」

「そりゃぁ……静観ですわ？」
「何もしてくれない？」
「悠君を動かしているのが精一杯ですわ」
「全く、あいつと来た日にゃ」
由忠は苦い顔をさらに苦くして言った。
「あの戦争でも途中までロクすっぽ役に立ちはしなかった上に、今回まで――あいつはどこまで水瀬家の家名に泥を塗れば気が済むんだ！？」
「いいじゃありませんか」
怒り狂う父親に、母親はやんわりと言う。
「功績は順調に立てています。それに、あなたのように女性問題を」
「起こしている！」
「――はい？」
遥香は、きょとんとした顔で夫の横顔を見た。
「あの……あなた？どういうことです？」
「祷子の件、忘れたわけではあるまいが！」
「そりゃそうですよ？でも、そのおかげで、人間の跡取りが出来たわけで」
「……いいか遥香」
「はい？」
「あいつは……日菜子殿下に手を出した」
「はぁっ！？」
「皇室の上層部は皆知っていることだ。知らぬは当人達ばかりらしいが」
「ま、まさか、悠君……」
「あんな性別すら安定しない変人が、次期女帝に手を出したなんて認められるか？」
「……小さいとき、憧れはお姫様なんて言ってましたけど」
「なるだけでも問題なのに……祷子といい、殿下といい――！！」
「“あの子”の件は関係ありません」

「ハァッ……時々、お前のその割り切りの良さがうらやましい」
「どうも♪」
「――――チッ！」
由忠が、前を走る車がイーリスのそれだと気づいたのは、妻に毒づいた後だった。

「ううっ……」
ここがどこだかわからない。
“弟”の記憶からすれば、多分、葉月という街の中らしいんだけど――――。

そう思う少女は、焦る気持ちを抑えながらあたりを見回した。
“困った”
それが、少女の正直な気持ち。

少女の最後に覚えているのは、1年ほど前の戦場。
そのテントの中。

それが、次に目を覚ましてみたら、冷たいコンクリートの合間だ。
“転化”が起きたんだろうことはわかるんだけど――――。

少女は、“弟”に文句が言いたかった。

“転化”が起きるなら、前もって準備しておいてくれればいいのに。
例えば、ふかふかのベッドとか、カワイイお洋服とか……。

そう、文句が言いたかった。

弟の記憶と自分の記憶のリンクが始まる。

頭の中をかき回されるような気持ち悪さに、少女はその場に蹲ってしまう。

どれだけの時が経ったかわからない。

時計は１０時近くだけど、それが何年何月何日の１０時なのかわからない。

どこかに“弟”が住んでいる家があるはずだけど、それさえわからない。

……だめだ。

少女は痛む頭で星のない空を仰ぎ見た。

何もわかんない。

記憶のリンクが終わるまで、どうしようもない。

待つしか、ない。

くうーっ。

お腹が空いたな……。

少女は、食べ物を探して荷物を探すと、お尻のポケットから財布が出てきた。

千円札が数枚入っている。

何とか、ご飯が食べられる。と、少女は財布を戻しながら思った。

その安堵感が、自分の状況を把握するだけの精神的余裕を与えてくる。

人気のないビルとビルの、人が通るだけでやっとの狭い隙間。
それが自分の居場所だと、その時気づいた。
“弟”は、“転化”が始まることに気づき、人気のないビルの合間に隠れたのだ。
だけど、いつまでもここにいることは出来ない。

そっ。

少女は、ビルの合間から出ると、目に入った店に向けて歩き出そうとして――――。

グイッ！

背後から回った手。
回した方は、それで少女を取り押さえられると思ったろう。
だが――――

少女の体は、すでに数十メートル向こうへ飛す退っていた。

「！？」

少女の目に映るのは、いかにもその筋の殿方の面々。

「何のご用ですか？」
少女の凛とした問いかけに、明らかに狼狽したらしい男達の中の一人が言った。

「お嬢ちゃん。一緒に来てくれねぇか？」
「いやです」
「……一言で突っぱねやがったな」

「だっ、だって……」
少女はそれでも申し訳ないという顔で言った。
「怖いおじ様方とご一緒なんて……」
「ふっ……怖がらなくてもいいんだぜ？あるお方がお前さんをお探しだ」
１８０センチ以上の身長にゴツい体格に高級そうなスーツ、さらに五分刈りにサングラスという、いかにもな格好の男が、この男なりに優しい声で言った。
「あるお方？」
子供が聞いたら泣くだろうなぁと思いながら、少女は訊ねる。
「ああ。この辺に、こんな服装の女の子がいるはずだから、問答無用で連れてこいってな」
「……」
うーん。
そんな顔で考え込む少女が、ようやく口を開いたのは、男達に完全に包囲されてからだ。
「ああ。成る程」
“弟”の記憶から、それらしい人物にようやく思い当たった少女は、感心したように言った。
「義理堅いお方」
「わかったかい？」
“弟”が事件に巻き込まれていたのですね？」
「は？」
「その関係者の方？弟がいつもお世話になっております」
「はぁ……どうも」
「でも、私は関係ないですから」
くるっ。
踵を返す少女の足は、宙に浮いていた。
「まぁ待ちなって」
先程の男に襟首を掴まれ、宙に浮かされていたのだ。

「終わったら――俺達が相手してやるからよ」

ちゅどぉぉぉぉぉん！！

「なっ！？」

市内の空気を揺らさんばかりの爆発音に、イーリスは思わず急ブレーキを踏んづけた瞬間、交差点を爆風と一緒にベンツが飛んでいった。

「きゃっ！？」

急ブレーキの衝撃で、助手席のルシフェルの体にシートベルトが食い込む。

「な、何ですか！？」

「わからん！」

シートベルトを外し、イーリスは車から降りた。

「イーリス！」

背後からの声に振り返ると、由忠がいた。

「閣下！」

「バカ息子を捜していた――見つけたぞ」

「あ、あれ！水瀬ですか！？」

「ああ」

由忠は言った。

「こんな所であんな爆発騒ぎ引き起こすバカはあいつだけだ。ルシフェル、遥香！」

「はいっ！」

「はい？」

「先に行け！あいつは間違いなく逃げる！」

「逃げるって……どこへ？」

「知るか！とにかく、あいつのことだ。右へ右へ逃げるはずだ！上

空から確認しろ」
「わかりました。ルシフェちゃん？行きますよ？」
「はいっ！」
遥香とルシフェルが空を飛んだ。
「イーリス」
「はい？」
「車をどこかに動かす」
「とはいえ」
交差点のど真ん中には炎上するベンツの残骸がある。
「どうするんです？」
「Uターンしてホテルの駐車場に止める。往来を止めるわけにもいくまい」
「はい」
車で来たことを後悔しつつ、イーリスは自分の車のドアを開けた。

某ホテルの一室。

「わざわざのご訪問、痛み入ります」
ドアに向かって丁重に腰を折るのは背広姿の男――グリムだ。
「こちらこそ、丁重なご挨拶、痛み入ります」
そう言って頭を下げたのは、先程の少女なのだが――
「ははっ……そのようなゴミをお持ちになってのご訪問とは」
「これは失礼いたしました」
少女は手に掴むモノを一瞥した。
それは、人間の焼けこげた頭部。
顔だけ見ると、先程の五分刈り男だとわかる。
一部が炭化していたソレを、少女は軽く持ち上げた。
「これの脳みそから、ここまでの情報を引き出しておりましたので」

バンッ！
フラッシュをまとめて焚いたような閃光が瞬いたか思った次の瞬間、死体は、少女の手から消え去っていた。
「お見苦しいモノを」
「ふふっ……何」
グリムは席を指し示しながら言った。
「あのテの人間はいくらでも組織出来ますから」
「あら？人間（ダニ）を飼い慣らしておいでなの？」
少女は、勧められるままに席に着いた。
「ははっ……悠理君でしたっけ？彼に比べても残酷さが増しているご様子」
「“アレ”と一緒にしないで下さい！！」
少女は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「私はアレほどいい加減ではありませんっ！“アレ”のおかげで私がどんなに辛い思いをしているかわかっているんですか！」
「しかし」
グリムは冷たい目で、少女の左手を見た。
「先程、その愛らしい手で何を掴んでました？かの少年なら、そこまではやらなかったでしょう」
「そ……それは」
少女は言葉を詰まらせた。
“痛いところを突かれた”と顔に書いてある。
「ち……ちょっとした間違いです」
「間違い？」
グリムは呆れた。という顔だ。
「どこをどうすれば、人が首だけになるというのです？」
「で、ですから」
手をモジモジさせる少女の愛らしい姿を好ましく思いつつも、グリムはどこかで警戒を解けずにいた。
「“弟”に比べて、“私”は力のセーブが苦手なのです」

「力加減がわからず、どうあってもああなってしまう。そういうのですか？」
「そ、その通りです……」
そう答える顔はもう泣きそうだ。
「ちょっと驚かせるつもりで魔法攻撃をかけてみたら、相手がバラバラになってしまった？」
「相手が脆すぎるんですよぉ……」
「あなたが非道すぎるの間違いでは？」
「ううっ……私、逮捕されちゃいます？」
「さぁ？私は人間の官憲ではないので」
「えっえっ……」
「ああ。泣かないでくださいな」
席を立ったグリムはハンカチで少女の涙を拭いながら言った。
「だって……だって……」
「はいはい。お鼻を拭いて――はい。ちーん」
「ちーん」
「良くできました……本来なら、あの子に来て欲しかったのですが」
「大丈夫です」
少女は言った。
「記憶のリンクは完了していますから」
「言われる方は不安なのですが……まぁ、いいでしょう」
グリムは席に戻った。
「わざわざ来ていただいたのは、このためです」
パチッ
グリムが指を鳴らす。
すると、どこからか黒いマントを纏う性別のわからぬ者が音もなく現れた。
「……どうしたのです？」
一生懸命、指をこする少女の姿を見たグリムが首を傾げた。
「いえ」

そう言いながらも、少女は指をこするのを止めない。
「どうやったら、さっきみたいな音が出るんだろうって」
「ははっ……そういう問題は後にしましょう。問題は、この子のことです」
「？」
よく見ると、黒いマントの男は、何かを抱きかかえている。
人間の少女だ。
よく眠っているらしく、ぴくりとも動かない。
「えっと……？」
相手が誰かわからない様子で少女は小首を傾げた。
「わかりません？水瀬悠理にとっては大切な存在なのですが」
「瀬戸綾乃……ですね」
それでようやくわかったのは、グリムの目にも明らかだ。
グリムの口から失望のため息がこぼれた。
「……やはり、あの子に来て欲しかったですね」
「どうしてです？」
少しだけ、むっとした顔の少女が咎めるように口を尖らせた。
「私だって」
「いえ――もっと驚いてくれるかなって」
「“記憶”は引き継いでいます」
少女は席を立ち、眠る綾乃の元に近づく。
ポウッ。
不意に少女の手が輝きを帯び、綾乃の額に伸ばされた。
「……生命反応に異常はなし……霊魂も安定……さすがですね」
「お褒めにあずかり恐縮です」
「ただ――」
少女はグリムに振り返っていった。
「どうやって落とし前をつけるのです？」
「落とし前？」
“弟”はあなたの命を狙っています。そりゃあもう、ギッタンギ

ッタンにしてやるって」
「ははっ……私、そんなに恨み買ってました？」
グリムの背中を冷たい汗が流れた。

「ええ。それはもう」
少女はニコリと微笑みながら答えた。
「ほら。日菜子って女の子を殺したでしょう？アレでもう理性の糸が切れてるんですよ。ですから、お聞かせできないくらいの勢いで」
「ははっ……」
青くなったグリムは言った。
「よく、取りなしておいて下さると、大変有難いのですが」
「ふふっ」
少女は笑っていった。
「無理です」
「ははっ……」
「百回殺した程度では済まないでしょうね。――もっとも、あの人を巻き込んでないからまだ手は緩めるでしょうけど」
「あの人？……ああ、あの教師ですか？」
「あの女神様は――指一本触れることすら許しません」
その眼光に気圧されたように、グリムは何度も頷いて言った。
「はっはい！絶対に！」
「よろしい」
ぺろり。とイタズラっぽく舌を出す。
「それで、綾乃さんの件ですが」
「魂の安定化には成功しました」
グリムは、どこか震える声で言った。
「これで当面は安全です。ティアナ様からもお墨付きを」
「よろしい。ご苦労様でした」
「あの子との約束の件は、別な方法を考えますよ？」
「やむを得ません」

綾乃を受け取りつつ、少女は言った。
「お手柔らかに」
グリムがそれを受けて口を開こうとした次の瞬間――――。

ドンッ！

「！？」
「！」

部屋の壁が吹き飛び、何かが飛び込んできた。
とっさに展開された二人の魔法防御ですら無視して二人めがけて何かを振り下ろす。
左右に分かれたと思ったが、

バンッ！

今度はドアが吹き飛ばされ、室内に煙が充満する。
催涙ガスだ。

「なっ！？」
「これ、誰が弁償するんです！？」
グリムはヘンな意味で悲鳴をあげた。
「わ、私ですか！？」
「動くなバカ息子！」
綾乃を抱きかかえる少女の首筋に、冷たい刃が左右から突きつけられる。
その声に、イヤでも聞き覚えがある少女は、思わず動きを止めた。
「へっ？」
「水瀬君っ！？」
「る……ルシフェル……さん？」

煙の中で見た左右。
そこに立つのは、父由忠と姉ルシフェルだ。

煙ではっきりとした姿は見えないが、グリムは二人を相手に戦闘中。
一人は動きでイーリスとわかるが……。
もう一人がわからない。

「このバカ者がっ！」
ガンッ！
よく見ようと、目を凝らした少女の後頭部に拳が振り下ろされ、たまらず少女は悲鳴を上げた。
「痛いっ！」
「この――」
「待ってください！」
もう一撃を喰らわせようとした由忠の手を止めたのは、ルシフェルだ。
「……あなた……まさか」
驚いた。という顔でマジマジと少女の顔を見つめたルシフェルが、信じられない。という顔で訊ねた。
「あなた……水瀬君じゃ……ないね？」
コクンッ。
涙目で少女は頷いた。

「くっ！逃げられたっ！」
その叫びが、少女の口を開くのを一瞬、遅らせた。
「く……栗須殿？」
イーリスが、その声に動きを止めた。
煙の向こうから現れたのはまごうことなきメイド服。
手にはモップ。

殺気立ってはいるが、間違いない。
「……ご無沙汰です。イーリス様」
それは……栗須明奈だった。
「ど……どうして」
「春菜殿下が襲われました」
「それで……仇を打つと？」
「……はい」
栗須はモップをしまいつつ、言った。
「殿下の玉体に傷を負わせた罪は万死に値します。その大罪は、敵の血によってのみ贖われますから」

「見ろっ！」
由忠が少女の胸ぐらを掴んで怒鳴った。
「メイドですらあの覚悟だ！俺がイーリスをこのホテルに連れ込まなかったらどうなっていたかわかっているのか、貴様は！」
「論点が違いますっ！」
止めたのはルシフェルだ。
ルシフェルは叫ぶ。
「自慢できないことです！っていうか、あなた、水瀬悠理君じゃないでしょう！？」
「はっ……はい」
「何？」
由忠はマジマジと頷いた少女の顔を見つめた。
まごうことなき息子の顔。
だが、その雰囲気は間違いなく……別人だ。
その別人に、由忠は心当たりがあった。
「貴様……まさか」
胸ぐらを掴む手の力が緩む。
「お久しぶりです。御父様」
間違いない。

「……あっ……ああ」
しまった。という顔の由忠はバツが悪そうに視線をそらせた。
そして、
悲しそうな目で、少女は名乗った。
「私……水瀬（みなせ）・悠菜（ゆうな）です」

第三十一話

「事情は聞いたけど」
ルシフェルが、これ以上ない。という程げんなりとした顔で言った。
「予想外の“転化”が起きた。そういうことだね？――水瀬君」
「ムッ……悠菜ですっ！」
少女がルシフェルにムキになって怒鳴る。
「友達の顔も忘れたんですか！？」
「ああ。そうだったな」
由忠は優しく頭を撫でるだけ。
「お前は水瀬悠菜……女の子だ」
「そうです！」
背景でエッヘンッ！という言葉が浮かぶ中、少女こと、水瀬悠菜はその平べったい胸を反らせた。
「あのぉ……」
それを少しだけ離れた所で見ていたイーリスが、遥香に訊ねた。
「本当に、性別の転化なんてあり得るんですか？」
イーリスは、それが信じられない。
生まれてきた生命体の性別が定期的に変わる。
そう説明されて、納得のいく者などいるはずがない。
対する遥香はそっと自分の子供を指さした。
（実例が存在するじゃありませんか）
その指は、そう語っていた。
「……」
イーリスは、反論する気にもならず、ため息と一緒に肩を落とす。
「イーリスさん」
遥香は言った。
「先程の説明、小さい頃の魔法実験の後遺症――それでは納得い

きません？」
「それはそれで、かなり無理矢理だと」
「そうですか」
今度は遥香が落胆する番だ。
「――せっかく、いい言い訳を思いついたと思っていましたのに」
「ほらぁ！」
イーリスはたまらず言った。
「言い訳なんですよね？でなければ、性別どころか人格まで変わるなんてこと！」
「それでも、あの子は存在しています」
由忠に甘える娘（？）の姿をほほえましく思いつつ、遥香は微笑む。
「それだけが大切なのです」
遥香の近衛での立場を思い出し、イーリスは固い顔のまま頷き、
「――わかりました。早急に、そういえるよう、認識を改めます」
そうとだけ言った。
「はい♪」

「御父様？」
いつの間にか、由忠の膝の上に乗った悠菜が猫なで声で言った。
「あのね？」
「ん？何か欲しいものでもあるのか？」
対する由忠は負け時と猫なで声だ。
「お父さんは、お前の欲しいものなら、何だって買ってやるぞ？」

“危ねぇなぁ”
周囲のそんな視線に気づかないのか、親子の危険な団らんは続く。

「悠理ったらね？」
「ん？あのバカがどうした？」

「転化が始まるっていうのに、何の準備もしてくれなかったのよ？」
「むぅ。それはいかん」
由忠は、目元だけ緩めたしかめっ面で言った。
「後でたっぷり地獄を味わわせないとな」
「そう！」
悠菜は「我が意を得たり」といわんばかりのしたり顔で頷いた。
「私のお洋服だって用意してくれてないし！」
「ふむ……それは大事だ」
娘の服装は、男物な上にあちこちが汚れている。
特に、袖は先程生首を掴んだせいでドス黒く染まっていて汚らしい。
娘の服が血で汚れていたら、ちょっとはそっちで驚けとは思うが、町中を歩くチンピラを“試し切り用骨付き肉”といってはばからない由忠は、この範疇にはいなかった。
「いかん。明日になったらすぐに服を買いに行こう」
由忠にとって、問題は娘の服の汚れでしかないのだ。

「はぁい！」
嬉しそうに抱きつく娘を抱き返す由忠の目は緩みきっている。
「はいはい。そこまで」
そう言って突っ込んだのは遥香だ。
「それで？どうするんですか？」
「何が」
「樟葉ちゃん達に、悠君の所在について、どうやって説明するか。そう聞いたのです」
「そんなもの放っておけ」
由忠はそっぽを向きながら言った。
「カワイイ娘はここにいる。あのバカ息子なんざ知らん」

「あなた！」
遥香は悠菜を夫から奪い取り、怒鳴った。
「悠菜で遊ぶのは母親の特権です！」
「娘に甘えられるのは父親の醍醐味だ！」
「エリス達がいるでしょう！？」
「それはお互い様だ！」
「あのぉ……」
険悪になっていく夫婦の間に入ったのは、もう一人の二人の娘、ルシフェルだ。
「どちらにしても、悠菜ちゃんのことはともかく、水瀬君を確保したことだけは、司令部に報告しないと、そのうち、大変なことに」
「？」

コンコン
「失礼いたします」
一礼の後、室内に入ってきたのは栗須だ。
「綾乃様のお召し替えが終わりました」
「ご苦労――栗須中佐」
「はい？」
「綾乃ちゃんの容態は？」
「よくお眠りです」
「そうか……」
「それでは私はこれにて」
一礼の後、部屋を出ようとする栗須を呼び止めたのは、悠菜だ。
「えっと……栗須さんでしたっけ？」
「はい？」
「ここを出て、何をしようというのですか？」
「――あの男、グリム・リーパーの首級をあげます」
「なら、ここにいて、私達と行動を共にしたほうがいいですよ？」

悠菜はそう言ってニコリと笑った。
「一番早いのは、私の側にいることです」
「……何故です？」
「第一に、あのグリムという男、あなたは眼中に入っていません」
「私は敵とすら見られていない――そうおっしゃるのですか？」
栗須の厳しい眼光すらどうとも思わないのか、悠菜は平然と答えた。
「その通りです」
「侮辱です！」
「――でも、それが事実です」
悠菜は平静さを崩さない。
「狙いはもっと別な場所。そして戦いの場は、向こうがお膳立てしてくれますよ」
目の前の少女の真意がわからず、栗須は次の言葉を待った。
「そういう約束なのです」
「敵との約束事？それを信じろと？」
「義理堅い性格なんですよ。彼」
悠菜は言う。
「瀬戸綾乃の魂を保全するため、高貴な血――純潔の皇女の血をわざわざ手にするため、危険を顧みず、敵地に侵入するほど」
「っ！！」
主君が襲われた理由。
それが、先程まで身の回りの世話をしていた娘のせいだと知った栗須は、背後のドアを睨み付けると、そのまま駆け出そうとした。
「まだ話は終わっていません」
ガンッ！
何故かドアが開かない。
「行かせてください！」
ドアのノブを握りしめながら、栗須は怒鳴った。
「あの子のせいで、殿下の玉体に傷が！」
「えっと、そういう言い方、別な意味に聞こえるんですけど……」

何故か、悠菜は赤面しながら、由忠の顔をうかがうように言った。
「私……おませさん？」
「ふふっ……可愛いぞ。悠菜」
「御父様ったら」
「とにかく！」
栗須はモップを抜きはなった。
「敵にきっかけを作っただけでも万死に値します！」
「もし、それを瀬戸綾乃の脳天に振り下ろしたら、別ルートで皇室は断絶する程度じゃすまないですよ？」
悠菜の声は冷たい。
「なっ！？」
「世の中、そういう風に出来ているんです――考えてみてください。栗須さん」
悠菜は言った。
「獄族がたかが人間（ダニ）の子一匹助けるために危険を冒す？そんな天地がひっくり返ってもあり得ないことがどうして起きているか？それを考えれば済むことです」
「ひ、人をダニって――！」
栗須は信じられないモノを見るような目で悠菜を見た。
「獄族にとって、人の命なんてその程度の価値しかありません」
悠菜はニベもない。
「奥は深いんですよ？この件」
「……」
「……」
睨み合いに近い状態で時間だけが過ぎる。
「……わかりました」
そう言ってモップを下げたのは栗須だ。
「ですが」
「条件があれば何なりと」
「聞いてくれます？」

「聞くだけなら」
「……敵の首級は、私にあげさせてください」
「あぁ。そんなことですか」
悠菜は笑って言った。
「ご随意に」

第三十一話（後書き）

人気投票継続中です！下記ＵＲＬからご参加下さい！

ｈｔｔｐ：／／ｖｏｔｅ２．ｚｉｙｕ．ｎｅｔ／ｈｔｍｌ／ａｙａｎｏ０１．ｈｔｍｌ

第三十二話

水瀬悠菜の登場。
栗須明奈の暴走。
混乱の度合いを深める中、唯一の救いは瀬戸綾乃の解放だけ。
ところが、それすら救いとはほど遠いことを、関係者は思い知らされることになる。

高級ホテルの面目躍如といわんばかりの豪華な内装が飾り立てる空間にたたずむ、クイーンサイズのベッドの上に眠る少女。

（まるで眠り姫だな）

眠る綾乃を見たイーリスは、子供時分に聞いた昔話を思い出した。

「お姫様は王子様の口づけで目を覚まし……幸せに暮らしました。だったか？」

もう、話のあらすじしか覚えていない。
王子様に救われるお姫様。それが憧れ。
いつの日か、私にも王子様が来てくれると、本気で信じていた頃の記憶。
それをこんな時に思い出すとは、どういう皮肉だろうか。
イーリスは口元を歪ませて自嘲した。

「王子様なんて……」

「はい？」

何事かと自分の顔をのぞき見るのは、悠菜。いや、水瀬の顔。
眠り姫は目の前で眠り続けているというのに、お姫様は待ち続けているというのに、肝心の王子様ときたら……。

「このヘタレ」
ポツリとでも呟かずにはいられない。
「さっきから何ブツブツ言ってるんですか？」
イーリスに襟首を掴まれた悠菜は、綾乃の眠る別室へ連れてこられた。
事情も何もわかりはしない。
「いいから。言うことを聞け」
とだけ言われても納得のしようがない。
「唐突にそう言われても」
悠菜は困惑する顔でイーリスを見た。
「どうして、私が弟のマネをして、この子を起こさなければならないのですか？」
「それが、不肖の弟を持つ姉の義務だ」
「……いろいろ、痛い言葉ですね」
「わかったらやってもらおう」
イーリスは真剣な眼差しで悠菜と、ベッドで眠る綾乃を見比べた。
「お前の弟がこの子の人生を、これ以上狂わせないためにも」

この女の子――瀬戸綾乃という名。は、弟のせいで誘拐された。
しかも、記憶をいじられている可能性が高い。
それを、弟のフリをして確認しろ。
そう、言われた。
理不尽だ。と、悠菜は思う。

全ては、弟のせいだ。

そんなことないはずだ。
悠菜はそう思う。
弟がどんなバカでも、たかが人間だ。

私達の血を考えれば、単なる虫けら同然ではないか。
そうではないのか？

弟はそれを強く否定しようと“教え込まれ”、“実践”しようとしていた。
どんなに失敗しても、どんなに苦しくて痛い思いをしても、それでも弟は粗め用途はしなかった。

悠菜は知っている。

弟は、人間になりたかったのだ。

それが、悠菜には許せない。
そのせいで、弟はあれほど情けなく、弱い存在に成り果てたのだ。
高貴な血を引く私達が、どうして人間風情に命令され、それに従わなければならない？
なぜ、最強の私達が、最弱の人間に成り下がらねばならない？
ふざけている。
それが、悠菜にはガマンできない。

「虫けらにこき使われるのがガマンできない――そういう顔だな」
心を読んだように、イーリスが言った。
「思い上がるなよ？貴様に出来ることは限られている――虫けらはお前だ」
「なっ！？」
きっ。と睨み付ける悠菜の眼光は鋭い。だが、それにイーリスは全く動じない。
「殺すか？私を」
「お望みなら」
「それで気が済んでも……お前は人一人……虫けら一人救えない。

その程度の存在であることに、何もかわりはない」
「死が、怖くないんですか？」
「怖い」イーリスはきっぱりと言った。
「自分が消えてなくなることを怖がらない者など存在しない」
「私は怖くありません」見下した様な口調で悠菜は言った。
「死んだら終わり。それだけですから」
「達観しているんだな」
「当然」つんっとそっぽを向く悠菜。
「私は自らに誇りを持っていますから」
「だから、お前は虫けらだと言ったんだ」
「意味がわかりません！」
悠菜はイーリスにくってかかった。
「……悪意は感じますけど」
「虫けらが、死を恐れると思うか？」
「はい？」
悠菜は、その唐突な質問に面食らった顔をした。
「光に引き寄せられる蛾、死肉に群がる蝿……そこにどんな危険があっても、彼らが死を恐れると思うか？」
「……虫けらにそんな感情があると本気で思っているんですか？」
「だが、人間はそれが出来る。死を恐れる……人間が虫けらではない証拠だ」
「人間も所詮虫けらと同格……より広い、究極的な視点に立てばそうなります」
悠菜の声は、どことなくつまり気味だ。
「神の視点に立てば？ならお前だってそうなる」
「違う！」
悠菜は怒鳴った。
「私の体に流れる血は！」
「ああ。何の取り柄もないヤツは、大抵そういう。ロクな実力も、まして実績なんてカスほどもないヤツは特に、だ」

イーリスは挑発するような態度でその抗議を聞き流した。
「自分に何も出来ないから、せめてとばかり血を誇る……花の品評会にジャガイモを出展するようなものだ。血に聞け。羞恥心はないのかと」
「――――っ！」
反論できず、唇をかみしめる悠菜に、イーリスは冷たく言い放つ。
「弟の代わりも出来ない程度のゴミが偉そうにほざくな」
「ち、違っ！」
「なら、証明して見せろ。貴様がいう弟――――水瀬悠理より自分の方が、あらゆる面で格上、当然、弟の代役なんて完全にこなしてみせると」
「や、やりますっ！」
顔を真っ赤にした悠菜は力んで言った。
「こ、この私をバカにした落とし前、絶対に！」
「ああ……それは楽しみだ」
イーリスは言った。
「ほら。お姫様のお目覚めだ」

ああ。これは夢だ。
綾乃はなんとなくそれがわかった。
心地よい小鳥の鳴き声と、レースのカーテン越しの穏やかな朝の光が綾乃を起こしてくれる。
目覚めたのは自分の部屋。
使い慣れたベッドに机。
心地よいまでに見慣れた空間。
お気に入りの猫柄のパジャマに身を包む綾乃は、大きく伸びをした。
今日も一日、いいことがありそうだと。綾乃はそう思った。

気が付くと、景色が一変していた。
制服姿で歩いていく先は――
そう。
学校だ。

カバンの中には手作りのお弁当。
いつも“美味しい”と食べてくれる彼のためのとっておきだ。

……え？

綾乃は立ち止まった。

彼って……誰？

教室に景色は移る。

「おはよう」
そう、声をかけてくれるのは桜井美奈子。クラスメート。
大切なお友達。
「おはようございます」
笑顔で返しつつ、綾乃は何度も教室を見回す。
クラスの全員がいるはずなのに、誰かがいない。
「あの……美奈子ちゃん？」
「何？」
「このクラスって、何人でしたっけ？」
「４０人よ？男女あわせて」
「……」
見知った顔ばかり。
それなのに、誰かがいない。

カバンをあけ、お弁当を確認してみる。
確かに二人分。
違うクラスだったか？
違う。
他のクラスで知っているのは、芸能人の子ばかり。
彼は、芸能人じゃない。
「あれぇ？」
背後から声をかけてきたのは、信楽未亜。
「にゃあ？綾乃ちゃん。そのお弁当は誰のため？」
イタズラっぽい、まるでチェシャねこを連想させる顔に、綾乃は戸惑いながら答えようとした。
「え？あの――君の」

え？
誰？
何君？
私、今、誰の名前を言ったの？

「へーっ？」
ちらりと美奈子を見る未亜が、イタズラっぽく言った。
「美奈子ちゃんも、お弁当くらいは」
目の前で美奈子と未亜がじゃれ合うのを見ながら、綾乃は呆然としていた。

私は――。
私は、
私。

「綾乃ちゃん！」
強く揺すられた綾乃は目を覚ました。
見慣れない天井。
自分をのぞき込んでいる顔がある。

「……あ、あれ？」
綾乃は周囲を見回してみた。
自分はベッドの上に寝かされていて、室内の様子から、どうやらホテルの一室らしいことはわかる。
「気がついた？」
「……は、はい」
綾乃は、きょとんとした顔で弟にバケた悠菜を見つめる。
「あの……」
「あのね？えっと……いろいろあったけど、とにかくもう大丈夫だから！」
悠菜はそう言って笑うが、綾乃は笑みすら浮かべない。
ただ、じっ。と、悠菜の顔を見るだけだ。

「……う゛っ」
悠菜は内心で焦った。
まるで心の中を見透かすかの如き視線を外すことが出来ない。
先に視線を外したら負けだ。と、悠菜が自分に言い聞かせているわけではない。
ただ、綾乃の視線を、体がそう受け取っているのだ。

「こら」
コツンッ。
イーリスが後頭部を突いてくれなかったら、悠菜はいつまでもそうしていたろう。
「さっきまでの威勢はどうした」

「か……体が」
「ああ。なんだかんだ言っても、ＤＮＡレベルに刻み込まれたこの子への服従心は抜けなかったと見えるな」
「こ……殺してもいいですか？」
「やれるか？」
「……無理です」
指一本動かない状態が、本当に綾乃によるものか、眠っている弟からの妨害なのか、はたまたイーリスのいう通り、ＤＮＡレベルの恐怖なのか、とにかく、水瀬は負けを認めざるを得なかった。

「イーリスさん」
見知らぬ環境で知人に出会えたことがよほど嬉しかったのか、明るい声で綾乃はイーリスの名を呼んだ。
「おはよう……というには、夜遅いか」
「あの……私」
「ああ。ちょっとした事件があってな。気にする必要はない程度のことだ」
「また……何か巻き込まれました？私」
「物好きは多いからな――所で」
イーリスは、一呼吸置いてから言った。
「こいつだが」
イーリスは水瀬の後頭部を小突きながら言った。
「知り合いか？」
「えっ……？」

じっ。と悠菜の顔を見つめる綾乃は、口を開いた。

水瀬悠菜。
名はそうなっている。
だが、外見は水瀬悠理と全く同じ。

瀬戸綾乃にとって、寸分違わぬ、最愛の存在のはず。

それなのに――――

「あの、イーリスさん？」

「ん？」

先程の水瀬ではないが、次のアクションがなければ、自分までもが凍り付いていたことだろう。

瀬戸綾乃のことは、あの「倉橋事件」に関わった者として知っている。

あの事件で、魂を失いかけていることも、実感こそわかないものの、朧気ながらに受け入れていた。

水瀬悠理が彼女を助けようと、事件以来動いていたのも知っている。

全てが空振りに終わったことも含めて……。

その彼にもたらされた一筋の光明。

それが、あの獄族。

水瀬悠理は代償と引き替えに、瀬戸綾乃を救った。

それはわかる。

わかるが……。

瀬戸綾乃にこう聞いてみればいい。

最愛の人は誰ですか？

きっと、彼女ははにかみながら一人の男の子の名を口にするだろう。

それが、目の前の少年（今は少女だが、どうでもいい）。
互いに愛し合っていたことはイーリスも認める。
いずれ式で祝福してやろうと、内心で思っていた。
その二人の関係が……今は違う。

瀬戸綾乃は、不思議そうな顔でイーリスに訊ねた。

「イーリスさん。あの……」

「ん？」

水瀬君でもいい。悠理君でもいい。
何でもいい。
この子の名前を。
最愛の存在の名前を。
その口から聞かせて欲しい。
無意識にロザリオを握りしめ、イーリスは内心で祈りながら、次の言葉を待った。

希望。
それは危く儚い。
イーリスは改めてそれを痛感させられた。

綾乃はいった。

「……この子、誰でしたっけ」

代償が支払われた。

瀬戸綾乃は、水瀬悠理の名を、その記憶から失っていた。

第三十三話

最愛の人を忘れる。
イーリスは、それは苦痛だと、ずっと思っていた。
愛する気持ちを自ら否定する。それは、自己否定に他ならないから。
そう、思っていた。

「ふふっ。そうなんですね」
水瀬悠理（みなせ・ゆうり）
高校生で、瀬戸さんが芸能活動中に転校してきた。
悠菜は、自分をそう説明した。
綾乃はそれを信じているし、悠菜はそれで通そうとしている。

「ええ。前までは――――」
ルームサービスを呼び、紅茶の入ったティーカップを手に、ソファーに向かい合わせに座る二人は会話を続ける。

かつて、どんな他愛ない事でも楽しげに話していた二人とは、どこかかけ離れた光景が、イーリスの目の前にあった。

それを、イーリスは見るのが辛かった。

辛い？なら、水瀬はどうだ？と、イーリスは自問した。
今の人格が水瀬悠菜だとしても、記憶は水瀬悠理と共有している。
なら、水瀬悠理がどれほど彼女を大切に思い、そして、どれほどの思いで彼女を守り抜いたか、悠菜だってわかっているはずだ。
水瀬が自分より辛くないとでもいうつもりか？
否。

断じて否だ。
……。
だめだ。
イーリスは二人から視線を外した。
耳を塞ぎ、そのまま部屋から出てきたい衝動を抑えるのがやっとだ。
ここに水瀬を連れ込んだのは自分である以上、経緯を見守る義務がある。
イーリスは、自分にそう言い聞かせて、ぼやけかけた視線を二人に向けた。

二人の間で交わされるのは、本当に社交辞令じみた会話。
芸能界のこと。
学校のこと。
勉強のこと。
……。
すべてがどこか他人じみている。
全てが上辺だけの会話だ。

綾乃が会話の相手を、男性として見ていないことが致命的だ。
しかも、悠菜も水瀬同様、他人との会話は苦手らしいことは明らかだ。
会話が幾度もとぎれ、その度に助け船を綾乃が出す。
そんな会話がいつまでも続くはずはない。
瀬戸綾乃は、芸能界以外のクラスメートと会話するのが嬉しいだけ。
ただ、それだけなのだから。

飾りだと思っていた柱時計が時を告げた。

「あっ。もうこんな時間」
そう言って腰を上げたのは悠菜だ。
「あら？もう少し」
そう言って止める綾乃に、悠菜は言った。
「夜更かしはお肌の大敵ですよ？この部屋については大丈夫。イーリスさんが責任もって面倒みてくれる。明日の朝、タクシーを呼ぶから」
「ありがとう」
不思議と小走りにドアに向かう悠菜に、それを追うイーリスを、綾乃は席を立って送り出す。
「お休みなさい」
そう言って送り出す綾乃の笑顔が、ドアの向こうに消えた。

「おい、水瀬」
悠菜は小走りに歩き続ける。
「待て」
肩を掴まれても、それでも歩こうとするのを止めない。
強引に肩を引っ張ったイーリスは、悠菜の顔を見て絶句した。

先程まで、人間を虫けら呼ばわりしていた少女の顔はどこにもない。

あるのは、痛々しいまでにぼろぼろに泣く少女の顔だけだ。

「――水瀬」
「グスッ……痛いよぉ」
悠菜はその場にへたりこむと、膝の間に顔を埋めた。
「痛い……痛いよぉ……」
「お前……何を泣いて……？」

イーリスは膝を曲げて悠菜の横にしゃがみ、その顔を見ようとした。
そのイーリスに、水瀬は言った。
「痛いんだよぉ……」
「何が？」
「心が……心が痛いよぉ……」
「心？」
「“弟”が……悠理が泣いてるよぉ……」
「……」
泣きじゃくる悠菜は苦しそうに顔をしかめる。
「綾乃って娘が、自分のこと忘れたからって……あの子が泣いてるんだ。それが、痛いんだよぉ」
「お前……」
そっ。とイーリスは悠菜を抱きしめた。水瀬の涙が、悲しみとしてその服越しに伝わってくる。
「……何するの？」
悠菜は未だに自分に心を開いていない。むしろ警戒している。
イーリスは悲しくなるくらい、それがわかった。
だが、イーリスとて迷える者を導くシスターだ。
神に仕える身としての義務を、イーリスは決して忘れはしない。
まして、どんなに情けなくても、自らの弟のように思えてならないこのバカ息子が相手だ。
イーリスは悠菜の耳元で囁くように諭した。
「泣きたければ泣け――泣きたいのは、水瀬じゃなくて、お前なんだろう？」
「だから泣いているの。それくらいもわかんないの！？」
“弟”が悲しんでいる。
それは真実だろう。
だが、それは同時に方便でもあったのだ。
一番に泣きたいのは誰か？

手を挙げるべきは――。

「ああ。わからんな」

「それでよくシスターなんて！」

「お前はすぐバレるようなウソを突き通そうとしている。水瀬のご同類だな」

「ウソなんてついてない！」

イーリスの胸の中で悠菜が怒鳴った。

「心が痛いのは本当だもん！痛いもん！私は……ウソ……なんて」

悠菜の感情が限界を迎えようとしている。

「私が言っているのは、悲しんでいるのが水瀬一人だといっていることだ」

イーリスは優しい声で訊ねた。

「お前も、瀬戸綾乃が好きだったんだろう？」

「違う……」

「“弟”の恋人として、“弟”以上に大切に思っていた――姉として。違うか？」

「違う！」

「違いはしない。違うと思っているだけだ」

キュッ。

イーリスは悠菜を抱きしめる腕に力をこめた。

「ちが……」

小刻みに震える細い体。

抱きしめた腕に感じる涙。

それが、答えだ。

「今は泣いておけ……失われたのは記憶だ。命じゃない。これから、ゆっくりと作り直していけばいい。違うか？」

「……」

悠菜は小さく頷いた後に言った。
「離して」
「ダメだ。離すとお前はすぐにうそをつく」
「息が出来ない」
「窒息するまで泣いていい」
「自分が巨乳だからって、私にケンカ売っているの？今の私は女の子だよ？」
「ケンカを売っているのは私ではない。離してほしければ本音を言え」
「……本音？」
「私はシスターだ。この廊下を懺悔室だと思って本音を言え。他言無用秘密厳守。口止め料は良心的価格が私のモットーだ」
「それ……シスターの言葉じゃない」
それでも、イーリスに抱きしめられたことが、悠菜には救いだったのかも知れない。
口がモゴモゴと動いた。
声にならないその口の動き。それを服越しに感じたイーリスは、悠菜が「ありがとう」といったように感じた。
イーリスの胸から顔を離した悠菜は、ポツリと言った。
「……“弟”が日菜子って娘に心を移しても、私は綾乃ちゃんが好き。祷子さんよりかなり落ちるけど……それでも綾乃ちゃんはやっぱり好きなんだ！悠理は、本当の綾乃ちゃんを知って、綾乃ちゃんを守るために距離をとるって言って、その心まで日菜子に移しちゃったけど、私の心は変わっていない！」
そう。それが悠菜の本音。
私は綾乃ちゃんが好き！
イーリスに抱きしめられたことで、卵の雛ではないが、凍っていた悠菜の本音が溶けたのかもしれない。
「その子から記憶を奪って……もう、許さない」
そう言って立ち上がった悠菜の顔は、怒りと憎悪に満ちあふれて

いた。
「み、水瀬……」
それは、イーリスが恐怖した程の怒りだった。
その怒りを纏いながら、悠菜は叫んだ。
「私を……悠理をここまで苦しめてくれたあの獄族！全部、全部！全部！四界から消し去ってやる！！」

第三十四話

「あれぇ？」

せっかく見舞いに来たというのに、肝心の入院患者がどこかに行ってしまうという、前代未聞の経験をした萌子は、結局、広い病院内を探し回るハメになっていた。

腰まで伸びた長い髪、人形のような顔立ち。

すべてにおいて芸能人顔負けの美貌を誇る萌子を、すれ違う患者や病院関係者は必ず振り返ってしげしげとその後ろ姿を見つめていく。

「もうっ。琥珀ちゃんったら……どこ行ったのかしら？」

花束を手に、消毒液の匂いがする病院の廊下を歩く萌子は、

「病院って、いたくないんだけどなぁ……」

そう、心細げにぼやくと、大きな角を曲がった。

その先にあるのは、細く、薄暗い通路。

廊下には段ボールが山積みされており、当然、人通りはない。

つまり、どう考えても入院患者に用があるところではない。

ここも外れだ。

今度、外科手術でＧＰＳでも琥珀ちゃんの体内に埋め込んであげようか。

「あれっ？」

そんなことを考えていた萌子の脚が止まった。
段ボールの影に隠れるようにして、何かが動いたのが、見えたからだ。

ぴょこっ。

そんな効果音が聞こえてきそうにして、段ボールの影から突き出されたのは――。

リボンでまとめられたツインテールの髪。
そして、特徴ある牛柄のパジャマ。
総じて、物陰に隠れながら何かをしている入院患者の女の子。

萌子は、それが誰か、当然ながら知っている。
「……いた」
あきれ顔でそう呟いた萌子は、気配を殺しながらそっと女の子に近づいた。

よほど熱中しているのか、女の子は背後に近づく萌子に気づく気配はない。
ドアの隣でじっとしているだけ。
「……」
萌子は意を決して女の子の口元を押さえた。
「捕まえた！」
「ひっ！？」
まるで弾かれたように立ち上がろうとする女の子を、萌子は何とか押さえつけることに成功した。
「ほらぁ。そんなに驚くと、心臓に悪いよ？」
「……ぷはっ。も、萌子ちゃん？」

よほどびっくりしたんだろう、振り向いた女の子の顔は真っ赤になっていた。
「ふふっ。病室に行ったら、もぬけの殻なんだもん。探しちゃった」
「あっ。あははっ……ごめんなさい」
そういって愛らしい仕草で両手をあわせる女の子が、申し訳なさそうに言った。
「ごめんなさい。今日、来てくれるのは知っていたけどね？ついつい、退屈で」
「ふふっ。それなら、早く退院できるわよ」
「……うん」
寂しそうな笑みを浮かべ、俯いた女の子は、思い出したように言った。
「そうだ！」
ぐいっ。
女の子は、萌子の腕を掴んだ。
「ね？こういうの、興味ない？」
「こういうの？」
萌子には興奮気味に囁く女の子の意図がわからない。
周囲にあるのは、殺風景な景色だけ。せいぜい、すぐ目の前にドアがあるだけ。
何も関心を抱くものなんて存在しない。
「？」
小首を傾げる萌子の前で、女の子はそっと目の前の壁を触った。
「ドアだとすぐ感づかれちゃいますけど、ここの壁、薄いんですよ？」
萌子は、壁に耳を押し当てた。
ま……まさかこれ！

壁越しに聞こえる声。
女の子が何を聞いていたのか、それでわかってしまった。

それは、男女のアの声。
アの音。

女の子は、萌子の隣で興奮気味に壁に耳を押しつけている。

萌子は驚愕を通り越して混乱した。

こ……こんなの……だって、だってここ、病院よ！？

信じられない！

そう思う萌子は、いまだ中学生だ。
そう言ってしまうのは簡単だ。
だが、もう中学生でもあるのだ。
この方面の知識だって、放っていも入ってくる。
しかも、決して願わしいことではないが、いろんな意味でダメダメなオトコのせいで、この方面に関しては、中学生としては知りすぎるくらい体が知っている。
……。
経験として体が知っている。
知識として頭が知っている。
それでも、

感情としてこの状況を受け入れることが出来るか？

そう、聞かれれば、答えは否。

肝心の萌子の情緒は、未だ夢見る年頃の少女のそれなままなのだ。

「す……すごいでしょう？」

赤面しても壁から耳を離すことが出来ない萌子の耳元で、そっと女の子がうわずった声でささやいた。

「さっき、見慣れない男女が入っていったから、何だろうと思ってついてきたら」

「……」

萌子は生唾を飲み込むと、黙って頷いた。

壁の向こうは多分部屋がある。

そこで繰り広げられる男女の睦み合い。

よほど男性が上手いのか、女性は狂ったような甘美な声をあげている。

もう……ダメ。

耐えかねたように、震える手を太股に伸ばす萌子。

隣には友達がいる。

どこで、誰が見ているかわからない。

それでも、体に灯された火は消しようがない。

聞くだけ聞いて、トイレに駆け込むことを心に決めた萌子だったが、

「！？」

その手を女の子に掴まれた。

「こ、琥珀ちゃん？」

「こっち！」

琥珀（こはく）と呼ばれた女の子は、入院患者とは思えないほどの力で萌子の腕を掴み、廊下を走り出した。

廊下の角。
先程いた場所からは死角になる所まで来た萌子は、友達の突然の行動に驚きを隠せなかった。
「ど、どうしたの？」
ハァ……ハァ……。
萌子は、壁にもたれかかり、胸を押さえながら荒々しく息をする琥珀の様子に青くなる。
相手は心臓病の患者だ。
その患者が胸を押さえて苦しんでいる。
「せ、先生、呼んでくる！」
「い、いい。……だ、大丈夫です」
胸を苦しげに押さえた琥珀は、走り出そうとした萌子に、無理矢理微笑んでみせた。
「き、急に走った……から……です」
「……」
心配そうに見つめる萌子の前で、何とか呼吸を整えた琥珀は言った。
「人が来ました」
「人？」
萌子はホッと胸をなで下ろした。
こんな姿を人に見られたらもう町中を歩けない。
「こっちから逃げましょう」
琥珀に手を引かれながら、萌子は歩き出したが、
「ち、ちょっと待って」
萌子は琥珀を止めた。
「はい？」
不思議そうな顔をする琥珀に、萌子は申し訳なさそうに、
「と、トイレ行かせて？」
「ああ。そこの角に一つあります」
琥珀は廊下の角指さした。

「人は滅多に来ませんけど、あんまり大声あげない方がいいですよ？」
「何すると思ってるの！？」
「（自主規制）に決まっているじゃないですかぁ」
「こらぁっ！」
「下着、濡れてるせいですか？歩き方がヘンですよ？」
「――っ！と、友達やめようかな！？」
「ああっ！そんなぁ！」
泣きそうな顔をした琥珀が萌子にすがりついた。
「そんなこと言わないで下さぁい！」
「言いたくなったもん！」
「バター犬でも伊集院○の代りでも、なんでもやりますからぁ！」
「い、伊集院？」
「女性用ダッチワイフですぅ……オトナのオモチャはいろいろ準備してますから、それでも」
「も、もういい」
「友達ですよぉ！？」
琥珀のすがるような目に反論を封じられた萌子は、ハンドバックに替えの下着を入れてきた自分の準備のよさに感動しつつ、廊下の角を曲がった――やや小走りに。

「ふうっ――」
壁にもたれかかりつつ、琥珀は萌子を見送り、
「萌子ちゃん、バター犬はわかったんですねぇ……」
ヘンな所で感心した様子で、
「加納萌子――水瀬悠理の妹……ですか」
パジャマのポケットから取り出したのは、ウズラの卵ほどの宝石。
怪しく輝く宝石を見つめながら、琥珀はぼやく。
「あの子と仲良くなったのは、本当に偶然だったのですが」

背後から、
「出てこい由忠ぁ！」
すごい怖い冴子先生の怒鳴り声が聞こえる中、琥珀はポケットへ宝石をしまった。
ニンゲンには見られたくない。
これさえあれば、私はニンゲンの入院患者、“武原琥珀”でいられるんだから。
だから、これを人に見られてはならない。
それが、“あの方”との約束だもの。

でも……。

「あの子を誘拐する手助けしろなんて」

向こうのトラブルは、かなり派手なことになっているらしい。
閣下！とか、あなた！とか、死ねこの変態！とか罵声に混じって、男の悲鳴が聞こえてくる。
見に行ってみたいけど、向こうにいるのは、自分にとってかなり厄介な相手。
だから行けない。
琥珀は、向こうの騒ぎがこっちに来ないことを祈りつつ、トイレに向かってこそこそ動き出した。

トイレの中。

一番奥の個室からは、萌子の艶めかしい声が聞こえてくる。

（あんなこと言って……やっぱりするんだ）
琥珀はポケットの中の石を掴みながら奥の個室の隣に入った。
萌子が気づいた様子はない。

この石のせいかもしれないし、自分の行為に熱中しているせいかもしれないが、琥珀にとっては有難い。

（この子をもらえるなら、私はどんなことでもします）

琥珀は、早鐘のような鼓動を感じつつ、からからに乾いた喉でつばを飲み込んだ。

パジャマのズボンの中に手をやる。

「上手くいけばご褒美だけど……」

それは、琥珀にはかなり難しいように思えてならない。

（まぁ、いいか）

萌子の声にあわせて、琥珀も指を動かし始めた。

体に走る電気のような感覚が脳をとろけさせる。

（萌子ちゃん……好きだよ？）

となりの個室の萌子の姿を想像しながら、琥珀は荒くなる息を何とか堪えようと必死だ。

（私が……私が絶対、幸せにしてあげますからね？）

萌子の声が高くなる。

（萌子ちゃんは……）

萌子とタイミングを合わせようとするように、琥珀の動きも早くなる。

（萌子ちゃんは、これに成功したら私のモノなんですからね？）

甲高い萌子の声。

ガタッと何かが動く音。

それを合図にしたように、高まりきった快楽が、琥珀の中で弾けた。

琥珀は、遠くなる意識の中で、ぼんやりと思った。

（それが、あの方との約束なんですから）

そう。

約束だ。

だから私はここにいる。

萌子こそが私のすべて。

萌子を手に入れるためなら、私は何だってやる。

個室の中で崩れ落ちた琥珀は、自分の体液で濡れきった指をみつめながら、呟いた。

「そうですよね？……グリム様？」

第三十五話（前書き）

今回、かなり長いです。ごめんなさい。

第三十五話

「自業自得」
イーリスは由忠に冷たく言い放った。
「私に由衣殿、そして今度は栗須殿にまで手を出そうとした？どこまで最低なんですか」
もうこれ以上ない位、イーリスの顔は冷たい。
「水瀬自身は元が男だからいいですし、エリスやエマは、あの性格だからともかくも、由衣殿の方やルシフェル、そして萌子殿にとって、あなたの振る舞いは理解できるものですらありません！」
「……そういうものか？」
「……ちょっと待ってください」
次の言葉が恐ろしくて、イーリスは由忠の言葉を止めた。
「日本社会全般に通用する一般常識に照らし合わせて発言してくださいね？」
ここまで念を押しながら、それでもイーリスは、目の前のダメ男には何の効果も示さないことを、心のどこかで理解していた。
由忠は言った。
「オンナ遊びが悪いことなのか？」
ほらやっぱり。
イーリスはため息と一緒に肩を落とした。
「……」
そして、由忠に顔を近づけた。
まじまじと見つめるその視線の先にいる由忠の目は、信じられないと如実に語っている。
「閣下？」
イーリスの吐息を感じつつ、由忠はイーリスを見つめる。
返答次第で覚悟を決める。
イーリスのその決意に由忠は気づかない。

「オンナ遊びって、どうお考えなんですか？」
そのイーリスの問いに、由忠は真顔で答えた。
「……絶対的必要行為？」

ガンガンガンッ！
クギで何かを打ち付ける音が響く中、悠菜は病室に入り、足を止めた。
床に白くて長細い白木の箱が置かれ、それをイーリス叩いている。
「あ……あの、イーリスさん？」
髪を振り乱して金槌を握るイーリスの鬼気迫る様子に、さすがの悠菜も引き気味だ。
それで悠菜の存在に気づいたのだろう、イーリスは顔だけ悠菜に向けた。
血走った目で睨まれた悠菜は、自分の心臓の強さに感謝した。
「しばらく待て」
イーリスは恐ろしくドスの効いた声で言った。
「もう少しで済む」
「は、はい？」
「今、性格破綻者の葬儀の準備中だ」
「御父様が入院されたと聞いたんですが」
悠菜は首を傾げながら言った。
「私、お見舞いに」
「葬儀は教会で行ってやる。一応、義理は立てる」
「御父様は神道で」
「地獄に堕ちるヤツに宗教は関係ない」
「いえあの……」
ガタガタッ！
白木の箱――棺桶が激しく揺れた。
ガンッガンッガンッ！
「うるさいっ！」

メキョッ！

イーリスの金槌が鈍い音と共に棺桶の真ん中にめり込んだ。

棺桶の揺れが収まったのを確認したイーリスが再び悠菜に振り返った。

「ふうっ……本当は、瀬戸綾乃に会いに来たのではないのか？」

「う、うん……こっちで精密検査受けてるって、ルシフェルが」

悠菜の声が心なしか震えていた。

「４１０号室、ただし、ここに彼女がいることは極秘だ。その辺を正しく理解しろ」

「だ……だれにも言いません」

「よし。芹沢医師にここに来るように伝えてくれ。死亡診断書を書いて欲しいとな」

「は……はい」

弟じゃないけど、やっぱりイーリスさんは怒らせないようにしよう。

悠菜はそう心に決めながら病院の廊下を歩き、様々な入院患者であふれかえる病院内の一角で声をかけられた。

「あれ？水瀬君」

振り返ると、理沙が小さく手を振っていた。

「ああ……理沙さん？」

「？」

理沙は悠菜に近づくと、じっ。とその顔を見つめた。

「ど……どうしたの？」

「君」

理沙は悠菜から視線を外さず、じっと悠菜の顔を見つめる。

「何かあった？」

「えっ？」

「随分、女の子っぽくなったなぁって思ってさ」

「そ、そんなことないよ！」
悠菜は慌てて“弟”を演じた。
「そう？」
「そうっ！」
ふうん？と首を傾げる理沙はそれでも疑わしそうな視線を変えることはない。
「それで？お姉さん、何か収穫でも？」
「あ……今の所、ない」
「ふぅん？」
「……ずいぶんと疑わしいって目ね」
「何か隠してない？」
「イヤね。そんなわけないじゃない」
「慌ててる」
「しつこい男って嫌われるわよ？」
「じゃ、やめる――岩田警部の容態は？」
「うん。傷は塞がってるし、今朝からは普通のご飯食べられるまで回復して」
「そう、それはよかったね」
安堵のため息一つ、下げた視線は理沙の手に提げた袋に至る。
「お姉さん。それ」
「えっ？ああ。岩田警部の着替え。あの人、あの歳で独身だから」
「へぇ？」
ニヤリ。と笑った水瀬が、理沙に舐めるような視線を向けた。
「な、何よ。気味悪いわね」
思わず後ずさりして身構える理沙に、水瀬は言った。
「オトコのパンツをお洗濯なんて……そっかぁ。お二人はそういう関係で」
「なっ！？」
理沙は火がついた様に赤くなってわめいた。
「ち、違！勘違いしないでよ！こ、これは部下としての点数稼ぎと

いうか、しかたなく――そう！仕方なくなんだから！」
「へぇ？ふぅん？そうなんですかぁ」
「人をそんな視線で見ない！」
赤面する理沙がバッグを振り回すが、悠菜はそれを余裕でかわしながら茶化し続けた。
「お姉さん？」
「な、何よ！」
「はいこれ」
「なっ。何よこれ」
「僕からの贈り物♪」
理沙は手の中のモノをまじまじと見つめた。
少しの間、理沙はそれがなんだか分からなかった。
薄くて平たい不透明なビニールの包み。中身こそ見ることは出来ないが、輪郭だけで判断すると、直径数センチの輪のようなモノらしいことまではわかる。
「？」
「やっちゃえばお姉さんのモンでしょう？」
悠菜はそう言って、親指と人差し指で作った輪の中に指を何度も通す仕草をした。
その意味を朧気ながら理解した理沙は、問答無用で自分の手の中にあるモノの意味を覚った。
「こ……これ……！」
「間違っても水筒代わりにしないでね？」
「こっ――このっ！」

「これっ。葉子」
その瞬間、軽く葉子の頭を美奈子が触れた。
「ご飯食べる前には？」
「あっ。はぁい。いただきます♪」

料理に伸びた手をひっこめ、改めて手を合わせた葉子が、ちらりと美奈子を見た。
食べていい？
その眼はそう聞いていた。
「はい。食べましょうか」
「はぁい！」
「ごめんなさいね？ルシフェルさん」
申し訳なさそうに両手を会わせる美奈子に、ルシフェルは言った。
「いい。葉子ちゃんと遊びたかったのは私もだから」

葉子を連れて時間を潰す。
そう言われても、子供をどこに連れて行って良いか分からず、懐具合も寂しい美奈子は、やむを得ずルシフェルにメールをした。

葉子の面倒見るの手伝ってくれないか。

メールはそういう内容。
それにルシフェルは喜んで応じた。

家に連れてきて。ご飯用意しておく。

メールを打ち終えたルシフェルは、すぐに昼食のメニューを変えたのだ。

「どう？美味しい？」
「うんっ」
美奈子の問いかけに、葉子は幸せそうに頷く。
「そう。さすがルシフェルさんね」
「そ、そんなことないよ」
博雅のために作るのとは少し違う意味で胸の奥が熱くなるような

幸福感に包まれながら、それでもルシフェルはそう答える。
「あるわよ。葉子の太鼓判だもの」
美奈子は微笑みながら、友達の労作を称える。

「それで？」
ようやく口を開いたのはかなめだ。
傷がようやく癒えたかなめは、ルシフェル特製のおかゆをすすっていた。
「えっ？」
「ここに来たのは、単なる葉子ちゃんの面倒だけじゃないだろう？」
「よくご存じで」
美奈子はちょっとだけ、バツの悪い顔をした。
「目的は？」
そのかなめの問いかけに、美奈子は何でもないという顔で答えた。
「村上先輩達に会わせてください」

その瞬間、茶の間は静寂に包まれた。

「な……なんのことだ？」
かなめの問いかけに、美奈子は冷たく答えた。
「村上先輩が、葉月に戻ってる。それはわかってるんです」
「ど、どこからの情報だ？」
「霧島那由他の存在。それが状況証拠です」
「――会って、どうする？」
「会ってから考えます」
「そんないい加減なことで」
「いい加減でいいんです！」
美奈子は怒鳴った。

「村上先輩に会わなければ、何にも進まないんですから！」
「――ダメっ！」
怒鳴ったのは未亜だ。
「そんなのダメだよ！」
眼をぱちくりさせた美奈子が、血相を変えた未亜を見つめた。
しばらく、じっ。と未亜の顔を見た美奈子は、
「あのね？」
ため息混じりに言った。
「ハアッ……何か勘違いしてない？私が村上先輩に会いたいっていうのは、みんなにとっても大切なことがあるからなのに！」
「――えっ？」
皆の驚きの視線が美奈子に集まる。
「過去のドロドロにケリつけるんじゃないのか？」驚きのかなめ。
「桜井？包丁かナイフでも用意しようか？」興味津々の羽山。
「桜井……流血沙汰はどうかと思うぞ？」という博雅。
「みんな何言ってるの！？」
たまらず美奈子は怒鳴った。
「今回の事件、絶対、村上先輩が何らかのカギを掴んでいる。それを知りたいのよ！」

なんとか理沙から逃れ、指示された病室に入った悠菜は、軽い違和感に襲われた。
さすがに病院だけあって清潔さは保たれているものの、ベッドにサイドテーブル、背もたれのないパイプ椅子が一つずつあるだけの室内は、きわめて殺風景だ。
「？」
一歩、室内に入った悠菜は首を傾げた。
「どうしたのです？」

ベッドに腰を下ろしたまま、悠菜に声をかけてくるのは、一応のここの主。
瀬戸綾乃だ。
悠菜の顔を見るなり、枕の下に何かを慌てて隠した。
「何かありましたか？」
「え？う、うん……これ、お見舞い」
悠菜は、病院内の花屋で買ったシクラメンの花束をサイドテーブルの上に置いた。
「まぁ。真っ白でキレイな花ですね」
綾乃は悠菜からの贈り物を前に、目を細めて微笑む。
「うん。キレイだからラップしてもらったんだ。お見舞いって言ったら花屋さんがヘンな顔してたけど」

ちなみに、お見舞いのお花のお届時期は入院直後や手術の前後は避けるのが原則。
病状が落ち着つき回復に向かい始めたころが最適とされる。
根のついた花は当然ながら、シクラメンの花も「死苦」を連想させるのでタブーとされる。
……念のため。

「でもね？水瀬君」
綾乃はちょっとだけイタズラっぽい顔で言った。
「私、検査で来ているだけで、入院しているわけじゃありませんよ？」
「う〝っ」
花瓶を探す悠菜が固まった。
「ふふっ……病院っていうから、お見舞いって考えたのでしょう？」
「だ、だって……」
高かったのに……。そう呟いて花束をしまおうとする悠菜を、ベッドから立ち上がった綾乃がそっと止めた。

「ご厚意はありがたくいただきます♪」
「最初からそう言ってくれればいいんだもん」
「くすっ。そうですね」
さすがにバツが悪いという様子で、綾乃は小さく舌を出した。
「それで？」
悠菜はパイプ椅子に腰を下ろした。
「検査はどう？」
「よくわかりません」
綾乃もベッドに腰を下ろして答えた。
「何だか分からない道具や機械でいろいろ――しかもこんなところに一人でいろだなんて」
「――魔界とは違うでしょう？」
「ええ……って！？」

その瞬間、綾乃はベッドの上で３０センチ位飛び跳ねた。

「あ……あの」

悠菜の顔をうかがうその顔はもう蒼白だ。

「ハァ……やっぱり」
悠菜はそう言って大きなため息をついた。
「おかしいと思ったんです」
「ど……どうしてわかったんですか？」

そう。
外見というか、肉体は綾乃だが、内面、つまり、精神は綾乃のそれではない。
それは悠菜の目から見れば一目瞭然。

綾乃。

そう表現しても、中身は別人。

魔界のお姫様。

次期魔帝。

ティアナ・ロイズール・トランシヴェール殿下。

その人だ。

ロイズール殿下演じる綾乃（以下、綾乃と表記）は、恐る恐るという顔で水瀬に訊ねた。

「へ、変装は完璧のはずです」

「どこが？」

悠菜は呆れた。という顔で綾乃に言った。

「気配が綾乃ちゃんじゃないもの。どうせこの後抜け出してどこかのケーキ屋でも行こうとか考えてたんでしょ？」

「ち、違います！」

綾乃はムキになって反論した。

「ケーキじゃなくて、ワッフルです！」

「同じだって」

「ケーキとワッフルは違います！」

「お菓子って意味で違わないでしょう？」

「そ……それはそうですけど」

納得できない。という顔で、綾乃は口を尖らせながら頷いた。

「せっかく、食べたいだけ食べられるチャンスなのですから……」

「最近、綾乃ちゃんがどんなにダイエットしても体重が増える一方だって泣いてたけど、成る程ねぇ」
「だ……ダイエットなんてする必要はありません」
むしろ哀れむような視線に耐えかねたのか、綾乃はついにそっぽを向いた。
「適度に運動していれば……その」
「本体は？」
「……で、ですから！」
一番イタイ所をつかれたらしい。
綾乃はベッドから立ち上がって怒鳴った。
「ち、ちょっと位です！ほんのケーキ１０個位！女の子として許される範囲内です！」
「食べ過ぎ」
「そ、そんなことありません」
「ショートケーキ１００ｇ中のカロリーは３４４キロカロリー」
「そ、それでも」
「女子高生が健康を維持するための目安は２０００キロカロリー位だって」
「た、たかがケーキ」
「ぶくぶく」
「す、少しくらい……」
「ぶくぶく」
「う……ううっ……」
「お腹でっぷり」
「や、痩せます……」
「二の腕タプタプ」
「つ、次からはケーキの量を減らして……ローカロリーのケーキだけに」
「体重計、持ってきましょうか？」
「つ、謹んで遠慮します」

「ま、とにかく一度、ゆっくり話したいとは思っていたんですよ――ロイズール殿下」
「……姿はこのままでかまいませんか？」
綾乃は泣き顔でそう訊ねた。
「構いません――少し、真面目な話がしたいのですが？」
「じゃ、お茶くらい用意して下さい」
「……」
結局、悠菜は弟の大切にしていたティーセットと茶葉で紅茶を用意した。
「お茶菓子は？」
綾乃は冷たく座った目でそう言った。
「え？」
ピタリと、お茶をいれる悠菜の手が止まった。
「お茶菓子」
「だ、ダイエット」
「お茶菓子」
「……ど、どうぞ」
どこから取り出したかピエール・エルメのマカロンが綾乃の前に置かれた。
「ありがとうございます♪」
綾乃はそそくさとマカロンに手を伸ばした。
「その奥に隠しているイスパハン（ケーキ）、早く切ってくださね？」
「……」
27センチのホールケーキを一気食いしてご満悦の綾乃に、悠菜は涙ながらに訊ねた。
「そろそろいいですか？」
「ええ？どうぞ？」
まったりとした表情でお茶に手を伸ばす綾乃が頷いた。

「綾乃ちゃんの魂の問題、解決したのではないのですか？」
「していますよ？」
綾乃は何でもないという顔で頷いた。
「でも！」
だからこそ、納得出来ない。
「だったら何故、殿下が？」
「これはその後遺症です」
「わざと残させた――の間違い、じゃなくて？」
「失礼な」
少し乱暴にお茶に口を付けた綾乃が言った。
「魂と魂の間にいわば大きな穴が開いてしまったのです。いくら獄族といえど、魂を一から作り直さなければ、もうどうにもならないでしょう？」
「そういうものなのですか？」
「そういうものです」

「では、第二の質問――あの獄族はどこへ？隷従させていたのでは？」
「……」
綾乃はちょっとだけ黙った後、静かにティーカップをソーサーの上に置いた。
「その質問を待っていました」
「へ？」
「グリムが脱走しました」
「何……したんですか？イジメすぎたとか」
「何もしていません。ただ、“これ以上はおつきあいできません”と書き置きがあっただけで」
「……さすがのワガママ」
「何か？」
「いえ何でも」

「居場所は分かっています」
「じゃ、さっさと」
「この体で易々と行ける場所ではありません」
「……本体は？」
「私が人間界へ？周囲が納得してくれると思いますか？」
「ちなみに、もしも本体が動かれた場合はどのように？」
「母上直属の近衛軍が護衛に」
「クイーン・グロリア直属の軍っていうと……どれくらいでしたっけ？」
「護衛として派遣される数は……そうですね、お忍びで５００万程度ですか」
「公なら？」
「軽く２億」
「えっと……魔界の総人口が推定３００京、常備総兵力数が約９００兆でしたよね？」
「はい♪総動員数が１京少しです♪」
「いいです。僕、代わりに探しますから」
「言って下さると信じていました」
「言わないととんでもない目に会いそうなので」
「とんでもないなんて」
綾乃は目を見開いて言った。
「そんな生易しいものじゃありませんよ？実際、ゲートの向こう側では完全装備の近衛第４軍が待機中です。私の権限で動かせる精一杯ですが」
魔界の一個軍団が通常編成で約９０００万の兵力だと悠菜は思い出した。
「……僕が代わりの捜索引き受けなかったら？その連中が？」
「はい。地上の草の根までも焼き尽くして探し出すでしょう」
「草の根かき分けて……じゃなくて？」
「草の根まで焼き尽くして、です」

綾乃はにこりと微笑みながら言った。
「手加減はしません」
「……天界とどうこうという話は言うだけ無駄ですね」
「はい♪」
「……それで？」
悠菜はどこからか一升瓶を取り出してラッパ飲みした。
「まぁ。お酒をそんな乱暴に」
「飲まなければやってられません！」
その声は涙声だ。
「いきなり性別は入れ替わるし、話は進まないし、グリムって人からは何の誘いもないし！もう散々なんですから！」
「大変なんですねぇ……」
しみじみとした声で綾乃は頷いた。
「でも、頑張って生きれば、きっといいこともありますよ？」
「ううっ……ヒック……ひ、人の情けが身にしみます」
「グリムの件はお任せしますね？」
悠菜は頷いてから、思い出したように言った。
「あの？」
「なんです？」
「でも、何でグリムさんを、殿下が追いかけるんです？軍まで動員して」
「そ……それが」
綾乃はバツが悪いという顔で手に持ったハンカチをいじりだした。
「持ち逃げされたものが」
「なんです？」
「……“呪具”です」
「“呪具”？いろいろありますが」
言いかけて悠菜は気づいた。
「殿下、まさかそれって」
「魔界帝室の秘蔵品。この子の治癒に必要だからと言われて」

「クイーン・グロリアに無断で持ち出した……と」
悠菜はあきれ顔で言った。
「何やってるんですか？」
「返す言葉もありません」
綾乃は落胆のため息混じりにうなだれた。
「盗まれたのは人間の魂の管理に用いられる“世界樹の葉”です」
「……天界どころか三界の取り決めによって封印された“禁具”じゃないですか」
悠菜の声はもう裏返っていた。
「そうです」
綾乃は力無く頷いた。
「聞いたことはありますよね？
かつて三界が一つの世界だった頃の世界は一本の巨大な樹でした。
その樹はただ大きいだけではありません。
その葉は、全ての生けとし生ける存在すべての運命を見ることが出来る力を持っていたといいます。
つまり、世界樹に暮らす者達は、世界樹に運命までを管理されていたのです。
世界樹に住む者達はそんな世界で生まれ、そして死んでいきました。

いわば“定められた運命”に従い、生きていたのです。

長い長い、永劫ともとれる時の流れの果て――。

いつしか、世界樹の定めた運命に従わない者達が現れました。

運命を我が手で切り開こうとする者達……定められた運命を否定し、自らの生き様を自らの手で示さんとする者達……我ら魔族の祖先です。

定められ、管理された運命に背くのが悪なら我らは悪として生きよう！

――悪とされることこそが善。

だからこそ、我らは自らを魔族と名乗ったのです。

世界樹を護り、魂の管理という旧来の使命に固執する獄族の祖先達に我ら魔族は言い放ちました。

運命の管理は世界樹ではなく、それを管理するお前達の仕業だろう！と。

最初はささいな口論。

でも、口論はケンカとなり、ケンカは戦いとなりました。

それが“黄昏の戦”の始まり。

平和な世界は阿鼻叫喚の巷と化し、多くの者達が刃の元に命を落としました。

もしかしたら、それさえも世界樹が定めた運命だったのかもしれませんね。

戦いの末、世界樹は崩壊。

世界樹の残骸から天界・魔界・獄界が生まれ、三界が協力してこの人間界に生まれた。

世界樹の葉が用いられたのは、この時です。

人間の魂の管理に用いられたのです。

人間の魂は、世界樹の葉によって情報を引き出され、その葉の上で情報を書き換えることが出来るように作られました。

人間の魂を管理する権限は三界の取り決めで世界樹の頃からの経験のある獄族が受け持っています。

魂のメンテナンスは彼らの仕事。

それの仕事に、世界樹の葉は用いられています。

無論、獄族の中にも心ない者がいないとも限りません。

故に、世界樹は獄族の帝により厳重に管理されてはいますが、かといって獄族だけが世界樹の葉を持つのではありません。

天界に住む神族も魔界の我ら魔族も、持っています。

ただ、その乱用を戒め、魂の管理は獄族が行うという取り決めを護るために、世界樹の葉はそれぞれの帝が厳重に管理しているのです」

「……人間の世界で言ったら、どっかの軍隊から反応弾を持ち出したのとかわりませんよ」

悠菜はあきれ顔で言った。

「むしろそれよりタチが悪い。そんなのがあれば、人間の魂をどうにだって書き換えられる。いわば人間を絶対的レベルで操れるという代物ですからね」

「綾乃を助けるのに必要だとグリムにせがまれました」

「それをバカ正直に信じたバカなあなたは、母上のいる城から、マ

ヌケにも世界樹の葉を盗み出してグリムに与えた。――所が、肝心のグリムはそれを利用するフリをして、綾乃ちゃんの魂の修復こそしたものの、頃合いを見計らって逃げ出した……世界樹の葉を持って」

「いろいろ引っかかるおっしゃりようですが……おっしゃる通りです。本来なら、その責任をとって私が彼を捕縛すべきなのですが」

「……逆に捕縛されたんじゃないですか？」

「えっ？」

綾乃は驚いた顔で悠菜を見た。

「つまり」

悠菜は綾乃のティーカップに新しいお茶を注ぎながら言った。

「あなたは世界樹の葉を持ち出したことで母上、クイーン・グロリアにより拘束され、魂だけなんとか逃げ出して綾乃ちゃんの体に逃げ込んでいる」

「……」

ギクッ！

綾乃の背後でそんな効果音が文字として現れた。

「さっき、殿下はグリムが魂を細工したといいましたけど、それは違いますね。殿下ご自身が別に細工した――いつでも気軽に人間界で遊ぶために」

「ど……どうしてそんな」

「どうして？」

悠菜はきょとんとした後に続けた。
「どう見ても今の綾乃ちゃんは、何者かに憑依されているんです。魂がリンクしているべきなのに、そうはなっていない」
「……すべて、お見通しというわけですか」
「そうです」
悠菜は紅茶を勧めながら綾乃に言った。
「いろいろありますんで、当面はあなたを瀬戸綾乃として扱いますが、だからこそ、逆にお願いしたいことがあります」
「何です？」
「もう、グリムの居場所は知っているんでしょう？」
「……大体の所は」
「その目的も？」
「推定の範囲でよければ」
「煮え切りませんね」
「だって！」
綾乃は初めて反論した。
「情報収集が一段落した時点で身柄を拘束されたんです！仕方ないじゃないですか！」
「そ……それを僕に言われても」
悠菜は弱々しく反論した。
何しろ、相手の中身はともかく、外見は恐怖の対象としてＤＮＡレベルで刻み込まれた瀬戸綾乃だ。
それが激怒している様は、悠菜に内心で逃げ出したいほどの恐怖心を与えていた。
「いいえ！」
綾乃は立ち上がると、力んだ調子で言った。
「この体はあなたの妻となるべき瀬戸綾乃のもの！」
「……なら出て行ってくださいよ」
ポツリと突っ込んだ悠菜のセリフをこれ以上ないほどの形相で睨み付けて沈黙させた綾乃は続けた。

「その妻の本魂が困っている、これはつまり、妻が困っているのと同じです！」

「違う違う」

手をパタパタ横に振って否定した悠菜の顎に綾乃の拳がめり込んだ。

「お・な・じ・で・す」

「……」

アッパーカットをモロに喰らって天井に頭からめり込んだ悠菜には、否定も肯定も出来ない。

「とにかく、私がそうだといってるんですから！そうだと思っていただければいいんです！」

ズルッ――ベタンッ！

悠菜の足首を掴んだ綾乃は、そう言いながら天井から悠菜を引っぺがした。

「妻の言うことは常に正しい！そう思うのが夫の役目！そういうものです！」

天井から今度は床にたたきつけられた悠菜が顔を押さえながらぼやく。

「クイーン・グロリアのダンナさんって、よほどの恐妻家だったんですね？」

クイーン・グロリアの夫は魔界の王。

かなりの政治力と武力で魔界帝室の地位向上を目指す妻の右腕として活躍。帝室に数千年に渡り逆らい続けた魔界辺境部族の多くを鎮圧した辣腕家だ。

妻抜きでも“偉大な君主”と言うべき人物なのだ。

「ち、父上のコトは関係ありません！」

父親を侮辱されたに等しい綾乃は顔を真っ赤にして反論した。

「父は確かに婿養子ですし、母に遠慮してばかりで、“いいよ。どうせ僕なんて”が口癖の人ですけど！でも言うべきことは言います！その後すぐ恐怖のあまり失神してますけど！」

それが恐妻家だといいたい悠菜は思った。

「弟（悠理）と仲良くなれそうな人だなぁ」

「弟？」

「あ！いえ！こっちの話で！」

悠菜は慌ててお茶を濁した。

自分が性別すら安定しない不安定品だと、魔族に知られることははなはだ都合が悪い。

「じゃ、今の夫は妻に従うって、帝室の家訓みたいなもの？」

「違います！あれは私の考えです！」

綾乃はきっぱりと言い切った。

「妻は夫を支えます。その夫は、例えば１支えられた見返りに、妻を無量大数（むりょうたいすう・１０の６８乗　注：１０の８８乗の説有）の単位以上で支えねばならないのです！」

「り……」

理不尽。そう言いかけた悠菜の言葉を遮るように綾乃はより大きな声で言った。

「理想的！そうですね！？」

その押しの強さに負ける形で、悠菜は何度も頷いた。

頷かなければ殺される。

悠菜の本能がそう告げていたから。

「そうなんです♪」

微笑む綾乃を前に、悠菜はついぼやいてしまった。

「クイーン・グロリア、稀代の名君だけど、子育てだけは失敗したって噂、あれは本当だったんだ……」

第三十五話（後書き）

綾乃＝ロイズールの図式でした。本来は綾乃表記はロイズールと書くべきですが、何だか違うような気がしたのでそのままです。

第三十六話

次の瞬間、室内に悠菜の悲鳴と命乞い、そして何か骨肉を砕くような鈍い音が響き渡った。

その時まで、悠菜は疑問があった。

何故、弟（悠理）があれほど自分を慕ってくれる瀬戸綾乃から逃げ出したのか。

何しろ、弟は何故かその記憶にロックをかけてしまい、悠菜には見ることが出来なかったから、原因がわからない。

だから、悠菜は悠菜なりに考えた。

魔界と天界というどうしようもない身分の差。

アイドルと騎士。

身長差。

……どれも違う気がしてならない。

第一、人間界にいる限り、二人は親同士の決めた許嫁同士。

恋人としては揺るぎない地位にいるのだ。

そして、二人でいる時の弟の記憶は常に暖かい幸せに包まれてい

る。

それなのに？

その理由を、悠菜は体で思い知らされた。

この暴力だ。

これじゃあ、弟だってたまったもんじゃない！

日菜子だって少し前まで似たようなものだったが、今ではスネたりそっぽ向いたり、女の子として見ても愛らしくてたまらない仕草をする。

全ては、日菜子が弟を愛してくれているから。

日菜子は愛する存在に暴力を振るうなんて考えすらしない。

必要としない方法を知っている。

……普通というか、当たり前といえば当たり前だけど。

それがこの子は暴力暴力だ。

これが正しければ、恋人同士は殺し合いの関係とイコールになる。

それは絶対に違う！

反論を腕力でねじ伏せるような女の子を好きでいられるはずがない！

どんな男の子だって逃げていく！

私は綾乃ちゃんは大好きだ。

弟だってそう！

でも、これは間違いだ！
誰かが正してあげなくちゃいけないこと。
こんな暴力を振るうことが間違いだって！

悠菜は痛む体をむち打って綾乃を睨み付けた。

弟が綾乃ちゃんとつき合っていたのは、こんな暴力を受けるためじゃない！

弟はマゾじゃないんだから！

これじゃぁ、恋愛関係にある事自体が弟に対する侮辱だ！

一度そう思うと、悠菜はなんだかそれが正しく思えて、腹の虫がムカムカしてくるのを押さえられなかった。

そして――

パンッ！

乾いた音が室内に響き渡った。

「……」

「……」

室内はそれまでの騒ぎがウソのように静まりかえっていた。

「……」

頬を押さえて呆然とする綾乃。

「……」

その頬を叩いたのは悠菜だ。

「――いい加減にして」

物理的な痛みはない。

ただ、心に直接突き刺さるような痛みを感じつつ、悠菜は言った。

「力で相手をねじ伏せるなんて最低だよ」

「……」

呆然としたままの綾乃は、冷たい視線で自分を見つめる“恋人であるはずのオトコ”の顔を見つめたままだ。

「恋人って、互いに精一杯支え合って、助け合うものだよ？恋人の関係は、奴隷とご主人様の関係じゃない！」

悠菜は綾乃に怒鳴りつけた。

「そ、そういう趣味の人もいるにはいるけど、弟――じゃなくて、僕はそんな趣味はない。もし、僕から暴力を受けたっていうなら、一度でいいから言ってごらん？」

「い、今」

悠菜の一言一言にびくつきながら、綾乃は頬を押さえたまま、かすれたような震える声でそう言った。

「それは別！」

ビクッ！

綾乃は身をすくませた後、
「……」
ふるふる。
首を横に振った。
小さい子供が親に叱られているような、不思議と幼さを感じさせる素振りだった。
「でしょう？無抵抗の相手を叩きのめして楽しい？人として！」
「……で、ですけど」
「朕？浮気したり、言うこと聞かなければどうなるかＤＮＡに刻み込む？そんな所？男の子に暴力ふるうなんて――女の子として最低だと思わないの！？」

グサッ！

綾乃の平べったい胸に目に見えない巨大な刃が突き刺さった。

「だから（弟だって）嫌いになっちゃうんだよ！」

ザクッ！

もう一本、刺さったらしい。

綾乃はのけぞって床に倒れた。

「……生きてる？」
綾乃の顔をのぞき込みながら、悠菜は冷たく訊ねた。
「し、死にたい心境です」
「でしょうね」
「で、でも！」
「――何？」

それが綾乃の――いや、綾乃と魂を共有するロイズールの本音だろう。

綾乃は流れる涙をそのままに悠菜にすがりついた。

「大切な存在を失う恐怖があなたにわかりますか!?自分ではどうしようもないことで、大切な存在を失う恐怖を!」

「……殿下」

その時、初めて悠菜は理解した。

この暴力が何なのか。

それは綾乃（＝ロイズール）の恐怖の裏返し。

大切な存在を失う恐怖から逃れるために暴力に走る。

そういうことなのだ。

「でもね?」

ポケットから取り出したハンカチで涙を拭ってあげながら悠菜は諭した。

「それをやられる身にもなって?もし、殿下が僕で、僕が殿下だとして、どんな理由であれ、僕に暴力を振るわれたらイヤでしょう?違う?」

コクン。

綾乃は小さく頷いた。

「でしょう?――だったら、もうしないでね?」

コクン。

さっきより小さめに頷いたと思いきや、

フルフル。

綾乃は横に強く首を振るった。

「何で？」

「だ、だって――」

綾乃は泣いているのか怒っているのかわからない表情で悠菜に言った。

「あなたは日菜子という女の子に夢中でしょう？この子が可哀想です」

「……この子は僕の記憶を失っている――！？」

その瞬間、

悠菜は凍り付いた。

まさか。

そんなことが。

いや。

それなら納得出来る。

「殿下？」

やや硬直した声で悠菜は綾乃に訊ねた。

「まさか、世界樹の葉を」

「そうです」

綾乃は弱々しく頷いた。

「この子を魂の破滅から救うには、魂が最も大切に思っている部分を切除する必要がありました。“代償”です。でも、それはあまり

に気の毒な話しです」

綾乃は悠菜の背に手を回しながら言った。

「こうやって抱きしめられるだけでこの子がどれだけ幸せだったか。それは記憶を共有している私には痛いほどわかります。そして、その想いは私の中にきちんとした記憶として残っているのです」

「自分の記憶を綾乃ちゃんの記憶に戻すことで記憶の修正を試みようとして」

「そこがグリムの付け入るスキだったのです。私は綾乃を助けたい一心で危険を承知世界樹の葉を盗み出し、グリムに渡した。……渡してしまったのです。その結果を考えずに」

「……殿下」

「グスッ。あなたとこうしているだけで、綾乃は幸せなのです。それは、籠の中の鳥である私には到底味わうことのできない幸せ――――綾乃が幸せであればあるほど、私もそれを例え夢の中でも味わうことが出来る」

きゅっ。

悠菜の背に回る手に少しだけ力がこもった。

「私利私欲と笑って下さって結構です。だから、私は綾乃の幸せを願った。綾乃の幸せは私の幸せ。だからそれを失う恐怖は一緒」

「……」

「記憶を失う直前、綾乃の思念が私の元に届きました。“私は絶対、もう一度、水瀬君を好きになる”……記憶を失う恐怖より、あなたへの想いが勝っていたのです。それが私にはむしろ哀れにすら思えてなりませんでした」

「……だから、殿下は」

「私にとって、この子の記憶は自由を体験させてくれる貴重な存在。それを何とか元に戻したいと思うのは当然です」

「まだ、終わったわけじゃない」

悠菜は綾乃の背に手を回しながら、諭すように言った。

「世界樹の葉を取り戻して、綾乃ちゃんに記憶を戻せばいいんだから」

「……だと、いいんですけど」

「？」

意味がわからない。

それでも、悠菜は言った。

「出来ると信じる所から全部は始まるの！最初からダメだって思っちゃったら、何も出来ないよ！？そうでしょう？」

「……」

綾乃は何かを逡巡する目で悠菜を見つめるだけ。

「殿下！」

「……そう、ですね」

コツンッ。

綾乃は悠菜の胸の中におでこをつけた。

「万に一つの可能性でも賭けてみましょう」
「そうです！」
「――それにしても」
くすっ。
綾乃は小さく笑うと、イタズラっぽい目で悠菜を見た。
「本当、最初は不思議だったんです」
その顔は、何かつき物が落ちたような晴れ晴れとした表情を浮かべていた。
「こんな」
しなやかな指先が悠菜の頬を撫でる。
「女の子みたいな童顔のどこがいいのか」
「ムッ」
途端にしかめっ面になる悠菜。
「クスッ。怒らないで下さい……懺悔しているんですから」
「どーぞ」
しかめっ面はそのままで、悠菜はぶっきらぼうに言った。
「……どうせならクラスメートの羽山光信や秋篠博雅とか、格好良いオトコはたくさんいるのに。綾乃は常にあなたしか見ていない。それがわからなかった。もしかしたら、この子はヘンな趣味を持っているんじゃないかなって」
「本人の顔と口で言われると死にたくなるんですけど」
「そうですか？でも、わかりました」
キュッ。
綾乃はもう一度、悠菜に抱きついた。
「あなたは優しい人。綾乃のワガママにもつきあえる頑丈さを持っ

た人」
「それ、本当に褒めてます？」
「ええ。だから、あなたをこの子は好きになった。それを、私もいつの間にか分かっていたのです」
「これで終わりですか？」
「いえ」
悠菜の胸元から顔を上げた綾乃は、晴れ晴れとした、むしろ何か決意した顔で言った。
「何としてもグリムを捕まえて、ギャフンといわせて、世界樹の葉を取り戻して、ついでにこの子の記憶を元通りにさせます！」
「そうですね」
「というわけで決めました！私も、この子の体を借りて参加させていただきます！」
「えっ？」
「元々、この子はあなたと同類。私の力は思う存分発揮できます。何より、これは私とこの子の問題なのですから♪」
「それであんな破壊力を」
そりゃ痛いワケだ。
悠菜は遠い目でさっきの暴行を思い浮かべた。本当に自分が頑丈だと思う。
「クスッ……さっきのコトはお詫びしますね？」

「え？いいですよ。反省しているんでしょう？」

「ええ。人間界の言葉で言えば、海より深く」

イタズラっぽく舌を出した綾乃は、何故かペタペタと悠菜の体を触り出す。

「で、こういうおまじないもあるんですよね？痛いの痛いの飛んでけーって」

ペタペタ

ペタペタ

「飛んでけーっ」

まるで幼女のようなあどけなさで、綾乃は悠菜の体を触っては“おまじない”を続ける。

治癒魔法の方が有難いんだけど。

悠菜はそう思いつつも、綾乃になされるがままにしていた。

ただ、

ペタッ

悠菜は忘れていた。

自分は女の子。

でも、相手はそう思っていない。

自分もそう演じていた。

ただ、物理的な偽装はしていないから……。

「？」

綾乃の手が、ソコに来た時、悠菜は自分のミスに気づかされた。

「……」

クニクニ。

綾乃が怪訝そうな顔で何度もそこを掴んでは離す仕草を繰り返す。

「あの？」

「な……なんです？」

悠菜は、バツの悪そうな顔で綾乃に答えた。

その悠菜に、綾乃は訊ねた。

「オチンチン、どこかに落としちゃいました？」

「本当に大丈夫？」

水瀬邸の玄関で、ルシフェルが美奈子に心配そうに訊ねた。

「何が？」

靴を履きながら、美奈子は問い返す。

「何も心配することなんてないじゃない？」
「あの獄族に襲われたばっかりなのよ？」
「大丈夫よ」
美奈子は笑ってルシフェルに言った。
「ちょっとそこのコンビニに行くだけだから」
「じ、じゃあ、ちょっと待ってて」
ルシフェルがエプロンを外した。
「私も行く」
「だから」
「念のため。それと、お醤油が切れたから」
「――うん」
「お財布、とってくるね？」
ルシフェルが踵を返して廊下に戻った。
その背中に美奈子の声が聞こえた。
「えっ？ええ――私ですけど？」

電話かな？
ルシフェルはそう思った。
誰と話しているか、それはわからない。
いくら何でも、電話なら問題ないだろう。
そう思ったのが、ルシフェルの大失点だった。

「お待たせ」

財布を持って玄関に戻ったルシフェルだったが、

「桜井さん？」

美奈子の姿はない。

「もう、行っちゃったの？」

玄関から出て外を見回すが、誰もいない。
門は閉まったままだ。

「桜井さん？」

この時を境に、ルシフェル達の前から、美奈子の姿が、消えた。

第三十七話

●夜。病院近くのレストラン
悠菜の携帯が鳴った。
相手はルシフェル。
血相を変えたルシフェルの声が事態の深刻さを如実に伝えていた。

「どうしたのです？」
食事を終えた綾乃――ロイズールが不思議そうに訊ねた。
「やられた」
携帯をしまいつつ、悠菜は呻くようにそう言った。
「グリムが動いたのですか！？」
驚愕の表情を浮かべるロイズールに、悠菜は頷いた。
「さらわれた」
「誰が？」
「友達」
「……友達？」
「うん。桜井美奈子ちゃん。天狐というか、九尾の狐の主にしてグリムが一度襲撃した相手。一時は……ううん。もしかしたら、僕達の中で一番に真実を見つめることが出来る子」
「その子が、何故？」
「わからない」
悠菜は困惑した顔で首を横に振った。
「人質？それとも捜査の混乱？」

ピーピーピー！！
ドンッ！
再び、携帯が鳴ったのと、遠くで爆発音がしたのは同時だった。

ルシフェルからだ。
「もしもし？――――えっ！？場所は！？神社！？すぐ行く！説得を続けて！」
悠菜は慌てて席をたった。
「来て！殿下の力も借りたいくらいの騒ぎになった！」
「ど、どうしたというのです！？」
ロイズールもあわてて席を立つ。
「葉子ちゃんが」
カウンターで、「いつものツケで！」と言い残し、悠菜はロイズールと共に外へ出た。
「葉子？」
「狐！」
「桜井美奈子のサーヴァントが？」
「暴走した！」
「えっ！？」
遠くで連続した爆発音が響き渡る。
ロイズールには、魔力攻撃であることはすぐにわかった。
「あれ！まさか！」

そんな馬鹿な。
ロイズールは混乱する頭脳を励起して何とかその結論に達した。

グリムはそこまで計算の上で桜井美奈子という子をさらったのか？

だとしたら相当な策士だ。

九尾の狐。

天狐とも言われるその戦闘能力は上位魔族というより、むしろ自分達に近い。

それが主を奪われたらどうするか？

人間の仕業だと誤解させることが出来たら？

「狐は――――！」

考えたくない。

そんなロイズールに悠菜は言った。

「そう！」

悠菜の体が宙に浮いた。

「ルシフェが説得してるけど、ご主人様がいなくなったって！葉子ちゃんパニックになっちゃってる！」

●月ヶ瀬神社

月ヶ瀬神社

別名“オバケヶ丘”と呼ばれる月ヶ丘の上に存在する小さな神社。明治維新における葉月戦戦没者の慰霊のために創建されたというのが通説だ。

とはいえ、浅瀬の海岸を大型船舶が接岸できるほどの湾に変形させたほどの戦いは、それまで存在していた記録・文献どころか、葉月村そのものを灰燼に帰したため、その真偽のほどを確かめる術はほとんど残されていない。

水瀬悠菜が瀬戸綾乃の肉体を乗っ取ったロイズールと共にその神社上空に到達した時、既に社殿は根こそぎ吹き飛ばされ、丘の上は艦砲射撃を集中的に受けたような――いや、艦砲射撃を受け続けているような有様だった。

連続した爆発の光が辺りを昼間のように照らし出す。

その光芒の一つ一つが、とんでもない出力の魔法攻撃なのだ。

「ル、ルシフェちゃんは！？」

一年戦争でもそうは見たことのない有様を、上空から見た水瀬がまず心配したのは、姉の安否だった。

普通なら1万回は軽く消し炭になっていて当然の状況なのだ。

いくらルシフェルが非常識な存在でも、これでは――――！！

「あそこです」

ロイズールが指し示すのは、丘の中程。

「爆発を障壁で凌いでいますけど――――危険です」

「行く！」水瀬は体を降下させ、

「はいっ！」ロイズールがそれに続く。

「葉子ちゃん！」

その頃、神社ではルシフェルが文字通り必死の説得に当たっていた。

ルシフェルもおかしいとは思ってはいた。

葉子を家まで送り届けたのに、肝心の美奈子はその時、まだ家に戻っていなかった。

そして、一本の電話がかかってきた。

相手は美奈子の母。

“娘がまだ戻らない。探しに行くといって葉子も家を飛び出して

しまった〟

ルシフェルも探しに出ることを約束し、そして、神社の急な階段を危なっかしい足取りで上ってくる葉子を見つけた。

葉子は、美奈子が水瀬の家にいるはずだと、そう言い張る。

学校も予備校も閉まっていたし、いるとしたらここだけだ。というのが葉子の言い分だ。

それは、葉子が知る美奈子の行動範囲の限界でもあったが、葉子にとってそんなことは問題ではなかった。

「お姉ちゃんがいない！」

それが葉子にとって何より大変な騒ぎだったから。

例え、九尾の狐とはいえ、その情緒は４歳児のもの。

大切な姉とはぐれたこの子は、すぐにぐすりだし――。

どうしよう！

内心の焦りを隠しきれない様子で、ルシフェルは相手を見た。

泣きべそをかいているのは、まぎれもなく葉子。

その葉子から――

「っ！！」

すぐ目先にあった狛犬が蒸発したほどの魔法の直撃が来た。

空間制御可能な鏡魔法による障壁でその一撃をしのぐのが、ルシフェルにとって精一杯だ。何度、取り押さえようとしても、近づく

ことすら出来ない。

ルシフェルは後悔していた。

すぐに取り押さえればよかったんだ！

いくら何でも、抱きしめてあげさえすれば魔力を発揮しないんだから。それを怠って、家に電話しようとしたのは、あきらかに自分の失態だ！

「やめなさいっ！」

そう言っても、今の葉子は聞く耳すらもたないだろう。

「ヤダぁ！」

涙混じりの声で葉子はそう怒鳴った。

「お姉ちゃんがいなくちゃヤダぁ！」

「すぐに見つけるから！」

「今じゃなきゃヤダもん！」

「ワガママ言って！」ルシフェルは怒鳴った。

「回りを見なさい！」

しゃくりあげながら、それでも葉子は回りを見た。

「どうなってるの！？」

「グスッ……」

「葉子ちゃん！？どうなってるの！？」

「こ……壊れちゃってる。燃えてる」

「誰がやったの！？」

「……ヒック」

ルシフェルの剣幕に押されるように、葉子が小さく身を縮めた。

「葉子ちゃんでしょう！？違うの！？」

その口調はもう、娘を叱る母親のそれだ。

「……ヒック」

こくん。葉子は小さく頷いた。

「お姉ちゃんがこれ見たらどう思うの！？怒られるだけじゃ済まないよ！？」
「でも――――でもぉ」
「お家出て行きなさいって、怒られちゃうからね！」
「やだぁ！」
主がいない現状より、追い出される方がよほど怖いらしい。
葉子は泣き声と共に、今までで最強レベルの一撃が来た。
「――――っ！」
ルシフェルは、その魔法攻撃を何とか凌ぐと同時に、自分のとった行動に驚いた。

手が――――

霊刃を抜いていた。

「馬鹿な！」
ルシフェルは霊刃を放り捨てた。
戦う相手じゃない！
あの子は敵じゃないんだから！

「ルシフェちゃん！」
その真横に降り立ったのは、
「み――――悠菜ちゃん！」
「間違えたら帰る所だったよ？」
そう。悠菜だ。
「遅い！」
「とはおっしゃられても……あれはどうして止めたものか」
正直、悠菜も攻めあぐねていた。
相手を殺すのが手っ取り早いのは確か。とはいえ、相手は日本中の狐の頭領的存在。

殺した後、自分達が無事でいられる保証はない。
「もう歩く砲台だよ！」
涙混じりにわめくルシフェルの展開する魔法障壁に魔法攻撃が命中し、ルシフェルは吹き飛ばされそうになった。
「あんな派手なの何発撃ってると思う！？」
「聞きたくない……精神安定上」
「お家帰る！お姉ちゃんと一緒に帰る！」
その言葉に、悠菜は事情がようやくわかった。
「ああ……そういうことなんだね」
感心した。といわんばかりの口調に、ルシフェルが、
「何してるの！？このままじゃ！」
「葉子ちゃん」
悠菜は普通に葉子に話しかけた。
「お姉ちゃんはね……さらわれちゃったの。わかる？」
「悠菜ちゃん！」
あまりと言えばあまりのセリフに、ルシフェルはたまらず悠菜の胸ぐらを掴んだ。
「誰に！？」
４歳児らしい声そのものに恐怖はない。
だが、放たれる殺気は、いかなる勇者をもすくませる迫力に満ちあふれていた。
「あのね？グリム・リーパーっておじさん」
「どこにいるの？」
「うーん。実はお姉ちゃん達も探してるの」
「私も探していい？」
「うん。お姉ちゃん助けたら、後はもうソイツ、ギッタンギッタンにしていいよ？」
「――“食べちゃって”もいいの？」

「もちろん♪」
「――わかった」
葉子は一歩後ろに下がった。
「じゃ、探しにいくね？お姉ちゃん達、お休みなさい」
ぺこん。
葉子が頭を下げた次の瞬間、葉子の姿が闇の中に溶けて――消えた。

「ど……どういう、こと？」
突然の幕切れを呆然として見るルシフェルの声を遮るように、
「上手く利用しましたね」
そう言ったのはロイズールだ。いままでどこにいたのか、二人の背後に立って微笑んでいた。
「瀬戸さん？」
「あっ……ルシフェちゃん。違う違う」
きょとん。とするルシフェルに、悠菜は手を左右に振って否定すると、背後に立つロイズールを指さした。
「これ」
ゴキンッ！
鈍い音がして悠菜の顔面が地面にめり込んだ。
「“これ”とは何ですか！？“これ”とは！」
「やっぱり瀬戸さん？」
「ふ……普段からこんなことしてるんですか！？この子は！」
「ぜ……全部、殿下の仕業では？」
後頭部に大きなタンコブを作った悠菜が、泥まみれの顔をなんとか地面から引っ張り上げた。
「四六時中コントロールしているわけないでしょう！？」
「……悠菜ちゃん」
ルシフェルは、そっと悠菜の耳元に囁いた。
「瀬戸さん……壊れちゃった？」

「元から壊れているような所あったけどね……幸いにして違う」
「何かの役になりきりすぎて戻れないとか？」
「黄色い救急車とは縁はないと思うけど……」
悠菜はタンコブをさすりながら言った。
「殿下、こっちがルシフェル・水瀬です。ルシフェ。よく似てるっていうか、肉体は瀬戸さんのだけど、精神は別人……うんとね？ロイズールって名前だけ覚えておいて。間違っても粗相のないようにね？」
「ロイズール？」
ルシフェルは、いかにも疑わしいという目で、目の前の少女を見た。
間違いなくクラスメートの瀬戸綾乃の姿なのに、悠菜ちゃんは別人だという。
私をからかっているのか？
とも思ったが、
「事情は把握しているつもりです。ルシフェルとやら」
口調も態度も、ルシフェルの知っている瀬戸綾乃のそれではない。
何より、この気品と恐るべきプレッシャーは絶対に瀬戸綾乃のそれでないことは確かだ。
恐らく、どこぞの王族か何かだろう。
それが何故、瀬戸綾乃の肉体を使っているか？
悠菜はそれを考えるなと言っているのだろう。
そう、ルシフェルは見当をつけた。
「細かい素性は聞かないことで協力してもらっている。――そう思って」
「……水瀬君」
「悠菜」
「……どっちでもいいよ」
「よくな――むぐっ！？」
ルシフェルは、両手の親指を悠菜の口の中に突っ込んで派手に引

っ張った。
「と・に・か・く」
水瀬教育法原則の一つ“気迫で従わせろ！”を遵守する行動に出たルシフェルは、
「協力者なんでしょう？敵じゃないんだね？」
「今の所は」
「煮え切らないの、嫌いだよ」
「仕方ないでしょう？」そう答える悠菜は半泣きだ。
「言えないことだってあるんだから」
「コホン。とにかく」
姉弟喧嘩を前に、ロイズールは軽い咳払いと共にルシフェルに何かを差し出した。
それは、先程、ルシフェルが放り捨てた霊刃だった。
「騎士が剣を捨てる――それはそれでかなりの覚悟だと思います。無断でお借りしたことはお許し下さいね？」
「借りた？」
「はい♪」
全国数百万とも噂されるファンを虜にする瀬戸綾乃の微笑みを浮かべたロイズールは頷いた。
「皆さん、うかつですわ」
そういいつつ、ロイズールは背後に視線を向けた。
「はい？」
「えっ？」
「背中ががら空きでしたわ」
「何か、来てました？」
「ええ。雑魚が」
何が来ていたか。
それは今となってはわからない。
ただ、ここで嘘をつくとも思えない悠菜は言った。
「ありがとうございました」

「いえ♪」
ロイズールは微笑みを浮かべたまま頷くと、
「さぁ。寒くなってきました。家に案内してくださいな」
「殿下？」
踵を返すロイズールに悠菜達も慌てて続く。
「あの狐にグリムを追わせるという、あなたの判断は正しいと思います。主を奪われたあの狐、あらゆる手段を駆使して人間界でのグリムの居場所を掴もうとするでしょう」
「この世界トップクラスの魔導師達ですら失敗しましたが、蛇の道は蛇とも」
「ふふっ……そうですね。本来でしたら」
ロイズールは、ちらりとルシフェルの顔を見て言葉を止めた。
「――――そんなもの、必要ないのですが」
「悠菜ちゃん？」
ようやく事情がわかったらしいルシフェルが、恐る恐るという口調で言った。
「桜井さんに、何があったの？」
「だから」
悠菜は言った。
「さらわれたんだって。何度もここを襲撃してくれたグリム・リーパーに」

●場所不明
「死にたいって顔してますね」
「……そうでもない」
ベッドに横たわり、天井を見つめる美奈子は、グリムに言った。
「マイナス思考ってプラス思考より長続きするけど、永遠じゃないって、最近分かってきたから」
「前向きなわりに、私の誘いに乗られた」

「そうね……」
腕で目を隠しながら、美奈子は誰に言うでもなく、ぽつりぽつりとしたしゃべり方をした。
「もう、イヤだって思っていた」
「……」
「好きな人が、他の女の子を好きになって自分の元を去っていく……ううん。好きな人に好きって言えずに恋が終わる……そんな自分がイヤになって。いつか自分をさらってくれるような人が来てくれるって信じてたら、よりにもよってこんなのだったなんて」
「いろいろ……気になる言葉ですが？」
「自分がミジメだって思うから落ち込むのよ」
「……もしもし？」
「でも、それって、ようするに自分に酔っていただけだもの。このテの思考は一種の自己陶酔よ……絶対醒めない酔いはない」
「よくおわかりだ」
壁にもたれながらグリムは苦笑気味に美奈子を見た。
「私は、酔っていたあなたと交渉したことになりますか？」
「そうね……ただ」
美奈子はちらりと視線だけをグリムに向けた。
「酔っていようとなんだろうと、契約は成立する――――そう言いたいんでしょう？確かに、私はあなたに「お力をお貸しいただませんか？」と言われて、「はい」って答えてここに連れてこられちゃったんだもん」
「……心が強いのか弱いのか、よくわからない人ですね。あなたは」
「私もよ」
上半身を起こしながら、美奈子は頷いた。
「人が一番わからないのは、自分自身の心だって、そう思う」
「身近すぎることは一番の阻害要因ですからねぇ」
グリムは何度も頷くが、そんなグリムに美奈子は感情のない視線を送るだけ。

「――どうしました？」
さすがにグリムもその視線に気づき、そして二人の視線は空中で触れた。
「何を考えているの？」
「考え？」
「あなた、水瀬君達が追っている相手でしょう？」
「――そうだとしたら？」
「話しは聞いている……やることがメチャクチャすぎるっていうか、支離滅裂というか」
「……ハハッ。褒められているとは思えませんね」
「貶している」
「はっきりしたお嬢さんだ」
グリムは壁から体を起こすと、肩をすくめた。
「……そうね」
美奈子はちょっとだけ微笑むと言った。
「いきあたりばったり」
「……言葉がきつくなりすぎですよ」
「そうかしら？」
「そうです」グリムは困ったような顔をした。
「だってそうでしょう？」
対する美奈子は、首を傾げながら言った。
「村上先輩達はともかく、途中で攻撃対象にした南雲先生、瀬戸さん、一度か二度の襲撃ですぐに諦めている。“襲ってみたけど、手強いから諦めた”ってとられて文句言えるの？」
「ち……ちゃんと事情というものが」グリムははっきり旗色の悪さを覚った。
「私達を襲ったのもそう。どう考えても、戦略がない」
「い……いろいろ考えてるんですよ？」
「それはウソ」
美奈子は視線をグリムからそらせることなく言った。

「あなた、本当は襲った人達なんてどうでもいい。別にほしいものがあったんじゃないですか？」
「欲しいもの？」
「ええ。つまり」
美奈子は組んだ膝に乗せた両手の上に顎を乗せた。
「すべては座興……単なる暇つぶし。村上先輩達を追っているのだって、猫がネズミをなぶり殺しにするのと同じ――座興よ」
「ほう……？」
グリムは目を細めて相手を見直した。
「何故？あなたは、村上先輩達にそう簡単に死んでもらいたくない――ううん？“死なれては困る”のよ。ただ、のうのうと生きてもらっても困る。はっきり苦しんではもらいたい。だから、何度も襲っている。決して殺さない程度に、恐怖に苦しみ抜く程度に。
何故？――それが楽しいから。違う？
水瀬君達を襲うのもそう。“何か面白いヤツが来た。よしからかってやろう”程度でしょう？“何度も襲うのは面倒くさい”と思ったら襲撃を止めている」
「それで？私の目指すモノの目星はつきましたか？」
「全然」
美奈子はあっさりとそう言うと、肩をすくめた。
「でもね？もし、この仮説が違うなら、あなた本物のバカだもの」
「口が悪いって親御さんから叱られたことありません？」
「私、はっきりものを言うのが信条なの」
「いずれ刺されますよ？そういうの」
グリムは苦虫を噛み潰したような顔になった。
「舌はナイフより鋭く人を殺し、より多くのナイフを呼び寄せますよ？」
「ご忠告どうも」
ペロッ。美奈子は小さく舌を出した。
「――では？百歩譲ってそうだとして、私があなたをさらったの

も座興ですか？」
「ううん？違う」
美奈子は首を横に振った。
「私を人質にとるつもりはない。むしろ、私に何かをさせたいと思っている。それはわかるの」
「ご自分を買いかぶりすぎでは？」
「だってそうでしょう？」
美奈子は不思議そうに言った。
「あなたもそう言って私をここに連れてきた。
それに、私は人質には向かない。
何故？村上先輩達とは決裂している。
水瀬君達だって任務となれば私を任務遂行上の当然の犠牲として処理することは明白。何より」
美奈子はグルッと自分のいる部屋を見回した。
室内装飾はそれほどではないが、なにより広い。自宅の部屋の１０倍はあるだろう。
そして、グリムの足音から判断すると、建物そのものもかなりの広さがあることは明白。
問題は、グリムが何のためにこんな広い建物を用意しているか、だ。

人質監禁用？

違うはず。
それならこんな広い建物は必要ない。

では？グリムの生活空間？

馬鹿な。
どこの世界に人質を自宅に監禁するバカがいる？

逃走されたり、救出を目論む連中に襲われたらどうするつもりだ？

グリムと名乗るこのオトコは、間違いなく戦いは避けられないと判断している。

だとしたら、手駒がどれほどかわからないけど、決して少なくはない規模を準備しているはず。

そう。

決して単独で全てを凌ごうと考えるほど、このオトコは思い上がっていないことは、会話の冷静さから考えて明白だ。

つまり？

美奈子は結論づけた。

ここは、予め戦闘を目的に作られているはず。

ゲームで言えばダンジョン（迷宮）だ。

そして、ここに私が連れてこられた理由は二つ考えられる。

一つが、本当にこの男が、私に何かをさせたい。

もう一つが、ここに敵――――水瀬君達を引きつけたい。そのためのオトリ。

それとも、前者の役割が終わったら、次は後者。そんなところだろうか？

「正解です」

グリムは言った。

「場所は明らかにはしませんけどね？」

「あ、あなた……人の心が」

「不思議とあなたは読みづらいんですよ」
驚く美奈子にグリムは答えた。
「あなたがたがいう“覚（さとり）”の力は、我ら獄族には当たり前の力ですからね。それにしても、あなた自身が状況をそこまで読むとは驚きました」
褒められても嬉しくない。
美奈子は心の中でグリムに毒づいた。
「その明晰な頭脳をお持ちの方におたずねしますが」
むしろ茶化すような顔でグリムはとんでもないことを訊ねた。
「……水瀬悠理のことが好きなのでは？」
「……」
俯いた美奈子はポツリと言った。
「水瀬君には、別に好きな人がいるもの」
その時、はじめて美奈子が自分から視線を外したことにグリムは気づいた。
それが、グリムの興味を誘った。
「――――どうして？好きな人がいれば、あなたの価値はなくなるとでも？」
「その人に比較すれば、私は単なるクラスメート。その程度の存在だもの」
「水瀬悠理の心の中をのぞいたわけではないでしょう？」
グリムは呆れたように言った。
「まだ、酔っているようですね。恋人と決裂した悲劇に」
「恋人にもなっていないわよ……でも、それは間違いない」
美奈子はきっぱりと言った。
「水瀬君が私を助けに来るなんてことは、物理的にあり得ないのよ」
「物……」
恋人は絶対に私を助けに来ない。それは当然のことだ。

きっぱりとそう言ってのける年頃の女の子。そのあまりの気の毒さに、グリムは内心で涙した。

「しかし……」

あまりに気の毒だから言ってやった。

「あなたは以前、妖魔に乗っ取られた。それを助けられている」

「冗談っ！」

美奈子はベッドから立ち上がると、ムキになって言った。

「単に敵に私が乗っ取られていた。ただそれだけのことだもん！それに！わ、私がどんなに恥ずかしい思いをしたか！」

「恥ずかしい？」

「よ、夜ばいかけられたりとか」

「……成る程？」

クックックッ……。

グリムはこみ上げる苦笑を押さえながら言った。

「照れなくてもいいんですよ？内心、心底助けに来てくれるって信じているのに」

「だっ！誰が照れて！」

「……はいはい。――さて」

グリムの目の色が本気の色を帯びたのを、美奈子は幸いにして見逃さずに済んだ。

「あなたをさらったのには当然、理由があります」

「座興だったら怒ります」

「座興なら、裸踊りとか蛍踊りはかかせませんけどねぇ」

「なっ！？」

「むしろ私はあなたの頭脳に頼りたいのです」

怒鳴ろうとして開いた口をパクパクさせる美奈子に、グリムは言った。

「探してもらいたいものがあるのです」

第三十八話

“それ”を理解するのに、美奈子はかなりの努力を強いられた。
途中、お茶を出してもらい、ご飯を食べ、お風呂まで入った後、復習までして、美奈子はようやく理解が出来た。

「なんでそんな物騒なものをなくすんですか？」
「……あなたを頼ろうとしたことをあやうく後悔するところでした」
グリムはため息まじりに肩を落とした。
「要するにエミュレーターですよね？」
「エミュ？」
「ソフトのデータを任意の数値に書き換えるプログラムのことです」
「さぁ……私はそっちの知識はないので」
「つまり、じゃなくて」
美奈子は用意されたティーカップに手を伸ばしつつ言った。
「魂に書かれた運命を書き換えることが出来れば、どんな人でもいいなりに出来る」
「その通り……なんでその程度のことを理解するのにこんなに時間がかかるのです？」
「仕組みですよ」
「仕組み？」
「ええ。運命を書き換えるなんて出来るはずないじゃないですか。それをどうやって？そう思ったら」
「理解できました？」
「魂に運命は書き込まれていないって、あなたが言うからおかしくなったんです！」
美奈子は飲み干したティーカップを乱暴にソーサーに戻した。
「大体、あなたの説明が下手すぎるから、こんなに時間がかかったんですからね！」

「わ……私のせいですか？」
「当たり前ですよ！ようするに、“それ”を持つ者は魂の見る“胎児の夢”をのぞき見ることが出来るってことでしょう！？それをワケのわからない抽象論で話すし！脱線しまくるし！」
「そうカリカリしないで下さいな。私は学者ですが、他人にモノを教えるのは苦手で……あの、それで」
グリムは美奈子をなだめながら訊ねた。

「“胎児の夢”って、何ですか？」

「胎児は、母親の胎内にいる間、ずっと夢を見ている。それはただの夢じゃない。自分が送る一生を夢という形で見ている――そんな感じかな？学説というより奇説とか珍説というべきだけど」

「成る程」
グリムは腕組みしながら、感心したように言った。
「それは盲点だったなぁ。胎児レベルの魂なんてロクに研究したことなかったからなぁ」
「研究に戻るって言うなら、まず私を帰してからにして下さいね？」
「いや。そうはいかないんです――わかっているでしょう？」
「ええ。水瀬君並のドジがこの世界に存在するっていう驚愕の事実と共に」
ジトッ。とした視線を放つ美奈子は冷たく言った。
「どうしてオトコって、こうもバカなのかしら！」

美奈子は差し出されたケーキにフォークを突き立てながら言った。

「どこをどうやったら、そんな大切なモノを落とすなんて信じられないことするんですか！？」

「まぁ、そうおっしゃらず」
グリムは拝みながら美奈子に言った。
「頼みます！拝みますっ！あれを人間界に落としたことが知れたら私は殺される！」
「一度死んだ方がいいと思うけど……」
美奈子はため息をついた。
「ハァッ……わかりました」
「お願いします！」
「私という藁にすがるほどなんですから、本当に切迫していることはわかりますし」
「是非！」
「それで？数日前、そのホテルで水瀬君と接触した時、落としたんですね？」

●某高級ホテル内レストラン。
そこで食事をとるのは、妙齢の女性三人。
遥香、イーリス、栗須だ。
「……そうですの」
栗須の答えに、遥香は気の毒そうな視線を向けた。
「春菜殿下の病状は一晩で回復されたというのに、あなたは敵を倒すまでは殿下の御前には立つことも出来ない」
「はい」
栗須は強い意志の宿った目で頷いた。
「それは私自身の覚悟でもあります」
「……しかし、どうやって？」
イーリスはワイングラスを戻しながら訊ねた。
「敵は神出鬼没、所在どころか目的ですらも定かではない」
「悠理君の支援……それだけが唯一の頼みの綱です」

「あまり握りたくない綱だが……」
イーリスは、ちらりと横にいる遥香の顔を見て気まずさのあまり下を向いてしまったが、遥香はそれを軽口と聞き流したらしい。顔色一つかえず、ただ笑みを浮かべているだけだ。

その遥香がワイングラスに手を伸ばしながら、世間話のつもりで言った。
「殿下の御容態は安定。現在は宮中にて静養中……日菜子殿下は？」
「……そ、それが」
栗須は恐ろしく青い顔で周囲を見回した後、やや小声で言った。
「ここ数日、お姿をお隠しになっています」
「？どこかお忍びで？」イーリスと遥香が顔を見合わせた。
「お忍びでしたら、女官か隠密衆が動きます。今回はその動きが全くありません。そして何より……」
栗須は言葉を詰まらせた様子でしばらく黙った後、ようやく口を開いた。
「最後に女官達が殿下のお姿を見たのは、数日前の深夜、お一人で謁見の間に入られる後ろ姿です」
「？」
「それが……？」
「謁見の間で戦闘、魔導兵団に多数の死者が出たのはねそれから１時間と経っていません」
「まさか！」イーリスは目を見開いた。
「栗須殿は、殿下がその戦闘に巻き込まれたと？」
「……女官達の前に姿を現さない。公務は全て中止。公には体調不良の為と説明されていますが、ここ数日、医師団が動いた様子もなく……」
「しかし、日菜子殿下は宮中におられるのだろう？」
「……誰一人、宮中で殿下をお見かけになったと報じてきた者は、少なくとも、女官達にはいません。日菜子殿下直属の橘ですら所在

を把握していません――この意味がわかりますか？」
「何かあった。そういうことか？」
イーリスの顔も青くなる。
当然だ。
日菜子殿下。
それは単なるお姫様ではない。
自分の血を捧げた主君――絶対的存在なのだ。
イーリスは魔法騎士。
その忠誠を捧げた相手。
死んでも護るべき相手。
それが日菜子なのだ。
日菜子に何かあったと聞いて青くならない方が、どうかしている。
イーリスはそう思うし、否定されたこともない。
青くなる栗須とイーリス。
その二人を前に、それ以上に青く――むしろ白くなったのが遥香だ。
「あ……あの……」
遥香は震える声で、栗須に訊ねた。
「ま、まさか今、殿下がいらっしゃるのは……」
「！？」
何か知っているのか！？
そう思った栗須達が緊張と驚愕が入り交じった顔で遥香を見つめる中、遥香は言った。
「その……産婦人科とかじゃ……ないですよ……ね？」
「ありません！」

栗須は怒鳴るように言った。
「で、殿下はまだ純潔を」
そこで栗須は黙った。
あの時、あの敵……グリムは言った。
『高貴な処女の血を、ほんの１００ｃｃ程度』
グリムが春菜殿下を襲った理由はつまり、皇族の処女の血を持つから。
だとしたら？
待ってください？
栗須は眉をひそめて考えた。
皇族の処女の血なら、春菜殿下じゃなくて、麗菜殿下や日菜子殿下でもよかったのでは？
確かに、日菜子殿下が行方不明になってからの出来事だったが、それが説明になっているとはとても思えない。
麗菜殿下は――――まぁ、いろいろあるにしても、日菜子殿下までがダメだとしたら？
その理由は？
接触を阻止された？
――――だったら春菜殿下だって結界防御があった。私の失態がなければ、敵は殿下と接触出来なかったろう。
じゃあ？

そこで栗須は一つの仮定に行き着いた。

日菜子殿下が処女ではなかったとしたら？

まさか！

ブンブンッ！

栗須はその考えを追い払うように首を激しく左右に振った。

ありえない！

あってはならない！

そ……それは確かに、日菜子殿下の悠理君の呼び方が、「水瀬」から「悠理」に変わった。何かにつけて悠理君の情報を今まで以上に欲しがるようになった。

悠理君と二人っきりの時間を何とかして作ろうと四苦八苦していた。

あの宮中で敵に襲われた時ですら、人的被害皆無の報告もあった気のゆるみはあったろうけど、殿下は悠理君に会えることで有頂天になっていた。

“カギを閉めたら部屋を出なさい。必要があったら呼びます”

控え室に入るときも、予め、私達にそう、すごい剣幕で命じていた。

そこで何があったのか。

それはお目付役の九条総女官長しか知らない。

翌日、その女官長が凄まじい剣幕で饗庭団長の元に怒鳴り込んだというが、その理由も当然、知らない。

そして今、悠理君の母親が“産婦人科”を口にした。

「ま……まさか」

栗須は呆然として遥香を見た。

「で、でも……は、早すぎるかな、と」

その声は震えていた。

「そ……そうですよね！」

オホホホッ！と口元を押さえて笑う遥香につられるように栗須もイーリスも笑うが、完全にその笑い声は乾ききっていた。

誰もが、水瀬と日菜子の間に何があったか。

その結論というか、結果の誕生を考えたくなったのだ。

「ま……孫というには、早すぎますよね？まだ殿下はだって……」

「普通なら、今年、高校進学ですし」

イーリスはボトルからワインをグラスになみなみ注いで一気に飲み干した。

「饗庭団長が何か動いていらっしゃるのは知っていますが……殿下との関係は不明です」

イーリスはやや酒臭くなった息と共に言った。

「むしろ詳細は隠密衆の方が詳しいと思いますけど」

「あの宿六に聞くだけ無駄な気はしますけどね」

遥香は料理に手を伸ばしながらきっぱりとそう言った。

その声は明らかに不機嫌さを隠そうともしていない。

遥香の正体を知る二人は、絶対的ともいうべき相手の不機嫌さに内心冷や汗を流しながら出方をうかがうしかない。

何しろ、栗須が由忠にベッドに引き込まれた事件から1日と経過していないのだ。

「そういえば、栗須様？」

思い出したように遥香は栗須に言った。
「ウチの宿六がとんでもないことをしでかしまして――申し訳有りませんでした」
「い、いえ！そんな！」
突然、頭を下げてきた遥香に驚いて、栗須は慌てて両手を左右に振った。
「わ、私本当に！」
栗須はやや声を大きくして言った。
「わ、私は物理的はまだ純潔は維持しています！あ、あれは本当に未遂のまま！そう！未遂なんです！」
「挿入される前だったと？」
「イーリス様っ！」
赤面して怒鳴る栗須を前に、遥香はため息をつく。
「ハァッ……由忠さん、やっぱりトシかしらねぇ」
「奥様」
何故か不思議と落胆する遥香と、それにツッこみを入れるイーリス。
「若い頃はもう元気で元気で、それはもうスゴかったんですけど、前戯に時間をかけすぎるなんて――ねぇ。イーリスさん。バイ○グラって効くのかしら？」
「い、医務局にでも聞いてください。私には縁がありませんので」
イーリスは赤面しつつ視線を外し、栗須はその二人を作り笑いを浮かべて見守る。

「まぁ、とりあえず由忠さんには病院で反省してもらっていますし……悠菜ちゃんと綾乃ちゃんにはいろいろ頑張ってもらって――と」
遥香はウェイターによって出された料理にナイフを入れようとして、それに気づいた。

「そういえば栗須様？」
「は、はい！？」
「いえ……素敵なブローチをされていらっしゃいますね」
その視線の先、栗須の胸元には、シャンデリアの照明を受け、鮮やかな緑色に輝く、何かの葉をイメージしたらしいブローチがある。
「これですか？」
栗須はそっとそのブローチを指さした。
「さっきから気にはなっていたが、なかなか素敵ではないか――高いのだろう？」
イーリスもさすが女性というべきか、興味深そうにブローチに視線を送ってくる。
「実はこれ……」
栗須は苦笑いでそれに答えた。
「戦利品なんです」
「戦利品？」
イーリスと遥香は、意味がわからず互いに顔を見合ってしまう。
「ええ。あのホテルで敵と交戦した時、断ち切った敵のポケットからこぼれ落ちたのがこれなのです。それをブローチに仕立てました」
「それって」
遥香は心配そうに言った。
「それを求めて、あなたは敵に襲われる可能性もあるのでは？」
「はい♪」
栗須は不敵に笑った。
「返り討ちにして差し上げますけどね？」

●病院
その頃。

由忠はまだ病院の中にいた。
――――入院患者として。

イーリスに頭を割られ、妻から言語化出来ないほどの地獄を味わわされた由忠は、痛む体を苦心惨憺して動かし、廊下にいた。
時間はすでに深夜。
「も……漏れるところだった」
男子トイレの前。
由忠は安堵のため息と共にぼやいた。
「遥香も遥香だ。なんで夫が入院したというのに見舞いにも来ない？冴子だって主治医だといいながら、看護婦にはナースコールを無視するように言い渡すとは……虐待ではないか」
「自業自得というのだバカ者」
その声に振り返ると、そこには白衣を着た冴子がいた。
「何を考えている？自分の部下でもない女を相談があるといって言葉巧みに部屋に連れ込んだだと？」
「ど、どうしてわかった？」
「私はここの医者だぞ？あまつさえ、お前なんだ？あれほど女を燃えさせておいて何も無し？勃たなかったのか？」
「う、うるさいっ！」由忠は怒鳴った。
「お、俺にもいろいろと事情というものが！」
「フンッ――――挿れることも出来ず、未遂でそこまでやられれば無様としか言い様がないな」
無様。という言葉だけ強調するしゃべり方をした冴子に、由忠は言葉を詰まらせた。
「安心しろ由忠」
ポンッ。冴子は由忠の頭に手を置いて言った。
「E〇は立派な病気だ。保険も効くぞ？」
「俺はそんなトシじゃない！」
由忠は大人げなさ全開でわめいた。

「その前に看護婦をつまみ食いしたからだ！」
「……どこまで自分の価値を下げれば気が済むんだ？お前」
「う、うるさいと言ったろう」
由忠の言葉に覇気がなくなったことに気づいた冴子は口元だけ笑みを浮かべた。
「ふふっ……まぁ、数日の入院で済む。骨折がこうも簡単に治る騎士の体に感謝しろ」
「治癒魔法を遥香に封じられなければもう退院している」
「妻がいながらその無節操ぶり……奥様が気の毒だ」
「それにここまでやられる俺を、どうして誰も同情すらしてくれないんだ！？」
「それが当たり前だからだ」
「……なら」
由忠は冴子の腰に手を回した。
「少しは癒してくれ。女医として」
「クスリでも注射してやろうか？一発で廃人になるような強力なヤツ」
「俺はお前に注射したい」
冴子は、自分の顔に近づいてくる由忠の顔を、顎を捕まえることで押さえた。
「最近、オヤジ化が激しすぎるぞ？――第一」
ちらっ。
冴子は視線をトイレの方に向けた。
女子トイレ入り口。
そこに、誰かがいた。
「子供が見ている。教育上悪すぎる」
「子供？」

ちらり。由忠が視線を向けた先。
そこには、自分達を興味津々という顔でのぞき見ている少女の姿があった。

「消灯時間だぞ？何をしている――武原琥珀」

「す……すみませぇん」
バツの悪そうな顔でそう言うのは、牛柄のパジャマ姿の少女。
――琥珀。
暗闇の中、少女は恐る恐るという顔で言った。
「私なんてお気にしないで、続きを是非、どうぞ？」
「――次の診察、覚悟は出来ていると？」
担当医の冷たい視線を受けた琥珀は後ずさった。
「ははっ……病室に戻って寝ますね」
そそくさと逃げ去る琥珀を見送った由忠は、冴子に訊ねた。
「あれ、誰だ？」
「児童福祉法違反で通報されたいのか？」
「俺には15歳の娘がいるぞ？ついでに養女は16を筆頭に三人」
「認知していないのまで含めたら二桁で足りるか？」
「ムゥ……自信がない」
「寄るな。この最低オトコ」
冴子は、腰に回された手を乱暴に払いのけた。
「大体、お前は守備範囲が広すぎるぞ？」
「ストライクゾーンの広さは自慢だが――おい、そういうことじゃなくて」
冴子は、由忠の眼を見て、その本気さを計った。
「うむ――しゃべれ」
「どうも。……あやうく、何言おうとしていたか忘れそうだった」
「この鳥頭（チキンヘッド）。トシのせいか？」
「俺はお前より2つ年上なだけだ！」

「十分トシだ。この前の健康診断でついにメタボリックシンドローム警告が出たろう？」
「き……気にしていることを！」
「真面目に話せ」
「一々、話しのコシを折るな！」
由忠は咳払いの後、言った。
「あれは誰だ？そう聞いたんだ」
「武原琥珀。患者だ」
「病室は？」
「３５１号室」
「何年前から入院している？」
「私が赴任する前だから――かれこれ４年以上だ。それがどうした？」
「いや……」
由忠は首を傾げながら言った。
「妙な子だと思ってな」
「お前に言われたら死にたくなるだろうな」
「まぜっかえすな――気配がしなかった」
「気配？」
「ああ。――闇の中から突然現れたような、そんな感じ……俺が気づかなかった事自体、信じられないことだぞ？」
「思い上がりすぎだ。武原琥珀はただの患者だ」
「どこの学校の娘だ？」
「……何？」
「中学生か小学生だろう？学校くらい聞いたことはないのか？」
「……」
急に黙りこんだ冴子の様子に、苛立ったように由忠は言った。
「それ位のコミニュケーションも患者ととらずによく――！」
「……待て」
冴子は何かに思い当たったように廊下を走り出した。

「少し待て」
「って……こっちは歩くだけで精一杯だというのに――――くそっ！」
由忠は痛む体を酷使して冴子の後を追った。
「これじゃ、明日は筋肉痛だな」

ハイヒールでも走りなれているのか、冴子の足は由忠が思ったより速い。
「一般人に追いつけないなんて――――高位魔法騎士の肩書きが泣いているぞ……」
自嘲気味な由忠だが、
「患者さん？何をしているんですか？」
ナースステーションの横を抜けようとして、夜勤の看護婦が声をかけてきた。
「ああ。すまない。冴子センセイのところにちょっと」
「困ります！」
看護婦はナースステーションから出て由忠を止めた。
「もう消灯のお時間ですよ！？」
「ああ。だが、仕事というか」
「寝るのがあなたの仕事でしょう！？」
「独り寝は慣れていなくてね」
「個室が嫌だってことですか？そんなワガママ言わないでください！」
独り寝の意味を取り違えた看護婦が、由忠の腕を放そうとはしない。
「私が連れて行ってあげますから。病室はドコです？」
「ついでに添い寝を」
由忠が下心を出した次の瞬間。
「ぎゃぁっ！」

ガシャンッ！

悲鳴。

何かが倒れる音。

静寂。

「なっ！？何！？」

慌てる看護婦の前で由忠は舌打ちした。

「ったく、悲鳴にまで色気のない女だ」

●病院　カルテ室

半開きのドアの向こうから灯りがこぼれている。

ドアの上に掲げられたプレートは、「カルテ室」。

キィッ。

由忠は、少しきしむ音を立ててドアを開けた。

「――冴子っ！」

普段は整理されているのだろう室内。

今、そこは床中にカルテが散乱し、テーブルや椅子がひっくり返っている。

冴子はその真ん中に倒れていた。

背中が真っ赤に染まっていた。

「ったく――おい！看護婦！止血を急げっ！」

由忠は、冴子を抱き上げ、息のあることを確認し、看護婦に怒鳴った。
看護婦が青い顔でインターホンに何かを怒鳴っている。
外科の医師を呼んでいるらしい。
「うっ……うっ……」
冴子は苦しい息の中、何かを由忠に手渡そうと四苦八苦している。
「遺書か？安心しろ。お前の全財産は俺が有効活用してやるから安心して死ね」
冴子は、当然ながらそれに答える余裕すらない。
「明日、治癒魔法かけてやる。たまには魔法を味わってみるのもいいことだぞ？」
由忠は言いつつも、冴子の手にしたモノをその手からもぎ取った。
血まみれの書類だった。
「カルテ？……違うか？」
「止血します！どいてください！」
応援にかけつけてきたらしい看護婦に指示され、由忠は冴子から離れた。
傷は正面。同じ角度からの袈裟斬りの傷２つ。かぎ爪のようなもので斬りつけられたのは確かだ。
冴子が羽織っていた（由忠から贈られた）防弾特殊繊維入りの白衣が切り裂かれている以上、その力は半端ではない。
幾度となく、負傷者の傷を見てきた由忠は、傷の程度から死ぬことはないと判断し、血まみれの書類を開いた。

「武原……琥珀？」
それは、写真付きの患者のデータカードだった。
写真の中に映し出されているのは、確かに先程の少女だった。
「――――萌子と同い年か」
ストレッチャーに乗せられ、運び出される冴子を見送りつつ、由忠はデータを読み続けた。

琥珀の過去の治療データがこと細かに書き連ねられていた。
「重度の心臓病により6歳から入院……」
おかしな所はない。
心臓病患者の治療がどのようなものかはわからないが、それでも社会人としての感覚からすれば、何一つおかしいと思うところはない。
ただ一つ。
由忠はそこにたどり着いた。
「12歳で――死亡？」
馬鹿な。
さっき会話した相手だぞ？
ピンピンしていたぞ？
何より、あの子が冴子をやったとでもいうのか？
何故？
一体、この病院で何が起きているんだ？
「――ハッ！」
由忠はそれを感じた。

視線。

ハッとなって視線を向けた先は廊下。

開け放たれた先は暗闇の広がる廊下。

由忠は、確かに見た。

闇の中から自分をうかがうような視線。

それは間違いなかった。

「ま、待てっ！」

由忠は慌ててドアを開いた。

「武原琥珀といったな！？話が！」

バッ！

開かれたドアの向こう。

いくつものドアが並ぶ病院の廊下。

静まりかえった深夜の廊下。

そこに人気はない。

「……一体？」

由忠は、ただその廊下に立ちつくすだけだった。

第三十九話

「だいたい、ホテルで何してたんですか？」
「預かりモノを返そうと思いましてね」
グリムは、ティーカップにお茶を注ぎながら、何でもないという顔だ。
「預かりモノ？」
「そうです」
「聞いてもいいですか？」
「瀬戸綾乃ですよ」
「瀬戸さん！？」

瀬戸さん。
ホテル。
瀬戸さん。
ホテル。
瀬戸さん。
ホテル。
……。

美奈子はじっ。とグリムを見ながら考え、そして一つの結論に行き着いた。そして、その黄金の右手が動く。

メリッ！
水瀬悠理を何度となく沈めたその一撃は、某A級スナイパーの銃弾顔負けの正確さでグリムの顔面にめり込んだ。

「あ、あなたね！」
美奈子は席を蹴った。

「せ、瀬戸さんになんてマネを！」

「はっ？ち、ちょっと待ってください」

グリムはめり込んだ顔面を何とか戻そうと四苦八苦している。

「せ、瀬戸さんをこんなところに監禁して、ホテルで調……」

綾乃が監禁され、恥ずかしい服を着せられて、一般部門では公開できないようなコトをされ、そしてホテルに連れ込まれる。

……嫌がりながらも、いつしか快楽におぼれていく綾乃の姿が、調教モノの同人誌の総集編の如く美奈子の脳内で繰り広げられた。

「あ、あのですねぇ――――あ、戻った」

何とか顔面再生に成功したグリムはあきれ顔で美奈子を見た。

「あなた、まだ未成年でしょう？それなのに、なんてこと想像するんですか？」

「か、勝手に人の思考を読まないでくださいっ！」

グリムが“覚（さとり）”の力を持つことを思い出し、美奈子は慌てて因数分解を考えようとして失敗した。

勢いがついた妄想はなかなか止まらない。

美奈子の頭の中では、脚本、四方堂緑経由で入手したヤ○イ同人誌（かなりハード系）をベースに、受け＝綾乃。攻め＝グリムのオリジナルかなりヤバイストーリーが絶賛公開中。

脳内スクリーンでは、快楽に酔いしれる綾乃がメイド服の上から亀甲縛りにされたまま三角木馬に乗せられる所まで行き着いていた。

「……」

グリムの眼がとても遠くに飛んでいた。まるで気の毒な人を見るようなその視線が美奈子には気に入らない。

「な、何ですか？」

「美奈子さん……欲求不満なんですか？」

「ばっ！」

美奈子は一瞬にして某彗星専用機並の色になった。

美奈子だって年頃だ。自分が恥ずかしい妄想をしていることは認めるが、それを他人、しかも男に指摘されるのは耐えられない。

「そ、そんなはずないです！」

「その割りにスゴイ内容でしたよ？――ま、そういうことじゃありません」

そう言ったグリムに、美奈子は恐る恐る訊ねた。

「――縛りはなしですか？」

「何の話ですか」

「いえ。何でも」

グリムは美奈子に瀬戸綾乃に起きている事態を説明した。

瀬戸綾乃の身に起きている事態――魂の崩壊。

「信じられないでしょう？人間の魂が崩壊するなんて――魂なんて、人間の誰も見たことすらない存在なのに」

グリムは小さく笑って美奈子の答えを待ったが、美奈子は首を左右に振ることで答えた。
「信じられる……美奈子さんはそう言うのですか？」
「ええ」
美奈子のその口調は本当にあっさりしたものだったので、グリムは拍子抜けした。
「ど、どうして？」
そう、聞かずにはいられないほど。

「だって」
美奈子は笑いながら答えた。
「水瀬君と1年も友達やってると、ソレくらい何だか当たり前って気がして」
「……美奈子さん」
グリムはどこからか氷嚢を取り出して頭に当てた。
「友達は、選んだ方がいいですよ？」
「ご忠告どうも」
ぺろっ。と舌を出した美奈子は真顔に戻った。

「で、最初の話しに戻しますけど――言いましたよね？瀬戸さんが助かる代償として記憶を失ったって」

「――ええ。たった一つですけど」
グリムの口調はあまりにあっさりとしたものだ。

「たった、一つ？」
美奈子は首を傾げた。
「たった一つの記憶を失うことで、魂って助かるんですか？」

「方法ですよ」

グリムは普段通りの微笑みを浮かべながら答えた。
「魂にとって記憶はいわば生きる原動力。そして感情や行動といったあらゆる人間の行動にとっての根拠――総じて、人間が人間であるための“寄り部（よりべ）”とでもいいましょうか？特に恋愛や、それに近い感情の根拠となる記憶は、大変な意味を持ちます」
「恋愛感情は、人に生きる意味を与えている？」
「正解です」
グリムはポケットから花を一つ取り出して美奈子に手渡した。
“大変良くできました”花にはそう書かれていた。
「ありがたく――いただきません。続きをどうぞ」
「つれない方だ。……瀬戸綾乃の場合、水瀬悠理に対する恋愛感情はあらゆる感情に優先されていた。その根拠は水瀬悠理に関する記憶。――魂を再構成する上では、それは有効な鍵（キー）ともなる反面、実は大変な障害なのです」
「魂に、自分が何者か思い出させるのに記憶を用いることが出来る反面、魂がそれに固執すると、再構成する場合、それが邪魔して再構成が出来なくなる？」
「これはこれは！」
グリムはパンッ。と手を叩くと、清々しいまでの笑顔を浮かべた。
「あなたは天才だ！」
「――ごめんなさい。気になるから、続きをどうぞ」
グリムは美奈子の顔が沈んでいることに気づくことなく、話を続

けた。

「その通り！瀬戸綾乃の魂の再構成を行いたくても、瀬戸綾乃の魂は、水瀬悠理との記憶に食らい付いて放そうとしない。崩壊から救うためには、魂を――」

熱心に話すグリムの言葉を、美奈子は自分の分かる言葉に翻訳しながら、一言一句聞き逃すまいと聞き入った。

グリムはこう言っているのだ。

“瀬戸綾乃”というＰＣの中にある魂（ＨＤＤ）が壊れかかっている。

その記憶（データ）を救うためには、記憶（データ）を一度他にコピーし、魂をインストールしなおさなければならない。

ところが、魂が水瀬悠理という記憶にこだわり過ぎ、その強さが災いして他の記憶を外に出すことが出来ない状況に陥っている。

この状況を放置したら、魂は崩壊、ＰＣが使用不能になるのを待つ以外他に道はない。

この状況を救う方法はただ一つ。

魂内部から、作業に悪影響を及ぼす記憶を消し去る。

そう。

水瀬悠理の記憶を消し去ることだけ。

「……それで」

美奈子はグリムに訊ねた。

「水瀬君の記憶は、元に戻せたの？」

「いいえ？」

グリムはあっさりと首を横に振った。

「キレイさっぱり消し去りましたよ。本人と水瀬悠理君双方の承諾の上で」

「嘘っ！」

美奈子は気色ばんでグリムに怒鳴った。

「そんなの嘘よ！あの二人がそんなこと認めるなんて！」

「水瀬悠理は事情を既に察していた。だからこそ、自分の記憶を失っても、それでも瀬戸綾乃に生きて欲しいと願った。そして瀬戸綾乃は」

ふうっ。

グリムは息を整え、美奈子をまっすぐに見つなおす。

それは厳粛な予言を告げる神官の如き真剣さをこめた視線。

美奈子は思わず身を固くして言葉を待った。

「“私は絶対、悠理君をまた好きになる”……そう、言っていましたよ」

「……」

美奈子は言葉を失った。

自らを犠牲にした水瀬悠理。

失った恋の再生を信じた瀬戸綾乃。

ふたりの絆の深さが、深い楔（くさび）となって美奈子の心に突き刺さった。

「やっぱり……」
美奈子はそう言ったのは、何分かの時が過ぎた後だった。
「私の入り込む余地は……ないよね」
「どうですかねぇ……でも」
グリムはハンカチを手渡しながら言った。
「泣くほどのことではないでしょう?」
「えっ?」
驚いた視線を向ける美奈子に、グリムはあきれ顔だ。
「えっ?って……ご自分が泣いていることもわからないのですか?」
ゴシゴシ。
乱暴に目をこする美奈子の手は、確かに濡れていた。
「ははっ……私、何が悲しいんだろう」
「あなたは二人の絆が終わった。――そう思った。安堵した。ところが、絆はあなたが思ったよりずっと深いものだと思い知らされた。それはつまり、あなたが水瀬悠理に寄せる想いが入り込む余地はないことの証拠――あなたは勝手にそう思いこんでしまったから」
グリムは少しきつめの声で美奈子に諭した。

「未来は、何事かを成し遂げる意志のある者が勝ち取るもの――かつて、私が手にした魂がそう言っていました。その魂は、実に素晴らしい幸福感に包まれていた。一人の女性の魂ですがね。一人の男と身分違いの恋をして、恋故に、その女は全てを代償として、男を選んだ。――その先の人生は苦難の連続。最後は本当に貧しい中で死にました。それでも魂は言いました。本当に幸福な人生だったと――何故かわかりますか？」

「……」

美奈子はじっ。とグリムの答えを待った。

「全てを自分で決断したからです。負けると思って逃げたりなんてしなかったからです。それで何故？やらなかった。逃げた。そんな後悔がないから！――美奈子さん。あなたは弱いと思っているようですけど、違います。あなたは強い。自分で自分の人生を築きあげることの出来る強い意志の持ち主だ。だから、あなたは」

「……クスッ」

美奈子は突然、吹き出した。

「何かおかしいことでも？」

「ううん？」

美奈子は軽やかに手を合わせた。

「心証損ねたでしょうね。ごめんなさい。――あなたの言ってくれたことは正しいと思うし、思いたい。私は負けても何でもやるだけしかない。そんな星の元に生まれたんだもの。でもね？そう理解してて、つい、こう思っちゃったのよ。――“それでも、少しは

落ち込ませてよ。私だって不幸に酔いしれたいわ”って」

「フッ――不幸はお好きですか？」

「自分が不幸に？それなら嫌いよ」

美奈子はきっぱりと言った。

「不幸な話を聞きたがる人なんて、みんなその不幸に心から同情してるんじゃない。内心で、不幸な自分を想像して酔いしれてみたり、自分の方が幸せだって優越感にひたってみたり……そんなものだもの」

「自分に関わりのない不幸だから、受け入れられると？」

「そういうこと」

「それなら」

グリムは美奈子が復活したと判断して言った。

「私の不幸もどうにかしてほしいのですが？」

「あっ。ごめんなさい」

美奈子は慌てて頭を下げた。

「で？途中まででしたけど――水瀬君と会っただけでそんな大切なモノを落とした？水瀬君に見せたとか？」

「いえ」

グリムはバツの悪そうな顔でポケットを軽く叩いた。

「話の途中でメイドとシスターに襲撃されましてね」
「――ホテルって、秋葉原？」
「メイド喫茶とでも？違います。彼女は間違いなく本職です」
「本職？メイドって戦うものだったの？」
「私も驚きましたよ。とにかく、そのメイドの一撃、これが鋭くて、なんとか避けたものの、ポケットが破れたようでして」
「そのメイドさんに何か恨みを買った覚えは？例えば、メイド喫茶で飲み代踏み倒したとか」
「いつも漢らしく現金一括です。失礼な――そうじゃなくて」
「ホント、男ってバカ。メイド服着ていたらなんでもいいとでもいうの？」
「そう言うあなただってメイド服着たことあるでしょう？バニーまで」
「あ、あれは学園祭で！っていうか！人の記憶をのぞき見ないで！」
「ごめんなさい。これはクセでしてね……」
グリムは苦笑しながら詫びた。
「ちょっといざこざがあったことは認めます」
「メイドさん、その件であなたを諦めたわけじゃないんですね？」

「恐らく――私は全く興味ないんですが」

「メイドなのに？」

「メイド喫茶のあのエセメイド――あのエセっぷりがいいんですよ」

グリムは熱心に語り出した。

「礼儀作法もロクにしらないことがもう分かり切った、あのガサツさを隠そうとするあまり、マニュアル通りの動きしか出来ないあの無様さ！洗練された本職のメイドとは比較にならない融通のなさ！」

「それ、褒めてるつもりなの？」

「ええ！紛い物には紛い物の魅力が！」

「――で？その本職？のメイドさんなんだけど」

軽く頭痛がする頭を押さえながら、美奈子は訊ねた。

「カンは鋭そうな方だった？」

「ええ」

「その場に踏み込んだということは、水瀬君と知り合い？」

「――恐らく」

「……そう」

美奈子は踵を返すと、ベッドの方に向かった。

「じゃ――私、寝ますね？……あっ。家の方、何とかしてくださいね？警察とか動かれるといろいろ困りますから」

「え？い、いえ！あの！」

グリムは困惑した顔で美奈子を見た。

「大丈夫ですよ」

毛布をベッドに敷きながら、美奈子は笑顔でグリムに言った。

「カンが鋭ければ、“それ”が何か知らなくても、あなたに結びつく大切なモノだと気づくし、水瀬君と関係があれば、もう動いているかもしれませんね――ここを探しに」

「つまり」

グリムはあきれ顔で言った。

「あのメイドは、“世界樹の葉”をもったまま、ここに攻め込んでくると！？」

「そう。そのメイドさんは何も知らないけど、とにかくあなたを殺したい。その手がかりですよ？それをどこかに置いてここに来ることは考えられません。話からすると、水瀬君も手助けしているはずですし」

「水瀬悠理は、ここの存在すら」

「あなたが誘えばいいんですよ」

美奈子はあっさりとした口調だ。

「そうしたら、あっさりとここに来るんです。そして、水瀬君達が気づかない方法で、それを使わせればいいんです……たとえば、ここに入るための鍵とか」
「なるほど……よく、わかりました」
グリムは頷いた。
「では誘いをかけましょう。――いやでもここに来るように。“世界樹の葉”を持ってきてくれるように」
その顔に浮かぶ微笑みを見た美奈子は、その底冷えのするような冷たい微笑みに背筋を震わせる。

「とにかく、果報は寝て待て――家の方、お願いしますね？」
美奈子はそう言って、ベッドの中に潜り込んだ。

今のグリムの顔を見るのは、美奈子には少しだけ、酷だった。

●翌日　水瀬邸
「おかしい」
ルシフェルがそう言い出したのは、朝食の後かたづけの最中。
綾乃は朝風呂に入っている。
その言葉に、悠菜は食器を片づける手を止めた。

「何がです？」
「瀬戸さん」
「おかしいのはいつものこと」
「それはそうだけど」
ルシフェルは口ごもりながら言った。
「水瀬君っていうか、悠菜ちゃんにも言われたくないと思う」
「あっ！それどういう意味ですか！？」
「言葉通り」

「ムゥ……」
「そうじゃなくて」
台所の椅子に座りながら、ルシフェルは自分のためにお茶を用意した。
「瀬戸さん、まるで別人だよ？」
「――あれじゃあ、バレますよねぇ」
ぽつりとそう言ってしまった自分の口を、悠菜は慌てて閉じた。
「悠菜ちゃん？」
お茶を準備する手を止めて、ルシフェルは悠菜の肩に手を乗せた。
メリメリッ……！！
突如、悠菜の肩のあたりからそんな音が台所中に響き渡る。
ルシフェルが鋼鉄すら引きちぎる騎士の握力の限りを尽くして悠菜の肩を力任せに握っているせいだ。
「痛い！痛いですうっ！」
当然、悠菜はたまらず悲鳴をあげるが、
「痛い？」
対するルシフェルは冷たくそう言い放つ。
「痛いです！やめて下さいっ！」
「だったら――全部しゃべりなさい」
「や……やだ……痛いよぉっ！ふぇぇぇぇんっ！！」
もう悠菜は泣き出している。
「泣いてもダメ」
ルシフェルは握力を逆に強めた。
「桜井さんがグリムって獄族にさらわれて、葉子ちゃんは行方不明。それで瀬戸さんがあれじゃ、とてもじゃないけど知らん顔できない」
「何をしているんです？」
ルシフェルは、背後から聞こえてきたその声にとっさに手を離し

た。
台所の入り口。
そこに立つのは、遥香とイーリス、そして栗須だ。
背後には由忠もいた。
「御母様ぁぁぁっ！」
悠菜は泣きながら遥香の胸の中に飛び込んだ。
「ルシフェルちゃんがイジメるぅっ！」
「まぁ、それは大変」
遥香の驚いたような視線を受けたルシフェルは、そっぽを向いて知らん顔で受け流した。
「それで？悠菜は何をしてお姉さんを怒らせたの？」
「な……何もしていないです」
涙声で悠菜はそう言ったが、
「あらあら」
遥香は楽しそうに悠菜の頭を撫でた。
「嘘つきは泥棒の始まりですよ？」

つまり、娘の言葉を真っ向から否定したのだ。

「嘘じゃないもん！」
「瀬戸さんの様子がおかしいから、何か知っているんじゃないか。そう聞いたんです」
ルシフェルは言った。
「あれじゃ、別人だって」
「綾乃さんは？」
「今、お風呂に」
「そう――ルシフェルさん？お茶、いただけません？」
「はい」
三人分のお茶の準備を始めるルシフェルの前で、遥香は悠菜に言った。

「悠菜ちゃん？御母様の前で嘘はいけませんよ？」
「だっ、だって」
悠菜は困惑した顔になった。
「これは人間に話すことでは」
「話しなさい」
「やです！」
悠菜はムキになった。
「絶対、何が起きているか、みんなには言いません！」
「困ったわねぇ……悠君じゃない、悠菜ちゃんがそんなイジワルしちゃうなんて、お母さん、お仕置きしなきゃいけなくなっちゃう」
「だ、だって！」

「遥香様」
少し苛立った声で悠菜の言葉を遮ったのは栗須だ。
「もしよろしければ、私が悠理君から話を聞き出しましょうか？」
「え〝っ！？」
悠菜は青くなった。
目の前の女性がどれほどの戦闘能力を持っているかは弟のデータからわかる。
栗須明奈。
彼女は、「絶対に怒らせるな！」と、弟が警告している女性陣の中でも筆頭級の存在なのだ。
その女性が、にこりと冷たい作り笑いを浮かべながら自分を見つめている。その視線、すなわち蛇に睨まれたカエルのように、悠菜は背筋に脂汗が流れたのを感じた。

「そうですね。私も綾乃さんにお話がありますし」
悠菜は、肝心の母親にあっさりと見捨てられた。
「ただ、ケガはさせないでくださいね？」
「はい♪」

グイッ！

悠菜は、とっさに逃げようとしたが、タイミングが遅すぎた。

「やっ！やだぁ！」

ジタバタ暴れる悠菜だが、襟首を器用に決められて身動きがとれない。

「お、お母様助けて！」

泣きながら悠菜は母に助けを懇願するが、

「ならさっさと白状なさい」

遥香は冷たく言い放った。

「何でお姉ちゃんにイジワルしたのか、昨晩、綾乃ちゃんと何があったのか」

「待て」

由忠が妻と栗須を止めた。

「真面目な話を娘としたい」

第四十話

「お……御父様」
「悠菜」
「はい」
「今回の件とどうつながるか、それはわからないが」
集まった全員の前で、由忠はそう切り出した。
「昨夜、病院の医師が一人、何者かに襲われた。何より――あの病院には死人がいる」
「死体？」
悠菜が首を傾げた。
「安置所にならあるんじゃないですか？死体があると困るんですか？」
「違う。お前にもわかるように言い直すと、死霊――俺はそう判断した。それで、だ」
由忠は何故か悠菜を睨んだ。
「悠菜」
「はい？」
「悠理の記憶は持ち合わせているな？」
「はい――それが？」
「一昨日、お前が現れる直前、あいつと会話した。あいつはこの病院にからくりがあると言っていた――それは何だ？」
「……えっ？」
全員の視線が集まる中、悠菜はきょとん。とした顔を由忠に向けた。
「どうした？」
「悠理、そんなこと言ってました？」
「……ちょっと、待て」
由忠は額に手をやりながら、信じられないという様子で娘に言っ

た。
「お前……忘れているんじゃないだろうな」
「ですけど！」
悠菜は何故か、ムキになって反論した。
「弟の思考を一々記憶しているはずがないじゃないですか！」
「悠菜ちゃん」
ルシフェルが言った。
「顔にウソって書いてある」
「ウソ」
「本当」
ルシフェルの視線を受けた周囲も彼女の言葉を是認するように頷いた。
「か、顔洗ってくる」
「待ちなさい」
栗須に首を押さえられているので、逃げようがない。
「私でさえ、あなたには聞きたいことが山ほどあるんですよ？悠理君？」
「し、知らないものは知らないもんっ！」
「焦るところがアヤシイです」
「わ、私、急用思い出したから！」
着込んでいたセーターを脱ぎ、逃げだそうとする悠菜。
対する栗須は、目にも止まらぬ速さで、悠菜の首を掴んだかと思うと、力任せに握りしめた。
「痛ぁぁぁぁいっ！」
台所に悠菜の悲鳴がこだまするが、まともに取り合う者はいない。
「この程度で悲鳴を上げるとは――それでも日菜子殿下の」
「痛いものは痛いもんっ！」
ヤクザですら震え上がるだろう栗須のドスの効いた声に、悠菜は子供同然の反論で応じた。
「御父様ぁ！御母様ぁ！」

悠菜は泣きながら両親に救いを求めるが、
「吐け」
由忠は眉一つ動かさずそう言い、肝心の遥香でさえ、
「悠菜ちゃん？楽におなりなさい？」としか言わない。
「これは最初で最後の警告です――悠理君？」
「ぐすっ。悠菜です」
「ど・っ・ち・で・も・お・な・じ・で・す」
悠菜の胸ぐらを掴みあげた栗須の声は、「恐怖を音にしたらこんな感じ」を地で行っていた。
コクコクコク。
そのあまりの迫力に、悠菜は泣きながら頷くだけだ。
「素直に吐きなさい。さもなければ、“ごちそう”を味わっていただきますよ？」
「ご、ごちそう？」
「ええ」
栗須は満面の笑みを浮かべるが、その顔は、どうひいき目に見ても、怒り狂う般若の方が愛嬌というか、かわいらしさがある。
青くなる悠菜の前で、栗須は言った。
「メイドのおもてなしの中でも最上級に属するメニューです」
「お、おいしいの？」
「ええ♪まず、竹串を爪の隙間にねじこんで」
「ヒッ！？」
「ペンチで生爪を一枚ずつ引き剥がして……万力でゆっくり時間をかけて潰します」

「やっ……ヤメ」

「何をガタガタ震えているのです？これはまだ前菜ですよ？」

何が嬉しいのか、栗須は詠うように言った。

「メインディッシュは――――（自主規制！）――――」

悠菜があまりの恐ろしさに気絶した程の“おもてなし”を語り終えた栗須は最後に続けた。

「オプションは多数ご用意しております。今でしたらもれなく“鉄の処女”が」

「栗須さん」

イーリスがげんなりし、綾乃が青くなる中、ルシフェルは平然と言った。

「それやられると、悠菜ちゃんが戦力として使えなくなります」

「そのかわりに私がいます」

ムッ。とした顔で栗須に答えられ、

「ですけど」

ルシフェルは言った。

「悠菜ちゃんだって、懲罰部隊代わりには使えます」

懲罰部隊――――上層部が勝手に決めた軍律をあえて無視したり、背いて見せた勇敢なる将兵を集めて臨時に編成されるもので、原則として選抜制度がとられる。

部隊の任務は、最前線での戦死者の回収や埋葬もあるが、やはり、地雷原を並んで歩いて地雷除去に当たるのが、この部隊の将兵の醍

醐味。
　撤退時の殿軍として敵から送られて来る砲弾の受取係などを仰せつかる名誉職として知られ、あまりの強い周囲からの嫉妬のため、人命を軽視する傾向が強かったり、敗色が濃厚な軍隊では、「あまりに名誉すぎる」ために、選抜者を死刑に処してしまうこともある（無論、この説明は皮肉である。念のため）

「成る程？」
　栗須は心底納得した。という顔で頷いた。
「じゃあ、どうしましょうか？ルシフェル様？何かいい案が？」
「とにかく」
　ルシフェルは考えながら言った。
「悠菜ちゃんがこの仕事の間中、私達の言うことを何でも聞いてくれるようになってくれればいいのです」

「洗脳――ですか？」

「それが一番有効だと思うけど、後遺症が残ると困ります。何か有効な手段はありませんか？」

「うーん」
　栗須はしばらく考えた後、言った。
「私、女の子でしたら何とかする方法を知っていますけど……男の子は経験が」

　栗須は、いまだに水瀬を男の子だと思っていることに気づいたルシフェルは言った。
「今――というか、その子は女の子ですよ？」

「えっ？」

栗須は、何を言われたかわからない。という顔でルシフェルを見た。
「ルシフェル様？」
「股間に手を回してみてごらんなさい」
風呂から上がってきた綾乃が、あごで悠菜の股間を示す。
「間違いありませんよ？」

数分後。

「ヒック……ヒック……」
下半身丸裸の悠菜が、よってたかって脱がされたパンツとズボンを握りしめて泣き崩れていた。
「驚きました」
栗須は足下の悠菜を驚愕の眼差しで見つめた。
「ま……まさか、本当に女の子だったとは」
「いやはや……」
イーリスも言葉がない。
「これは信じないわけにはいかないな」
「だからって！」
悠菜は精一杯の迫力をこめて栗須達に怒鳴った。
「ここまでやらなくてもいいじゃないですか！」
「安心しなさい。悠菜ちゃん」
遥香が悠菜に近づき、その肩にそっと右手を置くと、左手に掴んだデジタルカメラを悠菜の前に突きだした。
「写真はとってありますからね？“オンナノコ丸出し”のヤツ」

「お、御母様ぁ！」

「――――さて。あなた？」
わんわん泣き叫ぶ娘を無視して、遥香は夫に向き直った。

「いつまで寝ているんですか？永眠しちゃいますよ？」

「……俺が……何をしたというんだ……？」

女性陣によってたかって殴り倒された由忠が虫の息で倒れていた。

「さて。悠菜ちゃんを借りますね？」

栗須は、そういうなり、悠菜を抱きかかえ、ドアに向かって歩き出した。

「女の子でしたら、方法はあります♪」

「女の子だったら？」

ルシフェルにはその意味はわからないが、イーリスはその意味がすぐにわかった。

「栗須殿」

イーリスはどこか血走った目で病室を出ていこうとする栗須を呼び止めた。

「はい？」

「次のラウンドは私にしてくれないか？」

「まぁ♪」

その言葉がよほど嬉しかったのか？栗須は艶めかしいまでの微笑みをイーリスに送った。

「よいご趣味をお持ちで♪」

「女子校育ちのあなたには負ける」

「ふふっ――修道院ご経験者がご謙遜を♪」

「水瀬が女の子なら万一心配もいらん。こいつは一度味わってみたいと思っていたところだ」

「な……なんだか私、背中に悪寒が」

真っ青を通り越して真っ白になった悠菜が恐る恐る栗須の顔を見る。

「心配しないでくださいな」

自由の利かない悠菜の首筋に指を這わしながら、栗須はやや甘い声で言った。
「それはね？悠菜ちゃんの、心の中の小悪魔が、これから始まるとっても素敵な世界にときめいている証拠なのよ？」
「あくむ……じゃなくて？」
「ふふっ？痛いのは最初だけよ？可愛い仔猫ちゃん♪」
「――――誰か助けてぇぇぇっ！」
悠菜の助けを求める叫びも虚しく、悠菜の眼前でドアが閉まった。

さらにしばらくした後。

「どうするんです？」
結局、病院に逆戻りした由忠。
それを送り届け、病院の待合室のソファーに座りながら、イーリス達三人は紙コップ片手に途方に暮れていた。
「どうするもこうするも」
イーリスは、紙コップを苦虫を噛み潰したような顔で睨みながら言った。
「こんなマズイコーヒーでよく金を取る気になる」
「そうではなくて」
綾乃は炭酸飲料の入った紙コップを興味深そうに口に運ぶ綾乃がイーリスを止めた。
「情報が不足しています」
「そうだな……」
イーリスもその点については同感だった。
「昨夜、由忠殿は何かを見たという。琥珀とか言う女の子？それが

なんだというんだ?」
「事件と関係はないと思います」
ルシフェルはもっともらしいことを口にした。
「御父様、何か勘違いされているんじゃないですか?」
「どうでしょう」
それを否定したのは綾乃だ。
「悠理さんも、この病院を調べていた。そして何かを掴んだ」
「看護婦のお姉さんでも追いかけてきたんじゃないか?」
「悠理さんの年上好きは知っていますが……そうではないと思います」
「根拠は?」
「悠理さん、由忠様、共にこの病院を疑っていらっしゃる。少なくとも、由忠様は、悠理さんの情報が何か役立つものと判断されておいでのはず」
「ハァッ……イーリスさん」
ルシフェルは、紙コップの中の液体の暖かさを感じながら言った。
「私の友達なら、多分、こんな言い方すると思います。――この事件は最初からすべてがおかしかった。関係のない事件同士が気がつくとつながっていた。この病院も、事件に関係があると疑った方が利口だ」
「桜井美奈子か?」
「はい……私の大切な友達です」
「お前は先に出たから知らないだろうが、家では信楽未亜という娘が怒り狂って南雲大尉が止めるのに苦労していたぞ?泣きじゃくって」
「……未亜ちゃん」
「まぁ、私もその意見には同意する」
ポイッ。
イーリスの投げた紙コップは見事な放物線を描いてゴミ箱に消え

た。

「……よし」

イーリスは会心の笑みを浮かべて頷いた。

「これで成功する」

「はい？」

綾乃とルシフェルは、イーリスの言葉がわからず、思わず顔を見合わせた。

「今、神に祈ったのだ」

イーリスはソファーから腰を上げた。

「我らに敵を滅させたまえ。この願いかなうなら、この紙コップをあのゴミ箱に入れたまえとな」

「汝、神を試すなかれ」

ルシフェルが苦笑しながら言った言葉に、イーリスは吹き出した。

「フッ……神にとっても刺激になる。たまにはいいだろうと思ってな」

1時間ほどしたらまた来る。

イーリスはそう言って待合室から姿を消した。

綾乃もまた、“お手洗いです”と言って席を立った。

「あれ？ルシフェルちゃん」

手持ちぶさたにぼんやりしていたルシフェルに誰かから声がかけられた。

「？あれっ？」

声のした方に振り向いたルシフェルは、自分めがけて手を振る女性の姿を認めた。

「理沙さん？」

「おひさ？元気してた？って……こんな病院にいれば言えないか？」
「お見舞いです」
「またまたぁ♪」
理沙は何が楽しいのか、ニヤニヤとした笑みを浮かべながら、ルシフェルを肘で小突きながら言った。
「何？産婦人科？何ヶ月？」
「理沙さん！」

「調べて欲しいって、近衛から言われてね」
ルシフェルの前に突き出されたのは分厚い封筒。
「岩田警部があれだから」
「御容態は？」
「うん……内蔵は外れていたから大丈夫。もうすぐ退院ってところかしら？」
理沙はちらりとルシフェルを見た。
「――近衛には感謝しているわよ？」
「やめてください」
ルシフェルはくすぐったいものを感じながら言った。
「理沙さん達にはお世話になりっぱなしなんですから」
「まぁ、そうなんだけどさ」
理沙はソファーにだらしなくふんぞり返った。
「全く、ここまで来れば因果としか言い様がないわ」
「因果？」
「ええ……詳しくはソコに書いてあるけど」
理沙はルシフェルの膝の上の封筒を指さしながら言った。
「まず第一、ここにはね？私や南雲がお世話になった人の遺児が入院している」
「南雲先生の？」
「第二、その子について調べろと水瀬君に頼まれた――それ、そのデータよ？戸籍謄本とか。そして第三――その子を調べていた

ら、奇妙な点ばかり出てきた」
「えっ？」
ルシフェルは思わず理沙の顔を見直した。
理沙の顔は決して楽しそうではないが、続ける。
「つまり、この件について――死人はその子の親だけだと思ってたら、他にも死人がボロボロ出ていることがわかった」
「名前は？」
「不破未来。その子を巡っての悲劇の」
理沙はバックを漁りだした。
「犠牲者の第一は、この子よ」
理沙がバッグから取り出したのは、一枚の写真。
そこに写し出されているのは、家族に囲まれて微笑む小さな少女。
「心臓病患者でね。死ねば臓器移植のドナーになるところだったのよ」
理沙はタバコをバッグから取り出すと、場所を思い出したのだろう、舌打ちしてバッグに戻した。
「心臓病の治療には莫大なお金がかかる。だから、その支援をしてやる。その代わり、もし、治療の甲斐無く無くなった場合、生きている子供のためにドナーになって欲しい。親はそう持ちかけられたそうよ。移植される相手は勿論、その子」
「そ、そんなことを！」
娘を助けたい一心の親心に取り入った悪魔の甘言。
そうとしかルシフェルは言い様がなかった。
もし、自分に娘がいて、心臓病を患ったとして、その治療費を肩代わりすると申し出てくれた人物に、そう言われたらどうする？
拒めた自信は、ない。

「親は同意した。治療こそが大切だと思ったのね。……当然だけどさ。んで、手術こそ行われたけど――案の定、娘は殺された」
「えっ！？」
「殺されたのよ。この病院で」
理沙はまっすぐ前を向きながら言った。
「術後、経過は順調だったの……ところがある日、廊下をすれ違いざまに人にぶつかった。ただでさえ弱っていた心臓がその衝撃に耐えられず……」
「何でそれで事件にならなかったんですか？」
「なったわよ……なったけど、相手は足を骨折して、ようやく松葉杖で歩ける体。よろけてぶつかったということになって……もう不可抗力に近いってことになった」
「その……親御さん、告発もせず？」
「そりゃそうよ」
理沙は言った。
「警察も周囲も、やむを得ない事故だって処理しちゃって……死因も心臓病の発作で処理され、両親は自殺。娘に先立たれた絶望ってヤツね」
「でも、それがどうして殺人だと？」
「その事故起こした男、病院の屋上からフェンス乗り越えて飛び降り自殺してるのよ。告発されなかった理由はこっちの方が大きいでしょうね」

「？」

ルシフェルは意味がわからず、理沙の言葉を待った。

「ルシフェちゃん？骨折って満足に歩けない男が、どうやって階段しかない屋上へ行って、フェンス乗り越えられたと思う？」

「あっ！」

「口止めされたのよ。事件調べた担当、後で贈収賄で捕まった挙げ句、こっちも牢屋で首吊ってるからもう事実は闇の中だけどさ。こいつにも何かがあったと見るべきね。警官としてはこれはもう、援助を申し出たヤツが黒幕と疑うしかないのよ」

「自殺したご両親、さぞ無念だったでしょうね」

「その自殺だって、奇妙なのよ？まるで何かの儀式をして、自らを供物にしたとしか思えないって」

「……供物？」

「第三種事件には認定されなかったけどね？世の中、こういうの多いはずよ？ここまでをまとめると」

理沙はつばを飲み込んから口を開いた。

「この子の治療を巡って、臓器移植の動きがあった。そして臓器提供者は殺され、その殺害者も消され、警察は目をつむるよう工作された。対する臓器提供者の両親は抵抗のため自ら死を選んだ」

「臓器……移植は？」

「死後すぐならよかったんだけどねぇ……」
理沙はメモを見ながら言った。
「検屍や何やらで結局、臓器は使い物にならず……いっちゃ悪いけど、殺し損、殺され損ってところかしら?……御免」
目をつり上げるルシフェルに理沙は詫びた。
「少し軽はずみだった。でも、そういう結果に終わった。そうそう。肝心なこと忘れてた」
理沙は立ち上がった。
「水瀬由忠って男がいるはずだからソイツに渡して」
「父をご存じなのですか?」
「ええ」
何故か理沙は苦い顔になってから言った。
「警視庁警備部参事官やってる私の先輩の愛人」
義娘であるルシフェルが言葉に詰まったのを見た理沙は続けた。
「そんなのはどうでもいいの。ルシフェルちゃんに頼みたいんだから」
「私に?」
「中に、殺された子の両親の自殺現場の写真が入っている。何かひっかかるのよ――普通の警官なら、オカルトに染まっていたで片づけるけど、あなた達とつきあいがあるおかげで常識無くしつつある私には気になるの」

「いろいろ引っかかりますが……後で岩田警部にご報告すれば？」

「そうね。警部の方がありがたいわ。職場復帰目指して頑張るでしょうし。あ、私、これから仕事だから。――じゃね？」

歩き出した理沙に、ルシフェルは訊ねた。

「最後に――資金提供者と、その殺された女の子の名前を教えてください」

理沙が口を開いた。

「資金援助申し出たのは、臓器被提供者の祖父、一年前の事件の犠牲者……霧島源一郎」

その言葉は、確かに耳に届いた。

やっぱりそうか。

そうは思う。

だが、次は？

あり得ない。

「殺されたのは」

あってはならない。

だからこそ、信じられない。

信じたく、ない。

だが、理沙の言葉を否定は出来ない。

理沙はこう、言ったのだ。

「武原琥珀よ？」

第四十一話

その頃、お手洗いに出たはずの綾乃は、病院の裏手にいた。
鉄筋コンクリート製の建物が立ち並ぶ裏手に人気はない。
それなのに、綾乃はそこに呼びかけた。

「カノッサ」

返事は、ない。

「いるのはわかっているのですよ？カノッサ」

風一つない世界に綾乃の声だけが響く。

「お仕置きされたいのですか？」

あくまで冷静さを保った声のように聞こえるが――

ブンッ。

どこから取り出したのだろう。
綾乃はその手に剣を握っていた。

「カノッサ？」

「は、はいはいはいっ！」
その声に脅されたように、突如、綾乃以外の声が響き渡った。
綾乃が振り向いた先、病棟の壁に開いた黒い穴から、身を乗り出

してきたのは、豹柄の毛皮の帽子を被った小柄な女の子。
女の子が出ると同時に、穴は消滅した。
「こんな所で、何をしているんです？カノッサ」
そう、問いかける綾乃に、カノッサと呼ばれた少女は、まるで飼い犬のようにまとわりつきながら言った。
「勿論♪ご主人様のお側にいるためです♪」
まるで猫のような愛らしい顔立ちは、よく見ると左右の瞳の色が違う。彼女がヘテロクロミアであることを告げていた。
そんなカノッサに、綾乃は剣をしまいつつ、冷たく言った。
「昨日の夜から、姿が見えませんでしたけど？」
「ギクッ」
まずいことを言われた！という顔で、凍り付くカノッサに、綾乃は容赦なく言った。
「どうせ、人間界で遊びほうけていたんでしょう？」
「ち、違います！」
カノッサはムキになって答えた。
「ちゃんと第四軍司令部から人間界侵攻作戦の手順を聞き出したり」
「……ああ。あれですか」
しばらく考えた後、ようやく思い出したらしい綾乃は、カノッサに言った。
「確かに“門（ゲート）”で待機するよう、第四軍に命じたのは私です。です

が？」

そろーっ。と距離をとろうとするカノッサの首根っこを捕まえた綾乃は、

「人間界侵攻作戦の手順とは？まさかあなた、“姫様が人間界に侵攻を企てている”とか言いふらしたのではないでしょうね！？」

「ち、違うんですか！？」

カノッサは驚愕の表情を浮かべた。

「てっきり、そういうもんだと思って！」

「何を言っているのです！もういいです！さっさと第四軍には撤退命令を。私からの勅命です！」

「えーっ！？」

突然の撤退命令に、カノッサは不満そうに口を尖らせた。

「みんな殺る気満々ですよ？人類根絶やしにしちゃえって」

「誰がそんなことを命じるものですか」

綾乃はカノッサから手を離した。

「いいですか？私は今、とても大切な局面に」

「ああ！知ってますよ？」

カノッサは自信満々に言った。

「姫様が城から“世界樹の葉”を持ち出して、あげくに盗まれたことでしょう？」

「な、なんでそれを！？」

今度は綾乃が驚愕の表情を浮かべる番だった。

その綾乃に、カノッサはあっさりと言った。

「城から“世界樹の葉”が盗まれれば、すぐに知れわたりますよぉ。天界・獄界にも話は伝わっています」

「――――くっ」

脱力してその場にへたり込む綾乃。

「生きてます？」

つんつん。と、綾乃の後頭部をつつくカノッサに綾乃は答えた。

「死にたい気分ですが――――まだ生きています」

「ですからぁ。もう諦めて第四軍使って、この地上を焼き払っちゃいましょうよ。その方が圧倒的に楽ですし」

「後処理はどうなるというのです？」

「むぅ……昔どおり、魔界の植民地にしちゃうとか♪」

「政（まつりごと）は、あなたが考えているより難しいものです」

綾乃はなんとか立ち直った様子で、膝についた土を払った。

「そんなことは出来ません。ただし」

その視線は冷たい決意を秘めていることを、カノッサはすぐに見抜いた。

「“世界樹の葉”を放置することもまた、出来ません。あのグリムから奪還し、あるべき所に戻さねばなりません。さもなければ、私は永遠の汚名を背負うことになるでしょう」

「そうしなければ、グロリア陛下からどんな沙汰を受けるか――――の間違いじゃなくて？」

「肉体捨てなければならないまで追いつめるなんて、親のすることですか！？」

「親に叱られて、肉体残して家出する娘って方がすごいと思う」

「――――痛み分け。そうですね？」

「まぁまぁ」

カノッサは綾乃を何度もぽんぽん叩きながら言った。

「そんな気張らなくても、なるようにしかなりませんよ？」

「貴女ほど気楽に生きられれば、人生楽しいのでしょうけど……」

「万一の時には“これ”使いますよ？グリムの居場所は情報局でも掴めていないようですけど」

そう言ってカノッサが取り出したのは、小さな銀色のダーツの矢。

それを見た綾乃の顔が何故か怒りに歪んだ。

「カノッサ」

「使う？」

「今回の件でその使用は厳禁です」

「えーっ！？」
カノッサは相当心外だ。という顔になった。
「使いなよぉ！獄族だって無事じゃ済まない呪いの矢だよ？せっかく私が軍団から特別にもらったんだからさぁ！」
「ダメです」
その矢を見たくない。といわんばかりに、綾乃は視線をそらせた。
「むぅ……そうだ！」
思い出したように、カノッサは言った。
「人間界のこの国の皇女にならいいでしょう？殿下の大嫌いな恋のライバル」
「カノッサ」
「ね！ねねっ！？そうしようそうしよう！そうすればあの“天界の玩具”は姫様の者だよ？その人間の“器”使わなくても――」
チャッ。
カノッサは、喉元に突きつけられた剣の切っ先によって、それ以上の言葉を粉砕された。
「忠告しておきます」
綾乃は無表情を演じているが、内面の怒気は隠しようがない。
「まず、水瀬悠理を好きなのは私じゃありません。瀬戸綾乃です。それを間違えないように。それと、私はその“呪具”が大嫌いです。私に許しもなく使ったら――わかっていますね？」

「ううっ……憎きライバルを苦しみ抜いて殺せるチャンスなのにぃ。――じゃ、どうですか？息抜きに見物なんて」

「見物？」

「そう。け・ん・ぶ・つ♪」

ウププッ。と、口元を押さえながら意味深な笑みを浮かべるカノッサの様子が、綾乃には気になった。

「何です？」

「あのですね？」

カノッサは先程の黒い穴が開いていた壁を指さした。

「あっちでね？女の子が女に犯されているの。――見物（みもの）だよ？」

「？……ああ」

綾乃は先程の悠菜を巡るやりとりを思い出し、小さくため息をついた。

「あの子もお気の毒に」

そっ。

綾乃は手を合わせた。

「どうした？ルシフェル」

「桜田門の人から渡してくれって、さっき理沙さんが」

“愛人”を“人”と略した娘の手から、封筒を受け取った由忠は、

中を軽く見ただけでルシフェルに言った。
「で？かいつまんで説明してくれ」
「自分で読んだらどうです？」
「それでは面白みがない」
由忠は笑った。
「たまには、ルシフェルとも話をしたいさ――親子だろう？」
「それは、そうですけど」
ルシフェルは何だか割り切れない。という顔で遥香に言った。
「御母様？御父様、何かズルしてません？」
「御父様はそう言う方です」
遥香はきっぱりとそう言い切った。
「でもね？ルシフェルちゃんとお話ししたいっていうのは、御母様も同じよ？」
その優しさがルシフェルにとっては泣けるほどありがたい。
「それがどんなことでもね？」
「で？ルシフェル、村田理沙から何を言われた？」
ルシフェルは、両親に理沙の言葉を告げた。

武原琥珀の死。

その首謀者の霧島源一郎。

そして――

「理沙さんは、この自殺現場が気になると言っています」
封筒からルシフェルが取り出したのは一枚の写真。

それを見た両親の内、由忠は眉をひそめた。

「お前……これって」

「あら？あなた、ご存じで？」

「当たり前だ」

由忠は食い入るように写真を見つめた。

「これ……召還魔法陣だぞ？」

「召還？」

遥香とルシフェルが思わず顔を見合わせた。

「火龍（サラマンダー）でも召還するつもりだった。とでも？」

「馬鹿な」

由忠は妻の軽率な発言をたしなめるように、その写真を指に挟んで遥香に見せた。

「この魔法陣は“禁呪”の一種……獄族の召還魔法陣だ」

「召還魔法陣？」

「ああ……遥香は知らないか」

由忠は妻と娘に語り出した。

人間――魔導師が他界の存在を招き寄せる魔法を召還魔法という。

魔界や天界の精霊を召還する精霊召還魔法に使用されることが多く、その方法も魔導師のレベルや技術によって多岐にわたる。

この魔法の存在そのものは一般的に知られているし、“火龍”に代表される“四大精霊”（地精：ノーム、水精：ウンディーネ、

火精：サラマンダー、風精：シルフ　）を呼び出す魔法そのものも一般的といえば一般的だ。

だから、魔法に無知な者は、この召還魔法一つで、どんな存在でも――――例え“神”と呼ばれる存在でも――――すべてをこの世に召還し、使役出来ると勘違いしている。

召還魔法はそんな単純な代物ではない。

召還する対象は、四大精霊のように、この世界でも存在する元素であるが故に召還が単純なものばかりではないのだ。

これが“魔族”などの高位存在を呼び出すとなれば話はまったく異なる。

去年の倉橋での一件（『呪われた姫神』参照のこと）に代表されるような気の遠くなるような手間と準備、そして犠牲、対象によってそれらは全く異なる上に、どんな存在が来るか、まるで制御できないのも厄介な話なのだ。

何より、高位存在であればあるほど、召還の成功率は下がるし、相手が言うことを聞いてくれる可能性は低くなる。すなわち、それは召還を行う魔導師の命が危険にさらされる確率が高くなることでもある。

そのリスクを考えたなら、どんな問題でも、人間の手でどうにかした方が絶対にいい。　それが、魔導師達のほぼ統一された見解というのが、召還魔法の難しさを照明していると言えよう。

それでも高位存在を呼び出したいと考える命知らずのために編み出されたのが、“召還魔法陣”。

それは、あくまで召還を可能にする基礎中の基礎で、成功も、使

用者の命を保証するのでもない。

「一言で言えば――」

由忠は束になっていた現場写真を見ながら言った。

「費用対コストから見て恐ろしく非効率な、アホのやるコトだ」

「私達を人間が呼び出す魔法は知っていますが」

遥香は首を傾げた。

「でも、ここ3千年で、召還に応じた者ってほとんど」

「聞かないだろうな。精霊以上を呼び出す高位召還で決定的なのは、魂の呼応……ロイズール様と綾乃ちゃんのようなきわめて希な関係がなければならんのだからな」

「じゃあ」

ルシフェルは父親に訊ねた。

「この魔法陣は失敗したの？」

「そうとしか思えないが……」

ペラッ。

めくった一枚の写真。

そこに映し出されたものに、由忠は凍り付いた。

「なっ！？」

「あなた？」

「御父様？」

「……」

呆然としてその写真を見る由忠の頭がいつの間にか白くなり始めた。

「やだっ！」
着物の袖に手を入れた遥香が、どこに入れていたのか、白髪染めを取り出すなり由忠の髪に塗り始めた。
「まだ早いですわ！」
カチャッ。
由忠が震える声で何かを言おうとした時だ。
「失礼いたします」
一礼の後、病室に入ってきたのは栗須だった。
「悠菜ちゃんが白状しました」
「あら？早かったですね」
白髪染めをしまいつつ、遥香が驚いたように言った。
「よほどの拷問でもかけなければ、悠君は白状しないと思ったんですけど」
「苦痛より快楽の方が、人の心を弱くさせます」
栗須は何でもない。という顔で、ドアの横、悠菜を連行するまで座っていた椅子に腰を下ろした。
「ちょっと信じがたいことを言っています」
「信じがたいこと？」
ルシフェルは首を傾げて言った。
「信じやすいことなんて、水瀬君言えないですけど？」
「そうねぇ……」

遥香は否定するどころかむしろ肯定の立場らしい。
とても身内の言葉とは思えない言葉をかけられる水瀬に、栗須は少しだけ同情した。
「で？」
由忠は何やら、神に祈るような……いや、法定で判決を待つ死刑囚並みの神妙な顔で栗須に訊ねた。
「中佐……あいつは、何と？」
「はい」
ちらり。と全員の顔を見た上で、栗須は言った。
「まず第一に、この病院の地下から魔素が発生している。その理由は、この地下の一部が、別世界の“ある施設”に強引につなげられている、そのゆがみによるものだと」
「ある……施設？」
何かしら？思わず夫の顔を見た遥香の目の前で、由忠は一気に20歳は老けたように思えた。
「はい……なんでも、人間の死体を中心に、人間に対するあらゆる実験の材料――悠菜ちゃんの言葉を借りると“モルモット”を確保することが目的。なお、このような場所は、いくつかの刑務所にも存在するそうです」
突然、由忠が倒れた。
「つまり」
夫を介抱しつつ、遥香は驚いたように言った。
「死体泥棒のために、この病院の地下がつなげられていると？」
「正確には、魔素影響による死体製造も期待してのことだそうです。ゆがみはそのためわざと作られた」

栗須は言った。
「そのつながっている先なんですが」
「――待て」
手を突きだして栗須の言葉を止めた由忠は、突然、ベッドの下から酒瓶を取り出して一気にラッパ飲みした。
「あなた！」
「御父様！？」
妻や娘の咎める声ですら、今の由忠の逆鱗に触れるだけだ。
「黙れっ！」
由忠は怒鳴った。
「水瀬家の当主として、次の言葉はこうでもしなければ聞けたものではないわ！中佐！もう何が来ても動じない！続きを言えっ！」
突然の由忠の豹変に呆然とする母子を後目に、由忠は栗須に続きを促す。
「は、はい――その、神音商会と」

第四十一話（後書き）

Hシーン削れなんて言われたって、長編ばかりの身では、場所探すだけで一苦労だっての！

第四十二話

神音商会。
“天原骨董品店”や“天原組”を傘下に置く広域指定暴力団……もとい、それ同然の組織。

そのトップは――――天原神音（あまはら・かみね）。

「何をやっているんだあの人はぁぁぁっっ！！！」

イヤでも思い知らされる結論に、たまらずに叫ぶ由忠。
唖然とする遥香。

その二人の様子に、残されたルシフェルと栗須が思わず引き気味で互いの顔を見合う。

「あの――――お知り合いなのですか？御父様？」
「閣下？ご存じのお方ですか？悠菜ちゃんは魔族だとか……」

「ああ……忘れたい位、いや。最初から関係が無かったことにして欲しい位のな」
由忠は力無い声で頷く。

「天原神音……別に水瀬神音とも……つまり、俺の実の母親だ」

「はぁっ！？」
ルシフェルと栗須のすっとんきょうな声がハモって病室に響いた。

「つ、つまり」
ルシフェルは言葉につまりながら、
「御父様は……魔族とのハーフ？」

「そうだ」
由忠はそれに頷いた。
「水瀬家ではそう珍しいことではない」

「ど、どういう家系なんですか？」

「後で教えてやる……ルシフェルも我が家の一員なんだからな――知る前にはよほどの覚悟が必要だが」

「ということは……」
なんてところに養女に来たんだろう。と白くなるルシフェルに対して、意外と動じていないのは栗須が訊ねた。

「悠理君は、魔族のクォーターで、神族のハーフ？」

「そう、なりますわね」
遥香はなんでもない。という顔でそれを認めた。

「はぁ……」
ということは、日菜子殿下の次の帝は、魔族の血を継ぐ、神族のクォーターかぁ……。
そんなことをふと考えてしまう。
血統としてはかなり悪くないはずだ。

「で？」

由忠はようやく落ち着いたらしい。
「悠理はどうしてそれを知った？」
「ああ、それでしたら」
栗須は何でもない。という顔でとんでもないことを言い出した。
「空間つなげるのをアルバイトでやったの、悠菜ちゃんと悠理君なんだそうです」
ジャキッ！
室内にそんな音が響いた。
「ぬがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！」
「あなた！落ち着いて！」
遥香が羽交い締めにして止めるのも無理はない。
ベッドの上に仁王立ちになる由忠の手には抜き身の刀が握りしめられていた。
「そんな格好で外に出たら、次は精神科のお世話ですよ！？妻として世間様歩けなくなるじゃないですか！」
「離せ遥香ぁっ！」
由忠が錯乱していることは間違いない。
「あのバカ共、今度という今度こそ、手打ちにしてくれるわ！」
由忠は凄まじい怒鳴り声をあげた。
「お袋といい、あいつ等といい、どこまで家の恥をさらせば気が済むというんだ！」

ガンッ！

普段は静かな病室に、今日は様々な音が響く。
そろそろ看護婦が怒鳴り込んでくる頃だ。
栗須はそう思って、こっそりため息をついた。

その目の前で、どうしたものか、由忠は壁にめり込んでいるが、そんなものは関係ない。
この不潔で不純でどうしようもないオトコが天罰を喰らうのは、何度見ても楽しいのだから。

ただ、看護婦が怒鳴り込んでくるのだけは勘弁してほしいと思う栗須の後ろ――――丁度、ドアの方から声がした。

「病院で騒いでいいと躾たつもりはなくてよ？――――由忠？」

栗須が振り向くと、いつの間にかそこには一人の少女が立っていた。
身長は１３０センチ程。
黒いゴシック調のかなり手の込んだ高級なドレスに身を包む少女の手には花束が握られていた。

「折角、お見舞いに来てあげたというのに、そんな振る舞いとは――――いい度胸ね」
慌てて近づいて来る遥香に花束を渡した少女は、まるで目に見えない糸を引くように、右手をちょい。と動かした。

ズルッ――――ベタンッ！

由忠がその動きに合わせるように、壁から引き剥がされ、ベッドに叩き付けられた。

「全く……親の躾がなっていないって世間様に思われちゃうじゃない」

遥香が用意した椅子に何でもない。という顔で座る少女。

その動きは、宮中女官団所属の栗須の目にも優雅であり、そして寸分の隙もない洗練された動きであることは明白だ。

栗須は、興味と警戒がないまぜになった視線を少女から離すことが出来ない。

「悠理達には、空間制御の練習としてやらせただけです」

少女はどこからかティーセットと茶葉を取り出し、勝手にお茶を用意し始めた。

「ああ……いいんですよ？遥香さん。たまには私がやります。いい茶葉が入ったの。ルシフェルちゃんだっけ？初めまして。そちらのメイドさんもご一緒にいかが？」

「お……お袋」

どうにか復活した由忠がそう言った途端――――

ガンッ！

由忠の後頭部を巨大な金ダライが直撃し、由忠は沈黙した。

「御母様と呼びなさいと何度言ったらわかるの！？あなた、今おい

くつ！？」

「も、もうそろそろ」

「４０近くになって！親の呼び方も知らないとは恥ずかしい！」

「あ、あの……」

ルシフェルが恐る恐るという顔で言った。

「御母様？」

「ああ――申し訳ございません。御義母様」

遥香が少女に深々と頭を下げた。

「養女をとりましてもご挨拶にもうかがわず」

「……いいのよ」

少女はバツが悪いという顔で言った。

「いくら何でも、子供の教育環境としては悪いところだし」

「恐縮です。改めて今度、家の方にもお越しになられて、さらに養女にしたエリスとエマも顔も見て上げてくださいませ――ルシフェルちゃん？ご挨拶なさい？」

きょとん。とするルシフェルに遥香は言った。

「神音様……あなたの御婆様ですよ？」

うそ。

それがルシフェルの偽りない感想。

自分より圧倒的に年下が御婆様？

何の冗談だろう？

「ふふっ……魔族や神族はなかなか年をとらないから不思議なんでしょう？」

少女＝神音は笑いながら言った。
「ヴォルトモード卿がこの前絶賛していた娘ね？」
「！！」
ヴォルトモード卿。
かの一年戦争時の魔族側総大将。
ルシフェルと決闘を演じた相手。
それを知っている？
「そんな顔しない」
神音はティーカップを渡しながら、たしなめるように言った。
「あれは私闘じゃない――戦争だった。それはわかるわね？」
その言葉はわかる。
わかるからこそ、唇を噛みしめながら、ルシフェルはただ頷くしかなかった。
「は……はじめまして。ルシフェルです」
「よろしい♪」
満面の笑みを浮かべて頷いた神音は由忠に向き直って怒鳴った。
「で！？このザマは何？説明なさい由忠！」

「そ、その前に」
由忠は弱々しい動きで写真を母親に見せた。
「この写真について教えてください」

「何よこの写真」
指が軽く動いただけで由忠の手から写真が離れ、神音の手元に移動する。

「はん？これがどうしたの？」
神音の見る写真。
そこには、魔法陣と、その側に転がる紙袋が写っている。

「その紙袋……“天原骨董品店”と」

「当たり前じゃない」

神音は呆れ顔だ。

「この魔法陣、ウチの店で無料頒布したモノだもん」

「……」頭を抱える由忠。

「……」言葉を失う遥香達。

「何故、そんなことを？」

勇気を出して、祖母にそう問いかけたのはルシフェルだ。

「グリムに頼まれたのよ」

神音はにべもなく答えた。

「召還されるのはあいつ。そう固定しておけば、獄族であるアイツは楽々と魂が手に入る。そうね――魂と引き替えにあなたの願いかなえます無料キャンペーンってとこかしら？素人でも出来るように簡易化、自動化されているヤツよ」

「あってほしくさえないキャンペーンですね」

栗須は思わず言ってしまうが、それを否定する声は上がらない。

「今までウチを訊ねた人間のお客には全員配布しているけど、実際にやったのはそう多くないははずよ？それがどうしたの？なに？実際使った物好きがいたんだ」

「ええ――それでこっちは大迷惑です」

由忠は金ダライを鉄兜代わりにしている。

「配るこっちは冗談なのに……それで？」
神音は息子にきつい視線を投げかける。
「水瀬家当主として、この状況をどうするつもり？」
「はぁっ？」
由忠は意味がわからない。
ガンッ！
さらに金ダライが頭上に落下してきた。
「もうっ！グリムよグリム！」
頭を抱えて唸る息子に近づくなり、神音はその胸ぐらを掴んだ。
「あいつ、“世界樹の葉”は盗み出すわ、迷宮作り出すわ、もうやりたい放題じゃない！」
「そ、そんなこと僕に言われても……」
朦朧とする意識の中、由忠は何とかそう弁明したが、
「あるの！」
母親には聞こえなかったようだ。
「目的は、私怨であんた達をなぶり殺しにすること。
だけど、問題はそんなささいなことじゃない！
その後よその後！
グリムはね！この世界で大量粛正やらかすつもりなんだから！
目的？
わかるでしょう！？
“世界樹の葉”を使って、この世界を獄族で支配するつもりなのよ！

死者に限定された魂の管理を生者にまで拡大することで、この人間界に新たな“世界樹”を作り上げる。つまり、人間の生死、運命を支配することで、かつての獄族の繁栄を取り戻すって！あいつは本気！――――このまま放っておいたら、四界は戦争になるわよ！？」

「……つまり」

話が大きすぎて今ひとつ理解できない由忠は、それでも母親の言葉を正確に翻訳した。

「単なる金儲けのつもりでやったことが、気がついたら収拾がつかない騒ぎになっている。何とかしろ――――そういうことですね？」

神音は顔を真っ赤にして息子の首を締め上げた。

「その通りだけど、そこまで翻訳しなくていいの！
私の言っている方が格好良いじゃない！
いい！？
息子としてナントカなさい！」

「な、何とかって……」

クビを絞める力が強すぎて、由忠は息が出来ない。

「このままじゃ、魂奪ったヤツの死体や有り金目当てでグリムに協力していたことが、天界と魔界どころか、獄界にまで知れ渡ってしまうじゃない！――――あなた、御母様をお尋ね者にしたいの！？」

これほど横暴な言い分もそうはないだろう。

由忠は薄れ行く意識の中でそう思った。

――由忠が地獄を見ていた頃。

イーリスは病院の廊下をうろつくうち、一人の少女を見つけた。

加納萌子。

由忠の娘であり、イーリス自身、何度か面識がある子だった。

「人捜しか？」

背後からの言葉に驚いたように、萌子は振り返る。

「えっ？ああ、イーリスさん。どうしたんです？」

「ん？」

「――ここ、産婦人科ですよ？」

言われて気づいた。確かに妊婦らしい女性が多数行き来している。

「見物……としておこうか」

「も、もしかして」

不意に萌子の手がイーリスの腹に触れた。

「？」

その意味がイーリスにはわからない。

ただ、萌子の目は真剣そのものだということだけは、イーリスにもわかる。

「御父様に……」

「……」

「よ……よかったぁ」

病院の中庭は、入院患者の憩いの場となるよう、ちょっとした西洋風庭園のような作りになっている。

その一角、大理石で出来たベンチに座った萌子が大きく安堵のため息をついた。

「妊娠しているのかと思った」

「……私が妊娠していないことがそんなに嬉しいか？」
「だって！」
萌子はイーリスに言った。
「この年でまた兄弟が出来たなんて、どうやってお友達に説明したらいいんですか？」
「……そういうことか」
「そうですよ！」
萌子は憮然としてイーリスにかみついた。
「ルシフェル姉様は別格にしても、エリスとエマは養女ってことで納得っていうか、金髪の可愛い妹ってことで確かに自慢できます」
エリスとエマ……。
その名を出した後、萌子は自分の言葉の意味を思い出し、イーリスに詫びた。
「ご、ごめんなさい。……本当の親権者は」
「いや、いい」
イーリスは小さく微笑むことで萌子の謝罪を受け流した。
「私は神に仕える修道女（シスター）だ。子育てなぞ出来ん」
「二人は今でもイーリスさんのこと、“御母様”って言ってますけどね」
「そうか……」
「会っていますか？」
「あの二人とか？時折な――――所で」
「はい？」
「父親に会いに来たにしては、ヘンな所にいたな」
「御父様、入院されたんですか！？」
萌子は驚いてベンチから飛び上がった。
「な、何で！？」
「別にいつものことだ」
「あ、成る程」
父親が入院したというのに、萌子はあっさりとしたものだ。

「じゃ、放っておいても問題ないですね。イーリスさんも、あの人にはあんまり近づかない方がいいですよ？」
「安心しろ。不祥事引き起こすたびにエリス達に通報している。おかげて閣下は、家に帰るたびに“御父様不潔！”の大合唱を喰らう。随分答えているらしいぞ？遥香様によれば、最近は仕事がなければ定時に家に戻ってくるそうだ――飲みにも行かず」
「へえ？あの子達、活躍してますね」
「うむ」
イーリスは嬉しそうに頷いた。
遥香に小遣いを取り上げられていること、メタボ警告が出ていること、それから、由衣の胎内では、萌子の新しい兄弟がすくすくと育っていること。
イーリスは全てを口にしないことにした。
「あの閣下を振り回すのだからな……我がコトながら、大した娘達だ」
「フフッ……母親」
「君もいずれはわかることだ」
「そうですね」
萌子は頷くとイーリスに言った。
「私、これからお友達のお見舞いがあるんです。この前、お見舞いに来たのに、何もしないで帰っちゃったから」
「ほう？ケガでもしたのか？」
「ううん？心臓病で入院しているんです」
「心臓病？」
「はい。私、前にこの病院にかかった時に知り合ったんです。可愛い子ですよ？牛柄のパジャマがトレードマークみたいな子で。その子から、今日、絶対に来てくれってメールもらったんです」
「そうか……」
イーリスは、生け垣の角を曲がって近づいてくる人影に視線を送った。

「丁度よかったな」
「えっ？」
イーリスは、人影を指さした。
「あの子じゃないのか？」
「あっ。そうですね」
萌子は立ち上がると、イーリスに一礼して駆け出した。
「さて」
イーリスも続いて立ち上がり、歩き出した。

「琥珀ちゃん！」

萌子のそんな声がイーリスの背に当たった。

イーリスは、珍しい名だと思い、そしてすぐに忘れた。

第四十三話

イーリスが由忠の病室に戻ったのは、それからしばらくした後のことだ。

病室にいるのは由忠夫妻だけ。

すでに神音は帰っていた。

「どうしたのです？」

一気に２０歳は老けたように見える由忠がベッドの上で死人のような顔をしていた。

「今、御義母様がお見舞いにいらっしゃっていたのです」

遥香がコーヒーをイーリスに出す。

「ほう？」

当主が人格破綻していても、さすが伯爵家というべきか、イーリスはカップから香る芳香に口元を緩めた。

「それでね？」

「随分、とっちめられたご様子ですね」

「わかります？」

「自業自得とは思いますから……栗須殿達は？」

「悠菜ちゃんを起こしにいってもらっています。ルシフェちゃんは綾乃ちゃんを捜しに」

「綾乃が？いないのですか？」

「ええ」

「……」

イーリスは残念そうにカップをサイドテーブルに置いた。

「私も探しに行きます」

「いいですよ。“今の綾乃さん”でしたら、そんな」

遥香としては何でもない。ただの言葉に過ぎない言葉。

“今の綾乃さん”

イーリスはそこにひっかかった。

「――――誰が、憑依しているのです？」

「えっ！？」

驚く遥香を見て、イーリスは直感した。

「水瀬がウソをつけないのも、ぽろっと考えたことがすぐ口に出るのも、全ては、遥香様の遺伝だったのですね」

「もうっ……どうしてイーリスさんってそう鋭いのかしら」

遥香はちょっと残念。という顔でイーリスに言った。

「あなたは由忠さんの大切な部下、悠君にとってかけがえのない姉。……なにより私の可愛いエリスとエマの親」

「前者二つは全身全霊で辞退したいのですが」

「ふふっ……そんな方ですから、真実を知る権利はあると思います」

「……」

遥香の言葉を待つイーリスは思った。

単なる冗談から、とんでもない真実が出てきた。

瓢箪（ひょうたん）から駒とはよくいったものだ。

「倉橋事件のこと、覚えていますね？」

「はい……まさか」

イーリスは青くなった。

あの時、綾乃と融合しようとしていたのは……。

「その通りです」

勘弁して欲しい。

イーリスは無意識に胸のロザリオを握りしめた。

「ティアナ・ロイズール・トランシヴェール……魔界のお姫様です」

「何故憑依しているか……そこまで知る必要はない、そうですね？」

イーリスは遥香の言葉を聞くことを放棄した。

「それを知らなければならない理由はないはずです。とにかく、綾

乃ちゃんは味方なのでしょう？それだけ知っていれば良いのでしょう？」

「――――賢明な判断に感謝いたします」

遥香は深々と腰を折った。

綾乃を見つけるのは簡単だった。

綾乃は病院内のコンビニにいた。

「うーん」

綾乃があまりに真剣なため、折角お菓子を買いに来た子供が怖がって近づこうとしない。

「何してる？」

「あっ？……イーリスさん？」

「菓子か？」

「はい」

綾乃は楽しげに微笑んだ。

「珍しいお菓子ばかりで、何にしようか迷っていました」

「いくつか試せばよいではないか」

「……悠理さんにダイエットするって約束しちゃったんです」

綾乃が真剣に見ていた場所がどこか、イーリスにはわかった。

「食べたいが、カロリーが気になると？」

「ヒドイんですよ？悠理さんったら！」

綾乃はお菓子を棚に戻しながらイーリスに言った。

「人のコト、“ぶくぶく”だの“二の腕タプタプ”だの」

「確かに、菓子ばかり食べていたら確実にそうなるな」

「イーリスさん、どっちの味方ですか？」

綾乃が恨めしそうな視線を向けてくるのを面の皮ではじき返しつつ、

「節制しろということだ……遥香様が心配していた。戻ろう」

「はい」

どうやら、一番気にしていたらしい菓子を手にした綾乃が、心配そうにイーリスに訊ねる。
「私、太ってます？」
「今は、大丈夫だ」
「なら、いいですよね♪」
菓子なんてわからないイーリスの眼から見ても、“食べたら確実に太る”とわかるパッケージのその菓子を手に、綾乃はレジに向かった。

「ふふっ……これは楽しめそうです」
ほくほく顔で菓子の入ったレジ袋を抱きしめる綾乃。
「運動はしたほうがいいだろうな」
「大丈夫です」
廊下を歩くのは、春物のワンピースにボレロというお嬢様然とした綾乃と、スタイルがよくないと着こなせない流行の最高級ファッションに身を包むイーリスだ。
すれ違う者達全員が見とれたように足を止め、二人に視線を送ってくる。
「ボタン、きつくないか？」
「もうっ！」

二人が廊下の角曲がった時だ。

イーリスの耳に、聞き慣れない言葉が届いた。

「？」

どう見ても日本人ではない。東欧系の西洋人らしい少女が、イーリスにはわからない言葉をわめきながら廊下を走って来るのだ。

「カノッサ！」
どうやら綾乃の知人らしい。綾乃の咎めるような言葉ですら聞こえないのか、少女は慌てたというか、かなり焦った口調で何事かを綾乃に告げる。
「！？」
その言葉がわかるのか、綾乃は驚愕の表情を浮かべた。
「綾乃？」
「イーリスさん」
レジ袋をカノッサと呼んだ少女に押しつけながら、綾乃は言った。
「武器、持ってきてますか？」
「ナイフなら」
「十分です」
綾乃は頷くと、軽く右手を振った。

ブンッ

一瞬。

一瞬のことだった。

綾乃の手には、どこに隠していたのか、豪華な彫刻が施された見事な細身の剣が握られていた。
その剣から放出される強大な魔力。
それは、かの“聖杯”を始め、多くの呪具を見聞してきたイーリスでさえ、見たことどころか、聞いたことがないほどの恐るべき魔法刀であることを示していた。
「グリムが現れました」
綾乃は廊下を駆け出しつつ、イーリスに告げた。
「悠理さんが予め展開していた防止結界のせいで、今ならテレポートで逃げられることはありません」

「防止結界？」
「テレポート侵入できても、他へ移動できない――――別名、テレポーターホイホイです」
「どういう名前だ？それより、グリム？――――あの敵か！」
イーリスはスカートの中、太股のホルスターからナイフを抜いてその後を追う。
窓の外、影が3つ、イーリスの視界の端に映った。
悠菜、ルシフェル、栗須の三人。
あいつ等も気づいたらしい。

「カノッサによれば、グリムは結界を突破するために、中庭から裏庭に向け移動中です」
イーリスの走る先で、廊下に停められていたストレッチャーが独りでに浮き上がり、凄まじい勢いで窓ガラスを割って窓の外に落下した。

ガシャンッ！

それが、綾乃の魔法によるものであることは明白だ。
「なんて無茶を！」
割れた窓から外に飛び出す綾乃。
イーリスはそれに続きながら綾乃を咎めたが、
「窓は勝手に割れたんです」
綾乃はあっさりと受け流した。
「私のせいじゃありません。文句があるなら、あんなヤワな窓を作った人に言ってください」
「……」
あまりの自己中心的な発言に、イーリスは、どう言葉をかけていいか自体に困窮した。

「裏庭ですね！？」
騎士のスピードに完全に追随しながら、栗須はモップの握りを確かめた。
「はいっ！お姉さま！」
ルシフェルは、二人の間にナニが起きたか、なるべく考えないようにして、二人に続く。
「間違いなく、グリムがいます！」

バンッ！

一挙動で４階建ての病棟一つを飛び越えた三人は、空から場所を確かめた。
病院の裏庭――――正しくは運河公園の緑が広がっている。
「テレポート避けの結界でグリムは徒歩で移動するしか方法がありません」
「よく出来ました！」
「エヘヘッ」
よほど嬉しいのか、悠菜は満面の笑みを浮かべて喜んでいる。

着地。

再び駆け出した三人のやや後ろには、窓をぶち破った綾乃達が合流する。

「瀬戸さん？窓破ったの！？」
ルシフェルが驚いた声を上げたが、
「破れたのです」
綾乃はにべもない。
「グリムの移動速度の遅さが気になります」

悠菜が言った。
「何か気になります――警戒してください！」
裏庭のいくつかの小さな建物を迂回し、飛び越し、そして悠菜達は目指す相手に遭遇した。
病院と公園をわけるフェンス。
なぜか、グリムは女の子を抱きかかえながらフェンスの上に立ち、息を切らせていた。
「さすがに運動不足ということですか？」
まず、グリムに声をかけたのは綾乃だ。
「ぜぇ……ぜぇ……そ、そうかもしれません」
本気でバテた。といわんばかりのグリムは汗だくでようやくそれだけ言った。
「ち、ちょっと待ってくださいね？」
グリムが何事かを口にした途端、メイド服姿の幽霊がどこからともなくあらわれ、グリムの口に栄養ドリンクのストローを含ませ、巫女装束の幽霊がタオルで汗を拭く。
「ふうっ――お待たせいたしました」
幽霊達が消えるのと同時に、グリムは普段通りのさわやかな声で
「わざわざのご足労、ご苦労様ですが……」
女性陣からの冷たい視線には耐えかねた。
「あの……何か？」
「……メイドに巫女」悠菜。
「最低」綾乃。
「変人」ルシフェル。

「悪趣味です」栗須。
「不道徳」イーリス。

全員の意見をまとめると、「痛い病人」扱いとでもなるだろうか。

「ち、ちょっと待ってください！」
グリムは慌てて反論した。
「そ、それは私のことですか！？」

「他に誰がいるんですか？」
悠菜はあっさりと認めた。イーリス達もそれに異存はないという顔で頷いた。
「幽霊を使役するのはともかく、なんですかあの格好は！」
「い、いいじゃないですか！何が悪いのですか？メイドと巫女はオトコのロマンですよ！？」
「シスターはないんですか？」
綾乃の、場の空気を読まない問いかけに、グリムは我が意を得たりといわんばかりに頷いた。
「さすがにお目が高い！もちろん！シスターの衣装は私の秘蔵品で――――」

ガンッ！

グリムの顔面に石がめり込んだ。

当然、投げたのはイーリスだ。

「ふざけたことぬかすな！この（自主規制）！」
「イーリスさん、お口が悪すぎです」
綾乃はイーリスを咎めた。

「そうです」
何故か悠菜もそれに続く。
「オトコはそういう趣味があるんですよ？――――汚らわしいですけど」
悠菜は身震いしながら震える声で言った。
「羽山君を看護婦フェチとか、コスプレマニアとかバカにしていたクセに、いつの間にかはまっているんですから」
「……は？誰のことです？」
ついポロッと出た言葉は引っ込めようがない。
悠菜は口を押さえつつ、グリムを恨めしそうな眼で睨んだ。
「あ、あなたが気にする必要はありませんっ！」
「そうはいわれても」
「そうです」
綾乃が言った。
「そんなヘンな人が側にいるなら、警戒しなくてはなりません。女の子として」
救いを求めるように悠菜は視線をさまよわせるが、全員が「誰だ？」という眼で自分を見ている。
悠菜は顔を赤くして、半ばヤケクソ気味に怒鳴った。
「――――ゆ、悠理のことです！」
「ああ。なんだ」
イーリスは妙に腑に落ちたという顔で頷いた。
「さもありなん」
「そうなんですっ！悠理は、数十の式神をすべて美女、美少女で編成しています。普段は着物姿なのに、最近はこっそりマイクロビキニまで手を出しています。でも、メイドとシスターには手を出していません！」
「……いい趣味ですねぇ」
グリムは心底感心したという顔で言った。
「マイクロビキニかぁ……」

「とにかく！」
栗須が怒鳴った。
「こんな変人と同じ空気を吸うだけで苦痛だというのに、ガマンして、普通なら心底シリアスなシーンなのに、何でこんな外れた展開になるんですか！？」
「しかたないです」悠菜は呆れた。という顔で言った。
「敵が“これ”ですから」
「納得しました」
「一言ですか？ひどいなぁ――――で？」
グリムはフェンスの上から全員を見下す格好で言った。
「何かご用ですか？」
「ええ――――とりあえず」
モップを構える栗須がそれに答える。
「その子を降ろして――――殺されなさい」
「どっちもイヤです」
「っ！！」
栗須が飛翔し、グリムの脳天にモップを振り下ろそうとするが――

「！！」

ババババッ！！

栗須の一撃は、幾重にも展開された防御魔法をうち破ることが出来ず、栗須は地に降り立つ。

「私の複合魔法障壁をほとんどうち破るとは――――ホントにあなた人間ですか！？」
グリムから感心されようと、栗須はこれっぽっちも嬉しくない。
「褒め言葉なら、もっと気の利いた言葉があるでしょう！」

「十分褒めているんですが――っ！」
グリムは凄まじいまでの魔法攻撃の直撃を受けた。
防御魔法を最大にしても防ぎきれず、なんとかそらせて凌いだ一撃。
グリムは先程の幽霊二人に支えられて難を逃れたが、そうでもしなければフェンスから転がり落ちていたろう。
「な、何をするんですか！？」
グリムは真っ青になってわめいた。
「こ、こっちには人質がいるんですよ！？」
「知らない」
攻撃を仕掛けた悠菜は冷たく言い放った。
「貴い犠牲――とでもいっておけばいい？」
「あ、あなたねぇ」
「お姉さまの一撃を防ぐなんて、許されることじゃありませんっ！」
悠菜はその愛らしい外見とは裏腹なまでに迫力のある声を張り上げた。
「お姉さまの一撃、自ら望んで受け入れて当然です！もう一度やり直して！さぁ！その脳天、割られなさいっ！」
「そんな理不尽な！」
「イヤなら私が痛めつけてあげますっ！」
「だから人質！」
グリムは抱きかかえた女の子を悠菜達の目の前につきつけた。
それは、皆が見知った顔がいた。

「――萌子ちゃん？」
「そうです」
ぐったりとした萌子を抱きかかえ、ふふんっ。と勝ち誇った顔のグリムだったが――。

ドドドドドッ！

襲い来る魔法の槍襖を前に、恐怖で顔を引きつらせた。

「な、何考えてるんですか！」

「やめろ悠菜！」

周囲にそれ以上の行動を止められた悠菜は、暴れながら怒鳴る。

「グリムさん、どうやって萌子ちゃんを味方につけたかは知りませんが、あなたに味方するなら、例え萌子ちゃんでも敵ですっ！」

「違ぁぁぁうっ！」

グリムは泣き叫んだ。

「この子は私の人質ですっ！」

「敵の人質は敵っ！」

「どういう理屈ですか！」

理不尽な理由でグリム襲いかかろうとする悠菜を羽交い締めにする栗須が悠菜の耳元で囁いた。

「やめなさい。これはお姉さまの命令です」

ピタッ

恐らく、呼吸どころか心臓の鼓動ですら止めたのではないか。と疑いたくなるほど、悠菜はすべての動きを止めた。

「はぁ……はぁ……びっくりした」

グリムは青い顔をしつつ、呼吸を整える。

「びっくりしたのはこっちです」綾乃がグリムを咎めた。

「グリム？これはどういうことです？」

「演出ですよ――姫」

「演出？」

「ええ。囚われのお姫様を救う旅にご案内いたします」

「自分が悪の帝王だとでも？」

「いえいえ」グリムは首を左右に振った。
「私は謙虚でして――」
「ではさらに謙虚に、素直に獄界に帰るという選択肢は？」
「それでは面白くありません」

ポイッ。

グリムの横に立つ巫女が悠菜達の前に一枚の紙を放り投げた。

「では、ゲームを始めましょう」
メイドの幽霊により萌子の喉元にナイフを突きつけられた綾乃達は攻撃が出来ない。
苦々しいという顔で睨まれていることが心地良いといわんばかりの顔で、グリムは高らかに宣言した。
「私は今、協力者と、人質を入手しました。二人を助けてほしかったら、そこに書いてある謎を解き、私の迷宮へお越し下さい」
ふわっ。
グリムは萌子を抱きかかえたまま、フェンスを越えた。

「しまっ！」
栗須達は慌ててフェンスに迫るが――。

「アゞーッ！」
奇妙な悲鳴を残し、グリムの姿がフェンスの向こうへと落下しつつ消えた。
それを合図にしたように、悠菜達は、奇妙な浮揚感に襲われた。
足が踏ん張りを失った――違う。
足場が無くなった。というか、地面が崩れた。
「お姉さまっ！」
さすがにメイドとはいえ、浮揚の力はない。

悠菜は真っ正面から栗須に抱きつくと、宙を舞った。
「な、何が？」
驚く栗須の目の前で、地面を構成していた土や木々が漆黒の闇の中へと崩れてゆく。
「落とし穴です。お姉さまぁ♪」
悠菜は栗須の胸の中に顔を埋めながら甘えた声で言った。
「私達をここに誘いだして、穴に落とすつもりだったんでしょう」
すりすり。
栗須の胸に顔をすり寄せる悠菜の説明を聞いた栗須は、悠菜を抱きしめながら言った。
「成る程？でも、穴に落とす程度では」
「勿論、あの穴の中、スゴイ数の妖魔がいます」
「！」
「でも、穴の中を今から焼き払います。お姉さまを危険にさらしはしませんっ！」
「それはありがたいのですが」
栗須は周囲に浮く仲間達や、地面を見ながら言った。
「あの、どなたか、グリムが地面に飛ばした、あの紙を手にしている方は？」
「……」
「……」
全員が一斉に首を左右に振った。
「ということは？」ルシフェルが額を抑えながら言った。
「あの穴の中には、敵の重要情報が？」
「どうします？」
綾乃が最も年上のイーリスに訊ねる。
「グリムの居場所を知る唯一に近い手かがりですが？」
「やむを得ない」
イーリスは穴を睨み付けた。
もうそろそろ、病院関係者が事態を確認に来るだろう。民間人を

巻き込む可能性が高まる前に、事態を収拾しなければならない。
「全員、武器はあるな？――これより突撃、敵を殲滅後、穴の中を調べる。突入と同時に“閃光”。なお、炎系、爆発系の魔法は紙を焼く可能性が高いので厳禁――何か質問は？」
全員が沈黙で承諾を示した。
「よし――続けっ！」
イーリスはナイフを手に穴の中へと切り込んでいった。

第四十四話（前書き）

警告！ちょっとHな記述があります。予めいろいろご了承の上でお読み下さい。

第四十四話

パッ。

突入と同時に、“閃光”の魔法を炸裂させたイーリスの視界に、穴の底でうごめく妖魔達の姿が入る。

数は不明――。

というか、穴は底が見えないほど妖魔に埋め尽くされている。

“ワーム・タイプ”と分類される芋虫型の妖魔や“ビック・インセクト”と分類される昆虫型の妖魔ばかりだ。

イーリスはそれだけで、グリムが何をしたのかわかった。

魔法を使って、地下の虫達を巨大化させ、穴の中にしかけておいたのだ。

グリムがあのフェンスにのぼっていたのも、自分達を誘う罠。

彼にとっての想定外は、少女を運べるほど、自分の体力がなかったこと。

その程度だろう。

炎系・爆発系の魔法の使用を禁止など、自分で言ったことを後悔しつつ、イーリスは妖魔の群れの中に飛び込んだ。

ザンッ！

ナイフの一撃がワーム・タイプ数体を薙ぎ払い、辺りに妖魔の残骸が飛散する。

地下は、とっくりのように広がっているらしい。

穴そのものは、約3メートル程度だが、中はざっと20メートルはくだらない広いホールになっている。
壁をはい上がるワーム・タイプの妖魔が、とっくり型の構造に耐えられず何匹も落下していた。
光に向かって動き出しているのだ。

ザワザワザワ

“エサが来た”

妖魔達はそう思っている。
それがイーリスには直感でわかったがそれを口には出さない。
“それってレベルが昆虫並みってことですか?”
憎ったらしい弟分のイヤミな声が脳裏によみがえったからだ。

「ええいっ!」
ナイフで近寄る妖魔を何体も気色の悪い肉片にしながら、イーリスはたまらず怒鳴った。
「私はエサではないぞっ!――――っ!」
足場が砂地のため、どうにもふんばりが効かないことに顔をしかめつつ、イーリスはナイフを蜘蛛のバケモノ――――インセクト・タイプの脳天に突き刺した。
「イーリスさんっ!」
頭上からルシフェルの声がした。
「魔法障壁を――――3、2、今っ!」
「っ!」
イーリスが防御魔法を展開するのと同時に、辺りに光の線が走った。
“魔法の針”だと、イーリスにはすぐわかった。
「やめろルシフェル!」

狭い範囲にいる敵の殲滅なら、それでいい。
だが、
「紙に当たったら大事だぞ！」
「――――っ！」
悔しそうに唇を噛みしめたルシフェルが、抜刀してイーリスの背後に降り立った。
「他は！？」
「上にはい上がってくる妖魔を殲滅中！」
「あまり気分のいい敵ではないが」イーリスは楽しげな声でルシフェルに
「ウォーミングアップくらいにはなるぞ？」
「体液に注意してくださいね？」
魔法処理を受けた生物の体液を浴びれば、それだけでどんな被害が出るかわからない。
一年戦争で人類が多大な犠牲を代償に支払って手に入れた貴重な教訓だ。
「了解した」
バッ！
二人は一斉に動いた。

魔法と気を剣に込め、破壊力を倍増させた横なぎの一撃は真空の刃となって二人を取り囲む妖魔達を切断、一瞬にして妖魔達は無惨な残骸になって地面に転がった。

「殺されても気にするなよ？」

ブンッ

イーリスは血振りの後、言った。
「相手が悪すぎたんだ」

「地下制圧……地上は、悠菜ちゃん達がなんとかしてくれますね」
「そう願いたいが――」

グンッ！

ルシフェルの襟首を掴んだイーリスは空に舞った。

ザワッ！

足下が陥没し、妖魔達の残骸が一斉に陥没に巻き込まれたのは、二人の足が地面から離れたのほぼ同時。

「なっ！？」

突然現れたすり鉢状の穴。
妖魔達の残骸がすり鉢の底へと落ちていく。

ザザザザッ
グシャッ
グチャッ
グチャッ

砂の流れる音に、何かをかみ砕く咀嚼音が混じる。
音はすり鉢の底からだ。

「――蟻地獄」

イーリスがやや震える声で呟いた。

昆虫のアリジゴクはウスバカゲロウの幼虫。風雨を避けられる砂地にすり鉢のようなくぼみを作り、その底に住む。そして、穴に落

ちた蟻などを捕らえ、その体液を吸う。
そのアリジゴクが体液だけでなく、昆虫の肉片まで食べるという異様な様は、背筋が寒くなるほどだ。

「あんなものまで用意していたというのか？」
もし、自分達がただの人間として穴に躍り込んでいたら絶対に助からなかったところだ。
「グリムめ……」
「イーリスさんっ！」
グンッ！
今度は、ルシフェルが悲鳴に近い声を上げ、イーリスの襟首を掴むなり、猛スピードで上昇に移る。
「なっ！？」
真っ暗闇の穴から明るい地上へ出た途端のまぶしさに目をくらませたイーリスに、ルシフェルの怒鳴り声が聞こえた。
「悠菜ちゃん、逃げて！」

地上に出た妖魔の数もかなりだったようだ。
ようやく目の慣れたイーリスは、妖魔の残骸の中に立つモップ片手の栗須と悠菜、そして綾乃が自分達を見上げているのを見つけた。

言葉の意味がわかったのか、悠菜が栗須にタックルする要領で抱きつき、綾乃と共にその姿を消す。

次の瞬間――

ドンッ！

穴から火柱が上がった。

アリジゴクのバケモノが食べ損ないか、それともアリジゴクのバケモノそのものか。
妖魔の残骸が大量の土砂と共に雨となって降り注ぐ。

「な、何だ?」
「壁の」
ルシフェルがつばを飲み込んでから言った。
「壁のあちこちに……爆薬が」
「爆薬?」
「はい……最初、妖魔の眼かと思ったんですけど、定期的に点滅していたので、よく見たら」「点火装置の点滅だと気づいたのか」
「はい」
「ルシフェル」
「はい?」
「礼を言う」
「戦友――ですよ?」
「お礼をしなければ気が済まない」
イーリスは口元を歪めて言った。
「私は義理堅いのが信条だ」
「気持ちだけ、ありがたく」
「子供の洗礼、ただにしてやるぞ?結婚式の司祭は半額だ」
「ははっ……」
ルシフェルは愛想笑いをうかべ、
「結婚式の半額をタダにしてくれたら、謝意を感じてあげます」

落とし穴。
妖魔。
蟻地獄。
そして爆薬。

つまり、

落とし穴に落として殺す。
殺しそこねたら妖魔に襲わせる。
妖魔まで凌がれたら、
蟻地獄に落とす。
爆薬で穴ごと吹き飛ばして後始末。

恐ろしく手は込んでいる。
だが、確実に敵を殺し、その亡骸どころか、あらゆる物理的証拠まで隠滅することが可能な手段だ。
敵の誤算はそう多くはない。
我々が魔法騎士であること。
穴に仕込む妖魔の数を誤ったため、かなりの数が地上に出てしまったこと。
爆薬の量を間違え、爆風と一緒に妖魔の残骸を外にまきちらしたこと。
この二つがなければ、“謎の地下陥没”で済まされた可能性は大だ。
敵の当初の狙い通りにコトが運んでいたら、それこそ自分達がどうなっていたかわかったものではない。

警察関係者や消防が殺到する穴の跡から離れたイーリスは、病院のロビーでコーヒーを飲みながら考えを巡らせた。

栗須が偶然発見したあの紙。
そこには一言、

旅の地図は、しかるべき者に預けてあります。

としか書いてなかった。

「グリムは、私達を確実に殺すつもりだった」

綾乃はコーンポタージュを飲みながら言った。

「その死の証拠すら消すつもりだった」

「後続の手がかりを絶やすか、混乱させるつもりだったんでしょう」

栗須は自分に抱きついて離れない悠菜の喉を撫でながら言った。

「我々が何に殺されたか。その手がかりを絶やせば、それだけで彼への追跡は遅れます」

「なぜ、そんな手の込んだことを？」

緑茶を手にしたルシフェルには、それがわからない。

「グリムは、私達を本気にさせたいんですよ」

悠菜は栗須から身を離した。

「イヤでも自分の筋書き通りに動いてもらおうとしているんです」

「筋書き？」

「自分の用意した“囚われのお姫様を救う旅”を私達にさせたいって」

何がおかしいのか、クスクス笑う悠菜は冷たい、底意地の悪そうな声で言った。

「クスッ。――誰が素直に従うものですか」

「でも」

栗須は納得できない。という顔だ。

「悠菜ちゃん？どうしてグリムはそこまで筋書きにこだわるんです？」

「それは」

悠菜は愛らしい外見そのままにニコリと笑った。

「グリムの性格ですよ」

「性格？」

「グリムは学者肌――例え仮定でも、自分の思い通りに行かない

と面白くない。思い通りにいかないことがあると、それは相手が悪いと考えるタチなんですよ」

「似たような人、一人知っているけど？」

冷たく言うルシフェルに、悠菜はどこからか姿見を取り出し、ルシフェルの前に置いた。

「無視。そういうヒトですから、今回の件も、自分の思い通りに運ばせたいと思って当然なんです」

「悪趣味な」

イーリスは乱暴にコーヒーカップをあおった。

「全てが思い通りにいくなど、あるとしたら全能な神位なものだ」

「問題は」

悠菜はそう言って、しばらく沈黙する。

「悠菜ちゃん？」

「問題とは？」

「……」

周囲の問いかけに、悠菜はじっと考え込んだまま答えようとしない。

数分の後、

悠菜は覚悟を決めたという顔で言った。

「これから先、本当の敵はグリムじゃありません」

イーリス達は、突然の悠菜の言葉に自らの耳を疑った。

「グリムじゃ、ない？」

「はい」

綾乃の言葉に、悠菜は真剣な眼で頷いた。

「では、誰なんです？」

「……考えてみてください」

悠菜は栗須の手から受け取った紅茶で喉を湿らせた。

「獄族に過ぎないグリムか、どうして爆薬を使うなんて手を思いついたんです？魔法もいくつか組み合わせれば同じことが出来るというのに」
「えっ？」
綾乃はそれに答えられない。
「寓話に出てくる悪魔がミサイルを使っているのと同じ事ですよ？普通、あり得ません」
「……」
「つまり」
悠菜の口から出た言葉に、皆が凍り付いた。
「グリムに入れ知恵した者がいます……間違いなく人間。そして、“彼女”は今、グリムに協力しています。グリムは“彼女”の言うとおりに動いただけ。妖魔の数のミスは、グリム側でしょうが、爆薬は、“彼女”が爆薬について無知だといういい証拠です」
「彼女？」
“人間”が女性だと悠菜は言う。
「誰だ？」
悠菜の顔は、それがお世辞にも楽しい結論でないことを表していた。
重い顔で、悠菜はぽつりと、呟くように言った。
「……グリムの言う協力者――桜井さんですよ」
「あれ？」
美奈子は入ってきたグリムの変わり果てた姿に、書き物をする手を止めた。

「どうしたんです？それ」
「いやぁ」
車いすに座るグリムは、ばつが悪そうな顔で苦笑した。
「とある所から飛び降りたら、降りた先がガケだったんで……」
「……ドジ」
美奈子の冷たい視線を受けたグリムは胸を押さえた。
「あなたの手、もう一歩でしたよ」
「妖魔の数と、爆薬の量間違えたんでしょう？」
「え〝っ！？」
図星を突かれたグリムは青くなった。
「ど、どうしてそれを？」
「妖魔はともかく、爆薬はごめんなさい。私、やっぱりよくわかんなくて……ＴＮＴ換算１トンじゃ多すぎたわね……さすがに」
「観測していた者の報告では、トラップは完全崩壊。爆薬は――起爆タイミングがずれなければ、むしろ有効だったと思います」
「妖魔の残骸は？」
「死亡から１０分で魔法の効果は消滅します。人間達がおっかなびっくり何かしても、その頃には妖魔のカケラすらみつけられないでしょう」
クックックッ……。
グリムは心底楽しいといわんばかりに喉を鳴らした。
「すべては、あなたのおかげです」
「やめてください」
美奈子は、机の端に置かれた皿から、一粒、豆をつまみ上げた。
「私、憎い相手を殺してくれるっていうから、協力しているんです」
「ええ。それは勿論」
車いすの背もたれに体を預けつつ、グリムは楽しげに美奈子を見る。

「桜井さんの恋路を邪魔する瀬戸綾乃は迷宮で……もう一人は」
グリムは少し眼を泳がせた。
「捜索中です」
「人間界のどこにいても探し出すと豪語していた貴男が？」
「……人間界のどこにも反応がないんです」
グリムは頭をかきながら、申し訳ないといわんばかりに頭を下げた。
「よほど巧妙に隠れているか……そうなら恐るべきことです」
「恐るべき？」
「獄族は魂……つまり、隠しようのない存在を見つけだし、魂から必要な情報を引き出します。それが」
「魂の反応がないって――死んだの！？」
心底嬉しい。といわんばかりに目を輝かせる美奈子の眼は、すぐに失望に変わった。
「それはないか」
「そうです。それなら私達が確認します」
「とにかく」
美奈子は紙の束をグリムに渡した。
「これ、出来たから」
「早いですね」
グリムは紙の束に素早く眼を通す。
「グリムさんの調査が正確なら、これでいいはずよ？」
「――成る程？」
その眼が楽しげに緩む。
「簡単に殺さず、恐怖を与えぬいた挙げ句、いわばなぶり殺し」
「そう」
美奈子はもう一粒、豆を口にした。
「でも、本当なんでしょうね」
「何がです？」
「その男連れの女の子が、水瀬君と肉体関係まであったって」

「私の調べた限りでは」
「……まぁ、いいわ」
美奈子は投げやりなまでに言った。
「水瀬君に抱かれた女なんて、みんな死んでしまえばいいんだもん」
「フフッ……そうです」
グリムは車いすを操作して、美奈子の側まで来ると、その肩に手を置いた。
「皆、死んでしまえば、水瀬悠理は美奈子さんのものです」
「そうよ……そうよね？それでいいのよね？」
「はい♪」

桜井美奈子の内面で葛藤するのは二つの存在。
理性と、欲望。

グリムはそれが絵となって見えるような気がしてならない。
愉快だと、グリムは思う。

私はこの子の水瀬悠理への想いに気づいただけ。
想いの裏返しは恐怖であり他者への憎悪。

彼女はそれに気づいていながら、それを受け入れなかった。
恋敵を憎め。
恋敵を殺せば、愛する水瀬悠理はお前のものだと。

今、全てを彼女は受け入れた。

私は言わなかっただけ。

彼女が食べている豆。

それが、人間の憎悪を駆り立てる“憎しみの樹”の木の実であることを。

そう。

彼女は禁断の木の実を“勝手に”食べた。

私は彼女の目の前に置いただけだったのに！

彼女は、木の実によって、憎しみを受け入れた。

私は何もしていない！

彼女が勝手に憎んでいるだけだ！

そして、彼女は私に協力してくれている。

すべてが思い通りに行くのは愉快でならない！

グリムは内心の愉快さを押さえられない様子で笑顔を浮かべる。

「瀬戸綾乃は無事に逃げたようです」

美奈子の動きが止まった。

「瀬戸綾乃は水瀬悠理と行動を共にしています。片時も離れず」

「……」

「麗しいですねぇ」

「……頼まれた迷宮の仕組み、もう少しでまとめるから」

美奈子はそう言って机に向かう。

「必ず……必ず、殺してやるんだから」

その呟きを聞いたグリムは、満足げに美奈子を見やり、そして部屋から姿を消した。

室内には、ペンの走る音と、美奈子のつぶやきが聞こえるだけ。

「もう、友達なんて考えない……考えないんだから」

カリカリ……

「瀬戸さん……あなたさえ、あなたさえいなくなれば、それでいいのよ……水瀬君は……水瀬君は……」

カリカリ……

「絶対……絶対に」

カリカリ……

「渡すもんですかっ！」

グシャッ！

美奈子の手の中で、ペンが砕けた。

第四十四話（後書き）

……ついに４７話突破。
ナイトメア以上の長編は作らないつもりだったのに……物事をまとめる力がないと、こうなるんですね。
“文章、長き故には尊からず”でしたっけ？
猛反省です。

第四十五話

「桜井さんが？」
「そう」
悠菜は驚いて立ち上がったルシフェルに告げた。
「そう考えるのが妥当です。精神をちょっと操作されたら、桜井さんには防ぐ術がない」
「……」
力無くソファーに腰を下ろしたルシフェルを無視する形で悠菜はイーリスに訊ねた。
「わからないのは、“旅の地図は、しかるべき者に預けてあります”という、しかるべき者って……？」
「我々の関係者と見るべきだろう」
イーリスはコーヒーカップを玩びながら言った。
「これでイヤでも我々は奴らの元へ行かなければならなくなった。公にも、個人的にも」
「？」
悠菜は首を傾げた。
「どういう、ことです？」
「全員にグリムに対する私怨が生まれた――そういうことだ」
「私怨？」
「ああ。春菜殿下絡みで栗須殿、そして親友であり、九尾の狐の主である桜井美奈子を誘拐することで、ルシフェル。萌子を誘拐されたことで私」
「？イーリスさんが？」
「萌子はエリス達にとって姉同然……その彼女にもしものことがあったら、私は娘達に顔向け出来ない。しかも、こんな間近でさらわれたんだ」
「プライド傷つけられたってこと？」

「ああ――私も、恐らくは栗須殿も、ルシフェルもな」
栗須とルシフェルは、俯くことでそれを認める。
「間近で主君に遭難された栗須殿、家に戻ることを勧めた結果として桜井美奈子に誘拐されたルシフェル――わかるだろう？」
「――うん」
悠菜は、ちらり。と綾乃を見た。
「綾乃ちゃんは？」
「私怨はいろいろ」
「――とはいえ」
悠菜は途方に暮れたという顔だ。
「あの人の考えなんてわかるヒトいるんでしょうか？」
何故か、全員が悠菜を指さす。
「わかりません」
悠菜は頬をふくらませて抗議の意志を示した時だ。

ピーピーピー

悠菜の――正しくは水瀬の携帯がなり出した。

「メール？――あれ？」
携帯を開いた悠菜が驚いたという顔になる。
「えっと……伊東さん、ですね」
「伊東？伊東名誉顧問か？」
イーリスはその名前にイヤでも聞き覚えがあった。

伊東甲子郎。

近衛ではご意見番、物静かな古武士という言葉がしっくり来る貫禄ある人物だが……。

「その名誉顧問の名前が、なんで“ハゲ”なんだ？」

「ハゲてるから」

悠菜は何でもない。という顔でイーリスに答えた。

「貸せ」

目にも止まらない速さで悠菜から携帯を奪い取ったイーリスは、素早い動きでアドレスをチェックし始めた。

「あっ！」

驚く悠菜の目の前で、イーリス達がアドレスに目を通す。

「“ハゲ”、“プロペラ”“年増”……お前、これでわかるのか？」

「もちろん」

「“行かず後家”って――これ樟葉殿の番号だろうが！」

「そのまんまでしょう？――それより」

悠菜がイーリスの手から携帯を取り戻した。

「メールですけど、至急の出頭命令です。私とルシフェとイーリスさん」

「？」

●宮城　皇室近衛騎士団騎士団長執務室

1時間後、悠菜達は、執務机越しに樟葉と対面していた。

倒れないのが不思議なくらいやつれている樟葉の背後には、近衛の制服に身を包んだ老人達が座っている。

（ただごとではないな）

その階級章と勲章の数から、老人達が、いわば近衛のお歴々だと悟ったイーリスは、緊張しながら樟葉の言葉を待った。

「……」

ポイッ

苦虫を噛み潰したような顔の樟葉は、悠菜達を一瞥した後、執務机の引き出しから何かを取り出し、机の上に放り投げた。

「桐箱？」

悠菜は首を傾げた。

豪華な水引きのかかった桐箱が机の上に置かれている。

何か慶事でもあったか？

悠菜はそう考えたが、心当たりがない。

「樟葉さん、お見合いでもするんでか？」

「この前、３７回目を破断にしてやった」

樟葉は不機嫌そうな顔を崩さない。

「あらら……」

天を仰ぎ見た悠菜に樟葉は訊ねる。

「開けろ」

「？――いいんですか？」

「好きにしろ」

（何怒ってるんだろう）

悠菜は首を傾げながら水引きを掴んだ。

（生理不順？欲求不満？）
水引きを解き、桐箱を開けた。

「手紙？」

「……春菜殿下宛に送られてきた代物だ」
樟葉はじっ。と悠菜に睨むような視線を送りながら言った。
「しかも郵便料金不足で」
「経費で落ちました？」
「貴様等の給与から天引きにしてやる」
「手紙に？」
悠菜は手紙の下に入っていた紙の包みを開いた。
「――髪の毛？」
それは綺麗な黒髪。かなり長い。
明らかに女性のソレだ。

「ああ……」
樟葉の額に青筋が走った。

「誰のだと思う？」

「呪詛的なものではありませんね――萌子ちゃん？」

「ＤＮＡ鑑定照合はすぐに終了した――近衛のデータに該当者がいた」

「誰か殺されたんですか？」

「生存は確認している」

「威しじゃ、ないんですか？」

「春菜殿下にとっては」

「殿下にとって？」

「――いや」

樟葉は、疲れた。といわんばかりに首を振った。

「正しく言えば、悠理……お前に対しての最大級の威しになるだろう」

「まっ、まさか！？」

悠菜は、弟と間違われたことを抗議することも忘れ、髪を凝視した。

「しかし！日菜――」

「遥香様によって、日菜子殿下の御身の安全は確認済みだ――遥香様曰く“悪魔だって近づけない”所にいるんだろう？」

「僕も、それ以上のことは知りませんけど……」

悠菜は、無意識に安堵のため息をついた。

日菜子じゃない。

もし、この髪が、日菜子のそれだとしたら、私達水瀬家一族郎党の首でも足りない。

今頃、目の前の樟葉さんだって無事では済まないはずだ。

悠菜は手紙の包みを開いた。

最高級手漉き和紙の肌触りに不思議な心地よさを感じながら、悠菜は達筆な文字の列を読み上げた。

「拝啓　ますますご隆盛の趣、大慶に存じます。拝趨の上ご挨拶申し上ぐべきところ、略儀ながら……なんですか？これ」

悠菜はうんざりした顔で手紙から顔を背けた。

「何か儀式のご案内？」

「いいから最後まで読め」

「……えっと？」

うんざり。という顔の悠菜だったが、次第にその顔色が変わる。

青から赤へ。

「……」

「読み終わったか？」

樟葉を睨み付けながら、悠菜は顔を上げた。

手にした手紙は、悠菜の手の中でしわくちゃだ。

「つまり……人質を帰して欲しかったら、言うとおりにしろ。そういうことですね？」

「ああ。もし、それでも動かなければ――その髪の人物をどうこうするつもりだと」

「それで？」
悠菜は肝心の所を訊ねた。
「この髪って、誰のですか？」
「……いい加減、気づけ。この鈍感」
「？」
「閣下」
イーリスが口を挟む。
「発言をお許し下さい」
「話せ」
「はっ……確かに、加納萌子が拐(かどわ)かされたのは問題です。しかし、一体」
「背後のお歴々は、加納萌子の誘拐とは別件だ」
「何が……あったんですか？」
「事件とは関係ない」
樟葉は冷たく言い放った。
「お前達には悪いが」
樟葉は一瞬の躊躇を見せた後、

「誘いに乗って、グリム・リーパーと接触を試みてくれ」

「はいっ！？」

悠菜は耳を疑った。

「正気ですか？」

イーリスもさすがにくってかかった。

「玉座を汚され、皇女を襲われ、それでも何故！？」

イーリスには信じられなかった。

近衛。

それは皇室の番犬。

その番犬が、主人を襲う相手と手を結ぶ？

あり得ない。

あってはならない！

「上には上の都合がある」

樟葉は言い放つ。

「これは最早、きわめて政治的な問題なのだ」

「……し、しかし」

「水瀬」

イーリスを無視するように、樟葉は言った。

「その袱紗包みの中に地図があるな」

「？……ええ」

桐箱の底。袱紗の包みの中に、数枚の和紙が入っていた。

「グリムと接触するのに必要なあらゆる行為を認める」

「大盤振る舞いですね」

「とやかく考えずに行け――これは命令だ」

「いやです」

悠菜は手にした袱紗包みを机の上に放り出した。

樟葉の目がつり上がったのでさえ、悠菜を動じさせることが出来ない。

「――何？」

樟葉が椅子から身を起こした。

「――貴様」

「おかしいですよ。樟葉さん？」

悠菜は樟葉を逆に睨み付けた。

「普段のあなたじゃない。あなたなら今頃、経過不順を怒鳴っている頃です」

「ああ。貴様等の不手際続きには気が遠くなる思いがする」

「？」

悠菜は、じっ。と樟葉を見つめると、思い切った。という口調で言った。

「あの――殿下達に何かあったんですか？」

殿下達――それが麗菜殿下であり、春菜殿下であることは居合わせた者達にはイヤでもわかる。

樟葉がここまでキれる以上、彼女達に何かあったと疑うのはむしろ当然だ。

「貴様等が知る必要なぞない！」

その樟葉は、悠菜を大声で怒鳴りつけるなり、その胸ぐらを掴ん

だ。
樟葉の目の色が尋常ではない。
「命令に従えばいい！そんなことも――――！！」
「――――よさんか」
樟葉は、背後からの声に振り上げた拳を止めた。
背後に並ぶ椅子。
そこに座る老人の一人の声だ。
「樟葉……疲れているようじゃな」
どこか暖かみのある声に、樟葉は心底申し訳なさそうに俯いた。
「……申し訳ありません」
「ふうっ……どうじゃ？」
先程とは別の老人が言う。
「中将をここまで追いつめたのは、儂等の責任でもある」
「そうじゃな」
「皇室護衛の大任――――よく果たしてくれる樟葉に無理をさせすぎた」
「……」
目の前で唇を噛みしめる樟葉の目に、涙が浮かんだのを、悠菜は見逃さなかった。
「確かに、今回は……ああ、皇室の将来がかかる大事じゃからな」
「？」
悠菜は救いを求めて樟葉を見た。

「水瀬少佐」
大将の階級章をつけた老人が口を開いた。
「はっ」
かなりの人物。
それが悠菜の判断。
年は９０を軽く越えているだろうに、その矍鑠（かくしゃく）とした態度はどうだ？
弟がいう、“くたばりぞこないの親玉”は悠菜にとっては敬意に値する。
「貴官の指摘通り、殿下の問題だ。――より正しくは、日菜子殿下というより、むしろ春菜殿下のな」
「春菜殿下の？」
「そうじゃ」
大将は頷いた。
「春菜殿下の“お力”が、目覚めた」
「“統べる力”が？おめでたい……んじゃ、ないんですか？」
居並ぶ連中の態度から、それが慶事とはかけ離れていることは、イヤでもわかる。
その悠菜に、大将は意外なことを言った。
「我らはそれを止めたいのじゃ」

「えっ？」

「春菜殿下の“お力”は、すでに日菜子殿下を覚醒段階で上回っておいでだ」

「なっ！？」

皇室史上最強。

それが、日菜子の力への評価であり賛辞。

それを、何の力もないとされる妹が上回る？

そんな馬鹿な。

「言いたいことはわかるな？少佐」

「……皇位継承問題の紛糾を避けたいと？」

「そうじゃ」

大将は大きく頷いた。

「はっきり言うが、春菜殿下では不安が強すぎる。日菜子殿下への皇位継承を確実なものとするため、春菜殿下の“お力”を封じる――国体の安定を図るには、それしか道はない」

成る程？

悠菜は内心、鼻で笑った。

「フンッ――そのために、獄族の力が欲しいと」

「獄族は魂の管理に精通していると聞く。少佐……これは殿下達の命運を決めることでもある……政治的に無知な春菜殿下に政（まつりごと）を任せ

ることは出来ん」

「殺せと命じたり、殺すなと命じたり……」
悠菜の口からため息が漏れる。

「――事態は変化するものだ」
大将の口調が厳しくなる。

「春菜殿下の件がなければ、玉座を汚した者として扱うのは当然だ」

つまり、“殺せ”と命じ続ける。

だが――

「今は、ヤツの協力が必要だ――殿下の御為に」

「で？」
悠菜は投げやりに言った。

「ヤツへの報酬は？」

「死、一等を減じる」

「正気ですか！？」
たまらずに声を上げたのはルシフェルだ。

「相手は獄族、死を司る存在ですよ！？」

「殺せぬか？ナナリ少佐」

「ご命令でしたら……」
ルシフェルは言葉を飲み込んで、
「最前は尽くします」

「敵の誘いにのれ、そして、徹底的に痛めつけて命乞いさせたら、自分達の所へ連れてこい――そういうお言葉ですか？閣下」
「イーリス少佐。その通りと判断してくれ……時間的に余裕がない。これ以上の公務中止は余計な憶測しか産まん。春菜殿下のことが外部に漏れることが何より恐ろしい」
「私に異存はありませんが」
イーリスは周囲に視線をむけながら思った。
ルシフェルは命令に従い、参戦するだろう。
栗須殿は、春菜殿下絡みというなら、否応もないはずだ。
問題は――

「水瀬」
樟葉が悠菜の肩に手を置いた。

「グリムはその手紙で言っている」
「何を？」
「もし、誘いに応じない場合、その髪の人物の命をもらい受けると」
「お葬式、出ましょうか？豪華な花輪、用意しますよ？」
イーリスは、樟葉が悠菜をぶん殴ると思った。
だが、樟葉は動じることなく、悠菜を見つめるだけだ。
「ＤＮＡ鑑定の話はしたな？」
樟葉は机の上の髪をそっと掴んだ。
「近衛のヒトでしたっけ？二階級特進ですか？」
「よく考えろ」
樟葉は髪を悠菜の前に突きだした。
「これは間違いなく、我々ではなく、お前に対して突きつけられた

ものだぞ？」
「？」
悠菜は首を傾げた。
近衛で弟の人質になりそうな女の人？
鈴宮さんか？
弟の専属ＣＰＯ位しか、悠菜には心当たりが、ない。
「元・近衛といえばどうだ？」
髪を掴む樟葉の手に力がこもる。
「？」
首を傾げた悠菜の目が見開かれ、顔色が一気に青を通り越して白くなった。

「ま、まさか……それ」
悠菜は震える指先で髪を指す。

「そうだ」
樟葉は苦い顔で頷く。

「もし、お前が誘いにのらないのなら、次はコイツだと、グリムはそう言っているんだ」

相手は獄族。

死に神。

彼から逃れることは出来ない。

死に神に魅入られた女の髪。

それは、悠理にとって揺るぎない最愛の、絶対的存在の髪。

彼女が危険にさらされるなんて、あってはならないことだ。

絶対に、阻止されて当然のことだ！

悠菜は樟葉に言った。

「すぐに行動に移ります――グリムをここまで連れてきます。あらゆる損害、犠牲を許可して下さい」

弟分の力強い声に、樟葉は無言で頷く。

かつての部下の髪。

弟分の恋人の髪。

風間祷子の髪を手に――。

第四十六話

樟葉の許可が下りた。
そう思ったのはいいが――。

「樟葉さん？」
「何だ？」
悠菜達の今後の打ち合わせに、さも当然という顔で顔を出しているのは、樟葉だ。
「どうして樟葉さんが？」
「――私も行くんだよ」
「はい？」
全員が驚きの視線を向ける。
「しかたないだろう？」
樟葉はため息混じりに言った。
「これほどの失態続きだ――幹部会議から騎士団長の権限を凍結されても」
「凍結……されたんですか？」
「ルシフェル……近衛は、それほど甘くはないぞ？」

騎士団長権限凍結。
それは、樟葉に対する問責そのものだ。
栗須がそうであったように、樟葉もまた、今回の件、自らの行動で責を償わなければならないのだ。

「イーリス？戦闘加入は魔法騎士でなくてもよいのだろう？」
「はっ！一般騎士2名を補給部隊として配属する予定でした！」
「――なら、問題はないだろう？」
「樟葉さん……」

「馬鹿息子、心配するな。私だって」
樟葉は悠菜の肩を力強く叩いた。
「くぐってきた修羅場は――――半端じゃないんだぜ？」
そう言って笑う樟葉の顔は、血に飢えた女豹のような残虐さを浮かべていた。

グリムの元へと殴り込む日時は、一日延期された。

理由は簡単。

肝心の樟葉が丸一日眠ってしまい、目を覚まさなかったからだ。

「おはよぉ……」
どういう寝方をしていたのか知らないが、下着にパジャマの上着だけというあられもない姿で食卓に出てきた樟葉に、男性陣は慌てて樟葉に背を向けた。
「樟葉さんっ！」
ルシフェルがたまらずエプロンで樟葉の下半身を隠そうとするが、寝ぼけた樟葉は自分に何が起きているかすらわからない様子だ。
「……？どうしたの？攻略ルートは見つかった？」
「ええ」
寝ぼけているからわからないだろうと諦めつつ、イーリスは律儀に説明した。
「まず、敵が指定する第一関門の攻略ルートは３つ。現地は既に住所を元に調査済みです」
「どこ？」
ぼーっ。とした顔で、箸とみそ汁の入ったお椀を手にする樟葉は、
「国内なら信濃の艦砲で吹き飛ばそうか？」
「そこまでしなくても――――いや、民間人に犠牲が」

「火焔放射装置（スイーパーズフレイム）並べて焼き払う方がいいかぁ……」
「ですから」
「犠牲無視」
「……場所はすべて同一の職種の社屋です」

その職種を聞くなり、樟葉は言った。
「反応弾の方がいいじゃない。一年戦争の時、米軍からちょろまかしたヤツ、持って行きなさい」

（……おい）
つん。
背を向いたまま正座する羽山が横にいた博雅を肘でついた。
（あれ、饗庭樟葉だろう？）
（ああ）
（かなりの美人だって評判だけど、何だ？あの干物女）
（樟葉さんは……生活能力ゼロだから）
（だから干物女って言ったんだ）
ちらり。と互いに盗むように食事を続ける樟葉を見た二人は、大きく開いたパジャマの上着の隙間から、外見からは想像できないほど豊かな双丘を見てしまい、慌てて向き直った。
（俺、騎士として憧れてたんだぜ？）
（私人としてはともかく、公人としてはかなりだ）
博雅は虚しいまでの弁護をする。

「で？」
それに気づかない樟葉は言った。
「どのルートから攻める？」
「それが」
「イーリスが言いよどむなんて、何かあった？」
「攻略ルートは、ここでとぎれています」

「えっ？」
「この施設を襲撃することが第一関門。その関門をクリアしたら、自動的に次の関門までのルートが開かれると書いてあります」
「……」
樟葉は、ボリボリと、たくあんをかじりながらぼんやり考えて、
「いいわ」
そう言った。
「面倒くさいから、まとめて攻めちゃいましょう」

今回の作戦に関して、イーリスの作成した編成は以下の通りだ。

Aチーム　悠菜・ルシフェル組
Bチーム　栗須・南雲組
Cチーム　イーリス・樟葉組
補助　　羽山・秋篠組（近衛騎士団派遣部隊臨時編入）

「突入は本日２１００　羽山、秋篠両名は、現時刻より臨時に近衛派遣部隊指揮下に入り、これと共に行動する。これでいいな？」
現状、皆が私服だが、第一関門を突破次第、近衛の甲冑装備となる手はずだ。
会議机の並ぶ水瀬邸の居間で、イーリスが黒板を前に確認した。

「納得いきませんっ！」
バンッ！
悠菜が会議机を叩いて立ち上がった。
「なんで私がお姉さまと離ればなれなんですか！？」
「戦力の適正な配置だ」
イーリスはにべもなく言い放った。

「一方の暴走時の止め役ともいうが」
「イーリス？それは」
樟葉が聞き逃さなかった。
「無論、閣下が私を、です」
「いいだろう――水瀬」
樟葉が悠菜を睨む。
「栗須にべったりで足手まといになるつもりか？」
「まさか！」
「なら、後でアピール出来るくらいの活躍をすることだ。ルシフェルはその証人だ。それでは不満か？」
「……っ」
頬をぷぅっ。とふくらませて、悠菜は躊躇する。
「悠菜ちゃん？」
栗須はそっと悠菜を抱きしめた。
「お姉さんは、ずっと応援してますからね？」
「はいっ♪」

（……単純）
全員の白い視線に気づかず、悠菜はウキウキした顔で栗須の胸に抱かれ、上機嫌だ。

「それで？」
ルシフェルが訊ねた。
「第一関門を襲撃、目的は？」
「各施設の見取り図はこれだ」
イーリスは書類を皆に配った。
建物の見取り図。
規模からすれば、皆かなりのものだ。
「グリムは、この建物の一番奥に“鍵”を隠している」
「鍵？」

「ああ――――これだ」

イーリスが皆に示したのは、宝石の写真。
律儀なことに、横にショートホープの箱が置かれている。
写真そのものはその宝石からかなり離れて撮影されているから、細部がわからない。

「サイズはともかく……」
ルシフェルは、何か信じられない。という顔だ。
「なんですか？この横でピースサインしてる人」

写真が被写体からかなり離れている理由。
それは、被写体までの間に、グリムが映っているから。しかもご丁寧にピースサイン付きだ。

「覚えておけ。これが目指す敵。グリム・リーパーだ」
「行動からすれば……水瀬君のご親戚？」
「一緒にしないで！」
「ま、そうね」樟葉はひじをつきながら言った。
「相手がそう言うに違いないもの」

襲撃対象の建物は３つ。
目的は宝石の奪取。
そう決まった。

問題は――――。

「ねぇ。ルシフェルちゃん」
２０時５５分。

電柱の影から建物をうかがう悠菜が、横にいたルシフェルに訊ねた。
「あれ、何の建物？」
高く立派な門構えの豪邸。
あちこちに怖い顔をした男達が立ち、周囲を警戒しているのは悠菜の目にも明らかだ。
「あれ？」
ルシフェルはローブのフードを被り直しながら答えた。
「某自由業の会長のお宅」
「？――――ああ」
弟の記憶から必要な情報を手に入れた悠菜は納得した顔で言った。
「ヤクザ屋さん？」
普通なら近づきたくすらない建物を、悠菜は珍しそうに眺めながら、
「さっき、周囲歩いてみたけど、かなり広いよぉ？やっぱり、お金持っているのかなぁ」
「もっているんじゃない？――――悪いお金だけど」
「お金にキレイも汚いもないです」
悠菜は少しだけ不満げに言った。
「使い方。ただそれだけです」
「……言っておくけど」
ルシフェルは悠菜にクギをさした。
「盗んじゃダメだからね？」
「建物全部吹き飛ばして、そこから探したら拾ったことにならない？」
「一切の攻撃魔法使用厳禁――――命令だよ？」
「……面倒くさい」
ぷうっ。
悠菜は頬をふくらませた。
「たかが人間（ダニ）じゃない。中には――――えっと、女子供含めて１５１

人か。その程度」
「あのね」
ルシフェルは、咎めるような口調で悠菜に、
「ヤクザとはいえ、人をダニ扱いしちゃだめだよ？」
「？」
何故だろう。
悠菜は首を傾げながらルシフェルの言葉を待った。
「人の事、ダニっていった人の方がダニなんだから」
「……小学生並」
ルシフェルの機嫌を損ねたことを素早く感じた悠菜は慌てて話題を変えた。
「でも、グリムは何でそんな所に宝石を？」
「いろいろあるんじゃない？」
ルシフェルは、腕時計の時間を確かめた。
２０時５８分。
「２１時丁度、一斉突撃。１５分で撤収――いいね？」
「別にいいけど？」
悠菜はフードを目深に被り直した。
「突入タイミングを９０秒ずらせて――巻き込まれる」
「何に？」
「ほら――騒がれると厄介だから。細工してあるの。ここいら一体停電するからね」

ふっ。

ルシフェルの言葉が真実。
そう告げるように、辺り一帯が真っ暗になった。

その日の２１時丁度。
関東最大級の規模を誇る広域指定暴力団会長宅が３つ、同時に襲

われた。

まず一つ――

「出入りじゃぁっ！」

非常用電源に切り替えられた広い邸内のあちこちから、野太い男達の声があがる。

男達が目指すのは玄関から奥へと通じる廊下。

「出入りやと！？」

手下を引き連れた、高級なスーツを身につけた背の高い男が、足音も荒々しく廊下を小走りに歩き、そこで立ち止まった。

「なっ――――！？」

普段は若い衆が両端に並び、そこを自分達幹部が歩く廊下。

ちり一つ落ちているだけで若い衆に血反吐を吐かせるほど磨かせている廊下。

その廊下は、血と肉の海と化していた。

「な、何が？」

絶句し、思わず後ずさる男の前に立つのは、黒いローブ。

性別はわからない。

手に抜き身の日本刀が提げられていること。

それが、彼のわかるせいぜい唯一のことだ。

「おんどれの仕業か！」

関東一円に知れ渡った武闘派の一喝。

黒いローブはそれに動じることもなく、刀の切っ先を男に向けた。

ちょいちょい。

切っ先が左右に軽く動く。

“どけ”

そう言っていることを、男は直感的に察した。

「ナメてんのか！ああっ！？」

彼が懐からトカレフを抜いたのを合図としたように、チンピラ達も一斉に拳銃や散弾銃、自動小銃など、様々な“エモノ”を黒いローブに向けた。

「……」

黒いローブは、それにさえ動じた様子はない。

「死んで落とし前つけろや！」

怒りながらも、どこか勝ち誇った声で男が怒鳴った。

「会長！」

側近達に囲まれた和服姿の男が縁側から庭に出た。

屋敷の中からはひっきりなしに銃声が響く。

世間では鬼とも悪魔とも評される極道、関東三愛会五代目川村竜治会長だ。

会長は、バッグを後生大事に抱えたまま、側近達に促されるようにして走る。

「こっちです！」

「宮田はどうした！？石合は！？」

「若頭と本部長は廊下へ行ったっきり戻りません！」

拳銃を抜いた男が周囲を警戒しながら報告する。

「とにかく、車庫に車待機してます！それで事務所まで！」

「お、おうっ！」
会長は思った。
何者の仕業か知らないが、この落とし前はきっちりとつけてやる！
この三愛会、９，０００の構成員、ナメるんじゃない！
建物の角を曲がった先にやや大きめの物置がある。
幹部だけが知る非常時に備えた隠し車庫だ。
中には自動小銃にまで耐えられる装甲リムジンが用意されている。
それに乗って逃げればいい。
会長も、幹部もそう思った。
だが――――
「ひっ！？」
先を走っていた側近が、角で止まった。
「な、何だ！？」
会長は自分の壁になる側近達の隙間から前方を見て絶句した。
そこには、黒いローブが立っていた。
「な、何者や！おんどれ！」
キラッ
――――会長は、何かが光ったと思った。
サァッ――――
降り始めた冷たい雨の中、二人のローブが立っている。
一人のローブが、今や肉の残骸と化した会長の抱えていたバッグの中から取り出したのは、写真に写し出されていた宝石に他ならな

い。

「あったか？」

「はい」

ローブ達――樟葉とイーリスは、雨の滴を弾く宝石を前に頷きあった。

「敵は？」

「皆殺し……いい憂さ晴らしになったよ」

樟葉は納刀しながら言った。

「骨付き肉程度――みんな銃（チャカ）ばかりでつまらん。騎士がいない」

「発火装置は設置終了。――まぁ、任務達成ということで」

「うむ。後は」

樟葉は言った。

「南雲大尉と栗須中佐のチームはともかく、あの二人珍プレー大賞コンビ、上手くやってるかどうか」

「ダメならダメで方法は考えましょう」

二人は再び頷きあい、闇の中へと姿を消した。

二つ目の幕も上がっていた。

「ぎゃんっ！」

男の太い拳がスキンヘッドの男の顔面――いや、頭部を文字通り粉砕した。

脳漿と血をまき散らしながら、廊下の向こう、チンピラの群れの中へ飛び込んでいく。

「ひっ！？」

「ぎゃぁぁぁぁっ！」

チンピラ達は、自分達に飛んできた死体に腰を抜かしたり、はいつくばって逃げ出したりと、普段、一般市民を脅かす男達とは思え

ない醜態を晒す。
　2メートル以上という堂々とした騎士の体躯から繰り出される攻撃は、いくらチンピラとはいえ、一般人に耐えられる代物ではない。
　すでに男の背後には、異様な形に変形したチンピラのなれの果てが、壁といわず天井といわず、あちこちに“張り付いて”いた。
　チンピラ達が男を警戒するのは、何もその体躯だけではない。
　男の顔だ。
　そこには、どこから持ってきたのか、狐面が被されていた。
　男の顔がデカいせいで、狐面が被されているのは、男の顔の一部だが、それを笑える者は今、この場にいない。

「そんな変態に何ビビってやがる！」
　チンピラの群れの向こうでそんな罵声が響き渡った。
「会長（オヤジ）を守るんや！てめぇら！それでも芙蓉会の構成員か！？」
　チンピラ達が逃げるのを止めた。
「そ、そうだ！チャカ使えチャカ！」
　男達の中からそんな怒鳴り声がしたかと思うと、チンピラ達は腰から一斉に拳銃を抜いた。

　ピタッ。

　男の動きが止まった。

　拳銃を警戒している。
　チンピラ達はそう判断した。

「これで終わりやな！」
　38口径のリボルバーの銃口を男に突きつけたパンチパーマの男が、勝ち誇った尊大な態度で言う。
「ゲンコより鉛弾の方が痛ぇんだよ！わかってんだろう！？」

「……」

面のせいで男の表情は読めないが、さぞビビっているだろう。

チンピラ達がそう思っても無理はない。

「撃てぇっ！」

誰かの号令と同時に、チンピラ達は一斉に引き金を引いた――――

が、

ふわっ。

舞い降りる。

その言葉がぴったり来る仕草で男の前に現れたのは、同じく狐の面を着けた黒い服にエプロンドレスの女。

手にはモップが握られている。

クルクルクルッ――――

女がモップを回転させると――――

ガガガガガガガガガガガンッ！

金属同士が激しく激突する音が廊下の全ての音を支配した。

「ぎゃっ！？」

「ぐわっ！」

チンピラ達が短い悲鳴を上げてその場に倒れた音でさえ、あげた本人以外、聞こえはしなかった。

「……なっ！？なっ……ゴポッ」
何が起きたかわからず、肺を打ち抜かれたパンチパーマの男は、肺の中に侵入した自らの血におぼれて溺死した。
それまで狐面の男に銃を向けていたチンピラの中で、まともに立っている者は1人もいない。

「……」
狐面の男にはすぐにわかった。
チンピラを倒したのが、モップにはじき返された跳弾だと。
ただ、モップでどうやったら弾丸を跳弾に出来るかは――わからない。

目の前の狐面のメイドに、男は視線で問いかけた。
（どうやった？）
狐面のメイドも視線で答えた。
（禁則事項です）

その後、二人は何事もなかったかのように、廊下を歩き始めた。

そして――

「？」
警戒の薄い所を割り出して、塀を飛び越え、邸内に侵入。物陰に隠れたルシフェルは首を傾げた。
突入前まで感じていた人の気配が全く感じられないのだ。
（感づかれた！？）
ルシフェルがそう思うのも、通常の判断の内に入る。

ルシフェルは警戒を促そうと、背後にいるはずの悠菜に振り返るが――
「悠菜ちゃん？」
そこに悠菜の姿はない。
かわりにいたのは――
「こんばんわ」
優雅に挨拶してくる綾乃だ。
「せ、瀬戸さん！？ど、どうして――」
「どうして？」
綾乃は不満そうな顔をした。
「私、なんで今回の任務から除外されているんですか？」
「……あれ？」
そういえばそうだ。
ルシフェルは思った。
周囲が近衛関係者ばっかりだから忘れていたけど――。
そうか。
ルシフェルは、脳裏に浮かんだ答えに納得した。
そういうことなんだ。
「これ、近衛の作戦として立案されたから」
「そんなの……皆様の勝手です」
プウッ。と綾乃は頬をふくらませた。
「私だって、共に戦った仲のはず」
「いろいろあるんだよ……特に樟葉さんいるし」
「樟葉？ああ、あの方。あの方がいると何故？」
「樟葉さん、瀬戸さんを毛嫌いしているから」
「？」
綾乃には意味がわからない。
相手は近衛騎士団長。
こちらは人間界ではアイドル。
接点が見えない。

「あのね？」
ルシフェルは樟葉は、綾乃が原因で春菜殿下が襲撃された事件に激怒していることを説明した。
「――成る程？」
綾乃は申し訳なさそうに俯いた。
「わかる気がします」
「イーリスさんとしては、瀬戸さんと樟葉さんの無用のトラブルを避ける意味で、瀬戸さんをわざと任務から外したんだよ」
「……でも」
綾乃は言った。
「資料は読ませていただきました。宝石を集めて、どうするのです？」
「えっ？」
ルシフェルは豆鉄砲を喰らった鳩のような顔になった。
意味がわからない。
「どういう、こと？」
「ですから」
綾乃はくすっ。とイタズラっぽく笑った。
「宝石を集めただけで、何の意味もない。ということです」
「そんな！」
「その方法を知っているのは」
綾乃は立ち上がった。
「この中では私だけです――ルシフェルさん？」
ルシフェルは、今度こそ、綾乃が普段と全く違うことを実感しつつ立ち上がった。
「樟葉さんと渡りをつけて下さいな……協力する。それで手打ちだと」
「納得するかな」
「しなければ」
綾乃は目の前に広がる屋敷を眺めながら言った。

「ここで全てが終わります」

「……」

ルシフェルは無言で頷いた。

「感謝します――――では」

綾乃はキッ。と厳しい顔になって、

「悠菜ちゃんを捕まえます」

「そういえば――――あっ！」

今、自分がどこにいて、何をしているか。

それをようやく思い出したルシフェルは、慌てて綾乃を物陰に引きずり込んだ。

「なっ、何をなさるのです!?」

「隠れて！みつかったら！」

「この屋敷内で生存している者なんていません！」

綾乃はそう言ってある所を指さした。

「？――――っ！！」

その指さされた先。

そこに転がっている“モノ”を見たルシフェルは思わず息を飲んだ。

誰かが倒れている。

倒れている？

そう。

倒れているのだ。

黒いスーツからすれば、成人男性。

いや。

男性だった。というべきだろう。

スーツはともかく、

男の体には何一つ、

肉が

ついていなかった。

そう。

男は完全な白骨だ。

「ど、どうして？」

「中はああいうので一杯でしょうね」

綾乃は平然とした態度だ。

「ど、どうして？」

「どうして？」

綾乃が立ち上がることすら忘れたルシフェルを見下したように言った。

「魔法に決まっているじゃないですか」

「ひ、人を一瞬で白骨化させる魔法なんて聞いたことない！」

「“死滅魔法”の一種です――初めてですか？」

死滅魔法――一対象となるあらゆる生命体の息の根を止める魔法の総称。

最も近い魔法は“毒雲（ポイズン・クラウド）”という別魔法。

一定範囲の生命体を無差別に殺戮する魔法は、人類の間では存在

の可能性が議論されるレベルで、登場するのはせいぜいファンタジー程度のため、死滅魔法と言えば、空想世界にのみ存在する“空想的架空魔法（ファンタジー・マジック）”のカテゴリーに分類される、もっと言えば、“あり得ない魔法”なのだ。

「空想？」

ルシフェルから説明を受けた綾乃は不機嫌そうに言った。

「すでに展開されているでしょう？」

「だ、誰が？」

「悠菜ちゃんです」

「なっ！？」

「あの子にとって関係者以外の人間なんてゴミ同然。罪悪感なんてカケラも感じていないでしょう――いえ」

言い間違えました。と、綾乃は舌を出した。

「罪悪感という感情がないんです。そう考えろ。というプログラムは存在しても」

「よくわかんないけど……」

「あなただって、殺虫剤で虫を殺すのにそれほどの罪悪感は感じていないはず――違いますか？」

「それは」

「それと同じ感覚といえば、悠菜ちゃんの感覚がわかると思います」

「つきあいは長いといえないけど」

ルシフェルはぼやいた。

「そこまで狂っているとは思わなかったよ」

「あら？」

綾乃はくすっ。と笑った。

「不要な所が適切に欠落しているだけです。反面、気に入った相手はとことん大切にしますよ？あの子は」

「……」

ルシフェルは複雑な顔で言った。

「私、レズじゃないから」

「えっとぉ」

暗闇の中、ガサガサと動くのは悠菜だ。

「金庫の中身と隠し口座の移転は終了したし。チャカとクスリはあらかたいただいたし」

ガシャッ

足下に転がる豪華なバスローブを纏った白骨を踏み砕きながら、ほくほく顔の悠菜は辺りを見回した。

「――後は、悠理の式達が、他の所も含めてどれほど武器とか金目のモノもってきてくれるか。それにかかっていますね」

悠菜はその部屋の一角。

この大邸宅の主が用意したホームバーの棚に歩み寄った。

珍しい高級酒が惜しげもなく棚を飾っている。

「へぇ？――あ、“桔梗”、死体処理急いで。“明珠”、この棚のモノも全部移して……えっと、“由依”？」

悠菜は、一体の式からそれを受け取った。

写真に写っていたあの宝石。

「成る程？」

悠菜はそれを眺めながら呟いた。

「これが――鍵、か」

第四十六話（後書き）

ついに神音登場！
諸悪の根元をついに登場させましたけど……なんだか最近、理屈っぽくなってる気が。
そろそろキャラに動いて欲しいのに、どうした！動けジ・〇！

第四十七話

瀬戸綾乃の言う所の手打ちとは、ようするに樟葉との関係修復なのだが……。

絶対無理！

ルシフェルはそう思う。

全面戦争に発展したヤクザ同士の抗争を調停する方がまだ気楽だ。

そうに違いない。

何しろ相手は、全国の極道さん達から「姐さん」と崇拝される“あの”樟葉だ。

樟葉の下で3日生き延びられたら究極の極道になれるとか、

樟葉を知れば、岩下〇麻が清純派に見えてくるとか、

とにかく、

樟葉＝極道

この図式が普通の人の中で揺らぐことは間違っても、ないだろうし……。

さらに、最悪に輪をかける形で、今回はもれなく“ワンマン・アーミー”栗須がついてくる。

おまけにほしいアイテムではない――冗談抜きで。

“わーっ。それはお得ですねぇ。ぱちぱちぱち”なんて冗談を言っている場合ではないのだ……水瀬じゃあるまいし。

（どうしよう）

ルシフェルは安請け合いしたことを本気で後悔していた。

とにかく、事態を知れば、主君を襲われた栗須まで敵に回るなんて特典は願い下げだ。
安易すぎる手打ちの話。
それを樟葉達の前で口にするのは、ロープなしで――いや、首にテグスをかけてバンジージャンプするのと同じだ。
ルシフェルはそう思うが、引き受けた以上、簡単に引き下がるわけにも行かない。
一瞬、悠菜に頼もうかとも考えたが、肝心の悠菜がどこにもいない。
綾乃が「二人っきりで話があります」と言い残し、嫌がる悠菜の襟首を引きずりながら夜の街へと消えていたからだ。
つまり、言い出せるのはルシフェルだけ。
とりあえず、生き残ったら悠菜を殺すことにして、あふれるほどニトログリセリン入ったビーカーを舌の上に置かれた気分のルシフェルは、瀬戸綾乃からの申し出を樟葉に告げた。
「なぁにぃ？」
（斬られる――っ！）
一瞬、ルシフェルが本気でそう思ったほどのキレかけた樟葉だが、
「――わかった」
「――はい？」
「わかった。そう言った」
「本気――ですか？」
真偽のほどがわからず、思わず見た栗須やイーリス達は硬い表情のまま。
ルシフェルは次の反応に困った。
「ルシフェル、お前は反対なのか？」
「い、いえ」
樟葉さんが正気か心配しただけです。
何とか、そう言わずに済んだルシフェルは、バツの悪そうな顔で当たり障りのないことを言った。

「そんなにあっさり認められると思わなかったので」
「あのな」
場所は都内のファミレス。
もう深夜と呼ばれる時間帯なだけに客の数は決して多くない。
サングラスをかけた南雲がいるから、ヘンな連中も声をかけてこない。
これ以上続けたらシワになるとルシフェルが心配したほど、顔をしかめた樟葉は、窓から視線を外さずに言った。
「皮肉な話だが、時間がない。妥協できる所は妥協する」
「はい」
信じられないモノを見たようなルシフェルは、視線を栗須へ向けた。
「呉越同舟です」
どうやら栗須にも異存はない様子だ。
予想外の展開に呆然とするルシフェルに、樟葉は訊ねた。
「で？瀬戸綾乃とあの馬鹿息子は？」

「私が何故、ここに呼び出したかわかりますか？」
運河公園の一角。
かつて霧島那由他が祖父に襲撃された場所で、唐突に綾乃は言った。
街頭が点滅を繰り返す薄暗い世界。周囲に人影はない。
「わ、わからない」
「……」
すっ。
綾乃は無言で手を出した。
「？」
ぽん。
悠菜がその手の上に自分の手を置く。

パンッ。
途端にその手を叩かれて、悠菜は顔をしかめた。
「出してください」
「何を？」
「わかってるんですよ？あなたが襲撃場所から金品を盗んでいたのは」
「……」
何でバレた？
そう思うよりむしろ、
「つまり」
悠菜はあきれ顔で、
「分け前よこせと？」
「はっきりした物言いは嫌いです」
「遠回しにはどういえば？」
「ご自分で考えてくださいな」
「やだ」
「では、私の協力はここまでです」
「……いいもん」
悠菜は頬をふくらませた。
「後は僕達でなんとかするもん」
「いいんですか？」
綾乃はなぜか、勝ち誇ったような顔だ。
真意のわからない悠菜は無意識に警戒した。
「宝石が何なのか、わからないでしょう？」
「導石（リードストーン）……違う？」
導石――みちびきいし。
魔導師が使うＧＰＳや羅針盤のようなもの。予め設定された場所に持ち主を誘導することが出来る呪具である。
「なっ、何故わかるんです！？」
綾乃が顔を真っ赤にして怒鳴った。

「あれは――――！」
「複雑なカモフラージュがかけられているから、一見しただけではわからないとでもいいたい？」
「むぅ」
後ずさる綾乃に追い打ちをかけるように、
「む・だ」
「……」
もし、悠菜ではなく、水瀬自身だったら、綾乃の心証を壊滅的レベルで害したことに、即座に気づいたろう。
命乞いの最後のタイミングを見誤ることはなかったろう。
だが、得意になった悠菜にそれを見抜くことは出来なかった。
「別に協力なんていりませんよ？導石くらいなら」
「そうですか」
機嫌が悪い声をあげ、綾乃はそっぽを向いた。
「そうなら私の協力なんていりませんね！」
「ええ」
「グリムからの案内には、“そこ”から先のことは何も書かれていませんけど、それでもいいんですね！？」
「――――へっ？」
悠菜はどこからかグリムからの案内状のコピーをとりだした。
「えっと……？あれ？」
悠菜は首を傾げた。
綾乃の言うとおりだ。
「宝石を見つけだし、それを指定の場所に持ってきてください。“一定の手順”を踏んでいただければ、迷宮への門が開きます……何？この一定の処理って」
「せいぜい、頑張ってくださいませ！」
綾乃が怒って地面を蹴った。
「ま、待って！」

ぐいっ！

綾乃の足にしがみついた悠菜が力任せに綾乃をひっぱったものだから――――

ガンッ！

周囲にいい音が響き渡った。

「……」

まずい。

悠菜は青くなった。

相手はトップアイドルの肉体を持つ、魔界のお姫様だ。

そのお姫様が、パンツ丸出しで地面に顔面をぶつけている。

誰のせい？

私のせい？

そう。

私が悪くなる。

認めたくないけど、そうなっちゃう。

やむを得ない。

テレポートを臨界に設定。

逃げる準備はＯＫ？

ＯＫ。

「だ、大丈夫？」

「……」

……ムクッ。

恐る恐る綾乃をのぞき込んだ悠菜の前で、綾乃がゆっくりと起きあがった。

逆立った髪。

額から生える角。

大きく避けた口からのぞく牙――

「ひっ――――」

瀬戸綾乃の別な顔を初めて見た悠菜は、腰を抜かしてその場にへたり込んでしまった。

「こんなものですか」

大きなタンコブをいくつも作って泣き崩れる悠菜の目の前。

ベンチに座って、鷹揚な態度で札束を数える綾乃は、最後の札束を空間に開いた穴の中へ放り込んだ。

「しめて１０億円――――まぁまぁの稼ぎですね」

「グスッ。わ、私のお金……」

「あなたのお金は私のお金です」

綾乃は、さも当然という口調できっぱりと言い切った。

「勿論、私のお金は私のお金ですけど」
「……それで？」
クレジットの方だけは死んでもしゃべらないぞ。と、悠菜はタンコブをさすりながら訊ねる。
「導石だけではダメなの？」
「……」
綾乃は立ち上がり、闇の中へと視線を向けた。
「――樟葉殿が手打ちに同意されたかどうか、それも条件ですね」

「なら、その条件とやら、話してもらおうか？」
闇の中からの声と同時に、綾乃達は光に包まれた。

闇の中からの声。
それは、少なくとも悠菜の知った声ではなかった。
「――誰？」
強い照明を当てられた悠菜は、腕で目を隠しながら訊ねたが、
「下がってください」
綾乃が悠菜の前に体を出す。
その声が緊張に包まれていることに、悠菜はすぐに気づいた。
「――何の用です？」
「これはこれは」
闇の中から現れたのは、黒いトレンチコートに黒い帽子、黒いスーツと、黒ずくめの男達。
数は2人。
背が高いやせぎすの男達は、コピーしたようにそっくりな容姿を晒している。
ただ、その身から発する“気”は、彼らが並の手練れでないことを教えてくれる。
「……M○B？」
「微妙に古いです――そうじゃなくて」

彼らの胸元に光るバッチを見た綾乃の手には、いつの間にか剣が握られていた。
「――魔界公安調査庁が何のご用ですか？」
「姫様の玉顔を拝謁、恐悦至極に存じます」
男達をかき分けるように現れたのは老年の域に達した男が、ずいぶんさみしいことになっている頭を恭しく下げた。
「我ら魔界公安調査庁。魔界帝室から二つの任務を引き受けておりまして」
「……」
ジャリッ。
綾乃の足下で砂利が鳴る。
綾乃が一歩、後ろに下がった証拠だ。
「まず一つ――姫様の確保」
「――っ！！」
綾乃の周囲にいくつもの光球が発生、光球から発せられた魔法の矢が男達を襲うが、
「ムダでございますよ？ティアナ殿下」
蛇を連想させる粘っこい、生理的な嫌悪感を感じさせる声で笑う男の前で、綾乃の魔法はかき消すように消滅した。
「なっ！？」
「殿下ご自慢の“破閃（はせん）”は、既に対応済みでございます。さて、もう一つの任務」
黒服達が綾乃達を取り囲むように動く。
「グリム・リーパー殲滅――そのための鍵とやら、お渡しいただきましょうか？」
「……」
「……どうします？」
悠菜は綾乃に訊ねた。
「このまま、グリムの殲滅をお願いするのも手ですけど？」
「どこに目をつけているんですか！」

綾乃は怒鳴った。
「この人達が、公安なはずないでしょう！」
「――――へっ？」
「これはこれは」
くっくっくっ。と、喉を鳴らしながら、男は言った。
「この顔は、幾度となく姫様の玉顔を拝謁する栄誉を賜ったはず」
「ええ。知っていますよ――――ガールフ一等捜査官という名前までなら」
「ならば」
「帰ってグリムに伝えなさい。公安はこのテの職務執行に関しては、帝室命令を直に口に出すことは絶対に許されていません――――その不勉強を反省してから出直してきなさいと」
「……ちぇっ」
老年の男が不満そうに舌打ちしたかと思うと、それまでの恭しい態度はどこへやら、まるで子供が拗ねているように身をよじらせた。
「これで出し抜けると思ったのですが」
「ムダです」
「あら？そんな態度ないのでは？」
ふっ。
突然に消えた男達と入れ替わるように姿を現したのは、女の子達。黒いドレスを纏う少女を中心に、メガネをかけたタキシード姿の女の子とボンテージ姿の女の子が並んでいた。
「あ、あなた達！」
綾乃はその全員の顔と名前を知っていた。
ガールフ一等捜査官と名乗っていた、長い銀髪に黒いゴスロリ風のドレスが恐ろしいほど似合う少女を特に。
「シ……シェリス」
呻くようなその綾乃の声が嬉しかったのか、少女は、スカートの端を掴んで優雅に頭を下げた。
「ご機嫌麗しく♪」

「――あなたにそんな言葉が使えた事自体が驚きです」
「まぁ！」
「没落貴族、反抗貴族の末裔が雁首そろえてなんのご用です？」
「ふふっ……そのクチの悪さは相変わらずですのね。ティアナ様」
「お陰様で」
「ふふっ……グロリア陛下が事ある毎に嘆いておいでと魔界でももっぱらの噂」
「それで！？」
図星を突かれた綾乃が大声で怒鳴った。
「何の用です！」
「ですから、先程申し上げた通りです」
そう言ってシェリスは嫣然と微笑む。
背丈はむしろ悠菜と変わらないだろうほど低いが、色気については、はっきりいって綾乃よりかなりある。
月夜に照らし出される銀色の髪に黒いゴスロリドレス――まるで一枚の絵として通用する程、シェリスは美しく輝いていた。
「お姫様の確保」
「て、帝室の一員として、あなた達に捕まって貶められてたまるものですか！」
「墜とすのは得意ですわよ？」
シェリスどころか、背後の二人までが淫らな忍び笑いをあげ、綾乃は本能的な危険を察知してさらに後ずさった。
「大丈夫です。殿下」
悠菜は潤んだ声で綾乃に囁いた。
「最初は恥ずかしいですけど、一度味わえば――」
腰にそっとまわされた悠菜の手に、女として総身が逆立つ程の嫌悪感を感じた綾乃は、たまらずに悠菜を蹴り飛ばした。
「うふふっ。姫様ったら恥ずかしがって」
「心底嫌がっているんです！」
シェリス達の意味ありげな笑い声が、我慢できないほど綾乃の神

経にさわった。
「私達の責めの前にそんな気遣いは不要――――すぐに御自ら被虐の快楽を求めるように」
「私はごくノーマルですっ！」
「ご心配なく♪」シェリスは笑った。
「私達はアブノーマルですから――――思いっきり」
「はぁ……はぁ……あなた達と話しているとおかしくなりそうです！」
「まぁ！会話だけで感じていただけるなんて！姫様ったら敏感♪」
「ああいえばこういう！学校で同級生だった頃から、あなたって人は！」
「そう――――昔から」
シェリスの浮かべる笑みに少しだけ、自虐の色が浮かんだ。
「権力とお金には弱いんです……名ばかりの貧乏貴族の子女の哀しさなんて、わかっていただけないですよね」
「お金って。まさかあなた達――――！！」
綾乃は剣を構えなおした。
「まさかとは思いますが、グリムの、獄族の犬になったのですか！？」
「犬というのはあまりの表現」
シェリスはその端正な眉をひそめた。
「私達は、帝室とグリム様を天秤にかけ、グリム様を選んだ。そして、グリム様から提示された適切な報酬の元、契約を結んだのです。あなたを玩んだ後で帝室に売り飛ばすと」
「それが犬になったというのです！かけたのはお金でしょう！？貴族として恥を知りなさいっ！」
シェリスは無言で後ろに手を回すと、“それ”を抜きはなった。
ブンッ！
「危な――――っ！！」
大きく後ろに飛んだ綾乃の鼻先を、何かが素早く通り抜けていっ

た。
　あと一瞬でもタイミングを間違えれば顎を砕かれ――いや、顎が残っていたかも定かではない。
「な、何をするのですか！？」
「ですから――お姫様の確保」
「イヤだと！」
「それが終わってから、グリム様の元に行く手段を潰させていただき――」
　言いかけて、シェリスは思い出したように、
「ああ。お姫様？もう、この一帯で魔法は使えませんわよ？ミーティアの結界内ですから♪」
　シェリスは手にしたモノ――二股のムチで背後の一人を示した。
「……光栄です」
　――大変だったんだぞ？
　不思議とそう聞こえる声で、タキシード姿の暗そうな少女が軽く会釈した。
「ええ。そうでしょうよ」
　綾乃は苛立った声で言った。
「私の魔法を封じられるレベルの結界なんて、シェリスのアタマで理解できる代物ではないですものね」
「いってくれますっ！」
　シェリスのムチがうなりをあげて綾乃を襲う。
「ちっ――！」
　ギリギリで回避し、シェリスのスキを狙う綾乃だが、

　ギンッ！
　ガキンッ！
　ドンッ！

　横に突き飛ばされ、綾乃は地面を転がった。

「――くっ！」
立ち上がって剣を構え直すが、
「やりますわね」
見ると、シェリスが楽しげに自分を――いや。正確には悠菜を睨んでいた。
「そちらこそ。よく扱えますね。二股のムチを両手でなんて」
対する悠菜は、霊刃と実刀を二刀流にして構えていた。
「二股のムチ一つで一発目をわざと外させて、二発目でこめかみを打ち抜こうとする――並の技じゃありません」
「努力の賜です」
「見習います」
「ふふっ――天界の人形は謙虚さを知っていらっしゃる」
ちらりと向けられた視線は、完全に綾乃を見下していた。
「見習われたらいかが？」
「殿下」
悠菜が唇を噛んだ綾乃の前に立つ。
「完全に包囲されています」
「突破します！」
「どうやって？」
「えっと？」
綾乃は考えた後、言った。
「どうします？」
「とりあえず」
悠菜は言った。
「殿下、このままあの人達に連れて行かれるというのは？」
「私を売るつもりですか！？」
「売る？」
悠菜は「あれっ？」という顔になったかと思うと、何故か醒めた視線で綾乃を一瞥した。
「……あのぉ。シェリスさん？」

「何です？」
「もし、私が殿下を引き渡したら、いくらもらえます？」
「1億」
悠菜は無言で綾乃を見た。「そっちは？」と、その顔は聞いていた。
「……さっきのお金、全額返却します！」
「ではそういうことで」
悠菜は懐に手を入れた。
「人間界もそれなりの進歩は遂げていまして」
「？」
悠菜はそう言うと、無言で懐から取り出したものを、シェリスの足下まで滑らせた。
黒いプラスチックの箱。
一部が赤く点滅している。
魔界の存在であるシェリスには、それが何かわからない。
「ではご機嫌よう」
視線を黒い箱にとられたすきに、シェリス達は綾乃達が逃げ出したのに、一歩気づくのが遅れた。
「ま、待ちなさいっ！」
シェリスが怒鳴ったその途端。

パッ。

シェリスは足下から全身が白く輝くのを感じた。

第四十八話

「な、何が起きたというのですか！？」
後方で発生した凄まじい爆発音と衝撃波を感じながら、綾乃は悠菜に訊ねた。
「襲撃の時、見つけていたんです」
悠菜は、綾乃を抱きかかえた姿勢のまま運河を水面ギリギリの高さで飛行し続ける。
ルートは繁華街を避け、トンネル状になった区画をとっさに選んでいた。
追撃より、人間に発見されることを恐れたためだ。
「軍用爆薬――――多分、米軍の開発した次世代の可塑性爆薬ですね」
「爆薬？」
「――――人間が使う破壊のための道具です」
「あれが、そうなのですか？」
綾乃は感心した様子で背後を振り返った。
「魔法との単純な換算は出来ませんが、あれ一つで人間の建物なら余裕で吹き飛びます」
「シェリス達は」
「防御魔法が間に合わなければ、魔族とはいえ、即死は免れません」
「――――よく出来ました」
綾乃は悠菜の頭を撫でつつ、どこかでシェリス達が生きていることを直感的に感じていた。
「これで敵が増えました」
「違います」
悠菜はルートを変更しつつ、綾乃に告げた。
「元々の敵です」
そう言われれば綾乃も返す言葉がない。
確かに、シェリス達が敵であることを知ったのは結果論にすぎな

い。
彼女達は、元から自分と敵になっていたのだから。
「樟葉さん達と合流します」
「はい♪」

運河を抜け、指定されたレストランに悠菜達が到着したのは、運河公園での爆発から１０分ほど後のことだ。
綾乃の向かいの席には、苦虫を噛み潰したような樟葉を中心に、栗須にイーリス、ルシフェル、そして南雲が座っていた。
テーブルの上に置かれたのは、樟葉達のコーヒーカップの他に、悠菜の前に置かれたホットミルクのカップ、綾乃の前のビッグパフェ。そして、一粒で３００メートル……もとい、数十億円はするだろう、豪華な宝石が３つ照明に照らし出され、緑色の輝きを発していた。
「この宝石が鍵だと聞いたが？」
一見、サファイアかと思った樟葉は、興味深そうに宝石を見つめた。
「その通りです」
樟葉の問いかけに、綾乃は幸せそうにパフェをぱくついている。
「……で？」
「これを３つそろえて、所定の場所で魔法上の手続きをすると門が開きます――グリムが新たに細工してなければですけど」
「何故、そこまで知っている？」
「グリムは面倒くさがりなのです」
綾乃はパフェの上に乗ったバナナを慎重にどかしながら言う。
「迷宮だって自分で設計したものではなく、ドワーフ達に作らせたもの。そこから当たりました」
「……ドワーフ？」
樟葉はイヤな予感がした。
「まさか……天原組か？」

「もちろん」
綾乃は眉一つ動かさずにそう言ってのけた。
「その宝石だって、人間達から資金を得るための方策にすぎません。宝石を預け、お金を借り受け、それで迷宮を作らせる。宝石そのものを鍵にしたため、私達にそれを奪わせ、鍵として使わせ、そしてまた自分の懐へ入れる……誰の考えかは知りませんけど、上手いこと考えたものです」
「あれ？迷宮はかなり前から作られていたんじゃないの？」
「まさか」
綾乃は念願のアイスにたどり着き、ほくほく顔で悠菜の意見を否定した。
「着工したの、ここ数日です」
「数日！？」
「ええ。カノッサ……私の部下ですが、その調べでは、地下５０層、１層あたり人間のメートル法に換算して一辺の長さが１５０メートル四方となるそうです――施工図面はさすがに確認出来ませんでしたが」
「それをわずか数日で？」
「はい――魔族の中でも特級の建築技術を持つドワーフなら、その程度造作もないことです。それより」
綾乃は居合わせた面々を一瞥した。
「問題は、グリムの狙いです」
「狙い？」
「そうです。単なる人質救出に私達が動いて、グリムに何の得があるのでしょうか？」
「あいつが楽しみたいだけでは？」
「私もそう考えましたが」
スプーンをテーブルに置いた綾乃の顔は深刻だ。
「おかしいんです」
「？」

全員が、綾乃に注目する。
「人質を2人もとって、何としても迷宮へ私達を呼び寄せたい――何故？」
「何か、裏があると？」樟葉もその意味がなんとはなしにわかった。
「そうです」
綾乃は真剣に頷いた。
「むしろ、我々を、迷宮に引きつけておいて、何かをしたい――そう考えているのでは？」
「……」
「あの」
腕組みして沈黙する樟葉の横でルシフェルが言った。
「それについては、私の祖母から」

ルシフェルは、祖母・神音から聞いた話を説明したが……

「誇大妄想壁があるようですわね」とか、
「うむ。どこかアタマでも打ったんだろう」とか、
誰一人としてマトモに信じる者はいなかった。
「……」
これでは困る。
ルシフェルは本気で思った。
このままでは、そんな話を信じている私や水瀬家の立場がない。

内心、ルシフェルはグリムに祈った。

（グリムって人、さっさと野望を現実のものとすべく動いて下さい！）

「ルシフェちゃん」
すかさず悠菜が突っ込んだ。

「今――とんでもないこと考えなかった？」
「えっ？や、やだ……そんなこと」
「……私は考えましたけど」
悠菜はぽつりとそう言った。
「えっ？」
「グリムが迷宮を作って、樟葉さん達をそこにおびき寄せる。樟葉さん達が死闘を演じるその最中、人類相手に侵略を企てる――やっぱり、仕事するなら、これ位のシチュエーションがなくちゃ面白みが」
悠菜はどこか楽しそうだ。
「……樟葉さん達が死闘を演じる最中、悠菜ちゃんはどこへ？」
「高みの見物です♪」

「さて」
パンパン。
トイレから樟葉が戻った時、その頬についていた返り血が誰のモノか、誰一人訊ねようとはしなかった。
「あの馬鹿息子は栗須殿が“お仕置き”してくれるそうだ」
さぞ気持ちのいいお仕置きだろう。と、ルシフェルは思った。
参加は心底ご遠慮したいが。
「いい加減、さっさとケリはつけたい問題だ。――何と呼べばいい？」
樟葉の視線の先にいるのは、ようやくパフェを食べ終え、満悦の表情を浮かべる綾乃がいた。
「瀬戸綾乃――綾乃とお呼びいただいて結構です」
「では綾乃」
「ちゃん」
「綾乃……ちゃん」
「はい？」
「迷宮に向かいたいが？」

1時間後。
一行はその扉の前にいた。
「……あのぉ」
ルシフェルが困惑した顔で綾乃を見た。
「本当にここですか？」
恐らく、全員の正直な感想だろうことを、ルシフェルはクチにした。
「ええ」
綾乃は平然と答えた。
「天原組が設置した人間界への入り口はここだけです」
「だからといって――なぜここなんです？」
ここが入り口。
それは、南雲にとって納得できる場所ではない。
「ここは病院です」
そう。
岩田警部と由忠が入院して、萌子がさらわれた、あの病院の地下だ。
「グリムにとって、人間界で最も縁がある場所ですから」
綾乃は言った。
「死に最も近い場所。それがここでしょう？」
南雲は教え子に何があったか知らない。
もし、瀬戸綾乃が本気でそう言っているなら、教師として教えてやらねばならないことが多すぎる。
だが、南雲は本能的に、今の綾乃が別人であることを悟っていた。
「手の者が調べた限りですが」
綾乃はドアの前で皆に振り返った。
「このドアの向こうには、グリムの隠しようのない“失敗作”が眠っています」
「失敗作？」

悠菜は眉をひそめた。
あのグリムが失敗した？
瀬戸綾乃の魂を救済した手腕から考えても、それはあり得ないのでは？
「グリムは人間との契約に一度、失敗しているのです。魂の救済を求められ、それに応じることが出来なかった」
「理由は？」
「魂の救済と言っても、時には様々な材料が必要になります。瀬戸綾乃――この体の魂が崩壊から救われるためには、高貴なる乙女の血を始め……」
綾乃の顔が曇った。
世界樹の葉。
その言葉が、今では辛い。
全てから逃れるように、綾乃はやや早口になった。
「グリムは、必要な材料の確保に失敗したのです」
「つまり」
南雲は言った。
「失敗作とは……人間か？」
嫌な予感がした。
この病院に眠り続けている少女の顔が脳裏によぎったからだ。
「そうです――グリムはその身の救済を契約しました。ある少女の魂と肉体を利用することで、グリムは契約を遂行しようとした。ところが、それに失敗した。邪魔したのは……運命です」
「偶然とも言える運命？」
「運命とは半分は偶然、半分は必然です。――結局、勝利は常に刻（とき）」
悲しそうな顔で綾乃は南雲に言った。
「グリムだって、万能ではありません。人間の言う医者が万能でないように」
「だが……」

南雲は困惑した。
何を説明したらいいのか、それさえわからない。
「グリムは次の手をとりました。時に勝つ方法を手にするまで、契約を延期する。つまり、契約対象を死なさないことに」
「死なさないということは」
南雲は、そこに光を見た気がした。
「つまり、どんなことがあっても死なないということか？」
「ええ」
綾乃は頷いた。
「その通りです」
「なら」
知らず、南雲の顔が明るくなる。
“その子”は、その契約を果たす材料が揃うのを待てば、それで」
「本当に、良いことだと思いますか？」
綾乃は辛そうに問いかけた。
「本当に、それが人として喜ばしいことだと思いますか？」
「……えっ？」
南雲は意味がわからなかった。
死なずに済む。
それは良いことではないのか？
「悠理さんにも調べていただいたのです」
南雲が振り向いた先にいる悠菜は、悲しげに俯いていた。
「この部屋にいる“失敗作”は、既に死んでいるべき身なのですよ？」
「なっ！？」
「薬物と栄養は定期的に投与されています……でも」
悠菜が言った。
「臓器、血液、あらゆる人体を構成するパーツを交換されていたのは間違いありません。この子のオリジナルなんて、多分、骨と皮膚……それだけかも」

「馬鹿なっ！」
怒鳴った南雲は、その太い手で悠菜の胸ぐらを掴んだ。
「嘘をつくなっ！この子は――この子は！」
南雲に、悠菜は冷酷なまでに告げた。
「獄族の技術云々を考えても、この子に与えられた交換パーツは、生きた子供から取られたものと判断して間違いありません」
「！！」
「グリムがこの子という契約を延期しつづけるということは――それだけ罪もない子供を殺すことに他ならないのです」
「……」
南雲は呆然として悠菜を掴んだ手を離した。
「南雲大尉」
へたり込んだ南雲の肩に手を置いた樟葉が言った。
「立て――貴様に出来ることがあるだろう」
「俺に……出来ること？」
何だ？
俺は、何も気づかずに今まで来たんだ。
知った所で、何が出来るとも思えない。
「仇を討て――大切な存在を、かような玩具扱いされ続けたことを。苦しみ続ける子供の……いや、犠牲となった無数の子供達の分まで含めて、全てを終わらせろ」
「……」
じっと樟葉を見つめる南雲の目に、怒りと闘志の炎が浮かんだ。
南雲は覚悟を決めた。
「やります」
「よし」
軽く肩を叩いた樟葉が言った。
「病院とはいえ、ここは近衛で押さえる。気遣いは無用だ。綾乃、ちゃん」
「はい」

「先陣を頼む」
「はい♪」
綾乃はドアを開いた。

病院の地下。
霊安室の隣の部屋。
日の光の当たらない部屋。
室内の蛍光灯が唯一の灯りを提供する。
「……」
椅子さえない殺風景な部屋にあるのは、たった一つの古ぼけたベッドだけ。
壁はコンクリートのブロック積み。壁紙すら張られていない。
すえた尿の匂いが室内に充満している。
そこに寝かされていたのは――
「……」
その顔を見ただけで、南雲は泣きそうになった。
南雲が守ると誓った相手の顔がそこにあった。
守ると誓って、何一つ出来ていなかった。
そう思うと、この子の母親に対する申し訳なさで、南雲の胸は潰れそうだ。
「俺は」
南雲の肩が震える。
「俺は……この子を守ることが、忍さんへの唯一の……ッ！」

「門を開きます」
綾乃は南雲を見ないようにして、壁に向かった。
「この子を行かしておいたことに、もし別な理由を求めるならば」
ポケットから取り出した紙と壁を交互に見比べながら、綾乃は壁を構成するブロックを叩いた。
「この子がいる。それだけでこの部屋には滅多に人が入らない。そ

ういうことです」

壁を叩くこと１０回目。

綾乃は振り向いて言った。

「パネルが開きます――石を」

その言葉を証明するように、

ゴゴゴゴゴ……ッ

地響きにような音がして、壁がまるでひとりでに動くパズルのような動きを見せたかと思うと、石造りのせり出しが生まれた。

「これが必要だったと？」

「そうです」

悠菜に綾乃は勝ち誇ったように言った。

「この石は叩く順番を間違えるととんでもない場所に道を開くのです。それがわかりましたか？」

悠菜は黙って首を横に振る。

「そうですね？」

綾乃は楽しげに微笑んだが、

「では石を……ええっ！？」

すぐに驚愕に歪んだ。

「な、なんですかこれっ！？」

「？」

樟葉がのぞき込んだ石のせり出し。

そこには、三角形を描く形で３つの丸いくぼみがある。

宝石をそこにはめ込めばよいことは、樟葉にもわかるが――。

「何だ？この葉っぱみたいなくぼみは」

そう。

三角形の真ん中。
そこには、葉をイメージしたらしいくぼみがあった。
「こ……こんなの聞いていません」
綾乃は首を傾げながら言った。
「天原組、いつの間にこんなモノを？」
「……待ってください？」
そのくぼみを見て、栗須は胸元からブローチを外した。
「これ……まさか」
そっ。
栗須はブローチを恐る恐るくぼみにはめた。
カッ！
それがきっかけだったのか。
せり出し全体が光り輝き始めた。
「石を！」
綾乃の鋭い声に弾かれたように、樟葉はポケットから宝石を取り出すなり、素早く石をはめていった。
「あーあ。だめですよぉ」
緊迫のシーンのはずなのに、悠菜は一人でぼやいていた。
「宝石をそんな雑に扱っちゃ……傷がついたら商品価値下がるんですよ？しかも素手でなんて論外……」
「開く！」
綾乃の興奮気味の声に反応したかのように、せり出しのある壁が下がり始め、一行の前に暗闇が姿を現した。
「総員、装備確認、地図は？」

「そこの自販機で買えますよ？」
「な――――っ！？」
緊迫した樟葉の声に、悠菜が気の抜けるようなことを言った。
見ると、暗闇だった所は、センサーが反応したのだろう、すぐに照明が点けられ、通路の両側一杯に自販機が並んでいた。
「えっと？地図にジュースにお酒、わっ！ヒーリングポーションまで売ってる！」
「……どこのＲＰＧだこれは」
「閣下……何しろ、相手はあの水瀬並の敵ですから」
「戦闘能力があいつ並なら手強いが……」
自販機を興味深そうに見て回る悠菜を一瞥した樟葉は、
「脳みそがアイツ並みとは……痛いぞ？」
結局、ポーションは悠菜の毒味の末、マップは気休めに、他、必要と思われるものを自販機で買いそろえた一行は、補給部隊を呼び寄せ、そこに橋頭堡を確保した。
近衛より派遣された部隊がその回りで忙しく動き回っている。
持ち込まれた照明に照らされる中、せり出しを含む壁はコンクリートで固められ、鉄芯が地面に打ち込まれる。
一方では他の部隊が機材であちこちを調べている。
「入り口はコンクリートと鉄で固定済みだ」
樟葉は自販機の奥でルシフェル達に言った。
「この先は何があるかわからん。各員警戒を怠るな」
そして、樟葉は迷宮の入り口を苦々しげに睨んだ。

樟葉の視線の先。
そこには、ハリボテで作られた、どこかのテーマパーク同然の安っぽい作りの飾りが貼り付けられていた。
グリムの手作りといえば、それで納得出来る。
むしろ、その方が、不思議とグリムに愛着さえ湧いてくる。
シュヴァルの理想宮を彷彿とさせる奇妙な装飾を前にすれば、中

に何が存在するのか、徒に不安と恐怖に駆られるのが普通だ。
ただ、その造形があまりに素人然としていたために、緊張感がどうにも削がれる。
敵の計略かどうか。
樟葉は本気で悩んでいた。
「ん？」
南雲と悠菜がハリボテの一角にしゃがみ込んで何かをしていた。
「どうした？」
「あ、樟葉さん」
見ると、悠菜の手に、工兵から借りたのだろうペンキの入った缶とハケが握られていた。
「字が間違っていたので直していました」
南雲が顎でしゃくった先には、鋳造された豪華なプレートが貼り付けられていた。
「ん？」
最も大きく、何語かわからない言語で書かれた文字の下。
「狂った王の……」
「玉の、です」
「狂った玉の試験場？」
「狂王の試練場と書きたかったと思うんです」
見ると、玉と験の字にバツがつけられていた。
「成る程？」
昔、熱中した伝説的ＲＰＧを思い出し、樟葉は楽しげに微笑んだ。
「では、狂王トレボーの命により、我ら魔術師ワードナを捕らえに参らん――か？」

第四十九話

「狂王の試練場」（看板では「狂玉の試験場」）へ足を踏み入れた一行の装備は以下の通りである。

饗庭樟葉（あえば・くすは）
職業　騎士
メイン武装　魔法刀「幽」（太刀　２尺５寸）
サブ武装　魔法刀（無銘　脇差し　１尺２寸）他
防御　三式戦闘装甲服

栗須明奈（くりす・あきな）
職業　メイド
メイン武装　Ｅ－３モップ（注１）
　サブ武装　拳銃他
防御　メイド用タクティカルエプロンドレス（注２）

ルシフェル・ナナリ
職業　魔法騎士
メイン武装　魔法刀（無銘　直刀　二尺四寸）
サブ武装　魔法刀（無銘　コンバットナイフ　１尺）、霊刃他
防御　三式戦闘装甲服
防御　ＴＳ－２２２改タクティカルシールド（注３）

アナスタシア・イーリス
職業　シスター
メイン武装　魔法刀（無銘　ナイフ　１尺５寸）

サブ武装　不明
防御　メイド用タクティカルエプロンドレス改ダマルティカ（注4）

南雲敬一郎（なぐも・けいいちろう）
職業　騎士
メイン武装　オリハルコン製トンファー
サブ武装　ＡＲ－３８Ｂ２自動小銃他
防御　三式戦闘装甲服

水瀬悠菜（みなせ・ゆうな）
職業　おみそ
メイン武装　魔法刀（初音　刀　二尺二寸）
サブ武装　霊刃他
防御　なし？

瀬戸綾乃（せと・あやの）ことティアナ・ロイズール・トランシヴェール
職業　お姫様
メイン武装　名称不明・ロング・ソード
防御　不明（なし？）

ポウッ

気の抜けるような音がして、青白い光が迷宮の通路を照らし出す。
魔法の中でも初歩中の初歩、“照明”の魔法だ。
「各員、フラッシュライト、サイリューム確認」
樟葉が装甲服につけられたライトの動作を確認しながら指示を出す。

「馬鹿息子、サイリュームをベルトにくくりつけておけ」
「なんで私だけ甲冑がないんですか？」
「――――どこのバカだ？この前、使用不能なまでに破壊したのは」
「えっ？」
「えっ？じゃないだろうが！」
樟葉は悠菜を怒鳴りつけた。
「瀬戸綾乃との痴話喧嘩の時、防御用に持ち出してボコボコにされた挙げ句、脱げなくなって大騒ぎになったの、貴様だろうが！」
「あっ、アハハハッ！」
悠菜には瀬戸綾乃と弟である水瀬悠理とのいざこざについての記憶がない。
弟が記憶そのものにロックをかけているからだ。
女の子との痴話喧嘩に甲冑まで持ち出したという弟の不甲斐なさを前に、悠菜は内心泣きながら笑って誤魔化すしかない。
「――――ったく」
樟葉は緑色に光るサイリュームを悠菜のベルトの尻にくくりつけながら言った。
「装備や自前の能力として、全員に夜間暗視能力があることは知っているが、それに頼りすぎるな。どんな時でも、いざという時の備えは怠るんじゃないぞ？」
「暗視って……栗須さんも？」
「メイドとはそういうものです」
栗須はさも当然。という顔で言った。
「メイドは、暗闇の中に落ちている黒い糸くずを１００メートル先から見分けられる能力が自然と身に付くのです」
「……それって非常識」
「何か？」
お姉さまに睨まれた悠菜は慌てて視線をそらせた。
「とにかくだ」
ぽんっ。

サイリュームをくくりつけ終わった樟葉が、悠菜の尻を叩いた。
「万一のことを考え、これをなくすなよ？これからは掃討戦だ。これだけが敵味方の識別の根拠になる。――無ければ背後から蜂の巣にされるぞ？」
「えっ？」
悠菜は意味がわからず、きょとん。として樟葉を見た。
「私達だけでしょう？」
「ばか。ブリーフィングで何を聞いていた」
樟葉は悠菜の頭を、手の甲で軽く撫でるように叩いた。
「他に近衛左翼、近衛兵団、宮中女官団、それぞれ1個中隊が出る」
樟葉は床に地図を広げた。
「正面からは我々だけが。工事用入り口とおぼし脇道2箇所からは、近衛左翼2個小隊ずつを先頭に、バックアップを兵と女官――メイドが受け持つ」
「戦争でもするの？」
悠菜は目を丸くした。
「たかが迷宮一つ、私と綾乃ちゃんで」
「覚えておけ。バカ息子」
樟葉は苦い笑みを口元に浮かべた。
「こういうのは、面子というものが大切なんだ」
「……春菜殿下遭難時の宮中女官団、日菜子殿下遭難時の近衛左翼、兵団――そういうことですか？」
悠菜の顔に侮蔑が浮かんだ。
「警護任務に失敗した責任をとらせるのは、樟葉さんと栗須さんだけじゃない――そういうこと？」
「……そうだ」
樟葉はそれを認めた。
「指揮官が責をとって自決して落とし前がつく問題ではないのだ。それでは、兵の面子が保てない」
「兵を無駄死にさせるだけです。そんなの馬鹿げています」

「その馬鹿をやるのが――組織というものだ」
「殿下の承諾ではありませんね？」
あの日菜子殿下が、自分が襲われた程度で、部下に死んで責をとらせるはずがない。
こんな命令を発したら、指揮官こそ殺されかねない。
悠菜にはその確信があった。
だから、日菜子殿下の命令ではないと判断できる。
では誰が？
悠菜の脳裏に浮かんだのは、樟葉の背後に並んでいた近衛のお歴々の姿だ。

成る程。

悠菜は吐き捨てるように言った。
「……あのジジイ共の考えでしょう？」
「最高幹部会議を、人前でそう言ってのけるのは、お前と由忠（おじ）さんくらいだな」
樟葉は喉を鳴らせるように小さく笑った。
「樟葉さんなら、死に損ないのクソジジイ共ですものね」
「言うな」
樟葉は悠菜の口を手で塞いだ。
「私にも立場がある」
「でも、兵達には命令拒否の権利はないですよ？敵の規模・装備、何もわかってないのに」
「だからだよ」
樟葉は言った。
「だからこそ、私達が敵を多く引きつけ、踏ん張らねばならない。掃討作戦の前に、我々が一体でも多くの敵を倒し、作戦上の被害を少なくするために――違うか？」
「……わかりました」

悠菜は頷いた。
「わかってくれたか？」
「はい――――だから」
ぽうっ。
悠菜の手が光り輝いた。
魔力が光りの中に集まっているのは、誰の目から見ても明らかだ。
「てっとり早い方法をとりましょう。敵を倒して犠牲を少なくする……何より私、地下５０階まで歩くなんてイヤです。疲れますから」
「へっ？」
意味がわからず、目を丸くする樟葉達の前で、悠菜は言った。
「床をブチ抜きます。それで一気に最下層へ」
「まっ、待て！」
樟葉が悠菜を止めようとしたのは、少しだけ遅かった。
樟葉の視界が、一瞬のうちに真っ白になった。

「騎士（ナイト）のご到着ですよ」
薄暗い室内にグリムの声が響き渡る。
大声を出したわけでもないのに、不思議と室内の隅々にまで届くその声は、どこか楽しそうだ。
「かなりの戦力を展開しています」
「そう」
美奈子はグリムの方を見ることもなく、椅子から立ち上がった。
「どれくらい？」
「約８００という所ですか」
「多いのかしら？」
「個々人の戦闘能力からすれば恐ろしいまでの戦力です。まぁ、こっちも数ではその２０倍以上ですけど」
「プラントは？」

「ご命令通り、製造を継続しております。毎時２０００体という所ですが、何しろ部下が虫を捕まえるのに苦労していまして」
グリムはほとほと参ったという顔になった。
「直属の部下一個中隊――私ご自慢の最精鋭部隊が昆虫採集のために山野を駆け回っています」
「虫とはいえ、生命を玩ぶのは嫌いなんだけど」
「目的のためには、手段は正当化されます」
グリムのきっぱりとした物言いを聞いた美奈子は、頷いてよいものか躊躇した。
「目的？」
「ええ――当初とは全く違いますが」
グリムはちょっとだけ微笑んだ。
「今までのお礼ですよ」
「何か大きな事するのかと思っていた」
「そのための前哨戦として下さい――あなたの騎士殿といい、他の連中といい、飲まされた煮え湯に、とりあえずお礼をしなくては」
グリムは心底腹立たしいという顔だ。
「やっぱり私怨？」
そんなグリムと手を結んだことが正しいことだったのか？
美奈子は何度自問したかわからない。
目の前の男は、美奈子に様々な大義名分をひけらかした。
獄族の正しい姿を人間界に示すためとか、
歪みきった人間界を正すためとか、
一々ごもっともに聞こえても、結局はこの男のエゴを満たすだけの詭弁に過ぎないことを美奈子は見抜いていた。
そのボロが出たようにも聞こえてならない。
それでも自分がグリムに協力する理由。
逃げられないから？
違う。
水瀬の側にいるあらゆる女を排除して、水瀬を独占したいという、

美奈子の欲望が、グリムと利害的に一致したに過ぎないと、美奈子は言い聞かせている。
ただ、心のどこかで何かが、美奈子を止めようとしているもどかしさを、美奈子自身、どうしようもない。
「萌子ちゃんは？」
美奈子はその心の警告から逃げるように話題を変えた。
「他の者に対応させています。ご安心を」
「水瀬君の妹だからさらったんだっけ？」
「正しくは違います」
グリムはきっぱりと言った。
「あなたと同じ――敵にすると厄介だからです」
「？」
美奈子は動きを止めてグリムを見た。
「どういうこと？いくら水瀬君の妹とはいえ、相手は単なる中学生よ？」
「単なる？」
グリムは喉で笑った。
「相手は魔族や神族でも希有な“千里眼”の持ち主ですよ？」
「“千里眼”？」
「そうです――きわめて正確な予知能力の持ち主とでもしておきましょうか」
美奈子は突然、吹き出した。
「何がおかしいのです？」
「だ、だって――萌子ちゃん、この前のテストでまたまたヤマが外れたって泣いてたもの」
「私が言っているのは」
グリムはあきれ顔だ。
「そんな些細なことに用いられるべき能力ではありません。というか、予知という言葉がまずかったですね」
「？」美奈子は意味がわからない。

「情報収集能力とでもいうべきでしたね。あらゆる情報を極めて広範囲かつ正確に捉える知覚能力を持ち、その情報を元に全てを予測する。この力を持つ者から逃げ切る事は不可能です」
「情報を元に未来を分析する――それを予知と？」
「そうです。そうです」
グリムは手を叩いて喜んだ。
「そういいたかったのです！」
「――ウソくさい」
それなら、何故萌子ちゃんはテストの読みを外したというんだ？
説明にならない。
「テスト問題についていえば」
美奈子の心を読んだんだろう。グリムは言った。
「テストの傾向他、情報不足が祟った結果でしょう。つまり、真面目に授業を受けて、その内容他、必要な情報を獲得する努力を怠った結果ともいえますね」
「ここに監禁していれば、情報が得られないから安全と？」
「そうです。そんな力の持ち主がここに敵として来られたら不利でしょう？ですから、その力を封印して、協力していただけるように」
「こっちの監視下に置いた――それで、今、萌子ちゃんは？」
「ですから、ちゃんと保護しています。今頃、快楽の夢でもご覧でしょうか」
天井を仰ぐグリムの含み笑いが気に入らないが、
「バケモノが？」
美奈子はなぜかベッドの上から枕を取り上げた。
「まさか」
グリムはわざとらしく肩をすくめた。
「まともといえばまともな外見の持ち主――外見だけなら人間ですよ」
「そう」
美奈子は枕を頭の上にのせると、机の下に隠れてしまった。

「美奈子さん？」
グリムはその美奈子の行動が解せず、机の下をのぞき込んだ。
「どうなさったのです？」
防災頭巾の要領で頭を枕で被った美奈子は、机の下から体を出さないように慎重に座る態勢を調節していた。
「迷宮の廊下といわず、壁といわず、すべてに細工は流々ご覧じろです。作戦指揮室へ」
「魔法防御の細工はしてあるよね？」
「魔法反射ですが。一切の魔法を反射する特別なコーティングはご要望通り」
「どっちにしろ、ここが凄まじいことになるのはわかってるんですからね」
美奈子はグリムの説明に何ら興味を持った様子はない。
「確かに、魔法攻撃対策をするよう指示をしたのは私よ？でもね」
「まぁ確かに」
グリムはバツが悪いという顔で天井を仰ぎ見た。
「そのおかげで、５０階の予定が、予算不足で１０階までしか作れないなんて予想も出来ませんでしたが」
「他から資金調達したら？」
「ああ」
グリムはポンッと手を打った。
「それはいいですね」
「間に合う？」
「……無理、ですか？」
グリムは何がおかしいのか、クスクス笑うと、
「まぁ、やるだけやってみましょうか」
とだけ言った。
「心強いお言葉で」
対する美奈子は冷たい視線を崩さない。
「何をやるにしても、絶対の自信は大切です。それがあってこそ、

全ては成せるのですよ？」
「……水瀬君が来ているんでしょう？ここへ」
「ええ……それが？」
「だからこんなカッコウしているの。わからない？」
「？ええ」
「水瀬君のことだから」
美奈子が何かを言いかけた瞬間――

ドンッ！！

凄まじい爆音と振動が、美奈子達のいる部屋をシェイクした。

その頃、
「このバカモノっ！！」
樟葉の一撃が悠菜の脳天に炸裂していた。
「何をするかっ！何をっ！」
「だ、だってぇ！」
でっかいタンコブをつくって蹲る悠菜は泣き顔で反論した。
「面倒くさいじゃない！」
「面倒くさかったら迷宮を丸ごと吹き飛ばすのかお前はっ！」

そう。
悠菜は床めがけて魔法攻撃をぶつけ、５０階まとめて床を打ち抜こうとする荒技を披露してのけたのだ……。
周囲に何の説明も断りもなく、突然魔法攻撃を床めがけて放ったのは、まぁ……集団行動の面から許されることでは当然、ない。
これとほぼ同時に、鏡魔法により空間防御を展開したのはルシフェルだ。

５０階の建物を打ち抜く魔法が“ただの魔法”なはずはない。
目標を打ち抜くことが出来ず、通路全体を荒れ狂った魔法攻撃。
彼女の防御展開がコンマ数秒でも遅れていれば、周囲は無事では済まなかったろう。
そのルシフェルが驚いた。というよりむしろ、呆れた。という顔で周囲を見回した。
「この壁……魔法をはじき返した？」
ぺたっ。と装甲服のグローブ越しに触った壁石の感触は、他の石と何ら変わるところはない。

ドカバキグシャッ

樟葉とイーリスによってシメられる悠菜を後目にルシフェルが言った。
「これで、ヘタな魔法攻撃は出来ないってわかりましたね」
「こいつがこんな馬鹿だったことに比べればささいなことだっ！」
「ともかく」
ぐいっ。
栗須がイーリス達の腕を難なく掴んで二人を止めた。
「魔法攻撃がある程度封じられているようでしたら、私達非魔法騎士でも戦う場面が多くなります。私達も秋篠様達、補給部隊を随伴しても問題ないのでは？」
「それもそうか――」
納得する樟葉の前で完全にノビている悠菜に、ルシフェルは冷ややかな目で言った。
「悠菜ちゃん？――起きて」
「お……お花畑に蝶々がキレイ……」
「そこに行かせるのは私なんだから！他の人に逝かされちゃダメっ！」
「それでもお姉さん？」

「弟に引導渡すのだって、大切なお仕事なんだから！――――じゃなくて！」
ルシフェルは悠菜に怒鳴った。
「マジメにやって！考えは出来てるんでしょう！？――――ここをどうやって攻めるか！」
「……ある、けど」
何故か悠菜は言い渋っている。
「何が問題なの！？」
「……お金」
「はぁっ！？」
「あのね？」

「何で私が！」
迷宮入り口自販機の前で怒鳴るのは綾乃（ティアナ）だ。
「仕方ないでしょう？」
悠菜は少し勝ち誇った目で言った。
「私達、この自販機で使える通貨、もう持ってないんだから」
「天界はあなたにお金を渡してないんですか？」
文句を言いながら、どこからかお金を取り出して自販機に入れていく綾乃（ティアナ）。
「はい」
「――――本当は、自分で払いたくないだけなんていいませんよね？」
「だって！」
悠菜は言い返した。
「私の場合、経費で落ちないんですもん！」
「天帝親衛軍ってどういう連中ですか！」
「一応、私と弟の所属は出向で人間界の大日本帝国」
「どうでもいいことですっ！――――これですね？」
「そう。それ１０個もあれば」
「もうっ」

ガチャ
ガコンッ
悠菜が自販機から取り出したのは――小さなドアのミニチュアだった。

「……大丈夫？」
美奈子はグリムを突いてみた。
振動によって落下してきた天井の一部を頭にくらったグリムが美奈子の目の前で目を回している。
「お……お花畑が見えました」
ふらつきながら、グリムは立ち上がった。
「と……とても綺麗なお花畑が」
「いっちゃえばよかったのに」
「な、何をデスカ？」
「知らない――でも、私が何でこんなことしていたかわかった？」
枕をつつく美奈子に、グリムは恨めしそうに言った。
「理由はわかりましたが、どうかクチに出して説明してください」
天原組め。工賃値切った腹いせに手抜き工事したな。
グリムは床に転がったブロックを憎々しげに睨み付けた。
「そりゃそうだけどね」
美奈子はふと、グリムの足下に落ちたモノに目をとられた。
それは、小さな宝石のような輝きを放つ赤い石。
「何？」
「あ、それは」
グリムが止めるより先に、“それ”は美奈子の手に収まった。
「魔法でもかかっているの？」
「ええ――」

グリムは言っていいのかどうか迷っている。
「どうせロクなものじゃない。そういうもの？」
「違いますよ！」
グリムはムキになって言った。
「これは“服従石（ふくじゅうせき）”です」
「服従石？」
「ええ。この石に血をつけて、相手に貼り付けると、相手は血を石につけた者の完全な服従の下に入るという代物で」
「“絶対服従の魔法”でもかかっているの？」
「なんです？それ」
「人間の世界でタブーとされる束縛の魔法。これと同じ効果があるはずよ？」
「ほう？人間界でもあるんですか」
「――他人を支配したいって欲望は、人が2人以上いれば生まれると思うわ。人ってそういうものよ」
「美奈子さんも？」
「……多分、ね」
美奈子はその石を無造作にポケットにねじ込んだ。
「それで？水瀬君達、今どうしているの？」
「あの……その前に石」
「い・や」
美奈子は座った目でグリムを睨み付けた。
「ヘタにこんなもの、私に使われたらイヤだもん。だから、私が預かっておく」
「そ、そんな……」
「何か文句があるの！？」
美奈子はグリムを怒鳴りつけた。
「グチグチ言っているヒマあるなら、さっさと水瀬君の回りのオンナ達をどうこうなさいっ！――ったく！」

第四十九話（後書き）

注１：Ｅ－３モップ＝Ｅｎｃｈａｎｔ－Ｍａｇｉｃ　Ｍｏｐ　ｆｏｒ　Ｍａｉｄの略。メイド用魔法処理済み特製モップのこと。

注２：メイド用タクティカルエプロンドレス＝メイド用に開発された特殊なコスチュームのこと。特殊な戦闘装甲服。

注３：ＴＳ－２２２改タクティカルシールド＝英国神聖国教騎士団が開発したルシフェル専用のセミ・ラージシールド。メサイア「白龍」用シールドをベースにしたデザインに変更済み。サブウェポンはスパイク。対魔法攻撃リフレクション機能付き。

注４：メイド用タクティカルエプロンドレス改ダマルティカ＝メイド用タクティカルエプロンドレスの素材を元に制作されたイーリス専用のダマルティカ（シスター用のあのコスチュームのこと）。防御力等はメイド用に準じる。

第五十話

美奈子が迷宮全体を操作出来る作戦指揮室に移りつつある頃、
「第一小隊、所定ポイントについた――送れ」
「CP（コマンドポスト）より第一小隊、別命あるまで現状にて待機。繰り返す」
迷宮第一層入り口には、照明に照らされた通路を駆ける一団がいた。
皇室近衛騎士団左翼大隊――
対妖魔戦闘において世界最強と評される魔法騎士達だ。
その後ろ。
通路の壁を遮蔽物にして待機する羽山と博雅は、漆黒の甲冑に身を固めた騎士達が見せる、まるで流れるような動きを、羨望とも驚嘆ともつかない複雑な目で見ていた。
「……」
二人とも、自分の感情を上手く言葉に表すことが出来ない。
近衛の甲冑を貸与されたのは、騎士として名誉なことだと思うし、遺影代わりといわれても、その写真は自慢の種になるはずだ。
だが……。
博雅は思わず自分の腕を見た。
自分の腕が包まれているのは、間違いなく彼らと同じ甲冑だ。
ならばと、自分に問いかけてみる。
同じ甲冑を着込んだ自分は、彼らと同じ動きが出来るか？
答えは否だ。
目の前の騎士達のあの動きは、絶対に自分には出来ない。
それが博雅の答えだ。
（いつか、あそこまで到達することは出来るんだろうか）
博雅は自問せずにはいられない。
（あそこまでいけば……ルシフェルの背中を任せてもらえるだろうか）

あまりの愚問に、苦笑すら出ない。
到達するか。
ではない。
到達しなければならない、のだ。
ルシフェルと肩を並べて歩くためにも。
それが自分に求められていること。
ただ、
その壁は博雅が想像していたより遙かに高い。
（それでも、俺は……）
唇を噛みしめながら、博雅は騎士達の動きを見守る。
騎士としての羨望を込めて。

（やべえよ……）
博雅の横で、羽山は体の震えを押さえるのに苦労していた。
武者震いじゃないことは自分でわかっていた。
羽山を震わせているもの……。
それは、
騎士達への恐怖。
そのものだ。
騎士達のそばにいるだけで、相手がどれほどの実力者か、その重圧からわかる。
近衛騎士団をナメていたつもりはないが、これは非常識すぎる。
もし、彼らに道ばたで出会ったら絶対に逃げるだろう自信はある。
（こんな連中と肩を並べる？冗談じゃねぇ）
ヤクザの大幹部達の中にチンピラが入り込むようなものだ。
敵より味方が恐ろしい。
それは皮肉な話だが、どうしようもないことなのだ。
恐れるのが味方でもいい。
敵を恐れなければいいんだ。
かなめちゃんや南雲の野郎も言っていた。

ようは場数だと。
場数を踏めば怖くなくなる。
それなら、踏むしかない。
踏まなければ死ぬしかないんだから。
そうだ。
そういうことだ。
（俺は……）
羽山は腹を決めた。
（やるしかねえってことか！）

「あっ。キミ達！」
後ろからかけられた女の声に振り向いた二人の前に女性士官が近づいてきた。
背中までの長い髪をリボンでまとめた、まだどこかあどけなさの残る士官が羽山の肩に装着されていた無線機を突きながら言った。
水瀬の専属ＣＰＯ鈴宮中尉だ。
「無線機のバンド切り替えて」
「えっ？」
羽山達は青くなった。
“無線機からの指示は聞き逃すな。聞き逃せば死ぬ――俺がぶっとばすからな！”
羽山達に装備の説明をした、やたらとマッチョな下士官のタンカを思い出したからだ。
「ごめんなさい――通信が多くて、キミ達のバンドまで割り当て効かなかったの」
中尉は両手を会わせて拝む仕草で羽山達に詫びた。
「羽山、秋篠両候補生には、これより饗庭中将指揮下の白ダスキ隊と合流。その背後で補給、通信、支援を行ってもらいます」
きりっと引き締めた顔から発せられる命令にそこそこの威圧感を感じながら、羽山達は姿勢を正した。

「はいっ！」
「はっ！」
双方で交わされる敬礼。
ぎこちない敬礼だが、それだけで、自分達はやっぱり、軍隊にいるんだと、羽山達は不思議な安堵感に包まれた。
「ふふっ……もう少し肘の力を抜いた方がいいですよ？羽山クン？」
鈴宮は微笑みながら敬礼したままの羽山の肘を直す。
それだけで、羽山も博雅も鈴宮中尉に不思議な親しみを感じてしまう。
保母さんか小学校の先生になったら、人気が出るんじゃないか。
と、ふと博雅は思った。
「うん――――これでよし」
「それで……饗庭中将達の現在位置は」博雅が訊ねる。
「えっ？」
「えっ……て」
「あの？鈴宮中尉？」
きょとん。とした鈴宮があわてた様子で言った。
「ごめんなさい！私、言い忘れてました！？」
「……」
「……」
羽山達はお互いの顔を見合わせてしまった。

地図を前に、羽山達が鈴宮から受けた説明は以下の通りだ。

迷宮というが、最低でも第一層から第三層は妖魔達の巣窟となっていることは、スパイとして通気口に放った式神達からの情報で判明している。
白ダスキ隊以外の全部隊の任務は、これの掃討。
第四層は、通路が入り組んでいて、組織戦はほぼ不可能なため、司令部は白ダスキ隊に委ねざるを得ないと判断している。

残りを乗り越えさせるため、部隊は全力で第四層の入り口まで彼ら白ダスキ隊を送り届ける必要がある。

「魔法でどーんって」

「爆破も考えたわよ？」

鈴宮中尉は羽山の意見に一応、頷いて見せた。

「でも、爆破は危険すぎて不可能」

「不可能？」

「ええ。工兵隊が調べたらね？ここの石組み、かなり複雑に出来ていて――――知ってる？“肥後の石工”って」

鈴宮中尉の説明によればこうだ。

肥後の石工――――鹿児島の橋には、ある秘密がある。どの石造りの橋も、たった一つの石をとりはずすだけで石組全体が崩れ落ち、橋を破壊する仕組みだ。戦のとき、橋を落として敵を渡れなくする仕組みだったが、この秘密を守るために、工事が終わると石工たちは「永送り」……ひと目につかないよう、こっそり切り捨てられたのだ。

「つまり」

“詳しくは本で読んでね？児童文学だから♪”で終えた鈴宮中尉の説明を、博雅はまとめた。

「この迷宮は、どこかの石を外すと石壁や天井が崩れ落ちると？」

「宮中の石垣や石橋を管理している工兵隊長が言っているから間違いないわ」

「それは、迷宮全部が崩落する仕組みですか？」

羽山は足下を恐る恐る見ながら訊ねた。

「わからないそうよ？工兵隊長によると、一フロアだけが崩落する可能性もある。でも、実際に崩落した場合、被害が一フロアに止まらず、連続して発生する可能性は大。もしそうなっ場合の損害は考えたくないって」

「成る程……」
「しかも！」
鈴宮中尉はわざとらしい態度で人差し指を立て、歌うように言った。
「ここの石は魔法をはじき返すんですって」
「さっきの爆発は」
「そう。悠理君が床をまとめて打ち抜こうとして大失敗した音」
「……た、楽しげに言わないでくださいよ」
博雅達は、迷宮内部から飛び出してきた爆風に吹き飛ばされたばかりなのだ。
すわ迷宮内部からの攻撃か！と司令部も大騒ぎになったばかりなのに。
「でもぉ」
鈴宮中尉は、拗ねたように口元を尖らせた。
それだけでも愛らしくてたまらない。
美人は得だ。
二人はそう思った。
「悠理君のＣＰＯやってると、そういうトラブルだけが楽しみなんですよ？」
「始末書とか……」
「大丈夫です♪」
鈴宮中尉はにこりと微笑んだ。
「書くの悠理君ですから♪」

くちゃんっ。
通路にかわいいクシャミの音が響いた。
「誰か噂してるのかなぁ」
式神をコントロールしていた悠菜は鼻をすすった。
「――うん。桔梗に明珠、紅葉に楓……ご苦労様。戻りなさい」
目をつむって、何もない壁に向かって微笑むその姿は、少しだけ

――怖い。
そのままじっ。とすること数分。
「式神が戻った。設置完了です」
悠菜が振り返った。
「これでなんとかなります」
「――4面同時攻略だと？」
怪訝そうな顔をする樟葉達司令部に悠菜は平然と言ってのけた。
「そうです」
「ここは地下だぞ？わかってるのか？」
「だから――テレポートするんですよ」
「不可能だ」
そう言ったのは、魔法騎士を率いて参加した加納拓也――あの加納萌子のご主人様……違う、飼い主……離れたな。恋人である。うん。恋人だ。
背が高く、クールな顔立ち。ホストでもやらせたらさぞ儲かるだろう。
「正確な座標もわかっていないのに、テレポートすることは出来ないぜ？」
「だから、これを使うんです」
悠菜が取り出したのは、先程、自販機で買ったドアのミニチュアだ。
「簡易テレポーター。リンク・ポイントの代わりになるものです。任意の場所二つにこれをおけば、それだけでリンク・ポイントが成立する大変お得なセットで。わーっ。これはスゴイですねぇ。パチパチパチ。今ならもれなくこのルームランナーがセットで」
「どこのテレホンショッピングだよ――リンク・ポイントが切れることは？」
「魔界の一流メーカー――ホントは二流だけど、の製品ですから」
悠菜は言った。
「魔界の統一規格と検定試験に合格した代物ですし」

「敵が細工している可能性は？」
「自販機の管理はグリムとは違います。あれは別です」
神音商会の名は出さなかった。
「ふむ――――」
考え込む樟葉。
「すでに式神がもう片方をセットしてあります」
「よし」
樟葉は手を叩いた。
何かを決めたときの樟葉のクセだ。
「各指揮官集まれ――――作戦を伝える」

悠菜の前には、土嚢を積んだ急ごしらえの機関銃座にメイド達が伏せ、その脇に指揮官らしい別のメイド達がしゃがんでいる。
さらに見ると、機関銃の射撃を邪魔しない程度の位置には魔法騎士達が待機している。
素材のわからないドアの両脇には、火焔放射器を持つメイドと、短い棒状の何かを持つメイド達が張り付き、緊張の面もちでこちらを見ていた。
派遣部隊司令部によって名称「A通路」と呼ばれた入り口。
別な入り口名称「C通路」では別のメイド隊が同じようなことをしているはずだ。
「ルシフェルちゃん、あれ何？」
悠菜は、壁に張り付くメイドの手にした棒状の物体を指さした。
柄のついた大きな円形の筒だ。
「テルミット・プラス――――約６０００度の高熱で敵を焼き払う特殊焼夷弾。それを手榴弾にしたもの」
「６０００度？“火玉”並だね」
火玉――――別名“ファイア・ボール”または“ボール”。
一年戦争において、あらゆる存在を焼き払った恐るべき妖魔。
本体から１キロ以内を最低でも５，０００度を越える灼熱地獄を

生み出し、あらゆるものを焼き払う“地獄製造器（ヘル・メーカー）”の一種。
彼らを撃破するのに人類が支払った損害は、冗談抜きで軽いものではない。
それを知るだけに、ルシフェルの視線は、
（イヤなことを思い出させないで）
そう語っていた。
「効果範囲が短いというか、密室でもないと効果ないからそれだけは救いだよ」
「ふうん？」
首を回して見る周囲は、完全武装の近衛兵だの、甲冑姿の騎士だの、一体、何のコスプレ大会か聞きたくなるような光景が広がっている。
珍妙。
というには、全員の視線は真剣そのものだ。

「第二層にメイド隊、第三層を近衛兵と魔法騎士隊、第四層を我々が攻める。ただし、まず第二層攻略を開始し、これをオトリとし、敵が第二層に視線を集中させている間に、他層へ攻め込む――それでいいな？」
今やドアのミニチュアは巨大化し、普通のドアとかわらない様子で通路の壁に並べられ、その前に騎士や兵士達、そしてメイド達が列を作っている。
「いくぞ？」
樟葉は大きく手を挙げ、振り下ろした。
攻撃開始の合図だ。

次の瞬間。

ガガガガガッ！！

ドアが機関銃で撃ち抜かれ、銃撃で開いたドアの大きめの破孔に火焔放射器のノズルが突っ込まれる。
トリガーが引かれ、破孔の向こう側に数千度の灼熱の炎が広がった。

キシャアアアアアアッ！！

その叫び声に、皆が一様に、ドアの向こうに敵が存在することを確信した。

ブンッ。

機関銃座の横に待機していた指揮官が手を振り下ろす。
火焔放射器が壁の脇へと下がり、かわりにテルミットプラスを弾頭につめた柄付手榴弾の安全ピンを歯で引き抜いたメイドが、ドアの向こうへと手榴弾を投げ込んだ。
「耐熱防御！」
指揮官の号令に、魔法騎士達が兵士達の前に並んで一斉に魔法障壁を展開する。
「うっわーっ」
悠菜が呆れたのも無理はない。
彼女の“目”は、炎上しながら融解するドアの向こうの室温がただごとでは済まないレベルにあることを“見ていた”からだ。
この熱に耐えられる人間界の生物がはたして存在するか？
悠菜はどうしてもそれが思い出せない。
「すごいですね」
悠菜の横にいた綾乃も驚きを隠せない顔で言った。
「ニンゲンにここまでのことが出来るとは――魔界も、いろいろと考え直すべきかもしれませんね」
「熱が引き次第、Ａルート、Ｂルート、同時に突撃する！――備

えっ！」

ギャカッ――ザザッ！

床に“Ａ”と大きくスプレーで書かれたドアの前に銃を構えたメイド達がドアの両側に待機する。

「中隊、前へっ！」

その号令一下、エプロンドレスをひるがえしたメイド達はＡ、Ｃ両通路に飛び込んでいく。

手にするのはＭＰ４０やＳｔＧ４４。

半世紀以上前に活躍したクラシカルな銃。

外見こそそうだが、内面は最新鋭の機能を常に組み込んで来た、いわばメイド達にとって“最も信頼できる”銃達。

そして――モップ。

メイド達の目の前に広がるのは、先程の攻撃で黒こげになった室内。

そして、別室や部屋のあちこちから、屍肉に群がるウジ虫のようにわき上がってくる得も言われぬ不気味な存在――妖魔の群れ。

妖魔達が動くたびに、その顎といわず、足といわず、羽といわず、あちこちから耳を覆いたくなるような不気味な音がする。

「撃てっ！」

「羽のあるヤツを飛ばすな！」

ズガガガガカッ！！

指揮官――室町中尉の命を受け、メイド達が一斉にトリガーを引く。

ブワッ！

仲間の屍に隠れていたのか、

虻を巨大化させたような妖魔が背筋の寒くなるような羽音を響かせ、メイド達を襲う。
「きゃっ！」
ＭＰ－４０のマガジンを交換していたメイドは、逃げるタイミングを一瞬逃した。
「ひっ――――」
「どけっ！」
ドンッ！
怯えるメイドを背後にいた別のメイドが突き飛ばし、手にしたモップを一閃した。

バグシャッ！

吐き気がする音がして、虻のバケモノは胴体を切断され、メイド達の後ろの床に落下してその姿を消した。
「引くなっ！」
怒鳴ったのはモップを持つ室町の副官、加藤由美子だ。
メイドにとって――――
ゴキブリ
ハエ
ネズミ
まとめて言えば、家の害虫・害獣は見ただけで失神したくなるほどの、いわば天敵だ。
実際、メイド達の中でも新兵に近い者の何名かは銃やモップを降ろして青くなっている。
由美子にも新兵達の気持ちはわかる。
自分が同じ立場なら、もう失神しているはずだ。
だが、今はそんなことを言っていられる状況ではない。
「一歩でも引いたら――――ドアを出たら殺すぞ！」
なおも迫り来る妖魔を前に、由美子はモップを振るい続けた。

その度に鈍い切断音が響き、由美子の周囲には妖魔の亡骸の山が出来ては消えていく。

「１０時、弾幕張れっ！――――Ａ中隊の汚名、雪ぐのは今だぞっ！」

火焔放射を浴び、のたうち回る妖魔達。

その気色の悪さに青くなりなる由美子の横で、時子が銃を乱射していた。

「由美子の言うとおりだ！」

足下に転がり、断末魔の痙攣をする妖魔に銃尻を叩き付けた時子が叫ぶ。

「ドアの向こうにいるのが銃殺隊だということを忘れるなっ！」

嘘だ。

由美子は知っている。

春菜殿下――――自分達の本当に守らねばならない相手。

あの夜、それを護れなかったのは、警護に当たっていた私達Ａ中隊。

いかなる敵からも皇族の姫君達を、

あの寮を

すべての敵から守り続けてきた伝統と栄光の宮中女官団。

その名に泥を塗ったのは確かに自分達だ。

あれ以来、

他中隊からまで侮蔑され続けた我が中隊が汚名を雪ぐことが出来る唯一の機会。

それが今。

だからといって、脱走するメイドが一人だって存在しないことは

メイド達の顔を見たらすぐにわかる。

銃殺隊が背後にいる。

それは「今の自分達の立場」を思い知らさせるための狂言に過ぎない。

背後にいるのは、C中隊から派遣されてきた機関銃小隊――歩兵中心のA中隊には存在しない――それだけだ。

（そんなもの、用意されなくても、死ねといわれればいつでも死にますっ！）

その存在をメイド達に言った時、そう言って食って掛かったのは、横でモップを構える新兵。

名前は何と言ったかな。

どこかで見た気がするんだが。

由美子はどうしても名前が思い出せなかった。

「由美子っ！」

ドンッ！

ふいに右からすごい力がかかった。

「ぼっとしているな！中隊副長の名が泣くぞ！」

時子の罵声に、由美子は現実に引き戻された。

「はいっ！」

妖魔達の数は減っている。

間違いなく、自分達が押している。

「殺せっ！」

由美子はモップで武装したメイド達と共に妖魔の群れに突撃した。

「冷静沈着に――――残虐に――――無慈悲に！」
モップが振り下ろされるたびに妖魔達が確実に殺されていく。
慈悲深いはずのメイドが見せる無慈悲。
由美子達はその体現者となっていた。
「戦果こそが我が栄誉！メイドの栄誉だ！」
「はいっ！」
新兵もモップで妖魔の息の根を止めた――――かに見えた。

ドスッ！

脳天にモップを振り下ろされたクモ型の妖魔の胴体を別なモップが切断した。
はき出されかけた糸が力無くその胴体にたれ、消えた。
「甘いぞ新兵！」
由美子だ。
「確実にトドメをさせ！させなかったら間合いをとれっ！」
「は、はいっ！」
「怖いか？」
「よ、妖魔より」
新兵は半泣きになりながら、それでもモップを振るい、上空から襲ってきた妖魔を確実に撃破してのけた。
「副長の方が絶対怖いですっ！」
「よく言った！」
由美子はモップの一閃だけでダニのバケモノを一掃する常人離れした技を見せつつ怒鳴った。
声色から、由美子が怒っていないと判断した新兵は心の中だけで安堵のため息をついた。
「それでいい！」
「あ、ありがとうございますっ！」
「名前は？」

「も、森村……森村綾音（もりむら・あやね）ですっ！」
「森村先生とはお知り合いか？」
「そ、祖母ですっ！」
「ほう？」
ああ。
そうか。
由美子は溜飲が下がる思いになった。
顔立ちは全然似ていないが、規則に厳しそうな真面目そうな雰囲気とか、いざとなると何をしでかすかわからない所とか、教え子として味わわされた過去。
それが似ているんだ。
ザンッ！
ズシャッ！
会話を交わしながら、二人は絶妙のコンビネーションプレーを見せ、敵を次々と撃破していく。
「なら」
由美子は言った。
「生き残れ――帰ったら褒美をくれてやるっ！」
「あ、ありがとうございますっ！」
モップが妖魔達を切断する鈍い音の合間に、森村綾音は嬉しそうに言ったが――。
「上官に対する口の利き方を特別に教えてやるっ！」
「ええっ！？」
「安心しろ！私は森村先生ほどは――甘くないっ！」
「あ、あれの」
ヤケクソ気味にモップを振るう綾音がたまらず怒鳴り返した。
「あれのどこが甘いんですかっ！？」
それに由美子はあっさり返した。
「体罰がないだろうが！」

（……ここで死んじゃおうかな）

綾音は一瞬、かなり本気でそう思った。

第五十一話

「ほらね？」
美奈子はどこか楽しげにさえ聞こえる声で言った。
「どうせ、全部から来るって言ったとおりでしょう？」
「これは――――完敗ですね」
グリムがあきれたようにモニターに視線を送った。
「私はてっきり第二層から順に攻めるかと」
「それやるには数が多すぎ。それでわかったのよ。最初から魔法使って全部から攻め込むのは目に見えてるんだって。
――――何より、水瀬君達だけでパーティ組んでくるなんて、本気で思っていたわけじゃないでしょう？」
美奈子はふんぞり返るように革張りの豪華な椅子に腰を下ろした。
「グリムさんみたいなことやっていたら、来るのはあの鉄砲玉だけじゃ済まないんだから」
「こ、恋人を鉄砲玉って……」
言いかけたグリムは美奈子の視線に沈黙した。
「絶対、軍隊か警察が徒党を組んでお礼参りに来る。グリムさんはそれだけのことしてるの。バンカーバスターだっけ？地下を攻撃するミサイルが撃ち込まれない方が奇跡に近いんだから」

言ってから美奈子はあれっ？という顔になった。

「そういえば……どうして？」

おかしい。
今まで気づかなかったけど、絶対におかしい。
敵の狙いはグリムさんの首。
そのはずなのに……。

それが違う？

思案にふける美奈子の目の前。
そこには壁一面にモニターが据え付けられ、敵である兵士やメイド達の戦いを映し出している。
美奈子の見る限り、現状、敵は一進一退。
入り組んだ通路と、あちこちに仕掛けられた小型妖魔専用のトンネルが敵の進撃を著しく阻害していた。

そうか。
そういうことか。

納得したという顔の美奈子は命じた。
「死人は出しちゃだめよ？」
画面から目を逸らさず出される美奈子の命令に、
「――心得ています」
横に立つグリムは律儀に答える。
「ご機嫌をそこねたくありませんからね」
「誰の？」
「あなたと――あそこのお姫様」
モニターに映し出されるのは、剣を振るう綾乃。
妖魔をまとめて数体、撃破した所だ。
凛とした気品さえ感じる剣さばきは見事の一言に尽きる。
「……」
知らずに美奈子の顔はしかめっ面になった。
モニターの下では、どこから集めたのか、オペレーター（美奈子の趣味で全員美男子）がせわしく状況分析にいそしんでいる。
「第四層までをあの石で固めたのも、敵が多数になることを警戒して？」
「そうよ」

美奈子はグリムの差し出したコーヒーカップに口を付け、頷いた。口の中に広がる苦みが意識を引き締めさせてくれる。

「水瀬君達だけなら、勢いだけで来るのは目に見えている。それは魔法攻撃を反射する素材で十分しのげる。問題は、水瀬君を手助けする、常識のある連中よ。こんな所に来るんだから、それ相応のプロと見て間違いないでしょう？そのプロに“ここじゃヘタなコトできない”って最初から理解させる。

つまり、大軍で攻め込んだら自分達の方が不利と悟らせるように迷宮そのものを作る。

それが、敵に決定的な行動を躊躇させることになる。

ひいては、それが迷宮に攻め込む敵の数を減らす最良の策となるのよ」

「成る程？」

迷宮は、広いと思って突撃しても、次は突然人一人通るのがやっとなほど狭くなる。

広い狭いが極端にランダムな作りになっている。

しかも、総じて天井が恐ろしく低いカ所が目立つ。

さらに、図面上は不必要とグリムが思っていた、天井といわず壁と言わず、あちこちに作られたせり出しが、現実には妖魔が隠れ、攻撃を避ける絶好の場所になっている。

下手な突撃は伏兵からの奇襲を招く。

狭く、天井が低いカ所では剣やモップが振るえず、銃火器はせり出しが邪魔で射界がとれない。

石のせいで魔法が撃てない。

しかも、あちこちにトラップが仕掛けられていて冗談抜きでうかつに動けないのだ。

メイド服を着た女性達が、モップや銃片手に負傷したらしい仲間と肩を組んで後退していく。

兵士達がぐったりしている兵士の両手両足をもって下がっていく。

衛生兵！
手を貸してくれ！
しっかりしろっ！

メイドや兵士達の叫びが、銃声と共にスピーカー越しに美奈子の耳に響いてくる。

白兵戦のプロ――メイドが、
組織戦のプロ――近衛兵が、
魔法戦のプロ――近衛騎士が、

圧倒的優位にある彼らが、

グリム達に手玉に取られている。

すべてを考え出したのは、グリムの横でコーヒーを飲む少女。

その少女が言う。

「それに、今来ている連中だって、四層までは死ぬほど遊ばせてあげる。でも、それから下は水瀬君以外、絶対に行かせない。その為

の策は練ってあるし」
「“あれ”ですか？」
「そう――“あれ”」
ドンッ！
乱暴にカップをテーブルに置いた美奈子の顔を見たグリムは慌てて視線をそらせた。
「そ・れ・よ・り」
ガタガタガタ……
カップを掴んだままの手が小刻みに震えていた。
「なんなのよ！」
美奈子は突然、爆発した。
「何！？あれは何！？何だって言うのよ！」
「へっ！？」
美奈子の指さす先には、モニターに映し出される悠菜の姿があった。
（折角、恋人が助けに来ているんだから喜べばいいものを）
グリムはそう思ったが、
「何で水瀬君、あんなに周囲を女ばかりで固めているの！？何で水瀬君が瀬戸さんと一緒に戦っているの！？何で水瀬君、あんな美人ばかりはべらせて！何！？あれ、私に対する当てつけ！？」
「い……いや。それはないんじゃないか……なと」
「ムカツクムカツクムカツクゥゥゥゥッ！！」
美奈子は立ち上がった。
「まじむかつく！」
ブンッ
ガシャンッ！
美奈子に投げつけられたカップはモニターにめり込んで砕けた。
「あのモニター、リースなんですよ！？あれ、一個いくらすると思って！」
「寄付っ！」

あせるグリムに美奈子は怒鳴った。
「純情可憐な乙女心をここまで愚弄するなら、それ相応の目にあってもらうんだからぁっ！」
「み、美奈子さん、どうか落ち着いて！」
「どうやって！？」
「と、とりあえず深呼吸とか」
「息の根止められたくなかったら、さっさと妖魔の増援出しなさいよ！」
「よ、妖魔はもうこれで」
「妖魔っていっても、どうせそこらの昆虫を巨大化させただけでしょうが！冬眠から覚めたどじょっこだのふなっこだの、なんでもいいからブチこみなさいっ！」
「無茶な！」
「無駄に息しているヒマがあったら、そこにいる連中動員して土でもほじくり返してきなさいっ！――ほらソコッ！オケツ掘られたくなかったらスコップとバケツ用意！ノルマは一人１００万体よ！」
「どんな生態系にいけばそんなマネが！」
「いっそアメーバを妖魔化しなさいよ！それなら出来る！」
「無茶苦茶ですっ！」
「根性でなんとかなさいっ！それでも軍人！？」
「私は学者ですっ！」
そんな美奈子にオペレーターが報告する。
「第四層、敵、猛烈な勢いで友軍を駆逐中！」
「えっ！？」
美奈子とグリムは思わず顔を見合った。
戦況はこちらが圧倒的優位のはず。
それが何だって！？

「どういうことだ！」
グリムの怒鳴り声に、
「敵５、一斉に攻勢に転じました！」
モニターに映し出された何人かを、美奈子は知っていた。
担当教師の南雲。
友人のルシフェル。
学校に来たことのある樟葉。
そして――

「そんなに私のこと……嫌いなんだ」
美奈子は怒りを満たした瞳に映るのは、悠菜の姿。
好きで好きでたまらない男の子の勇姿を拝めるのは、普通なら喜ぶべきだろう。
だが、今の美奈子にとって、ここで戦う悠菜の姿は、自分への敵対行動にほかならない。
つまり、許されるべきことではない。
モニターの中で、悠菜は「鎧袖一触」とはどういう意味かを、行動で示していた。
妖魔達が、まるでシュレッダーにかけられた紙きれのように切り刻まれていく。
そのスピードは圧倒的だ。
今、同時に襲いかかった妖魔１０体以上が切り刻まれ、宙を舞った。
「――っ！」
美奈子が唇を噛みしめたのは、それだけではない。
移動を開始した悠菜は、あの女と接触したからだ。

瀬戸綾乃。

単なるアイドル。

その地位と悠菜との関係から遠慮していた自分が、今の美奈子には許せない。
いかなる理由があっても、今の美奈子には、悠菜と綾乃が同じ空気を吸うことさえ許し難いことなのだ。
その二人が、何事か言葉を交わし、行動を開始した。
その戦果は、圧倒的だった。
「第四層、制圧されました！」
友軍反応が、掃除機で吸い取られたように消えていくモニターを、全員が呆然と眺める中、オペレーターがそう報告した。
「は、早すぎる！」
美奈子が怒鳴った。
「な、なんで！？」
「こいつらです！」
オペレーターがモニターに映し出したのは、
「この二人が、片っ端から妖魔を潰して――」
映し出されていたのは、当然、水瀬と綾乃だ。
「この馬鹿共っ！」
やり場のない思いの罵声を受け、全員が首をすくめた。
じっ。とモニターを見つめた美奈子がよどみのない声で命じた。
「第一層の壁と天井を崩落させてっ！それで外部からの補給を遮断するっ！残存の妖魔を後退させなさいっ！」
崩落。
言うのは簡単だが、やられる方はたまったものではない。

降り注ぐ石材。
立ちこめる埃。
第一層では、息が止まりそうな中、皆が逃げまどった。

「メイド第二小隊、負傷者多数！」
「歩兵、数名がガレキの下敷きに！」
「衛生兵！衛生兵はどこだ！」
「司令部へ連絡、救援要請を！療法魔導師隊の増援を出させろ！」

第一層は、最早戦闘どころではない。
外との補給線が断たれたのが致命的だ。
テレポート・リンクだけは無事だったが、そんなことは気休めにもならない。
背後を襲われ、最悪弾薬の補給路が止まっては戦闘にならないのだ。
全部隊が第一層に戻って、仲間の救援と退路を確保しなければ全滅するしかない。
それでも、各層は制圧せねばどうにもならない。
樟葉は攻撃の継続を命じた。

「やられたな……」
樟葉が、苦々しげにタバコに火をつけたのは、最後まで抵抗を続けていた第三層の制圧報告が入ってからだ。。
「外部からの補給路が遮断されたか」
樟葉の目の前。
そこは通路だった所。それが今では、固い石が壁となって立ちふさがっていた。

「損害は？」
「死者無し、骨折等の重傷１２、軽傷４０。生命に問題なし」

近衛兵を率いる指揮官が報告した。
樟葉は無言でメイド隊を率いる室町を見る。
「メイド隊、死者無し。重傷2、軽傷15。戦闘行動に支障なし」
「不幸中の幸いだな」
落下する石壁をモップで破壊し難を逃れるという非常識な方法で致命的な負傷を避けられたメイド達だが、機関銃やブラスターなどの重火器を携行していた兵士達はそうはいかなかった。
「最小限度の人員を残し、再度の制圧にかかれるか？」
「敵の数が不明です……損害を完全に無視しろと命じられれば」
指揮官は暗い顔になって俯いた。
部下に死ね。
そう命じろというのか。
彼の顔は暗にそう訴えていた。
「誰が言うか」
樟葉はタバコを足でもみ消した。
「これ以上の落盤の可能性は？」
「現在、工兵が調べていますが、恐らくはないだろうと」
「よし。調査を継続させろ。悠理、他魔法騎士達で式神を使える者は各層の偵察に出せ」
「了解」
「了解」
「全軍、このまま警戒態勢。負傷者は第一層へ搬送」
「了解です」
樟葉は軽くため息をついた。
優勢だったのに、一瞬で形勢は逆転。
補給路を遮断され、石の下敷きになっても頑張っている数本の通信ケーブルだけが外部との連絡を可能にしている有様。
外部と行き来が出来ないため、弾薬の補給が出来なければ、攻勢の継続は不可能だ。
攻めに来たというのに、退路すら断たれるとは……。

樟葉は心底知りたいことを口にした。
「ここまでやってくれるとは……一体、どこの誰の仕業だ？」

「さすがにこれ以上の組織的侵入は諦めたようですね」
モニターを見ていたグリムが楽しげに言った。
「退路を断たれ、敵も混乱したというところですか」
「一時的よ」
美奈子はあの豆をつまみながら言った。
「まさか突然、退路を断たれるなんて想像すらしないでしょう？次は対策してくるわ」
「機略……ですか？」
「まぁ、そうね」
美奈子はつまらない。という顔でモニターから視線を外した。
「やっぱりヤメ。準備中の妖魔はすべて第五層で待機」
「えっ？」
「第三層に潜めている“ゴースト”を各層に――――でも、戦闘は散発的なものに留めて」
「それは、どういう？」
グリムは美奈子の真意を測りかねた。
ゴースト。
つまり、死霊だ。
死角から襲わせて敵に憑依させて殺すための、いわば地雷的存在として準備した。
それをどう使うつもりだ？
散発的？
「つまり、敵をからかう程度でいいってこと」
それがグリムには理解できない。
魔法騎士はともかく、今、一気に攻めればニンゲン達を皆殺しにすることだって出来る。

それを何故止める？
からかう程度？
首を傾げるグリムに、美奈子は言った。
「今、攻勢をかければ、敵も死にものぐるいで戦うのは明白。貴重な妖魔を、そんなことで失うのは御免だわ。だから、死霊でいいの」
「しかし」
「この迷宮の目的は？」
美奈子の冷たい問いかけに答えようとしたグリムは、唇の端をつり上げた。
「成る程？」
美奈子が何故、全層を放棄したかようやくわかった。
いつどこで出てくるかわからないゴーストで敵を攪乱し、各層に敵を釘付けにする。
そして、第四層以下に進む敵の数を激減させる。
さらに、敵は退路を塞がれることと、各層で第一層同様の落盤が発生することを恐れるあまり、侵攻には及び腰になるのは明白。
第四層まで落盤の危険性がある作りであることは敵だって知っているはずだ。
もし、敵の誰かから“落盤の心配なし”と言われても、一度体験した恐怖が心理的に敵の行動を鈍らせる。
必要がなければ、誰も下手な行動をとろうとはしない。
むしろ、退却したいと考えるのが普通だ。
それに、この迷宮は組織戦で戦うために用意したものではない。
少数の部隊――いわばパーティを迷宮の奥深くに引きずり込み、消耗させて殺すことこそ、その目的であり、そのための作りが成されている。
敵を消耗させる。
それこそが迷宮の本来の目的にして機能。

迷宮に本懐を果たさせるためにも、敵は決定的に分断させるべき。
侵入する敵は少なければ少ないほど良い。
それが美奈子の策だと、グリムは理解した。
「わかりました」
「そう？――第三層のゴーストの一部を第二層入り口へ向けて移動させて。入り口から顔を出すだけでいい」
「顔を出すだけでいいんですか？」
「攻勢と誤認させて、弾薬を消耗させるのよ。確か、ゴーストに対妖魔用の弾丸は効かないのよね？」
「はい」
「上手く演技させて頂戴。敵が発砲したら引く。敵が恐慌状態に陥ったら重畳よ」
「了解です」
「それと」
矢継ぎ早に飛ばされる指示をグリムは心地よさ気に聞いた。

全く、この子は策士だ。

グリムは心の底からの敬意をもって美奈子に頷いた。
この子は、この迷宮のあらゆる機能・機材・兵隊を縦横に使って敵を倒そうというのだ。
策士――いや、軍師というべきか？
グリムはそう思いながら、オペレーターに指示を飛ばした。
「我らが姫君からのお沙汰だ。そのように」
「……グリムさんの言葉で命じなさいよ」

第五十一話（後書き）

ついにメイド隊まで投入しちゃいました！
事態の収拾がつきませんっ！
どーしましょう！？
教えて！どうしたらいい！？どうしたらいいの！？ダディクール！
（↑作者の精神状態を１０文字以内で述べよ・１個５点（ウソです））

第五十二話

「敵の手は見え透いています」
悠菜は言う。
「第四層まで、いつ落盤するかわからない作りにして、敵である私達の混乱と警戒を誘う――それだけなんですよ」
「つまり？」
ルシフェルが訊ねた。
「どういうこと？」
「……ルシフェルちゃん」
悠菜が気の毒そうな目で言った。
「アタマは使わなくちゃダメだよ？」
「ケンカ売ってるの？」
「そうじゃなくて――私達が主力部隊を第二層に降ろせない理由は？」
「第二層以下で落盤が発生した場合、さらに被害が」
「なら」
「なら？」
「事前に落盤を誘発させたらどうなるの？」
「事前に落盤を……誘発させる？」
「そう」
得意げに頷く悠菜の顔を見ながら、ルシフェルは少しだけ考えて、
ぽんっ。
と手を打った。
「成る程？」
「わかってくれた？」
「つまり、落盤を先に起こすことで、被害を避けると？」
「そういうこと」
「――で？」

二人のやりとりを聞いていた樟葉が冷たい声で言った。
「お前達、その場所がわかるのか？」
「何のために工兵隊がいるの？樟葉さん」
「……工兵隊！」

悠菜達とは少し離れた場所に立つのは、綾乃だった。
人間達に動きがあるのを見ながら、綾乃（ティアナ）は、彼女なりの作戦を考えていたのだ。
先に落盤を誘発させるという悠菜の手は妙案としかいいようがない。
第一層を見る限り、一度落盤させれば、二次的な落盤はありえない作りになっているのがその裏付けだ。
綾乃（ティアナ）にとって問題は別にある。
妖魔に見慣れた自分が見たことのないタイプであることから、グリム達のオリジナルであることは明白だ。
妖魔の残骸が無くなっていることから考えれば、人間界に住む昆虫でも妖魔化させたと見て間違いないだろうし、本当にそうなら、量産能力によっては敵の規模は想像を絶することになるだろう。
「マズイですね」
魔法攻撃が有効なら、恐れる必要すらないこと。
だが、魔法を反射する石が使われている以上、魔法攻撃は自殺行為に他ならない。
敵から与えられたハンデは、綾乃（ティアナ）でも厳しいものがある。
「せめて……鉄砲でしたっけ？あれが使えればいいのですが」
人間達の使う銃。
殺傷力は高いが、弾丸に限りがある。
補給がきかない状況では、頼りすぎるわけにもいかない。
「う～ん。どうしたものでしょうか……」
綾乃（ティアナ）が腕組みをして考えていると、

ちょいちょい。
袖を引く者がいた。
もたれかかっていた柱の影。
人間達には見えないところにいたのは、
「カノッサ！」
そう。
綾乃（ティアナ）の部下、カノッサだった。
「あなた……どうやってここに！？」
「シーッ……声が大きいですよ？」
口元に人差し指を立てたカノッサが言う。
「耳寄りな情報が入りました」
「情報？」
柱の影に入り込んでしゃがんだ綾乃（ティアナ）が小声でカノッサに問いかけた。
「何ですか？」
「えへへっ……苦労したんですよ？」と自慢げに笑うカノッサ。
「いいから話しなさい――その前に」
綾乃（ティアナ）は周囲を見回した。
「あなた、どこから入ってきたんです？」
「魔界からの別口が地下にありますよ？」
「魔界から？」
「ええ。工員専用出入り口」
「警戒は？」
「ドワーフが固めてましたけど、搬入される酒樽に紛れれば造作もないことでした」
「さすが帝室情報部のトップエージェントと褒めるべきですか？」
「いえいえ」
カノッサはわざとらしく手を伸ばして辞退を示す。
「お褒めにあずかる程度で済む話では」
「手打ちにされたくなければ続きを」

「はい――まず、姫様、魔界公安調査庁で異変です」
「魔界公安調査庁で？」
魔界公安調査庁――
魔界の特別高等警察。捜査能力はＣＩＡやＫＧＢどころの話ではない。
一つの世界の諜報を一手に担う桁外れの組織だ。
「ガールフ一等捜査官……ご存じですね？」
魔界では敏腕捜査官として知られる官僚であると共に、男爵位まで持つ一端の貴族なのだ。
魔界の姫として知らないわけがない。
「ええ。……その……いろいろと」
ただ、綾乃（ティアナ）はなぜか、その名を聞いた途端、ばつの悪いという顔で視線をそらせた。
「姫様が騒ぎを起こすたび、姫様とっ捕まえに奔走したあの爺さんです」
「ええ……男爵にはいろいろとお世話に……本当に」
「その一等捜査官が殺されました」
「！？」
「頭部を粉砕され、体の数カ所に斬られた痕跡があったと」
「……まさか、シェリスが」
その名を心底汚らわしい。という顔で呟いた綾乃（ティアナ）にカノッサは深刻な顔で言った。
「そのシェリスですが」
「殺したはずですが？」
「生きています」
「あれで！？」
「シェリスは仲間と共に、帝室の派遣した捕縛隊――誰を捕まえるための組織かは言わなくてもわかるでしょう？その中に参加していました」
「参加して……いました？」

意味のわからない綾乃（ティアナ）は、カノッサの次の言葉を待った。
「それが……脱走したのです」
「脱走って……馬鹿なことを」
綾乃（ティアナ）はカノッサの言葉を否定した。
「あれは私の昔の学友、名門貴族の出、それを」
「ガールフ一等捜査官と最後に接触したのは、彼女です」
「……」
綾乃（ティアナ）の表情が凍り付いた。
「これは、一等書記官に取り次いだ養女の証言他から裏付けが……わかりますね？」
「セージュの証言ですか？」
「はい……姫様にとって妹にも等しい扱いを受けてきたあの娘が嘘をつくとでも？」
「……シェリスの目的は？」
「姫様を捕まえる仕事を二カ所から請け負った。双方から報償を得るために。一つが帝室、もう一つが」
「グリムと手を結んだ」
「そうです。シェリスの関係者が一人捕縛され、拷問の末に白状したことです」
「……ご苦労でした」
「ついでに、シェリス達はすでにこの迷宮に侵入した模様」
「魔界公安調査庁と情報部は？」
「現状、静観です」
「――冷たいですね」
「まぁ、目的が目的ですからねぇ」
カノッサは意味深な微笑みを綾乃（ティアナ）に向けた。
「目的って――」
少し考えた綾乃（ティアナ）が青くなった。
「そうです」
顔色から判断したカノッサは頷いた。

「彼女達も姫様の捕縛が目的ですから」
「捕縛を口実に、私を殺そうとする可能性は？」
「大――そういうべきですね。しかし、その肉体は姫様ではありません。魂だけを捕縛しても任務達成にはなります。場合によっては、捜査官殺害ですらそれで帳消しに」
「思う存分私を殺して、それでお金をもらえる――そうも聞こえますが？」
「“剣の舞姫”を倒したとなれば、かなりの箔がつきますからねぇ」
うんうん。とカノッサは腕組みしながらさもわかったという顔で何度も頷いた。
「大体、姫様も悪いんですよ？」
「私が？」
「天界の人形に入れ込むあまり、ご自分のパートナーを見つけようともしない挙げ句に、“私は私を倒した方と結婚します”なんて人前で大見得きったんですもの。
捕縛隊なんて、独身で腕に覚えのある厄介な武術家だの剣術家だのワケわかんない連中が鼻息荒くしてましたよ？――剣術指南役目指してるルイタス子爵とか」
「あんなマントヒヒなんて！」
「だからぁ」
カノッサは諭すような口調で綾乃（ティアナ）を見た。
「さっさと天界の人形と関係もっちゃえばいいんですよ。痛いのなんて最初だけですよ？子供作っちゃえばもう天界だろうが何だろうが」
「し、知るもんですか！」
綾乃（ティアナ）はムキになって言った。
「わ、私は――別に！」
「ホント……素直じゃないんだから」
「っ！！」
呆れたようにポツリとカノッサが呟いたが、それを綾乃（ティアナ）は睨むだ

けで済ませた。
「母君――グロリア陛下が」
「母上もそんなこと言ってるんですか!?」
「へっ？いえいえ」
「じゃあ、何です？」
「姫様をさっさと見つけてこい！と凄まじい剣幕で――やむを得ず、魔界公安調査庁も天原組とは裏取引して、ここの見取り図とかいろんな情報を引き出したようで。連中がここに侵入してくるのは時間の問題です」
「見取り図とか、情報は持ってきてないんですか？」
「魔界公安調査庁ですよぉ？商売敵から情報手にするのがどれほど」
「さっさと入手して下さい。他には？」
「後？――ああ。獄界がグリムを見放しました」
「獄界が!?」
「ええ。グロリア陛下から直接、獄帝陛下に親書が送られ、その返書の中にあったとか――グリム・リーパーなる存在に関して、獄界は一切関知しない」
「死んでも……何されても関係ないと」
「そうです。それを受けて帝室から掃除人（スイーパー）が1人、派遣されています」
掃除人。
それを聞いただけで綾乃（ティアナ）の顔色が変わったのも無理はない。
魔界の隠語で掃除人とは文字通りの暗殺者のことだ。
決して近づいて欲しい存在ではないのだ。
「詳しくは知りません。ただ、その掃除人が変わっていまして」
「？」
「金はいらない。何もいらない。――ただ、シェリスの首が欲しいと」
「……セージュが雇ったのですか？」
「グロリア陛下勅命と聞いております。なんでも、進言を受けて即

決、帝室の武器庫から必要と思われる装備全部貸し出した挙げ句、経費は全部姫様のお小遣いから天引きすると」
「最後が気になりますが！？」
悲鳴を上げた綾乃（ティアナ）に、カノッサはつくづく。という顔でため息をついた。
「本当……アタマに血が上ると無茶苦茶するトコ、親子ですよね？陛下と姫様って」

「やれといわれればやりますけどねぇ」
工兵隊長は、普段から渋い顔をさらに渋くして言った。
「かなり危険ですよ？」
「全員を第一層に避難させればよいのではないか？」
「問題は落盤だけじゃないんで……」
頭をかく工兵隊長に、樟葉達の視線が集まった。
「どういうこと？」
「水瀬のぼっちゃん……ぼっちゃんならわかるんじゃないか？」
「なんで？」
悠菜は意味がわからず、首を傾げた。
「言っちゃ悪いけどねぇ」
工兵隊長は壁を叩きながら言った。
「コイツを仕掛けた奴ぁ、相当に性根がヒネくれた奴ですぜ」
「成る程……ひねくれ具合では馬鹿息子だって負けてはいない」
「ぷうっ！」
納得する樟葉に悠菜は頬をふくらませて抗議した。
「わ、私！」
「それで？」
悠菜を無視したイーリスが訊ねた。
「何が問題なのだ？」
「これですよ」

工兵隊長が取り出したのは、一枚のフィルム。
柱が格子状に走っていて、それぞれの格子の真ん中には丸いモノが映し出されていた。
「壁を簡易X線で撮影したものです。第一層、二層共にこんな感じです」
「壁は――鉄筋コンクリート製だな」
「少佐、さすがですな――では、この丸いのは？」
「――貸せ」
フィルムを工兵隊長から取り上げたイーリスは、フィルムに顔を近づけ、
「だめだな。危険すぎる」
ため息と共にそう言った。
「でしょう？」
工兵隊長はさもありなん。という顔で頷いた。
「何です？」
「爆薬だよ」
工兵隊長はあっさりとそう言ってのけた。
「爆薬？」
「そう――壁を爆破しようとすると、中の爆薬がどーんって仕組みだ」
「一カ所だけが爆発するなら」
ルシフェルや南雲が首を傾げるが、
「一カ所を下手に爆破すると、他に仕掛けられた爆薬が一斉に起爆する恐れがあると？」
栗須は冷静な態度を崩さない。
「そうですよ。中佐。もし、これをなんとかしようと思えば、ドリルで穴をあけて線を切断すればいいんでしょうけど、中に振動検知のセンサーが組み込まれていたらそれだけでアウトです」
「お手上げってこと？」
「設備が十分なら分析と対処もなんとかするが、まぁ、今は下手な

マネが出来ないって事だ――――でも考え方によってはよかったんだぜ？」
「へ？」
「下手に火器ぶっ放して、壁にある爆薬に命中させて見ろ。全滅するところだったんだ」
「あっ」
「な？だから」
「あの……」
この中で最も階級が低い南雲が遠慮がちに言った。
「魔法騎士隊に魔法障壁を展開してもらって、わざと爆薬を起爆させるっていうのは？」
「無茶だ」
工兵隊長は言下に否定した。
「爆薬が少しでも強力なら、柱の構造材全部吹き飛ばしちまう。ここ全部が崩落するぜ。被害は最悪、迷宮だけに限らん」
「えっ？」
「――――よく考えろ。大尉」
工兵隊長は諭すように腰に手をやった。
「上は病院だ。この迷宮を吹き飛ばすようなマネしたら、病院はどうなる？」
「あっ！」
南雲は目を見開いた。
「わかったか？」
工兵隊長は南雲に告げた。
「俺達は、病院っていう人質をとられた上で戦っているんだ」
「関係者の避難は？」
「出来ない」
樟葉はそれを否定した。
「病院の真下にこんな施設があるなんて告げられるか。被害は病院だけでは済まん」

今回の件を第三種事件として公表。病院から関係者を避難させれば、事態が公になる。
どんな二次的、三次的損害が出るか考えたくすらない。
「敵はそこまでお見通しだろう。見通した上でここに入り口を設定したんだ」
その通りだろう。と思う南雲は無言で頷いた。
「病院には、地下室と物資搬入口、それと職員用駐車場を提供してもらっただけで済まさねばならない。それが病院との取り決めでもある。いいか？南雲大尉。これは戦争であって戦争ではないのだ」
「……うーむ」
「コイツを仕掛けた奴ぁ、相当に性根がヒネくれた奴って言った意味、わかってくれたかい？」
工兵隊長の言葉に、全員が頷いた。
「こりゃどうも――で？どうします？」
「どうする？馬鹿息子」
「何で私が」
悠菜は不満げに樟葉に抗議した。
「私はマトモなんですよ？」
「お前がマトモなら、これをしかけた奴はもっとマトモだ」
「ぷうっ！」
「膨らんでないで、策を考えろ――これは頭脳合戦だ」
「樟葉さんなら勝負にならないタイプの戦いのこと？」
「殴るぞ！」
「殴られたくないなら考えろ？」
「違う」
樟葉は周囲に控える部下達を見やった。
「こいつらを無駄死にさせたくなければ――考えてくれ。そう言っているんだ」
「……」
ぐっ。

悠菜は顔を引き締めて、無言で頷いた。
「方法はあるんです。凄く簡単な」
「何っ！？」

「あーあ。しくじっちゃった」
美奈子は目をつむって椅子の上で反り返った。
「しくじった？」
「うん……ごめん」
「意味がわかりませんよ？美奈子さん」
「四層まで仕掛けた落盤の罠（トラップ）、よくよく考えてみたらあっさりクリア出来るんだよね」
「？」
「たった一個――要石（かなめのいし）を爆破することで全体に落盤をもたらす――これって、敵にとっても利点なのよ」
「利点？」
「そう。つまり、逆に要石さえ押さえちゃえば、罠は恐れる必要はないってこと」
「そう簡単に見つかりますかね」
「見つかるわよ」
「何故です？」
「どうやって石を爆破しているの？」

「魔力反応の強い石？」
「そう――それが要石だもん。要石が外れることで連鎖的に石積みが崩れる。それが罠なんでしょう？なら、要石さえ押さえちゃえばいい。とはいえ、僕達を殺すつもりで、本気で崩すつもりはないんですけどね」
「何故？」樟葉にはそれがわからない。

「第四層まで主力部隊を移動させた後、そこで一気に崩した方が効果的でしょう？」
「成る程？」
考えてもいかなった。と、樟葉は腕組みをして唸った。
「とりあえず」
シュッ
悠菜は天井のあらぬ方向にナイフを投げつけた。
「全員、“隠密（コンシール）”の魔法で姿を消して捜索。魔法反応が異様に高い石は片っ端から“解呪（リムーブ）”――護符はあるの？」
「魔法騎士、仕事だ。護符を配れ」

「とりあえず警戒して」
真っ黒になったモニターを前に、美奈子が緊張した声で言った。
「敵が本気になったわよ？」
「センサーは赤外線のみですが」
「頼りないわね――まぁ、いいわ」
美奈子はくすり。と笑った。
「ゴーストを第二層へ移す準備は進んでるんでしょう？」
「ええ――待機中です」
「それと」
美奈子は思い出したように言った。
「“あれ”、早いけど使いましょう」
「“あれ”？ああ」
グリムは第三層にしかけたある装置を思い出した。
美奈子がどうしてもというので、やむを得ず、天原骨董品店経由で仕入れた装置。
作り出されたのは人間界。
規模が大きいのでやむを得ず、第三層には特別室がつくられ、その中に設えられているある装置。
「あんなのが本当に効くのですか？」

「グリムさんって」
美奈子が呆れたように言った。
「本当に科学には弱いんですね」
「私はその分野には興味がないのです」
グリムは憮然とした様子になった。
「空気を汚染させず、毒ガスが作れるなんて、この方法しか知らないんですもの」
美奈子は平然としたものだ。
「時間はかかるかもしれないけど……第一層から第四層、空調を一時閉鎖。すべて第三層特別室へ切り替えて」

魔法騎士達は、全身を隠す“隠密”の魔法で身を隠しながら、天井付近をゆっくりと飛行移動して要石を探し始めた。
その彼らの無線に通信が入る。
「HQより各騎士――総員、任務を継続しつつ対霊戦闘警戒にシフト。壁や床は視界を遮る障害物と認識せよ」
そう、無線に指示を出したのは悠菜だ。
「対霊戦闘？」
魔法騎士ではない南雲にはその意味がわからない。
「なんだそれは？」
「あのね？……わかんないかなぁ」
悠菜はじれたような顔になった。
「南雲大尉」
イーリスが助け船を出すように言った。
「その下で霊が動いているのは確かだ」
「霊？」
“死霊”だ」
イーリスは自分の腕をそっと撫で、顔をしかめた。
「――くそっ。鳥肌が立っている」

「わかるものなのですか？」
敵の殺気なら壁越しでもわかる南雲だが、霊の存在なんて専門外だ。
「わかる」
イーリスは断言した。
「対霊戦闘可能な高位魔法騎士なら――丁度、大尉が建物を見るだけで、そこに潜む敵の数や強さがわかるようにな」
「心配ありませんよ」
ルシフェルも何でもない。という顔で言った。
「そのための兵器がいるじゃないですか」
全員の視線が、ルシフェルの横にいる男に注がれた。
「……それって、俺のことか？」
博雅だ。

石造りの通路に博雅の笛の音が響く。
魂の汚れが雪がれるような音色は、この世に縛られた無数の魂をそっと包み込む。
無数の魂が救いの音色と共に昇天して行く――

それでは困る者が、確かに存在していた。

「マイクを切れっ！」
そう叫ぶのはグリムだ。
「早くしろ早くっ！」
美奈子達のいる部屋に突然流れ込んできた楽の音色。
美奈子自身は、「へぇ？」程度だが、周囲はそんなものでは済まなかった。
「う……ううううっ！」
「か……かあぁぁぁぁぁっ！」

オペレーター達が一様に苦しみのたうち回りだしたのだ。
「――――えっ？」
それまで、一応は整然と動いていたオペレーター達の混乱ぶりに、美奈子はワケがわからない顔で辺りを見回した。
「切れと言った！」
埒が明かないと判断したグリムは、オペレーター達を突き飛ばし、コンソールを操作して室内に入り込む一切の音を遮断した。
「くそっ！こんな騒ぎになるとは！」
忌々しげにモニターに映し出される博雅を睨みつけるグリム。
そのグリムに何か言おうとした美奈子だったが――――
「ヴ、ヴゴォォォォォッ！」
あちこちで聞こえるそんな叫び声に言葉を失った。
「な……何？」
美奈子が音の発生源を突き止めるのは造作もないことだった。
それは、床でもがくオペレーター達から上がる声。
美奈子の視線は、その中の一体に注がれていた。

お気に入りのアニメキャラみたいな、色白の美貌の青年。

美奈子にとって、彼はそういう存在。

その彼が今は床にうつぶせになって苦しんでいる。

薬物？
ガス？
美奈子の頭の中では彼が苦しむ原因が次々と浮かんでは否定されていく。

「ヴ……ヴヴッ……」

美奈子が“原因”を理解できたのは、彼が顔を上げた次の瞬間だ。

「――ひっ！」

ガタッ！

美奈子は椅子から転げ落ちた。

ガチガチガチガチ

歯の根が合わない。

漏らさないのが精一杯だ。

「な……な……」

それまでの色白の美男子がそこにはいなかった。

瞬時にボロボロになった髪の下の肌はただれ、白い眼窩がのぞいている。

まともな人間の姿じゃない。

最悪なことに、“それ”は美奈子の目の前で動いているのだ。

「美奈子さん？」

ぽんっ。

もがく“それ”の動きにあわせるように何とか後ろに下がろうと後ずさる美奈子の肩が、何かに触れた。

「何をしているんですか？」

その声に、後ろを振り向いた美奈子の目に入ったのは、スーツのズボンと革靴。

見上げると、冷たい視線のグリムがいた。

「どうしたのです？」

「だ……だって」

「彼らが何者か？わかっているでしょう？――――死霊です」

「わ……たしは」

こんなの冗談だ。

私は水瀬君が欲しいだけ。

こんな死霊の仲間なんていらない！

美奈子の心はそう叫ぶ。

「最初からあなたは部下を選ぶ権利なんてありません」

グリムはポケットに手を入れた。

「憎しみが足りないようですね」

「い……いや……」

こんなのイヤだ！

水瀬君にこんなのが知られたら絶対、絶対に嫌われる！

そう叫ぶ美奈子の戦意はすでに消滅していた。

「何」

グリムは楽しげに微笑んで、ポケットからアンプルを取り出した。

「“憎しみの種”の成分を濃縮したものです――――効きますよ？それとも、脳をいじられる方がお望みですか？」

「……き」

恐怖に言葉が出てこない。

「協力した？ええ。ですから、今まで同様の協力を望んでいるんです」

美奈子に馬乗りになったグリムが強引に美奈子の口を掴んだ。

「オペレーター達はすぐに元通りになります――何。これを飲めば、あなたもすぐに元通りに」

「――っ！」

顎が割れたんじゃないかと思うほどの力が加わり、美奈子の口の中に、鉄の――血の味が広がった。

「飲めばいいんです。注射すると後遺症が残るんで」

グリムはアンプルを割った。

「あなたは廃人にするのは惜しい」

何とかグリムから逃れようともがく美奈子だが、彼我の力の差は歴然としている。

「今まで謙(へりくだ)ってやった分も含めて、今後はもっと残虐に働いてもらいましょう――あいつらを皆殺しにする方向で」

アンプルが美奈子の口の中に押し込まれた。

「――――！！」

悲鳴すら上げられない中、美奈子は心の中で叫んだ。

水瀬君！

助けて！

それが無駄だと、一番わかっているのは美奈子自身。

成り行きとはいえ、水瀬の敵となった美奈子自身。

水瀬に刃を向けた美奈子自身。

私は……

私……

ゴメンナサイ。

遠くで誰かがそう言った気がした。

グリムが何を飲ませたかは朧気ながらわかる。
次に、自分が目を覚ました時、別の自分がとって変わる。
そんな自分が何をしでかすか、全くわからない中――

美奈子の意識は、そこで途絶えた。

第五十三話

迷宮のあちこちで魔法騎士と死霊が空中で刃を交えていた。
ギインッ！
死霊の形成する“死の刃”と魔法騎士の魔法刀。
双方の発する魔力が金属のような音を立てる。
与えられた生者への憎悪だけで襲い来る死霊が、歴戦の魔法騎士にかなうはずもない。
死霊が再びまみえた魔法騎士は、“死の刃”の一閃をくぐり抜け、死霊の胴に魔法刀の一撃を浴びせた。

ギェァァァァッ！

死霊が無念の叫びを残して消滅する。

「こちらアエカ０１、死霊１を撃破」
魔法騎士は戦闘態勢を崩すことなく、次のエモノを探して神経を張りつめる。
同僚の魔法騎士が彼女の目の前で手招きをした。
その理由はすぐにわかった。
第二層の端。
第一層からの入り口から最も遠い、通路が入り組んだ場所。
その石壁の下から二段目。
そこに埋め込まれた、一見なんでもない石。
それが魔法騎士の眼から見ると、ほのかに輝いて見える。
石が魔力を放っている証拠だ。
（死霊を追いかけて奥に来すぎたのは減点だけど――結果オーライか）
彼女は口元を緩めながら、同僚の作業を支援すべく周囲に警戒の

目を向けた。
「アエカ０２より司令部、第二層の要石を発見――これより呪符貼り付けを行う」
魔法騎士は腰のポーチから一枚の呪符を取り出した。

第四層までの死霊掃討は、樟葉の目から見ればかなりの苦戦を強いられていた。
理由はただ一つ。
敵が本気で攻めてこないから。
敵は散発的に出現し、それを叩く。この繰り返しは少なからず魔法騎士の戦闘継続に影を落としていた。
「で？外部との連絡はついたのか？」
「壁の除去の報告に来ただけです。これからトンネルを掘ります」
工兵隊長はそっと逃げ出そうとする悠菜の襟首を掴んだ。
「図面からして１０メートルもトンネル掘ればなんとかなります」
「急げ」
「はっ」
「わ、私も！？」
悠菜は心底イヤだという顔でわめいた。
「ヤダぁ！疲れるし魔法使えないし！」
「ぐちゃぐちゃ言わない」
工兵隊長はどこからかツルハシを取り出し、悠菜に押しつけた。
「土方は漢（オトコ）の職場ですぜ？」

南雲と悠菜によって、トンネルが完成したのはそれから１０分後のことだった。

「これで何とかなる」
補給物資と入れ替わりに負傷兵達が運ばれていく様子を樟葉は満

足気に見つめた。
「こら。起きろ」
トンネルの入り口でへたばっていた悠菜に蹴りをいれる。
「だ……だってぇ」
悠菜は恨めしげに樟葉を睨む。
「ルシフェル達はすでに第四層で戦闘中だぞ？」
「――――へ？」

第四層はそれまでの層とは勝手が違った。
天井がそれまでの倍近く高く、通路も広い。
何より――――

「くそっ！」
場所は通路が交差する十字路。
イーリスが通路の影に隠れたのを追いかけるように、通路の壁に銃弾の雨が注がれる。
「これはやられたな」
イーリスは口元を歪めた。

第四層の決定的な違い。

それは、妖魔の数ではない。

妖魔自身が火器で武装している点だ。

「スケルトン２０、屍鬼３０」
ルシフェルがイーリスの横からナイフにくくりつけた鏡で向こう側を確認する。
「土嚢を積んでその上にＭ６０機関銃５」

「どこから持ってきた!?」
「一年戦争の時か?」
ルシフェルは、鏡に映る屍鬼の褐色の肌を見て、その考えを否定した。
「どこか東南アジアの紛争地域」
「カシミールかな?」
イーリスは素早く東南アジアの状況を思い浮かべた。
ベトナム王国。
カンボジア王国。
……
大航海時代以降の欧州からの侵略を連携して阻止し、王政と独立を維持し続けてきた国家の名が地図と共に浮かんでくる。
銃や大砲を持つ欧州の軍がアジアへの侵略に失敗した理由ははっきりしている。
魔法と騎士だ。
欧州の侵略軍を翻弄したのは、彼らが見たこともないような不可思議なアジア系魔法と死を恐れぬ騎士達。
インド、ムガール帝国を攻めた軽歩兵主体の英国軍5万が騎士主力のムガール帝国軍わずか2千によって皆殺しにされたようなケースは枚挙にいとまがない程で、大航海時代以降、武力でアジアを攻めた欧州勢の支払った損害は、その当時、欧州で発生していたあらゆる戦争の犠牲者よりも多いとさえ言われる。
欧州は戦費と犠牲の増大に武力進出を放棄し、交易主眼へと発想を転換せざるを得なかったのだ。
無論、数多くの民族、人種を抱える東南アジアは欧州の植民地化を経験しなくても、あちこちに火種を抱えていた。
特に問題なのが、ムガール帝国とパキスタン王国の双方が宗主権を主張するジャンムー・カシミール藩王国の帰属問題。
藩王暗殺をきっかけにムガール・パキスタン双方が介入、すでに10年近い内戦が続いている地域。

一年戦争勃発まで、「世界で最も死体の多い地域」と揶揄された激戦地でもある。
「グリムはあそこから死体と一緒に武器まで確保していたか」
ジュバッ！
ドンッ！
イーリスの真横を抜け、通路の遙か後ろで爆発したのは
「対戦車ロケット！？」
「発射音からしてＭ７２　ＬＡＷです。かなりの重武装ですね」
「武装ならこっちも負けてはいない！」
イーリスは後ろに待機していた兵士達に怒鳴った。
「私がオトリになる！敵は殺してやれば供養になるような連中だ！遠慮はするな！」
「了解！」
兵士達が銃を手に怒鳴り返すのを聞いたイーリスがナイフのグリップを確かめると、
「いくぞっ！」
銃弾の雨の中を飛び出していった。

ガガガガカッ！
魔法障壁を展開するイーリスに銃弾の集中豪雨が注がれた。
「――――っ！」
魔法障壁が通常弾程度で破られるはずはない。
頭で理解しつつも、銃弾が目の前ではじけ飛ぶ光景は、マトモな神経に耐えられる代物ではない。
「神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔」
イーリスは詩編の一節を口の中で呟いた。
「わたしは決して――――」

「少佐っ！」
背後からの声に、イーリスは飛んだ。

「撃てぇっ！」
ズガガガガガッ！！
イーリスのいた場所を背後からの銃撃が通過する。
狙いは無論、屍鬼達だ。
銃を構えたままの屍鬼達が対妖魔特殊加工弾に体を粉砕される。

「動揺しないっ！」
一跳躍で横に移動したイーリスは、敵めがけて銃撃を続ける兵士達の真横に現れた新手の屍鬼達のただ中へと身を躍らせた。
「人を倒れる壁、崩れる石垣とし」
ザンッ！
イーリスのナイフの一閃が銃火器ごと屍鬼を薙ぎ払う。
一回転する形で動きを止めたイーリスの周囲を、屍鬼の残骸が舞う。
「……私の救いと栄えは神に向かっている」
ザンッ！
小銃を向けた屍鬼の頭を二つに割り、返す刀で別な一体に唐竹を浴びせる。
「力と頼み、避けどころとする岩は」
キィィンッ！
――ズンッ！
魔力をナイフに乗せたイーリスの剣技“刃の嵐”が残った屍鬼を細切れに変える。
「神のもとにある」
すべてを肉塊に変えたイーリスは、ロザリオを握りしめ、小さく神への祈りを捧げた。

「敵、沈黙！」
「進めっ！」

兵士達も敵の撃破に成功したらしい。
駆け寄ってくるルシフェルに、イーリスは小さく微笑んだ。

「急げっ！」
樟葉と南雲に叱咤されながら、悠菜は彼女達の後ろを走っていた。
「何で私達がいない間に攻撃させたの？」
悠菜は走りながら文句を言った。
「貴様等だけで戦争をやるつもりだったのか！？」
そう聞かれれば返す言葉もないのが普通だが、
「突撃する所、見逃しちゃったじゃない！」
悠菜は決して普通ではなかった。
「やかましいっ！」

第四層の入り口に入った途端、あちこちからひっきりなしの銃声と爆発音が響いてくる。
「おーおやってるやってる」
南雲がニヤリと残虐な笑みを浮かべた。
「殺る気満々だな。大尉」
樟葉もつられたように口元を緩めた。
「無論です」
トンファーの調子を確かめた南雲が言う。
「自分は？」
「貴様ならどこでもやれるだろう。誤認されないように。それだけだ。好きにやれ」
「了解！」
南雲が駆け出すのを後目に、樟葉は後ろにいた悠菜に言った。
「さぁ。馬鹿息子。久々にその腕確かめさせてもらうぞ？」
「ううっ……私、人に見られているとやりづらいんですけど」
「アホ」
２尺５寸の太刀「幽」を抜きはなった樟葉はそう吐き捨てると、

「私は司令部と合流する。貴様は瀬戸綾乃と合流しろ」
「綾乃ちゃんと？」
「ああ。現在、イーリスとルシフェルが前衛として近衛兵と行動中、栗須、博雅、羽山の三人が後衛についている。残る彼女は遊撃隊だ」
「なんで彼女を？」
「彼女自身が志願したんだ。――単独の方がやりやすいとな」
「……納得」

「来ますっ！」
「ちぃっ！」
栗須に率いられる形で、羽山と博雅はすでに数度にわたって敵の洗礼を受けていた。
すべて栗須が撃破しているものの、戦場の恐怖は羽山達を捕らえて放しはしない。
「博雅、笛は？」
羽山が刀を正眼に構えながら横にいる博雅に訊ねる。
「……すまん」
そっと出されたのは、真ん中から切断された笛。
「最初の接敵の時、吹こうとして銃弾に割られた」
「……くそっ」
唾を吐き捨てた羽山は、暗闇の中から生まれてくる集団を睨み付けた。
赤い瞳。
鈍い動き。
一様に軍服を着てだらしなく動くのは屍鬼だ。
褐色の肌が青白く変色して得も言われぬ不気味な色になっている。
「銃火器がまたあるかな？」
「栗須さんのモップで防ぐにも限界があるぞ？」
「――俺が前衛で出る」
「馬鹿っ！」

怒鳴ったのは栗須だ。
「死に急いではいけませんっ！」
「俺だって騎士だ！」
羽山が苛立ったように怒鳴った。
「戦場で女の尻だけ見てるなんてマネ、出来るかよ！」
「どこ見てるんですか！」
「そういうもんだいじゃないでしょう！」
博雅が飛び出そうとする羽山の肩を掴んで怒鳴った。
「羽山、年上にタメ口聞くな！栗須さん！指示を下さい！」
場所は袋小路。
背後からの奇襲が考えられないことから臨時の物資保管所に指定された。
その守りを、見習いのおもりと一緒に託されたのは栗須だ。
「私が銃火器を持つ――――」
カランッ
栗須が一瞬、後ろに視線を向けた次の瞬間。
「！！」
栗須が足下に転がった“それ”を蹴り飛ばしたのは少しばかり遅かった。
相手が生きた兵隊ならそうはならなかったろう。
屍鬼が使ったからこそ、その動作の鈍さが絶妙のタイミングを産んだ。
そうとしか言い様がない。

ドンッ！！

鼓膜が破れたかと思う爆発音と、空気にはり倒されたような衝撃が、羽山達を襲う。
「なっ！？」
思わず目をつむった羽山が、次に瞼を開いて目にしたのは、

「栗須さんっ！」
焼けこげた石畳に倒れる栗須の姿だった。
騎士養成コースの生徒として応急手当の講習を真面目に受けていた博雅が慌てて栗須に近づき、脈を取る。
「生きてる！」
ぐったりとしているが、栗須はまだ息がある。
それを知った羽山は、
「そっちの肩持て！コンテナの後ろへ運ぶ！」
「応急手当は？」
「やってる余裕があるか！？」
敵はすでに間近に迫っている。
「このままじゃ、三人ともああなるぞ！」
「――栗須さんの運を信じよう」
「ああ。この手の女は悪運が強い」
「涼子さんのことじゃないだろう？まさかそれ」
「ちがう」
羽山は博雅と共にコンテナの隙間に栗須を移動しつつ、複雑そうな顔で言った。
「鈴紀のことだ」
「――納得の答えだ」
床に転がっていたモップをコンテナに放り投げ栗須が立っていたよりかなり前に立ちふさがり、
そして剣を屍鬼達へと向けた。
「お……おい、秋篠……」
「な、なんだ？」
「声、裏返っているぜ？」
「お……お前だって」
「ビビったら死ぬんだよな？こういうの」
「なんだか……映画で聞いたな。それ」
「金曜ロードショーで見たんだ。先週の」

「あれ、ルシフェルとデートで見た」
ガタガタガタ……。
二人の剣は切っ先が震えて、とても一本の剣とは思えない有様だ。
「こ……怖いけどよぉ」
羽山が震える声で精一杯の明るさを示そうと試みているのがありありとわかる。
「でも、ここでやらなきゃ、俺、二度と涼子さんとセックスできないんだよな？」
「俺もルシフェルと」
「欲望だけで戦うなんて、なんだか格好ワルイけどよぉ……」
ゴクンッ。
二人が二人、恋人のあられもない姿を思い出し、生唾を飲み込んだ。
「でも、それでも生き残る理由になるよな？な！？」
「なる……なるさ」
博雅は言った。
「俺は生き残ったら、ルシフェルに後ろで」
「あれ、気持ちいいぞぉ？」
「そ……そうか？」
「生き延びたらケツがご褒美！死ねば――――どうなるんだ？」
「あいつらのケツから出てくる身分に成り下がる」
「いやだな」
「ご褒美もか？」
「まぜっかえすな」
あと一歩で敵はリーチに入る。
二人は目配せした。
「とにかく、栗須さんとコンテナに近づけない！」
「そういうことだ！」
力強く互いに頷きあった二人は、
「行くぞっ！」

「応っ！」
二人は剣を構えて屍鬼の中へと飛び込んでいった。

「ううっ……どうしよう」
悠菜は半泣きになってあちこちをうろうろしていた。
「わ、私、方向音痴なのにぃ」
すでにワンダリングモンスター数体を倒してはいるものの、肝心の綾乃（ティアナ）の姿がない。
このままでは自分自身がワンダリングモンスターとなってしまう危機感をひしひしと感じつつ、悠菜は心細げに言った。
「どこですかぁ？」
答える者なぞいるはずがない。
「家出のお姫様ぁ」
返事はない。
「ヒネクレ王女ぉ」
さらに返事がない。
「え……えっと」
悪口を言おうと思ったが、適切な言葉が思いつかない。

ドガン！
ズンッ！
バァァァンッ！

いくつ目かの十字路にさしかかった時だ。
ようやく物音に出くわした悠菜は、嬉しそうに駆け出した。
それが戦闘音であっても、戦っている片方は味方。
そう思うから、悠菜は駆け出した。

十字路を曲がって、T字路に出て――

悠菜はついに仲間と出くわした。

長い旅の末、母と再会したマルコさながらのうれしさで悠菜の視界がかすむ。

そこにいたのは、妖魔ではない。

甲冑や胴着を身につけた人間達――違う。

魔族だ。

「ぐすっ……へっ？」

唖然とする悠菜の前では、綾乃（ティアナ）が、全身甲冑に身を包んで身の丈ほどもある大剣を構える騎士と対峙していた。

「ぐぅぉぉぉぉっ！」

品のない雄叫びをあげた騎士が凄まじい勢いで綾乃（ティアナ）に突撃する。

「えいっ！」

体を翻し、その一撃を避けた綾乃（ティアナ）が、騎士の延髄に突き技を喰らわした。

「むぅぅぅん」

騎士は数歩、歩いたと思った次の瞬間、電池の切れた玩具の用にバッタリと床に倒れて動かなくなった。

「あら？」

動かなくなった魔族が床を半ば埋め尽くす中、綾乃（ティアナ）は涼しい顔で悠菜に振り返った。

「合流ですか？それとも、戦闘終了？」

「合流です。っていうか」

「？……ああ」

綾乃（ティアナ）はニコリと微笑んで言った。

「私への挑戦者の方々です」

「挑戦者？」

「はい」
綾乃（ティアナ）は少しだけ、意地の悪い顔になった。
「……私、この中の一人に倒されたら、その方を夫としなければなりません」
「えっ！？」
驚いて目を見開く悠菜に、綾乃（ティアナ）は訊ねた。
「どうなさいます？」
「み、身の程……」
言い間違えたと思った悠菜が首を振った。
「違う……えっと、命知らず」
「むっ」
とたんに機嫌の悪い顔になった綾乃（ティアナ）が悠菜を睨んだ。
「それも違う……そうだ！」
悠菜は魔族に怒鳴った。
「皆さん！人生は一度きりです！相手は慎重に選んで下さい！」
「どういう意味ですか！」
「そのまんま！」
綾乃（ティアナ）は言いかけた言葉を口の中で止めた。
あることを思いついたのだ。
「――皆様」
綾乃（ティアナ）は魔族に振り返った。
「これ以上、私と戦いたければ、彼女と戦ってからにして下さい」
「――へっ？」
悠菜は唖然として綾乃（ティアナ）の背を見た。
「ど、どういう？」
「この“天界の人形”を倒した方なら、私、本気でおつきあいを考えさせていただきます」

ざわっ！
魔族側に動揺が走った。

“天界の人形”

その名が幾度も魔族の口から聞こえてくる。

「どうなさったのです！？」

しびれを切らしたように、綾乃（ティアナ）が怒鳴った。

「それでも殿方ですか！？」

（うわーっ）

悠菜は魔族に罵声を浴びせる綾乃（ティアナ）を引きながら見ていた。

これを男性が意中の女性に浴びせられたら死にたくなる言葉がバンバンと綾乃（ティアナ）の口から飛び出してくる。

何もそこまで言わなくても。

悠菜が綾乃（ティアナ）を止めたくなるのも無理はない。

（こういう人の神経というか、場の空気を読まないところが、お姫様なんだよなぁ）

悠菜が小さくため息をついた次の瞬間。

「うぉぉぉぉぉっ！」

雄叫びと共に飛び込んできた胴着の男の一撃を悠菜はかろうじてかわし、その腹に霊刃の一撃を喰らわした。

背後で魔族が倒れる音を聞きながら、悠菜はまるでフォローするように言った。

「あ、あの……寸止めしますから」

「今の確実に入ったろう！」

魔族達は、悠菜の背後で倒れる武道家がピクリとも動かないのを指さして怒鳴った。

「違います！」

悠菜は慌てて反論する。

「この場合の寸止めとは――――えっと、魔族にこれ以上の恨み買い

たくないっていう私の本音があって、例えば、ゲームで言えばダメージを受けて、普通なら「死亡」でも、私の中ではあえて死なさずに「気絶」や「戦闘不能」で済ます、私にとってとっても便利なルールのことです。――これなら、思う存分、どつき合いができるでしょう？」

あまりに自己中心的なセリフに魔族も一瞬たじろいだが、

「殺ってやるぁ！」

一人の魔族が悠菜めがけて駆け出したのがきっかけで、ほぼ全員が一丸となって悠菜に襲いかかってきた。

「貴様を血祭りに上げて、姫とベッドで戦闘だ！」

「男女間っていうか、男男間とか、女女間での「えっちっち」な行為を戦闘に例えていいんですか！？それでもあなた達！」

「俺達の下半身が求めているのはそういう戦闘だ！」

「２８０日後（注：つまり十月十日後）に自殺することになりますよ！？人生に絶望して！」

「一時の快楽と帝室のカネが入ればそれでいいんだよ！」

言い合いになりながらも、悠菜は一方的ともいうべき戦闘を展開。気がつけば全員をノシていた。

「あ……あのぉ」

生きているのか死んでいるのかすらわからない魔族達が倒れる中、悠菜は半ば呆然と綾乃（ティアナ）を見た。

「ご苦労様でした♪」

綾乃（ティアナ）はちょっと嬉しそうな顔で微笑んでくれたが、

「これであなたは私を狙う魔族を完っ壁に敵に回したことになりますね♪」

悠菜が魔族とともにその場にひっくり返ったのは、その次の瞬間のことだった。

「もうっ。どういう意味ですか？」

綾乃（ティアナ）が不満げに悠菜の元に近づこうとした次の瞬間。

「姫様ぁっ！」

カノッサが血相を変えてその場に飛び込んできた。
「た、たたたたたたた」
「カナキーを連打しない」
「何言ってるの！？せ、セージュが！」
「セージュが見つかったのですか？」
「人間と戦ってる！」
「なっ！？」

第五十四話

ギインッ！
「ちいっ！」
樟葉は舌打ちを残して大きく後ろへと下がった。

（何てヤツだ！）
樟葉は刀を構え直し、相手を睨み付けた。

敵は一体。
たった一体なのに――――！
何とか袋小路に追いつめるだけでこんなに手間取った。
全く予想外の事態だ。
戦闘開始から既に何分が経過しているのかわからない。
ローブ姿に両手持ちの草刈り鎌――――サイズを持って迷宮を歩いていたから、敵と思って攻撃しただけなのに。
それが、これほど手強いとは思わなかった。

手強い？

――――違う。

樟葉の騎士としての何かが異論を唱える。

こいつは強いんじゃない。

かわすのが上手いんだ。

私の必殺の一撃を流れるような最低限の動作でかわしているだけ。

攻撃そのものはやや大降りで、お世辞にも上手いとは言えない。

「――――っ」

ローブに隠された口から、何か言葉が発せられた。

怯えたような声。

何かを哀願するような声。

それは――――

「お、女？」

小柄とは言え、こんな所に女がいるはすがない。

だが、声色からして、声の主はまだ年端もいかない少女だ。

「貴様――――」

それが樟葉の油断といえば油断だった。

思わず刀を下げた次の瞬間。

ブンッ！

敵は数メートルの間合いを一瞬で詰めた。

「――――っ！」

大きく振りかぶったサイズの一撃が樟葉を襲う。

しゃがむことでその一撃をかわした樟葉の頭上を、敵は飛び越えた。

「何っ！？」

ダッ！

袋小路から脱した敵は、脱兎の如く逃げ去ろうとする。

「待てっ！」

樟葉はレッグホルスターから拳銃を抜いた。

ダンッ！
――銃声は1発。
敵はその場に倒れた。
「ふう――」
未だ銃口から硝煙を立ち上らせる拳銃をホルスターに戻しながら、樟葉はぼやいた。
「騎士として、剣より拳銃の方が得意というのも、何だか情けない気はするが……」
倒れる敵に警戒を怠らずに接近。近くに転がっていたサイズを蹴り飛ばすと、ローブに包まれた両腕をねじ上げた。
下手に触れたら折れそうなほど細く白い腕がローブの下から現れた。
「こんな細い腕で、あんなエモノを振り回しただと？」
特殊カーボン製のロープで両手両足を縛り上げた樟葉は、敵の顔を隠すフードを跳ね上げた。
「……」
目を見張った。
レタス・グリーンの艶やかな髪。
まだあどけなさを残す顔立ち。
愛らしい。
全てがその一言に集約された少女の顔が、そこにあった。
「これは……とんだ戦利品だな」

回りにオトコ共がいなくてよかった。
樟葉は心底そう思った。
こんな子が捕虜になったら妊娠させられる程度では済まない。
兵士達によって、この子一本であらゆるＡＶ作品が作り上げられるほど輪姦（まわ）されるのは目に見えている。
女として、近衛の司令官として、そんなマネは断じて許すわけにはいかない。
「運がいいのか悪いのか……」
樟葉は少女の額に魔力封じの呪符を貼り付けると、肩で少女を抱え、床に転がっていたサイズを手にした。
思ったより軽い。
樟葉の剣の半分くらいの重さしかない。
軽量化の魔法でもかかっているのか？
樟葉がそう思った次の瞬間。

「セージュ！」
通路の向こうから血相を変えて走ってくるのは、綾乃（ティアナ）だった。
背後で水瀬が走ってくる。
「おう」
樟葉は立ち止まって二人を出迎えようとしたが――

ブンッ！

その問答無用の一撃をかわさざるを得なかった。

「何をするかっ！」

「よ……よくも！」
剣を構え、憎悪の目を向けてくるのは綾乃（ティアナ）だ。

「よくも私の妹分を！」
「待て！」
樟葉は綾乃（ティアナ）を制止した。
「気絶しているだけだ！殺してはいない！」
「おためごかしを！」
綾乃（ティアナ）が樟葉に襲いかかろうとした次の瞬間。

がんっ！

どこから出現したのか、綾乃（ティアナ）の脳天を金ダライの一撃が襲い、綾乃（ティアナ）は気絶した。

魔法攻撃を覚悟していた樟葉が思わず安堵のため息をついた。
「馬鹿息子――お前の仕業か？」
ガランッ！
綾乃（ティアナ）の頭から落下して、石畳の上を転がる金ダライを一瞥した樟葉は、綾乃（ティアナ）から剣を奪う悠菜に訊ねた。
「おばあちゃんの独自魔法（オリジナル・マジック）だけど、効きましたね」
「感謝する」

綾乃（ティアナ）が目を覚ましたのは、それからすぐのことだ。
目を覚ました綾乃（ティアナ）は、自分の額に濡れたタオルをあてているのが、自分の妹分。セージュであることを知って安堵はした。
だが、武器を取り上げられ、樟葉に睨まれている状況は良いとは言えない。
「どういうつもりだ？」
二人を見下ろすように、樟葉は厳しい顔で睨む。
「仲間に剣を向けるとは」
「だから」
悠菜がフォローしようとするが、

「私は貴様に聞いているのだ！瀬戸綾乃！」
その一喝に怯えたように、セージュと呼ばれた少女が綾乃（ティアナ）に抱きついた。
「――この娘は私の妹分、セージュです」
少女を安心させようと、何度もその髪を撫でながら、綾乃（ティアナ）は凛とした顔つきで樟葉をにらみ返した。
「故あって義父の敵を討つべく、この地に赴いたのです」
「親の敵？」
樟葉は眉をひそめた。
「それを私が倒した、それが私に――仲間に剣を向けた理由か？」
「頭に血が上ったのです……結果としての誤認は認めましょう」
綾乃（ティアナ）は申し訳ない。という顔で、
「しかし、あなたと私の立場が入れ替わっていたらどうでした？」
「……」
樟葉は不機嫌そうな顔のまま、そっぽを向いた。
「銃弾を耳元をかするように撃てば、銃弾の衝撃波で気絶させることが出来る――基本中の基本だ」
樟葉さんは絶対に頭を狙ったに違いない。
そう思う悠菜をよそに、引き金を引いたら小さい金属の塊が打ち出される程度しか知識のない綾乃（ティアナ）は小さく頭を下げた。
「感謝します」
「――ふんっ」

（どうしよう）
悠菜は困惑した。
どうひいき目に見ても、綾乃（ティアナ）と樟葉は一触即発の関係にしか見えない。
「で、でも」
悠菜は恐る恐る言った。
「綾乃ちゃんはまだ味方だよね？ね？」

「セージュの身を保証してくれれば」
そのそっけなさに悠菜はすがるような目で樟葉を見た。
「……さっき言った、親の敵とは？」
「シェリス……グリムに雇われた一人です」
「魔族はグリムに力を貸している？」
「魔族全体がではありません。あくまで個人です」
「傭兵みたいなものか？」
「その通りです――フリーで、お金さえ積まれればなんでもするフリーランサー」
「そうか」
樟葉は悠菜の抱きかかえていた剣を奪い、綾乃（ティアナ）に手渡した。
「まだ完全に信じているわけではない。……貴様の正体が何者か知らんのだから」
「知ったら……私達は敵同士です」
綾乃（ティアナ）は剣を受け取った。
「ただ」
綾乃（ティアナ）の横で心配そうな視線を向けてくる少女を一瞥した後、
「剣を預けていただいたこと――それを信頼の証と信じます」
「……好きにしろ」
樟葉は踵を返した。
「他部隊も戦闘中だ！第四層制圧に全力を尽くせ！」
綾乃達が何語かわからない言葉で会話するのは、背中で聞き流した樟葉が、遠ざかっていく。

「よかったですね」
綾乃（ティアナ）は少女にほほえみかけた。
「あなたの仇討ちには私達も協力します」
綾乃（ティアナ）は少女を励ますつもりでそう言った。
仇討ちとなれば、悠菜も協力してくれると信じていた。
それなのに――

悠菜は怪訝そうな顔をして辺りを見回すだけだ。

「悠理さん？」

「悠菜」

「……悠菜さん？仇討ちについてですが」

「……」

悠菜から返事はない。

ただ、怪訝そうな顔を崩さず、周囲を警戒している。

「悠菜さんっ！」

綾乃（ティアナ）が立ち上がろうとするのさえ、悠菜は無視して、ポケットからＰＤＡを取り出した。

その形状と表示される言語から、綾乃（ティアナ）はそれが何か見当をつけた。

「天界軍配備の端末？」

綾乃（ティアナ）は悠菜が何かに感づいたことにようやく思考が至った。

仇討ち云々ではなく、悠菜は何かを知りたがっている。

「どうしたのですか？」

「さっきからずっと気になっていたんだけど……空気がヘンに臭いし、息苦しいっていうか――喉が痛い」

「？」

綾乃（ティアナ）は自分の喉を撫でた。

「別に？風邪ですか？」

「魔法防御解除してみて」

魔法戦には毒ガス系の魔法が使われることもあるため、魔族といえど、戦場においては普段から防御魔法を展開するのは常識だ。

綾乃（ティアナ）は言われるままにその備えを解いたが、

「ゲホッ！」

激しく咳き込むと、すぐに魔法防御を展開した。

「こ……これ！」

「……まずいですね」

悠菜はＰＤＡを手に唸った。
「すぐに樟葉さんに合流します」
悠菜は綾乃（ティアナ）の手をとった。
「な、なんですか！？これは！」
綾乃（ティアナ）は手を引かれながら怒鳴った。
魔法攻撃ではない。
やたらと喉が痛くなる程度。
それまでと言えばそれまでだが、それにしてもおかしい。
「現在、濃度は０．５ｐｐｍ――上昇中」
悠菜は短くそう告げた。
「？」
人間の化学なんてこれっぽっちもわからない綾乃（ティアナ）は首を傾げた。
「このまま上昇を続けたら、人間達が全滅するよ」
「毒ガスですか？」
「違うといえるし、そうとも言える」
「どっちなんですか？」
「空気を」
そう言いかけた悠菜は、通路ですれ違った兵士達に怒鳴った。
「総員、ガスマスク装着後、第一層に後退！全軍に伝えて！」
「毒ガスですか！？」
ガスマスク。
その名を聞いた兵士達は驚愕の表情を浮かべる。
使うのは基本的に一つの状況だからだ。
その中に、腕に赤十字の腕章をつけた者がいた。
彼はポーチから毒ガス検知キットを取り出そうとしていた。
悠菜はそれを止めた。
「あなた、衛生兵？」
「工藤上等衛生兵です」
まだ二十歳を少し過ぎた程度の彼は、自分より圧倒的に年下にして、彼よりずっと階級が上の悠菜に敬礼した。

「空気に異常が発生している――――喉や鼻に刺激を感じたり、視覚に異常が生じている者はすぐに上へ移動させて」
「何が起きているのですか？」
「大気中のオゾン濃度が上がっている。そろそろ１ｐｐｍ」
「……」
オゾンという名を聞いた工藤衛生兵は、目を見開いた。
「致死は５０ｐｐｍです」
「毎分０．５ｐｐｍ刻みで上がっている。このままだと迷宮にいると死ぬことになるよ？」
「り、了解！全員にガスマスクを装着、第一層へ後退させます！」
「総隊筆頭騎士命令として伝えてくださいね？責任は樟葉さんがとります」

「オゾン？」
すでに司令部と合流していた樟葉は、その一言に驚愕の表情を浮かべた。
「一年戦争の事、忘れたんですか？」
「忘れるものか」
樟葉が苦い表情を浮かべたのも無理はない。

オゾン――――

紫外線から地球を守る守護者のように思われているが、猛毒の物質であることは意外と知られていない。
フロンガスが発明されていないこの世界でオゾンという名が知れ渡ったのは、環境破壊によるものではなく、兵器として使用されたことによる。

一年戦争中、魔族はオゾンを使った。

――兵器として。

魔族は何をしたというのか？

超高濃度のオゾンを放出する魔界の植物の種を大量に攻略目的の都市や戦場、そして占領地にばらまいたのだ。

当初、人類は空から降る種を理解できなかった。

何かの贈り物とさえ考えた者もいた。

――その種が芽吹き、葉を茂らせるまで。

種は恐るべき存在だった。

わずかな水と空気を元に、

わずか２４時間で発芽し、

発芽から１２時間以内に、

土で、アスファルトで、鉄板で、あらゆる場所に根付いたのだ。

コンクリートジャングルに負けない草。

物珍しさから、種が芽吹いた土地の人々はそう評し、こぞってそれを見ようとした。

そして、医者や救急隊員達は、身体異常を訴える急患の爆発的増加に。

農家の者達は、種の芽吹きと引き替えに枯れていく農作物や木々に、

それぞれに首をかしげた。

全てがわかった時には手遅れだった。

一度根付いたら最後。

細い根の一本でも残っていたら、そこから再び根付く。

コンクリートだろうがアスファルトだろうが、何で被っても突き破って芽吹く強靱かつ、ナパーム弾の直撃すらわずか数日で再生する驚異的な生命力。

ねずみ算的に増える恐るべき繁殖力。

なにより、二十日大根サイズから一抱えもあるような巨大な幹を

持つ樹に成長するまでわずか2週間という成長スピード。
半世紀近くをかけ、都市を形成した人類は、あらたなる都市の支配者――樹に敗北した。
都市は緑に帰り、人々は都市から追い出された。
増加する樹々は、その数を持って都市機能を破壊しただけでなく、はき出する高濃度のオゾンで襲ってきたのだ。
高濃度の地域は今でも３００ｐｐｍ以上のオゾン濃度を誇るといえばどの程度のものかわかるだろう。
人間が1時間いたら死ぬとされる５０ｐｐｍをはるかに上回るオゾンを、樹は一日数回に渡って発生させる。
都市は短期間に人の住めない地へと変貌した。
人類が“死者の樹”と呼ぶ恐るべきオゾン生成装置たる木々の森に、囀る鳥はなく、その実をついばむ獣はいない。
オゾンが木々の光合成を阻害し、光合成に頼る全ての植物を枯らしてしまったのだ。
そして、“死の森”があちこちに生まれた。
新潟市のように妖魔の直接的攻撃を受けることなく、樹によって消滅した市町村、他の都市部は、その種の伝播により、いまや日本だけでなく、世界中に存在する。
伝播させたのは誰でもない、人間自身だ。
一年戦争中、あちこちに生えた樹によって、国連軍は作戦展開どころか、戦場に近づくことさえ出来なかったことが、犠牲を増やした理由の一つとされている。
つねに味方だったはずの緑が、人類を宇宙からの放射線より守ってくれているはずのオゾンが、人類に牙を剥いた。
ここに魔素被害の相乗効果があって、常識では考えられないような苦戦を強いられたことを、作戦指揮をとった樟葉は忘れていない。
「竹でも植えるか？」
「“死者の樹”が竹と相性が悪かったのは偶然。竹が“死者の樹”を逆に枯らすことは知っているけど、今回の事態が、“死者の樹”

によるものとは思えないです。このままでは、魔法騎士はともかく、兵やメイドは」
「……ここまでか」
樟葉はため息混じりに呟く。
「これでは」
「汚名は、私達が雪げばいいだけでしょう？」
悠菜はきつい口調で言った。
「面子なんて、単なる偉いさんの意地です！つまらない意地で部下を殺すなら、私、そんな樟葉さん殺しちゃうから！」

一方――

羽山達は屍鬼との戦いを続けていた。
「ふんっ！」
唐竹割りの要領で屍鬼の頭を断ち切った博雅の横で、羽山が別の屍鬼の心臓めがけて突き技を喰らわした所だった。
人間なら即死する一撃だが――
「なっ！」
屍鬼は羽山の刀を無造作に掴んで離そうとしない。
「羽山っ！」
横からの一撃が、屍鬼の頭を真横に断ち切った。
「すまんっ！」
「礼はいい！」
博雅は動かなくなった屍鬼を力任せに持ち上げ、迫り来る別の屍鬼達めがけて投げつけた。
動作が鈍い屍鬼達は避けることさえせず、元仲間を叩き付けられて横転した。
「突き技は避けろ――連中、心臓と頭をやられても、しばらくは動けるみたいだ」

「即死はないってことか」
ようやく立ち上がった屍鬼達を前に、羽山達は刀を構えなおした。
コンテナに貼り付けられたシールドと装甲服の感触が、何とか自分達が何者かを教えてくれる。
「羽山」
博雅は唾を飲み込みながら言った。
「コンテナの中に銃があったな」
「あ？ああ……確か」
羽山はコンテナの中に物資を詰め込んだ時のことを思い出した。
医薬品に輸血用血液、レーションに水。
その一番上においたのは――
「三八式だ」
羽山は弾の装填方法だけ学んだ銃の名を口にした。
「確か手榴弾も数発」
「俺が引きつける間に準備してくれ」
「やれるか？」
「1分だ」
「――よし」
次の瞬間、羽山がコンテナに跳び下がり、博雅は滅茶苦茶に刀を振り回した。
剣が恐ろしくて近づけないのか、屍鬼達は博雅の剣に腕や胴を斬りつけられ、その場に転がった。
（体を掴まれればお終いだ）
博雅は床に転がる屍鬼達に注意して、間合いをとった。
別に斬り合い続ける必要はない。
1分
たった1分の時間を稼げばいいのだ。

背後ではコンテナが開く音がする。
後は――
「ちっ！」
博雅は舌打ちと同時に剣ではなく、シールドを構えた。
ガンッ！
シールド越しに鋭い衝撃が走った。
銃撃だ。
間合いはとれない。
とればねらい打ちにされる。
ならば――
「うぉおおっ！」
シールドを構えながら、博雅は一気に突撃した。
短絡的と笑うなら笑え！
だが、戦場で格好なんてつけていられるか！
――その思いが間違いだとは博雅は思わない。
格好悪くてもなんでも、生き残ってこそのことだ。
素早く銃を手にした屍鬼を見つけ、銃弾をすべてシールドで受けつつ、博雅はその屍鬼に襲いかかった。
ぐちゃっ
鈍い感触がシールドのエッジから伝わってくる。

シールドのエッジで敵を粉砕する一撃が、屍鬼に命中した感触だ。
ルシフェルから教わった“ベイルアタック”を初めて使った。
効果は悪くない。
頭を粉砕された屍鬼がその場に崩れ落ちた。
「次っ！」
力任せに刀を横に薙いだ後は、博雅は何をどうしたかほとんど覚えていない。
当たるを幸い、斬って斬って斬りまくる。
そんな時代劇の侍さながらの大立ち回りを演じたことを、博雅は何も覚えていないのだ。
「はぁ……はぁ……」
気がつくと、完全に骸となった屍鬼達で床は埋め尽くされていた。
頭を砕き、心臓を胸ごと吹き飛ばし、切断しまくった結果だ。
「こ……この馬鹿」
その背後、背を守る形で立つ羽山が息も絶え絶えという様子で言った。
「こっちが何度「どけ」って言ったと思って……」
博雅が邪魔でせっかく用意した銃が使えないと悟った羽山は、博雅から離れた所に手榴弾を投げ込み、刀とシールドを手に突撃した。
博雅より冷静だったとはいえ、やったことは博雅と何も変わることはない。
「すまない……我を忘れた」
「だけど……」
ぐしゃっ。
羽山は乱暴に足下に転がる骸を蹴り飛ばし、自分がへたり込むスペースを作った。
死体を蹴飛ばすという非倫理的な行為。鈍い感触ですら、今の羽

山には如何なる感情をも湧かせはしない。
「これで俺達も……半人前かな」
「……かもしれん」
博雅も同様にへたり込んだ。
「水が欲しいな」
「コンテナに戻ろう……栗須さんが心配だ」
「後はコンテナを楯に銃だな――弾丸は？」
博雅達は腰を上げた。
「５０連マガジンが２０。手榴弾は……さっき使い果たした」
「気休め程度にはなるか」
「ああ……とにかく」
博雅は言った。
「これでお尻は楽しめそうだ」

第五十五話

「……もうアタマに来た」
全軍第一層へ後退。
その命令を下して以来、第一層までずっと無言だった樟葉が、ぽつりとそう言った。
「こっちがオトナシクてツツシミ深い、心優しい指揮官演じてやってるってのに」
オトナシク
ツツシミ深い
一体、樟葉がどういう意味で言っているのか、居合わせた近衛の幹部達は、樟葉の口から出た、樟葉から最も縁遠い（外見以外）言葉に、内心で首を傾げた。
「この私のお心遣いを無碍にするたぁ、良い度胸だ」
クックックッ……と喉で笑う樟葉に、顔を引きつらせた幹部達が一斉に後ずさった。
こうなった樟葉がどれほど厄介か、幹部達は経験上熟知していたから。
「――――おい、バカ息子」
「わ、私？」
悠菜は泣きそうな顔になった。
「な、何で白羽の矢が私に？」
「おめぇに楽しい思いさせてやる」
「苦しみ、の間違いじゃなくて？」
「ああ♪」
ポンッと樟葉は悠菜の肩に手を置いた。
「殺して殺して殺し抜く、近衛騎士の醍醐味ってのを、真っ先に味わわせてやる♪」
「な、何やるつもり？」

「なぁに。簡単だ」
樟葉の素性を知らなければ絶対に魅了されるだろうほどの笑みを浮かべ、樟葉は言った。
「お前、魔法使いたいんだろう？」
「え？」
悠菜が驚いたように目を見開いた。
「魔法騎士としてのお前の特性は、広域無差別殺戮型。ルシフェルや他の魔法騎士のようなチマチマしたもんよりよっぽどハデだ」
「ルシフェルだって戦域制圧型ですよ？」
ガンッ！
樟葉の拳が悠菜の脳天に命中した。
「お前がやりたいことやらせてやる。そう言ってるんだ」
「無理ですぅ……」
「あん？」
グイッ。
顔を不快そうに歪めた樟葉が悠菜の胸ぐらを掴み、持ち上げた。
「わ・た・し・が・め・い・じ・て・る・ん・だ・ぞ？」
「そうじゃなくて！」
悠菜はたまらず言い返した。
「敵がオゾンをこんな迷宮で使った理由はそこなんですよ！？」
「どこだ？」
「……ここでそことか言ったら刺すつもりでしょう？」
「斬る」
「――ぐすっ。敵は僕達に戦わせないつもりなんです」
「？」
「いいですか？オゾンは毒ガスであると同時に、それ自体が爆薬なんですよ？」
「爆薬？」
「大気中のオゾンは一定以上になるとそれだけで爆発するんです。当然、火花一つで引火、爆発します」

「気化爆弾みたいなものか？」
「それ以上です――とにかく、銃の一発、剣の火花一つ出さずに撤退できたことは僥倖です」
「何が言いたい？」
「……敵はすさまじい条件を私達に突きつけてきたってことです」
「すさまじい……条件？」
「戦わず、火も使わずに第四層をくぐり抜けてこい――それが無理なら帰れって」
「オゾン発生源を潰してオゾンガスを外に逃がす方法もあるぞ？」
「発生源を破壊する時に火花一つ、静電気ですら生じたらアウトです。ガスを外に放出したら私達、テロリストか虐殺者になりますよ？――ここは葉月市内。直上には病院」
「――ちっ！」
「これも試練なんじゃないですか？この迷宮が試練場って名前を付けられたの、何だかわかる気がします」
「兵法の常道、押しつぶし叩き殺す。それを極限まで続けられるかどうか、それが試練なら大歓迎なんだがな！」
「本当、樟葉さんってアタマに血が上るとおっかないんですから」
「……ほう？どういう意味でのおっかないだ？」
「いろんな意味」
「――バカ息子」
「……行けっていうんでしょう？でも」
やっと床に降ろされた悠菜は、いらだたしいという顔だ。
「もうっ！どうしてさっさとこれに気づかなかったのかしら？」
「？」
「樟葉さん」
悠菜は怪訝そうな顔をする樟葉に告げた。
「３０分、私に下さい」

「第二層に侵入者……そのまま第三層へ向かうルートをたどっています」
オペレーターからの報告に、美奈子は無言でモニターに視線を移した。
「数は？」
「反応は１」
「……水瀬君ね？」
美奈子はオペレーターに告げた。
「水瀬君――侵入者前方のシャッターを閉鎖。トラップへ誘導して」
「了解」

「あれ？」
トラップを警戒して飛行を続けていた悠菜はそこで止まらざるを得なかった。
迷子にならないよう、撤退前に仕掛けていたマーキングが消えたからだ。
「おかしいですね」
辺りを見回すが、石壁が続く空間に何ら変わったところはない。
「？」
悠菜はしばらく考えた後、言った。
「ま。いいか」
そう。いいんだ。
大切なのは、第二層で“これ”をやること。
悠菜はそう判断した。
「えっと――」
ごそごそごそ
悠菜は背負っていたリュックから何かを取り出した。
「ありました」
一体、どこに入っていたのか。リュックから取り出されたのは、

建て売り住宅にでも使われていそうな、なんの変哲もない木製のドア。

痛み方から判断して、夢の島かどこかで拾ってきたと想像できる代物だ。

「全く……悠理ったらなんでこんなシステムにしたのかしら」

自分よりずっと大きいドアをよろめきながら何とか壁に置いた。

「……？」

悠菜は記憶からその理由を引き出した。

「猫型ロボットの道具？何ですかそれ」

悠菜はドアのノブに手をかけながらぼやいた。

「悠理ったら。そんな子供が見るようなのが好きだなんて」

悠菜は“そこ”を思い浮かべ、ノブをひねった。

「……私も見たいのに」

ガチャ

ドアが開くと同時に、悠菜は防御バリアを展開した。

その瞬間。

ドアの向こうから、何かが飛び出してきた。

「第二層に浸水！」

オペレーターの報告に、美奈子は飲みかけていたコーヒーを危うく吹き出すところだった。

「水！？」

思わず見たグリムは首を横に振って、ありえないと意思表示した。

「地下水脈からはかなり離れた場所です。それに、そんなモノがあればドワーフ達が」

「浸水はどこから！？」

「侵入者のすぐ真横――第二層Ｂ２区画」

「真ん中？」

「上下は第一層、第三層です。上下からの浸水はありえませんね」

グリムも突然のことに首を傾げた。

「とにかく、浸水を第二層でくい止めて」
「無理です」
グリムは否定した。
「あなたに言われて各層通気口はシャッターがつけられていますが、各層に通じる階段は」
「各隠し扉を緊急閉鎖」
「ダメです――数カ所、人間達が何か仕掛けています」
「ダメ？」
美奈子はその意味をすぐに理解した。
「楔か、瞬間接着剤でもくっつけたのね？」
「恐らく、そうでしょう」
グリムはそれを認めた。
「トラップの可能性を人間達は片端から潰しましたからね」
「……浸水の被害はどの程度になりそう？」
「第二層から第四層まで、約２５分で冠水します」
ちらと美奈子を見たグリムの視線に気づいたのか、美奈子は言った。
「仕方ないわ」
コトンッ
カップをテーブルの上に置いた。
「第二層から第四層までを放棄。オゾン発生装置は隔離。何としても水を防いで。それと」
「？」
「オゾン発生装置隔離確認と同時に――第二層から第四層までの火気系トラップを誘爆させて」
「了解」

水瀬悠理。
本人は「平凡」だと主張するが、それを額面通りに受け取る者は

誰一人存在しない。
普通はむしろ「変人」のカテゴリーに入れられる人物。
その人物が好きな番組の一つに、猫型ロボットのアニメがある。
劇場版はかかさず見に行くし、原作マンガとＤＶＤは全部持っている。
親に連れられた幼稚園児と並ぼうが、小学生料金でしか入れてもらえなかろうが、とにかく「一番見た映画はこれ」という程好んでいる。
「主人公と自分の姿がだぶるんだろう」とルシフェルが評しているが、その真偽は定かではない。
悠菜にもその愛好ぶりはわかる。
だが――
「だからって」
悠菜はあきれ果てた目でドアを見た。
ドアの向こうからは莫大な量の水――海水がすさまじい勢いで流れ出してくる。
「空間転移の魔法をこんなドアに仕掛けなくても……」
空間転移（くうかんてんい）
俗に言うテレポートの魔法の総称。
この場合、ドアに事前に設定されたリンク・ポイントと呼ばれるテレポート先を記憶させておき、移動したいときにいつでも移動がかけられるような仕組みが採用されている。
ドアには悠理の手書きで「どこでもドア」と書かれているのを見た悠菜は、「いっそニセ札製造器でも作ればいいのに」とぼやくしかない。
リンク・ポイントは深海。
悠理としては大まじめだったらしいが、一度開いた途端、このように大量に吹き出した海水のせいでドアが閉められなくなった記憶

を悠菜はしっかりと引き出している。
あの時は近衛の地下施設一フロアを完全に水没させ、ルシフェルにボコられているが、今度は問題ない。
オゾンといっても所詮は気体。
水の容積で全てを水没させれば危害は去る。
悠菜は単純にそう考えていた。

だが――

海水が濁流となって進む中。
石壁に設えられた照明が灯った。
それはつまり――
「――っ！」
悠菜は防御バリアを展開したまま、濁流の中に身を沈めた。
次の瞬間。

ドンッ！

迷宮を揺るがす爆発音と振動は美奈子も感じることが出来た。
各所に発生させた火がオゾンに引火。
大爆発を引き起こしたのだ。
爆発と急激な酸欠は下手な攻撃より圧倒的な殺傷能力を持つ。
「――被害は？」
「敵へ与えた被害不明」
「侵入者の生死確認急いで。第一層の敵は？」
それを命じたのは美奈子だ。
顔色一つ変えずに命令を繰り出すその様子に、グリムは内心ほくそ笑む。
薬はかなり効いている。
グリムはそう判断した。

先程まで見せていた怯えはどこにもない。
あるのは冷徹な戦略マシーンだ。
それが嬉しくて仕方ない。
「爆風で何体かダメージを与えた様子ですが、敵全体から見れば微々たるものです」
「――敵の迷宮外の布陣は？増援はないの？」
「人間の施設地下一階から駐車場付近に補給部隊と思われる集団が存在することは確認済みです」
オペレーターはモニターの表示を切り替えながら説明する。
「装備・数からして大した存在ではありません」
「トラップに電撃系はあったかしら？」
「第二層と第四層に計８つ」
「全力で稼動させて。水に入った侵入者を感電死させられるでしょう？」
「可能です」
「やって――それと、さっきの迷宮の構造図、もう一度出して」
「はい？」
モニターに映し出されたのは迷宮の全体図。
それをじっ。と見た美奈子は、ある点に気づいた。
「迷宮を取り巻いている柱は何？」
「ああ――建築用の支坑です」
オペレーターはバツが悪そうに言った。
「申し訳有りません。迷宮内部の表示をお望みの所、外部図面を表示しました」
「いいのよ。それより支坑って？」
「ドワーフ達が地盤の状況を調べるために掘った後、換気口とした坑です」
「結構、縦横に掘られているようだけど？」
まるで倒壊寸前の建物を補強するようにさえ見える坑が、美奈子の興味を誘った。

「第二層から第八層まではもうほとんどが埋められています」
「使えないの？」
「使う……となれば」
オペレーターは少し考えてから答えた。
「妖魔製造プラントのある第九層と第一層はほんの少し……数メートル掘れば使えます。双方共、出入り口は約２０」
「……支坑最頂部と地上までの距離は？」
「約１０メートル」
オペレーターは美奈子の意図を理解して付け加えた。
「最頂部を少し破壊すればすぐに地上の」
モニターがオペレーターの手によって切り替わった。
それが地図で、大きい建物は病院だとすぐに見当がついた。
「ここに出ます」
何本か地上間近まで伸びた支坑。
その全てが、病院より巨大な施設の敷地内に出ていた。

「……葉月センター」
美奈子にはその施設が何かわかっていた。
閉鎖された工場跡地と縮小が決まった国鉄葉月操車場の跡地を利用して大手ゼネコンが建築を進めている複合ショッピングモール。
仮称葉月センターだ。
大手ゼネコンの利益を、利用客の利便にすり替えた施設。
完成すれば都内最大級のショッピングモールとなり、ゼネコン側は周辺からの自動車での利用客の増大などを主張しているが、都内屈指の活気を誇る葉月商店街の衰退や自動車の増加による交通事情の悪化、ゼネコン側からの国会議員や県議会、市議会、その他の大量贈収賄疑惑の発覚、その他諸々の事情から、葉月市民で歓迎している者はそう多くはない。

「いいわ。やりましょう」

「妖魔を地上へ？」
「ええ」
美奈子はあっさりと頷いた。
「確か２ヶ月後には完成する予定だけど、規模からしても地上への橋頭堡には十分な広さだもの」
「美奈子さん」
グリムは驚いたように口を開いた。
「それは――」
「グリム様？」
美奈子は恭しくグリムに告げた。
「グリム様の目指す人間界の浄化のまたとないきっかけとなれば幸いですわ？」
「……」
グリムは美奈子の狙いを見定めた。
「第一層の敵を本気で殺すつもりですね？」
「はい♪」
美奈子は楽しげに答えた。
「第一層へ妖魔の２割を投入。抗しきれなくなって地上へ出た所へ妖魔の５割を差し向けます」
「増援は確実に来ますよ？」
「その時はまた別の手をとります」
美奈子はにこりと微笑んだ。
「そのための“ここ”ですから」
「……」
じっ。と美奈子を見つめたグリムはため息混じりに言った。
「仕方ありません――予定より少し早いんですけど」
グリムはアンプルの中身をあけたカップを美奈子に差し出し、
「やりますか」
「はい♪」
美奈子は頬を紅潮させながら頷き、カップに口を付けた。

「ほうっ……」
目をつむり、カップの中身が体に染み渡るのを楽しむようした後、
「第八層と第九層の状況は？」美奈子はオペレーターに問いかけた。
「現在、大半が妖魔達の保管場所となっています」
「戦線に投入できる妖魔の数は？」
「昆虫を元にした小型タイプが約２６０００、小動物を元にした中型タイプが約１２００」
昆虫２６０００匹とネズミが１２００匹集められて妖魔にさせられたということ。
よく集めたと褒めるべきだろう。
「それで全部？」
「製造プラントの生産は既に限界です。材料が底をつきつつあります」
「……」
じっ。と考え込んだ美奈子はしばらくの沈黙の後、口を開いた。
「材料があれば――もっと増産出来る？」
「材料さえあれば」
オペレーターは短く答えた。
「しかし、人間界の気象条件他から考えると」
「材料を確保している部隊に緊急命令」
美奈子は命じた。
「都市部のペットショップ及び動物園を襲撃、材料を大至急確保せよ。なお、抵抗する人間はすべて」
再びカップを傾けた。
「――材料とすることを認めます」

そうだ。
グリムは力強く頷いた。
この子にはこう動いて欲しかったのだから。
「第八・第九層の戦力を支坑へ移動、それと各支坑、第一層への突

入準備急いで。何分？」
「都合、１０分下さい」
「５分で」
「――了解」
命令を受けたオペレーター達が忙しく立ち回る。
「水の方は？」
「第四層まで浸水しています」
「……放って置いて良いか」
美奈子はモニターに映し出される浸水状況を見て呟いた。
「どうせ、冠水しっぱなしじゃ困るのはあなたですものね？」
そうだ。
冠水したままでどうやって動く？
魔法騎士だからって、感電死するほど電力が流れる中を移動する？
それでいいの？
このまま放っておいたら、全部水浸し。
私や萌子ちゃんまで水死させて終わりにするの？
違うわよね？
出来ないわよね？
なら
勝手に水を引かせてくれる。
でなければ一番困るのは――
「そうでしょう？水瀬君？」
椅子の背もたれにもたれかかった美奈子は、楽しげに微笑んだ。

第五十六話

美奈子の嘲りに答えるように。
そう表現するのが最も適切と思ってしまうほど、水はあっさりと引いた。

最初の浸水から３０分で水は迷宮から去っていた。

時間がかかった理由は一つ。

悠菜が「どこでもドア」を運ぶのに時間がかかったから。

ゼェゼェ……。

第四層に設置された「どこでもドア」の横でへたり込んだ悠菜は、何とかドアを閉めることに成功した。
ドアを持ったまま泳がないでリュックに戻してから第四層まで移動すればいい。
それに気づいたのは、悠菜が四苦八苦して第四層に入り込んだ時だった。
単純なことに気づけなかった悠菜は、第四層入り口でヤケクソ気味にドアを開いた。
今度は、水がすさまじい勢いでドアの向こうへと流れ出していく。

「さ、サハラ砂漠だから文句はこないと思うけど……」

突然、砂漠に海水が降り注ぐ。
それはそれでロマンチックだけど、関わりたい話じゃない。
悠菜はそう思うと、まだ濡れているドアをリュックにしまった。

迷宮内は水浸し。
岩に染みついたオゾンの臭気が漂う中、悠菜はよろよろと立ち上がった。
「オゾンをもう一回発生させるかな？」
多分、そうする。
それを考えると、なんだか自分のやったことが恐ろしいほどの徒労に感じる。
いっそオゾンを爆発させれば良かったのだ。
「私……バカなのでしょうか？」

「ええ――――かなりの」
悠菜の背後でした声。
それは綾乃（ティアナ）の声だった。
綾乃（ティアナ）の背後からはセージュという女の子が恐る恐る顔をのぞかせていた。
「どうしてこんなマネしたんですか？」
「思いつきじゃ――――だめ？」
「怒りますよ？」
いいつつ、綾乃（ティアナ）もそうとしか考えられなかった。
悠菜のとった手は、本当に一時しのぎに過ぎない。
回避するはずのオゾン爆発を引き起こされたせいで、負傷者が何人か出ていては目も当てられない。

すっ。

綾乃（ティアナ）が無言で悠菜に差し出したのは、一通のファイル。
「この迷宮の正式な設計図です」
「よく手に入りましたね」
「いろいろあったんです」

「グロリア陛下の圧力ですか？」
「――言いたくありません」
つんっ。とそっぽを向いた綾乃（ティアナ）の仕草から、図星だと察した水瀬は、ファイルを開き、顔色を変えた。
「――何？これ」
「面白いでしょう？」
「第四層から下への進入路が発見されなかった理由がわかった」
「そうです」
「第五層は第四層の地下１００メートルに存在。移動手段は予め設置されたリンク・ポイントを通るしかない――か」
「カノッサから聞いておけば良かったのです」
綾乃（ティアナ）は申し訳なさそうに言った。
「あの子、魔界からのルートがあると言っていたのに」
「そういえば――」
悠菜は不思議そうにセージュを見た。
「あなた――だけじゃなくて、さっきの魔族はどうやって迷宮へ？」
「お、同じです」
セージュは綾乃（ティアナ）の顔色をうかがいながら言った。
「魔界にあるリンク・ポイントから第六層へ移動して、そこから第三層のリンク・ポイントへ」
「早く言いなさい！そういうことは！」
悠菜は目をつり上げてセージュに言った。
「ひゃんっ！」
セージュは綾乃（ティアナ）の背後に隠れて振るえ出す。
「悠菜さん！？」
今度は綾乃（ティアナ）が顔を赤くして怒鳴った。
「私の妹分になんて態度を！」
「言いたくもなりますっ！私の努力が無駄じゃないですかっ！」
悠菜は二人の手を握ると歩き出した。

「第三層へ行きますよっ！？案内してっ！」

「ここ？」

「そのはずです――けど」

その部屋の中で、セージュは自信なさげに言った。

「この部屋の真ん中にリンク・ポイントが」

部屋の中は黒こげ。石畳も石壁も無惨にめくれ上がっていた。

「この臭い……」

壁に残る、黒く炭化した物体が放つ、かすかな臭いを敏感に感じ取った悠菜は、この部屋で何が起きたか理解した。

「リンク・ポイントを爆破しましたね？爆薬で」

「何のために？」

「勿論――魔界からの増援を断つためですよ」

悠菜はファイルを開きながら言った。

「私達は嫌でも第四層から第五層を目指さなければならないのです」

「それは――グリムのおいたのせいですね？」

「ええ♪」

悠菜は微笑みながら壁に手をやった。

何の意図もない、単なる偶然だ。

だが――

「……」

悠菜の手のひらは、確かにそれを感じ取っていた。

「……」

悠菜は顔が汚れるのも構わず、壁に耳をつけた。

真剣に耳からの情報を入手するその顔は、次第に驚きの色を濃くしていく。

「悠菜さん？」

「戻りますっ！」

悠菜は二人を後目に部屋から飛び出していった。

「おお。遅いぞバカ息子」
近衛兵とメイドが弾薬の補給を行っている第一層まで一気に飛行移動した悠菜は、樟葉に怒鳴った。
「樟葉さんっ！」
「第四層まで――――どうした？」
戦果報告を期待していた樟葉は、嫌な予感がした。
水瀬が血相を変えて飛んでくる時。
それはトラブルの始まり。
猫型ロボットに泣きつく小学生レベルで済むことも多いが、今回はその程度では済みそうもない。
樟葉は真顔で訊ねた。
「しくじったのか？」
「敵はもうＲＰＧをやめました！ＳＬＧをやるつもりですっ！」
「――――もう少し、わかりやすく言え」
樟葉は額に指をやりながら言った。
「つまり？ダンジョンでモンスターと戦うってのがＲＰＧで、戦争がＳＬＧ」
樟葉はそれで意味がわかった。
戦争？
「敵が来るのか！？」
「迷宮の外に、多分試掘抗か何かあるんです！敵はそこを移動している！壁越しにスゴイ振動が！」
「総員戦闘配置！」
樟葉は怒鳴った。
「円陣を組めっ！各遮蔽物への地雷、指向性散弾装置の設置はどうなっている！」
兵士とメイドが素早く円陣を組み始める。
土嚢が運ばれ、騎士達がガレキをその近くに積み上げ、即席の石垣を作り始める。

「魔法騎士は攻撃魔法を中心にしろ！前に出ては射撃の邪魔になるぞっ！」

指揮官達の怒鳴り声
弾丸の装填音
ガレキが積み上げられる音

あらゆる戦いに備える音が室内に響き渡る。
嵐の前の静けさは、まだ来ない。

「バカ息子」
樟葉は言った。
「お前はルシフェルと瀬戸綾乃、その子を連れて第四層へ向かえ。ルシフェルは水瀬のサポート及び桜井美奈子の確保を最優先。九尾の狐の動静が不明との連絡が入っている。注意しろよ？」
「で、でもっ！」
「ここにお前達がいても、何の意味もない。もっと大切な任務があるだろう？」
樟葉は言った。
「第四層から下へ向かい、グリムを捕縛しろ――いいな？敵は我々が引きつける」
「なっ！」
悠菜は言葉を失った。
自分達という圧倒的戦闘能力を持つ者と離れ、無数の敵と戦う。
すなわち、自分達を危険にさらすことを承知の上で、
イーリス、栗須に南雲、そして羽山は博雅達が、
みんなが、

心配ない。
行け。

口にこそ出さずに告げているのを見たから。

「……」

みんな命がけだ。

命を、

たった一つしかない大切なものを危険にさらしてまで、

行け。

そう、言ってくれている。

自分は、それに背くことは出来ない。

悠菜はそう思った。

……そうか。

悠菜はようやく理解できた。

弟は、これを体験したからこそ、人間になりたいなんて思ったんだ。

互いを信じ、信じられる。

信頼の関係。

絆

何と素晴らしいものか。

悠菜はその感動を表現する言葉を思いつくことすら出来ない。

その素晴らしいものを、無碍になんて出来はしない。

弟は、それを知ったんだ。

……だめだな。私は。

悠菜は泣きそうになった。

自分一人が強いと思って、
特別だと思って、
それだけに酔いしれていた。

そんな私より、弟の方がよっぽど強い。
人を信じ、信じられる。

そんな弟の方が――――強い。

なら。

そうだ。

私も強くなろう。

こういう時、なんて言えばいいの？

教えて！

悠理！

「――――了解！」

悠菜は背筋を伸ばし、敬礼した。

そうか。

そう言えばいいんだ。

ありがとう。

……私、ありがとうって言った？

ふふっ。

あなたにありがとうなんて、初めて言ったね。

ありがとう。

良い言葉だね。

あなたもそう思う？

……そうだね。

「武運を」

樟葉達が一斉にそれに答える。

みんなの顔をもう一度しっかりと見つめ、そして、悠菜は第二層への階段へと駆け出した。

その背中に、ルシフェルと綾乃（ティアナ）達が続く。

「皆さん……」

心配そうな表情を浮かべた綾乃（ティアナ）とセージュが何度も振り返る中、樟葉達の声が背中を押した。

「退路の確保を！二個小隊、後方へ移動して後退戦に備えろ！火焔放射器隊、リキッドの予備はどうなっているか！」

「メイド隊、日頃の訓練を今こそ活かしなさいっ！」
「魔法騎士隊、魔法支援の準備怠るなよ！？」
「羽山、秋篠っ！弾薬運べっ！」
「はいっ！」

「だ、大丈夫なのですか？」
綾乃（ティアナ）は心配そうに悠菜に訊ねた。
「大丈夫」
悠菜は力を込めて答えた。
「大丈夫なんだから！」
それは自分に言い聞かせるような声。
悠菜は思う。
あの戦争だって生き残ってきた人達だ。
こんな所で死ぬ人達じゃない。
死んでいい人達じゃない。
だから――

「私達がどれだけ早くグリムを捕まえられるかが勝負ですっ！」
「――セージュ」
「は、はいっ！」
「怖いですか？」
「い、いいえっ！」
セージュはサイズの柄を握りしめながら健気なまでに答えた。
「私は――怖くありませんっ！」
「そうです！」
綾乃（ティアナ）は励ますように強く言った。
「義父上の仇を討つためにも、ここは怯えてる場合じゃないんです！」
「はいっ！」

第五十六話（後書き）

……一体、いつになったら終わるんでしょうか？このお話。なんだか話が段々もっともっと複雑になっていくんですけど（一―一）

第五十八話

「というわけで」
南雲は博雅達に言った。
「俺達は戦争をやる」
博雅達は無言で頷いた。
「ところで……一年戦争において、魔族軍に人類が長野、新潟。最大範囲では周辺4県の大半を奪われたのは何故かわかっているな？」
「現代兵器が使い物にならなかったから」
羽山はそう答えた。
「現代兵器とは？」
「えっと――ミサイルとか？」
「正確にはそれに搭載されているＩＣやＬＳＩといった電子パーツだ。それが使えないことで最も基本にして最も大切な兵器が使えなくなった。それ何だ？」
「……」首をかげる羽山の横で、博雅が言った。
「レーダー、ですか？」
「そうだ」
南雲は力強く頷いた。
「魔素――狩野粒子により電子パーツが破壊されたことで、軍の配備しているレーダーは全てオシャカ。それはつまり、目をレーダーに頼る現代戦争において、いや、全ての戦争において基本の“ファーストルック・ファーストキル”が不可能になったことに他ならない」
不意に南雲の視線が司令部に向いた。
「だが、人類側が移動、潜伏する魔族軍を先に発見し、これを撃破したケースは多数存在する。それを可能にした、つまり、砲に搭載されるレーダー連動システムとはいかなくても、早期警戒用、または索敵レーダーとして機能したのが」

羽山達は、南雲の視線の先にいるのが、水瀬のＣＰＯ、鈴宮遙中尉であることに気づいた。

近衛の軍服の上に防弾チョッキ、ヘルメットという出で立ちだが、それで彼女の愛くるしさが失われることはない。

むしろ職務に集中する真剣な顔は抱きしめたくなるほど素敵に見える。

突入前の鈴宮中尉との談笑の後、何人もの近衛兵士から睨まれた理由が、羽山にはわかった気がした。

「彼女のような存在だ」

「遙ちゃんが？」

羽山は目を丸くした。

「鈴宮中尉、だ」

横にいた博雅に肘で小突かれた羽山はバツが悪そうに言い直した。

「中尉は、魔導師だったんですか？」

「似たようなものだ」

南雲は何でもない。という顔で言った。

その視線の先では、鈴宮中尉が司令部のスタッフと図面片手に打ち合わせを続けている。

「彼女は、広範囲を掌握する“目”を持つ。知らないだろう？」

「知りません」

「初めて聞きました」

「そうか」

珍しく素直な教え子達の反応に気をよくしたらしい南雲は、もったいぶった態度で言った。

「全てを見通す、レーダーより正確な目の持ち主。そんな存在を我々はこう呼ぶ」

あっ！という顔をした羽山が大声で南雲の声を遮った。

「電波女っ！」

次の瞬間、

タンッ

銃声は一発。

鈴宮中尉は、何でもない。という顔で、未だ硝煙をあげる拳銃をホルスターに戻し、唖然とする司令部スタッフ達との打ち合わせに戻る。

「……口は災いの元だと、よくわかったろう」

南雲は石畳にひっくり返る羽山を見下ろしながら冷たく言った。

着弾のショックで目を回した羽山の被っていたヘルメットが、真っ正面から受けた銃弾で見事に凹んでいる。

「彼女みたいな能力を“第三眼（サード・アイ）”と言うんだ」

「第三眼（サード・アイ）？――――何ですか、それ」

羽山を助け起こしながら、博雅は南雲に訊ねたが、南雲の答えはそっけなかった。

「見ていればわかる――――秋篠、羽山。お前達は彼女の護衛につけ」

成る程。

博雅は、遙が何故、第三眼（サード・アイ）と呼ばれるかわかった気がした。

鈴宮遙の額から放たれる光。
それこそが魔法の眼――第三眼だ。

その眼が見た光景は、彼女の目の前に置かれた、魔晶石付きの得体の知れない黒い装置経由で他人にもわかる視覚情報に変換され、３Ｄ画像として表示される仕組みがとられ、実際に今、彼女の眼前では、迷宮の立体画像。細部に至るまでの構造が映像化されている。
第三眼の前では、いかなる罠も無力にして無意味。
すべてを第三眼は見通してしまうから。
通常の電波探知等では到底不可能に近いこうした能力を持つからこそ、第三眼は恐れられてきたのだ。

「敵、第二層から第一層付近に集結中」
遙の華奢な指先が光り輝く迷宮の構造図に触れると、赤い点と線が図に加わった。
点の所に敵がいて、線は敵の針路だろうと、博雅は予想をつけたが、外れてはいないようだ。
その博雅の前で、遙が抑揚のない、コンピューターのような声で状況を告げる。
「中型規模妖魔主力。数１，５００。予想針路及び出現ポイントは」
博雅は次の表示を見て絶句した。
敵がほぼ第一層の全周囲から襲ってくることになるからだ。
「俺達、喰われちまうんじゃね？」
羽山が呟くが、誰もそれを否定しようとさえしない。
「ここでくい止める」
樟葉の言葉に、彼女の機嫌を損ねたと心配した羽山が小さく肩をすくめた。
「ここでくい止めなければ、敵は地上に出る」
「……あの」
南雲が小さく手を挙げた。

「敵が地上に出る、その恐れというか、可能性は？」
「現状、数５が地上から約５メートルの位置――６カ所に存在。データ不足のため、目的等は一切不明。従って、その可能性への返答は不可能」
遙は、まるで全てが分かり切っているかのように、質問に適切に、淀みなく答えていく。
その遙に、樟葉がとんでもないことを訊ねた。
「現在、第一層に設置中の爆薬でこの迷宮が崩壊する可能性は？」
「――９９％。全フロアが連鎖的に崩壊します」
「樟葉さん！？」博雅が目を見開いて言った。
「それって――」
「その通りだ」
樟葉は言った。
「工兵が第一層の主立った柱に爆薬をしかけている。万一の際は、それで敵を吹き飛ばす」
「下には水瀬達が！」
「魔法騎士だぞ？」
そう言う樟葉に博雅が食い下がった。
水瀬――
その名こそ使うが、自分が心配しているのは、ルシフェルただ一人だということを、博雅は十分に自覚していた。
「テレポート出来るのは知っています！でも、もし、テレポートのタイミングを逸したら！」
「実戦に、“でも”や“もし”はない！」
樟葉は博雅を一喝した。
「あいつらも近衛の騎士だ！上層で戦闘が展開されれば下層が崩壊する可能性があるなんて、その程度のことは承知の上だ！」
「――なら」
自らを恥じ、唇を噛みしめる博雅の横で羽山が言った。
「いっそ、第一層、最初から吹き飛ばしたらどうです？」

「――何？」
「第四層まで崩壊するんでしょう？」
「――９９％の確率で、そうだ」
「もし、そうなったら」
羽山はやや興奮気味に言った。
「この迷宮は寸胴みたいになる」
羽山は、遙の描き出す迷宮の構造図の縁を指でなぞる。
文字で言えば、Ｕの字が出来上がった。
「寸胴？」
樟葉は眉をひそめた。
「鍋ですよ鍋」
「んなことはわかってる――ウチで鍋といえば寸胴だ」
「閣下、今は一人暮らしのはずじゃ……」
「うるさいっ！」
南雲のツッコミに顔を赤くして怒鳴る樟葉。
「第一層へ全方位から突入する敵は、こうなれば、どうやっても鍋の中へ一度落ちるか、鍋の縁を進んでくるしかない――羽でもあれば別でしょうけど」
「つまり？」
「饗庭さん――じゃない、閣下。
この鍋さえつくりあげれば、第一層から第三層まで、どこから敵がこようが同じです。
俺達は、鍋の底に落ちた敵をねらい撃ちにするなり、爆薬投げ込むなりして、そいつらを始末すればいいことになりませんか？」
成る程。
樟葉達は素直に感心した。
迷宮そのものを原型を留めて確保する必要は、樟葉達にはどこにもない。
さらに、迷宮の中で敵を迎撃する必要も、だ。
「発想の違い……か」

「……」
しばらく考え込んだ様子の樟葉は、
「南雲」
「はっ」
樟葉は無言で南雲の肩を力強く叩いた。
「――よく育てたな。お前達の教育の賜だ」
「――恐縮です」
南雲ははにかんだ笑顔で頷いた。
「では――我々は鍛冶屋になるとしよう」
鍋をつくるのが鍛冶屋でよかったか、樟葉には自信がなかったが、言った以上は後には引けない。
「参謀長、全部隊を第一層から迷宮入り口まで移動させろ」
「はっ！」
「鈴宮中尉。敵が地上に出る可能性の高い場所は？」
「現在、迷宮以外に通じる坑で、かつ、敵が最も集結中なのはこの坑です」
構造図の端になぜか黄色い電気ネズミが出現し、一本の坑を指さした。
“ここに注目っ！”
吹き出しにはそう書かれていた。
全ては遙の演出だと皆、わかっているが――遙の芸の細かさには感心を通り越して呆れるしかない。
地下構造図の上に、地上の構造物が書き加えられた。
病院と公園、周辺の建物――そして。
「これ、葉月センターか？」
「間違いないな」
地元の羽山と秋篠が言った。
「葉月センター？」
かなり大きな建物だという認識しかない樟葉が訊ねた。
「建設中の大型ショッピングモールです」

「建設中――ということは……」
樟葉がニヤリと笑い、そして言った。
「――参謀」
「はっ？」
「万一に備えた、“アレ”の出番だ」

「地図だとこの先だね」
第四層に降りた悠菜達は、地図を頼りに第五層へのリンク・ポイントへと向かって歩いていた。
「敵がそう簡単に行かせてくれればいいけど」
「ルシフェ、それは無理」
「……言ってみただけだよ」
ルシフェルはちらりと後ろを歩く綾乃（ティアナ）と少女を見た。
言葉はわからないが、綾乃が少女を励ましていることだけはわかる。
緊張する妹を懸命に励ます姉――それは、本当の姉妹のように見える。
だから、ルシフェルは警戒心を解けない。
瀬戸綾乃は瀬戸昭博の一人娘だ。
人間だ。
魔族の妹なんていない。
――綾乃の母が魔族と子供を作っていれば別だけど、それはないだろう。

あれは本当に綾乃ちゃん？

ルシフェルはその問いかけを、何とか口に出さずに済ませた。
そんなことを口にすれば、綾乃がどう動くかわかったものではな

い。

「味方だと思えばいいんです」

悠菜が言う。

「今の綾乃ちゃんは味方。セージュちゃんもね」

「魔族と共闘するなんて、一年前なら考えられないよ」

「そうだね……」

「言っても仕方ないけど」

「そうだね」

「それで？第五層までの進入路、わかってるの？」

「そうだね」

「……あのね？」

「そうだね」

「……」

相手が、自分との会話を文字通り話半分で聞き流していることに気づいたルシフェルは、とりあえず悠菜の後頭部をはり倒した。

「痛いじゃないですか！」

後頭部を抱えながら涙目で抗議する悠菜。

「人が警戒してる最中に！」

「虫がいたから――――それに、警戒だったら、いっそ遙さんも連れてくればよかったんだよね」

しれっと言ってのけるルシフェル。

「遙さんは危険な目にあわせたくないもん」

ぷうっ。と頬を膨らませる悠菜。

「それより」

悠菜が振り返った先。

そこにはセージュがいた。

「そろそろ、いいんじゃない？」

「？」

セージュは少し怯えながら、可愛らしく小首を傾げた。

背はそれほど高くない。
だが、緑色の髪とあどけなさを残す顔立ちは間違いなくカワイイ。
男の子が見れば間違いなく虜になる。
ルシフェルの周囲に不思議といなかった、いわゆるロリ系キャラだ。
メイド隊の指揮にかかりっきりだった“あの”栗須が知ればどうなるか、ルシフェルはちょっと考えたくなかった。
そのセージュに、悠菜は言う。
「敵討ちの話……聞かせてあげて？」
「……」
セージュは、思い詰めたような低い声でポツリポツリと語り出した。
ルシフェルには何を言ってるのかわからない。
すると、
ペンッ
どこから取り出したのか、悠菜がスリッパでセージュの頭をはたいた。
「人間の言葉は出来るんでしょう！？」
びっくりするセージュに悠菜は怒鳴った。
「ルシフェルちゃんに聞かせてあげてって言ったの！言うこと聞かないから――」
悠菜がバックから取り出したのは――
「悠菜ちゃんっ！」

ルシフェルが驚いて悠菜を止めた。
「どこからそんな服手に入れたの！？」
「時代の最先端！」
「違う！何か違うっ！」
「何考えてんですかっ！」
ゲインッ！
剣の鞘で悠菜の頭が凹むほどぶん殴ったのは綾乃（ティアナ）だ。
「そんないかがわしい服、セージュに着せるワケにはいきませんっ！」
「えーっ！？」
悠菜が不満げな声を上げた。
「似合いますって！」
「ダメですっ！」
「見てみたいでしょう？」
「――――それは」
「じゃ、決定♪」

悠菜は、涙目で拒絶を示すセージュのローブをひっぺがし、その服に手をかけた。

「やめなさいっ！」

その手を綾乃（ティアナ）が止めた。

「この子がそんな服着たら、ミジメになるのは私なんですよ！？」

「……」

悠菜はなぜか、セージュとルシフェル、そして綾乃（ティアナ）を交互に見比べた。

「――――えっと」

ぐにっ。

問答無用で悠菜が鷲掴みにしたのは、

「#&$―&#;rfsr4a&#~！？」

言語化出来ない悲鳴を上げるセージュの胸だ。

「ふぅん？ローブからじゃわかんなかったけど、結構スゴいねぇ」

ムニムニムニ

悠菜の手の中でマシュマロのように形を変えるセージュの胸は―

――

はっきりいう。

デカい。

「バスト――――95かな？」

「ふっ……」

ぶわっ。と、セージュの双眸から大粒の涙がこぼれ、

「ふぇぇぇぇぇんっっ！」

ついにセージュは泣き出した。

「やめてくださぁぁぁいっ！」

セージュはこの時、人間の言葉――――英語、しかも、流ちょうなクイーンズ・イングリッシュだ。

「だぁめ♪」

ムニムニムニ

「いゃぁぁっ……お嫁入り前なのにぃ！」

「着替えるって言ってくれたら――――止めてあげる」

「他のにしてくださぁい！」

「このおっきなオッパイ丸出しなのに？」

「そんなの着るなら死んだ方がマシですよぉ！」

「――――もったいない」

「だから――――そんな優しく……きゃんっ！」

「ふっふっふっ……お姉さま直伝のこの指技の前でどれくらい」

「いい加減にしなさいっ！」（×2）

がんっ！
げんっ！
いい音が二つ、迷宮の廊下に響き渡った。
「――全く」
泣き続けるセージュを抱きしめながら、綾乃（ティアナ）が言った。
「いいですかセージュ？このように、オトコは皆、ケダモノなのです」
「……悠菜ちゃんは女の子だって」
女の子達全員が共通言語として英語を使いだしたので、ルシフェルもようやく会話に参加出来た。
「とにかく、このえっちぃのは没収」
ルシフェルはボンデージをどこかにしまってしまう。
「高かったのにぃ！」泣きわめく悠菜。
「知らない」
「どうせ博雅君相手に使うんだもん！」
「しないっ！」
「なら――」
悠菜はどこからかハンガーラックを引っ張り出した。
「さぁ！セージュちゃん！？どれがいい！？」
ラックには様々な女の子の服が並んでいる。
ナースにバニーにアニメのキャラのコスまで、それはそれは色とりどりだ。
「悠理が、いつか！いつかは祷子様に着ていただくためにと！生活費を切りつめてまで買いそろえた逸品ぞろい！」
「――するな」（×2）という指摘ははっきり正しい。

「やらなくていいんです！」
綾乃（ティアナ）は鼻をすすりながら服を見るセージュに言ったが、ふるふる。
セージュは首を横に振った。
「このままでは……ぐすっ。きっと、この人は私の仇討ちに協力してくださいません」
「わかってるぅ♪」
綾乃（ティアナ）がすさまじい顔で悠菜を睨み付け、黙らせる。
「私……私はどうしても、御義父様の仇を討たねばならないんです……だから」
セージュは健気にもハンガーラックの中から服を選んだ。
「どうしても……私は、この一時の屈辱に耐えます」
「……セージュ」
「……」
ぽい。
……
ぽい。
いいつつ、セージュは次々と服を吟味しては床に放り捨て、それを悠菜が慌てて回収する。
「なんだかんだ言って、お気に入りの服、きっちり選んでますね」
あきれ顔のルシフェルに、感動気味の視線を妹分に送る綾乃（ティアナ）が言った。
「どんな境遇でも、自分を見失わないだけです♪」

数分後。

「結局――それ？」
悠菜は怪訝そうな視線をセージュに送った。
「いっそ……ボンデージの方が」
「これでいいんです」

くるりと可愛げに回ってみせるセージュ。
スカートがふわりと膨らむ様子は、女の子でも見とれてしまう何かがあった。
「に、似合いますか？」
「人間界の、そのテのお店でトップになれます」
悠菜はそう評した。
それを褒め言葉と理解したセージュははにかんで悠菜にぺこりとお辞儀をした。
「――それにしても」
悠菜はどうしても納得出来ない。
「なんで……ボンデージがダメでメイド服ならいいのかしら？」
そうぼやく悠菜の後ろで、宮中女官団専用エプロンドレスに身を包んだセージュが、エプロンの裾をつまんだりして、鼻歌交じりで喜んでいた。
「……納得いきません」

第五十九話

「えっと――ここのカドを曲がって、次のタバコ屋さんのところを右折して」
地図を見ていた悠菜がそう呟いたのは、第四層の半ばまできた時だ。
「何、言ってるんですか？」
「えっ？三丁目の」
「何の地図見てるんですか！何の！」
「これ」
悠菜が綾乃（ティアナ）に渡した地図には、世界地図と書かれていた。
「――これで、何をしようと？」
「すごいでしょう？」
悠菜は自信満々に答えた。
「これがあれば、地球上で迷子になることはないんですよ！？」
「なりますよ……絶対」
綾乃（ティアナ）は額に手を当てた。
「ホント、何を考えるんですか」
「その言い方、止めてくださいよ」
「言いたくなるんですよ。大体、三丁目とかタバコ屋なんてどこに」
「心の目で見るんです♪」
綾乃（ティアナ）はこめかみの横で指をクルクル回した後、セージュに告げた。
「行きますよ？」
「はい」
「あっ、その前に」
悠菜がどこからか取り出したのは、スプレー缶だ。
「記念と挑発を兼ねて」
シューッ。
悠菜は、何事かを壁にデカデカと書き上げると、言葉の意味がわ

からず、首を傾げる綾乃（ティアナ）とセージュに言った。
「これでいいです――行きましょう」
「なんて書いたんです？」
「敵を混乱させるおまじないです♪」

悠菜の言うおまじない。

それは、確かに効いた。

「なっ――なっ！」
肩を振るわせるのは美奈子だ。
「何よあれはぁぁぁっ！」
美奈子の怒鳴る先。
そこにあるのは、壁に書かれた文字。

桜井美奈子のバカ！

そう、書かれていた。

「ははっ……子供じみた挑発だ」

グリムはそう笑うが、

「バカって言った方がバカなんだからねっ！？」
美奈子は完全に怒ったままだ。

「そんな子供みたいな」
「うっさい！」
美奈子は怒鳴った。

「バカにバカって言われる屈辱、わからないわけじゃないでしょう!?」
「なんとなく」
この子にも困ったものだ。
グリムは、顔を真っ赤にして怒鳴る美奈子から視線を外した。
普通にやってくれれば、軍師として申し分ないのに、水瀬という男の子が絡むと、どうしてこうも理性を忘れるんだろう。
これでは――
「？」
視線を美奈子に戻したグリムは、美奈子の変化に気づいた。
「美奈子さん？」
「……」
美奈子は、頭を抑えながら蹲っていた。
グリムがのぞき込んだ顔は蒼白。
歯を食いしばって何かに耐えている。
「頭痛――ですか？」
美奈子は無言で頷いた。
まずいな。
グリムは舌打ちした。
美奈子の頭痛。
その理由は、グリムには明らかだ。
連続した憎しみの種の摂取による副作用。
このままでは美奈子は、脳の血管を破壊されて廃人になる。

やむを得ない。

グリムは言った。

「美奈子さん。横になっていてください。これからは我々が。……おい」

「……」

コクッ。

美奈子は頷くと、オペレーターの肩を借りて部屋を出た。

「……役立たずが」

グリムはその背に吐き捨てる様な言葉を、聞こえないように投げかけた。

「あの程度で使い物にならなくなるとは」

しかし、その口元が歪んだ。

「――まぁ、いい」

モニターの向こうでは、人間達は撤収にかかっている。

迷宮から逃げ出そうとしているのだ。

それこそ、思う壺だ。

「美奈子さんは、やるだけやってくれました」

そう。

ここまで敵を翻弄してくれたのは、彼女の功績以外の何者でもない。

だから、その功績に免じて、殺すのは先延ばしにしてやろう。

もしかしたら、まだ、使えるかも知れないのだから。

「美奈子さんは、例の部屋に閉じこめてください。水と食料だけ与えて」

「グリム様」
オペレーターがグリムの報告したのは、その時だ。
「第八層の警報が作動しました」
「第八層？」
「“原料”の搬入口付近です」
「……“原料”が逃げ出したのですか？」
「監視員は何も確認していません」
「誤報ですか？」
「調査させましょうか？」
「いえ」
グリムはそう言った。
「大した驚異にはならないでしょうから」

もし、この時、美奈子がいれば。
彼女ならどうしたか？

徹底的に調査させたろう。

“原料”――つまり、妖魔化される前の動物達を運び込む場所。
つまり、地上からの直通ルートなのだ。
そのルートで警報が作動した。
それがどんな危険性を持つか、グリムは理解していなかった。
否、しようとしなかった。
それが、グリムと美奈子の違い。
――グリムは、この時の軽はずみな決断を、後に死ぬほど後悔することになる。

「それより、“あの連中”は？」
「第四層リンク・ポイント前にすでに待機中」

「――よろしい」
グリムは頷いた。
「さぁ。私に楯突いた代償を、その血肉で支払いなさい」

「……」
「……」
「……」

第四層から第五層に通じるリンク・ポイントのある部屋。
そこは広間になっていた。
少なくとも、地図ではそうだ。

所が――

「あのぉ」
悠菜が思わず言わずにいられなかったのは、そこが広間とは思えなかったからだ。
雑多な家具が壁一面に持ち込まれ、毛足の長い絨毯が敷かれた床には、脱ぎ散らかされた洋服と酒瓶、雑誌、お菓子の袋が散乱して、足の踏み場もない。
総じて、感覚的には、元々の広間の半分もない。
しかも、その真ん中には、クイーンサイズのベッドが４つ並んでいて、それぞれに誰かがひっくり返ってくつろいでいた。
冗談抜きで、迷宮にあるべき空間ではなかった。

「こちらは？」
悠菜の困惑した声に気づいたのか、ベッドの上でひっくり返って雑誌を読んでいた少女が起きあがった。
「あら？やっとご到着ですの？」

「遅くなりまして……」
「もうっ。待ちくたびれましたわよ？」
雑誌を顔からどけたその顔は、セージュには忘れようのない顔だった。
「シェリスさんっ！」
「ふふっ。セージュ、ご無沙汰ですわね」
それは、嫣然と微笑む魔族の娘――シェリス達だった。
「――っ！」
義父の敵（かたき）を前に、身構えるセージュだが、
「……どなた？」
綾乃（ティアナ）のその真顔の一言は、シェリスどころかセージュまでを凍り付かせた。
「――本気で言ってるのですか？」
「ああ――その引きつった顔で思い出しました」
「何よりです――前回、あの時は、とんだ頂き物、感謝してもしきれないほどで」
「わざわざお礼に？」
「ええ――たっぷりと」
「金銭以外の受け取りは謝絶いたしますわ？」
「宝石でも？」
「鑑定書付きでしたらよろこんで♪」
「私達が、何の対策も考えずにノコノコ出てきたというのですか？」
「違うのですか？」
「――っ。……ホホッ。お姫様は相変わらず辛辣ですコト♪」
「真実を口に出しただけですが」
「――トコトン、ケンカを売っていらっしゃるのね？」
「当然です」
綾乃（ティアナ）は眉一つ動かさずに言った。
「あなたにはいろいろと恨みが」
「学友である私が、昔を思い出していただこうと、せっかく」

シェリスは残念そうに言った。
「当時の姫様のお部屋を、このように再現して差し上げましたのに」
「こ、これが――」
「お付きの女中達がいなくなった寮の部屋はこんなものだったじゃないですか。――少し、というか、まだまだ汚したりない気はしますけど」
あきれかえった悠菜とセージュの視線が突き刺さる中、綾乃（ティアナ）は怒鳴った。
「こんなに汚くないですっ！」
「あら？脱ぎ散らかした服が雪崩を起こして、そこにまる一日埋まっていたのはどなたでしたか？」
「か……過去の汚点を！」
「ほら。本当のことだった♪」
シェリスはしてやったり。という顔で微笑んだ。
「シェリス……」
しぇぇぇりぃぃぃぃすぅぅぅぅ
この方が正しい発音で相手を呼んだ綾乃（ティアナ）の顔は、今や牙を剥き、角を生やし、髪を逆立てるという、常軌を逸した恐怖によって染まっていた。
普通なら、顔を見ただけで即死は免れない。
いや、般若や夜叉と一緒に「怖い顔」コンテストでも開こうものなら、得票率１００％で優勝できるだろう。
「ホホッ。姫様ったらスゴい顔――そこの方、そうは思いません？」
「えっ？」
シェリスの視線の先にいるのはルシフェルだ。
そのルシフェルが、とっさに悠菜を楯にして逃れたのも無理はない。
「ず、ずるい！」
「そう思いません？」

「……えっと」
聞いて欲しくない。
顔にそう書いてある悠菜は、恐る恐る綾乃（ティアナ）の顔を見ようとして、即座に顔を背けた。
「――ふふっ。ほぉら。スゴい顔ですわ♪」
勝ち誇ったシェリスの声を受け、綾乃（ティアナ）は無言で悠菜の顔を両手で鷲掴みにした。
ガジッ！
……メリメリメリ
「痛い痛いっ！」
綾乃（ティアナ）の爪が頬にめり込む中、悠菜は悲鳴を上げた。
何とか顔を背けようとするが、綾乃（ティアナ）の、悠菜の首の骨をねじ曲げんばかりの腕力がそれを阻止してしまう。
「私――怖くないですよね？」
「こ……」
メリメリメリ
悠菜の顔を掴む力が格段に上がった。
悠菜は、自分の頭蓋骨が悲鳴を上げるのを確かに聞いた。
「ゴワグナイデズ……」
「――よろしい」
綾乃（ティアナ）は、冷たく悠菜を突き飛ばすと、シェリスに向き直った。
「とにかく」
綾乃（ティアナ）は剣を抜き払った。
「あなたには、この場で立ち会っていただきます」
「――姫様と？」
余裕の表情を浮かべるシェリスの口元が残虐に歪んだ。
「仇討ちです」
シェリスの眉が、わずかばかり動いた。
「ガールフ男爵殺害は、シェリス、あなたの仕業と断定されています」

「――それで？」
「ガールフ男爵が養女、セージュ・フローラ・フォン・ガールフが義父の仇を討たせていただきます」
セージュが、サイズの柄を握りしめながら、シェリスを睨む。
「なお、この仇討ちに関し、私ことティアナ・ロイズール・トランシヴェールと、ユーリ・ラスフォルテ、ルシフェル・ナナリ・ミナセの三名が助太刀となります」
綾乃（ティアナ）はシェリス達を睥睨するように一瞥した後、
「そちらも４名。これで正々堂々戦えます――尋常に勝負！」
「ぷっ」
綾乃（ティアナ）の口上を聞き終えたシェリスは、途端に吹き出した。
「なっ、何がおかしいというのですか！」
綾乃（ティアナ）は激高して怒鳴った。
「あなた、どこまで礼儀をわきまえないのです！」
「だ……だって」
腹を押さえながら笑い続けるシェリスは、苦しい息の下で言った。
「仇討ちって、姫様、本当に意味わかってます？」
「？」
「助太刀が仇を殺せば、仇討ちは無効。そうですよね？」
「……」
その意味がわかった綾乃（ティアナ）は肩を振るわせた。
「セージュにあなたが討てるはずがないと！？」
「その通り」
シェリスは鼻で笑った。
「そのドン亀ちゃんが私を殺す？出来るもんですか」
その目は本気。
「！！」
一瞥されただけでセージュはすくみ上がった。
「ふふっ？セージュ？言ってご覧なさい？」
セージュに語りかけるシェリスの甘く淫靡な声色が、綾乃（ティアナ）の神経

に障った。

そして、驚愕の言葉が、シェリスの口からこぼれた。

「あなたの純潔は誰に捧げたか」

「！！」

綾乃（ティアナ）の目が見開かれ、呆然とした表情で、泣き崩れるのを必死に堪えるセージュを見つめた。

「よってたかって私達に嬲られ、歓喜していたのが誰か」

弱者を嬲ることに快楽を見いだす者の目でシェリスは続ける。

「泣いてここに」

シェリスは自分の下腹部を面白そうに叩いた。

「“オモチャ”を入れてください。っておねだりしたのは誰か」

「シェリス……」

「私を“ご主人様”って呼んで、私の靴を舐めたのは誰？」

「……やめなさい」

綾乃（ティアナ）の声は完全に殺気立っていた。

かつて、シェリスとセージュの間に何があったか言われなくてもわかる。

いわゆる“いじめ”という名の虐待。

しかも、相当な性的虐待が繰り広げられていたことは、言葉の端端から明白だ。

「校内を裸で引き回されることに悦びを見いだしていたのは誰？」

「やめなさいと言った！」

ドンッ！

綾乃（ティアナ）の一撃が、部屋を構成していたあらゆる家具を吹き飛ばした。

「ふふっ……その格好、最愛のお姫様の奴隷になっちゃった？ご主人様のお許しもなく」

防御魔法でその一撃を凌いだシェリスは、まだセージュを言葉で嬲ることを止めない。

「シェリスッ！」

綾乃（ティアナ）の制止さえ、全く耳には届いていない。

「あなたは私の奴隷――――ううん？」

シェリスはあのムチを抜きはなった。

「あなたは私のオモチャなんだから」

「シェリスっ！この子は――――！」

「ふふん？没落貴族同士、傷を舐め合ってあげただけ。あなたはその体で男爵の情婦（イロ）になったつもりでしょうけど」

シェリスの周囲から忍び笑いが響く。

「どう？あんなジジイに抱かれた感想は。――――女同士よりよかったかしら？萎びたナニをどうやって元気にしていたか、そのテクは聞かせて欲しいものですわ？」

「義父さまは……」

セージュは震える声で、何とか義父の名誉を守ろうと声を上げた。

「義父様はそんな方ではありません！」

「へぇ？」

「義父様は、私に親切にして下さいました」

没落貴族の娘として、何とか通わせてもらった学校。
そこで受けた虐待。
唯一の救いが、ティアナという存在。
ただそれだけだった。
だが、その存在が卒業によって消えた。
そして、仕送りをしてくれた母が死に、孤児となったセージュは生徒としての資格まで失った。
ティアナの援助はあったが、セージュは退学した。
学費の問題だけではない。
ティアナがいなくなってからエスカレートしたシェリス達の虐待から逃げるために。

「学校を辞めて、働いていた私を娘として可愛がって下さったんです！養女にまでして下さったんです！」
セージュは涙をためながら怒鳴った。
「優しい方だったんです！それを――――どうして！」
「……あんたって、ホントにバカ」
ペッ
シェリスは唾を吐いた。
「どうしたらそこまでバカになれるのかしら？いい？その足りないオツムにもわかるようにハナしてあげる。
――――何故殺した？
決まってるでしょう？
私達の金儲けを邪魔するんだもの。
いわば罰を私達は下した！
それだけよ！
命なんてね、この世界じゃ一番値引きが効く、一番価値のないものなんだから」

「そんな理不尽なこと……」
「あーっ！もうメンドくさいっ！」
シェリスはイライラした様子で吐き捨てた。
「よーするに、あんたは私を殺しに来た！なら、私が返り討ちにすればいい！それだけでしょう？――メンドくさいのって大っ嫌いなの！大体、何で私がアンタと倫理について討論しなきゃなんないワケ！？それこそふざけてるわ！」
「……そ、それでも」

「はいはい」

パンパン

広場にそんな音が響く。

先程の攻撃で吹き飛ばされたと思ったベッドが一つだけ残っていた。
そして、その上には未だ一人、寝転がって本を読んでいた。

「全く」
手を叩きながら起きあがったのは、どう見てもまだ１２歳位の、小さな女の子だ。
あどけない顔立ちはしているが……。

「子供じゃないんですから、もっとオトナの議論をなさい」

「そ……それは」
シェリスは背筋を正した。

「シェリスさん？感情が先走っては長生きできませんよ？」

「猛省いたしますわ」

「よろしい」

少女は、ベッドから降りると、シェリス達と綾乃（ティアナ）達の間に割って入った。

「魔界・天界双方で定められた仇討ちならば、それらしく振る舞いなさい」

もとより、綾乃（ティアナ）達に異存はない。

父殺しの仇を討つというセージュにこそ大義はある。

その大義を果たすことに何の躊躇もいらないのだから。

しかし――

そろ～～っ。

何故かその場から逃げ出そうとする者がいた。

悠菜だ。

「……」

女の子は、悠菜が逃げ出そうとするのを認めると、右手を振り上げ、振り下ろした。

「！？」

それだけで、何故か悠菜は後ろに引き倒された。

見る者が見ればわかる。

悠菜の襟首には釣り針が引っかかっていた。

「ユーリ？」
女の子は、釣り針のついた糸を引きながら、厳しい声で言った。
「それともユーナかしら？」
「ゆ、悠菜です」
「そう？」
ニコリと笑う女の子は、一気に糸を引き、悠菜は宙を舞った。

ドスンッ！
……ズルズルズル

女の子の前まで引き出された悠菜はそれでも逃げようとする。

その後頭部を、

ゲンッ！

女の子は情けのカケラもなく踏みつけた。

「あいさつもなしとは――――私、そんな教育を施した覚えなんてありませんよ？」

教育？

綾乃（ティアナ）はその言葉に引っかかった。
否。
初対面のはずなのに、この女の子を、自分は確かに知っていた。

「この不届きなバカ弟子」

「あっ！」
綾乃（ティアナ）はそれでようやく、女の子が誰か思い当たった。
「あ、あなた！」
女の子は、驚く綾乃（ティアナ）を無視して、悠菜を抱きかかえると、そのズボンをパンツごとずり降ろした。
「お知り合い？」
事情がと言葉がわからず、ただ躊躇するだけのルシフェルに、綾乃（ティアナ）は無言で何かを手渡した。
金のイヤリングだ。
青い宝石がちりばめられており、デザインと細工は見事の一言に尽きる。
「翻訳装置です」
「最初から渡して」
「高いんですよ？」
悪くないな。
そう思いながら、ルシフェルはイヤリングを耳につけた。
途端、ルシフェルは悠菜と女の子やりとりの意味がわかった。
イヤリングをつけるまで、意味不明だった言葉が、すべて英語で伝わってくる。
ベッチン！
ベッチン！
悠菜の悲鳴

悠菜のお尻が叩かれる音。
女の子の罵声。
肝心なのは、女の子の罵声だ。
信じられない。
ルシフェルはそうとしか思うことが出来ない。
何故？
簡単だ。
どう考えても相手は悠菜より圧倒的に年下。
それが――――
「な、何の冗談？」
ルシフェルは綾乃（ティアナ）に訊ねずにはいられない。
「無理もないですが」
綾乃（ティアナ）は悠菜達から視線を外さずに答えた。
「彼女を、人間の年相応に見るのは、少なくとも天界では絶対的タブーです」
「天界？」
「あの人は神族ですよ」
「神族が、魔族と！？」
「あの方は元天帝近衛軍……確か大将にして、魔導教官です」
「魔法の先生？」
「そうです――――“天界の人形”の育成が一段落した後に、人間界から離脱。長期休暇中とか」

「よく、わかんないけど」
「私もわかりません」
綾乃（ティアナ）も困った顔をした。
「気まぐれな所がおありの方だと聞いてはいましたが」

ベッチン！
ベッチン！

「ごめんなさい！イツミさん！痛いですぅ！」
「お師匠様！」
ベッチンッ！
「ごめんなさい！お師匠様ぁ！」
「折角育ててあげたのに！不始末ばっかりで！私の顔にどれだけ泥を塗れば気が済むの！？」

イツミ・トーア・アマテル
現役の天帝近衛軍大将。
天界侯爵令夫人。
そして――
水瀬と悠菜の魔法の師匠が、すっかり赤くなった弟子のお尻を容赦なく叩く音が、広場に響き渡っていた。

第五十九話（後書き）

……まぁ、イツミの元ネタはライトノベル好きな方にはいわずともわかる……かな。

外見と名前の一部を借りました。

オリジナルはもっとマトモ系のはずです。

つーか、続編希望っ！

第六十話

「さて」
ぐったりした悠菜を放り出し、イツミは立ち上がった。
「こんなことしてる場合じゃないものね」
「い、イツミ殿？」
綾乃（ティアナ）が恐る恐る訊ねた。
「あの……どうなさるおつもりで？」
「どうされたいの？」
「そう、きっぱり訊ねられると、逆に答えづらいんですけど」
「要するに、仇討ちでしょう？」
イツミは、セージュに声をかけた。
「仇討状を拝見」
セージュは、エプロンドレスのポケットから、袱紗に包まれた包みをイツミに差し出した。
「天界、魔界共通の仇討許可状――発行は魔界帝室……グロリア陛下直筆ね」
包みの中身、つまり書状を改めたイツミが言った。
「わかりました――仇討ち対象はシェリス・レージュ・フォン・ガードナージュ。仇討ち執行はセージュ・フローラ・フォン・ガールフ。間違いないですね？」
「……出てるんでしょ？」
シェリスは不機嫌そうにそっぽを向いた。
「間違いありません」
セージュは震える声で頷いた。
「よろしい」
イツミは書状を袱紗に戻しながら、周囲の全員を見回した。
「助太刀は双方3名まで――名乗りを上げて」
「セージュ殿助太刀、魔界帝室第一皇女ティアナ・ロイズール・ト

ランシヴェール」
綾乃（ティアナ）はちらと悠菜達を見た。
「天界天帝親衛軍所属、現・人間界大日本帝国日菜子皇女お預かり、デミ・ユーリ・ラスフォルテ……水瀬悠菜と、その姉、ルシフェル・ミナセの3名」
「――そちらは？」
「ミーティア・スカーレット・ガラシャ」タキシード姿の女の子が小さい声で言った。
「ルーシー・エマーラ・ファンテング」黒ずくめの女が冷たい声で名乗る。
「――そして、あなた」
シェリスの勝ち誇った視線を受けたイツミが、目を丸くした。
「私？ダメダメ」
「――は？」
「立ち会いだもの」
「用心棒、引き受けていただいたのでは？」
「用心棒が仇討ちの助太刀なんてするものですか」
「そ、それでは――」
シェリスが困惑のあまり言葉を失った。
すると、ルーシーが何の感情もないような声で言った。
「それでは、こちらが3、あちらが4となり、こちらが不利です」
「……成る程ねぇ」
イツミは綾乃（ティアナ）達を見てため息をついた。
「魔界の暴れん坊女将軍、天界のバカ人形……ヴォルトモード卿撃破の凄腕……確かにねぇ」
「いろいろ……ひっかかるんですが」
「王女？心は寛大に」
「寛大でも受け止めがたいものが……」
「ふむ」
ぽんっ。

イツミは手を叩いた。
「こうしましょう♪」
「な、なんだか……スゴイ、イヤンな予感が」
お尻に治癒魔法をかけていた悠菜の顔が青くなった。
「ユーナ」
「は、はい」
「いつまでパンツ下げてるの！みっともないでしょう！？」
「痛くて履けないんですっ！」
「情けないっ！」
「情けなくしたのは誰ですかっ！」
「師匠にケンカ売るつもり！？」
「真実ですっ！真実っ！」
「あの！」
たまらず割り込んだのは綾乃（ティアナ）だ。
「お話が全然、進まないのですが！」
「そうね」
少しだけ赤面したイツミがわざとらしい咳払いの後、言った。
「コホンッ――立ち会いを二人にします。つまり、ユーナ。立ち会いと別に、私が相手してあげる♪」
「へ？」
悠菜の顔色が白くなった。
「いろいろ経験したみたいだから、そっちとは別にね？」
「い……イヤです」
悠菜の顔はもう泣き顔だ。
「ぐちゃぐちゃいわない――死んでいたら別だけど？」

そっ。

悠菜が取り出したのはスケッチブック。
そこには、

死んでます。

そう、書かれていた。

「……」

「死んでますよぉ？」

悠菜は泣きながらそう呟いた。

どんっ！

悠菜が魔法攻撃の直撃で吹き飛ばされた。

「ったく！情けないの程があるわっ！？徹底的にその螺旋階段みたいなねじくれ曲がった負け犬根性、たたき直してやるっ！」

「……あの」

ルシフェルがそっと綾乃（ティアナ）の袖を引っ張った。

「水瀬君が、ああいう性格になっちゃったのって」

「はい」

綾乃（ティアナ）は、ため息混じりに答えた。

「元からもあるでしょうけど……ああいう人の元で育ったからではないか、と」

「親って――大切なんですね」

「生みの親より育ての親です」

「し、死んじゃいますよ！？お師匠様っ！」

「もう死んでますって言ってきたクセにっ！」

「イツミ様っ！」

悠菜の胸ぐらを掴み上げたイツミに怒鳴り声を浴びせたのは、なんとセージュだ。

「遊んでいないで、早く進めてくださいっ！」

「ご、ごめんなさい」

ったく、悠菜のせいでとんだ恥かいたわ。

そうぼやきつつ、イツミは告げた。

「古き良き慣例に基づき、これより仇討ちの儀、始めます」

「仇討ちにルールがあるとすれば一つだけ」

セージュ、綾乃（ティアナ）、ルシフェルが、シェリス、ミーティア、ルーシーの三人と対峙する中、イツミは朗々と語り出した。

「正々堂々殺し合うこと――――それだけです」

双方は無言で頷く。

「仇討ち、返り討ち、いずれの結果となろうとも、対象者、執行者のいずれかの死亡と認定される必要があります」

セージュは、手にしたサイズの柄を、何度も握り直す。

シェリスはあのムチを楽しげに揺らせている。

「武器は何でもご自由にどうぞ――――では」

イツミが右手を上げた。

「はじめっ！」

先手をとったのはシェリスだ。

二股のムチがうなりを上げてセージュに襲いかかる。

ギインッ！

それを、綾乃（ティアナ）の魔法が弾く。
「セージュ！――ちっ！」
セージュの前に出ようとする綾乃（ティアナ）の前に、ルーシーとミーティアが立ちふさがった。
二人の手には槍が握られている。
「姫様のお相手は」
「私達が」
「どきなさいっ！」
綾乃（ティアナ）の手から魔法の矢が放たれる。
ドドドンッ！
すさまじい爆発音。
「なっ！？」
その爆発の背後には、平然と立ちふさがるルーシーとミーティアの姿がある。
「無駄です」
ミーティアが言った。
「前回同様、この部屋には姫様の魔法を無効化する魔法が」
「――っ！」
その二人が、瞬時に左右に跳んだ。
二人のそれまでいた場所を横切った黒い影。
ルシフェルだ。
「人間ふぜいがっ！」
ドンッ！
ギィンッ！
ルーシーの手から魔法が放たれ、ルシフェルの防御魔法がそれを弾く。
「このっ！」
ミーティアが側面からの魔法で襲う。
「二方向からならっ！」
ルーシーと対峙するルシフェル。

その側面は、ミーティアからすればがら空きだ。
ミーティアは、そのがら空きの的めがけて自らの知る最大級の攻撃魔法を放った。

人間なんて――ちょろいっ！

ルシフェルは、視線をルーシーに向け、決してミーティアを見ていない。
その隙を突くだけだ。
魔法が命中するわずか前。
ルシフェルの体から、何かが離れた。
魔法を反射してきらめく光。

――鏡？

ミーティアがそう思った次の瞬間――

ルシフェルの体を、ミーティアから覆い隠すように黒い空間が生まれ、攻撃魔法はその中へと吸い込まれていった。

「なっ！？」

何が起きたの？

その言葉は、ミーティアの口から漏れることはなかった。

ミーティアは、突然、背後から襲われた魔法攻撃に、その体を焼かれた。

「ギャッ！」

空間魔法だ。

――人間は、空間をねじ曲げて、自分の側面と私の背後をつなげ、攻撃魔法を私にぶつけたんだ。

遠ざかる意識の中。

ミーティアは正しい答えを導き出したことにだけ、満足して息絶えた。

「ミーティア！」

ルーシーの悲鳴が室内に響き渡る。

さっきまで元気に動き回っていたのに、今では黒こげになり下がった友。

ルーシーの目の前で、炭化した亡骸が光を放ちながら崩れ落ちていく。

「き、貴様ぁぁぁぁぁっ！」

ルーシーは魔法の針を乱射しつつ、ルシフェルめがけて突撃した。

敵は防御魔法で針を凌ぐしかない！

接近して串刺しにしてやるっ！

ルーシーの持つ槍は防御魔法を打ち抜く特殊魔法がかけられた槍――楯砕（たてくだき）。

魔界では一般的な魔法だが、人間相手なら驚異の代物。

人間が明後日の方向に魔法の矢を放った。

「そんなことでっ！！」

人間界に無知なルーシーは、自分が目の前の人間を何度も串刺しにしてなぶり殺しにする光景を想像し、防御魔法に槍を突き立てた。

その瞬間――

ズンッ！

ずしゃっ！

背中から胸にかけてと、首に焼けた鉄棒を押しつけられたような、鈍い痛みを感じた。

「――――えっ？」

何が起きたかわからない。

ただ――――

恐る恐る見た胸元に、巨大な穴が開いてるのが見えた。

何が？

その答えを、ルーシーは知ることが出来なかった。

何が――――起きたの？

呆然とするルーシーの首が除々に空洞のあいた胴からずれていき、地面へと落下を始め、盛大な鮮血のシャワーが、ルーシーの首への花束として吹き出した。

「さすがですね」

魔族二体を、難なく倒したルシフェルに、ルーシーの首をはねた綾乃（ティアナ）は言った。

「私の一撃なんて、必要なかったようですね」
「ううん――――感謝」

空間を自在に操る鏡魔法（きょうまほう）。
別名・空間制御魔法。
ルシフェルの得意技だ。
ミーティアを自滅に追い込んだ「空間歪曲」。
魔法攻撃をねじ曲げ、明後日の方向からの攻撃を可能にする「魔法反射」。
よほど熟練した者でも、その驚異から逃れるのは至難の業だ。

「ともかく、助太刀には感謝します」
「いい」
ルシフェルは、剣を戻しながら言った。
「後で水瀬君からたっぷり、ふんだくるから」
たっぷり。という言葉を強めるルシフェルに、綾乃（ティアナ）は苦笑した。
「ふふっ――――意外と強欲なのですね？」
「他に対価として求められるモノがないだけ」
ルシフェルは表情を変えず、綾乃（ティアナ）に告げた。
「それとも、あなたに求めて良いの？」
「何がお望みですか？」
「――――わかんない」
ルシフェルは、綾乃（ティアナ）に言った。
「とっておいて？その時になったらお願いするかも」
綾乃（ティアナ）は肩をすくめた。
「覚えておきます」

「このぉっ！」
ムチがうなりをあげてセージュを襲う。

まっすぐにセージュの喉めがけての一撃。
セージュは頭をそらすだけでかわし、タイミングが遅れて側頭部を襲ってきた二本目をサイズで弾いた。

「セージュのクセにっ！」

シェリスは徐々に焦り始めていた。
彼女の知っているセージュとは、いつもオドオドしていて、見るだけでイライラする。
憂さ晴らしにいじめてやるのが丁度お似合い。
そんな子だった。
そんな子が、
ビュンッ！
ビュンッ！

自分の攻撃をいともたやすく避け続けている！
シェリスには、それが納得出来なかった。

「避けるなっ！」

「――――っ！」

一本のムチをセージュのサイズが捕らえた。
ムチが切断され、先端に仕込まれた棘付の鋲が吹き飛ぶ。
「この――――このぉっ！」
シェリスはムチの柄を操作した。

「っ！？」

セージュの目の前で、ムチが変化した。
単なるしなやかで細いムチだったのに、いまでは薔薇ように無数の棘が乱雑に突き刺さる太いムチに変化していたのだ。

「一撃でも喰らったら、治癒魔法も効きませんわよ？」
シェリスはムチをふるって床を叩いた。
パンッ！
軽い音が響き渡るだけ。
それなのに、床石が粉々に砕け散った。
「これ――――味わってみる？」

セージュはサイズを構えながら、精一杯の迫力でシェリスを睨み付けた。

「ふふっ……戻っていらっしゃいな」
嫣然とした目でシェリスは言った。
「戻ってきたら、楽しい快楽の日々が待ってるわよ？」

「わ、私は――――」
セージュは言った。
「私はあなたのおもちゃじゃありませんっ！」

「――――そう」

ムチが空を切り裂いた。

「っ！！」
セージュが跳び下がるが、ローブが切り裂かれた。
先程までかわしていたのに、間合いが違う！
間合いを――――間合いを！

そう思った、次の瞬間――――

「ぐっ！」

セージュの体がくの字に曲がった。

腹にムチが命中したのだ。

一瞬、意識が遠のいた。

「――ほら痛い思いする」

シェリスは楽しげに言った。

「ホントに、あなた達ってバカよね」

あなた――達？

セージュは崩れ落ちそうになるのをなんとか堪えた。

「こんな痛い思いして、それでも何で戦うの？」

「……」

「男爵だって、爵位持ちなのに、あんな仕事仕事で奥様に離婚されて、本当の娘の死に目にも会えず」

その声が、軽蔑に満ちあふれているのは確かだ。

そして、セージュはそれでわかった。

あなた達。

それは自分と義父のことだと。

ギュッ。

セージュはサイズの柄に力を込めた。
「それでもなんで、戦うのよ。バカじゃないの？」
「……」
「何熱血してるのよ。アホらしい」
「それでも――」
セージュは答えた。
「そういう生き方だってあるんです」
「私はイヤよ」
シェリスはそっぽを向いた。
「楽して生きるの。面白おかしく。必要なのはお金だけ♪邪魔者は殺すの」
「だからあなたは、義父様まで」
「ええ」
シェリスは当然。という顔で答えた。
「そのために――お金のために親まで殺した私だもの」
「っ！！」
「ふふっ……セージュ？教えてあげる」
シェリスは微笑みを崩さずに言った。
「私はね？体を売らされたのよ？――実の親に」
「っ！？」
「貴族って肩書きだけ。財産切り売りして生活するような家だった――それでもお金がなくなったらどうしたと思う？

――売ったのよ。
実の娘の体を。
いまでも今でも覚えているわ。
子爵家の娘の純潔売りますって――イヤらしい男共の前に全裸で立たされたあのオークションのこと」
シェリスはそっと自分の下腹部を撫でた。
「妾の娘だから問題ない――私のタネを母様に仕込んだバカにそう言われた私の純潔。いくらだったと思う？」
「……シェリスさん」
「１０枚。金貨１０枚よ」
「……」
「笑っちゃうわね。――今となっては。高級娼婦だって一晩金貨１００枚よ？子爵家の血を引く娘の純潔が――たかが金貨１０枚なんて！」
ひとしきり笑ったシェリスは、冷たい目になった。
その目は、セージュを見ているのか、自らの過去を見ているのか――何を見ているのか。セージュにはわからなかった。
「それから毎晩毎晩――学校に上がる前の体で一晩金貨２０枚。知ってる？純潔の時、どうしてそんなに安かったか。――痛がって使い物になるかわからないから、特売だって！」
シェリスの口元が歪んだ。
「フフッ……学校に入っても、事ある毎に呼び出された。外泊して、一人で寝た事なんてない！――おかげでこんな精液臭い体になった！」
「そ、それでも」

「汚らしい精液を体に注がれる度に、私は思った！“お金さえあれば、ここから逃げ出せるのに”って！そして！！」

「っ！！」

セージュの目の前で、シェリスの攻撃魔法が火を吹いた。

「私がこんな地獄を味わっているのに！あんたみたいなのが、何にも知らずに、のほほんってやってるのは、間違っているって！」

ビュンッ！

シェリスのムチがうなりを上げてセージュを襲う。

「だから私は――――最後には実の娘に襲いかかってきたあの男を殺し！あんたを嬲った！それの何が悪いのよ！」

シェリスの猛攻を紙一重でかわすセージュ。

その彼女にシェリスは憎悪の眼差しを向け続けた。

「私だけ！私だけが苦しみ続けるなんて間違ってる！私にだって！！」

「まだやり直せますっ！」

「精液と血にまみれたこの体で――――」

ムチがサイズの石突を破壊した。

「何をやり直せるっていうのよっ！」

「！！」
石突を破壊された衝撃で、セージュの手からサイズが吹き飛び、セージュはその場に尻餅をつく格好になった。
「甘いこと言わないでよ！世の中そんなに甘くない！男爵家に拾われたあんたにはわかんないでしょうけどね！」
サイズが石壁に突き刺さった。
シェリスの目には、セージュには戦う手段が残されていないように見えた。
「……これで終わりよ」
シェリスは勝ち誇った顔でセージュに告げた。
「さぁ――命乞いなさい。泣いて許しを乞いなさい！あの晩の私のように！あの時のあなたのように！
かなうことなき許しを！！」
「あなたは、人を憎むことしか知らないんですかっ！？」
「そういう中で生きてきたのよ！」
「っ！」
セージュがかろうじてムチから逃れた。
「入学したての時、ご飯を食べるお金さえなかった私を食事に誘ってくださったのは、あなたじゃないですか！」
「気まぐれに決まってるでしょう！？」
「あの時――」
ムチをかわし続けるセージュの瞳から涙がこぼれた。

「私、あなたとお友達になれたと思ったのに！どんなことされても、友達だって信じてたのに！」
「ここまでされて人を信じる甘ちゃんが！」
ガンッ！
ムチがセージュを追いつめていく。
「さぁっ！友情を確かめるためにここまで来たんじゃないでしょう！？あなたには私を憎む理由がある！私が憎い！」
「違いますっ！」
「憎くなかったら、何故仇討ちなんていいだしたっ！」
「――――っ！」
「金？男爵家の遺産が欲しくて――――家督相続のため！？金のためっ！？」
「違うっ！」
「違いはしないっ！」
セージュはついに壁まで追いつめられた。
そのメイド服はもうボロボロだ。
「それ以外の何の理由があるの！？この偽善者！」
「私は――――私は！」
「これで終わりにしてやるっ！」
シェリスがムチを振り上げた。
「死ねぇぇぇぇっ！」

今まで、何とかかわしていたムチだが、もう逃げ場はない。
「セージュっ！」
綾乃（ティアナ）とルシフェルが飛び出そうとする。
その前で、セージュは身に纏っていたローブを、セージュの前に投げつけた。
「！！」
ローブによって視界を奪われつつ、シェリスはローブを突き破ってムチを送り込もうと、ムチをコントロールしたが――――

ダダダダダッ！

室内に、何かが破裂する様な音が響き渡った。

「！？」

魔族である綾乃（ティアナ）やシェリスには聞き慣れないその音。

悠菜やルシフェルにはイヤでも聞き覚えのある音。

その余韻残る室内で倒れていたのは――――

シェリスだった。

「グッ……ガハッ……」

うつぶせに倒れる体から流れ出すのは、真っ赤な血。

シェリスは赤い海の中でもがいていた。

「なっ……何を……したの？」

ガチャン

呆然とするセージュの手から落ちた物。

それがサブマシンガンだと知る者は、ルシフェルと悠菜だけ。

「魔界のお城でお会いした人間のお姫様が貸してくださったんです」

セージュは慌てて近づくなり、シェリスに言った。

「“もしかしたら役に立つかもしれません”って――――待ってくださいっ！」

シェリスはポーチから呪符を取り出そうとした。

「止血します！それから治癒魔法で――――！？」

その手を抑えたのは、シェリスだった。
「もう――いい」
シェリスは穏やかな顔でセージュに告げた。
「これでいいのよ」
「よくありませんっ！」
「ふふっ――ここまでしておいて、よくも言う」
「ご……ごめんなさい」
うなだれるセージュは、泣いていた。
「私、確かにあなたを憎んでいた――御義父様を殺したあなたが、憎かった。
それで私――私は！」
「……親を殺されて……憎く思わないなんてどうかしてるわ」
ゴホッ……ゴホッ……
綾乃（ティアナ）とルシフェルが駆け寄る中、シェリスは咳き込むと、口から血を吐いた。
「ふふっ……私こそ、謝らなくちゃね」
「……シェリス……さん」
「あなたが嫌いだったんじゃない……汚れた自分がイヤだった……だから、綺麗なあなたが憎かった……ごめん……なさい」
「いいんです！いいんです！」
セージュは呪符をシェリスの傷に貼り付けながら言った。
「もう、そんなこと！ここで仇を討っても、義父様は還ってこない！義父様が――私が人を殺すなんて望むはずがない！それがわかってて――わかっていて私、私は！」
「ふふっ……」
そっ。
弱々しい手で、シェリスはセージュの髪を撫でた。
「後悔ばっかりでしょう？生きるってことは」
「……はい」
そうだ。

何かしても、
いつだって、
後悔ばっかりだ。
今回は、
その中でも最悪だ！
「でも――――生きるって――――いいことよ？」
「一緒に、生きましょう」
「……バカ」
セージュに手を掴まれたシェリスは、手に落ちるセージュの涙の暖かさを感じた。
「私……逝くわ」

ドンッ！！

シェリスがそう言った途端、地下迷宮が激震に見舞われた。

「何っ！？」
綾乃達（ティアナ）が警戒する中、天井からすさまじい音が響き渡ってくる。
「迷宮が！」

ゴゴゴゴゴゴッ！

「崩れるっ！」
ルシフェルがとっさに防御魔法を展開する。
「早く撤退を！」

「……その壁の向こうに、リンク・ポイントがある」
シェリスは視線を壁にむけた。
「地下５階に通じている――――そこしか逃げ場はない」

「肩を貸して下さいっ！」
シェリスの肩に手を回そうとするセージュだが、
「やめなさい」
シェリスはそれを拒んだ。
「ここで眠りたいのよ」
「ダメですっ！」
綾乃（ティアナ）に肩を掴まれながらも、セージュはそれをふりほどこうともがいた。
「……姫」
「はい」
「これで――――仇討ちは……なりましたね？」
「はい……」
「トドメは……いりません。逃げて下さい。最後位、貴族の子女として、誇りある死を」
「――――さらばです」
「はい♪」
立ち上がった綾乃（ティアナ）を、シェリスは穏やかに見つめるだけ。
「セージュ！」
「いやですっ！」
「ルシフェルさん！セージュを取り押さえて！」
「はいっ！」
「イツミ殿！悠菜様！」

その騒ぎの中でシェリスは目を閉じた。

体の痛みはすでにない。
自分の体の感覚すらない。
宙に浮くような、不思議な感覚の中。

シェリスは最後に夢を見た。

それは、シェリスの人生の中で最も楽しかった子供時代。

妾と嘲られながらも、精一杯生きた母と過ごした時間。

子供のシェリスは、両手一杯に花束を抱え、縁側で椅子に座る母の元に駆け寄る。

母が好きだったお気に入りの場所。

母が好きだった花。

大好きだった母――――

その母の微笑み。

母の優しい手が、シェリスの頭を撫でた――――。

「いやぁぁぁぁぁぁぁっ！」

崩壊を始める第四層にセージュの悲鳴が響き渡った。

「シェリスさぁぁぁぁぁんっっ！」

羽交い締めにされながらも、なんとかシェリスの元へ戻ろうとするセージュ。

精一杯伸ばされた手の先で横たわるシェリス。

「リンク・ポイントは！？」

「生きてますっ！」

「急いでっ！」

その姿を、崩れ落ちる石材が、セージュ達の前から隠した。

第六十一話

●迷宮第五層　リンク・ポイント

迷宮の崩壊により、シェリスの死体は確認されることはなかった。
ただ、立ち会いのイツミが仇討達成の宣言をあげただけ。
仇討ちの中でも最も後味の悪い結末を向かえることになった。

「はいこれ」
イツミが、泣きじゃくるセージュの懐にねじ込むようにして、書状を押しつけた。
「仇討ちの達成は、私が保証してあげる。私のサイン入りだから、問題ないはずよ？」
セージュはそれに答えることすら出来ない。
例え、イジメられていたとはいえ、かつての学友をその手にかけたことは、セージュにはかりしれない精神的ダメージを与えていた。
「……悠菜」
イツミはそんなセージュを突き放すように、悠菜に訊ねた。
「上で、何が起きたの？」
「綺麗なお空に蝶々がヒラヒラしてます……」
イツミの足下に転がる悠菜は、ズタボロの体から弱々しい声を出した。
セージュ達が死闘を繰り広げる中、虐待というべきイツミの“修正”を受けた名残だ。
「お姉さんが、薄くてセクシーな服着て……大股開きで……“カモーン”って……」

ガンッ！

ゲシッ！
ドガッ！

ふわふわふわ……
イツミ、綾乃（ティアナ）、ルシフェル三人からほぼ同時に殴られた悠菜の魂は肉体から離れようとした。

「勝手に臨死体験しないっ！」
ガシッ！
イツミが悠菜の魂を鷲掴みにすると、無理矢理、体に押し込んだ。
「……どういう理屈？」
「禁則事項（ごつごうしゅぎ）の最悪のケースですね……」
「それで復活する方も問題だと思うけど」
あきれ顔の綾乃（ティアナ）達の前で、悠菜が上半身を起こした。

「痛たっ……御父様なら、絶対襲いかかるような絶景だったのに……」
「あの種馬なんてどうでもいい！」
イツミは不機嫌さを隠さない顔で怒鳴るが――
「初対面の時、小学生と間違われたの、未だに気にしてるんですか？」
「とにかくっ！」

絶対図星だ。

全員がそう思う中、イツミは怒鳴った。

「迷宮が崩れたんでしょう？何があったの？」
「人間が」
悠菜がそれに答えた。

「爆破したんですよ――――迷宮を」
「……ふぅん？」
イツミの目は、軍人のそれになった。
「成る程？確かに有効な方法ではあるわね」
「そうですね……」
悠菜は痛むお尻を何とか無視して立ち上がり、辺りを見回した。
迷宮第五層――――
それまでの層より、作りはしっかりしているし、天井も広い。
本来、すべての迷宮がこんな作りになるはずだったんだろう。
悠菜はそう思った。
「それより――――」
悠菜は装備を確かめながら師匠に訊ねた。
「目的は何ですか？お師匠様？」
「目的？」
「何の目的で、シェリスさんに近づき、ここまで来たか――――です」
「別に？」
イツミは小首を傾げた。
「暇つぶしよ？」
「それ――――私が信じると思います？」
「師匠の言葉は神の言葉」
イツミは低い声で告げた。
「――――それを忘れたと、そう言いたいの？」
余計なこと聞くな。
うるさい黙れ。
イツミの言葉の意味は、このどっちかなんだろう。

ついでに――
シバくぞ？
どっちにしても、これだけは避けられない。
「……」
それを知る悠菜は、黙るしかなかった。

●迷宮第五層　通路
「人質が二人？」
「はい」
これまでの経緯を説明していた悠菜は頷いた。
「悠理の友達一人、妹一人」
「……そこまで人質をとる？」
イツミは顎に手をやると、立ち止まった。
「ヘンね」
「えっ？」
「そんな手間、なんでとるのかしら」
「……というか」
悠菜は申し訳なさそうに俯いた。
「私……ううん？悠理もですけど、グリムの目的が今ひとつわかりません」
「……そう？」
イツミは、少しだけ意外。という顔になった。
「戦略の授業、無駄だったかしら？」
「提示された条件から逸脱する一方なんです」
「ふむ……」
確かにそうだ。
イツミもそう思う。
コトの発端は、単に二人を追う死霊。

それだけだ。
なのに、死霊の話が世界樹の葉にまで広がり、今や地下迷宮まで――。
弟子でなくても混乱する。
そう思うイツミは言った。
「全てをつなげることは出来ないかしら？」
「それこそ――空想の世界です」
「そうかしら？」
「えっ？」
「今の話を聞く限り――」
イツミは言葉を紡ぎ始めた。

●地下迷宮　某所

すべては、最初からグリムの計画通りなんだ。
ベッドに横たわる美奈子は、痛む頭を駆使して、その結論に達していた。
空想。
今まで、そうして否定してきたことが真実だと、今わかった。
グリムの目的は一つ。
失敗の取り消し。
それだけなんだ。

そのために、霧島を屍鬼同然にし、屍鬼や死霊を集めた。

想像外だったのは、人間から思わぬ反抗を受けたこと。

そのために、私を誘拐し、こんな地下迷宮まで作らざるを得なかった。

だけど、それは――

「痛っ！」

脳の血管が切れたんじゃないか。

そう思うほどの激痛に、美奈子は頭を抱え、ベッドの上でもがいた。

「な、何で……」

頭を抱えながら、美奈子は呟いた。

「危ないって、考えないかな……自分」

情けない。

美奈子は涙が出るほど後悔した。

誘拐されたというのに、自分を頼ってくるグリムにいい気になった。

グリムの参謀役。

その地位が当然のように思えて、そう振る舞ってしまった。

結局、あの時、クスリを飲まされて……。

「いいように使われて、後はポイってされるの、わかっていたはずなのに」

バカだ。

美奈子はそう思った。

心の底から、そう思った。

「いい気になって……グスッ……あんなことまで考えちゃうなんてぇ」

暖かい涙が枕を濡らす。

もうだめだ。

美奈子にはわかる。

グリムはもう、自分を必要としない。

彼は、世界樹の葉を手に入れてしまったのだから――――

「バカぁ……」

自分の頭を何度も叩いてみる。

痛いけど、何にもならない。

「ご近所の皆様どころじゃないのぃ……」

後悔しても始まらないのだ。

でも、それしか、今の美奈子には出来ない。

「全人類の皆々様に、どうお詫びするつもりよぉ……」

その時、

カチャ

ドアが開いた音がした。

「――――えっ？」

キィッ

ドアの軋む音がして、一人でにドアが閉じた。

「建付、悪いのかなぁ」

美奈子は閉じたドアをじっと見た後、枕に顔を埋めた。

「ううっ……ドアまで私をバカにする……グスッ」

どうしよう。

どうしよう。

そればかりが美奈子の頭を駆け回る。

仰向けになって天井を見つめるけど、それでもどうにもならない。

「――――いっそ、死んでお詫びを」

ダメだ。

そう。

だめなんだ。

そんなことしても、事態は終わらない。

痛いのはイヤだし。

終わるのはこのシリーズだけだ。

「はぁっ……次は綾乃ちゃんが主役かなぁ」

ふと、綾乃と水瀬の仲睦まじい姿が瞼に浮かんだ。

「ダメッ！」

そう！

それだけはダメだ！

「そうよ！――なんで私ばっかりこんな目に会うのよ！」

美奈子は起きあがろうとして、頭痛に叩きのめされた。

「痛いよぉ……」

シクシクシク……。

室内に美奈子の鳴き声だけが響く。

「悲惨だよぉ……どうやって止めればいいの？あんなことぉ。――――っていうか、その前にこの頭痛、どうにかしてよぉ」

……。

――――ある。

一つだけ、あった。

そう。

“あれ”を止める方法が、一つだけ。

「そうか――――」

それは、美奈子の失策。

自分の失策が、光明をもたらせてくれた。

「ケガならぬ、バカの光明」

バカ。

その言葉に、美奈子は顔をしかめた。

あの時、水瀬が書いた落書きには、しっかりと『桜井美奈子のバカ』と書かれていた。

「あの落とし前――絶対につけさせる！」

動かない体で、美奈子はそう決意した。

「私よりずっとバカなクセにっ！」

そうだ。

グリムの恐ろしさをわかりもしないで、

上辺のバカさ加減に踊らされて、

いつも通りの“何とかなるんじゃない？”

位の気軽さで、

ここまで来たに違いない。

「本当に！バカなのは水瀬君なんだからっ！」

そうだ――

水瀬が来た理由。

それが、自分を助け出すためだと、美奈子はわかっている。

それだけに、水瀬をバカだと思う。

助けるべき相手が、敵に味方するなんて。

「はぁっ……」

美奈子は深くため息をついた。

「どっちがバカなのか、わかんなくなっちゃった……」

目をつむっても、ただ、頭痛だけが襲う。

そっ。

そんな美奈子の額に、何か冷たいものが触れた。

ひんやりして気持ちいい。

「――――え？」

誰かが来たのか？

驚いた美奈子は、そこに意外な存在を見つけた。

「なっ！？」

●地下迷宮　司令部

「では、“根”の準備は完了だな？」

『準備は完了でございます』

「美奈子が、あそこに妖魔を進めさせようとした時には驚いたが」

『折角の部隊、全滅するところでした』

「戦術としては正しいのだが……美奈子が潰れた偶然には感謝すべきだな」
『はい――――“根”はすでに機能を開始』
「素晴らしい！」
グリムは歓声を上げた。
「これで私の宿願は果たせる！」
『はい……同慶の限り』
「グリム様」
モニターの向こうと通信していたグリムに、オペレーターの一人が告げた。
「大変です！」
「ん？」
「美奈子様が！」
「どうしたのです？放って起きなさい。どうせ頭痛で動けないのですから」
グリムの目は冷たいが、オペレーターの目は違った。
「――――どうしたのです？」
「美奈子様が！」
「美奈子が？」
「脱走されました！」
「なっ！？」

第六十一話（後書き）

R指定に関するガイドラインに従い、一部削除しました。（T＿T）

第六十二話

●近衛軍迷宮突入　前日

「世界樹の葉って」
美奈子はグリムに訊ねた。
「人間全部に有効なの？」
「相性はあります」
グリムは答えた。
「葉一枚で全人類をカバーすることはさすがに」
「それじゃ、取り戻しても」
「だから」
グリムはコーヒーを美奈子に渡しつつ言った。
「葉を増やすんです」
「葉を――――増やす？」

意味がわからない。
木がないのに葉が増えるはずがない。

「世界樹の葉は、種でもあるんです」
美奈子の疑問に答えるように、グリムは話した。
「人間界の種子は果実の一部として存在しますが、世界樹は、一部の葉が種となるのです」
「……ああ」
美奈子はそれで合点がいった。
「大切に保管されていた世界樹の葉って、ようするに世界樹の種なんだ」
「そうです」
グリムはうれしそうに頷いた。

「いずれ、三界の祖である世界樹を復活させる日が来る――そのためです」
「来るの？」
「人間界で言えば――復活の日。ですか？」
「……宗教的レベルの話ってわけね」
美奈子はコーヒーを飲み干した。
「で？」
コーヒーカップをテーブルの上に置いた。
「どうやって、世界樹を復活させるの？」
「世界樹の組成は記録がありますから」
「……まさか、クローン？」
「そうですよ？」
グリムはあっさりと認めた。
「なら、もう別なところで成功したの？」
「いえいえ」
グリムは首を横に振った。
「どうしても葉が出ないのです。ですから」
グリムは少し、遠い目をした。
「もう少し、実験を重ねる必要はあるのです」
「……」
美奈子は、ふと思いついたことを言った。
「あのね？」

●地下迷宮　通路
「もうっ！私のバカっ！」
美奈子は泣きそうになりながら通路を走っていた。
「何であんなこと教えちゃったのよぉ！」
バンッ！

通路の一角にはめ込まれていた点検用のハッチを蹴り開け、美奈子はその中に潜り込んだ。
「世界樹が復活するって、つまり、どういうことか、何で気づかなかったのよ！」
美奈子は、その答えを知っている。
面白そう。
見てみたい。
……つまり、自分の好奇心だ。

迷宮内部に張り巡らされたセンサーや電気系統は全て人間界から仕入れたものだ。
グリム曰く「コスト削減」だそうだが、おかげで美奈子にも、大体のところがわかる。
「あった！」
狭い点検用通路の中、時折、蹴躓きながら走った美奈子は、ようやく目的の場所にたどり着いた。
「水瀬君達に攻め込まれた時用にって準備していたけど」
美奈子の前にあるのは、大きなレバー。
それが、迷宮全体へ電源を供給するブレーカーの一つであることは、構造図を把握している美奈子にはわかる。
これで電源供給が遮断すれば、グリム達のいる司令室や、少なくとも人間界の機材を使っているあらゆる施設は機能を停止する。
ただし――
「これが切られると……地下5層から8層までの自爆装置が作動――確か８０秒」
記憶の中から、美奈子は必要な情報を引き出し、周囲に安全な場所を求めた。
「――よしっ！」
一瞬、水瀬達の顔か脳裏に浮かんだが、美奈子はそれを振り切った。

「何とかしてね！？」

ガンッ！

美奈子は、ブレーカーを切った。

そして――

ガシャンッ！

「きゃっ？」

どっしーんっ！

●地下迷宮　司令室

「電源が落ちました！」

オペレーター達が右往左往する中、グリムだけは冷静だった。

「ふん？」

自分の指先さえも見えない暗闇の中。

「――美奈子」

グリムは楽しげに口元を歪めた。

「私が、君をそんなに信じていたと、そう思っているのか？」

パッ。

グリムの呟きに反応したかのように、司令部には灯りが戻った。

「落ち着け」
グリムはオペレーター達に命じた。
「電源は他にも系統がある」

そうさ。
グリムは喉で笑った。

備えは常にしておくものだ。

「第5から8層、自爆装置作動します」

ズンッ！
ズズンッ！

司令部を激震が襲う。
グリムは足を踏ん張って凌ぐ。

すると――

フッ。

司令部は、再度、暗闇に閉ざされた。

「何っ！？」

●地下迷宮　点検用通路

「いっ、痛たたっ」

暗闇の中、そんな音がした。

美奈子だ。

「逃げようとして蹴躓くなんてぇ……」

そんな声と、

ごそごそ

何かを探す音。

そして――

パチッ

その音と共に、灯りが灯された。

「これだけが頼りかぁ……」

美奈子の手元には、一本のペンライトが握られている。

「あとは、グリムさんからくすねた点検用通路の鍵だけ」

青銅製の鍵を、美奈子はポケットから取り出そうとして

カランッ

その音に気づいた。

「ん？」

ペンライトで辺りを探ってみると、ライトの光を受け、何かが光った。

「――――宝石？」

赤い光を放つ石を手にして、美奈子は思い出した。

「服従石」

そう。

グリムからぶんどったあの石だ。

美奈子は無言で石をポケットにねじ込むと、立ち上がり、足下に転がるケーブルを手に取った。

「これ――――何のケーブル？」

美奈子の目の前には、太い電源ケーブルの束がある。

さっき、逃げようとして蹴躓いたのは、このケーブルだった。

何かはわからないが、結構大切なケーブルだろうことは、美奈子にも推測はついた。

ただ、最早この施設は美奈子にとって敵の施設。

壊して怒られることもないだろう。

「――――これ、いいんだよね？」

●地下迷宮第五層

ガレキの山の中からはい出てきたのは、悠菜達だった。

「大丈夫？」
「何とかね」
悠菜の声に答えるように、ガレキの下から顔をのぞかせるルシフェル。
「何が起きたの？」
「トラップ？」
「誰か、感知した？」
「私は」
悠菜は首を横に振った。
「赤外線・ケーブル、レーザー、空気振動検知、全然」
「……」
ルシフェルは、ガレキの下からのぞくイツミを引き出しながら言った。
「結論からすれば、偶然ですよ」
「私達が関係ない所で騒ぎになってる？」
「それ、ありえます」
悠菜は、ルシフェルの手を止めた。
「そっとしておいて下さい。お師匠様はお疲れです」
「放って置けと？」
「安置はしましょう」
悠菜は、ガレキの下敷きになってノビたイツミをガレキの上に置いて、その手を胸の上で組ませると、手を合わせた。
「南無阿弥陀仏」

その後、

ドンドンドンドンドンドン！

第五層では、爆発音が連続して響き渡った。

●地下迷宮　点検用通路

ドンドンドンドンドンドン！

太鼓のような音が、点検用通路をおっかなびっくり進む美奈子の耳朶を打った。
激しい振動を受け、周囲のあちこちでモノが落下したり、倒れたりするのを、美奈子はしゃがみ込んで凌ぐのが精一杯だ。

グリムの放った追っ手か？
一瞬、そう思った美奈子は、身を固くしたが、
それはない。と、判断した。
「電線を通す穴」を準備したグリムの目を盗んで、設計数値を書き換えて人間が通れる程度の通路に仕立てたのは美奈子自身。
グリムどころか、オペレーター達もこの穴の存在を知るはずがないのだ。
「ここを移動する限り、安全なんだから」
美奈子は自分にそう言い聞かせた。
入り口は各層に一つだけ。
ここを通じて、第９層まで降りればいい。
自分がいたのが第６層だから、３層を降りればいいのだ。
第９層には――美奈子がつけなければならない“落とし前”が存在するのだ。

「階段は北側のカドだから」

太鼓の音が聞こえなくなった通路。
様々なモノが散乱する中、
美奈子は歩き始めようとして、足を止めた。

ガタンッ！
ガランッ！
ドンッ！

美奈子の背後に、そんな音が近づいてくる。

「……へ？」

恐る恐る振り返った美奈子は、ペンライトを音のする方へ向けた。

一瞬、何が起きているのかわからなかった。

ただ、暗闇の中から音だけが迫ってくる。

「……？」

目を凝らしても、音だけしか情報が入らない。

「何？」

ドンッ！

ガッシャンッ！

ゴロゴロゴロゴロ……

「ゴロゴロ？」

美奈子は、その音で何が起きているのか、ようやく見当が付いた。

それは、今年の冬。

水瀬を詰め込んだドラム缶を、綾乃が転がしていたときの音。

それに、よく似ていた。
つまり――――
「ま、まさか？」
美奈子は慌てて足下を見て、初めて気づいた。
「これ……傾斜してる？」
迷宮の作りがどう関係しているかわからない。
だが、どう考えても床は傾斜していることを、美奈子は否定できない。
そこを――――
ゴロゴロゴロゴロ……
何かが、転がってくる。
しかも、自分の方めがけて――――
ゴロゴロゴロゴロ！
ペンライトがついに物体を捕らえた。
「冗っ談！」
それは、どこかに設置されていたんだろう、巨大な土管だった。
鉄製の見るからに重そうな土管が、美奈子めがけて転がってくる。
「ウソぉっ！」
美奈子は後ろを見ずに一気に走り出した。

●地下迷宮　第五層

役立たず　ここに眠る

ガレキの山の上にそんな墓碑を刺し終えたイツミが満足そうに頷いた。

「これでよし」

「あのぉ……」

綾乃（ティアナ）が恐る恐る訊ねた。

「いいんですか？仮にもあなた弟子」

「いいのよ」

と、イツミは言下に言いきった。

「あなただって、本心ではこうしたいはずよ？」

「……」

「移動するわよ？さっきの爆発で、迷宮がいつ崩落してもおかしくないんだから」

●地下迷宮　司令室

理由はわからない。

正副両方の電源系統が断たれた。

致命傷だと、グリムにもわかる。

電気で動く人間の機械がなければ、迷宮に意味はない。

手抜きが過ぎたか？

グリムは自問したが、それを否定することは、出来なかった。

「無理もない」
そう思う。
「迷宮は美奈子に委ねていた」
それが理由だ。
「そして……裏切られた」
迷宮が最もよく機能していた時、美奈子が座っていた椅子は、冷たく主を待つだけ。
それが、何だか妙に寂しく感じられる。
「私達は――――いいパートナーになれると思ったのですが」
今まで、命令をよく実行したオペレーター達は、ロウソクで明かりを採り、迷宮の状態把握に勤めているのが目に入った。

わかる限りでは、
第４層まで崩壊。
第５層から第８層までの構造物の８割が大破。
その影響で崩落の危険性大。
このままでは、第９層。第１０層まで崩落に巻き込まれる危険性がある。

「迷宮は――――放棄か」
グリムは深いため息と共に、そう呟いた。
それしかない。
「特別室へつなげられるか？」
「バッテリーがわずかですが」
「つなげ」
オペレーターから受話器を受け取ったグリムは、
「私だ」
その声は、グリムが、かなり苛ついていることを示していた。
「根の方はどうだ？」

『最終段階です――後は』
「よし。妖魔達は例の部屋へ？」
『移動は完了しています』
「“葉”をもって私もすぐに向かう」
受話器を戻したグリムが、暗闇の中にいるオペレーター達に命じた。
「聞け」
オペレーター達が一斉にグリムに向き直った。
「迷宮を放棄する――各員、そこの脱出口を使って迷宮の外へ脱出せよ」
グリムの指さす先には、「緊急用」と書かれた穴があった。
「滑り台になっている」
いぶかしがるオペレーター達に、グリムはそう告げた。
「飛びこんで、流れに任せろ――そうすれば」
グリムは微笑んだ。
「君たちは自由になる」
「――はいっ！」
「わかりましたっ！」
自由。
それを、危険からの脱出と捕らえたオペレーター達は、我先にと穴へと飛び込んでいった。
グリムは、司令室の最後の一人が穴に飛び込むまで見送った後、デスク上のボタンで穴を封じた。
「自由――よい言葉だ」
グリムは笑いながら言った。
「どうとでもとれる。本当に都合のいい言葉だ。――ああ。諸君が、自由になるのは本当さ」
穴の先。
そこで何が起きるのかを知るグリムは言わずにいられなかった。

「少なくとも――私はウソは言っていないからね？」

第六十三話

「きゃあああああっ！」
美奈子は悲鳴をあげながら、通路を走った。

冗談っ！

そう、思わずにはいられない。

「いつから私、ジョーンズ博士になったのよぉっ！」
通路のあらゆるモノをなぎ倒して迫り来る土管。

「こんな長ったらしい話、さっさと終わらせて次行きたいのにぃっ！」

美奈子は、通路の一角になんとか隙間を見つけた。

「そこっ！」

転がり込むようにして、美奈子はその隙間に体を押し込んだ。
目の前を、土管が転がっていく光景を、美奈子は震えながら見守った。

ドンッ！

すさまじい音がして、通路の角に土管がぶつかる音がした。

「ふうっ……」
安堵のあまり、力が抜けた。
土管に潰されるのだけは避けられた。
後は、第９層を目指して――

「えっ？」

美奈子は、そこまで思考を働かせて、ようやく気づいた。

「ま、まさか……」

再び襲われることはないだろうが、それでも美奈子は恐る恐る、通路に顔を出した。

土管は、少し先の角にぶつかって止まっていた。

「……」

角。

つまり、下へ続く階段の真上で――

「じ、冗談……」

あまりと言えばあまりのことに、美奈子は泣きたくなった。

そっと近づくが、土管は完全に階段を塞いでしまい、どうやってもすり抜けることが出来ない。

「神様ぁ」

美奈子は天井を仰ぎ見た。
「仏様でもいいです……お願いです」
美奈子だって、今時の娘だ。
信心なんてないに等しい。
それでも、受験とか困ったときには、しっかりお祈りするタイプだ。

「――聞いてください」

その美奈子が、心から、神仏に自らの言葉を聞いて欲しい。

そう、願ったのだ。

神仏の慈悲ある御心に届かぬはずはない。

窮地に追い込まれた一人の少女。

桜井美奈子。

灯り一つ無い暗闇に向かい、少女は、大きく息を吸い込み、

――そして、怒鳴った。

「ふざけるなぁぁぁぁっっ！」

もし、神仏が耳を傾けていたら、確実に鼓膜が破れたろう。
それ程の怒鳴り声をあげた美奈子は、地団駄（じだんだ）を踏んで悔しがった。

「毎度毎度、かなえてもくれないクセに、お賽銭だけはふんだくるクセに！」

まさに神をも恐れぬ言葉を、美奈子はわめいた。

「何よ！今まで支払ったお賽銭、全部勘定したら、この窮地を抜け出す奇跡位、起こせるはずよ！？」

ドンドンッ！

「お金返せっ！
詐欺だぁっ！
製造物責任法違反だぁっ！」

ドンドンッ！

この時、美奈子担当の神様か仏様が思ったのかもしれない。

――美奈子よ。

お前は、そうは言うが、

では訊ねよう。

お前は、この危機を脱したいと、いつお願いしたのか？

何時何分何秒、地球は何回、回った？

賽銭はきっちり払ったか？

現金一括払いだぞ？

ツリは出ないぞ？

ノークレームノーリターンが原則だぞ？

ついでに、カードは不可だ。

「うーっ！腹立つっ！」

地団駄を踏むことを止めた美奈子が、近くにある石を蹴った。

「後で神社なり仏閣なり言ってお礼参りしてあげるから、さっさと何とかなさいっ！」

蹴られた石が、何かに当たった。

ガンッ！

短く、そんな音がしたが、怒りに我を忘れた美奈子は気づかない。

「上手くいけば、賽銭にイロつけてあげるからっ！」

賽銭にイロ。

その言葉が届いたのか。

それとも、美奈子の窮地を哀れんだのか。

はたまた偶然か――

ガコンッ！

「――えっ？」

突然、美奈子の足下の床が抜けた。

「うそぉぉぉぉぉっ！」

暗闇の中、美奈子は暗闇の中へと、消えていった。

「えーっ！？」

濃厚な女の匂いが立ちこめる室内に、そんな声が響いた。

全裸でドアの前に立ち、ドアの向こうの誰かと話しているのは、琥珀だ。

「もう終わっちゃうんですかぁ？」

「仕方ないでしょう？」

声の主は、グリムだ。

「もうすぐ、敵が来ます。――――あなたなら、戦えます」

「本当ですかぁ？」

「私が、嘘をついたことがありますか？」

「信じられること、言われた覚えがありませぇん」

「……」

グリムの両手がグーになって、琥珀の頭をグリグリやりだした。

「いたたたっ！痛いですぅっ！」

「ご主人様に向かって、そのクチのきき方は、なんですか？」

「ごめんなさぁい……でもぉ」

琥珀は不思議そうに訊ねた。

「ご主人様は、何で戦わないんですか？」

ごんっ。

グリムのゲンコツが琥珀の頭に炸裂した。

「私には、他に仕事があります――琥珀」
「ぐすっ。はい？」
「その娘は、確かにあなたにくれてやりましたが」
ドア越しのグリムの視線の先。
そこには、ベッドの上で動かない萌子の艶めかしいまでの姿があった。
「ダメダメぇ！」
グリムの視線に気づいた琥珀は、グリムの目から萌子を遮ろうと、グリムの顔の前で手をパタパタやりだした。
「萌子ちゃんは私のモノなんですからぁ！」
「どうでもいいんですけどね？」
グリムは琥珀に視線を戻した。
「ここも危険です。どうするんです？」
「一緒に死にます――そう、いいたいんですけどねぇ」
琥珀は、寂しそうに笑った。
「もう、私は死んでますし」
「仲間にする？」
「ダメです」
琥珀はきっぱりと答えた。
「萌子ちゃんは、まだ死んじゃいけない人なんです」
「――琥珀」
グリムは、ポケットから何かを取り出した。
「これを」
「？」
差し出された琥珀の両手に、グリムが乗せたのは、二つの宝石だ。
「暴力団に貸し出した宝石です」
「これを？」
緑の光を放つ石を不思議そうに眺める琥珀に、グリムは告げた。
「カットが同じですから間違えないでください？導石にカモフラージュしていましたが、本当は違います。一つは、その子を助ける石。

もう一つは――」

ポンッ。

宝石に見入る琥珀は、自分の頭にグリムが手を乗せたことに気づいた。

「グリム様？」

琥珀の視線の先。

そこにいるグリムは、何かとても辛そうだった。

「……あなたを……助ける、石、です」

「私を？」

「それは――」

琥珀は、グリムのその言葉に息を飲んだ。

信じられない。

どうして？

そんな言葉が、琥珀の脳裏を駆け回った。

「どうして――？」

琥珀は、流れる涙をそのままに、グリムに訊ねた。

「どうして、そんなに優しくしてくれるんですか？……私、死人なのに」

「……あなたを“人形”にしてから、何年ですかねぇ」

グリムの声は、いつしか、とても優しい声になっていた。

「もうかれこれ」

……何年だろう？

琥珀は首を傾げた。

よく、思い出せない。

「楽しかったですねぇ……とても騒がしい日々でしたけど」

「これからも、楽しくなればいいんです」

ぎゅっ。

琥珀は二つの宝石を握りしめながら、グリムに抱きついた。

「ずっと、ずっと！私は、これからもグリム様と一緒にいますから！」

「――――琥珀」

グリムは、琥珀の肩に手を置いた。

「始まりがあれば、終わりもあります。

万一の時は、その石を使いなさい。

むしろ、あなたにとって、その方が幸せなのです」

グリムの胸の中に顔を埋めた琥珀は、無言で首を横に振った。

「覚悟だけでも、決めておきなさい――相手は、あなたに匹敵するモンスターなのですから」

「……その人達を殺せば」

琥珀は顔を上げた。

「私達、今まで通りに暮らせるんですか？」

「――ええ」

グリムは、どこかもの悲しげに頷いた。

「まるで、私が負けるって顔ですよ？」

琥珀のそんな言葉を受け、グリムは慌てて表情を変えた。

「そんなことはありません！」

グリムは精一杯明るい声で言った。

「あなたは私の最高傑作！私のパートナー！そして――」

ぎゅっ。

グリムは琥珀を抱きしめながら、その耳元に囁いた。

「私の、女神なのです」

「はいっ！」

琥珀は満面の笑みを浮かべて頷いた。

「そいつらを殺して、ここからの逃走経路を確保する！それでいいんですね！？」

「そうです」

「どんな方法をとってもいい！とにかく皆殺し！殺しちゃう！殺して殺して、ご主人様と萌子ちゃんと楽しく暮らすんですっ！」

グリムは頷き返して、言った。

「情けは無用です――――敵、なのですから」

第六十三話（後書き）

作者の鷹嶺です。
質問が来ました。
ブログ「月夜茶会」主催の、でっちの助六様。
頼んでもいないのに、質問なんてくださりましてありがとうございます（いつかコロス）

Q　ムダに長いですけど、このお話は、いつ終わるんですか？

……ええ。
もうそろそろです。
おい、でっち。
お前の寿命とどっちが先か、試してみるか？

……というわけで（？）、ようやく最終局面まであと一歩です。
予定では、長くても１０話位。
７０話でエンディングが迎えられれば御の字ですね。

もう少し、おつきあい下さいませ！

第六十四話

どっしーんっ！

派手な音を立てて、美奈子がようやく止まった。

一体、どこをどうやって、何がどうなったらこうなるのか、全くわからないが、とにかく、美奈子は生きていた。

「痛たたたっ……」

美奈子は何とか自分の体が無事であることを確かめた。

「全く……」

手足に問題はない。

感覚も正常だ。

「お母さんも、どこまで私を頑丈に産んでくれたのかしら」

グニッ

立ち上がろうとした美奈子の手が、柔らかいものに触れたのは、その時だ。

「へ？」

暗闇の中、よくわからないが、どうやら感触からして人らしい。

「えっ！？うそっ！」

美奈子は慌てて立ち上がり、声をかけた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「まったく……」

美奈子はその声に息を飲んだ。

それは、聞き間違えることのない相手の声。

グリムの声だ。

「あなたという人は……」

グリムが美奈子の前で立ち上がった。

「どこまで愉快な人なんですか？」

「ぐ、グリムさん……」

「お久しぶりですね。そう言った方がよさそうです」

グリムはニコリと笑った。

「私を――――殺しに来ましたね？」

「……」

美奈子は、無言で頷いた。

「あなたには、それしか選択肢はないですからね」

グリムは美奈子の脇をすり抜けた。

美奈子に出来るのは、道を譲るだけ。

「美奈子さん」

グリムは、そんな美奈子に言った。

「あなたに、殺しは似合いませんよ？」

「で、でも……私は」

「ふうっ……では、こうしましょう」

「？」

「ついて来て下さい。むしろ、あなたはその方がいい」

「どこへ？」

「ついてくればわかります――――あなたには、“それ”を見る義務と権利がある」

美奈子が連れてこられたのは、地下第１０層。

「第１０層については、何かご存じですか？」

美奈子は無言で首を横に振った。

「ふふっ。そんなに緊張しないで下さい」

グリムは美奈子に笑って見せた。
「培養槽があるんですよ」
「……世界樹の？」
「そうです――つきましたよ？」

それが世界樹の根だと、グリムは言うだろう。
写真で見たマングローブの根によく似ていることは確かだった。
恐らく天井まで２０メートル以上あるだろう第１０層全体に広がる無数の根。

世界樹。

その美しい名からは想像もつかないような、むしろ一種の醜悪さすら感じてしまう光景が、美奈子の目の前に広がっていた。

「ここは、魔法防御があるから大丈夫です」
分厚いガラスで囲まれた部屋に入ったグリムは言った。
「でないと、ああなりますよ？」
グリムに指さされた先。
「？――ヒッ！」
そこをのぞき見た美奈子は、小さく悲鳴をあげた。
信じられなかった。
第１０層の床。
そこには、床を埋め尽くす程の骨が転がっている。
何より、根の先端。
そこには、ひからびた死体が無数に突き刺さっていた。
様々な動物のひからびた死体。
その中には、人間もいた。

信じられない。

美奈子は、世界樹から視線を外そうとして、出来なかった。

目の前の恐怖が、美奈子を捉えて放さないのだ。

「これが、世界樹の正体です」

グリムは楽しそうに言った。

「生命力を吸収し、養分とする。――美奈子さん、気づきませんでしたか？世界樹もまた、生命体なのですよ？植物ですから」

「……」

世界樹を、単なる樹木だと想像していたのは、美奈子の知識の限界だ。

根本的な所を落としていたことを、美奈子自身、認めざるを得ない。

世界樹。

それは、何を栄養として育つのか。

――その答えが、ここにあった。

「かつて四界を形成した世界樹。その生命の源は――命なのです」

「どうやってこんなモノを！」

「何――種を複製（クローニング）して、発芽させたのですよ。つまり、これは世界樹のクローンです」

「グリムさんが落としたっていう、あれじゃなくて？」

「あれは違います。あれは正真正銘のオリジナル。あれを発芽させ

ることは、獄族の間でも不可能に近いとされてきました」
「不可能？」
「ええ。長年使われなかったせいで、発芽の方法が失われたのです。私は、発芽を促進するプログラムを遺伝子に与えることで、ここまで育てたのですが」
「失敗したみたいね。――根っこしかないもん」
「そうです」
グリムは心なしか肩を落とした。
「どうやっても、葉が出ない。何をどうやっても、です。葉が出なければ世界樹には意味がない。私にとって長年の研究課題でした。でも、あなたがその解決方法を示してくれた」
「あれは、この世界の樹木を育てる方法で」
「いやいや」グリムは嬉しそうに言った。
「元は一緒です。クローンにオリジナルを移植するだけですから」
「知らないわよ？どうなっても」
「勿論」

バラッ……

美奈子の視線の先で、ひからびた死体が崩れ落ちた。
ひからびた肉片と一緒に床に落ちた服。
美奈子は、その服に見覚えがあった。

「あ……あの服って」
美奈子は、その死体の服に見覚えがあった。
あれは確か――
「そうです」
グリムは楽しげに頷いた。
「あのオペレーター達です」

「味方を殺したの！？」
「彼らは、元々死人です」
グリムは表情を変えない。
「用が終わったから、自由にしてあげただけ。私は彼らに言いましたよ？自由にしてやると」
「――――最低」
ぎゅっ。
美奈子は、拳を握るとグリムを睨み付けた。
「人の命を玩ぶなんて！」
「――――我ら獄族は、元からそんな存在です。
でも、考えてみて下さい？
もっと厄介なヤツが、どこにいるかを」

グリムの視線の先の世界樹。
それで、美奈子にも、グリムが何を言いたいかわかった。
獄族よりも厄介な存在――――世界樹。
グリムは、そう告げているのだ。

「命を養分にする。その上、命の行く末を玩ぶ力を持つ――――それが、この樹なのです」
「……」
「それに比べたら、私なんてカワイらしいものでしょう？」
「……詭弁のつもり？」
「詭弁？」
グリムは美奈子に向き直った。
「どこがですか？」
「他の命を栄養として摂取する。必要の有無を問わずに他の命を奪う……それは、生きてく上で避けられないこと。そうでしょう？あなただって、散々」
「成る程？」

クックックッ……
グリムは笑った。
「確かに、私達も、そしてあなたもそうだ。生きるために他を苦しめ、殺す」
「……」
「それはエゴ、業（カルマ）、その究極の形が――――これです」
「グリムさん。この樹を使って、何をするつもりなの？――――ううん？違う」
美奈子は言った。
「――――誰に、何を唆（そそのか）されたの？」
「唆（そそのか）す？」
グリムは怪訝そうに眉をつり上げた。
「私が、誰かに唆されて、世界樹をここまでしたと？」
「もし、グリムさんが獄族の中でもかなりの人物だとする」
美奈子は、グリムから視線を外さずに言った。
「社会的地位があれば、かならず仲間がいるはず。それが、誰もいない」
「私は一人が好きなんです」
「違う。
グリムさんは、味方がいない。
それは、グリムさんが、私達の世界で言えば、フリーの学者みたいな、限定された地位にある証拠。
私にはわかるんです。

グリムさんは唆されたって。
誰かに世界樹の復活を、唆されたって。
どうしてわかるの？
こんなシロモノ、気楽に手に入るはずはない。
グリムさん、言ってましたよね？
世界樹は、厳重に管理されているって」

グリムは無言で頷いた。

「なら、世界樹をここまで育てたあなたに聞きます。この種、遺伝子？どちらにしても、どこから手に入れたんです？」

「っ！」
その表情こそが、種の入手先を告げていた。

「資金。
材料。
いろんなものを提供されたグリムさんは、誘いに乗った。
何故？学者って、そういうものだから。
倫理より研究結果を重視してしまうから」

「人のことを、よくも言いますね」

「エゴイストって意味じゃ、私もいい勝負ですからね」
美奈子は冷たい表情のままで続けた。
「グリムさん――もう一度、考えて下さい。
世界樹を、復活させて、あなたは本当に、どうしたいのですか？」

「世界を、作り直す」
グリムは、答えた。

「この歪みきった世界を――永遠の中世に戻すために」

「違うでしょう?」

「違う?」

「グリムさんは、これまで誰もやらなかった世界樹の復活を成し遂げる。その名声さえ、興味がない!」

「私は、それを成し遂げる唯一絶対の存在です」

「学者みんなそう言って、破滅していった。全てを破滅に追い込んでいく。そこに反省という言葉はない。そんな感覚がないから――グリムさんもそう」

「私も破滅すると?」

「そう!研究の目的は間違いなく、失敗の取り消し。そのための手段としての世界樹」

「そうですよ?」

グリムはあっさりと認めた。

「過去を清算して、未来の名声を築き上げる。その、何が悪いんですか?」

「無茶よ!」

美奈子は怒鳴った。

「こんなもの、人類には必要ない!」

「私には、あるのです」

グリムは美奈子に向き直った。

「美奈子さん。私はかつて、契約を一度だけしくじったことがある。

この天才の私が！私はそれが許せない！だから、世界樹を復活させる！」

「そこに矛盾があるのよ！」

美奈子がグリムの声を遮った。

「世界樹は、運命を書き換えるシステム――――だけど、過去を清算できるシステムじゃない。何故？決まってるでしょう？運命は未来のこと。過去のことじゃない」

「世界樹は、過去すら書き換える！」

グリムはムキになって怒鳴った。

「人間風情のあなたに何がわかる！」

「――――わかるのよ。ううん？あなたの方が、よくわかっているはずよ？」

美奈子は答えた。

「世界樹がその証拠。グリムさん、話してくれましたよね？世界樹は崩壊したって」

グリムは無言で頷いた。

「世界樹自身が、過去を取り戻すことが出来なかった。あなた方獄族も、世界樹をかつてあったように戻せなかった。それは何故？世界樹の葉が過去を戻すことが出来るなら、世界樹そのものを復活させられて当然でしょう？」

「そんなものは詭弁だ」

グリムは不快感をあらわにして、美奈子から視線を逸らした。

「くだらない詭弁に過ぎない！」

「そう？」

対する美奈子は、どこか勝ちを意識した声だ。

「グリムさん自身――――それを認めているんじゃありませんか？」

「！？」

グリムの顔が驚愕のそれに変わった。

「……あなたは、やはり、敵に回すべき相手ではないようだ」

「そして、あなたから世界樹を受け継いだ連中が、上手いこと世界樹を使って、何かをしでかすわけだ」

「……美奈子さん」

グリムは軽蔑したような顔で美奈子を見た。

「あなたの最大の欠点を教えてあげましょう。

――――空気が読めないことです」

「空気？」

「あなたはいい気になると、言わなくていいことを口にして、敵を増やすタイプだ」

カンッ

グリムの足が動いた。

「……」

美奈子は、それで気づいた。

グリムは敵か？

グリムは味方か？

――敵だ。

それを、完全に忘れていた。

「あなたは、どこまで愚かなんだ」

グリムの指先が、後ずさった美奈子の額に触れた。

「少しだけ、待ちなさい」

意識を失い、床に崩れ落ちた美奈子を、グリムは冷たく見下した。

「世界樹の復活と――あなたの言う私の欲望。その実現の瞬間には起こしてあげます」

グリムはそう告げると、世界樹の葉をポケットから取り出した。

「あんな連中に、何と言われたか？そんなことは関係ないのですよ」

世界樹の葉が、怪しく光るのを見つめながら、グリムは笑った。

ドンッ！

上の方で戦闘が開始された。

琥珀がどれほど持ちこたえてくれるか。

すべてはそれにかかっていた。

「確かに、私はエゴの塊です」

「あの子さえ、犠牲にしてしまうのですから……」

第六十四話（後書き）

なんか……動きがないですね。

第六十五話

「あの……悠菜ちゃんは？」
「放っておいても大丈夫よ」
イツミは冷たく言い放った。
「一人かくれんぼ大会の真っ最中みたいだし」
「……生き埋め、の間違いじゃなくて？」
「お葬式ごっこでもいいわ。何なら、火葬ごっこ。お骨あげ含めて……あーっ！やってみたい！」
「……」
「それより」
イツミは足を止めた。
それがあまりに急だったため、回りを興味深そうに眺めていたセージュが、イツミにぶつかった。
ドンッ！
セージュの胸に突き飛ばされる形で、イツミが前にコケた。
「い、イツミ様っ！？」
「は、鼻、すりむいちゃった……」
顔を押さえるイツミに、セージュが慌てて駆け寄った。
「ご、ごめんなさいっ！」
「いい」
イツミは鼻をさすりながら言った。
「わざとじゃ、ないんでしょう？」
その時、イツミはセージュがどこに立っているか、よく見ないで立ち上がったのは事実だ。
「きゃっ！？」
ムニュ。
そんな効果音が聞こえてきそうな勢いで、イツミの頭がセージュの胸にめり込んだ。

「……」
「い、イツミ様っ！？」
セージュが赤面する中、イツミは無言でセージュの胸を鷲掴みにした。
「い、一度ならず、二度までもっ！」
グイッ！
グニグニグニッ！
イツミの手がセージュの胸をもみしだく。
「やっ！やめてくださいっ！」
「この胸が！この胸がっ！」
イツミは顔を真っ赤にして、胸を揉み続けた。
「三千五百年、ちっとも成長しない私に対する当てつけ！？この巨乳が！この巨乳がっ！――――あーっ！くやしいいいいいいいいっっっ！」
怒って人の胸をもみまくるなんて大人げないとは思う。
御トシ数千年を誇るキャリア女性とは思えない。
普通は、そうだろう。
だが、どう見ても１２か１３歳くらいにしか見えないというイツミの外見が、その不評をどうしても見る者に抱かせない。
グニグニグニッ！
「あっ……ああんっ♪」
これでもか。とばかりにセージュの胸をもみまくったイツミの目の前で、セージュが崩れ落ちた。
「ふんっ！」
イツミは、顔を真っ赤にして荒い息を吐くセージュを一瞥した。
あーっ。すっきりした。
イツミは、そう呟くと、目の前に広がる闇の中に視線を向けた。

「――さて。待たせて御免なさいね？」

闇の中へ語りかけるイツミ。

誰に語りかけているのか、ルシフェルや綾乃（ティアナ）にはわからない。

ただ、イツミが足を止め、そうする以上、何かがいるのは間違いない。

そう、思う程度だ。

（おかしい）

ルシフェルは自然と警戒した。

騎士特有の暗視能力が効かないほど、闇が濃すぎる。

何かの魔法が使われているのは間違いない。

（これ――暗闇（ダークネス）？）

暗闇（ダークネス）

結界の張られた一定の空間を光さえ通さない暗黒空間にする魔法。

人間でも可能な、結界魔法の初歩だ。

ルシフェルは結界魔法を展開した。

四方全てを防御する、防御魔法の中でもかなり強力な魔法。

万全の備えの中、視線と神経を研ぎ澄まし、不意の攻撃に備える。

「……」

ドンッ！

その一撃は、ルシフェルが右へと視線を動かした途端、真っ正面から来た。

「っ！！」
ルシフェルは、その攻撃を避けなかった。
いや、避けることが出来なかった――――そういう方が正しい。
結界を破られ、シールドの反射魔法（リフレクション）でそらすのが精一杯だ。
間違いなく、普通の魔法騎士なら消し炭は避けられなかったろう。
「敵っ！？」
剣を構えつつ、ルシフェルは仲間の姿を探した。
綾乃（ティアナ）にセージュ、イツミ。
皆、無事だ。
「セージュ、後ろへっ！――――カノッサ！」
「はい？」
「やっぱりついてきてた！」
突然、綾乃（ティアナ）の背後に開いた暗闇の中から出てきたのは、カノッサだ。
「どうでもいいけど、セージュを守って！」
「えーっ！？私がですかぁ？」
カノッサは、かなり不満そうな顔だ。
「私、こうして、姫様の戦いを見物してたいんですけどぉ」
カノッサは、手にしたポップコーンを噛りながら、主君に抗議した。
「私、危ないのキライなんです」
「ぐちゃぐちゃ言ってると、サラリー下げますよ！？」
「はぁいっ！がんばりますっ！」
カノッサは、セージュの襟首を掴むと、穴から這い出た。
「さ、セージュちゃん！」
「ルシフェル！」
剣を構えつつ、綾乃（ティアナ）が怒鳴った。
「かなりの敵ですっ！」
「うんっ！」
ルシフェルも前の敵に備える。

だが――
イツミは、剣を構える二人に向き直った。
「イツミ様!?」
すっ。
イツミの右手がまっすぐに伸び、その細い指先に光が集まった。
「な、何をっ!」
ドンッ!
驚愕する二人の前で、イツミの手から放たれたのは、魔法の光。
「きゃっ!!」
「っ!?」
何とかかわす二人。
突然のことに唖然とする二人に、イツミは冷たく言い放った。
「どこにお目目つけてるの?二人とも」
「えっ?」
無言でルシフェルと綾乃(ティアナ)は顔を見合った。
何故、イツミが自分達を攻撃したのか、まるでわからない。

「――もし、あなた達が私の弟子や部下なら、タダじゃおかないところよ?」

「で、でもっ!」
「敵は目の前に」

「目の前?」
イツミは綾乃(ティアナ)の抗議に鼻を鳴らした。
「フンッ。目の前って、どっちのこと?」
その声は、明らかに苛立っている。
「ですから――」
ドンッ!
その途端、綾乃(ティアナ)は横から突き飛ばされた。

ルシフェルだった。
「なっ」
何を！？
その声は言葉にならない。
綾乃（ティアナ）を突き飛ばしたルシフェルの持つシールドが、綾乃（ティアナ）を背後から襲う新たな攻撃魔法を受け止めた。
「敵が――――見えない」
ルシフェルの目の前に広がるのは闇。
暗黒（ダークネス）の魔法に、いつの間にか取り込まれたかのような錯覚すら感じる闇。
魔法騎士の暗視の力さえとどかない闇が、ルシフェルを惑わす。
「どこ？どこから……」
ルシフェルの焦ったような口調に、イツミは楽しげに語りかけた。
「見えたら一人前よ♪」
「……」
「開始から１０秒経過――――悠理なら終わってるわよ？」
「っ！」
ルシフェルは歯を食いしばって前を睨み付けた。

水瀬君は、この人に一人前だって認められている。
そういうことだ。

それは、ルシフェルにとって、最大級の侮辱だ。
ルシフェルにとって、水瀬とは、信頼できるパートナーであり、手のかかる弟。
だが、ルシフェルという魔法騎士にとっては、全く事情が違う。
水瀬悠理。
その存在は、絶対的な信頼と同時に、同じくらいの劣等感の対象でもある。

共に戦いながら、常にルシフェルが無意識に味わってきた負の感情。

――絶対に、戦ったら勝てない。

世界最強の魔法騎士。

その名声そのものに興味はないものの、ルシフェルにも魔法騎士としての自負はある。

だから――

負けたくない。

水瀬君にだけは、負けたくない。

ルシフェルの心の奥底には、そんな対抗意識がいつだってくすぶっている。

イツミの言葉は、その焼けぼっくいに火をつけた。

――ヒュンッ

ルシフェルは、“デバイス”を起動させた。

数は6。

今のルシフェルに使える最大数だ。

それに鏡を動かす。

意識がコントロールにとられるため、かなり危険な行為だが、それは敵の位置を割り出す上でも有意義なはずだ。

デバイスが魔法の矢を連射する。

ルシフェルの前面と背面にそれぞれ3つずつ。

敵の狙撃を避けるため、せわしなく動きながら、デバイスは通路を撃ちまくった。

「――――そこっ！」

ルシフェルが、デバイスの攻撃反応から、敵の位置を割り出したのは、デバイスの一基がルシフェルの前面、右壁側を撃った時だ。

それまで素通りしていた攻撃が何かに当たった。

壁にへばりつくように避難するセージュ達のさらに奥の何かに当たった。

否。

何かに弾かれた。

ルシフェルは、デバイスの操作を中断、魔法攻撃をそこめがけて撃ち込んだ。

爆風と爆煙が通路を駆け回る。

「――――瀬戸さんっ！」

「はいっ」

その声に反応したように、綾乃（ティアナ）が斬り込む。

何もない漆黒の闇。

そうとしか見えない闇。

だが、綾乃（ティアナ）の目もまた、魔法の矢を弾いた場所だけは捉えていた。

綾乃（ティアナ）は、そこに潜む何かを狙い、剣を振るった。

その剣が、何かにぶつかった感触を、綾乃（ティアナ）が感じた瞬間――――

ドンドンドンッ！

その頭上で、魔法の矢が炸裂。

「！？」

綾乃（ティアナ）はとっさに防御魔法を展開し、頭上からのさらなる攻撃に備えようとした。

その途端、斬りかかった闇の中から伸びた“モノ”が綾乃を襲う。

「ぐっ！」

その“モノ”を鳩尾に喰らった綾乃（ティアナ）の体がくの字に曲がり、床に崩れた。

「瀬戸さんっ！」

それが、何者かの膝であると見たルシフェルは、魔法攻撃で牽制しつつ、崩れ落ちた綾乃（ティアナ）を守るために駆け寄った。

ブンッ！

「っ！」

その音に、とっさに首をすくめたルシフェルの真横を、何かがかすった。

重い音から、金属であることはわかる。

ガンッ！

同時に、とっさに前に突きだしたシールドにも金属がぶつかる。

確かに、前後からの攻撃だった。

「何っ！？――――このっ！」

背後から頭を狙った攻撃を、間近に転がっていたデバイスで狙撃。

金属そのものへの攻撃は、紙一重で間に合わなかったが、デバイスの攻撃は、確かに何かを断ち切った。

カンッ――――ゴロゴロゴロ……。

床を音を立てて転がっていくのは、尖った先端を持つ革紐。

「――まさか」

ルシフェルは、もう一度の攻撃を警戒しつつ、闇の中へと剣を突き刺した。

鈍い感触が、柄越しに手に伝わってくる。

相手が肉体を持つ存在であることは、それでわかる。

だが――

グッ！

「！？」

感触から、剣がかなり深く肉体にめり込んでいるのは確かなのに、肉体の持ち主は、剣を掴み、力任せにそれを奪おうともがく。

やむをえず、ルシフェルは剣を離し、剣を目印に魔法攻撃を滅茶苦茶なまでに撃ち込んだ。

「トドメッ！」

腰の霊刃を抜き、およそ首だろうという辺りを薙ぐ。

感触は、確かにあった。

何かを切断した感触。

そして――

ゴロッ

何かが、床に転がり、綾乃（ティアナ）の真横に落ちた。

「？――――っ！！」

ルシフェルは、自分が悲鳴を上げなかったが奇跡だと思った。

そんなバカな。

何度もそんな言葉が頭の中を行き来する。

信じられない。

そう、思ってしまう。

何故か？

それは、人の首だった。

今やルシフェルも知る人の、首だった。

人？

違う。

あのシェリスだ。

端正な顔が、うつろな表情を浮かべてルシフェルをみつめていた。

だが、彼女は確かに死んだはずだ。

もう、死ぬと自分から言っていた。

だから、逝かせてあげたんだ。

止めも刺さずに。

それなのに――――

「う……あ……」

うっすらと目を開けようとする綾乃（ティアナ）に気づいたルシフェルは、とっさにその首を綾乃（ティアナ）の目の前からどかし、闇の中へと放り込むと、魔法を放った。

塵雲（じんうん）。

全てを原始単位に分解し、塵とする魔法。

ルシフェルが水瀬から教わった中でも、強力な部類に入る魔法だ。

普通、難易度のかなり高い魔法として知られるが、普段、ゴミを処理するのに多用しているルシフェルにとって、今ではかなり簡単に使える。

体をゴミ並に処理された方がどう思うか？

ルシフェルはそれだけは考えないことにした。

そうするしかないのだから。

闇が邪魔して、セージュや綾乃（ティアナ）が、その首に気づかないことを祈りつつ、ルシフェルは綾乃（ティアナ）に言った。

「立てる？」

「な……何とか」

よろめきつつ、綾乃（ティアナ）は立ち上がった。

「あ、あれは一体……」
「よくわかんないけど、とにかく、勝ったよ？」
「手柄を失いました……ゴホッ」
胸元を押さえつつ、綾乃（ティアナ）は激しく咳き込んだ。
口から血がこぼれた。
「肋骨が折れたみたいですね……内蔵も……セージュ」
「は、はいっ！」
ルシフェルの肩をかりつつ、イツミの元へと戻った綾乃（ティアナ）にセージュが駆け寄り、治癒魔法をかけ始める。
「ふふっ……この体、借り物ですからね」と苦しげな顔で微笑む綾乃（ティアナ）。
「詳しくは聞かないけど」

ルシフェルはイツミを見た。

さっきのこと。見たでしょう？
その目は、そう語りかけていた。

イツミは、無言で頷いた。

「獄族が、魔族……ううん？我々までを？馬鹿な……」
イツミの顔は驚愕に引きつっている。

「ありえない……ううん？これはあってはならない……」

「イツミ様？」
治癒魔法が効いたのか、綾乃（ティアナ）は何とか立ち上がった。
「一体？」
「う、ううん！？」
イツミは目の前で手をバタバタさせた。

「何でもないっ！何でもないからっ！」
そのあまりの子供じみた振る舞いが、見る者の毒気を抜いてしまう。
「？はぁ……」
「それより、戦えるの？」
「不覚はとりましたが、戦えます」
綾乃（ティアナ）は力強く頷き、ルシフェルもまた、無言でそれに従った。
「そう？……なら全員、再度武装を確認。次はもっと厄介なのが相手よ？」
首を傾げる綾乃（ティアナ）とセージュ。彼女達に背を向けたチョコレート色の髪の女の子が、ぽつりと呟いた言葉を、地獄耳のルシフェルは聞き逃さなかった。
「この仕事……厄介なことになりそうよ？」

「……」
ルシフェルが、イツミに声をかけようとするのと、イツミが再び、闇に向かって語りかけるのは、ほぼ同時だった。
「お待たせ――ヘンな伏兵がいたから、手間取っちゃったわね」
闇の奥から返事があった。

「いいえ」
楽しげな女の声。

「見ていて面白かったです。私、人が戦うの、初めてナマで見ましたぁ」
無邪気な興奮を秘めた声。

「じゃ、そろそろ――姿を見せなさい」

イツミのドスの効いた声に反応したかのように、暗闇が消え、周囲が明るく照らし出された。

「！！」

突然の灯りに目を閉じる一行。

再び開かれたその目に映し出されたのは――――有翼の天使。

数メートルはあるだろう八枚の白い翼を持つ少女が、豪華な装飾の施された教会のようなホールの中程から、一行にほほえみかけていた。

場の荘厳さ。

その美しき翼。

その美しい装飾品に飾られた黒髪。

その無垢な瞳。

もし、何も知らなければ、天使が降臨したと思うに違いない。

だが、ルシフェルは、驚きつつも、内心で、それが敵だとはっきり認識した。

「ご希望にお答えして、登場です♪」

はにかみさえ浮かべつつ、白いドレスに身を包んだ天使は微笑んだ。

「――――これ、似合います？」

外見からすれば、イツミと同い年くらいにさえ見える少女が、ドレスの端を掴む。

「グリム様が下さったんですよ？わたし、パジャマばっかり着ていたから、こういうの、憧れていたんです♪」

「それはよかったわね」イツミの冷たい声さえ、

「はいっ♪」少女には褒め言葉に聞こえるらしい。

次の瞬間、笑みを浮かべた少女の周囲に、無数の光球が出現。

ドドドドンッ！

光球と同数の魔法の矢が、一行に襲いかかった。

今までとは比較にならないほどの数と破壊力の攻撃を前に、ルシフェルや綾乃（ティアナ）達は、逃げるのが精一杯。

近衛軍の誇る信濃級の集中砲火同然の攻撃が、ホールの壁や床に無数の穴を開けた。

黒こげになった弾痕を前に、ルシフェルは思わず唾を飲み込んだ。

とてもではないが、マトモにやって太刀打ちできる相手ではない。

それはすぐにわかった。

だが、敵である以上、戦うしかない。

でも、どうやって？

（こんな所で対艦戦闘？ううん）

その答えを、ルシフェルは内心、悲鳴と共に導き出した。

（これじゃ、対艦隊戦闘だよ！？）

一方、それまで立っていた所から、一歩も動かなかったのが、イツミだ。

周囲の床を弾痕が黒く染め上げる中、何故かイツミの周囲だけは元通りだ。

「……」

それが気に入らなかったのか。天使の攻撃が再びイツミに向けて襲いかかった。

「イツミ様っ！」綾乃（ティアナ）の悲鳴が爆音にかき消される。

誰もが、イツミが骨も残さず消されたと信じて疑わなかった。

だが――

「歓迎なら、他に方法があるでしょう？」

爆発の後、煙の中でそんな声がした。

「――――えっ？」

天使の顔に、はじめて驚きが浮かんだ。

イツミが何事もなかったかのように、その場に立っていたのを見たからだ。

「あはっ♪やるぅ♪」

その天使の楽しげな声に、イツミは軽く頭を下げた。

「それはどうも――――それで？」

イツミは訊ねた。

「名前は？」

「あっ、申し遅れました」

天使は、初めて気づいた様子で、深々と頭を下げた。

「私、武原琥珀と申します」

第六十六話

「人間……元、人間というべきかしらね」
「はい♪」
「どきなさい。お嬢ちゃんみたいな小さい子と殺合(やりあ)いたくないの」
「……どっちがですか？」
琥珀は首を傾げた。
「えっと……私が形態年齢で１３歳。オチビちゃんは……１０歳？」

ビキッ！

空気が絶対零度にまで下がったのだが、
「ふふっ。背伸びしちゃいけまちぇんよぉ？」
悲しいほど、琥珀は空気を読んでいない。

「――――そこの二人」
肩を振るわせ、髪を逆立てるイツミの背から視線を外し、抱き合いながら震えていたルシフェルと綾乃(ティアナ)に、イツミの恐ろしいほどの声が訪れた。
「フォローはどうしたの」
「はっ！はいっ！」
「琥珀とやら？この方はお子ちゃまなんかではありませんっ！」
フォローに回ったのは、琥珀以上に空気の読めない女。
綾乃(ティアナ)だ。
「どこがですかぁ？」
琥珀にはピンとこない。
「た、確かに外見は、人間で言えばランドセルでも背負わせてやれば似合うのは確かです！私的には千歳飴ですけど――――でも、この方は御トシ３５００歳を越えていますっ！」

「あははっ！アニメみたい」
「確かにそう思います！どういう非合法の研究してこんなちみっちゃい体型になったのか！そんな貧相な体型で満足か！ペドに愛されたいのか！――いろいろ、いいたい事は確かにありますけど！」
綾乃（ティアナ）は、本当にフォローのつもりで言ったのだ。
「この方の外見に騙されてはいけません！この方は、それはそれは大年増で、私達のような可憐な乙女が放つ色気ではなく、むしろ加齢臭を心配するトシさえ越えているのですっ」「つまり……」
うーんっと。
琥珀は考えをまとめた。
「徹底的に若作りしたお婆さんってことですか？」
「そうですっ！その通りですっ！ですから、お年寄りに対する敬意の目で、この方を見るべきなんです！」
「そうですかぁ」
琥珀は素直に頷いた。
「ごめんなさい。お婆さん」

どっかぁぁぁんっっ！

ホール全体が爆発したのは、その瞬間だった。

壁まで吹き飛ばされたルシフェル達の前で、聞いただけで死にそうになるほどの声を口から紡ぎ出すのは――イツミだ。

「――黙って聞いていれば」

「イ、イツミ殿？」

「トシ？大年増？お婆さん？」

「でですから！これは客観的な事実！」

「尚悪いっ！」

イツミは綾乃（ティアナ）に怒鳴った。

「折角、コイツを何とかしてやろうと思ったけどヤメた！ほら二人とも！コイツをさっさと始末なさいっ！時間は１分！」

「い、１分？」

ルシフェルがたまらず悲鳴を上げた。

「無茶ですっ！相手は艦隊並の砲撃力を誇るんですよ！？」

「だから？」

イツミはきっぱりと言い切った。

「問答無用っ！１分過ぎたら私がまとめて皆殺しよ！？」

「……どうします？」

「どうしますって」

ルシフェルと綾乃（ティアナ）が顔を見合った時だ。

「あのぉ」

琥珀が言った。

「敵の敵は味方ですよ？どうです？三人であのお婆さんを倒すってのは」

のった！

二人は思わずそう叫びそうになったのを、何とかねじ伏せた。

「とにかく」

わざとらしい咳払いの後、綾乃（ティアナ）は琥珀に告げた。

「恨みはありませんが、立ちふさがるなら、排除します」

「ううっ……痛いの、イヤなんですけど」

「安心してください。私もです」

次の瞬間、

「きゃっ！」

「ぐっ！」

綾乃（ティアナ）とルシフェルは、不可視の力にはり倒され、壁に叩き付けられた。

衝撃破陣（ソニックブラスト）。

衝撃波により敵を撃破する衝撃系攻撃魔法における最高レベルの魔法だ。

「イヤだから、さっさと終わらせてしまいます♪」

それが、琥珀の一撃であることは明白だ。

「――――さて、これでお婆さんだけになりました♪」

「ったく」

イツミは失望のため息を吐いた。

「３０秒経ってないわよ？」

視線の先の二人は、ピクリとも動かない。

「――――情けない」

「ふふっ。お婆さん。畳の上で大往生ってのは諦めてくださいね？」

「イツミ様とお呼び。この死に損ない。今度こそ、確実な死をあげる」

「それはそれは♪」

琥珀の周囲に無数の光球が発生。光の刃がイツミの体めがけて襲いかかった。

イツミは、身じろぎ一つすることなく、全てを受け止めた。
「えっ？」
琥珀は、その光景が理解できなかった。
光――魔法の矢は、すべてイツミに吸収されたように見えた。
魔法の矢は、避けるか障壁系魔法で弾くか。そのいずれかしか、対抗する方法はない。
なのに、魔法の矢は、文字通り、イツミに吸い込まれたようにしか見えない。
そのありえないことが、琥珀の前で起きた。
「ど、どういう？――きゃっ！」
その答えを、琥珀はすぐに味わった。
背後から襲いかかる魔法の矢の奇襲攻撃。
それは全て――
「私の魔法に、何をしたんです！？」

「――知りたい？」
背後から襲いかかる魔法の矢に翻弄された形の琥珀の耳元で聞こえた声。
「お婆さん！？」
驚いて振り返ると、イツミの姿はどこにもなかった。
「ご、ご臨終ですか？」
パカンッ！
思わず手を合わせた琥珀は、後頭部に激しい痛みに襲われた。
「痛いっ！――えっ？」
琥珀は、痛みの原因を知ろうと振り返ったつもりだった。
振り返ったつもり。

だが――

琥珀の意識は、背後を認識することなく、失われた。

「うっ……」
痛い。
何だか、頭がズキズキする。
美奈子は、頭を押さえながら辺りを見回した。
そして、自分が残骸の中に横たわっていることを知った。
「ど、どうしたの？」
そこは、気を失うまで何もなかったはずなのに――。
しかも、室内を照らし出していた灯りがほとんど消えかけている。
「？」
美奈子は、立ちつくしているグリムの姿を見つけた。
その顔は、世界樹を見つめたまま凍り付いていた。
グリムにつられるようにして見た世界樹。
マングローブのような根ばかりの植物だった。
それが今では――
「な、何が！？」
美奈子は自分が腰を抜かさないのが奇跡だと思った。

ザワザワザワ

植物の根が、美奈子の目の前で、まるで意志を持つように動き回っている。

――あり得ない。

美奈子の理性は、目の前の現実を否定しようと懸命だ。

根が自分の意志を持って動くなんて、あり得ない！

だが、美奈子の目の前で起きていることは、まぎれもない現実なのだ。

世界樹の根が、何かを探すようにザワザワと蠢く。

「ち、ちょっと！」

美奈子は、グリムに駆け寄ると、その胸ぐらを掴んだ。

「何をしたの！？」

「世界樹の」呆然とした顔のグリムは、うつろな顔で答えた。

「世界樹の葉を――接ぎ木したのです」

「接ぎ木したの！？」

接ぎ木――

世界樹を巡り、美奈子がグリムに教えた育て方。

無論、美奈子は冗談に近いつもりだった。

しかし、言われた方は、そうとはとっていなかった。

「クローンを削って、そこにオリジナルを埋め込んだのです」

「それでどうやったら植物がバケモノに！？」

美奈子は、世界樹の根に襲われることを警戒しながら、グリムに怒鳴った。

「答えなさいよ！それだけであああなるはずがないでしょう！？」

「なったんです！」美奈子の手を払いのけながら、グリムが怒鳴り返した。

「クローンとオリジナルが接合したのは確認した！ところが、その後で」

「ああなった」

「理由が――わかりません。あれが、本来の動きなのか、違うの

か」
「……」
美奈子は、じっ。とグリムを見つめた後、言った。
「世界樹に関するデータって、もしかして」
「？」
「グリムさんを唆した奴らからもらった？」
「勿論。世界樹の遺伝子組成なんて、研究者である我々でも知ることは」
「世界樹のオリジナルを盗むことも？」
「クローンをよりオリジナルに近づけるためには当然です」
「そう、唆されたの？」
「……はい」
「この馬鹿っ！」
美奈子のめりこみパンチがグリムの顔面にめり込んだ。
「つまり！」
めり込んだ顔面を何とか戻そうとあがくグリムの前に仁王立ちになった美奈子が怒鳴った。
“この状況”こそが、そいつらの狙いだったってことじゃないっ！」
「――――えっ？」
「よく考えて！脳みそあるなら！」
呆然とするグリムは、顔を真っ赤にしている美奈子を見た。

意味がわからない。
連中は、私の研究を確実なものとするために、支援してくれたはずだ。

「世界樹を復活させたいっていう、グリムさんにつけ込んで、絶対に失敗するように、渡したデータを書き換えた！それを元に研究を続ければ、結果はこうなるように！」

「馬鹿なっ！」
グリムは血相を変えた。
「私が利用されただけだと！？」
「その結果が目の前でこんな怖いことになってるじゃないっ！」
「世界樹を復活させることは、我が獄族の宿願だ！魔族、神族を隷従させたかつての栄光を！」
「種族の誇りなんて、こんな時に出す言葉！？」
「被創造物の分際で！」
「そのブンザイに頼ってきたブンザイでエラソーにほざくなっ！」
「――――っ！」
「もうわかった」美奈子は、世界樹を睨みながら、
「これ、どうして起きたかわかった。これ、どうして暴走しているのか」
「暴走！？」グリムは困惑した顔で美奈子を見た。
「これがどうして暴走だと断言できるのですか？」
「植物が根を暴れさせるなんて、暴走なんてカワイイもんですか！」
「相手は世界樹だ！」
「この暴走を前に、よく言えるわね！？」
グリムは、信じられない。という顔になる。
「ちょっと考えればわかることよ？」
「――――どうして、です？」
「クローンの遺伝子をいじったんでしょう？」
「はい」
グリムはどこかからメモをとりだして熱心に書き始めた。
「つまり、遺伝子をいじられた時点で、世界樹は世界樹であって世界樹じゃなくなったの」
「？」グリムのメモをとる手が、止まった。
「世界樹であって、世界樹じゃ、ない？」
「遺伝子情報が書き換えられた時点で、別物になっちゃったのよ」
「ま、まさか」

世界樹を芽吹かせるために、遺伝子の情報を書き換えた。
それは事実だ。
そうしなければ、世界樹が芽吹かない。
芽吹かなければ、意味はない。
それが、間違いだったというのか？
「一部を書き換えられた遺伝子は、それに順応するように、他の遺伝子自身が自らを書き換えることがある――遺伝子の世界じゃ、ジョーシキよ」
「よくご存じなんですね」
「空想科学小説（サイエンスフィクション）も読むから」
世界樹の根が、一斉に動いたのは、その瞬間だ。

ズンッ！

世界樹の根が、一斉に天井の一角めがけて先端を突き立てた。

「！？」

ズンッ！

ズンッ！

ドリルのように鋭い先端が壁を抉り、土を掘り出す。

「ま、まさか！？」

「美奈子さん」
グリムが驚いてよろめいた美奈子の腕を掴んだ。
根が土を突き続ける音と振動が二人を揺るがす。
「どういうことです？話しが終わってません」

「――世界樹のクローンは、遺伝子を書き換えることでオリジナルとは別モノになった。ところが、接ぎ木することで、オリジナルの遺伝子情報が入ってきた。結果として、世界樹の中で、遺伝子情報同士がぶつかりあって、パニックになってるのよ」
「パニック？」
「そう。遺伝子情報の混乱は、世界樹にとってバグやウィルスみたいなものを産み出す。それに犯されて」
「世界樹は」グリムの顔は真っ青だ。
「そうよ」その顔を軽蔑を込めて睨んだ美奈子は、再び世界樹に視線を戻した。
「世界樹というより、もっと別な、得体の知れないシロモノとなって――暴走した」
「私は知らないっ！」グリムはわめく。
「私は古来の研究資料を基にしただけだ！」
「それが問題だったのよ！こんな時にあんたの責任なんて知るもんですか！」
パンッ！
美奈子はグリムの横っ面を張った。
「いい？これ、大事だから答えて！」
グイッ。
再び、グリムの胸ぐらを掴んだ美奈子が命じた。
「――暴走した世界樹、どうなるか予測して」
「い、遺伝子がやられたというのが本当なら」
グリムは必死に思考を働かせた。
「暴走した世界樹は、本来、最低限度に押さえられた育成を開始する可能性が」
「際限なく育つだけ！？」
「まず、育成に必要な養分を求めて動き出す」
「……」
育成

養分
美奈子は、その言葉の意味を理解するのに時間を必要とした。
世界樹の養分。
それは、水や太陽光ではない。
生命力――つまり、命だ。
しかも、世界樹は“世界”を冠するほどの樹木。
そのサイズは。
「まさか、コイツが地上に!?」
「ええ。地上のあらゆる生命体を襲い、生命力を吸い取る。そして、太陽光を受けて一気に成長を開始」グリムは真顔で答えた。
「推定幹周り５００キロ。樹高４０万キロ位かと」
「持たない!」美奈子は悲鳴をあげた。
「そんなの、地殻が支えられるの!?」
そう。

胴回りが５００キロあって、高さが４０万キロもある物体を、地上に建てようとする。
そんな重量物を大地が支えることが出来るとは、考えられない。
樹高４０万キロ。
月と地球の間の距離は３８万４，４００ｋｍといえば、その規模がわかるだろう。

「世界樹はかつて、空間に浮いていたそうです」グリムは答えた。
「この地球を崩壊させた後、世界樹は宇宙空間に浮きます」
「空気もないのよ!?」
「その育成に空気は不要。必要なのは生命のエネルギーだけです」
「……話しが大きすぎるわよ。何!?私に世界を救えとでも?」
美奈子は呆れを通り越して笑ってしまった。
「そんなこと、出来るワケないでしょう!?」
「――ええ」

グリムは頷くと、
「きゃっ！？」
美奈子を突き飛ばした。
「ぐ、グリムさん！？」
「世界樹が、動きます」
「！？」

世界樹の根。そのまとまった部分が木なんだろうと美奈子は見当をつけた。

ズズズズッ

美奈子の目の前で、根が穿った穴へ向け、その木が移動を開始した。
その動きは鈍い。

「地上へ出る！？」
「――そうです」
「止めなくちゃ！」
「不要です」
グリムは微笑んだ。
「そのまま、出しましょう。そして、結果を見るのです」
「結果？」
「ええ――世界樹が、本当に暴走しているのか。これ自体が、本来の動きなのか」
グリムは本当に楽しそうに笑った。
「美奈子さん」
「な、何？」美奈子は、後ずさりながら訊ねた。
グリムが笑ったとき、ロクな目にあった覚えがなかった。
「あなたは本当に、愉快で、愚かで――だが、不思議な人だ」

「褒めてる？」
「ええ！あなたの言葉を聞くと、それがどんな間違いでも、真実だと思いこんでしまう！」
美奈子は、グリムが言いたいことを理解できた。
グリムが言いたいのは、美奈子自身の判断を、偽りだということだ。
「研究の分野において、何のデータもなしに仮定だけで物事を判断することは許されません」
「だけどっ！」
「美奈子さんの説は全て仮定――なら私は」
グリムは世界樹を見つめながら言った。
「結果をもって、あなたの仮定の是非を判断させていただきます」
「その前に死んじゃう！地球が壊れちゃうじゃないっ！」
「そうです。でも、それが我々獄族にとって、何だというのです？」
「――狂ってる」
美奈子はポケットに手を入れた。
中には、万一に備えて隠していた小型ナイフがある。
これで殺せる相手かはわからない。
だが、美奈子にはそれ以外の選択肢はないように思えた。
「あなた、狂ってる」
「言ったのはあなただ」グリムは勝ち誇っているようにさえ見える。
「我々は、全てを破滅に追い込んでいく。そこに反省という言葉はない。そんな感覚がないと」
「っ！！」
「おやおや、そんな怖い顔しないで下さい」
ポケットの中を漁る手が、何かに触れた。
それは、小さな石だった。
ナイフが――ない。
「お探しのものは、コレですか？」
手品のように、グリムの手に現れたモノ。

ナイフだ。
「全く、探していたのですよ？書斎から消えたので」
「か、返して！」
「元から私のですって」
「それでもっ！」
美奈子は躍りかかろうとして、
「痛いっ！」
右腕に痛みを感じた。
焼けた鉄を押しつけられたような痛み。
それは、かつて味わったことのある痛みだ。
忘れることは出来ない。
あの神社での出来事――
「……っ」
思わず押さえた手の中から、何かぬるりとしたモノがこぼれていく。
自分の血だと、イヤでもわかった。
「だ、ダメッ！」
「？」
怪訝そうな顔をするグリムの前で、蹲った美奈子が怒鳴った。
「まだダメっ！」
「何がです？」
「こっちの事情っ！」
「ふふっ。この状況で怒鳴れるなんて」
ヒュンッ
「痛っ！」
体に鋭い痛みが走る。
服が切り裂かれ、美奈子の体から血が流れる。
「――これまでの協力のお礼と思って下さい」
ペロリ。
グリムは、ナイフについた美奈子の血を舐めながら言った。

「折角ですから、犯しながら切り刻んであげます」
「お、乙女の柔肌、なんだと思ってんのよ！」
「おいしい血だ」
「最低！このサディスト！」――――きゃっ！？
「何とでも」
美奈子を突き飛ばし、その上にグリムは馬乗りになった。
もう、逃げることが出来ない。
「――――ひっ！？」

殺される。

その恐怖に引きつる美奈子の目の前で、
ビリッ！
グリムの手が、美奈子のブラウスを引きちぎった。
ブラジャーを男の前に晒す羞恥心が、恐怖心をさらに深める。

「や、ヤメっ！」
「そうはいきません」
はねのけようとする手を、グリムは乱暴にはねのけ、ブラジャーと肌の間にナイフが差し込んだ。
「やめて！この変態っ！」
ザクッ
返事の代わりに、美奈子のブラが切り裂かれた。
水瀬以外の男の前で胸を晒す羞恥心と屈辱が、美奈子の瞳から涙となってこぼれ落ちた。
「言ったでしょう？犯しながら切り刻むと」
「どうして！」
「どうして？」
暴れる美奈子をねじ伏せながら、グリムは答えた。
「そうしたいからですよ」

「私は嫌っ！」
「私がしたいからそうするだけ――――さぁ」
グリムの腕が、美奈子のスカートの中に入り込む。
「王手（チェックメイト）です」
その言葉と共に引かれた腕が掴むのは、美奈子の、女の子としての最後の防御。
「っ！」
ポロポロとこぼれる涙。
それは、これから自分が何をされるか理解しながらも、何も出来ない自分の無力さの証。
愛してもいない相手。
自分を殺そうとする敵。
そんな相手に犯される運命。
嫌だ。
絶対に嫌だ！
「嫌ぁぁぁぁっ！」
美奈子は激しく暴れた。
「絶対！絶対やだぁぁっ！」
暴れる美奈子の指先が、何かに触れたのは、その時だ。
美奈子がそれを掴んだのは、グリムを殴るため。
確実に仕留めるために固いモノを探した結果。
――――これって。
美奈子は、感触で、それが何か理解した。
「……」

「ふふっ。諦めがついた見たいですね」
グリムが勝ち誇った顔で、抵抗を止めた美奈子の太股を割った。
「すぐに快楽の中へ、そして死の世界へご案内しますよ」

「――ねぇ」
美奈子の甘い声が、グリムの動きを止めた。

「せめて、初めてなんだから」

その恥じらうような微妙な声色。
それが、グリムを止めた。

「はい？」
何を？そんな顔のグリムが美奈子を見た。

恥じらいながら、胸元を強調する美奈子が、そこにいた。
両腕に挟まれた豊かな（バスト９０、ちなみにＤカップ！）が卑猥な形に歪んでグリムを誘っている。

ゴクッ。

グリムが唾を飲み込んだ音が、妙に響く。

そのグリムに、美奈子は甘えた声で囁いた。

「――キスして？」

「キス？」

「そう。キス……初めてだから、せめて愛されたいもの。優しくして」

「フフッ。わかりました」

そっ。

近づくグリムの顔。

微笑みながら美奈子はその顔を見つめる。

そして――――

「葉子っ！」

突然の怒鳴り声に、グリムは驚いて顔を離してしまった。

「なっ！？」

グリムは、自分が襲った存在が理解できなかった。

それは、美奈子の影から襲ってきた。

「何っ！？」

まるで、美奈子の影が液体となって自分を包み込むような、そんな恐怖さえ湧いてくる光景に、さしものグリムも戸惑った。

体勢が体勢なだけに、グリムもとっさには動けない。

グンッ！

闇の液体が、ついにグリムを捉えた。

そのタイミングを見計らったように、美奈子が体を起きあがらせ、傷が浅い左腕を伸ばした。

「！！」

グリムの額に、美奈子の指が触れた。

否。

美奈子の指が、何かをグリムに押しつけた。

「何っ！？」

額に感じる固くて冷たい感触は、すぐに異様な感触となって、グリムを襲った。

額に強い魔力の発動を感じたグリムが、額からその感触を放つ物体を引き剥がそうと藻掻く。

「こ、この魔力は！」

「そう――――」

美奈子は、胸元を晒すことさえ忘れ、床を転げ回るグリムを見つめていた。

「服従石――――私の血がついている」

「これは！これが発動したら！」

「発動したら――――私の下僕よ？グリムさん」

「ご、獄族の私が、人間の下僕だと！？」

「死ぬほど可愛がってあげる」

「い、嫌だっ！」

「私だって、こうなる時に言ったはずよ？そのセリフ」

キィイイイイイッッ！

グリムの額から光が生じた。

服従石が発動したのだ。

「う、うぉおおおおおおっっっ！」

ケダモノのような声を上げるグリムを前に、美奈子は息を整えながら告げた。

「――――王手（チェックメイト）」

第六十七話

「いつまで寝てるの！？」
「えっ？」
綾乃（ティアナ）は、体を揺すられたショックで目を覚ました。
まだ視界がはっきりしないせいで、自分の身に何が起きているのかわからない。
「寝る子は育つっていうけど、育ち盛りのトシじゃないでしょう！？」

そんな、声が聞こえた気がした。

「それとも何！？寝た分だけ、胸が育つとでもいうの！？その貧乳で！」

いえ。この胸、私の胸じゃないし。

「寝て胸が育つなら、私の方が寝てるわよ！」

無理でしょう――って、私、誰にツッコミいれてるの？

「あーっ！ムカつく！」

ビビビビッ！

「痛いじゃないですかっ！」
お多福風邪でもこうはならないだろう。それほどふくれあがった頬を押さえながら、綾乃（ティアナ）は泣いて抗議した。

「女の顔を何だと思って！」
「あーっ。うるさいうるさい」
綾乃（ティアナ）に連続ビンタを喰らわしたイツミは、煩わしそうに手をパタパタした。
「だったら、さっさと起きればよかったのよ」
「そんなこと言われたって……」
「皇女をひっぱたくなんて、いい経験させてもらったわ♪」
イツミは鼻歌を歌いながら、ルシフェルに言った。
「封印は終わってるわね？」
「はい」
ルシフェルの視線の先。
綾乃（ティアナ）はそこに、大きな黒い円筒を見た。
「何です？」
「中、よく見なさい」
イツミに言われ、綾乃（ティアナ）はそっと筒に近づいた。
黒いフィルムが張られたような筒の中には、誰か、人がいた。

琥珀だ。

まるで眠っているように目をつむる琥珀の顔に苦しみは感じられない。

「こ――――これは」
「ルシフェルに空間ごと封印してもらったのよ――――いい交渉の道具が手に入ったわ」
と、イツミはほくそ笑む。
綾乃（ティアナ）はその意味がわからない。
「交渉？」
「グリムとよ」
「今更？」

「今更」
イツミはルシフェルに、円筒の移動を命じると、移動を開始した。
「世界樹の葉と、この子の命の交換――グリムならのってくるわ」
「私は、信じられません」綾乃（ティアナ）はイツミの少し後ろを歩きながら言った。
「グリムが、配下の命と引き替えに物事を諦める性格とはとても」
「この子は、グリムにとって」
「グリムにとって？」
「――そういう娘よ」
「は……ぁ？」

「起きなさいっ！」
「グハッ！？」
「いつまで寝てるの！？」
「そ、そうは言われても……」
痛む顎をさすりながらグリムは起きあがった。
自分の身に何が起きたのか。
グリムはそれを知りつつ、反抗する意志だけはわかない。
「おはようございます。美奈子様」
そう言って、深々と頭を下げるだけだ。
「――へぇ？」
美奈子が興味津々な顔でグリムを見つめていた。
「グリムさん、本当に服従するんだ。私に」
「そりゃぁ、もう」グリムは微笑む。
「私、美奈子様の奴隷です。下僕ですから！」
「……あっそ」
何だか納得出来ないというか、一抹の寂しささえ感じながら、美奈子はグリムに言った。
「三回回ってワン……じゃなくて」

「やらなくていいんですか？」
「するな。世界樹は？」
「現在、地下５００メートルまでのぼっています」
「止める方法は？」
「ありません」グリムはきっぱりと答えた。
「というか、わかりません」
「それでも学者？」
「ああっ！」
グリムは頭を抱えてのたうち回る。
「な、なんて事だ！美奈子様を呆れさせるとは！」
「いえ、あの……最初から期待してないから」

なんて事だ！
そう叫びながらグリムは壁に頭を叩き付け続ける。

「やめなさい！」
「やめました」
「早っ！」
「ただ、もしかしたらですけど」
「何？」
「お客様が、何かご存じかも知れませんよ？」
「お客様？」
「はい――美奈子様のお友達で」
「水瀬君？」
「男性は……いませんね」
グリムが第９層に通じる階段のある壁に視線を送りながら首を傾げた。
「チビと巨乳と貧乳……ちょん切っちゃったかな？」
男じゃない。
つまり、ルシフェルだと美奈子は見当をつけた。

「そう……とにかく」
美奈子は、自分の破れた服に気づき、今更ながらに恥ずかしそうに前を隠した。
「服を」
「では早速」

「……で？」
グリムをボコり続ける美奈子の前で、呆れ声をあげたのはイツミだ。
無論、言葉がわからない美奈子は、来訪者を一瞥しただけで、「ちょっと待ってて！」と言うだけで、殴る拳を止めようとはしない。
「なんでこんな服なのよ！」
「ああっ♪ご主人様ぁ♪もっとぉっ♪」
「ヤメなさいっ！気色悪いっ！――だから、どうして特攻服なのよ！」
「木刀にメリケンサックもありますよ――ああっ、イケない奴隷にもっとバツをぉぉぉっっ！」
「他のはないの！？」
「女王様のボンテージ、巫女服にメイド服に各種制服！」
グリムはどこからか、制服がずらりと並ぶラックを引っ張り出して来た。
「これなんてどうですか！？カ○ンの制服！ケープは1年の緑！」
「制服しかないの？」
「制服は、人類の産んだ文化の極みですっ！」
「力説しなくていいわよ！――ちょっと待ってて」
さすがに特攻服はマズイと思ったのか、美奈子は制服を吟味した後、結局――
「婦警、ですか」

「というか」
美奈子が選んだのは婦人警官の制服。
元来、知的な部類に入る美奈子に、そのカタい制服は実によく似合った。
“ご主人様は制服が似合うっ！”
“これこそ芸術だ！”
グリムは感涙にむせびながらカメラのシャッターを押し続ける。
「サイズ、これしか合わないのよ」
「……はぁ？」
絶対ウソだと思うグリムのあきれ顔を見た美奈子は、顔を赤くして怒鳴った。
「そういうことにしておく！これ、奴隷のジョーシキ！」
「わかりました、ご主人様っ！」

「――あのぉ」
ルシフェルが恐る恐る手を挙げながら言った。
彼女達の存在を忘れて、その前で着替え続けたことに気づいた美奈子は、一瞬死にたくなった。
「そろそろ、いいですか？」
「どうぞ」
「グリム――さんに、用があるのですが」

「――つまり」
美奈子の説明を、ルシフェルと綾乃（ティアナ）が翻訳して、イツミに告げる。
どこから出たのか、グリムの用意した椅子に座り、テーブルに出されたお茶を飲みながらだ。
その周囲では、グリムが茶のおかわりを用意し、カノッサとセージュが琥珀の看病を行っている。
「“服従石”、ねぇ」
突然、それをイツミが日本語で言ったから、みんなが驚いた。

「何で日本語!?」
「喋れたんですか!?」
「うっさいわねぇ。人間界の言語なんて、要するに共通語と、各部族のローカル言語が母体なんだから、私にとっては簡単に覚えられるシロモノなのよ。とにかくグリム」
「はい？」
「世界樹、本当に止められないの？」
「暴走の原因がわかりません」
「現在位置は、地下４８０メートル毎時５０メートルで地上へ」
「ふむ……」
「いっそ、燃やしてしまうとか」
「世界樹のため込んでいる生命のエネルギーが爆発します」
綾乃（ティアナ）の提案をあっさり否定した。
「この辺、地殻まで吹き飛びますよ？」
「切り刻んで活動を停止」
ルシフェルの提案も、却下だ。
「硬度１０――人間界のダイヤ並です。それに、根は私の見る限り、かなり高レベルな運動が可能――魔族や神族の動きでも避けきれるかどうか」
「じゃあ、どうしろと？」
「そこなんですけど」
グリムの視線は、美奈子に注がれる。
「美奈子様、ご見解を」
「私？」
「そうです」
グリムの頼もしげな視線を受け、
「ご見解っていうほどじゃないけど……」
美奈子は、少しためらいに近い表情を浮かべながら、グリムに訊ねた。
「グリムさん。世界樹のオリジナルを、クローンに接ぎ木したとい

いましたよね？」
「はい」
グリムは懐からＰＤＡ（携帯端末）のような機械を取り出し、何事か操作する。
すると、何もなかった空間に、美奈子達にはわからない表示と文字が浮かび上がった。
「オリジナルとクローン、双方の遺伝子情報を接合することで、両者を一体化。オリジナルを発芽させるつもりでした」
「クローンの養分を、オリジナルに回すってことも可能なのね？」
お茶を飲みながら、そう訊ねたのはイツミだ。
「それで、芽を出させ、オリジナルがクローンに代わるようにした」
「そうです。ところが、双方の遺伝子情報を接続した途端、暴走」
「それは、普通なの？」
「ありえません」
グリムは首を横に振った。
「通常、異なる遺伝子同士が接触した場合、合わなければ、それだけで処理されます。
つまり、接合部分が破壊される。
それが、まるで、接触がキーだったように暴走したのです。
こんなこと、普通ではありません」
「ふぅん？」
カチャン
イツミはティーカップをソーサーに戻し、何故か琥珀の方に振り返った。
「それで？」
皆の視線が集まる先。
そこにいるのは、
琥珀

セージュ
そして――
眠っている琥珀はともかく、セージュは気絶した琥珀の脈拍を調べたり、汚れた顔を拭いたりと、甲斐甲斐しく働いている。
その横で固まっているのは、彼女一人だけ。
身を固くして、グリム達の言葉を聞き逃すまいとしている。
それが、彼女にとって致命的なミスだった。

「何が狙いなの？」
イツミの声は静かだが、全てを貫く厳しさを持っている。
「……」

「私が気づかないとでも思っていた？――カノッサ」

「な、何の話ですかぁ？」
ゆっくりと振り返ったカノッサは、普段通りのおどけた笑顔を浮かべていた。
「何、何ですか！？」
駆け寄ろうとするカノッサだが、

ドガガガッ！

その足下に突き刺さる棒手裏剣の群れに、足を止めざるを得なかった。

「動かなくていい」
笑顔を引きつらせるカノッサに、イツミは冷たく命じた。
「質問に答えなさい。――答えている間の命は保証してあげる」

「だ、だから――」

「今までバレなかったから大丈夫。そう、タカをくくりすぎたのが命取りね」
「あ、あの、私」
「イツミ様？」綾乃（ティアナ）が驚いて椅子から腰を上げた。
「こ、この子は」
「グリム、まず、はっきりさせて頂戴」
イツミは、カノッサを睨み付けたままだ。
「あなた、誰と取引したの？」
「そ、それは――」

「かわりに言ってあげようか？第四計画」
「っ！！」
イツミの言葉に、グリムの顔が強張った。
「別名“中世協会”とも。大量粛正と文明の破壊をもって人類を中世のレベルまで戻すべき。そう主張する連中――そうでしょう？」

「カノッサ！」
綾乃（ティアナ）が怒鳴った。
「あ、あなた！あの組織がどれほど恐ろしい存在かわかって！」
「――わかってますよ。姫様」
カノッサは冷えた眼を光らせ、口を開いた。
「私は、この地球……人間界が大好きです。美しいこの自然が」
「さ、先のヴォルトモード卿の件、知らないわけでは！」
「ええ」

くすっ。
カノッサは小さく吹き出しながら頷いた。
「魔族、神族のほとんどが、人類滅亡に内心で同意しつつ、結局、建前だけでヴォルトモード卿を見殺しにしたことでしょう？」

「違うっ！」
綾乃（ティアナ）は否定した。
「地球の環境を破壊し続ける人類の振る舞いは、確かに我々の間でも問題とはなっています。しかし、卿の振る舞いは決して評価されるべきことではありません！」

「評価はしてるでしょう？だから、魔界に帰還したヴォルトモード卿は、２，７００年前の爵位と領地を復活したし、卿の元には、今や一大勢力足りうるほどの勢いで魔族が集まっている。
それは何故？
皆がわかっているからですよ。
ヴォルトモード卿は、自分達がやりたくて仕方ないことを、かなりの勢いでやってくれた英雄だから。
人間に破壊された自然を復活させ、
増えすぎた人間を減少させ、
魔素により人類の文明を崩壊させるきっかけを作った。
ううん？
そうじゃない。
皆がヴォルトモード卿の下に集まるのは、それを止めた後ろめたさが、皆にあるから」
カノッサは口元だけ微笑んで、綾乃（ティアナ）を見た。

「そうでしょう？姫様」

「……」

綾乃（ティアナ）にも、カノッサの言い分は納得出来る。
綾乃（ティアナ）自身が、一人の魔族として、緑と人間のバランスの天秤に一撃を加えたヴォルトモード卿の功績を否定することが出来ない。
むしろ賞賛したい。
それが、本音だ。

（この子は正しいことを言っている）
綾乃（ティアナ）も、そう認めたい。
だが、ヴォルトモード卿の振る舞いを問題とし、彼の元へ援軍を送らなかった帝室の一員として、それは出来る相談ではない。
「ヴォルトモード卿の一件はさておき」
綾乃（ティアナ）は、やっと言葉を出せた。
「……何を、したいのです」
ごくっ。
からからに乾いた喉に、無理矢理、唾を送り込むのがやっとだ。

カノッサ。

彼女は、単なる部下。
自分に忠実な、部下のはずだ。
ちょっとはふざけたところもある。

それが――――

「文明の滅亡」

カノッサはあっさりと、そんな物騒なことを言ってのけた。

「総人口３２億。せっかく英雄ヴォルトモード卿が、かつての半分にまで減らしてくださったのです。私達は、さらにそれを3億程度

まで減少させるだけ。現在の文明は根本から破壊。農耕中心の生活へとイヤでも移す――それが、我が第四計画の狙いです」

ちなみに、総人口3億は西暦1，000年頃とされる。

それを知るカノッサは歌うように言った。

「時計の針を1，000年分、巻き戻すとも言えますね」

「それで――人類を支配すると？」

イツミのそんな言葉に、カノッサは頷く。

「我らが、人類の言うところの“神”として存在することで、人類の規範を定める。規範をもって、我々が人類を支配する」

「出来るの？」

「人は腐ります。腐るからこそ、破壊と再生という、完全にコントロールされた管理が必要なのです。

文明の発生、繁栄、終焉――そして、戦乱。このサイクルを適切にコントロールすることで、我々は人類を永遠の中世に置き、人々を支配する」

うっとりとした顔で、カノッサは言った。

「決して過ぎた進歩を認めない。完全な管理――すばらしいと思いませんか？」

「全然」イツミはあっさりと否定した。

「そんなの、神族・魔族・獄族、全てを出し抜く形で、人間界を支配下に置きたいって連中のタテマエじゃない」

「なっ！？」

「タテマエを美徳で飾るけど、一皮剥いたらドロドロ――――あーあ。イヤになっちゃう」

イツミは鼻を押さえながら手をパタパタやった。

「言葉が腐ってるわよ？」

「真理は常に受け入れられるとは限りません」

「異端に限って真理をカタリたがるものね」

「……人間に、ここまで地球を破壊するに任せた者達こそ、異端です」

「そう？数からすれば主流よ？」

「タテマエとホンネは違います――――イツミさん」

「イツミ様とお呼び。――――グリム、お茶」

「っ。……すでに、我々の蒔いた種は天界・魔界・獄界にて芽吹きつつあります。ヴォルトモード卿の一件で、それは確実に、強く、激しく」

「その結果が」

イツミは、お茶を飲みながら言った。

「ヴォルトモード卿を復活させたり、あちこちでゲートの封印破ろうとしたり、人間そそのかせて犯罪に走らせたり？やってることがテロでしかない。それが、気に入らないのよ」

「ち、ちょっと、待ってください」
青い顔をしたルシフェルが発言を求めた。
翻訳装置が壊れていることを祈りながら、ルシフェルはイツミを見た。
「い、今の言葉って、まるで」

「そうよ？」
イツミはティーカップから口を離し、小さく皮肉めいた笑みを口元に浮かべた。
「ヴォルトモード卿の封印を外すべく、人間をそそのかしたのも。ユーリが報告して来たゲート封印解除も。
その他、厄介事――天界はかなりの件数、第四計画が絡んでいると断定している」

「ご明察」
カノッサはペロリと舌を出した。

「他にもいろんな計画が実行中です。
最近は、あちこちから潤沢なまでの資金援助どころか、人的支援までいただいているので、それはそれは――クスクス」

「全部、話してもらう必要がありそうね」

「私が知ってるのは氷山の一角ですわ」

「世界樹も？」

「ええ――あれは最初から、暴走するプログラムが」

ハッ！となったカノッサは、慌てて口を閉じた。

「グリム」

「はい」

自分の研究が潰されたと知ったグリムは、怒り心頭の顔でイツミに頷いた。

「カノッサを取り押さえてくれたら、私の裁量の範囲内でお尋ね者の身分、どうにかしてあげる」

「この子の魂が欲しいのですが」

「シェリスをどうやって屍鬼にしたかの技術支援も欲しいわね」

「後で話しましょう。アレは私のオリジナルですから――琥珀は、使えますね？」

「峰打ちだから。ほら。もう起きている」

「感謝します――いろんな意味で」

「殺さない程度に痛めつけていいわよ？」

イツミは冷たく、グリムに告げた。

「脳みそさえ残っていれば、こっちはそれでいいから」

「――ヒッ！？」

青くなったカノッサが逃げ出そうとするが、グリムはそれを逃さなかった。

「屍鬼化の見本になっていただきましょうか？」

死にものぐるいで暴れるカノッサをグリムが取り押さえるまで、我慢強く待っていたのは、誰でもない。

美奈子だ。

「あのぉ……それで」

「何？」イツミが煩わしそうに一瞥した。
「さっさと言いなさい」
「世界樹が暴走したままなんですけど？」
「……」
「……」
「……」
ギャーギャーわめくカノッサ以外、全てが沈黙した。
「どうしよう」
「どうしたら？」
「諦める？」
「それはちょっと……」

第六十八話

「つまり」
美奈子は、話をまとめた。
「世界樹（あれ）は、その“第四計画”とかいう、あの戦争を引き起こした悪の組織のせいで暴走した」
「そういうこと」
美奈子達は、世界樹が開けた巨大な穴を前に立ちつくしていた。
「内部にたくさんのエネルギーを蓄積しているから、下手に攻撃すると、ここらへん一帯が吹き飛ぶ」
「地殻までいきますから、この列島は沈みますね」とグリム。
「かといって、細切れにも出来ない」
「硬度１０――ダイヤ並です」
「樹木の皮がどうやったら、ダイヤ並になるのやら……ご都合主義」
「それ以前に、根が邪魔して、接近戦はほぼ不可能です」
「――打つ手なし」
美奈子は、深いため息と共に、結論をはき出した。
「普通、そう思うわよねぇ」
「普通？」
綾乃（ティアナ）は、美奈子の言葉に眉をひそめた。
「それは、どういう意味ですか？」
美奈子は、問いかける綾乃（ティアナ）の横をすり抜け、拘束され、床に投げ出されたカノッサの前にしゃがみ込んだ。
「あのね？」
問いかけた美奈子は、すぐに顔をしかめた。
相手がわめく言葉がわからない。
何か、とてつもない罵りを受けているのだけは、朧気ながらわかる。
今は、わかる程度では困るのだ。

「誰か、通訳してもらえませんか？」
「はいこれ」
イツミがポケットから取り出したのは、イヤホンとマイク付きの補聴器みたいなもの。
「翻訳装置よ」
「魔界のとは違いますね」と、綾乃（ティアナ）が興味深そうに装置を見た。
「魔界の技術力があれば、イヤリングまで小型化出来るんだけどね」
イツミは残念そうに微笑んだ。
「天界の、こっち側の技術力は魔界に比べてかなり劣るのは認めないと」
「まぁ、使えるんですよね？」
「――ええ。名前、なんて言ったっけ？」
「私？桜井です。桜井美奈子」
「そう。桜井、一々説明しなくても、大体わかるでしょう？」
美奈子は、イヤホンを耳につけ、マイクのクリップを服にとりつけた。
電源らしいランプがグリーンなのを確認して、カノッサに語りかけた。
「言葉、わかります？」
「――人間なら」
カノッサは、憎々しげな眼で美奈子を睨み付けながら言った。
「もっと謙りなさい（へりくだ）」
「今、そんなこと言える立場ですか？」
「――っ」
「教えてください。世界樹の暴走を、どうやって止めるのか」
「知らない」カノッサはそっぽを向いた。
「知らないはずはありません」
「知らないものは知らない」
「――意識は知らなくても、カラダが知ってることもありますよね？」

「？」

「生爪でも剥がしたら話してくれます？」

「き、貴様っ！」

カノッサは血相を変えて怒鳴った。

「捕虜に関する取り扱いは！」

「あなたは捕虜ではありません――テロリストです」

美奈子がきっぱりと、カノッサの声を遮った。

「っ！？」

「テロリストは捕虜になる資格はありません。空気の無駄遣いですから、さっさと殺すのが、法に則った正しい処遇なのです」

「ふ、ふざけないで！」

カノッサでなくても、自分を即座に殺すと言われればたまったものではない。

「口でしていいのは、質問に答えること。それまで息をすること。それだけですよ？」

美奈子は、ルシフェルに振り向いた。

「ルシフェルさん、私でも使える武器ってありますか？――拳銃とか」

「……」

ルシフェルは、無言で、腰のホルスターから拳銃を取り出し、弾丸を装填、安全装置を解除した。

「弾は9発。全部、魔族にも効く特殊加工弾だから――反動に注意して」

「ありがとう」

美奈子は、銃を受け取った途端、その重さに思わず落としそうになった。
冷たい鉄の感触が、美奈子に、自分が何を持っているのか、イヤでも思い知らせてくれる。

「……」

銃を手にした美奈子が、カノッサに近づく。
その表情は、冷たく、何物も映し出していない。

「――ね、ねぇ」
カノッサは、見下したような眼で、そんな美奈子に問いかけた。

「あんたみたいな女の子に――う、撃てるの？む、無抵抗よ？」

チャッ

美奈子は、両手でしっかりと銃を握り、銃をカノッサに向けた。

「――ちょっ！？」
驚愕のあまり、目を見開くカノッサに、美奈子は引き金を引いた。

タンッ！

「ひっ！？」
カノッサの目の前で、銃弾が床を砕いた。

「――冗談、やってるように見えた？」
美奈子はそう言うと、カノッサの上に馬乗りになって、銃口をカノッサの延髄に突きつけた。

「質問に答えて――世界樹、どうやって止めるつもりだったの？」

「ど、どうして」

カノッサは涙目になって美奈子に問いかけた。

「どうして、私が――私達が、世界樹を止めるって思ったの？」

「簡単」

銃の引き金を玩びながら、美奈子は言った。

「世界樹が、生命体のエネルギーを、無差別に吸収するなら、地球全土に生命がいなくなる。

――ところが、あなた達の狙いは、そうじゃない。

ううん？

そうなると、あなた達も困る。

つまり、世界樹の暴走は、人類の大虐殺であっても、絶滅を目論むものじゃない」

「よく気づいたわね。人間のクセに」

「考えただけ――答えて」

「……」

「このまま地上に出る。それであなた達の目的が達成できる――あなた、単純にそう思ってるでしょう？」

「――そうよ」

カノッサは、人間に馬乗りにされる屈辱にありながら、達成感さえ感じる顔をひねって、美奈子に視線を送る。

「あの世界樹は、無差別に生命体を取り込み、多くの人々を殺す。それでいいのよ」

「人類が、どういう抵抗するか、わかってる？殺されまくったら、世界がどうなるか、わかってる？」

「――――えっ？」

「あの戦争みたく、こんな銃で戦うだけって、まさか、ホンキで思ってないでしょうね」

「そ、それは？」

カノッサは言われている意味がわからない。

「例えば、反応弾とか」

「反応弾？」

「放射能汚染ナメてない？」

「……」

「……」

相手が首を傾げたことで、美奈子は、意味が通じていないことに気づいた。

「反応弾って、意味、わかってる？」

「……」

ふるふる。

カノッサは首を横に振った。

「大量無差別殺戮兵器！使うのは、米帝と中帝位、人の迷惑顧みない（自主規制）な国ばっかり！そんな国が在庫一掃セールで使ってご覧！？世界樹が目的達成する前に、地上に生命体が住めなくなるわよ！？」

「よ、よくわからないけど……そういうもの？信じられない」

「よく調べてから行動しなさいっ！
人間どころか、マトモな生命体が住めなくなるわよ！？
あんなモノ使われちゃ！」
美奈子は怒鳴った。
「人間をナメるのもいい加減にしろっ！私達人間は、確かに問題ばっかりのヤツもいる！だけど、精一杯、与えられた環境の中で、出来ることをやってるんだ！そんなこともわからないヤツが、偉そうに地球だ文明だ語るなっ！」
「そ、そんなにヒドいの？」
カノッサは、美奈子の気迫に押されてしまった。
「ヒドい！
しかも、都市が破壊されれば、有害物質がまき散らかされて、それだけで汚染される！
一度汚染されれば、下手すれば数千年単位で汚染は続く！
どんな影響が出るか？
考えたくもない！
奇形の人間や生命体、地上にあふれさせることは、あなた達の望むところじゃないんでしょう！？
いい！？
人がいなくなれば、緑が戻るってほど、今の都市は甘くないのよ！？」
「ど、どうすれば？」
「だから、世界樹を止めたいの！止めなきゃいけないの！」
「――っ」
「本末転倒な結果は望まないなら、教えて！時間がないの！」
「……」
「……」
暫しの沈黙の後、カノッサは言った。
「……その前に」

「？」
「せめて、その物騒なモノ、引っ込めてよ」
「じゃあ、何？」
カノッサから説明を受けたイツミは、あきれ果てたような顔になった。
「クローン（あれ）は、正確には世界樹じゃなくて、樹獣（エント）なの？」
樹獣（エント）
魔界に生息する樹の一種。肉食で、根をもって捕食したり、移動する。
「樹獣自体、世界樹の根の残骸が独立して一つの生命体になったとされます。
ですから、世界樹の研究によく使われるんです」
グリムは、何でもない。という顔で頷く。
「本来の世界樹に最も近い遺伝子を持つとさえ言われているのですから――私も世界樹のクローン生成には、樹獣の遺伝子を使用したのは事実です。
クローン生成の際、樹獣の情報はほとんど残さないほど削りましたから、樹獣と同じ情報が残っているとは思ってもいませんでしたよ。
とにかく、あなた方は、私に気づかれないよう、樹獣そのものの持つ、強い食欲を司る――いわば、樹獣の一番厄介な遺伝子情報を、そのクローン遺伝子に組み込んでいたと」
「そうよ」カノッサは言った。

「樹獣は見境なく捕食しようとする強い食欲を持つ。世界樹にその強い欲求があれば」

「そりゃ、スゴいことになりますなぁ」

「どうでもいいけど」

美奈子は納得出来ないという顔で言った。

「肝心なコト、教えて――どうやって止めるつもりだったの？」

「樹獣の弱点は、そのまま活かしている」

「――成る程？」

イツミ、綾乃（ティアナ）、グリムは一斉に、納得した。という顔で頷いた。

「それなら、手の打ちようがありますね」

「やりますか」

「こんな所で、樹獣狩なんて、考えてもいませんでした」

「ど、どうするの？」

一斉に動き出した周囲に戸惑いながら、美奈子はグリムに訊ねた。

「樹獣が、生体エネルギーを奪う相手をどう見つけるか。そこに勝機があるのです――いや、これは盲点でした」

グリムは、腕組みしながら何度も頷いた。

「相手を世界樹のクローンという、限定した視野の中で見ていたことが、過ちの原因でした。成る程……私は視野が狭いのですねぇ」

「あのさぁ」

美奈子は銃尻でグリムを小突いた。

「わかるように言って」

「ああっ！」

グリムは泣きながら土下座した。

「申し訳ございませんっ！美奈子様ぁぁぁっ！」

「つまり」
美奈子は呆れた声で言った。
「樹獣っていう妖魔の精神に同調して、樹を自殺に追い込むの？」
「はい」
グリムは頷いた。
「樹は、魔界でも最強レベルの硬度を誇ります。下手な物理的・魔法的攻撃は一切意味を成しません。従って、樹獣を乗っ取り、その鋭い根で体を傷つけさせ、自殺させるのです。樹獣の精神構造はものすごく単純ですから、美奈子様でも出来ますよ？」
「樹なのに、内臓でもあるの？」
「似たような器官があるのですが、硬度１０を誇る固い樹皮や幹にカバーされて、とてもではありませんが、攻撃が届かないのです」
「根なら出来るの？」
「ええ――樹獣の根の先端は、全てを貫く槍として珍重されている程です。まぁ、それが、樹獣は樹獣のみ倒すことが出来る。といわれる所以ですね」
「――なら聞くけど」
「はい？」
「世界樹化した樹獣って、乗っ取れるほど単純なの？」
「――へっ？」
「へっ？じゃなくてさぁ。世界樹って、魔界に生息している樹獣っていう妖魔ほど、そういう面でも単純なのかって」
「それは――」
考え込むグリムの結論は――
「やって見なければわかりませんねぇ」
「……第四計画って連中って、馬鹿か、さもなければ行き当たりばったりのトンデモ集団だってことね」
「まぁまぁ」
「使われた身では文句言えないか」

「そ、そういうことにして下さい」
「で？誰が試すの？」
「今、彼女を掘り出しにイツミさん達が向かっています」

第六十八話（後書き）

七十話まで後2話。あと2話だよぉ……。
どうする？尻に火がついてきたよ。
まとめられるか？
次回、あいつが数話ぶりに復活しますっ！

年内にケリつけたいなぁ。

第六十九話

数分後、美奈子の前に放り出されたのは、袋から顔を出す悠菜だ。
頭にたくさんのタンコブを作っていることから、かなり痛めつけられて来たことは間違いない。

「あ……れ？」
美奈子は、その顔を見た途端、奇妙な違和感を抱いた。
袋に詰め込まれているのは、水瀬悠理。
その顔を間違えるはずはないのに――
「水瀬君？」
袋に近づいて、その顔をまじまじと見た美奈子は、ルシフェルに問いかけた。
「ルシフェルさん。この子、水瀬君じゃないですね」
「えっ？」
ぎょっ。とした顔のルシフェルが、どう返答して良いのか躊躇しているのは明らかだ。
「水瀬君のご親戚？それとも――お父さんの隠し子？」
「親戚はともかく、隠し子って……」
「“近衛の種馬”って、女性週刊誌でかなり叩かれてる人だから」
「……それ、私にとってはお父さんだから」
「大変だね」
「もう慣れたけどね――それで？」
ルシフェルは逆に訊ねた。
「どうして、そう思うの？」
「だって」
美奈子は言った。
「この子、どう見ても水瀬君じゃないもん」
「水瀬自身ってことにかわりはないんだけど……」

「ちょっとだけ……微妙に違うのよ」
「どこ？」
ルシフェルも、悠菜の顔をのぞき込むが、どこがどう違うか判らない。
ただ、ルシフェル自身、あのホテルで水瀬が悠菜になっていることを、確かに感じ取っていたのも否定できない事実だ。
「よくわかんない。雰囲気というか……」
「そう？」
「そう……水瀬君って呼んでいいのかしら？この子、女の子じゃない？」
「どうして桜井さんって、そうも鋭いの？」
何だってお見通し。
そんな言葉がぴったり来る。
あの第三眼（サードアイ）どころの話ではない美奈子に、ルシフェルはそう訊ねずにはいられない。
美奈子は、そんなルシフェルに苦笑しながら答えた。
「女の子のカンは、いつだって世界で一番鋭いのよ」

「ううううっっっっ」
袋から顔だけ出すという、今時、アニメでもないだろう姿を晒す悠菜は、滝のような涙を流し続ける。
「せ、折角、６話ぶりに復活できたのに……」
「よかったじゃない」
ルシフェルにはそう言われたが、
「よくないっ！」
悠菜は噛みついた。
「こんな復活の仕方はあんまりだもんっ！」

ガンッ！

悠菜の後頭部に、見事に決まったイツミの一撃。
それを見た美奈子は、内心、手を合わせた。

「――ぐちゃぐちゃ言わない」
セージュ、治癒。
イツミは、セージュに治癒魔法を命じ、悠菜の入った袋を両手で持ち上げた。
「このまま、溶鉱炉にでも落としてあげましょうか？」
「け、結構です」
「結構ですね？――そう。溶鉱炉に落とされることが、結構なコトなんだぁ」
「イヤだって、そう言ったんですっ！」
「殺されたくない？」
「はいっ！」
「言うこと聞く？」
「絶対服従！生涯忠誠っ！」
「よろしい」

ぽい。
どしゃっ。

派手な音を立てて、悠菜の入った袋が床に落とされた。

「い、痛いよぉ……」

「悠菜」
「はい？」
「作戦を伝えます。“端末”出して。いい？しくじったら――わかるわね？」

イツミが“端末”と呼ぶのは、ＰＤＡのような天帝近衛軍採用の軍事情報端末。
ちなみに、魔界からのライセンス品だ。
端末に表示されるのは、世界樹の情報。
「今まで、私が集めたデータと、さっき、グリムから受け取った世界樹の遺伝子情報。他に必要と思われるようなデータは、一通りよ？さっさと目を通して」
「はい」
「その前に命令を伝えるから、聞き逃さないで。立場上、公式記録になりかねない端末での伝達は出来ないから」
「はい」
悠菜がイツミから受け取った作戦は簡単だ。
世界樹に接触。世界樹と精神を同調させて乗っ取れ。
乗っ取った後、自殺に追い込め。
細かい指示を除外してまとめれば、そういうことだ。
「……」
受け取った悠菜は、きょとん。とした顔で自分の師匠を見る。
「あのぉ」
「何？命令拒否は死刑よ？」
「そうじゃなくて」
悠菜は、手にした端末と師匠を代わる代わる見た後、思い切った口調で言った。
「それ、無理です」
「何がっ！？」
「遺伝子情報、きちんと見て下さい」
ぷうっ。
悠菜は不満そうに頬を膨らませた。

「食欲を司る本能はありますよ?だけど、これって……」
悠菜は、遺伝子情報の中でも、かなり複雑な式を前にうなり声を上げる。
「どうしたのです?」
「グリムさん。ここですよね。第四計画が書き加えた細工って」
「どれどれ?――ああ。これで間違いないね」
イツミもその式をのぞき込むが、何が書いてあるのかさえわからない。
「この４８２４１行からの式は、確かに食欲を司る遺伝子情報だが?」
「樹獣の遺伝子情報と比較したのですが――」
悠菜は端末片手に、グリムと数分話し合う。
「成る程」
グリムは悠菜の言わんとしたことがわかった。
「イツミ様、これは無理です」
「だから、何がっ!?」
イツミには、悠菜とグリムが「無理」という理由がわからない。
「精神面の遺伝子情報がグチャグチャにされているんです。理由は、第四計画が、無理矢理、食欲のデータを付け加えたせいですね。その影響で、本来はマトモであるべき、必要な遺伝子情報のいくつかが破壊されています」
「その中に?」
「そうです。精神感応方面はすべてダメです。感応の方法がありません」
そう言うグリムの眼を見たイツミは黙った。
そこにいるのは、犯罪者のグリムではなく、獄族の学者、グリム・リーパーなのだ。
「世界樹は、第四計画のもくろみ通り、オリジナルの遺伝子情報との接触をトリガーとして、暴走。

だが――これでは止めようがありません。
世界樹は、唯一残された本能。
食欲を満たすことだけしかないのです」
「精神感応は完全に？」
「同調した者の精神が保ちません。これほど強く、純粋ともいうべき欲望の塊となっては、逆に浸食は避けられません」
「そこの馬鹿娘でも？」
「天界の人形、その最大級の欠点は、精神面が不安定で、しかも脆いことと聞いていますが？」
「――ちっ！」
イツミは、舌打ちして爪を噛んだ。
「方法はない？」
「世界樹を殺す？一つだけ光明があります」
そう、言ったのは、悠菜だ。
「光明？」
「破壊された遺伝子情報の中に、一つだけ」
「何？」
「あの世界樹は、恐ろしく成長が早く設定されています。つまり」
「つまり？――もったいぶらずに言いなさいっ！」
「ものすごくたくさんの生命エネルギーを、消費せずにはいられない。いつだって空腹……ううん？飢餓状態なんです」
「飢餓……」
「ここだな……つまり」
遺伝子情報を確認しつつ、グリムが悠菜に訊ねた。
「内部には生命のエネルギーがほとんどないと？」
「あってもかなり少ないでしょう」
「枯死を待つ？」
「枯死するほどではありません。最低限度のエネルギーはいつだって保存しています」
「普通に攻撃したら？」

「下手すれば誘爆しますよ？この一帯の地形が変わります」
「大虐殺の前のわずかな犠牲は……」
「そういう発想、本当に軍人ですね。お師匠様」
「悪い！？」
「悪くはありません」
悠菜は、携帯をしまい、言った。
「――――別な方法を試したいので、わずかな時間をいただきたいのですが？」

「伝令っ！」
地上で戦闘態勢を整えていた樟葉の前に、ルシフェルがテレポートしてきたのは、そのすぐ後だった。
「どうした！？」
と、樟葉が慌てて駆け寄る。兵士達もルシフェルの突然の出現に驚いている。
「グリムの確保には成功！」
「よくやった！」
樟葉が力強くルシフェルの肩を叩いた。
「地上への攻勢がなかったのは、貴様達のおかげだな！」
「ち、違いますっ！」ルシフェルは慌てて言った。
「もっと厄介なのが来ます！」
「厄介？」
「ゆ……水瀬君から指示を受けました。遥さんはどこですか！？」

「地下……ですか？」
司令部の天幕にいた遙は、不思議そうに首を傾げた。
「別に動きはありませんよ？」
遙の示す表示は全く異常なし。
ただ――――

「これ、地下何メートルまでの表示ですか？」
「地下１００メートルですよ？」
「何メートルまで測定できます？」
「最大３００メートル。ただ、ジャムが入って、かなり精度が落ちます」
――それが？
遙のそんな視線を受け、ルシフェルが失望とも安堵ともとれないため息をついた。
「やっぱり、やってなかったんだ……」
「ルシフェル」
事情がわからない樟葉が訊ねた。
「どういうことだ？すでに第４層まで破壊済み。敵の侵攻を調べるなら、１００メートルあれば十分、準備可能だ」
「事情は、映像を見ていただければわかります。遙さん、最大でお願いします」
「はい」

ピッ。

遙は、地下３００メートルまでの拡大映像を表示した。
確かに、地下に埋まっている様々な物質の影響で、地下１００メートル以下は、深くなるにつれて映像が乱れている。
だが、その乱れを無視するように、存在する何かを、遙の第三眼（サードアイ）は捉えた。

地下を掘りながら地上へ進む何か――

イソギンチャクのようなシルエットが不気味に土を掘っている。

「な、何だ！？」

「地下２８０メートル、サイズは全長で１００メートル近くあります」
「１００メートル！？」
遙の報告に、樟葉達は青くなった。
「想定していないぞ！？」
「水瀬君から」
ルシフェルが言った。
「水瀬君からです、大規模魔法で仕留める。射線軸は」
ルシフェルが、地下を掘り進むイソギンチャク――世界樹の開けたトンネルをなぞった。
「穴の通りです。口径は３０メートル。地上へ抜ける可能性９９％、地上被害甚大。遙さんには、トンネルから正確な射線軸を予測、周辺部から兵を引かせて下さいとのことです」
「２８０メートルの土砂を打ち抜くだと！？」
樟葉でなくても、その無茶苦茶さがわかる。
どこの世界に、２８０メートルのトンネルを一撃でほじくることが出来る攻撃がある？
正直、信じられない。

「正確には、消滅だと」
ルシフェルにそう言われると、尚更。
樟葉は、混乱する頭を静めるのがやっとだ。

「しょう……めつ？」

「はい。“詳しい説明？地上で見ていて！”って言われて……」
「ルシフェルにも告げていないか……」
樟葉は、遙に命じた。
「射線軸、予想は出来るか？」
「水瀬君の反応がないので、正確な予測は不可能です」

「地上へのトンネルの針路で予測しろ」
「了解。このままですと――ここです」
「成る程？」
樟葉の口元が緩んだ。
「こいつはいい」
「閣下？」
「――全部隊に通達！運河公園まで移動！急げっ！」
ルシフェルは、モニターを見た。
遙の第三眼が示した射線軸の先にある地上施設。
そこには、

葉月センター。

そう、書かれていた。

地下はすさまじい騒ぎになっていた。
無数の、本当に無数の光塊が生まれては、一カ所に集められている。
光塊（エルプス）。
製造方法は様々だが、一言で言えば、魔力の塊。
悠菜達は、必死にそれを作りまくり、集められた光塊はすでに広い室内の大半を埋め尽くしている。

「本当、こんな魔法の初歩中の初歩使って、何しようというの？」
イツミが光塊（エルプス）を作りながらぼやくが、
「昔、悠理が独鈷山（とっこさん）でやった実験、覚えてます？」
「？……あっ！」

イツミが目を見開いた。
「あの、人間のラジオとかいうメディアでやってた、教養講座とかいうのに悪影響受けて、それでやったあの実験!?」
「そうです」
悠菜は魔法陣から視線を外さずに頷いた。
「あの実験、お師匠様には怒られましたけど、悠理はこっそり、実験を続けていたんです」
「理論上は、あれを発射するには、最低でも数十キロの空間と水と空気が必要よ!?」
「そうです」
悠菜はそれを認めた。
「本来は、空とか、広い空間が確保できる所でなければ使えません。でも、悠理は、空間封印魔法を使って――」
悠菜が魔法陣の一つを操作すると、突然、空間に割れ目が発生し、光塊（エルプス）が吸い込まれていく。
「その数十キロを、空間そのものを縮小させることで、わずか１０メートルまで縮小することに成功したんです――後始末が大変ですけど」
「出来る？」
「可能です。でも、光塊（エルプス）が足りません。」
「急ぐわ」
イツミ達は、光塊（エルプス）を作っては割れ目の中へと送り込むことに専念する。
「――ただ」
悠菜は、ポツリと言った。
「私自身が、この魔法を使うのは初めてなんですよね」

はあっ。

悠菜の口から、小さくため息が出た。

「しくじったら……どこに逃げようかしら？」

「地上まで２００メートル」

「水瀬はまだか！？」

地上では、葉月センターから撤収した近衛軍が運河公園に移動を完了していた。

「そのイソギンチャクが地上に出るまで、あと何分だ！？」

「推定６０分」

「あの馬鹿息子……」

樟葉は、思わず爪を噛んだ。

「急げ……」

「臨界までもう少し！」

悠菜が怒鳴った。

悠菜の目の前には、１０メートルほどの円盤が浮いている。

空間を操作することで、直径１００キロを上回る空間を、わずか１０メートル足らずに縮めているのだ。

並の技ではない。

光塊（エルプス）の集合体を安定化させ、かつ、空間を維持するというプロセスは、はっきり言って恐ろしく複雑な仕事なのだ。

「撃てますっ！――――後方へ下がって下さい！」

「急いで！みんな、防御魔法展開！セージュ、あなたの力じゃ不足

よ！？綾乃（ティアナ）と力を合わせて！、そこの狐！ご主人様、しっかり守るのよ！？」
「琥珀、カノッサと一緒に来なさい。君の力を借りなければならない」
「はいっ♪」
「そういえば、あの娘は？」
「もう安全な場所――あの子のいるべき場所に送り届けています」
「早いですね」
「迅速がモットーですから」
「正確さは、その分期待できないのが、あなたですけどね」
「ぷうっ！」

円盤がすさまじい勢いで回転を開始した。
直径１００キロの円盤が回転していると思うと、イツミでなくてもゾッ。とする。

「臨界点！――いきますっ！」

悠菜の声と同時に、地下の世界が真っ白になった。

ドドドドドドドッッッ――ッ！！！

閃光。

爆音

感覚がどうにかなったんじゃないか？

そう思う、永遠とも思える時間。

悠菜達は、すべてに耐えた。

静寂が、訪れた。

「ふうっ……」

カランッ

パラパラパラ……

迷宮やトンネルの破片が落ちる音の中、悠菜のため息が響いた。

「後は、エルプスを放出っと」

悠菜がそう言った途端。

ズポォォォォォォンッ！！

風呂の栓を抜いたような奇妙な重低音が、静寂を切り裂いた。

「！？」

一瞬、前に吸い込まれそうになった悠菜達は、何とか足を踏ん張って留まることが出来た。

「な、何の音？っていうか、何が起きたの！？」

それまで観客に徹していた美奈子が、困惑気味の声を上げた。

抱きしめていた葉子の安否確認さえ忘れ、美奈子は辺りを見回すが、目に見える変化がない。

「人間の言葉で言えば――円形粒子加速装置とでもいうのかしら？」

その問いに答えたのは、イツミだ。

「円形？」

「サイクロトロン――悠理はそう言っていたけどね。現物見たことはない」

「そ、その魔法で、何が？」

「知りたい？」

「それは――まぁ」

美奈子は不承不承、頷いた。

「そう――悠菜！状況は！？」

「エルプスは、放出状態のまま宇宙空間へ放棄……世界樹の反応、消えました！」

「そう……」

ほうっ。

皆の口から、安堵のため息が出る。

あの厄介者が消滅したのだから、当然だろう。

「あ、あの……」

「つまり」

イツミは、答えの途中だったことに気づき、美奈子に告げた。

「素粒子崩壊が起きたのよ――――わかる？」

美奈子は、黙って首を横に振った。

第六十九話（後書き）

あと一話！一話で終わらせられるのか！？
……まぁ、１００ページ分くらい書けば……死ぬって。
とにかく、もうそろそろ、終わりが見えてきました！
あと少し、おつきあい下さいっ！

第七十話

「素粒子崩壊？」
「まぁ……ぶっちゃけ、素粒子は物質の最小単位のこと。さっきの攻撃の場合、射撃軸線上にあった物質はすべて素粒子の単位で分解されたってことになるわね」
「物質ってことは、世界樹も？」
「もちろん。この世界では、エネルギーもある種の物質として存在している。それさえ分解してしまえば、誘爆の心配はないもの」
「そういうものですか？」
「――桜井」
イツミは、美奈子の肩に手をおいて、深いため息をついた。
「そう……そうとでも考えなきゃ、このご都合主義満載のお話でヒロインはれないわよ？」
美奈子は、即答した。
「そう考えます。断定します」

世界樹の崩壊。

それは、この事件における、一つの結果に過ぎない。

事件の解決に当たった悠菜達の前には、問題が山積したままなのだ。

「世界樹――葉と一緒に消滅」

「……はぁっ」
綾乃（ティアナ）が失望のため息をついた。
「……母上に、何と申し開きすればよいのでしょうか」
「諦めなさい」
ぽんっ。と悠菜が気の毒そうに肩を叩いた、その時だ。
「カノッサさん！」
セージュが悲鳴をあげた。
「！？」
皆の視線が集まる中、床に転がされていたカノッサに、セージュがすがりついていた。
「カノッサ！？」
駆け寄った綾乃（ティアナ）の前のカノッサの口からは一筋の血が流れている。
「ど、どうしたのです！？カノッサ！」
その呼びかけに、カノッサは答えることがない。土気色した顔からは、徐々に生気が失われつつあった。
「どきなさい」
イツミが二人を押しのけるようにカノッサを調べるが――
「だめね」
イツミは、悔しそうに首を横に振った。
「ストリーネ系毒薬の典型的症状が出てる。体のどこかにカプセルでも仕掛けられていたのかしら？」
「……第四計画の」
「悠菜。多分、その通りよ？計画に失敗したカノッサを始末して、それ以上の追求の手を阻止した。それとも、この子自身の決断か」
……やられたわ。と、イツミは悔しそうな顔で爪を噛む。
「第四計画が、この世界樹のデータをどこで仕入れたか。他の計画とは何なのか、何一つわからないまま、捜査は一から出直しね」
「お師匠様……まさか、その第四計画の」
「そうよ」
イツミは頷いた。

「第四計画の全貌の把握と組織の壊滅。それが、私達の使命」
「人間界で遊んでいたんじゃなかったんですね」
ガンッ！
「殴るわよ？」
「……殴ってから言わないでください」

カノッサの死体が光の泡となって消えようとする中、イツミは綾乃（ティアナ）に訊ねた。
「辛い所だと思うけど」
「……はい」
部下の死に浮かべた涙を拭い、綾乃（ティアナ）は頷いた。
「世界樹の葉は消滅――あなたも、かなり重い叱責は避けられないわ」
「覚悟しています」
「そう……天界として出来ることは何もないけど、私個人は、経緯をグロリア陛下にお伝えできる」
「お願いできますか？」
「ええ。セージュの仇討ちも含めて、魔界にも行かなきゃならないでしょうから。そして」
全員の視線がグリムに集まる。
「グリム」
「はい」
グリムの顔も、さすがに神妙なそれになっていた。
泣きそうな顔ですがりつく琥珀に、「大丈夫」と笑みを浮かべると、グリムはまっすぐにイツミに視線を向けた。
「自分の罪は、自覚しています」
「死は避けられないわよ？」
「――はい」
「といいたいけど」

イツミは肩をすくめた。
「あなたの知識、殺すには惜しいわ？どう？知り合いの所に潜伏して、研究を続けてみるってのは」
「――はっ？」
「神族や魔族まで屍鬼化する魔法――喪失魔法（ロスト・マジック）にするには惜しいのよ」
「……法の秩序より、実益ですか」
「あいにくと、私は裁判官じゃないの」イツミは笑った。
「私は軍人なの。わかる？」
「成る程？」
「人間界からは少し離れてもらうけど――桜井」
「はっ、はい！？」
突然、自分の名を呼ばれた美奈子は、驚きに裏返った声で返事した。
「な、何ですか！？」
目の前で、魔族が死ぬところを初めて見た美奈子は、その光の泡の消えゆく姿を、ぼんやりと見つめていたところだった。
「グリムのマスターとして、それでいいわね？」
「えっ？」
「グリムを自由にするか、しないかって聞いたの」
「……」
グリム・リーパー
それは、美奈子にとって、複雑な人物となっていた。
自分を頼ってきた存在。
自分と共に戦った戦友。
自分を殺そうとした敵。
自分を犯そうとした敵。
そして――自分の下僕。
ここまで様々な関係となりうる存在は、生涯かけてもいないだろうと、美奈子は思う。

そんな存在の処遇を、美奈子は求められているのだ。
「どうなの？」
「私の敵とならないこと、そして」
美奈子はまっすぐにグリムを見つめ、言った。
「全てを解決してくれる――この二つを飲んでくれるなら」
「グリム？」
グリムは、言葉を噛みしめるように、俯きながら言った。
「協力出来ることは、しましょう」

●桜井美奈子の日記より
上を下にの大騒ぎ。
ジェットコースター
……騒ぎを表現する形容詞って、いろいろあると思う。
でも、こういうのって、なんて表現したらいいんだろう。

イツミさんとセージュさんは、「人間界と下手に接触できない」という理由で、あの穴からどこかへ（きっと、魔界だと思う）へと去っていった。
私達は、水瀬悠菜ちゃんやグリムさん達と一緒に、穴から地上へ。
久しぶりに見た朝日は、とても眩しくて、何だか見ているだけで嬉しくなった。

でも――

私は身柄を拘束された。

自分がグリムさんに協力して、近衛軍と渡り合ったことは隠しよ

うのない事実。
私は、自分がやったことは包み隠さず、すべて、問われるままに答えた。
地下迷宮の改装
トラップ設置
戦闘指揮
いろいろだ。
「こんな子供が？」って、近衛のエライ人達は驚いていたけど、でも、その場にいなければわからないことを、私が次々と報告したから、その人達も信じないわけにはいかなかった。
「まぁ、バツだと思って、大人しくしてなさい」
樟葉さんにそう言われて、近衛の施設――鍵付き格子付きの部屋に押し込められたのは、仕方ないと思う。
私が指揮をとったあの戦い、重軽傷４５人、８人が入院中だという。
傷害罪どころか殺人未遂で告発されても、文句が言える立場じゃない。
今更ながら、自分が何をやったか。
それが重くのしかかってくる。
ごめんなさいではすまない。
ケガでよかった。
それは、自分に対する甘えでしかない。
ただ、その罪の重さが怖い。
「葉子？おいで」

「はぁい♪」
私は覚悟を決めて、葉子を抱きしめた。
もう、これが最後かもしれない。
何度も、そう思いながら。

翌日。

何度目かわからない尋問の後、訊ねてきたルシフェルさんから話を聞けた。

全ての事件のきっかけは、霧島那由他にとって義姉にあたる不破（旧姓：霧島）忍の産んだ子、不破未来にあった。
不破未来は、生まれながらの植物人間。
騎士の血の負が働いた結果だという。
不破忍の父、霧島源一郎は、孫を助けるためにグリムさんと契約を結んだ。
グリムさんは、魔法で内蔵を含むかなりの部分を、ある娘から移植することで不破未来を救おうとした。
ところが、ここでグリムさんさえ予想が出来なかった事態が生じた。
ドナーの娘が、心臓発作で死亡。
死体は、司法解剖だなんだで、臓器が使えない状態になってしまったのだ。
ルシフェルさんが聞いた所だと、不破未来ほどの状態だと、臓器の交換可能な対象は極めて限定されており、むしろドナーが見つかった事自体が奇跡に近かったという。
それがダメになったのだ。
グリムさんでもどうしようもない。

しかも、最悪なことに、ドナーを殺すようにし向けたのは、何と霧島源一郎自身。

つまり、依頼主の暴走が、グリムさんの仕事を台無しにしたのだ。

グリムさんはこれに怒った。

ドナーの両親を仕掛けて、自分に霧島源一郎を殺すように依頼させたほどだ。

そして、グリムさんは、霧島源一郎にこのことを突きつけた。

霧島源一郎は慌てた。

そして、唾棄すべき行動に出た。

養女である孫、霧島那由他を、自らの代償として差し出すことで、孫の延命込みで、グリムさんと手打ちをしたのだ。

グリムさんが、何故、そんなことに応じたのか。

それはわからない。

わからないけど、見せてもらった写真からすれば、かなりの美少女だ。

わかりたくないけど、多分、相当な下心があったんだろう。

……これだからオトコって。

コホン。

とにかく、これで全てが終わるはずだったのだ。

しかし、グリムさんもトコトン運がない。

霧島那由他を手に入れる前に、霧島源一郎は殺され、那由他自身が失踪する。

ここで出てくるのが、村上先輩。

そして――

この事件が始まった。

後は、グリムさんに聞くべきだろう。

世界樹。

それは、不破未来のドナーを作るために必要。

それが、私の結論だけど……。

格子付きの窓の外は、夕陽が傾いていた。

あと少しで春休みが終わる。

とんでもない春休みだったなぁ。

●皇室近衛騎士団団長執務室。

「結果はムダだったわけだ」

執務椅子に座った樟葉は、背もたれに体を預けながら言った。

「徒労だった」

「グリムと、春菜殿下の関係は」
前に立つ悠菜の質問に、樟葉は煩わしそうに答えた。
「グリムに言わせれば、もう発現していた。グリムが春菜殿下の居場所を把握できたのは、“統べる力”を探した結果に過ぎないそうだ」
「春菜殿下は、このまま放置ですか？」
「グリムにもどうしようもないそうだ。下手に力を封じれば、殿下の命が保証できないと言う」
「力が殿下のお体にたまって？」
「そういうことだ……ところで息子」
「はい？」
「不破未来、どうなった」
「……」
悠菜の顔が、曇った。
「どうした？」
「……先程、息を引き取ったそうです」
「……そうか」
樟葉は眼を閉じ、幸薄き子供の冥福を祈った。
「南雲は、どうしている？」
「ずっと遺骸の側に」
「……そうか」
「今、グリムさんが向かってくれています」
「ん？」
「樟葉さん？」
悠菜は悪戯っぽい顔で
「グリムさんは、魂を操れるんですよ？」
「……どういうことだ？」
「四の五の言わずに」
悠菜は、手にしていたケースから紙を取り出した。
「これ、掲示の許可もらえませんか？」

樟葉は無言でその紙を手にした。
「ポスターか？」
どうやら悠菜の手書きらしい。
妙に丸っこい字で書かれた内容を読んだ樟葉は、目を丸くした。
「成る程？」
クックックッ……。
「これは、グリムも盲点だったな」
「そうです」
悠菜もつられたように笑った。
「もとは、桜井さんの発案です」
「あの娘の？」
「ええ。それ、グリムさんに話したら」
「その時のグリムの顔が見たかったな」
樟葉は大笑いしている。
それは、久々に見た樟葉の笑顔。
それだけで、悠菜は不思議な幸福感に包まれる。
「もうこんなの！」

執務室は、大爆笑に包まれた。

●翌日　近衛府付属病院産婦人科病棟
若い夫婦が、産婦人科の廊下を歩いていた看護婦を呼び止めた。
「あの……」
夫だろう男が、壁に貼られたポスターを指さしながら、神妙な顔で看護婦に尋ねた。
「このポスターなんですけど」
「ああ。これですか？」
「詳しく、聞きたいんですけど」
「じゃあ、どうぞ？」

看護婦は、そのポスターを壁から剥がすと、二人を連れて診察室へと向かって歩き出した。
その手に握られたポスターには、こう書かれていた。

『女の子の赤ちゃんが欲しい方
ご相談に乗ります。
確実保証付き！
一組様限定！
詳しくは下記まで』

「グリム先生？ご相談の方ですよ？」

●１０ヶ月後　近衛府付属病院産婦人科病棟

その鳴き声に、南雲ははっと顔を上げた。
ドアに駆け寄る父親となった男に、中から出てきた看護婦が声をかけた。
「おめでとうございます！元気な女の子ですよ！」

ハアッ……。
南雲は、安堵のため息と共に、手にした写真――遺影に語りかけた。

「不破さん……聞こえますか？
あの元気な声。
あんなに元気に泣いていて……。

不破さん。
あの子は、あの子はね？
あんな元気な声で泣けるようになったんですよ？
聞こえていますか？
不破さん。
あの、元気な声。
聞こえていますか？
不破さん」

ポタッ

遺影の上に、涙が落ちる。

南雲は声を殺して泣いた。

最愛の人の忘れ形見が、元気な声で泣いている。

新しい、命として、

新しい、人生を歩み始めたのだ。

それを祝福して、

南雲は――――泣いた。

声を殺して、

泣き続けた。

●葉月市　喫茶「南風」

美奈子の拘束が解かれた日のことだ。

「これからしばらく、行方をくらますことになります」

カレー皿から手を離したグリムが、悠菜にそう告げた。

「どこへ？」

「とりあえず、神音商会へ」

「そこまで身を落とす必要もないかと」

「いえいえ」

グリムは、横に座ってパフェを食べている琥珀の頭を撫でながら言った。

「琥珀のメンテナンスに必要な部品は、あそこが一番、手に入りやすいですし」

「利害もあったんだ」

「ええ……何しろ琥珀は」

そう言って、琥珀を見つめる眼は、例えようもなく慈愛に満ちあふれていた。

「やたら手間と金のかかるもので」

「オンナって、そんなもんですよ？でも、琥珀ちゃんは」

「はい？」

パフェのスプーンを加えたまま、琥珀は首を傾げた。

「何です？」

「いいんですか？」

「私は、ご主人様と一緒なら、天国と地獄以外、どこへでも♪」
「ごちそうさま♪」
「ふふっ」
「ああ、そうそう」
グリムは悠菜に訊ねた。
「悠理君と約束があったんですが、どうします?あなたが代わりに？」
「お金?」
「金品の約束ではありません」
「じゃ、いい」
「いいんですか?」グリムは怪訝そうに訊ねた。
「悠理君、かなり怒りますよ?絶対」
「お金以外、もらっても困るし、私だって、散々迷惑したから、落とし前」
「はぁ……」
「それより」
悠菜は、テーブルに載った皿をどかし、グリムに訊ねた。
「綾乃ちゃん、本当にどうしようもないの?」
「綾乃さんは、最初に言った通りです」
「完全な記憶消去がなされています。最初からやり直すしか……」
「辛いね」
「ティアナ殿下から、自分に残された記憶の転送の話しもあったんですけど、あれはダメです」
「ダメ?」
「他の雑多な、ティアナ殿下ご自身の記憶と複雑に交わってしまい、綾乃さん自身、相当な記憶障害を引き起こす恐れがあります」
「ダメ……か」
「後は」
グリムは、立ち上がって、悠菜に告げた。
「悠理君と綾乃さんの問題です。本当に、運命が二人を結びつける

つもりなら、結びつきますよ？」
「ま、バカな弟の甲斐性に期待しましょうか」
「そういうことです――では、また、いずれ」
「はい♪」
グリムと琥珀の去った後、悠菜はすっかり冷めたコーヒーを相手に、ぼんやりと考え込んでいた。

綾乃の記憶は戻らない。
でも、まだ二人とも16歳。
出会ったばかりで再出発したとして、何が問題だというの？
そう。
何も障害にはならない。

頑張れ――弟！

「よしっ！」
気合い一つ、悠菜は立ち上がって、そして、気づいた。

「グリムさぁぁんっ！お会計っっっ！！」

第七十話（後書き）

……さぁ！本編は終わったぞ！
７０話に間に合わせたぞ！？
……おい、助六。
何だ？
その冷たい視線は。
全部終わってない？
そう！
だから次は終章だ！
というわけで、最後の最後は、やっぱり、もう一話下さいね？

終章～日菜子

――――さて。

ただでさえ少ない作者の時間と精神を削りまくりの今回のお話。

最後にカタをつけるべき四人の話をここで掲載させていただこう。

●日菜子殿下の場合

同じ頃――――

宮中、近衛兵団戦闘指揮室は、空前の事態に大混乱に陥っていた。

「敵、東京都全域に展開！」

「宮城上空、敵測定限界値以上！」

宮城上空に、突然、魔族の反応が現れたかと思うと、あっという間に、東京都全域が、数え切れないほどの魔族の反応に覆い尽くされたのだ。

「目視確認は出来ないのか!?」

「分厚い雲に覆われて、反応のある雲の中までは！」

「ええいっ！メサイアは全騎、戦闘ステータスで起動！予備騎もだ！」

「β級の起動命令は!?」

「信濃以下、全艦艇、戦闘態勢のまま待機！」

戦闘指揮室に怒鳴り声がとどろき渡ったのは、その時だ。

「静まれっ！」

騒然とする室内が、水を打ったように静まりかえる。

「近衛兵団全軍に命ずる！」

そう、大音声をあげるのは、あのハゲ――――ではない。伊東大将だ。

「事態を静観せよ！これは訓練であるっ！尚、この命令は勅諚であるぞっ！」

勅諚（ちょくじょう）

一言で言えば、天皇の命令。

それに逆らえる者は、少なくともここにはいない。

その命令を下したのは、当然――――

日菜子だ。

「そうですか……春菜は、無理ですか」

「ご期待に添えず、面目次第もございません」

深々と頭を下げる栗須に、日菜子は言った。

「いえ。むしろあなたはよくやってくれました。女官団の者達も」

「恐縮です」

「ふふっ……どうでした？去年以来、二度目の対妖魔戦」

「十分に、堪能させていただきました」

栗須はせめてもとばかりに微笑む。

「殺し足りないのが残念です」

「頼もしい限りです。春菜と、姉様は？」

「昨日のうちにお戻りになられ、お二方共、別室でお休みでございます。お客様が」

「そうですか……天界のお話、聞きたいものです」

「天……界？」

栗須はその言葉にひっかかった。

栗須自身、いや、宮中の者達は、自分の主君が、この事件の最中、安全のため、どこかに身を潜めたことは知っていた。

だが、その正確な居場所を知っている者は、誰もいないのだ。

その答えを、日菜子自身の口から、栗須は聞いた。

「そうです。天界――私は、魔界ですけど」

「そ、そんな危険なところへ！」

「何を言うのです？」
日菜子は血相を変えた栗須の前で、平然と紅茶に口を付けた。
「天界、魔界共に、そちらの世界の帝のおわすお城の中。少なくとも、私は有意義な時間を過ごさせていただきました」
「し、信じられません」
「そうでしょうね」
クスクス笑う日菜子は、ティーカップをテーブルに戻した。
「私も驚きましたけど、亡き先帝と母が、かつては両方を行き来していたそうです。そう聞いたら、安心して行けました」
「先帝陛下まで？」
栗須は、もっと信じられないことを聞いた。
もしかしたら、日菜子殿下は、ヘンなクスリでも使われたのでは？と、栗須はかなり失礼な勘ぐりをした位だ。
「ええ。過去はいろいろあったようで」
日菜子はとても楽しそうな顔をしていた。
「先帝や母の若い頃の冒険譚。春菜が聞いたら、きっと楽しいお話にまとめてくれるでしょう」
「はぁ……」
「さて、栗須」
時計を見た日菜子が、栗須に命じた。
「少しだけ、退出していなさい」
「はっ？」

「お客人をおもてなししなくてはなりません」
どなたですか？
その言葉を、栗須は飲み込んだ。
下がれ。
日菜子は、自分の主君は、そう命じているのだ。
栗須は、一礼の後、部屋を下がった。

「――さて」
栗須の退出を見送った日菜子が、目をつむったまま、声を上げた。
「折角、二人の時間をとったのです。――お顔を拝見させていただけませんか？」

「……よく、わかったものですね」
「恐れ入ります」

ふっ。

赤い髪の少女。
年の頃は、日菜子より上。
整った顔立ちの美しい顔立ちの少女。
身に纏った、シンプルだが高級そうなドレスがふわりと揺れる。

魔界の第一皇女。

ティアナ・ロイズール・トランシヴェール。

その彼女が、日菜子の前に姿を現した。

「お初にお目にかかります――日菜子殿下」

「ああ――そうですね」

日菜子は立ち上がって、空いたカップに紅茶を注ぎ始めた。

「お茶、いかがですか？」

「結構です」

「椅子、そこにありますから」

「……結構です」

「お客にしては、態度がスゴイことになってますね」

「親の教育が良いので」

「そうですか……恐ろしいことを」

突然の来訪に一切動じることのない日菜子は、ティーカップをソ

ーサーに乗せて、テーブルに置いた。

「この世界では、皇女がお茶を用意するのですか？」

ふんっ。と鼻で笑ったティアナの質問にさえ、日菜子は眉一つ動かさない。

「せめてもの心遣いと思ってくださいませ――冷めてしまいますよ？」

「ですから、いりません。いらないものを勧めるのが、この世界の流儀なのですか？」

「折角、作ったのです。出がらしのお茶に、ハバネロにワサビにカイエンペッパー入り」

「……」

「あっ。青酸カリと水銀と、ヒ素も入れましょうか？何でしたらウランも」

「お客に死ねとおっしゃるおつもりですか？」

「死にそうもないお顔なので」

――ビシッ！！

二人の視線が、すさまじい勢いでぶつかり、視覚効果上、超新星顔負けの光を放つ。

「何しに来たんです？呼んだ覚えはありませんよ？」

「あら？ついにけんか腰というか、本性を見せたようですね」
「ケンカに来たのですか？」
「いえ？」
ティアナは無言で、剣を抜いた。
「あなたにお願いに来たわけでもありません」
「……」
日菜子は、一切、動じることなく、まっすぐにティアナを見つめるだけ。
「……剣が、怖くないのですか？」
「私は皇女です」
日菜子は、微動だにせずに答えた。
「このような時、動じて良いと教わっていません」
「……つっ」
ティアナが内心、「厄介なヤツ」だと思っているのは、その表情から明らかだ。
「私は、あなたに命じに来ました」
「何を？」

「水瀬悠理を、諦めてください」
「水瀬悠理の、何を諦めろと？」
「み、水瀬悠理の……えっと、全てです！」
「全て、とは？」
「全てといえば、全てです！決まっていますっ！」
ティアナは、剣を構えた。
「水瀬悠理は、瀬戸綾乃の――――私のモノですっ！」
「――――成る程？」
クスッ。
日菜子は軽く吹き出した。
「な、何がおかしいんですっ！？」
「つまり」
日菜子は、微笑みながら言った。
「瀬戸綾乃を応援しているつもりで、悠理に情が移った――――そうですね？」
「なっ！？」
ティアナは耳まで真っ赤になった。
「ほら。お顔は正直♪」
「ち、違いますっ！」

「なら」
日菜子は慌てるティアナに言い放った。
「その言葉は、瀬戸綾乃本人に言いに来るように伝えなさい。あなたのような、使いっ走りの言葉に一々従う理由はありませんっ！！」
「だ……黙って聞いていれば！」
「一々、文句言い続けてきたクセに」
「それが気に入らないんですっ！」
ティアナは、顔を真っ赤にして怒鳴った。
「水瀬悠理をたぶらかした（自主規制）がっ！」
「……」
「地位を振りかざして、他のオンナのオトコを横取りするなんて！恥を知りなさいっ！」
「自分の分魂から恋人を奪うのは問題ないのですか？」
「か、関係ありませんっ！魂が一緒だから、問題ないんですっ！」
「すごい屁理屈ですね」
「だ、黙りなさいっ！」
「とにかく」
日菜子はティアナに答えた。
「私は、何があろうと、絶対に、悠理を諦めません」
「魔界の第一皇女たる、この私が命じているのです！」
「例え神に命じられたとしても――私は拒みます」
「今日、この場であなたを消し去ることも出来るのですが！？」
「別れろと脅されて、はいそうですかと諦めるほど、私は安い気持

ちで悠理を愛してはいませんっ！
本当に人を好きになったことがないから、そんなことをいうのですっ！
くやしかったら、本気で人を好きになってご覧なさいっ！
人を本気で好きになるために、どれほどの覚悟がいるか！
それを知ってから、そんなセリフを口になさいっ！」

「わ、私だって！私だって、好きな人はいますっ！」

「なら、余計な所に首を突っ込まずにその人だけを見なさい！瀬戸綾乃が、本気で悠理が好きなら、記憶を無くした程度で諦めるはずはないんです！」

「！！」

「第一、あなたは卑怯です」

「わ、私が？私が――――卑怯？」

「そうでしょう？剣を片手にした横柄な態度。あまつさえ、好きな相手と私を別れさせるために、瀬戸綾乃の名を使う。これが卑怯でなくてなんなんです」

「わ、私は……ですけど、私は瀬戸綾乃の」

「最初からはっきりおっしゃれば、私だってもう少し、対応もありましたよ――――“私は悠理を愛しています。ですから、悠理と別れてください”とか」

「え……えっと」

「一々、私の言葉を巻き戻さないでくださいね？」

「な、なら」

完全な敗北。

それを自覚したティアナは、悔しそうに日菜子を睨みながら訊ねた。

「あ、あなたに聞きます。

あなたは、どうして、そうも強くいられるのです？」

「私が、悠理を愛しているからです」

日菜子は、きっぱりと言い切った。

「皇女としての地位、身分、様々な障害を前に、幾度も煩悶しました。

それでも、私は、悠理を愛することを諦めることが出来なかった。

だから、今の私は、全てを犠牲にする覚悟が出来ているのです」

「あ……あなた……まさか」

ティアナは、その言葉の意味を悟った。

それは、皇女として、絶対にあってはいけないことなのだ。

目の前の少女は、それを覚悟しているという。

「こ、皇位を？」

「ええ……恋が成就すれば、それは私の廃位につながります。そして、私はそれを望んでいるのです」

「ば、バカっ！」

ティアナは怒鳴った。

「そんな軽々しいことで、皇女の責務が果たせると！？」

「あくまで私人として、ですよ？」
日菜子はティアナに微笑んだ。
覚悟のある、そのすさまじい微笑みに、ティアナは正直、気圧された。
「公人としては違います。皇女として職責を果たす時、悠理を犠牲にするなら、私はそうします。私人としての一片の躊躇でも、その時見せたら、私は悠理に嫌われます――悠理とは、そういう約束なのです」
「……」
「私達は、単なるなれ合いで愛し合っているのではありませんよ？」
「そ、それでも」
「諦められない……それでいいのですよ？」
「敵に、情けはかけられたくないです」
「ふふっ」
そっ。
日菜子は、ティアナに近づくと、手を差し出した。
「敵ではありません。ライバルです」
「勝ち目の薄い戦な気がしますが……」
「悠理がどう心を動かすか。
それは悠理にしかわかりません。

ただ、私は負けません。
精一杯、一人の女の子として、最善を尽くすだけです。
あなたも、そうでしょう？
フェアにやりましょう」

「……」
「……」

ティアナは、苦笑と共に、その手を握った。

「最も、遠い存在ですが……最も長い時間を持つのは私ですからね」

「私も、今は心が最も近い存在ですから」

「最後には、私が勝ちます。絶対に」

「負けません」

「ふっ」

「ふふっ」

ハハハハッ。
室内に、日菜子とティアナの笑い声が響いた。

「人間のことわざに“雨降って地固まる”とあります。わるいことがあったあとに、かえって前よりもいい状態になることを意味します」

「くすっ。確かに」
「お茶、入れ直しますね？」

「ええ。お願いします」
「はい♪」
「日菜子殿下」
「はい？」
「その……単刀直入に聞きます」
「何でも」
「悠理とは……どこまでいってるんです？」
「内緒です」
紅茶を用意する日菜子は、動じるところもなく、そう答えた。
「教えてくださっても」
「悠理の閨（ねや）に忍び込んで同じ事しますか？」
「も、もうそこまで！？」
「まさか――キスまでです」
「な、なら……私にも」
「やったら教えてくださいね？１００倍のキスと一緒に、１００万回の平手打ちを悠理にくれてあげますから」
「ははっ……怖いこと♪」
「そういうものでしょう？」
「そうですね――美味しそうなお茶菓子。もらっていいですか？」
「ええ。お茶、どうぞ？」
「ありがとうございます」
「では――お互いの正々堂々とした恋の勝負開始を祝して」
「乾杯♪」

チンッ

カップ同士が音を立てた。

「あ、いけない」
日菜子は思い出したように口元を押さえた。

「ティアナ殿下？確か、母上から逃げていらっしゃるとか」
「ええ。肉体を奪って、お城から逃げ出しました」
「いいんですか？」
「一ヶ月も逃げれば、母上も諦めてくださるかと」
「つまり、反省も何もないと」
「反省してはいますが、叱られたくはありません」
「親に叱られるのは……うらやましいくらいなんですけどね」
「……ご両親のことは、魔界帝室の一員として、申し訳なくは思いますけどね？でも、叱られて嬉しいなんて、ちょっとヘンです」
「ふふっ。でも……こうなると、そう思えてなりません」
「そうですか？代わって欲しいくらいですけど」
「目の前で実演していただきたいくらいです」

「してみてもいいんですけどね」
ティアナは、本当に冗談のつもりで、そう言ったのだ。
だが、日菜子は、その言葉尻を捕まえた。
「していただけます？」
「母上がここにいれば」
「本当に？」
「ええ――残念ながら、母上はいませんので」
「そうですか」
日菜子は、カーテンの裏を見ると、声をあげた。

「陛下――叱られてもいいそうですよ？」

「――へっ？」

呆然とするティアナの前で、カーテンが開かれた。

そこは、別室につながる通路。

カーテンの後ろで仁王立ちになっているのは、

妙齢の美女。

シンプルだが、厳選された素材に精緻な仕立てが施されたスーツに身を纏った見目麗しい女性が、額に青筋を立てて、ティアナを睨んでいた。

その女性に、ティアナはイヤでも心当たりがあった。

「はっ！？」

「……ティアナ」

カッ。

ヒールが音を立てたが、ティアナの耳には、

ドンッ！

怪獣が歩いているような恐怖感さえ感じさせる音だった。

「は、母上っ！？」

そう。

魔界女帝――――クイーン・グロリアその人だった。

「いけないっ！」
椅子を蹴って立ち上がり、慌てて逃げ出そうとするティアナだが、気が付くと、完全武装した女官達に取り囲まれていた。
人間界の女官達とは異なるコスチュームに身を包む女官達。
それは、魔界帝室の女官達だった。
「取り押さえなさいっ！」
魔界女帝の凛とした命令が飛び、女官達が一斉にティアナを取り押さえた。
「は、離しなさいっ！母上っ！？」
「この放蕩娘っ！こっちにいらっしゃい！」
女官達からティアナを奪い取ったクイーン・グロリアが娘の首根っこを掴んで、別室に引きずっていく。
「エトが来ているってのに！詩織の娘にケンカふっかけるとは！」

エト。

その名を聞いたティアナが、別室をちらと見た。
少し肥満気味の丸っこい体格の男と、物静かな女性、そしてティアナと年の頃は変わらない少女達が、バツの悪そうな顔でこちらを見ていた。

「天帝陛下？」
「久々に親交を暖めていたというのに！かつてのパーティ仲間の家族そろい踏みの時に、なんであなたはこんなっ！」
「母上ぇぇっ！お、お慈悲をぉぉっ！」
「今日という今日こそ、許しませんからね！？覚悟なさいっ！」

カーテンが閉められた別室のさらに別室へティアナを連れ込むクイーン・グロリア。

「ここから逃げようったって、そうはいきませんからね！？親衛軍６０００万があなたの捕縛だけを目的に、この周囲を囲っています！さらに同数の天帝親衛軍の存在も忘れてはなりませんよ！？」
「そこに座りなさいっ！」
「ああっ！情けないっ！」
「親として恥ずかしいにも程がある！」
「詩織の娘があんな立派に育ったというのに、どうしてあなたはそんな！」
そこから響き渡るクイーン・グロリアの母としての怒鳴り声。

日菜子は、目を閉じてその罵声に耳を傾けた。

遠い日に、母に叱られた日々が走馬燈のように駆けめぐっていく。

“怒られるのはいつも私だけ”
“御母様は、私が嫌いなんだ”

いつも、そう思っていた。

正直、母を恨み、憎んだこともある。

だけど、今となっては、それさえ懐かしく、愛おしい。

隣室から響き渡る母としての怒鳴り声。

日菜子は、それを、自らの亡き母の声として聞き続ける。
手にするのは、銀のロケット。
母の形見。

それを握りしめる日菜子の頬を、涙が伝わっていった。

終章～日菜子（後書き）

……あれ？
終わらないよ？
でっち、どうして？
……え？
何も考えていないから？
考えたよ。だから書いたんだろ？
……え？
クリスマスイブに独り身だからさみしいんだろ？
殺すぞ！？
うわぁぁぁんっ！

終章弐～美奈子＆悠菜

●水瀬悠菜の場合

「グリム・リーパーの件は以上です」

近衛騎士団の制服、２９式黒色開襟型制服を纏った悠菜は、手にしたファイルを閉じ、敬礼した。

スラックスではなく、タイトスカートを履いているのが、悠菜にとって唯一に近い、オンナとしての自己主張なのだろう。

「……神音母さんの所に行くだと？」

悠菜の前、執務椅子に腰を下ろし、頬杖をつく由忠の顔は、苦虫を噛み潰したように歪んでいた。

「お袋とは、本気で殺り合う覚悟がいるな」

「……それは止めたほうがいいでしょう」

悠菜は直立不動のまま、言った。

「理由は、御父様が一番ご存じのはずです」

「……ったく。オヤジもオヤジだ。いくら死ぬ間際とはいえ、隠密衆を含む不正規連隊の指揮権をお袋にくれてやるとは」

「いいじゃないですか」

「何がだ？」

「おかげで近衛の情報網は、人間界だけじゃなくて、魔界に天界まで」

「……情報網が広範囲なのは結構だが」

由忠は煮え切らないという顔で、“娘”を見た。

「おかげでこっちは出所も判らない情報に引きずり回されっぱなしだ」

「あの戦争もそうでしたね」

「遊撃隊も随分、振り回された口だろう？」

「はい。当初、中世協会が柏崎のゲートを狙っていると聞かされて、そっちに回っている最中に日村のゲートがやられました」
「悠理が数日かけて作ったトラップも、せいぜいが柏崎の原発を消滅させるのが精一杯だった」
「……あれは正直、予想外だったと、悠理も認めています」
「わかってやっていたらタダではおかん――それより、悠菜」
「はい？」
「事件の発端についてだが」
「？……ああ、霧島一家の件ですか？」
「そうだ」
由忠は、執務机の引き出しから書類封筒を取り出し、机に置いた。
「調べはついている。なかなかに興味深いオチがついたぞ？」

●桜井美奈子の場合
桜井美奈子。
彼女は、公には失踪したことになっている。
決して、友達の家に泊まりに行っているとか、そうはなっていない。
そして、美奈子の母は、普通の主婦。
結果として、こうなった。
家に戻った美奈子の目の前で、スゴい速さで葉子が家に連れ込まれ、
ガシャンッ！

ガチャッ！

美奈子の前で、ドアが無情にも閉められた。

ご丁寧に鍵までかけられた。

「お、お母さんっ！？」

美奈子は血相を変えてドアのノブを掴んだ。

どんなに力をかけても、うんともすんとも言わない。

「ど、どうして！？」

葉子はすでに家の中なのに、どうして私だけ！？

「４歳の妹連れて、何日もどこ行っていたの！」

ドアの向こうで母がすさまじい剣幕で怒鳴る声がする。

「だ、だって！」

「だってもヘチマもないっ！家にいるのが、そんなにイヤなら出て行きなさいっ！」

「あーんっ！ごめんなさいっ！お母さんっ！開けてぇぇぇぇっっ！」

●水瀬邸

「――というわけで」

「追い出されちゃったんですか？」

「……うん」
「どうするの？しばらく、ここにいますか？」
「ううん？鈴紀先輩のトコに厄介になることに」
「止めた方がいいんじゃないですか？それ」
「それが……途方に暮れていた所で鈴紀先輩につかまっちゃって、問答無用で」
「ご愁傷様。しばらくは、探偵稼業が忙しそうですね」
「もう、しばらく休みを楽したいのに」
悠菜は、無言で湯飲み茶碗を美奈子の前に置いた。
「ご愁傷様」
「グリムさん、恨むしかないわ」
「梅寿司」と書かれた茶碗を見つめながら、美奈子は肩を落とした。
「こんなの……あんまりよ」
「まぁまぁ――さめちゃいますよ？」
「ありがと……」
お茶の暖かさが心にまでしみいるのを感じながら、美奈子は訊ねた。
「ところで、水瀬君は？」
「しばらく帰らないです」
悠菜はきっぱりと言った。
「私、悠理の代わりってことでここにいる。だから、私がここにいる限り、悠理は戻らないことになっています」
「ふぅん？」
しげしげと悠菜の顔を見た美奈子が、
「妹さんがいるって聞いたことないんだけど」
「ムッ。私は姉です！」と、悠菜はムキになって怒鳴った。
「私の方が、ずっとずっと！ずーっとしっかりしてるんですからっ！」
「そ、そうなの？」

「――最後まで疑わしいって声ですね」
「そっくりだから」
「違います」
「どこが？」
「いろいろです――それで？」
お茶を飲み干した悠菜が、美奈子に訊ねた。
「ここに来た理由は、そんなことじゃないでしょう？」
「――わかる？」
「ええ、村上先輩と、霧島那由他の件、違いますか？」
「……」
「幸い、ここには私とあなたしかいません」
悠菜は自分の茶碗にお茶を注ぎながら言った。
「これから語ることは、あなたには、信じられないこと半分、理解できないこと半分――そんなお話です。ですから、納得が得られるとは最初から思わないでください」
美奈子は無言で頷いた。
「まず、前提条件からお話ししましょう。桜井さん、“さまよえるユダヤ人”ってご存じ？」
「……ワーグナーの？」
「それはさまよえるオランダ人。私が言っているのは、その原型に

なったお話」

「へぇ？そんなのあるんだ」

「あるんです。……コホン。“さまよえるユダヤ人”とは、ヨーロッパの伝説、広まったのは中世末期だそうですが、その頃広まった伝説の人物。永遠に呪われた放浪者のことで、アハスエルスという名前も残っています。

十字架を担って刑場におもむくイエス・キリストが、アハスエルスなる靴屋――まぁ、職業については異説いろいろですが――その家の前で休息を求めたとき、アハスエルスはこれを拒絶し、イエス・キリストを辱め、打擲（ちょうちゃく）し、そして「早く歩け」と罵りました。

その時、イエス・キリストは「汝、我の来たるを待て」と答えて立ち去ったのですが、それ以後、アハスエルスは故郷と安息とを失い、永遠に死ねない体で最後の審判の日まで地上を彷徨う運命を負わされたといいます」

「ふぅん？」

「伝説によれば彼はイエスの死後、世界各地に出現しているとか、長崎でフランシスコ・ザビエルとも会ったといわれることもあります。詳しくは芥川龍之介の「さまよえる猶太人」を読まれることをお奨めします」

「それで？」

美奈子は、悠菜が何を言いたいのか、ピンとこない。

「その伝説と、村上先輩達と、何がどうつながるの？」

「獄族の呪いに、永遠の生という呪いがあります」

悠菜は、その答えを告げた。

「永遠の生――死ねない呪いです。アハスエルスという別名もありますが、出来過ぎですね」

「人魚を食べたら死ねなくなるとか言うのとは違うの？」

「人魚の肉には、その呪いがかかっているのですよ？同じです」

「……まさか」

死ねない呪い。

それが、何を意味するか。

それを察した美奈子は刮目（かつもく）して相手を見た。

「いくら何でも！」

「言ったでしょう？獄族の呪いだと」

「それこそ滅茶苦茶よ。獄族でしょう？神の子とされるイエス・キリストがその呪いをかけられるはずがない！」

「そうです」

悠菜は干し柿に手を伸ばしながら頷いた。

「かけたのは、イエス・キリストを支えていた獄族です」

「話が滅茶苦茶すぎ」

美奈子はムキになって答えた。

「飛躍しすぎて、どうにも納得どころか、理解できない」

「最初から断ったはずですよ？“これから語ることは、あなたには、信じられないこと半分、理解できないこと半分――そんなお話です。ですから、納得が得られるとは最初から思わないでください”と」

「……でも、それと村上先輩と」

悠菜は、無言で書類封筒をちゃぶ台に置いた。

「厳密に言えば、村上先輩と霧島那由他は――――もう、この世の人ではありません」

書類封筒から悠菜が取り出したのは、新聞の切り抜き。

「霧島源一郎が殺された翌々日、九州博多港から大陸に向けて出港した貨物船が一隻、対馬沖で沈みました」

「まさか……」

「沈没船は最近になってようやくサルベージされましたが……その船倉から、明らかに密航者とわかる若い男女の遺体が発見されています」

「……先輩」

「先輩達は、肉体を失い、魂だけになりながらも、救われることのない、永遠の殺し合いが続く……呪いの輪（リング・オブ・カーズ）を回っているんですよ。ぐるぐる……ぐるぐる」

「……」

「……ぐるぐる」

「やめてっ！」

美奈子は、目の前で回される悠菜の指から目を背けた。

「もういいっ！」

「……そう、ですか？」

「どうしようもないの！？先輩達は、永遠に苦しみ続けるの！？」

すがりつくような美奈子の視線を前に、悠菜は平然と言い切った。

「ありません」

「そんな……」

「永遠の苦しみ――それこそが、彼らが果たすべきを求められた契約の代償なのですから」

終章弐～美奈子＆悠菜（後書き）

不正規連隊（イレギュラーズ）

――近衛発足以前から、水瀬家が統率して来た諜報・謀略専門部隊。

水瀬家にとって不都合な存在は、例え権力者であろうとも排除してきた、日本史上最大級の闇の組織。

現在の神音商会非合法執行部隊の母体。皇室魔導兵団非公式外郭団体。

当然、所属しているのがマトモな者達であるはずはない。

終章参～綾乃＆悠理

●瀬戸綾乃の場合

ピッ

「……」

綾乃は、蒼白な顔で足下に視線を向けたまま、凍り付いた。

「……」

その四角い台から降りて、再び、台に乗る。

すでに何回繰り返したか、綾乃さえ忘れていた。

ピッ。

デジタルが、即座に綾乃の動作に反応し、自らの義務を果たす。

「……」

綾乃は、恐る恐る自分のお腹の肉をつまんでみた。

プニッ。

「……」

プニプニ

その晩、綾乃の部屋からはずっとすすり泣きの声が聞こえ続けたという。

●明光学園　2年A組教室

水瀬達は、高校二年生に進級した。

久々に会った級友達は、何も変わることがないように思えるのだが……。

「おい、水瀬」

ぽんっ。

席に着いた悠菜の頭に手を乗せたのは、羽山だ。

「あ……えっと……羽山君？」

自分の名前を即座に答えられなかったというか、自信なさげに答える悠菜の態度に羽山は少しだけ、心証を悪くした。

「何だ？久々に顔会わせたってのに」

「う、ううん！？」

「それにしても」

羽山は、まじまじと悠菜の顔を見た。

「お前……」

「な、何！？」

「おい、秋篠」

「ん？」

ルシフェルと何事か話していた博雅が、悠菜達の所に来た。

「水瀬のことだけどさ」

「ああ。お前もそう思うか？」

「やっぱり？」

「みんな、そう言っているんだ」

「そうか」

「だ、だから何!?」
悠菜は慌てて自分を見回した。
制服は正しく着ているはずだし、ルシフェルにもチェックしてもらった。
おかしい所はないはずだ。
「いやな?」
羽山は首を傾げながら言った。
「お前、妙に女の子っぽくなったって」
「あ――――そんなこと」
ほうっ。と大きなため息をついた悠菜の頭を、羽山は何度もポンポンと叩いた。
「ま、気にするほどじゃねぇな」
「そ、そうです――――じゃない。そうだよ」
「もとから女の子みたいな外見だし。相変わらずチビだし童顔だし」
「褒めてない」
「別に、宝条あたりにカマ掘られて目覚めたってワケでもねぇだろう?」
「ううっ……あの一件で戦死すればよかったんだぁ」
「ヒデぇな」
羽山は抗議の視線を悠菜に向けた。
「葉月センターが崩壊したほどの戦いだったんだぜ?」
「地下からの攻撃で、手抜き工事のせいで一気に崩落しただけじゃない」
「全く」
博雅が腕組みをしながら頷いた。
「あれで崩壊してよかったと思う。もし、地震で崩壊していたら、とんでもないことになるところだった」

そう。
世界樹が地上に出現する予定ポイントになった葉月センター。

それは、悠菜のサイクロトロンの直撃を受け、直径３０メートルの風穴が開いた。
その風穴の中には、センターの大黒柱ともいうべき柱が含まれており、その柱を失ったセンターは、一瞬のうちに崩壊したのだ。
無論、大黒柱を失った程度で、大規模なショッピングセンターそのものが崩壊するはずがない。
だが、建築資材をケチるなどの手抜き工事の結果、センターは連鎖的に崩壊した。
あの事件以来、マスコミは葉月センターを建築した業者やゼネコン叩きに躍起になっている。

「――ところで」
「えっ？」
「瀬戸さん、随分と他人行儀だな」
「……」
悠菜の視線の先。
そこには、ぽつんと机に座る綾乃の姿があった。
綾乃の周囲に、人気はない。
「お前、何も声かけてないだろう？」
「そ、そんなことないよ」
「そうか？」
「うん……瀬戸さん」
「えっ？」
綾乃は、どことなく驚き半分、うれしさ半分で悠菜に答えた。
「何ですか？」
「うん。退屈なら、みんなと話そう？」
「いいんですか？」
「うん♪」
綾乃が席を立ってみんなと会話を始めた。
美奈子に未亜も加わり、それはそれは賑やかになり始めた時だ。

「おい、水瀬」
教室の入り口から品田が声をかけた。
「ご指名やで？」
「ご指名？」
「ああ……三年の加藤先輩や」

「誰だっけ？」
小首を傾げる悠菜は、教室の入り口に立つボーイッシュな女子生徒に近づき、二言三言会話を交わすと、どこかへと消えていった。

「……」
綾乃は、それをじっ。と見つめるだけだ。

「せ、瀬戸さん？」
1年の時、こういう状況で、瀬戸綾乃がどれほど暴れたかを知る周囲はすでに壁際まで逃げていた。
品田！てめぇ、俺達を殺す気か！？
品田を畳めっ！広場に吊せ！

品田が袋だたきに会う中、美奈子はクラス代表として綾乃に声をかけた。
教室に乱入してきたテロリストを説得する方が、絶対に楽だと思う美奈子は、震える声を抑えるのがやっとだ。

「あの……落ち着いて？ね？ねねっ！？」
「？」
綾乃は、きょとんとして美奈子を見た。
「私、何かヘンですか？」
「い、いえね？」

そのあまりに予想外の答えに、美奈子自身、どう答えて良いかわからない。
「その……普段なら、逝きたいなら逝かせてあげます。位は」
「よくわかりませんけど……」
綾乃は、もう一度、悠菜が出ていった教室の入り口を見た。
「3年生にもお友達がいるのっていいことですよね？」
「は？」
「私、お仕事以外のお友達がいないから、うらやましいです」
「……瀬戸さん？」
美奈子の見た綾乃の目。
そこには、穏やかな優しさ以外の、何物も見ることは出来なかった。

20分後、悠菜は教室に戻ってきた。

「どうした？」
何かの間違いか何かであって欲しい。
そう願いながら、羽山は悠菜に訊ねた。
「何もなかった！そうだな？」
「えっ？」
きょとん。とする悠菜は、羽山に答えた。
「ああ……今度、映画を見に行こうって」
「断ったな！？」
「何で？」
ボコンッ！
羽山の鉄槌が悠菜の脳天に振り下ろされた。
「痛いっ！羽山君！？」
「やかましいっ！」

なるべく綾乃の顔を見ないようにして、羽山は怒鳴った。
「もめごと増やすなっ！」
「？？？？？」

はっきりいうが、水瀬悠理は、年上女性にかなりもてる。
１年の時は、魔法騎士という偏見と、瀬戸綾乃という鉄壁が存在したため、水瀬に告白した者はそう多くなく、そのほとんどが玉砕した。

だが、３年に進級した一人の女子生徒が、思い切ってこの時告白、デートの申し出を受け入れてもらったという噂は、女子生徒の間に、一気に広まった。

数日のうちに、悠菜の元には手紙が山ほど舞い込み、休み時間となれば指名がかかる。

瀬戸綾乃は、その間、「うらやましいですね」とか「悠理君はオモテになるんですね」などと、ほとんど他人事のように構えるだけ。
級友達の何人かをストレスで保健室の世話にさせても、綾乃自身は暴走することがなかったのだ。

不可思議な平安。

瀬戸綾乃の理解しがたい寛容さを、そう評価したのは、級友の渡部だが、その平安が切れるのは、平安。という名故か早かった。

宿題を見せてもらった。

勉強を教えてもらった。
当番の仕事を手伝ってもらった。
……様々な理由で、綾乃は悠菜と会話する機会が増えていったせいもあるだろう。

「悠理君」
ある日の昼休み。
綾乃は手作りのお弁当をもって、悠菜に近づいた。
「お弁当、一緒に食べませんか？」
「あ、ごめん」悠菜は、綾乃に両手をあわせた。
「先輩と一緒に学食って約束しちゃったから」
「……そう、ですか」
「あ、明日はきっと！」
「……はい」
しょんぼりとした綾乃が、教室を出ていく悠菜の姿を見送る。

こんなことが、何度も続く。

結果――

ドンッ！

突然、教室に響き渡った鈍い音に、全員の視線が集まった。

壁に何かがめり込んでいる。

悠菜だった。

やっとか。

誰かがため息と共にこぼした言葉に、全員が頷いた。

美奈子には、悠菜が壁にめり込んだ理由がわかっている。

先程、悠菜が今日、いっしょに帰ろう。と、女子生徒に誘われ、OKしたことが原因だ。

はっきり、悠菜が悪いと美奈子は思う。

何しろ、綾乃の誘いがあったのに、それを忘れて他の女の子からの誘いに乗ったからだ。

一方――

「だ、大丈夫ですか!?」

自分の机を投げつけておいて、大丈夫も何もないと思うが、綾乃は悠菜に駆け寄るなり、力任せに悠菜を壁から引っぺがした。

「だ、誰がこんなこと!」

「……」

「成る程?」

放課後、美奈子はうなだれる綾乃から話を聞いた。

「つまり、最初はどうとも思わなかったのに、段々と他の女の子と水瀬君が仲良くしてるのを見ていたら、殺意が湧いてきてどうしようもなくなったと？」
「……はい」
「つまり……嫉妬してるわけだ」
「違います！」綾乃はきっぱりと言い切った。
「嫉妬ではありません！他の女の子と次々と仲良くする、そのフラついた態度は許されることではないんです！」
「瀬戸さん一人なら、問題ないんだ」
「……」
赤面して俯く綾乃の態度は、暗に美奈子の指摘を肯定していた。
「ねぇ、瀬戸さん」
「はい？」
「水瀬君のこと、好きなの？」
「……」
「どうなの？」
もう泣きそうな顔で周囲を見回した綾乃は、小声で美奈子に訊ねた。
「桜井さんは、悠理君と仲がいいんですよね？」
「まぁ、友達だから」
「おつきあいしてるわけじゃ、ないですよね？」
「……い、今のところ」
「じゃあ！」
綾乃は嬉しそうに美奈子に言った。
「私――――」

「生きてる？」
保健室のベッドに横たわる悠菜に、美奈子はそう切り出した。

「なんとか……」
美奈子の顔を見た悠菜は、一瞬、息を止めた。
「あの……桜井さん？」
「何？」
「何、怒ってるの？」
「私？」
「すごい怒ってる」
「別に私」
「そう？スゴイ怖い」
「よけいなお世話。それより水瀬君」
「へ？」
「あの事件に、瀬戸さんが絡んでいたのね？」
「な、何で？」
「絡んでいたんでしょう？」
「そ、それは……」
「話せる範囲でいいから、話して」

悠菜は、綾乃が自分の記憶を失っていることを話した。

「成る程？」
それで納得したのか、美奈子は何度も頷いた。
「記憶は失っていたけど……成る程ね」
「？」
対する悠菜は、まるで話が読めない。
「どういうこと？」
「つまりね？水瀬君」
美奈子は自分の推測を語り出した。
「瀬戸さんは、確かに水瀬君の記憶を失っている。でもね？嫉妬する心までは失っていなかった。嫉妬の心は、即座に記憶から失われた嫉妬の対象――他のオンナとベタベタ、イチャイチャする水瀬

君――を、再認識した」
「してないよ！」
「他の女の子と同じ部屋にいるだけで浮気だ死刑だって考えるあの瀬戸さんからすれば、当然の認識なの。わかるでしょう？」
「わ、わかりたくないけど……わかっちゃった」
そう答える悠菜の顔は蒼白だ。
「よろしい♪」
美奈子は椅子を立った。
「水瀬君？」
「はい？」
「私ね？」
美奈子は笑いながら言った。
「綾乃ちゃんに頼まれたんだ」
その口調は、まるで歌うように楽しげだ。
「何を？」
「水瀬君との仲を取り持ってくれって。瀬戸さんから」
「――へ？」
「だから断った。当然、断った」
「さ、桜井さん？」
「私ね？」

美奈子は言った。

「私も、水瀬君のこと好きだって。
瀬戸さんみたいな可憐な美しさはない。でも、努力と根性だけは誰にも負けないから――誰が相手でも、私、絶対に粘り勝ちしてやるんだからね！？それだけは覚えていて！」

ぴしゃんっ！

悠菜が返事をする前に、美奈子は保健室のドアを出ていった。

いや。

逃げ出した。

「い……言えた」

保健室のドアにもたれかかりながら、美奈子は天井を見上げた。

「やっと……やっと、言っちゃった」

水瀬君が好き。

一体、何度、言いそびれた言葉だろう。

それを、今、ようやく言えた。

負けない。

そう、宣言したのだ。

「――おめでとうございます」

突然かけられた言葉がなければ、美奈子はいつまでもそうしていたかもしれない。

「!?」

かけられた声に驚いた美奈子の視線の先にいたのは――綾乃だった。

「せ、瀬戸さん？」

「はい♪」

「わ、私――――！」

思わず身構える美奈子に、綾乃は微笑みながら言った。

「でも、私だって、ねばり強い性格ですから」

「負けないのはお互い様？」

「そうです♪」

綾乃は、保健室のドアノブに手をかけながら言った。

「私は私の方法で――――桜井さんは桜井さんの方法で」

「絶対、勝つのは私」

「――――まぁ、怖い♪」

じっ。と見つめ合う二人だが、緊張の糸はそう長くは続かない。

二人が二人、同じ男を好きになっただけ。

ただ、それだけなのだ。

「ふふっ」

「ふふふっ」

一頻り笑い合った二人。

切り出したのは美奈子だ。

「――――どうするの？」

「とりあえず、鉄槌を喰らわすだけです」
「殺さないでね？」
「ええ――このトシで未亡人にはなりたくないので」
「そう？」
「はい。それでは、ここからは、私の時間ということで」
「もう一度、お願いね？殺しちゃダメよ？」

保健室から遠ざかる美奈子の背には、
ドスの効いた綾乃の声。
悠菜の命乞い。
ドスンバタンとすさまじいばかりの音。
悠菜の悲鳴。
日常、聞き慣れた音が響き渡ってくる。

日常。

ただ、違うのは、水瀬に好きだと告白した自分だけ。

変わったのは自分。

そう思う美奈子は、不思議な満足感を感じながら、校舎を出ていった。

●水瀬悠理の場合
――さて。
日菜子・美奈子・綾乃と続いた話だが、最後（トリ）を主人公に決めてもらおう。

悠菜と水瀬が体を入れ替えたのは、ゴールデンウィーク近くの金曜日の深夜のことだ。
「あ、あれ？」
自宅で入れ替わったことを知った水瀬は、慌ててルシフェルの元に駆けつけた。
「ルシフェ！」

ガンッ！

入ったのは浴室。
入浴中のルシフェルが投げつけた洗面器を顔面で受けた水瀬は、一瞬にして沈み、ルシフェルによってたたき起こされた。

「やっと、入れ替わったんだ」
「っていうか……」
水瀬はカレンダーを見て蒼白になった。
「い、一ヶ月は長いよ」
「そうね……御母様の話だと、最長でも半月程度だって」
「それで？グリムは？」
「えっ？あの事件以来――」
「事件、解決しちゃったの！？」
「当たり前でしょう？」
「そ、そんな――」
ぺたり。
水瀬は、床にへたり込んだ。
「ぼ、僕とグリムの約束は！？」
「知らないっていうか――何か約束してたの？」
「ううっ……」
悠菜との記憶のリンクがようやく完了したらしい水瀬は、驚愕に

目を見開き、そして怒鳴った。
「ぼ、僕の祷子さん〇〇〇化計画が！」
「はぁっ！？」
突然、水瀬の口から飛び出した伏せ字に、ルシフェルは目を丸くした。
「な、何、言ってるの？」
「ムチで縛ったり、縄で叩いたり、ローソクに乗せて三角木馬で可愛がるっていう、僕の夢が！僕の野望が！」
「使い方間違ってるって……いろんな意味で」
「悠菜ぁっ！グリムとの約束、勝手に反古にするな！今度ばかりは許さないぞ！？出てこい悠菜ぁっ！」
「だから」
「わぁぁんっ！責任者出てこぉぉいっ！」

終章参～綾乃＆悠理（後書き）

……い、一応のラストです。
とりあえずの終わりです。
１年近くかかりました。
もう、しばらく長編書きません！書けませんっ！
短編中心でいきますっ！
ここまで長い作品、読んでくださった皆様に、深く感謝しますっ！
これからもよろしくお願いしますっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8664b/

リング・オブ・カーズ

2010年10月8日14時09分発行